名護市文化財調査報告書第17集

大堂原貝塚

－古宇利屋我地線建設に伴う緊急発掘調査報告書－

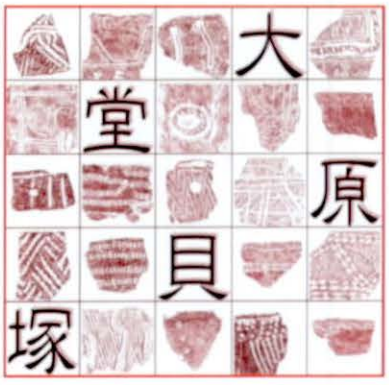
平成17(2005)年

名護市教育委員会

名護市文化財調査報告書第十七集

大堂原貝塚

－古宇利屋我地線建設に伴う緊急発掘調査報告書－



名護市教育委員会

報 告 書 抄 録

ふ り が な	うふどうばるかいづか
書　　名	大堂原貝塚
副 書 名	古宇利屋我地線建設に伴う緊急発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	名護市文化財調査報告
シリーズ番号	第17集
編 著 者 名	岸本利枝・真栄田義人・宮里牧・新城司・岸本卓己・比嘉久
編 集 機 関	名護市教育委員会文化課文化財係
所　在　地	〒905－0014　沖縄県名護市港二丁目１番１号
発 行 年 月 日	平成17年７月25日

ふりがな	ふりがな	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
大堂原貝塚	沖縄県名護市字済井出1285番地	47209		26° 40' 29"	128° 00' 52"	1998.11.9 ↓ 2004.7.8	2,688㎡	古宇利屋我地線建設工事

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大堂原貝塚	貝塚	縄文時代早期 縄文時代前期 縄文時代後期 弥生時代	埋葬人骨 集石炉 イモガイ集積 溝	薄手土器 曽畑式土器 伊波式土器 貝製品 石器 骨製品	

発刊のことば

平成十（一九九八）年に始まった「大堂原貝塚」の記録保存を目的とした発掘調査がやっと終り、ここに報告書を発刊することができ、たいへんうれしく思います。

大堂原貝塚は、昭和五四（一九七九）年に行われた「名護市遺跡分布調査」で発見された遺跡です。発見当初の遺物から、縄文時代後期から弥生時代・平安時代並行期（沖縄貝塚時代前期から後期）の遺跡であるとされていましたが、今回の発掘調査で、縄文時代早期（約六五〇〇年前）にまで遡る、沖縄の中で最も古い土器を伴う遺跡であることがわかりました。

弥生・平安時代並行期の層からは、埋葬人骨や九州の弥生土器、貝の腕輪や貝札、その材料となる貝（イモガイやゴウホウラ）の集積、そして、沖縄では初めてと報道された「かめ棺」の口の部分が出土しました。縄文時代後期の層からは、予想通り「伊波式・荻堂式」の土器とともに「奄美系」の土器が出土しました。その下にビーチロックの層があり、それを割って掘り進めると、縄文時代前期を代表する「曽畑式土器」を多く含む層が出土しました。過去に羽地内海側に位置する「墨屋原遺跡」で浚渫工事に伴い「曽畑式土器」が拾われていましたが、その土器を含む層を確認したのは名護市では初めてのことで、県内でも数カ所でしか出土していません。さらにその下から、わずかな爪形文土器とともに、「薄手無文土器」が大量に出土しました。この土器が現在、沖縄で一番古い土器で、過去に嘉手納町の野国貝塚でわずかに出土しています。そして、その土器の層から「埋葬人骨」が二体出土したのです。「埋葬」と確認できる人骨では県内で最も古いものです。

このように、今回の発掘調査ではいろいろな新しい発見がありました。残念ながら、記録保存を目的とした調査で調査範囲が限られていたことから、住居跡などは見つかっていませんが、隣接した土地にその広がりが予想されています。今回の調査を基に学術調査が実施されることを期待し、さらに、本報告書が名護市を初め、沖縄の歴史を解明するためにお役立ていただければ幸いです。

最後に、本調査にご協力いただいたみなさまに、深く感謝申し上げ、発刊のあいさつとします。

平成十七（二〇〇五）年　夏

名護市教育委員会　教育長　稲嶺　進

関係者及び協力者一覧

赤嶺　信哉
東江　政善
新垣　誠
秋山　美佳
安里　進
安座間　充
安次富京子
五十嵐俊雄
池田　栄史
井澤　洋一
石川マサミ
石田　肇
伊藤　勝徳
稲嶺　進
稲嶺　盛功
今村　啓爾
上田　圭一
上地カツ子
上地　圭子
上地　トキ
上地　米子
上原　実
上東　克彦
上間　拡
上村　俊雄
牛ノ濱　修
内倉　昭文
江崎　靖隆
遠藤　庄治
大城　恒美
大塚　初重
大西　智和
大嶺　真人
大嶺　真彦
大城　徳昌
大城　洋平
興津　昌宏
小田　静夫
小田富士雄
翁長　福松
親富祖忠佳
加島　三史
柏原　孝俊
片岡　宏二
金井　慎司
金子　浩昌
神谷　厚昭
神谷　祐子
河口　貞徳
川島　由次
川野　和昭
川端　博明
義　憲和
岸本　林
岸本　勝
岸本　永作
岸本　静子
岸本　久美
岸本　利枝
岸本みのり
岸本　義彦
岸本　卓己
岸本美枝子
喜納　聡
木下　尚子
木下　義宣
宜保栄治郎
儀保　弘明
喜友名勇人
金城　静江
金城津千子
具志堅　心
具志堅満昭
工藤　孝美
久保　弘文
黒住　耐二
桑江　勇
桑江　良健
甲元　真之
小玉　正任
呉地　英夫
木庭　元晴
小橋川　剛
小原　麻子
小林　青樹
小林　園子
小林　義典
呉屋　義勝
斉藤　崇人
崎原　秀雄
崎間　宗助
佐藤　雄史
重住　豊
島袋　和則
島袋　章子
島袋　武門
島袋　春美
島袋　祐次
島袋　正敏
島福　善弘
諸喜田あかね
諸喜田京子
諸喜田　博
白木原和美
城間　肇
新里　孝和
新里　貴之
新城　卓也
新城　司
新城　甘奈
新東　晃一
鈴木　歩
瀬名波幹智
早田　勉
平良　徹也
平良　昌也
平　貢
平良　美和
平良　幸雄
平良　芳一
高梨　修
高宮　広土
高森久美子
高安　真湖
嵩原　建二
立神　次郎
沢岨　安信
棚原　明子
田場　聡
田畑　幸嗣
知名　定作
知名　定順
千葉　博俊
津波　洋子
津波　米子
常松　幹雄
照屋　晶啓
樋泉　岳二
土肥　直美
渡口　裕
渡口　志保
徳嶺　朝明
徳本　哲保
友寄　隆史
友寄　凡子
戸田　哲也
富岡　廣三
豊里　友哉
名嘉　順一
仲程　源信
仲宗根　豪
仲宗根　禎
中園　聡
仲嶺　敏子
中村　愿
中村　響
仲村　輝美
中村　友昭
仲村美代子
仲村　裕子
中山　晋
中山　清美
名取真由佳
浪形早季子
並里早智子
新島奈津子
新美　倫子
西銘　章
西本　豊弘
野川久美子
野口　恵
野口美奈子
野原須美子
橋本真紀夫
花城　克子
花城　ヨシ
林　蘇喜男
林　徹
比嘉　和夫
比嘉　康
比嘉　弘
比嘉　親平
比嘉　久
比嘉　薫
比嘉　武則
比嘉ひとみ
比嘉　敏明
比嘉　厚夫
比嘉　善助
比嘉　敏雄
比嘉　史子
比嘉　文子
肘岡　隆夫
藤田　祐樹
富名腰　明
前川　智宏
松尾　宏
松下　孝幸
松田　幸崎
松田　トシ
松本　健志
松元美由紀
真喜志康彦
前田　雅光
真栄田義人
三木　靖
宮城　悟之
宮城　貞典
宮城　孝子
宮城　調福
宮城　俊昭
宮城　智浩
宮城　弘樹
宮城　弘子
宮城るり子
宮里健一郎
宮里　弘
宮里　武尚
宮里　牧
宮里　勝
宮田　栄二
村上　恭通
村吉　政樹
本永　奈智
八木澤一郎
矢作　健二
山下　廣幸
山城　正則
山本　英康
山本　正昭
与儀　春樹
吉岡　宏
吉田　邦夫
吉田扶希子
米田　穣
吉満　庄司
山川　昌子
山里　全用

（五十音順）

名護市文化財調査報告17

大堂原貝塚

—古宇利屋我地線建設に伴う緊急発掘調査報告書—

—目　次—

報告書抄録……2
発刊のことば……3
関係者及び協力者一覧……4
目次……5
第一章　概　要
第一節　位　置……8
一、大堂原貝塚の位置……8
二、屋我地島の概要……8
三、屋我地島の地形と地質……10
（1）地質形概略……10
（2）地質概略……10
四、屋我地島内各字の概要……12
五、大堂原貝塚周辺の小地名……13
六、屋我地島の遺跡……15
七、屋我地島の史跡・文化財……16
第二節　調査経過
一、発見……17
二、調整の経過……17
（1）文化財等の有無の照会と試掘調査……17
（2）範囲確認調査……17
（3）調整と協定書締結……17
三、調査体制……17
四、調査経過……18
五、層・年代と出土遺物写真……28
第二章　詳　細
第一節　グリッド設定と調査箇所……34
第二節　層序と年代
一、大堂原貝塚の地形・地質と層序……36
（1）現在の地形と地質概観……36
（2）発掘調査により確認された地層とその層序……36
（3）大堂原貝塚における地形発達……38
二、層序……42
第三節　遺構……48
一、集石炉……49
二、ピット……53
三、溝状遺構……57
四、貝集積……58
第四節　出土遺物
一、土器概要……70
二、縄文時代の土器……72
（1）1類土器（薄手土器）……72
（2）2類土器（細沈線文土器）……74
（3）3類土器（爪形文土器）……75
（4）4類土器（曽畑式土器）……76
（5）5類土器（室川下層式土器）……84
（6）6類土器（条痕文土器）……88
（7）7類土器（沈線文土器）……94
（8）8類土器（無文土器）……96
（9）底部（4類～8類）……96
（10）9類土器（神野A・B式土器）……98
（11）10類土器（面縄前庭Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式土器）……98
（12）11類土器（面縄前庭Ⅴ式土器）……100
（13）12類土器（仲泊式土器）……101
（14）13類土器（伊波式土器）……102
（15）14類土器（荻堂式土器）……109
（16）15類土器（面縄東洞式土器）……110
（17）16類土器（嘉徳Ⅰ式・Ⅱ式土器）……112
（18）17類土器（縄文時代後期相当の不明土器）……114
（19）底部（13類～16類）……116
（20）縄文時代の土器小結……118
土器観察表（1類～17類）……120
（21）土器の胎土分析……130
三、弥生～古墳時代並行期の土器……138
（1）18類土器（阿波連浦下層式土器）……138
（2）19類土器（浜屋原式土器）……144
（3）20類土器（大当原式土器）……149
（4）在地土器底部……164
（5）21類土器（九州弥生土器）……168
（6）22類土器（奄美諸島系土器）……174
（7）23類土器（スセン當式土器）……182
（8）24類土器（弥生～古墳時代並行の不明土器）……186
（9）弥生～古墳時代並行期の土器小結……188
土器観察表（18類～24類）……190
四、石器……198
（1）Ⅷ層……198
（2）Ⅶ層……200
（3）Ⅵ層……202
（4）Ⅳ層……204
（5）Ⅲ層……210
（6）石製品……214
（7）黒曜石……215
（8）かく乱層……216
（9）旧石器時代の石器か？……220
（10）石器小結……221

石器観察表……224
（11）石器の石材鑑定……226
五、骨製品……238
（1）Ⅷ層……238
（2）Ⅶ層……240
（3）Ⅵ層……240
（4）骨製品小結……240
六、貝製品……242
（1）Ⅷ層……242
（2）Ⅶ層……243
（3）Ⅵ層……246
（4）Ⅴ・Ⅵ層……246
（5）Ⅴ層……246
（6）Ⅳ層……252
（7）Ⅲ層……262
（8）かく乱層……268
（9）貝製品小結……272
貝製品観察表……274
七、ヤコウガイ蓋……278
ヤコウガイ蓋分類表……280
八、ゴホウラ……294
ゴホウラ分類表……297
九、貝……306
貝類出土状況表……311
個体数の算出方法……331
十、獣魚骨……332
（1）はじめに……332
（2）試料……332
（3）分析方法……332
（4）結果及び考察……342
骨同定結果……354
種類別・部位別数量表……354

第五節　人　骨

一、はじめに……358
二、調査の方法……358
三、出土人骨……358
四、Ⅲ層出土人骨……358
（1）出土状態……359
（2）人骨の年代……359
（3）性別・年齢……359
（4）人骨の形質……360
五、Ⅳ層出土の人骨……363
六、Ⅴ層出土の人骨……363
七、Ⅵ層出土の人骨……363
八、Ⅷ層出土の人骨……363
（1）出土状態……363
（2）人骨の年代……364
（3）人骨の形質……364
九、Ⅷ層出土の追加人骨……366
十、まとめ……366

第一章　概要

第一節　位　置

一、大堂原貝塚の位置

大堂原貝塚は、北緯二六度四〇分二九秒、東経一二八度〇〇分五二秒付近の沖縄県名護市字済井出一二八五番地内に位置する。屋我地島の北海岸にあり、北に古宇利島を望み、西はワルミ海峡を隔てて今帰仁村の運天付近を見ることができる。また、沖縄本島と古宇利島の間、海上遠くに伊平屋・伊是名の島影が見える。

大堂原貝塚周辺には、ハンタジー遺跡・大堂浜遺物散布地・済井出長佐久貝塚・タキギター河口遺物散布地の他、少し離れて運天原サバヤ貝塚（県指定史跡）がある。

二、屋我地島の概要

屋我地島は、本部半島の東に位置する面積七・七平方キロの島。屋我・饒平名・我部・済井出・運天原の五字からなる。南は羽地内海に面し、西はワルミ海峡を隔て今帰仁村を望む。北方約二キロの海上に古宇利島が見える。

最高点が五五・二mの低島であるが、地質の骨格は本部半島の中核部と同じ中生代の本部層（砂岩・粘板岩・石灰岩など）で構成され、大部分が砂礫台地と小起伏丘陵からなる台地島である。第四紀の琉球石灰岩は島の南側から西側に分布する。

正保国絵図に「やが嶋」とみえ、島廻りは二里とある。元禄国絵図では「屋加島」、『ペリー艦隊日本遠征記』所載の地図に「YAGADJI or LYRA I.」とある。同治七年（一八六八）天然痘に感染した中国福州の役人がいたが、屋我地の医者が牛痘（種痘）で治した（『球陽』尚泰王二一年）。『琉球国由来記』（一七一三年）の屋我地島には、屋我村・饒平名村・済井出村がみえる。我部と松田の両村は、一七三六年に今帰仁村の湧川から移動してきた村で、松田村は後に我部村に吸収された。屋我は、一八五八年に屋我グスク付近から現在地へ移動。運天原は、昭和六年に設立した行政区。

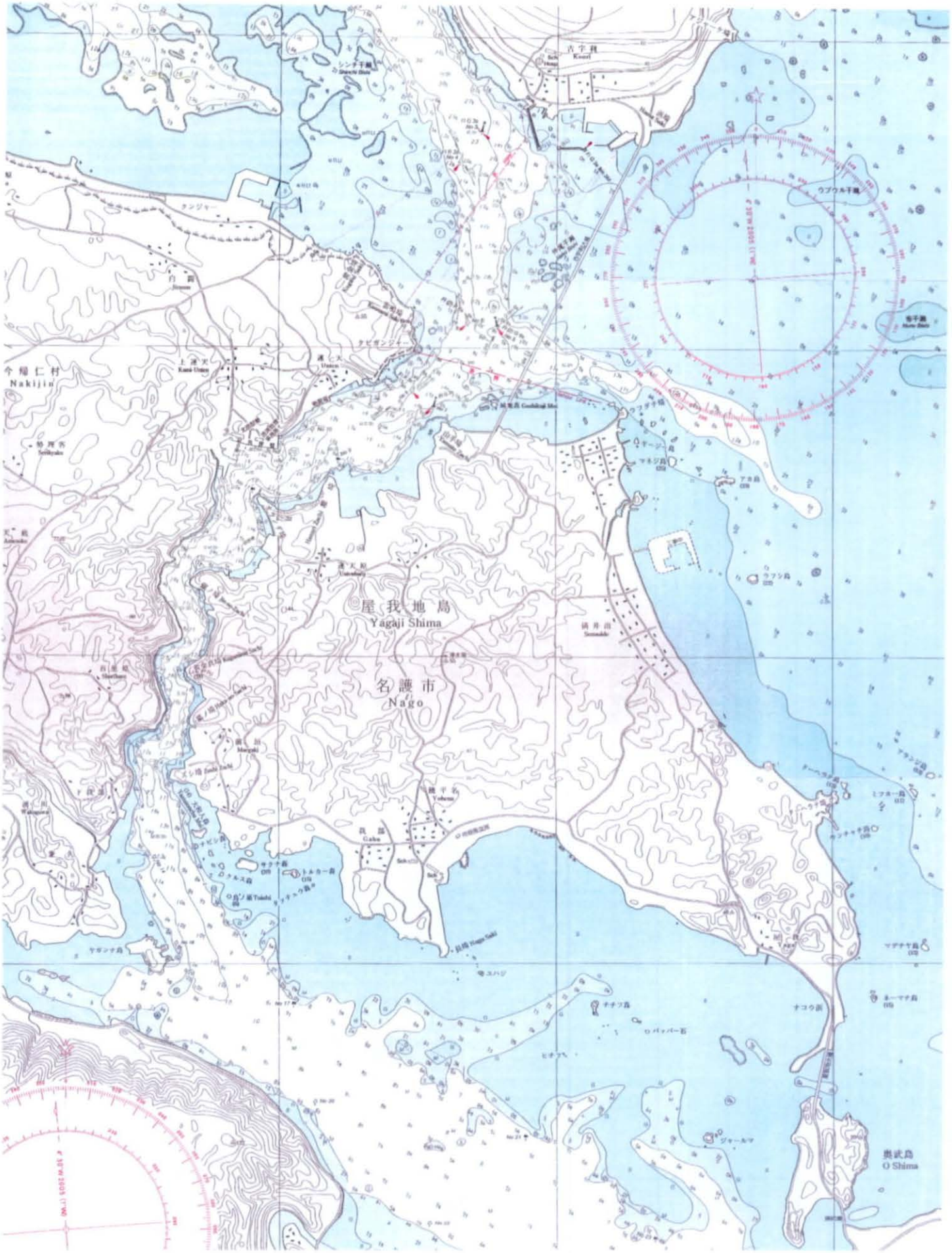
近世期、羽地間切に属した屋我地島の村々は、明治四一年に羽地村の字となり、昭和二一年に屋我地村として分村。昭和四五年に名護市に合併し現在に至る。島の人口は、一八八〇年（明治一三年）に一七八〇人（県統計）。一九〇三年に二四三一人（県統計）、一九六〇年（昭和三五年）には三六七一人、一九九五年（平成七年）は二三四一人。

島の南東の端にある屋我地大橋（三三〇m）によって奥武島と結ばれ、奥武島は羽地奥武橋（七七m）で沖縄島と結ばれている。最初の屋我地大橋は一九五三年に架けられたが、一九六〇年のチリ津波によって破壊された。二代目の橋は一九六三年に完成。現在の橋は三代目で一九九三年に完成した。屋我地島は架橋によって沖縄島と結ばれているため法律指定離島ではない。島の北端には、かつてハンセン病患者を収容した国立療養所沖縄愛楽園（一九三八年開設）がある。

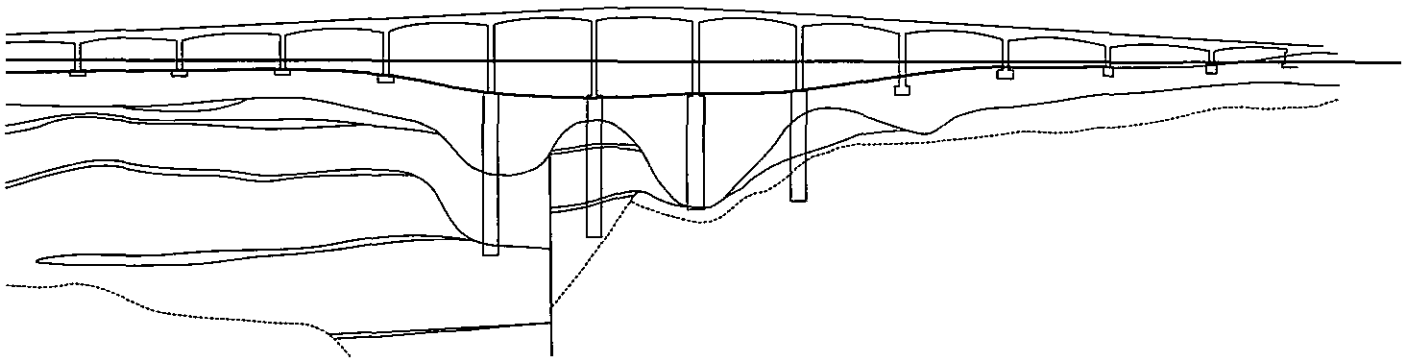
本部半島と屋我地島を隔てるワルミ海峡は長さ約一・五キロ、幅は一五〇～一八〇m程度と狭く、蛇行している。両岸は標高四〇～五〇m前後の台地で、氷河期の低海面時に形成された突入蛇行が後氷期の海進によって水没し、現在の形になったと考えられている。現在、架橋建設が進んでいる。

航空写真（右上が古宇利島、下が屋我地島）

名護市の位置図


今帰仁村
Nakijin
屋我地島
Yagaji Shima
名護市
Nago
古宇利
Kouri
ウプウル干瀬
奥武島
O Shima

屋我地島周辺の海図



三、屋我地島の地形と地質

(1) 地形概略

全体に低平な地形をつくる屋我地島には、いくつかの特徴的な地形が見られる。

【丘陵地域に発達した小さな谷】

屋我層や我部層分布地域にできた、比高及び谷幅がともに二〇～三〇m程度の谷である。他の地域でも琉球石灰岩下層分布地域に一般的に見られる。

【石灰岩の浸食残丘】

屋我から済井出南東にかけて多く見られる地形で、比高が一五～三〇m程度の円錐形をしている。軟らかい地層が浸食され、硬い石灰岩が残ってできた。

【砂嘴と堤州】

屋我地には砂の堆積による海浜地形が顕著である。その一つが砂嘴で、屋我地大橋の袂に見られる。古い地形図を見ると、大橋の建設以前に南方に向かってできはじめ、橋ができてからは南南西に向きを変えて現在の形になったものと推定される。もう一つは堤州で、潟湖や湿地からなる湾口を塞ぐように伸びた砂礫質の地形である。屋我地島では済井出の集落がその上にできている。堤州ができる以前は、済井出一帯は湾状の浅い海であったことが伺える。

(2) 地質概略

【運天原層（与那嶺層）】

運天原を中心に、屋我地島の北西部に分布する地層である。今帰仁村湧川から名護市屋部に分布する与那嶺層に相当する。本層は主に石灰岩からなる層と千枚岩からなる層に分けられる。石灰岩層は運天原から前垣にかけて海岸線に分布し、千枚岩層は浄水場から西にかけて、主に島の高所をしめて分布している。

一方、石灰岩や千枚岩に伴って、わずかながら運天原や浄水場北方にチャートの分布が認められる。

これらの岩石のうち、石灰岩とチャートは南方から、千枚岩は北方の陸地からもたらされた岩石で、全体としてオリストロームを構成している。

【貫入岩類】

前垣と運天原から済井出に抜ける県道一一〇号線沿いに玢岩の岩脈が見られる。本部半島の与那嶺層中に貫入する岩脈、また名護付近の地層（名護層）に貫入する岩脈と同質で、斜長石、角閃石の斑晶をもつ角閃石玢岩（安山岩）である。

【屋我層（琉球層群）】

愛楽園、済井出から屋我、それに我部から饒平名にかけての海岸線に広く分布する地層で、沖縄県に広く分布する琉球層群に相当する。石灰質砂岩を主とする下部層と、石灰岩からなる上部層に分けられる。類似の地層群は対岸の今帰仁村運天及び古宇利島にも分布する。

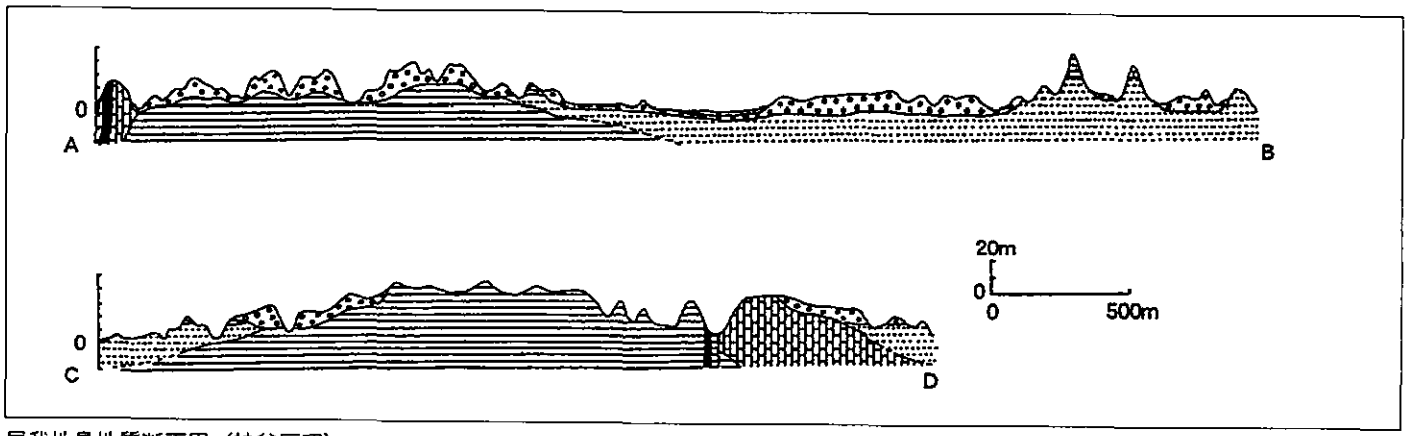
下部層の特徴は、厚さ数mの化石層を伴うことである。化石はカキを主とし、他にイタヤガイ、ウニ、コケムシ、キンチャクガイ、腕足類、生痕化石など多くの生物遺骸が認められる。化石の種類から、浅海性の堆積物であることが推定できる。南東部の屋我から奥武島にかけてはサイクロクリペウスやオパキュリナを含むようになり、堆積環境が深くなったことを示している。

上部層は、有孔虫、貝片、サンゴ片、腕足類等を含む砕屑性の石灰岩である。

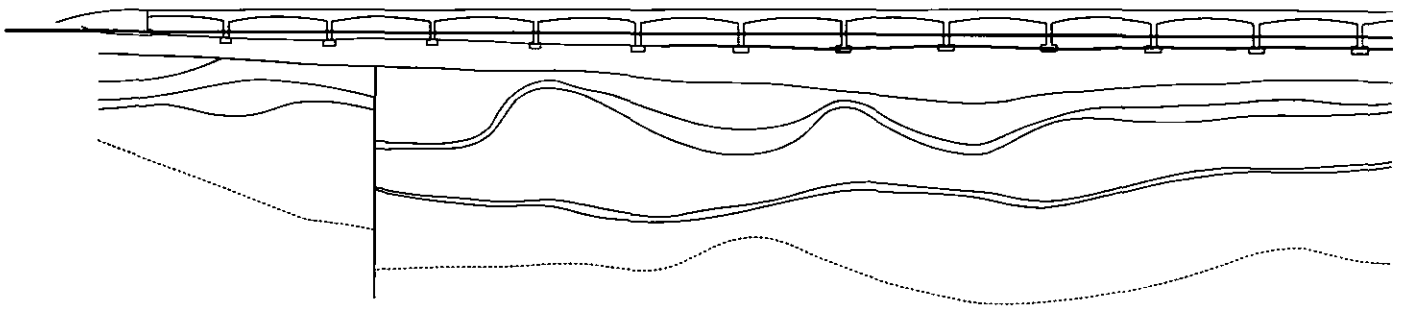
古宇利海峡では、さらに下部の層準である地層がボーリングで確認されており、断層で落ち込んでいる。

【我部層（国頭礫層）】

島の西部に分布する基盤岩類を取り囲むように、標高数m～三〇mの範囲に広



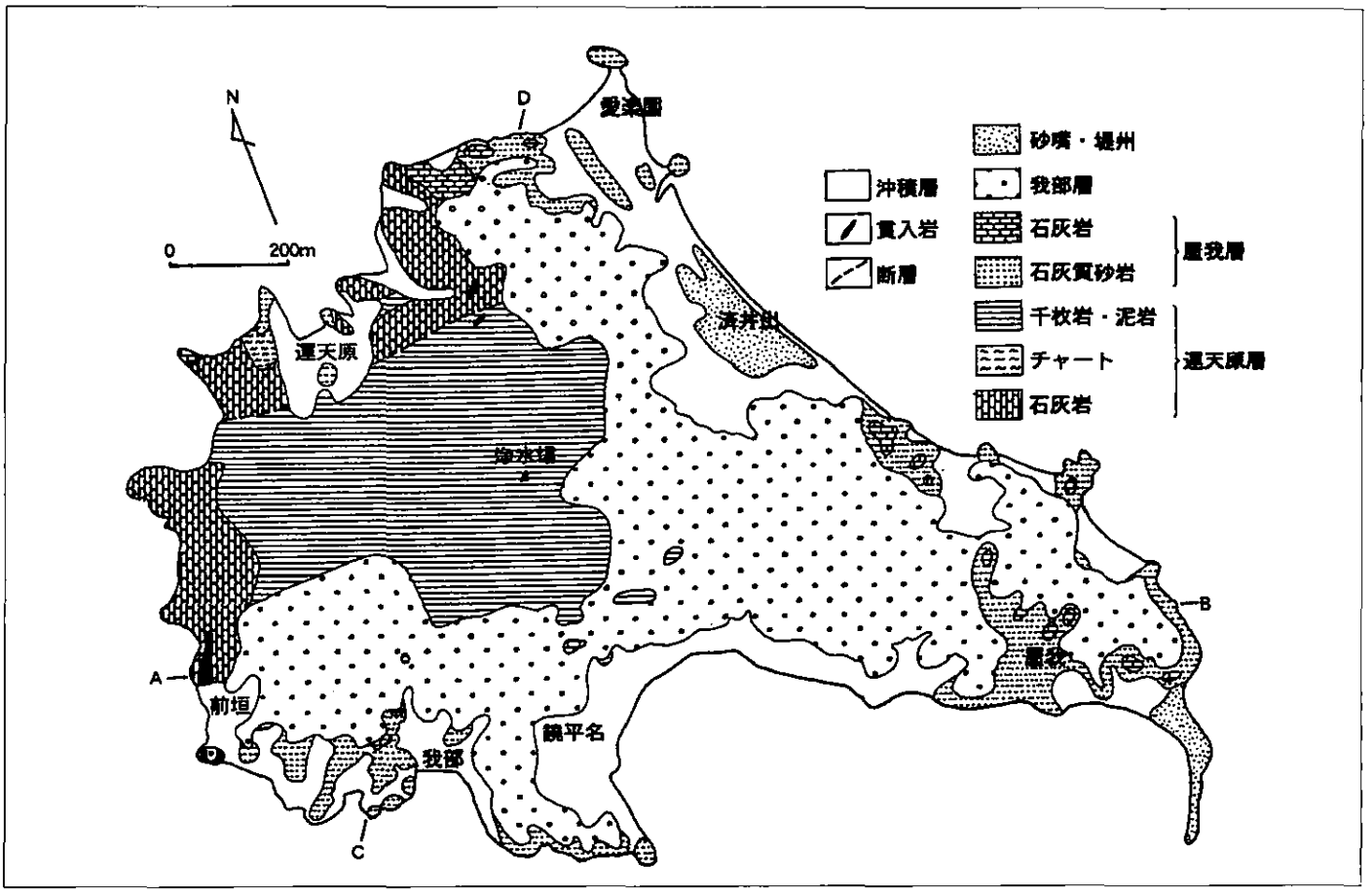
屋我地島地質断面図（神谷厚昭）



屋我地大橋地質断面図

く分布する段丘砂礫層である。我部の北方で一部泥層を挟むが、全体的には砂礫層であり、我部・饒平名を中心にして、西及び東に向かって礫の大きさを減じている。分布高度からみて、中位～低位段丘に相当する。

我部層の砂層が屋我層の上に乗っている露頭では、その境界に薄いマンガン層が形成されている。このような現象は、東村平良、沖縄市倉敷、具志川市（現うるま市）兼箇段などの低位～中位段丘でも認められる。（神谷厚昭）



屋我地島の地質図（神谷厚昭）

四、屋我地島内各字の概要

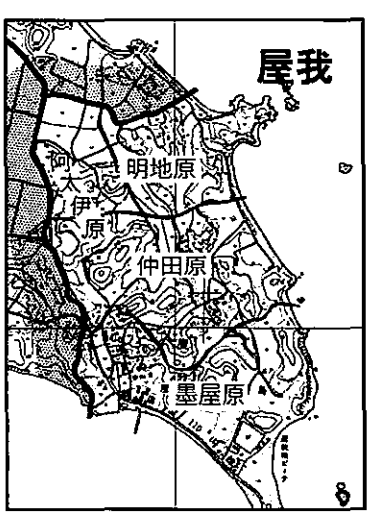
屋我／方言で「ヤガ」。周辺の村からは「ウプヤガ」とも呼ばれる。島の南東に位置し、奥武島を挟み、二つの架橋で沖縄本島と結ばれている。屋我はシミャー（墨屋原）、ナハダー（仲田原）、アテー（阿太伊原）、アキチ（明地原）の四つの小字に分かれている。集落は以前、屋我グスク付近にあったというが、一八五八年、風水地理がよくないという理由で現在地に移動している。県道沿いの数本のみごとなコバテイシは村移動の時に植えた記念木だという。屋我には、屋我グシク遺跡群の他、墨屋原遺跡、墨屋原浜崎遺跡などがある。

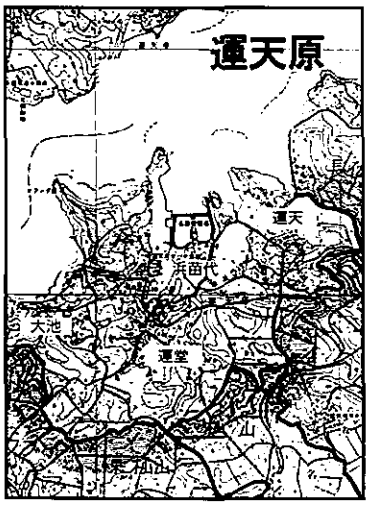
饒平名／方言で「ユピナ」。「広い原」の意という。旧屋我地村の中心地で役場や郵便局、学校などがある。饒平名は、ムラウチ（村内）、ウッチバル（掟原）、マーウイ（馬上）、ブタバル（武田）、ワクマシ（湧増）、ウブグムイ（大堀）、ピラダ（平良田）、ヤスダ（安田）、スマヤマ（そま山）の九小字からなる。一七世紀中頃の「絵図郷村帳」や「高究帳」に村名が出てこない。「琉球国由来記」（一七一三年）に初めて、饒辺名村と出てくる。屋我村からの分かれだと伝える。碁盤目状の集落の背後に饒平名シマヌハー御嶽遺跡群があり、湧増原の海岸沿いにナンマー貝塚がある。

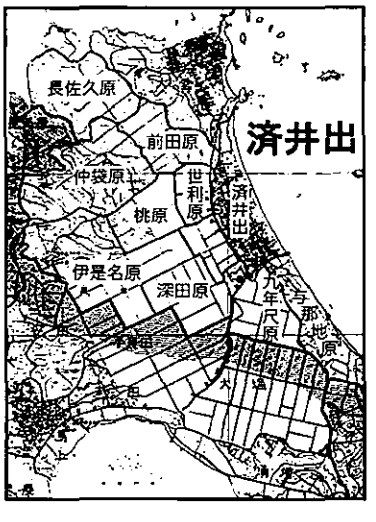
済井出／方言で「スムディ」。澄んだ水が各所から湧き出ることが村名の語源。島の北東に位置し、海岸に沿った浜堤上にみごとな碁盤目状の集落を形成する。スムディ（済井出）、ヨナジバル（与那地原）、クニンジャフ（九年尺原）、フカダ（深田原）、トーバル（桃原）、シリ（世利原）、メーダ（前田原）、ウフドー（大堂原）、ナガサク（長佐久原）、ナハブック（仲袋原）、イジナ（伊是名原）の十一の小字からなる。大堂原の大部分は国立療養所沖縄愛楽園の敷地。この大堂原貝塚をはじめ、済井出長佐久貝塚、ハンタジー遺跡、大堂浜遺物散布地などの遺跡がある。饒平名同様、「琉球国由来記」に初めて済井出の村名が出て、屋我からの分かれだという伝承がある。

運天原／方言で「ウンティンブロー」。島の北西部に位置する。ワルミ海峡を挟んで今帰仁村の運天を望む。ウンティンブロー（運天）、ハマナエシロ（浜苗代）、ウントー（運堂）、ウフチ（大池）の四つの小字からなる。ウンティンブローは、今帰仁村運天の人たちの耕作地であったという。ハマナエシロはソージナブックとも呼ばれ、そこにある集落をシチャンバーリといい、ウントーにある集落をウンバーリと呼ぶ。昭和六年に饒平名と我部の一部を分けて成立した新しい行政区であるが、運天原サバヤ貝塚、タキギター河口遺物散布地などの遺跡の他、一八四六年、運天港に入港したフランス艦船で亡くなった水夫を葬った「オランダ墓」などの史跡がある。集落が形成されたのは、明治初期のことで、首里系の士族が主に製塩を営んだのがきっかけだという。

我部／方言でも「ガブ」。島の西側に位置し、ワルミ海峡を隔てて今帰仁村湧川を望む。一七三六年、蔡温の山林保護政策によって、湧川の下我部から移動してきた村である。ピャーマチ（平松）、ウフブク（大袋）、アガリスマヤマ（東そま山）、ナガタ（長田）、アワヤ、ジューシ、スクブの七つの小字からなり、集落はピャーマチとジューシにあり、ジューシにある集落をメーガチ（前垣）と呼ぶ。前垣は廃藩置県の頃、首里・那覇から寄留してきた士族によって形成された集落で、主に製塩業を営んでいたという。海岸沿いにその塩田の跡が残っている。







五、大堂原貝塚周辺の小地名

ここでいう小地名は、字名や小字名よりもさらに狭い場所を指す、その土地についた名前のことを言い、その土地を使っている地域の人にしか分からないことが多い。しかし、その地名は、その土地の地質・地形の特徴や使われ方などを現したものが多く、ときに、その地の歴史を知る上で貴重な情報を提供してくれる。

ここに、「大堂原貝塚」周辺で聞き取ることのできた小地名を紹介する。小字ごとに紹介していくが、紙面の都合上、字は済井出と運天原、小字は済井出、深田（一部）、伊是名（一部）、世利、桃原、仲袋、前田、大堂、長佐久、運天原、浜苗代、運堂、大池に限定する。以下、小字ごとに記す。意味的な当て字が可能な場合のみ、（　）内に示した。

【済井出】アガリンバーリ（東の方面）、ビーマシ、ナハンバーリ（中の方面）、マーウイヌメー（馬追の前）、イリンバーリ（西の方面）、ナハミチ（中道）、ウフシムイ（大岩森）、フールジー（：岩）。

【世利】シリブローミチ（世利原道）、ウスダー（潮田）、ピャー、アダニマター（アダン又）、ウッチガーラ（掟川）、クンジ、シマヌアテー。ヒチャンジョー（下の門）。

【桃原】メーバーリ（前の方面）、クンナトゥ（小湊）、ハンジャメー、アサギミチ（：道）、アサギ、サジダー（：田）、ピャー、ユマサ、チナヤマー（喜名山）。

【深田】メーヌウイバル（前の上原）、トゥドゥヌチ。

【伊是名】チナマター（喜名又）、ヤガヤーマタ（屋我屋又）、シンチナドー、クスヌチシチ（樽敷）、ギチムックイ。

【仲袋】タキギター、エーバタキ（藍畑）、ナハブックミチ（仲袋道）、クマラヤシキ（：屋敷）。

【前田】メーダダー（前田田）、モーサウフェ、イシビラフー、ヤンバサカームイ（：森）。

【長佐久】ミンタマヤー、ナガサク（長佐久）、アジャ。

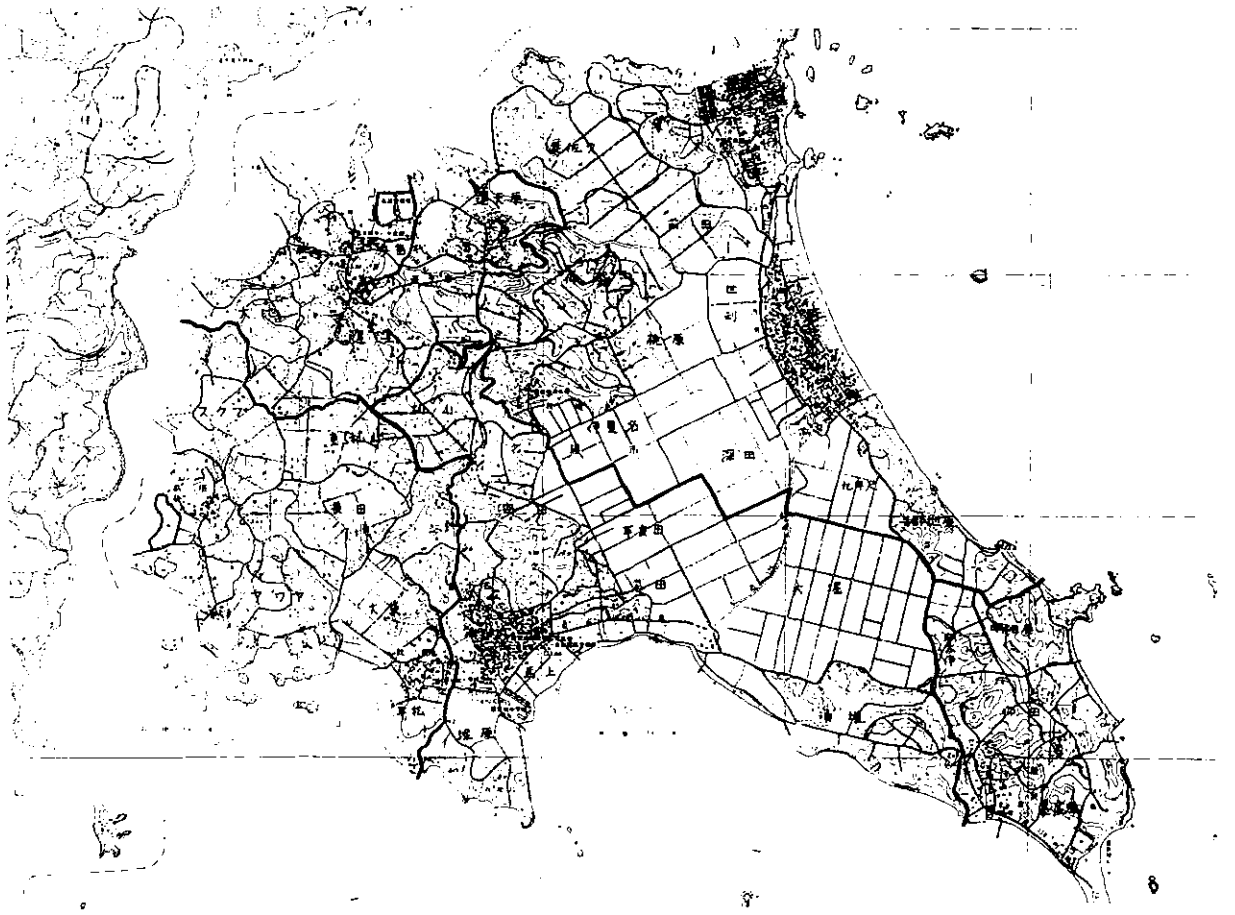
【大堂】イナトゥガマ（港窪地）、ヤマティザチ（山当崎）、ウントーナームイ（：森）、イリハマ（西浜）、グシクジー（城岩）、パンタジー（崖岩）、ウフドーミチ（大堂道）、ナンマチ（並松）、ターヌマサ、ガンチュミヤー、フイウタ（古宇利田）、パサマブロー、シルジー、イナトゥバシ（港橋）、シチャイナトゥ（下港）、イナトゥンチビ（港の尻）、パタキジー（畑地）、ウフダラ（大堂）、ウフドーバマ（大堂浜）、ウフグチムイ（大口森）、グンカンムイ（軍艦森）、タンカムイ（：森）、ヤージー（：岩）、キーブラ、ワリジー（割れ岩）、マガヤー（曲がり）、ハマンタジー（鍋蓋岩）、ナンブチガマ、マニジ（：岩）、タッチュー（尖り）、アハーシ（：岩）、アハーシヌトゥングァ。

【運天原】ナハーシザキ（：崎）、ナカムイ（中森）、ナハーシ（※屋号）、タキギタガー（：川）。

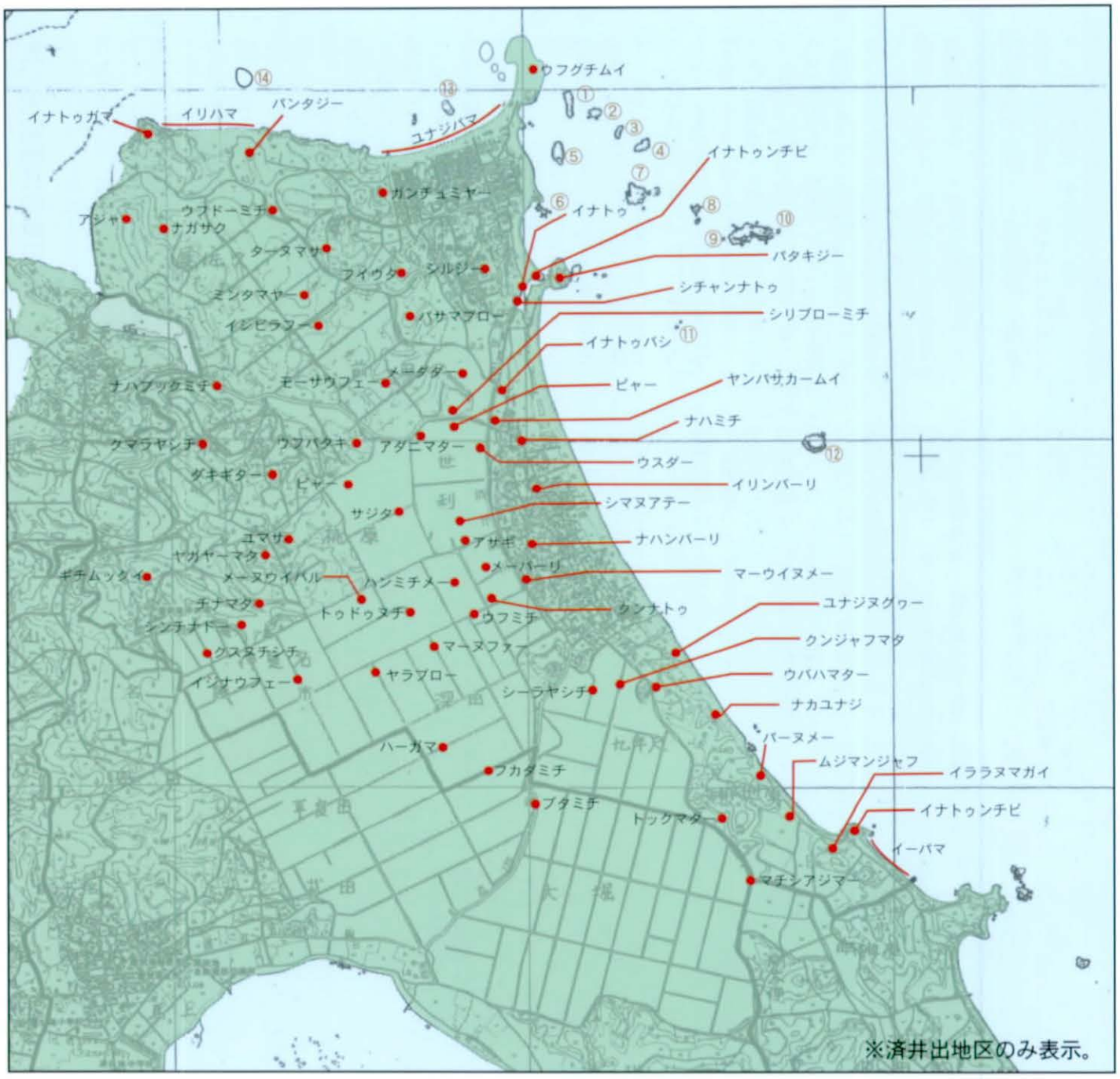
【浜苗代】ソージナガー（浜苗代川）、サバヤ、ジャーヌクチ（蛇の口）、パナーリ（離れ）、パナリザチ（離れ崎）、ウントームイ（上の方森）。

【運堂】ウントー（上方）。

【大池】ウランダザチ（：崎）、トーミナトゥ（唐港）、ペンガガチ（：垣）、ペンガザチ（：崎）。



屋我地島の小字図



済井出の小島名

①ヤージ　⑧タッチュー

②キーブラ　⑨アハシヌトゥンガー

③ワクジー　⑩アハシー

④マガヤー　⑪フルージー

⑤ハマンタジー　⑫ウフシー

⑥ナンブチガマ　⑬グンカンムイ

⑦マニジ　⑭グシクジー

ウフグチムイから見えるヤージ

六、屋我地島の遺跡

屋我地島には、現在、十三箇所の遺跡が確認されている。主に運天原から済井出にかけた島の北側の海岸と島の南東部にあたる屋我集落周辺に分布している。

最も古い遺跡が大堂原貝塚で、沖縄で最も古い土器（薄手無文土器・約六五〇〇年以前）が出土した。墨屋原遺跡では、縄文時代前期の「曽畑式土器」が出土。琉球政府時代に指定された運天原サバヤ貝塚と墨屋原浜崎遺跡は、約三千年前の遺跡と推定される。饒平名シマヌハー御嶽遺跡群や屋我グスク遺跡群は、グスク時代から近世の遺跡。以下、分布調査などで発見された屋我地島の遺跡を紹介する。

①**運天原サバヤ貝塚**／運天原公民館の東に隣接する小丘陵の南側斜面下に貝塚があり、丘陵の中腹には半洞窟がある。貝塚時代前期後半から中期、後期の遺跡。一九五六年琉球政府指定文化財となる。

②**タキギター河口遺物散布地（仮称）**／運天原と済井出の境を流れるタキギター川の河口の特に済井出側の岸に遺物が散布している。土器は貝塚時代前期とグスク時代のもの。

③**済井出長佐久貝塚**／通称ミナトガマと呼ばれる付近の海岸低地に立地。貝塚時代後期の遺跡。現在、自動車のスクラップ置場となっている。

④**大堂原貝塚**／分布調査時には貝塚時代前期～後期の遺跡と思われていたが、今回の発掘で縄文時代の早期まで遡ることがわかり、県内でも古い方の遺跡となった。イリハマと呼ばれる海岸の低地に立地する。

⑤**ハンタジー遺跡（仮称）**／大堂原貝塚のすぐ東側にある崖の割目からグスク時代の土器が採集された。大堂原貝塚に隣接しており、今後の調査次第で大堂原貝塚に含まれる可能性もある。

⑥**大堂浜遺物散布地（仮称）**／愛楽園の東方の海岸の浅瀬で貝塚時代前期と後期の土器が採集された。園内の砂丘上に広がっている可能性がある。

⑦**饒平名シマヌハー御嶽遺跡群**／饒平名集落の背後にあるシマヌハー御嶽一帯に五箇所の小貝塚と二箇所の遺物散布地が確認されている。遺物は貝塚時代後期からグスク時代初期の土器や中国製青磁・染付、沖縄製陶器など。

⑧**ナンマー貝塚**／ナンマー森とアマグスクに挟まれた丘陵下で羽地内海に面した小さな海岸低地。貝塚時代後期後半に位置するくびれ平底土器が採集されている。

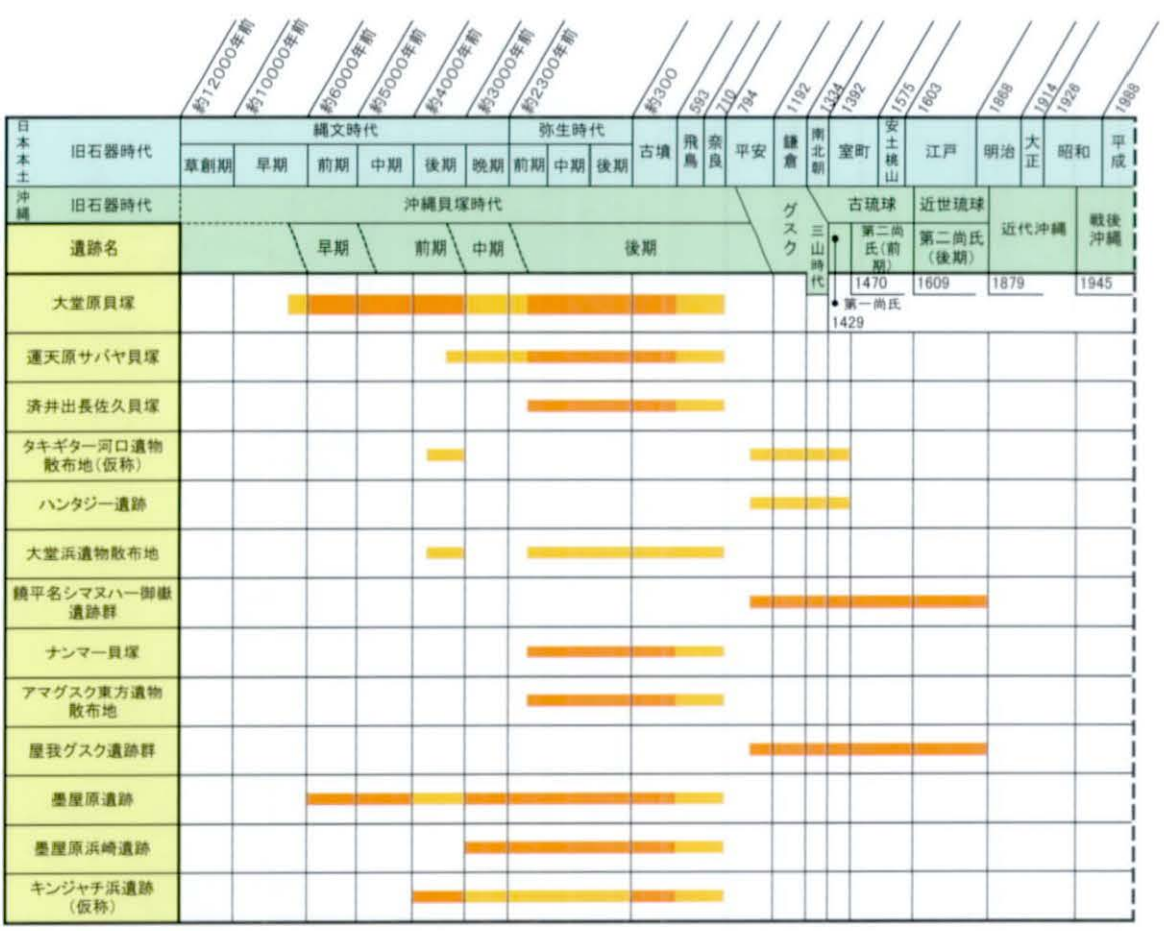
⑨**アマグスク東方遺物散布地**／屋我集落の西側の丘陵地をアマグシクと呼ぶ。屋我集落側の斜面下の畑から貝塚時代後期の土器と思われる小破片を採集している。

⑩**屋我グスク遺跡群**／屋我から済井出に行く途中にある標高約三六mの丘を屋我グスクと呼ぶ。その丘陵一帯にグスク時代から近世の小貝塚などの遺跡がある。

⑪**墨屋原遺跡**／屋我集落の南側、羽地内海に面する海岸から縄文時代前期の「曽畑式土器」などが採集され、今回の大堂原貝塚の発掘調査が行われるまでは、名護市で最も古い遺跡だった。

⑫**墨屋原浜崎遺跡**／一九八〇年、市営住宅建設に伴ない発見された遺跡。ヤマトゥンチュー森と呼ばれる丘陵の南東斜面下に位置する。試掘調査では貝塚時代中期から後期の土器の他、柱穴などの遺構も確認されている。

⑬**キンジャチ浜遺跡（仮称）**／二〇〇四年、護岸工事中に発見された遺跡。屋我集落の裏に位置するキンジャチ浜という海岸で貝塚時代前期の土器が採集された。



屋我地島の遺跡年代表

七、屋我地島の史跡・文化財

屋我のコバテイシ群／一八五八年屋我グシク周辺の古島から村移動した時に植えられた記念木だと伝えられている。

屋我地小学校のアコウ／樹齢百年。市指定文化財。

饒平名海岸のオヒルギ林／屋我地中学校裏手の干潟にあるマングローブでオヒルギのみで構成されている見事な林。

我部の塩田／廃藩置県の頃那覇から寄留してきた士族によって「入浜式塩田」で製塩業が始められた。戦後までつづいた製塩業はこの地域の重要な産業であった。

オランダ墓／一八四六年フランス艦船が交易を求め運天港に停泊。その時二人の水夫が亡くなった。琉球王府の命でこの墓が作られ二人は手厚く葬られた。（オランダ＝西洋人）市指定文化財。

早田壕／早田皓園長の指示によって掘られた壕。当時の入居者九一三人全員が避難することができた。

愛楽園のアダン群落／約三百メートルにわたり見事なアダン群落が残る。自然の海岸線の風景を残す貴重な場所である。

済井出のアコウ／樹齢二百年。ゴバン型済井出村（現済井出）の完成を祝って植樹された記念木と伝えられる。済井出の馬場にある。市指定文化財。

屋我地島の史跡・文化財分布図

第二節　調査経過

一、発見

「大堂原貝塚」が発見されたのは、昭和五四年十一月二四日、名護市遺跡分布調査の中で見つかった。発見当初は、採集された遺物（土器）から、沖縄貝塚時代前期（縄文時代後期）から沖縄貝塚時代後期（弥生時代から古墳時代）の遺跡であると推測された。

二、調整の経過

(1)文化財等の有無の照会と試掘調査

平成七年、今帰仁村より古宇利大橋橋梁整備事業に伴う文化財の照会があり、平成八年三月に名護市教育委員会が試掘調査を実施したところ、遺物包含層を確認した。

(2)範囲確認調査

平成九年、当事業の主体が今帰仁村から沖縄県に移り、沖縄県と名護市教育委員会の間で遺跡の保存をめぐり調整が開始され、名護市教育委員会が当事業予定地内で遺跡の広がりを確認したところ、予定地内の約四五〇〇㎡に渡り遺跡が広がっていることがわかった。

(3)調整と協定書締結

試掘調査と範囲確認調査で遺跡の存在が確認され、調整の結果、事業の変更ができないため、「記録保存」を目的とした「緊急発掘調査」を実施することになった。

平成十年十月、沖縄県と名護市教育委員会において「大堂原貝塚の保存に関する協定書」を締結し、大堂原貝塚及び周辺の遺跡等について、その取り扱いを確認した。今回の事業（古宇利屋我地線建設工事）の範囲にある「大堂原貝塚」は「記録保存」、周辺に遺跡については「現地保存」。「大堂原貝塚」の調査期間は、当該事業内とすることが決まった。

三、調査体制

調整の結果、調査主体は名護市教育委員会、主幹課は社会教育課、文化財係が担当することに決まった。なお、平成十五年度四月に文化課が成立。それ以後の主幹課は文化課となり、文化財係もそこに移った。調査体制は、以下のとおり。

調査主体／名護市教育委員会
調査総括／教育長　比嘉敏雄
　教育次長　山里全用
　稲嶺　進
調査責任／社会教育課長　徳本哲保
　文化課長　宮里武尚
調査担当／文化財係長　島袋正敏
　文化財係主査　具志堅満昭
調査事務／社会教育課庶務　平良芳一
　総務課庶務　上地圭子
　文化課庶務　並里早智子
　文化財係主事　島福善弘
　新垣　誠　比嘉　久
　文化財係臨時　友寄隆史
　神谷祐子　崎原秀雄
　松田康江　大城恒美
調査事務／社会教育課庶務　比嘉文子
　総務課庶務　岸本久美
　文化課庶務　仲村輝美
　文化財係主事　山川昌子
　渡口　裕　岸本みのり
　文化財係臨時　新垣　誠
　比嘉一雄　比嘉　薫
　神谷祐子
　文化課庶務臨時　松田康江
調査員／文化財係長　島福善弘
　文化財係主事　比嘉　久
　仲宗根禎
　文化財係嘱託　岸本利枝
　真栄田義人
　赤嶺信哉
調査補助員／文化財係嘱託　宮里　牧
　新城　司
　岸本卓己
　平　貢
　文化財係臨時　新城卓也
　喜納　聡
資料整理員／文化財係嘱託　仲村美代子
　石川マサミ
　岸本美枝子
　宮城るり子
資料整理作業員／延べ三十五名
発掘作業員／延べ一〇三名

名護市の遺跡分布調査は、昭和五四年度（一九七九）から五六年度（一九八一）にかけて実施された。初年度は市単独予算、二年目、三年目は国・県の補助を得ている。その成果をまとめたのが、『名護市の遺跡2』。その時点（昭和五七年三月）で、七十箇所の遺跡を確認。地区別の内訳は、屋我地地区十二、羽地地区二一、屋部地区六、名護地区十二、久志地区十二。時代別に見ると、沖縄貝塚時代早期（縄文時代前期）が一、同前期（縄文時代後期）が一、同中期（縄文時代晩期から弥生前期）が二、同後期（弥生時代から平安時代）が二二、グスク時代が三六、琉球王国時代二六となっている。当時の主幹課は社会教育課。実際に分布調査に携わった方々は、家田淳一、上原政昌、安里進、島福善弘、呉屋義勝、知名定順、比嘉武則、岸本義彦、大城洋子、前川喜俊、米田善治、橋本雅文である。以後、調査及び諸開発等に伴い九カ所の遺跡が発見され、今のところ名護市には七九ヶ所の遺跡が存在する。

四、調査経過

【平成十年度】

平成十年十月、沖縄県と名護市教育委員会において「大堂原貝塚の保存に関する協定書」を締結し、「記録保存」を目的とする緊急発掘調査が開始された。平成十年度は、仮橋取付部分と赤土流出防止対策用溜池設置部分及び取付道路予定地の調査を行なった。その結果、仮橋取付部分で沖縄貝塚時代後期のものと思われる埋葬人骨が出土した。

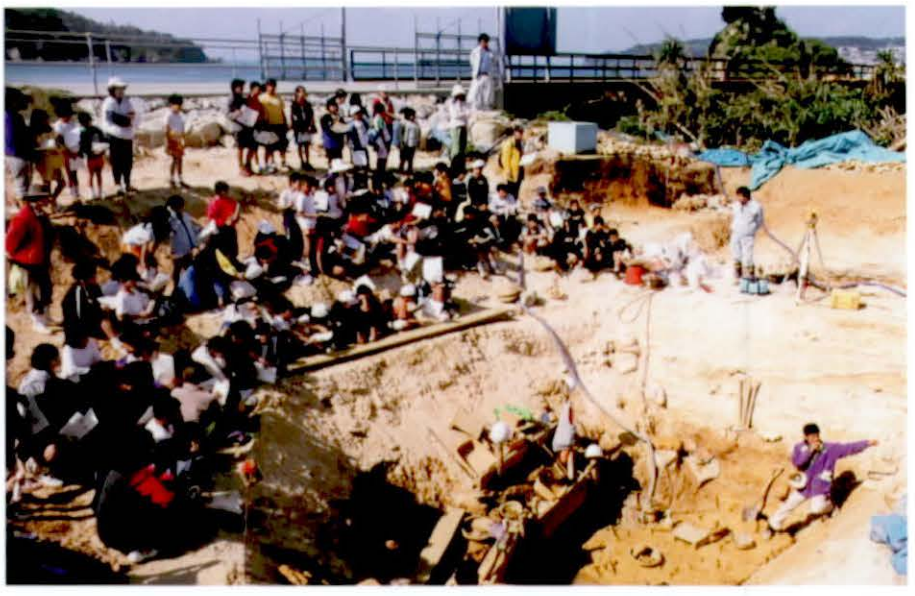
平成10年
11月9日　大堂原貝塚緊急発掘調査開始。伐採及び表面採集。
11月10日　採砂跡窪地の伐採及び表面採集。し－96発掘開始。
11月11日　す－98発掘開始。
11月24日　こ－96発掘開始。
11月25日　さ－97発掘開始。
12月1日　け－96発掘開始。
12月2日　こ－94発掘開始。
12月7日　さ－94発掘開始。
12月10日　こ－97発掘開始。
12月16日　さ－97発掘開始。
12月24日　こ－94Ⅲ層で埋葬人骨出土。
平成11年
1月6日　琉球大学土肥直美助教授、Ⅲ層埋葬人骨調査及び取り上げ。
1月8日　さ－98、し－98発掘開始。
1月13日　し－99発掘開始。
1月19日　土壌分析サンプリング。
2月1日　B地区調査開始。
2月3日　ま－100、み－100発掘開始。A地区仮設道路設置のため仮埋土開始。
2月4日　み－100発掘開始。
2月17日　ふ－100、へ－100発掘開始。
3月1日　ひ－101、ふ－101、ま－101、み－101発掘開始。資料整理室完成。
3月4日　ひ－101、ふ－101で近世溝遺構出土。
3月29日　断面実測。

【平成十一年度】

平成十一年度は、橋脚建設部分と取付道路部分の調査を行なった。橋脚建設部分では、Ⅰ層からⅧ層までの地層を確認し、名護市では初めて「曽畑式土器」を含む縄文時代前期の層を確認した。さらに下のⅧ層から「薄手無文土器」の沖縄最古の土器が出土し、嘉手納町の野国貝塚とともに沖縄最古の土器の出土する遺跡として注目された。

平成11年
8月1日　平成十一年度事業開始。
8月5日　県及び請負業者と調整。
8月16日　仲嶺俊子氏、貝分類指導。
8月19日　熊本大学木下尚子教授遺跡見学及び資料調査。
9月9日　作業員入り、伐採開始。
9月10日　古墓前の伐採・土砂除去。
9月13日　さ－99、し－100発掘開始。
9月14日　さ－100・101発掘開始。
9月16日　す－100、す・し－101発掘開始。
9月28日　し－102発掘開始。
9月30日　出土遺物洗浄開始。
10月5日　古墓前庭の遺物取り上げ。
10月7日　け－98・99・100・101発掘開始。
10月15日　古墓前庭発掘開始。
10月19日　こ－98・99発掘開始。
10月20日　こ－100・101発掘開始。
10月25日　し－99発掘開始。さ－99～102北断面実測。
10月26日　こ－99～102観察畦除去。
10月29日　す－102炉跡平面実測。
11月2日　さ－99～し－99東断面実測。
11月12日　し－99Ⅲ層にイモガイ集積出土。
11月16日　け～こ東断面実測。
11月18日　す－102西断面実測。イモガイ集積実測。
11月24日　す－102土壌サンプル採取。
11月29日　す－101柱穴掘及び実測。
12月3日　く－101発掘開始。
12月10日　し－101観察畦除去。し－102南断面実測。
12月14日　し－99～さ－101北断面実測。
12月27日　さ・し－99観察畦除去。
平成12年
1月14日　さ－99～101北断面実測。さ・し－99観察畦除去。
1月21日　こ－101東断面畦追加実測。
1月24日　け・こ－101、ビーチロック下から土器出土。
1月31日　け－101・100、こ－101・100ビーチロック下を発掘。
2月7日　ビーチロック下出土遺物について現場説明会。
2月9日　す－102東断面実測。
2月17日　し・す100境Ⅴ層人骨出土。
2月18日　す－100～102南断面実測。な・に－100発掘開始。こ－99西断面実測。
2月23日　古墓写真測量。屋我地小学校現場見学。
2月28日　さ－99・100北断面実測。ち～て－97表土はぎ取り。
2月29日　屋我地中学校現場見学。
3月1日　し－101炉跡掘り下げ。さ～す－100東断面実測。
3月7日　A地区発掘終了。埋め戻し。
3月9日　古墓斜面発掘開始。
3月10日　ち～て－98発掘開始。
3月14日　そ・た・ち－99発掘開始。古墓石積除去。せ－99～100、そ・た－100、つ－99発掘開始。
3月15日　て－99発掘開始。
3月16日　奄美系土器比較資料調査。
3月17日　熊本大学甲元教授資料調査。
3月21日　熊本大学名誉教授白木原和美

3月23日　氏、遺跡見学。
ち～て－97西断面実測。そ－99柱穴掘及び実測。
3月27日　て－97～て－99南断面実測。
3月30日　ち－98Ⅲ層貝だまり検出。そ－99柱穴掘及び実測。
土坑遺構掘り下げ。ち－97～ち－99北断面実測。調査地平面図実測。



【平成十二年度】

平成十二年度は、橋詰広場建設予定地付近の調査を行なった。沖縄貝塚時代後期の埋葬人骨出土地に隣接した部分であったため、人骨出土が予想されたが、その砂丘部分に水路が走っていることがわかった。平成十一年度に出土したⅦ層・Ⅷ層、あるいはさらに下の層を確認するため土留めのH鋼を打ち込み発掘を進めたが、Ⅷ層及びさらに下の層については確認できなかった。

平成12年
4月4日　資料整理開始。
6月1日　発掘調査準備開始。
6月15日　発掘調査開始。調査地伐採及び表土はぎ。
6月20日　す－89、そ－93発掘開始。
6月21日　す・せ－93発掘開始。
6月27日　し－92発掘開始。
7月5日　に－93発掘開始。
7月6日　H鋼を打ち込む。
7月11日　さ－91・93発掘開始。
7月14日　す－92発掘開始。
7月24日　せ－91・92発掘開始。
7月25日　し－91発掘開始。
7月28日　小田富士雄氏来室。九州弥生土器見学。
7月29日　鹿児島埋文センター宮田氏、八木氏来室。石器見学。
8月4日　そ－92発掘開始。
8月10日　さ－91～93の南畦写真撮影。
8月11日　名護博物館実習生発掘体験。
8月17日　こ－92・93発掘開始。
9月19日　さ－91トレンチ堀り。
さ～し－93東壁面実測。こ－91北壁面実測。
9月25日　す・せ－92第Ⅲ層溝内の石積み除去。
9月29日　調査地写真撮影。
10月4日　現場説明会。
10月10日　県文化課職員現場見学。
10月13日　貝だまり断面実測。
10月20日　せ・そ－90発掘開始。
10月24日　さ・し－93第Ⅲ層土杭平面断面実測。
11月2日　一般市民向け現場説明会。
11月7日　し－91西壁断面実測
11月8日　せ－92、溝内土杭（井戸か？）断面実測。
11月13日　す－90、す－91発掘開始。
11月16日　た－91・92発掘開始。し－92南壁断面実測。
11月17日　初任者研修生現場見学。
さ・し－93東壁断面実測。さ－92・93北壁断面実測。
11月21日　奄美笠利町等比較資料調査（～25日）。
11月22日　ち－92イモガイ集積出土。
11月27日　安和高齢者学級現場見学。
12月5日　せ－92イモガイ集積出土。
12月7日　せ－92イモガイ集積実測及び取り上げ。
12月12日　せ－91北壁畦除去。
12月13日　土器比較資料調査（鹿児島県埋文センター他～15日）
平成13年
1月29日　そ－91より曽畑式土器出土。
2月9日　す－91、せ－91より黄褐色粘土と岩盤出土。
2月15日　地質石質現場調査確認。
2月16日　そ－91・92南壁断面実測。
2月19日　た－91・92、ち－91、つ－92第Ⅴ層～第Ⅵ層発掘。
2月20日　す～そ－91西壁断面実測。そ－91・92南壁畦除去。
2月23日　鹿児島国際大学の上村氏、中園氏来室。

2月28日　ち－92基盤露出。
3月1日　出土自然遺物（貝）分類開始。
3月6日　た・ち－90発掘開始。
3月7日　現場説明会。
ち－90Ⅳ層人骨出土。
3月14日　た・ち－92東壁断面実測。
3月15日　た・ち－90基盤露出。た・ち－90西壁断面実測。
3月16日　発掘作業終了。
3月19日　そ～ち－92東壁断面実測。
3月23日　土器遺跡比較資料調査（伊仙町－知名町～26日）
3月28日　現場かたづけ。

【平成十三年度】

平成十三年度は、平成十二年度調査地区の陸側の調査を行なった。まず、大正時代まで使用していたというサーター釜跡が出土。弥生時代相当のⅢ層からはイモガイの集積や石を集めた炉跡のような遺構が出土した。

平成13年
4月2日　資料整理開始。
8月14日　発掘調査予定地の位置だし。
8月17日　名護博物館実習生、資料整理実習。
8月28日　調査地客土除去。進入路及び赤土流出防止沈殿池設置。
9月4日　安全祈願及び調査概要説明。
9月5日　発掘開始。つ・て－93、つ－92表土はぎ。
9月10日　つ・て－91、て－92発掘開始。
9月17日　久辺中学校生職場体験学習。
9月18日　と－92・93、な－93発掘開始。
9月20日　に－93、と－91発掘開始。
9月21日　な－92、て－90発掘開始。
10月1日　て－89発掘開始。
10月2日　に・ぬ－92、な－91発掘開始。
10月3日　ぬ・ね－93発掘開始。
10月4日　て－91で地山露出。と－90、91で焼土遺構確認。
10月12日　つ－90発掘開始。
10月19日　自然遺物採集のため土壌サンプリング。
10月26日　て・と－93黒褐色土層（第Ⅲ層）出土。土器出土増加。
10月31日　と－90、91焼土遺構断面実測。
11月3日　名護市生涯学習振興大会文化財めぐり。
11月6日　ぬ－92・93で土坑五基確認。
11月13日　つ－89発掘開始。
11月20日　に－92・93観測畦除去。
11月27日　つ－93黒褐色土層出土。土器出土増加。
12月1日　かめ棺比較資料調査（佐賀県～3日）
12月11日　イモガイ集積出土。
12月16日　つ－91で集石炉出土。
12月22日　93列で柱穴出土。
12月25日　つ－92・93北壁断面実測開始。
平成14年
1月15日　調査地全景撮影。第Ⅲ層柱穴出土状況撮影。
1月23日　つ－89赤褐色砂より貝製品（サメ歯状模造品）出土。
1月24日　て・と－93淡褐色土層出土。
1月28日　集石炉内土壌サンプリング。
1月30日　集石炉出土。
2月6日　鹿児島大学新里氏、宜野湾市教育委員会豊里氏来訪。
2月7日　一部埋め戻し、進入路付替え。
2月10日　熊本大学木下尚子教授による貝製品分類。
2月13日　ち－90発掘開始。縄文時代後期の奄美系土器出土。
2月27日　て・と－93緑灰色混黄褐色土層出土。土器含む。
3月8日　発掘作業員終了。
3月9日　土器及び貝製品比較資料調査（種子島・鹿児島～12日）
3月18日　つ－92イモガイ集積撮影、取り上げ。
3月27日　つ－91・92・93北断面実測。
3月28日　現場埋め戻し。
3月29日　終了。

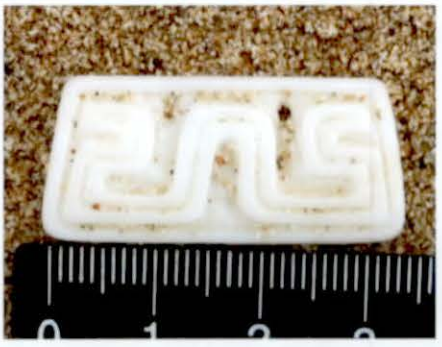
【平成十四・十五年度】

平成十四年度は、仮設道路部分が調査の対象。そのため、仮設道路使用終了後にしか調査に着手できないことと、平成十一年度に沖縄最古の土器が出土した場所に隣接していることや本道路に隣接していることなどから土砂崩れ防止の対策（矢板打込み）を施した後に調査を開始することになり、実際に現場調査に着手したのは平成十五年二月であった。

そのため、現場調査の一部を平成十五年度に繰り越して実施した。繰越事業は七月に終了したが、現場では貴重な遺物が次々発見されていたため、平成十五年度事業として引き続き現場調査を進めた。その場所から県内で初めて縄文時代前期の「埋葬人骨」が出土、保存をめぐり検討が進められたが出土地が海抜マイナス一・四m付近で、現状保存が不可能であったため、十一月九日に現場説明会を実施し、関係者等に公開した後、骨を取り上げて詳細な分析を行った。その部分の調査が終了したのは、平成十五年十二月。その後、矢板を撤去。そのため平成十五年度調査に着手したのは平成十六年二月である。

平成15年
1月28日　重機による表土及び客土の除去。
2月3日　安全祈願・発掘開始。さ－94客土および攪乱層除去。
2月4日　さ・し・す－94・95表土攪乱層除去。
2月19日　せ－95攪乱層除去。
2月26日　そ－94表土及び赤褐色土（Ⅱ層）発掘開始。し・す－95白砂（Ⅳ層）を掘る。
3月7日　さ・し－95　西壁断面実測。

3月11日　そ・た－94・95Ⅲ層検出作業開始。
3月13日　し・す・せ－94西壁断面実測。県埋文の安里氏、西銘氏、鹿児島埋文の新東氏現場視察。
3月24日　し－94赤褐色砂および黄褐色砂（Ⅲ層）発掘開始。
3月26日　さ－94白砂（Ⅳ層）を掘る。今帰仁村教育委員会宮城氏、藤田氏（地質）現場視察。
3月28日　国立歴史民俗博物館西本氏以下三名現場視察及び遺物実見。
4月22日　そ・た・ち列Ⅲ層検出。イモガイ集積確認。
4月24日　イモガイ集積実測。
5月1日　黒曜石剥片出土。
5月2日　弥生系土器実測及び検討会（～5日）。
5月12日　石材集積確認。
5月19日　矢板補強工事。
6月2日　発掘再開。
6月12日　し・す－95で第Ⅶ層出土。
6月13日　こ－94・95、貝・土器・石器取り上げ。
6月22日　出土遺物比較資料収集調査（阿波連浦貝塚～23日）。
7月9日　曽畑式土器出土。
7月14日　出土遺物比較資料収集調査（鹿児島県立黎明館16日）。
7月15日　北谷町教育委員会中村氏現場見学。
7月28日　宜野座村教育委員会知名氏現場見学。
市民向け現場説明会。



【平成十五・十六年度】

平成十五年度の調査地は前年度調査地の陸域部で砂丘裏の低湿地にあたり、「縄文埋葬人骨」が出土したⅧ層の広がりを確認することを主な目的に調査を行った。結果、調査地でもっとも陸域にあたる「な列」でもⅧ層と思われる地層を確認した。調査は繰越事業として平成十六年度も引き続き実施した。

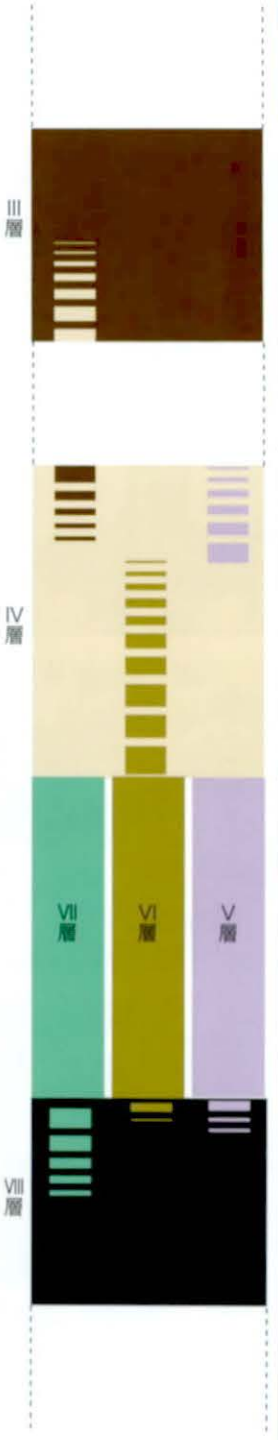
平成十六年度の資料整理は、前年度に引き続き四月一日から実施。土器・石器・貝製品等の実測作業・トレースを行なった。特に石器については、平成十七年一月に県外の専門家を招き分類・鑑定を実施し、新聞報道でも伝えられたとおり「旧石器」の疑いがある石器を発見した。また、最終報告に向け、過去六年間の層序の整合・整理、貝を初めとする自然遺物の整理を実施した。現場調査は平成十五年度に調査した箇所を引き続き実施。沖縄最古の土器を含むⅧ層の広がりを確認することを目的に行った。結果、調査地区すべてでⅧ層を確認したが、Ⅷ層の底を確認することはできなかった。今後の調査に期待したい。調査地は平成十一年度と平成十三年度調査地区の間に位置し、両調査地のⅢ層で出土した柱穴を含む多数のピットが確認できた。Ⅳ層からⅦ層にかけて石敷が出土し、遺構の可能性が示唆されたが調査面積、期間等の制限から明確な把握に至ってない。Ⅷ層についてもその広がりこそ確認できたが、Ⅷ層に含まれる遺物（土器・石器・骨製品）が極端に少なかった。平成十六年七月十三日、現場調査を終了し、今回の緊急発掘調査におけるすべての現場調査を終了した。

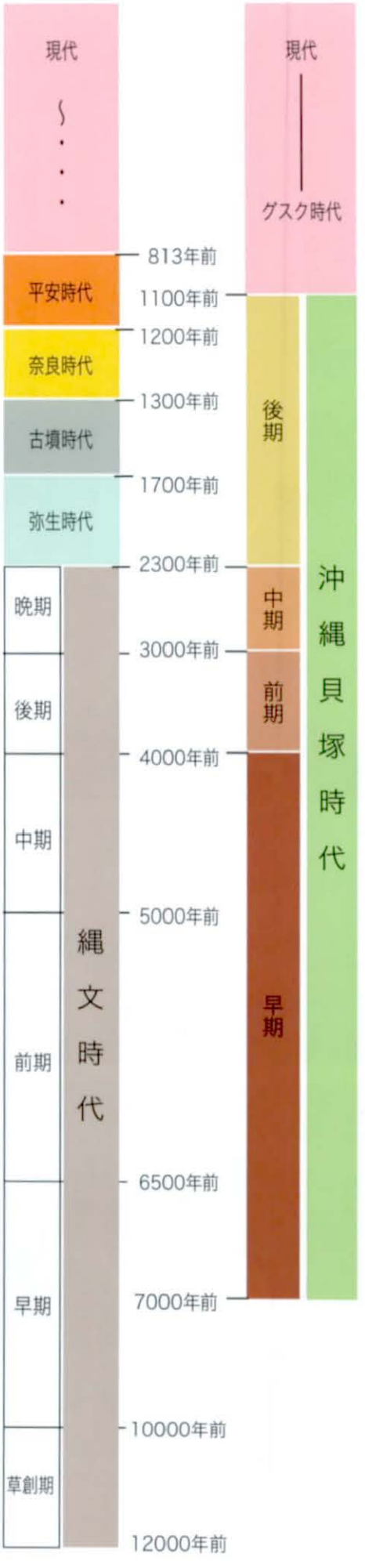
平成15年
8月4日　A地区調査再開。
8月7日　台風のため発掘作業中止。
8月19日　作業員、発掘再開。
8月22日　イモガイ集積取り上げ。
8月26日　集石取り上げ。
8月28日　枝サンゴ溜まり検出。
9月2日　ち－95黒色土Ⅲ層、発掘開始。
9月8日　ち－95Ⅲ層、土抗検出。
9月11日　台風接近作業中止。
9月19日　台風ため発掘作業中止。
9月24日　黄褐色土Ⅳ層、発掘開始。
9月30日　し－95Ⅶ層下薄手土器出土。
10月2日　し－95Ⅷ層、獣骨、薄手土器出土。
10月3日　し－95　1号人骨出土。
10月6日　す－95Ⅷ層ヤコウガイ、サラサバテイラが多く出土。
10月10日　し・す－95東壁断面実測。
10月13日　せ－95北壁断面実測。
10月14日　し－96、2号人骨出土。
10月16日　土肥直美助教授人骨検出。
10月18日　せ－96南壁断面実測。
11月4日　報道関係者向け現場説明会。
11月9日　一般対象現場説明会。
11月11日　せ－96白砂Ⅳ層、発掘開始。
11月13日　人骨取り上げ開始。
11月17日　イモガイ集積取り上げ。
11月19日　そ－95白砂Ⅳ層、発掘開始。
12月4日　そ－95Ⅴ～Ⅶ層、発掘開始。厚手の土器出土。
12月11日　せ－95Ⅷ層、発掘開始。
12月15日　し－95、2号人骨直下より無文胴部出土。
12月18日　土壌サンプル採取。
12月19日　し－95Ⅷ層マイナス三mまで掘り下げ。

平成16年
2月18日　B地区調査地開始。
2月28日　ユンボによる客土除去。
3月2日　発掘作業開始。
3月8日　な－94・95　表土層発掘。
3月16日　て・つ－94、つ－95Ⅱ層発掘開始。
3月23日　な・と－94、な－95Ⅲ層発掘開始。
3月26日　発掘作業一時中断。
3月29日　遺構実測。
4月5日　現場調査再開。
4月15日　Ⅲ層柱穴実測開始。
4月20日　Ⅲ層柱穴実測及び発掘開始。
4月30日　ち－94・95でⅢ層溝確認。
5月13日　Ⅲ層柱穴実測及び発掘終了。
6月12日　調査地断面実測開始。
6月19日　沖縄国際大学調査地見学。
6月21日　た－95、Ⅳ層で奄美系土器及び伊波式土器が出土。
6月28日　土壌－層序分析調査。
6月29日　つ－95、Ⅶ層で曽畑式土器出土。木片出土。
7月1日　ち・つ・て－95、断面実測。
7月2日　Ⅶ層石敷層確認。
7月3日　砂丘堆積及び土壌調査。
7月7日　Ⅷ層確認。
7月8日　埋め戻し開始。
7月14日　京都大学秋山氏、大堂原貝塚資料調査。
8月16日　名護市教育研究所文化財めぐり。
10月29日　福井県に比較資料調査（骨製品等）。
11月12日　貝類分類同定作業。
平成17年
1月20日　石器－石質鑑定作業。
1月22日　石器－石質講演会。
2月25日　自然科学分析打ち合わせ。
2月26日　石器分類。

五、層・年代と出土遺物写真

大堂原貝塚柱状断面





Ⅷ層主要遺物
土器（薄手土器・細沈線文土器・爪形文土器）

Ⅷ層主要遺物
貝製品（ヤコウガイ蓋製敲打器、ヤコウガイ製貝匙）／石器（石斧・石槍状石器）／骨製品（イノシシ牙加工品、イノシシ骨製ヤス状刺突具）／イノシシの骨

Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層主要遺物
土器（爪形文土器、曽畑式土器、室川下層式土器、条痕文土器、神野Ａ・Ｂ式土器、面縄前庭Ⅰ～Ⅲ式土器、尖底、丸底）

Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層主要遺物
貝製品（ゴホウラ製貝輪、シレナシジミ製貝輪、イモガイ製円盤状製品、ヒトエガイ穿孔）／石器（くぼみ石、敲石、石斧）／骨製品（イノシシ骨製錐、クジラの骨を利用した用途不明製品）

Ⅳ層主要遺物
土器（面縄前庭Ⅰ～Ⅲ式土器、面縄前庭Ⅴ式土器、仲泊式土器、伊波式土器、荻堂式土器、面縄東洞式土器、嘉徳Ⅰ式・Ⅱ式土器、平底）

Ⅳ層主要遺物
貝製品（ゴホウラ製貝輪、ウミギクガイ科製貝輪、ウミウサギガイ穿孔、ウミギクガイ科製札状製品、貝種不明札状製品、スイジガイ製利器／石器（石斧、敲石、石皿）

かく乱～Ⅳ層出土の復元土器（阿波連浦下層式土器、大当原式土器、スセン當式土器、型式不明土器）

Ⅲ層主要遺物

土器（浜屋原式土器、奄美諸島系土器、九州弥生土器）／貝製品（ヤコウガイ製貝匙、オオツタノハ製貝輪、テングガイ製貝輪、イモガイ科製指輪、ウグイスガイ目製サメ歯状模造品）／石器（敲石、磨石、石斧）

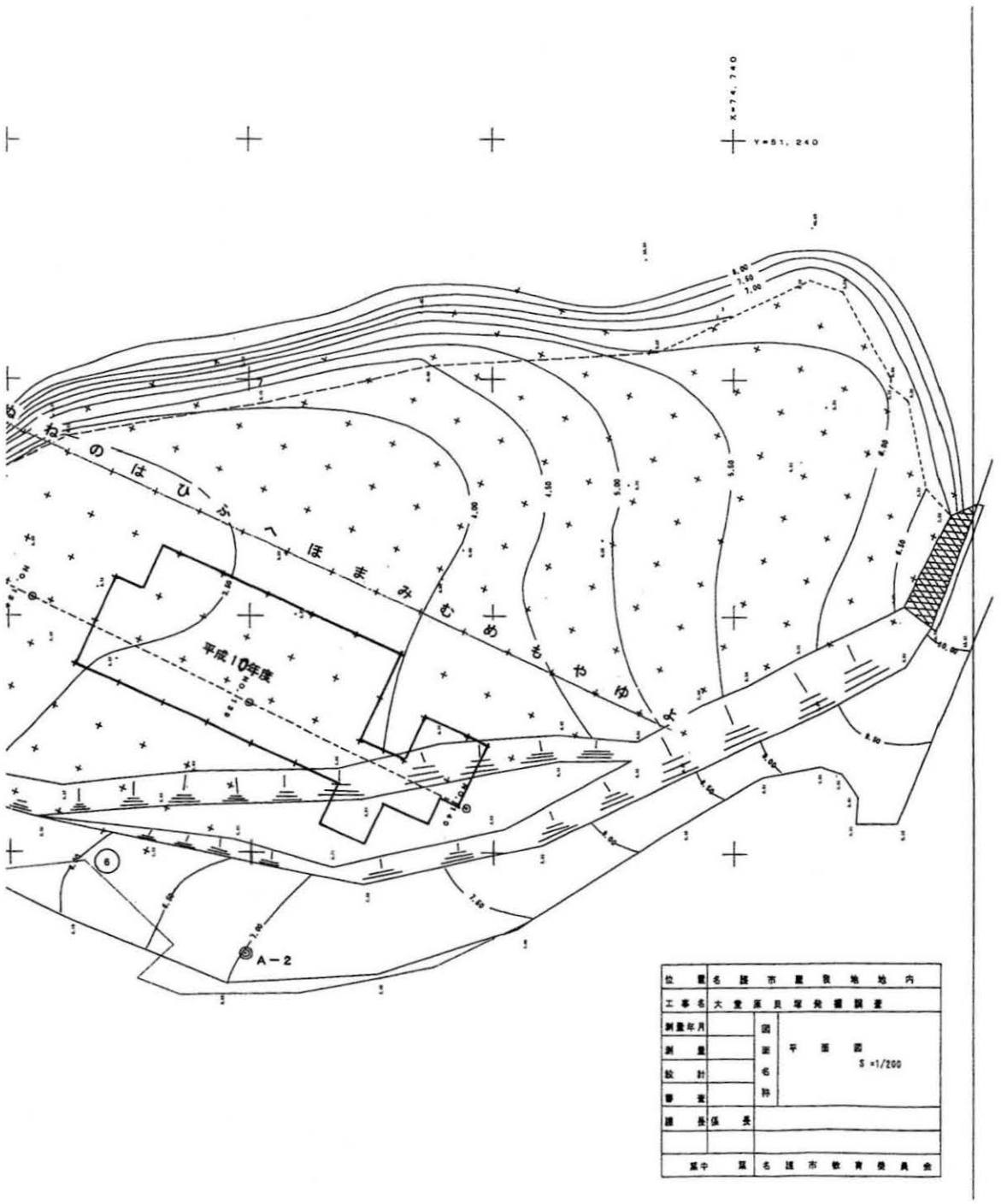
第二章
詳細

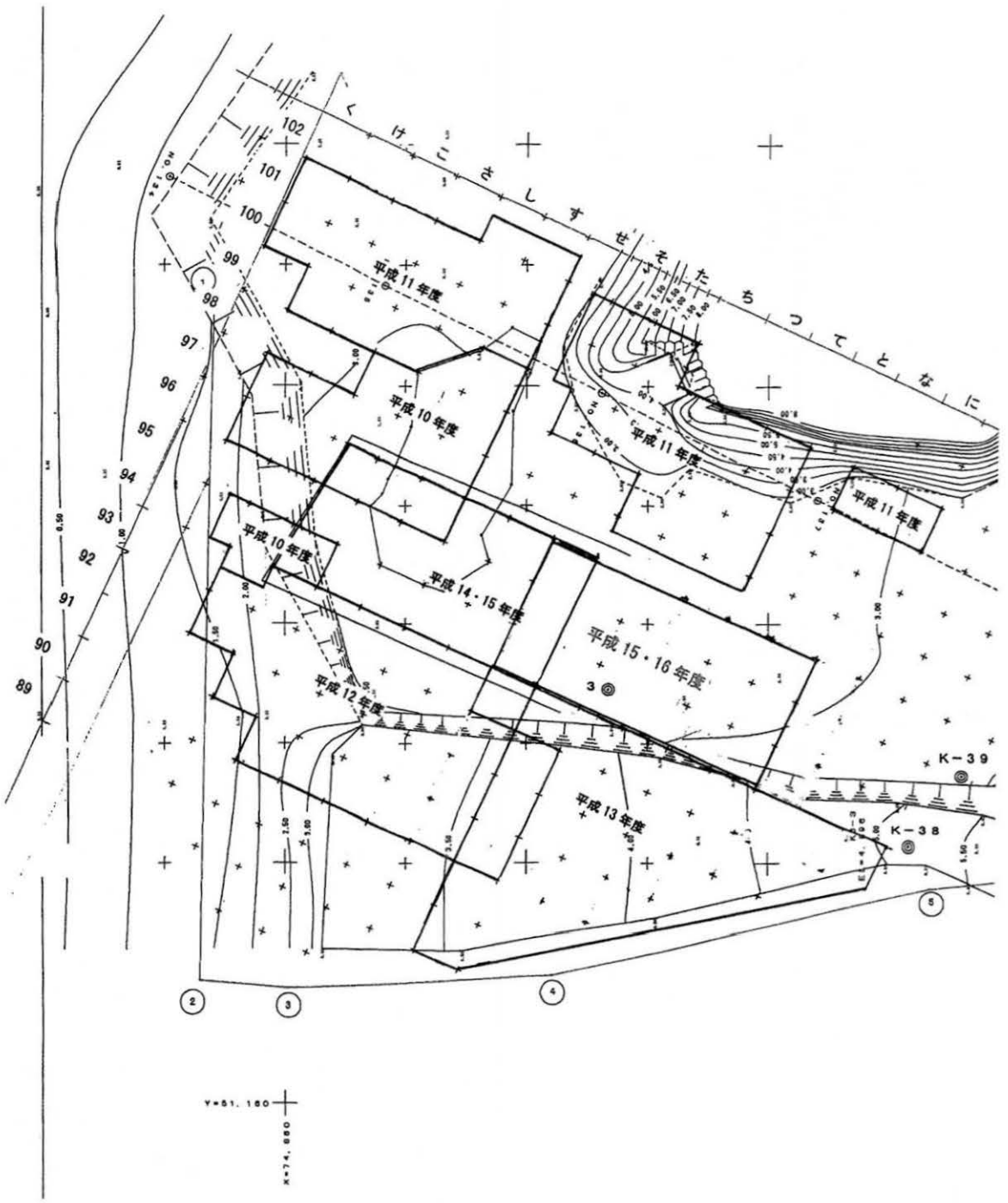
第一節　グリット設定と調査箇所

橋脚および計画道路のほぼ中心線を東西軸にしてグリットを設定し、南北軸に算用数字、東西軸に、ひらがなを用いてグリットの記号を付した。

平成十年度は、砂丘部分と陸側（砂丘後背の低湿地）の調査を行い、平成十一年度調査は、砂丘部分と丘陵から丘陵裾部分（砂丘後背の低湿地）、平成十二年度調査は、砂丘部分、平成十三年度調査は陸側（砂丘後背の低湿地）、平成十四・十五年度は砂丘部分、平成十五・十六年度調査は、陸側（砂丘後背の低湿地）を行った。概ね、「そ」・「た」のラインに砂丘と砂丘後背の低湿地との境界があるものと考えられる。

なお、平成十年度調査地区を中心に平成十一年度および平成十四年度調査地区にて採砂による大規模な窪地が確認された。大規模な窪地は、さ・し・す・せ－95・96・97・98・99・100にまたがり、表土（Ⅰ層）、近世の遺物を主体とするⅡ層、弥生～古墳時代並行期の層に該当するⅢ層までは、かく乱を受けていた。従って当該地区では、縄文時代後期の土器を主体とするⅣ層以下より、安定した層位が確認された。





大堂原貝塚グリット設定図

第二節　層序と年代

一、大堂原貝塚の地形・地質と層序

(1)現在の地形と地質概観

現在の屋我地島に見られる地形と地質については、神谷（二〇〇一）に記載されており、ここではこれに従い、大堂原貝塚の地形と地質について概観する。

大堂原貝塚は、屋我地島の北部沿岸に形成された狭小な沖積低地上に位置する。この低地の北部は海浜であり、東西を岩石海岸に挟まれた砂浜が形成されている。また、低地の南部は、海岸低地に開口した丘陵の谷を埋積する低地である。五千分の一地形図では、調査区の位置する谷も含めて、海岸低地に三本の谷の出口が集まっている地形が認められる。なお、調査区の北部は、海浜にかかっている。

丘陵を構成する地質は、琉球層群に対比される屋我層の石灰岩および石灰質砂岩であるが、そのさらに南側には、我部層と呼ばれる段丘礫層からなる丘陵が広がっている。我部層は国頭礫層に対比されており、その堆積年代は、ミンデル－リスもしくはリス－ウルム間氷期と推定されている。礫層を構成する礫種は、屋我地島の基盤を構成している運天原層の石灰岩、千枚岩、チャートなどである。なお、運天原層は、本部半島の中生代の地層である与那嶺層に対比されている。

(2)発掘調査により確認された地層とその層序

平成十年から平成十六年に至る調査により、海岸低地から谷に至る範囲の地質層序が確認された。地質は、海浜部と谷部とでは異なる様相が捉えられたため、以下に分けて記載する。

【海浜部】

現表土を構成する層位をⅠ層とし、以下、下位に向かって分層された各層にⅡ層からⅨ層までの層名を付した。また、成因的に一連であるが層相の異なる層位が認められる層についてはａ、ｂを付して細分した。以下に、最下層のⅨ層より順に述べる。

〈Ⅸ層〉

今回の調査で確認された最下位の堆積層。灰緑色を呈する泥岩層である。層相から、新第三紀の浅海底堆積物からなる島尻層群を構成する泥岩層であると考えられる。大堂原貝塚における「基盤」としてよい。

〈Ⅷ層〉

Ⅸ層の上位に不整合で堆積する礫層。礫はほとんどがサンゴの破片であり、陸側に傾いた極めて低角度あるいはほぼ水平の平行葉理が認められる。また、礫層中には、シルトの薄層が狭在し、この薄層より爪形文土器、薄手土器の破片および獣骨が出土している。なお、見かけ上のⅧ層上面からは埋葬人骨が出土しており、その人骨の放射性炭素年代は約六一〇〇年前（未較正）という値が得られている。この埋葬人骨の出土層位は、爪形文土器および薄手土器の出土したシルトの薄層中に対比される。

〈Ⅶ層〉

Ⅷ層と同様にサンゴ片を主体とする礫層。Ⅷ層上面とは斜交する海側に傾いた比較的高角度の平行葉理が認められる。Ⅶ層中より採取されたシャコ貝の放射性炭素年代は五五〇〇～四五〇〇年前（未較正）を示し、同層位下部から出土したと考えられる大型板材の放射性炭素年代は五五八〇年前（未較正）であった。また、Ⅶ層の下部には、巨礫（径四〇～六〇㎝ほど）を含む亜円～亜角礫が散在する。礫種は石灰岩、チャート、千枚岩である。さらに、Ⅶ層上面には初生ビーチロックと考えられる固結した部分が認められる。なお、Ⅶ層からは曽畑式とされる土器片が出土している。

〈Ⅵ層〉

Ⅶ層と同様にサンゴ礫を主体とする礫層からなる下部（ここではⅥｂ層とする）と粗砂～中砂からなる比較的淘汰のよい白色砂層の上部（Ⅵａ層）とからなる。Ⅵｂ層では、海側に傾く比較的高角度の平行葉理が認められ、これがⅦ層上面とは斜交することから、Ⅶ層とは区別した。

また、Ⅵｂ層上部には、中礫～巨礫（径五〇～五五〇㎜ほど）の亜円～亜角礫が散在する。礫種は、Ⅶ層に認められた巨礫と同様である。なお、Ⅵｂ層からは、室川下層式とされる土器片が出土している。

〈Ⅴ層〉

Ⅵ層の上位に堆積するサンゴ片を含む砂礫層。Ⅵ層との層界は明瞭であり不整合面と考えられる。全体的に赤褐色を呈し、堆積構造は不明である。また、Ⅴ層上面には、初生ビーチロックとされる固結した部分も認められる。

〈Ⅳ層〉

Ⅴ層の上位に整合に堆積する黄灰色の中～粗砂からなる砂層。堆積構造はとくに認められないが、粒径の淘汰は比較的良好である。下位のⅤ層の砂礫層とは整合に重なる。また、Ⅳ層からは、伊波・荻堂式とされる土器片が出土している。なお、上述したⅤ層およびⅣ層の年代については、出土遺物の放射性炭素年代を得ていないが、Ⅵ層やⅢ層の放射性炭素年代との関係や出土土器型式の年代観などから、およそ四〇〇〇～三〇〇〇年前頃という推定ができる。

〈Ⅲ層〉

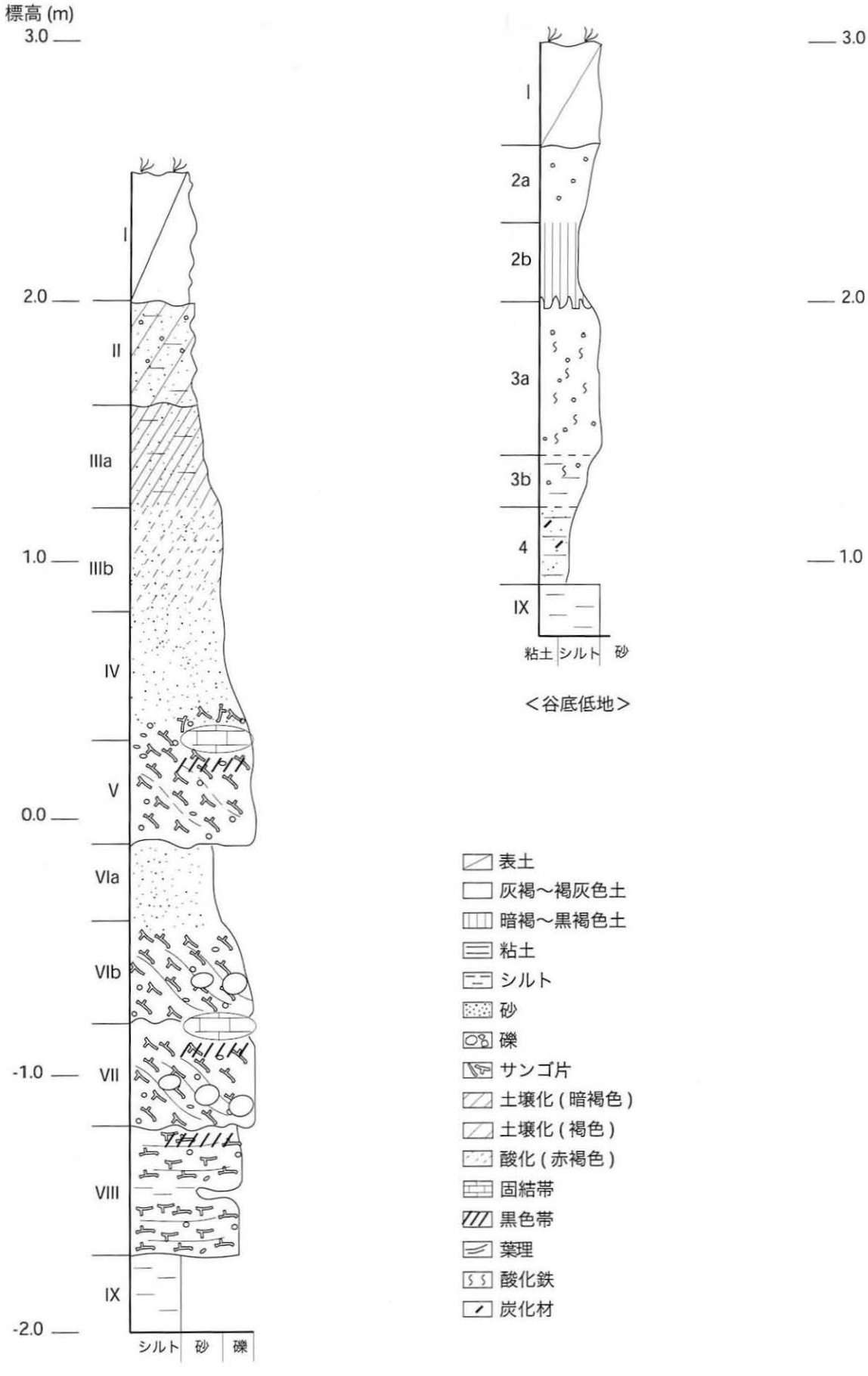
赤褐色を呈する砂層からなる下部のⅢｂ層と暗灰褐色を呈するシルト質砂層からなる上部のⅢａ層とに分層される。Ⅲｂ層とⅣ層との層界は漸移的である。また、Ⅲａ層はⅢｂ層の土壌化した層位に相当し、両層の層界も漸移的である。また、Ⅲａ層には、径一～二㎝の黄白色軽石が包含されている。Ⅲａ層中からは、貝塚時代後期（弥生時代）とされる遺物が出土しており、遺物とされる貝殻からは、二三〇〇～一八〇〇年前（未較正）の放射性炭素年代が得られている。

〈Ⅱ層〉

細礫混じりの砂質シルトからなり、赤褐色を呈する土壌である。近世とされる遺物が出土している。

〈Ⅰ層〉

いわゆる表土であり、現代の盛土または耕作土である。



大堂原貝塚における堆積層の模式柱状図

【谷部】

谷部における層序は、現表土を構成するⅠ層については海浜部のⅠ層から連続するが、その下位に続く各層については、海浜部の各層からは連続しない。したがって、ここでは、便宜的にアラビア数字を用いて谷部各層の層名とする。Ⅰ層の下位の層位より2層とし、4層まで分層された。また、2層および3層については、色調の層位的な違いが認められたことから、それぞれa、bを付して細分した。

なお、谷奥部側壁斜面に位置する調査区では、2層の下位に赤褐色土（いわゆるマージ）と基盤である石灰岩も認められている。したがって、以下に谷底低地の層序として4層より順に述べ、さらに谷側壁斜面の層序についても述べる。

［谷底低地］

〈4層〉

灰色～暗灰色を呈する粗～極粗砂混じりの粘土層である。上位の3層との層界はやや不明瞭である。多量の炭化材を含み、炭化していない材片や葉なども少量認められた。炭化材の放射性炭素年代は約四九〇〇年前（未較正）である。なお、4層の下限については調査区内の断面では確認をすることができなかった。しかし、海浜の堆積層と谷底低地の堆積層とが接する調査区の断面において、Ⅶ層が尖滅し、4層へ移行する状況が認められたことと、上述の炭化材の年代がⅦ層のシャコ貝の放射性炭素年代に近いことなどから、4層はⅦ層とほぼ同時期の堆積層であると考えられる。

〈3層〉

シルト質の土壌であり、細礫を含む。上位の2層との層界は比較的明瞭であるが、細かく波を打ち、乱れている。礫および酸化鉄を比較的多く含み、灰褐色を呈する上部の3a層と礫および酸化鉄の少ない褐灰色を呈する下部の3b層とに細分される。より海側の範囲に分布する3a層上部には、Ⅲa層中に含まれる軽石が連続して3a層中にも含まれていることが確認された。また、弥生土器の包含も確認されている。これらのことから、3層の堆積時期はⅢ層とほぼ同時と考えられる。

〈2層〉

粘土質シルトからなる土壌であり、褐色を呈する上部の2a層と黒褐色を呈する下部の2b層とに細分される。2b層の最も厚いところでは、色調の濃淡により、さらに4層ほどの細分が可能であり、また、焼土粒様の赤色粒や炭化粒なども少量認められる。2a層には、耕作による可能性のある撹乱が広く認められる。

［谷側壁斜面］

〈石灰岩〉

屋我地島内に分布するいわゆる琉球石灰岩に相当するものと考えられる。屋我地島内の琉球石灰岩は、神谷（二〇〇一）により屋我層上位部層とされている。おそらく、石灰岩の下位には、Ⅸ層とした島尻層群の泥岩が堆積していると考えられる。

〈マージ〉

谷側壁斜面を構成する赤褐色を呈する土壌。いわゆるマージであり、島内の丘陵の表層を覆う土壌でもある。発掘調査では、マージの上面から、チャート製石器の出土が確認されている。

〈2層・Ⅰ層〉

マージの上位には、2層およびⅠ層が確認されている。2層は谷底低地ほど厚くはなく、細分も不明瞭である。

（3）大堂原貝塚における地形発達

〈六〇〇〇年前以前〉

谷の形成時期は不明であるが、完新世には既に形成されていたと考えられる。Ⅷ層形成以前の海浜の堆積物は認められていないが、削剥されてしまった可能性もあり、今回の調査では不明である。

〈六〇〇〇年前頃〉

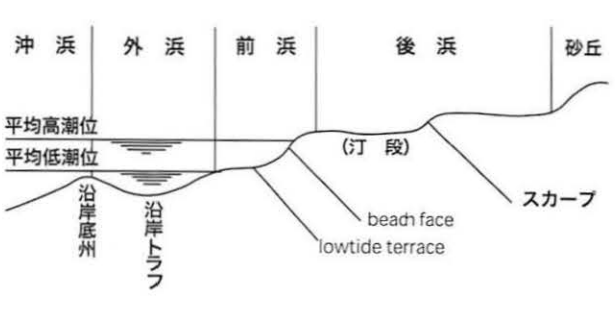
Ⅷ層は、それを構成する砕屑物と堆積構造等の特徴から、砂礫海岸の後浜（満潮時の波の遡上限界よりも陸側であり、暴浪の到達する沿岸線までの間）に形成されたバーム（汀段ともいう）とよばれる平坦な地形を構成していたと考えられる。サンゴ礫の堆積は暴浪によるものであるが、後浜は、通常時は波の影響を受けることのないところであり、塩分や風に強い植生も繁茂している。また、サンゴ礫を堆積させるような暴浪が海岸に押し寄せるということは、この頃はサンゴ礁の形成が未発達であり、消波機能をもつ礁嶺が形成されていないことを示唆する。

Ⅷ層形成の期間がどのくらいの長さであったかは知ることができないが、その間の海岸線は安定すなわち海水準は停滞していたと考えられる。Ⅷ層の標高を考慮すると現在よりも数m低かった可能性がある。そして、その期間のある時期に、バーム上では人間活動があり、獣骨や土器（爪形文や薄手）などを残し、さらに人の埋葬も行われた。その後の暴浪堆積によりこれらの遺物や遺構が埋積されて、Ⅷ層中のシルト薄層として残存した。この遺物包含層を形成した期間は、暴浪と暴浪の間のことであるから、数千年というスケールからみればほんの瞬間の出来事であったかも知れない。

〈六〇〇〇～五〇〇〇年前頃〉

Ⅷ層の上位に堆積するⅦ層は、Ⅷ層と同様にサンゴ礫を主体とする堆積物であるが、その堆積構造から前浜（低潮時の波の遡上開始点から高潮時の波の遡上限界までの領域）で形成される比較的勾配の急な斜面（beach face）とそれに続く緩斜面（lowtide terrace）を構成する堆積物であると考えられる。すなわち、Ⅷ層からⅦ層への変化は、海進により後浜から前浜へと変化したことを反映していると考えられる。

Ⅷ層の前面（海側）には、Ⅶ層と斜交する比較的急勾配の斜面が形成されているが、これは海進時の浸食性の波浪によりⅧ層が削られてできたスカープ（浜崖）といえる。Ⅷ層中の人骨は、スカープの斜面に露出した状態であり、浸食が偶然にも人骨のところで止まったために、流失することなく今日発見されるに至ったということになる。



砂浜海岸の縦断形（松田ほか編（1981）に加筆）

Ⅷ層の浸食からⅦ層の堆積への転換は、海進が停滞あるいは若干の海退に転じたことによると考えられる。Ⅶ層の堆積初期には、海浜後方の丘陵で土砂の崩落が発生し、我部層を構成する段丘礫を含む土石流が谷を流下し、海浜にまで到達したことが推定される。海浜に達した土石流堆積物は、堆積後に受けた波浪の作用により、細粒の砕屑物はほとんど流失してしまい、波浪が運びきらなかった巨礫や大礫がⅦ層中に残存することとなったと考えられる。そして、このような土石流堆積物も含んだ前浜におけるⅦ層の堆積の進行により、そこにはⅧ層とⅦ層からなる離水した高まり、すなわち浜堤が出現した。浜堤によって出口を塞がれた谷底には低湿地が形成され、谷周囲の砕屑物や植物遺体等が流れ込むことにより4層が堆積したと考えられる。また、浜堤の海側には前浜がまだ広がっており、そこでは初生ビーチロックが形成されたと考えられる。

なお、Ⅶ層中には曽畑式や室川下層式の土器片が包含されているが、Ⅶ層の形成されていた時期の谷周囲や海浜で使用されていたものであろう。

〈五〇〇〇～四〇〇〇年前頃〉

Ⅵb層はⅦ層とほぼ同様の堆積物と堆積構造であることから、Ⅶ層と同様に前浜の堆積物であると考えられる。ただし、Ⅶ層とⅥb層とは斜交することから、一度小さな海進によりⅦ層前面が浸食された後に、再び停滞ないし海退に転じることによってⅥb層が形成されたと考えられる。また、Ⅵb層は、巨礫や大礫を含むこともⅦ層と同様であり、土石流の堆積があったことも示唆される。

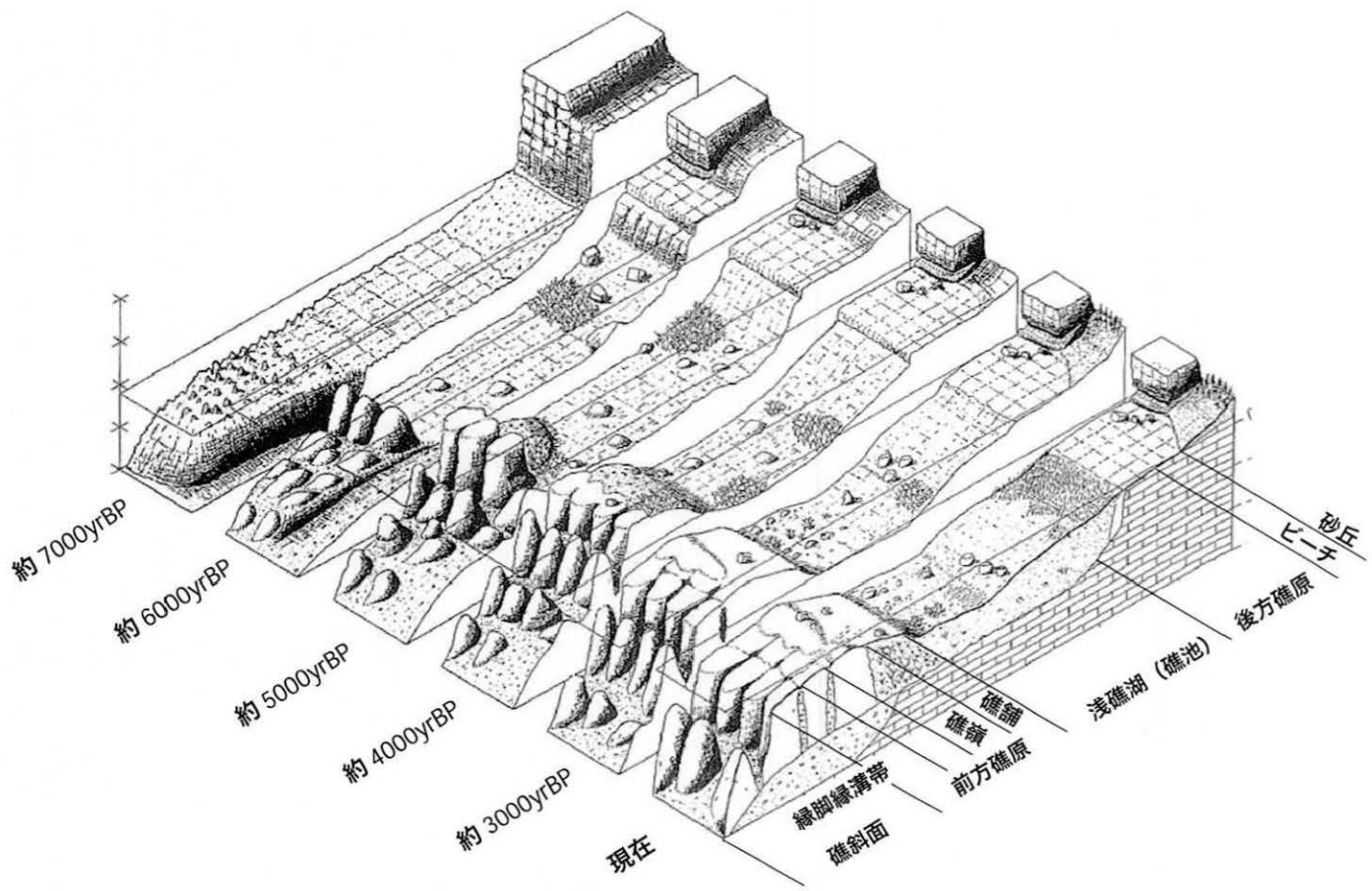
Ⅵb層の上位のⅥa層は、Ⅵb層とは漸移的であることとその層相から、後浜でも粗粒の礫が達しないような陸側最奥部、さらには離水浜堤上に風成砂が堆積するにいたる範囲で形成された堆積物である可能性がある。すなわち、Ⅵb層からⅥa層への変化は、陸側からみた海岸線の後退を示していると考えられる。

なお、この時期には、Ⅶ層形成時期に出現した浜堤背後の低湿地は4層により埋積され、谷底斜面になっていたと考えられる。谷内には砕屑物が堆積するよりも、雨水等で流失するものが多く、この時期の堆積物はほとんど残されていない。

〈四〇〇〇～三〇〇〇年前頃〉

Ⅴ層は、Ⅵb層およびⅦ層とほぼ同様の堆積物と堆積構造であることから、Ⅶ層と同様に前浜の堆積物であると考えられる。したがって、Ⅵa層を形成した陸側の環境から一転して前浜となる、すなわち海進があったことが推定される。その海進によってⅥa層前面が浸食された後に、再び海退に転じることによってⅤ層が形成されたと考えられる。

Ⅴ層の上位に堆積するⅣ層は砂層となるが、Ⅴ層とは整合である。また、Ⅳ層以上にはⅤ層以下のようなサンゴ礫層は認められず、後述するように海進を示唆する堆積物も認められない。現在の海水準がⅤ層付近にあることを考慮すると、Ⅴ層形成時の海水準が南西諸島の完新世における最高位に相当する可能性がある。したがって、南西諸島における完新世の海進は、Ⅷ層からⅥ層までを形成したような小さな海進と海退を繰り返しながら、進行していた様相が窺える。なお、木庭（一九九〇）による南西諸島の完新世の海水準変動曲線では、最大海進時の海水準は現在よりも一m程度ないしほとんど同じとしており、その年代は約三五〇〇年前としている。大堂原貝塚におけるⅧ層



琉球列島における完新世サンゴ礁の形成過程模式図（米倉ほか, 2001）

からⅢ層に至る変化は、この曲線と非常に調和的である。

また、Ⅳ層は後浜におけるバームを形成した砂層であると考えられるが、Ⅷ層やⅥ層のような礫からなるバームが形成されなかったことから、この頃（三〇〇〇年前頃か）に、サンゴ礁による消波構造が形成された可能性がある。サンゴ礁による消波構造が形成される前の状態は、外洋からの波浪が直接海岸に打ち寄せる状況すなわち完新世高エネルギーウィンドウとよばれており、一般に海崖の浸食や礫浜の形成、浸食平坦面の形成などが活発であったとされている（米倉ほか、二〇〇一）。Ⅷ層からⅤ層にいたる礫層は、完新世高エネルギーウィンドウにおいて形成された礫浜の堆積物であり、Ⅳ層以上は完新世高エネルギーウィンドウ閉塞後の堆積層であると考えることができる。なお、南西諸島で完新世サンゴ礁が海面に達する（礁嶺の形成）時期は、島によって約六五〇〇年前から三五〇〇年前までの間で異なっている（米倉ほか、二〇〇一）が、屋我地島のサンゴ礁は、その中でも最も新しい部類に入ると言える。

Ⅳ層からなる後浜には、伊波・荻堂式土器を使用していた人間により遺物が残された。

〈三〇〇〇～二〇〇〇年前頃〉

海水準の安定により、Ⅳ層の後浜堆積物は、やがて風成砂が堆積する砂丘となり、Ⅲb層へと変化する。砂丘の発達により、陸側の背後には低湿地が形成され、そこには谷周囲からの砕屑物が流れ込み、3層が堆積した。4層に比べると、細礫など粗粒の砕屑物も多く、酸化鉄が顕著であり、全体的に土壌化していることから、かつて浜堤背後に形成された低湿地に比べると、この時期の砂丘背後の低湿地は埋積と乾燥化が速かったことが推定される。

〈二〇〇〇年前以降〉

おそらく二〇〇〇年前頃には、砂丘の形成が止まり、砂丘上面には土壌が形成されたと考えられる。これがⅢa層である。この頃には、砂丘上面での人間活動も活発となり、様々な遺構や弥生土器や人骨を含む様々な遺物が残されている。

その後も周囲の丘陵に由来する砕屑物を主な母材とする累積性の土壌の形成が進行し、砂丘上にはⅡ層が形成され、背後の低地には2層が形成された。Ⅱ層および2層の形成により、砂丘は埋没し、その地形も不明瞭となって、発掘直前の地形すなわち丘陵から海岸へ続くなだらかな斜面という景観に至っている。

なお、大堂原貝塚の放射性炭素年代測定結果を下表に示す。近年、放射性炭素年代の及ぶ数万年以降についても酸素同位体ステージとの対比の必要から、放射性炭素年代測定が内包する実際の年代とのずれを較正した較正暦年で示されることが多い。しかし、本項では較正するための条件が揃っていない測定値も多いため、暦年を示すことはしない。

引用文献

神谷厚昭.2001.屋我地島の地形と地質.沖縄県立博物館紀要,27,15-28.

木庭元晴.1990.琉球列島第四紀のサンゴ礁形成と島弧変動.サンゴ礁地域研究グループ編　日本のサンゴ礁地域1　熱い自然－サンゴ礁の環境誌.古今書院,155-175.

米倉伸之・貝塚爽平・野上道男・鎮西清高.2001.日本の地形1　総説.東京大学出版会,349p.

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

放射性炭素年代測定結果

層位	試料の種類	採取地点	備考	放射性炭素年代 BP	δ 13C (‰)	Lab-No.	測定日	測定法
2a	暗灰色粘土質シルト	ふ－100試掘坑	花粉がわずかに検出	630 ± 190	(－ 25.0)	PAL-477	1999.5.20	β線
Ⅱ層同時期	人骨			930 ± 30	－ 15.0	IAA-61600	2006.12.13	AMS
	人骨			910 ± 47	－ 14.6	－	－	AMS
	人骨			939 ± 46	－ 13.6	－	－	AMS
Ⅲa上位	炭化粒	そ－92	溝堆積物No.9（下部）	1,800 ± 90	－ 28.0	TKa-12221	2001.9.13	AMS
	シャコ貝貝殻	せ－92	溝底直上	2,460 ± 70	2.0	TKa-12222	2001.9.13	AMS
Ⅲa	炭化粒	そ－92	溝地山上面	1,870 ± 70	－ 26.5	TKa-12223	2001.9.13	AMS
	貝（サラサバテイ）	す－102	北壁①	2,170 ± 50	(0.0)	PAL-652	2000.6.30	β線
	炭化物	す－102	北壁②	1,660 ± 80	－ 27.2	TKa-11875	2000.7.18	AMS
Ⅲb	貝（イモガイ）	し－99・100	イモガイ集積	2,660 ± 80	3.0	TKa-12775	2001.9.13	AMS
				2,750 ± 50	(0.0)	PAL-653	2000.9.30	β線
	炭化材	つ－91	集石遺構	3,520 ± 30	－ 25.6	TKa-13835	2006.9.10	AMS
Ⅳ	黒色シルト混じり砂	し－102	炉跡	4,620 ± 100	(－ 25.0)	PAL-658	2000.6.30	β線
Ⅵa	貝（シャコ）	こ－101	ビーチロック下（EL39cm）	4,750 ± 70	2.0	TKa-12776	2000.6.13	AMS
				4,810 ± 60	(0.0)	PAL-654	2000.6.30	β線
Ⅵ～Ⅶ	微細炭化物	ち－91	黒色帯直下	5,260 ± 70	－ 29.2	TKa-12224	2001.9.13	AMS
	炭化粒	ち－92	黒色帯下位の黄褐色砂質シルト層中	4,660 ± 70	－ 27.3	TKa-12225	2001.9.13	AMS
	黒色シルト混じり砂	こ－101南壁	黒色帯	5,930 ± 130	(－ 25.0)	PAL-657	2000.6.30	β線
4	板材	ち－95	樹種：ヤマグワ	5,580 ± 35	－ 28.1	TKa-13833	2006.3.10	AMS
	炭化材	ち－95	細片	4,940 ± 35	－ 29.9	TKa-13834	2006.3.10	AMS
Ⅶ	貝（シャコ）	こ－101南壁	EL13cm	5,430 ± 90	2.2	TKa-11852	2000.6.13	AMS
				5,360 ± 50	(0.0)	PAL-655	2000.6.30	β線
	貝（シャコ）	こ－101南壁	EL-23.5cm 採取個体の腹縁部	5,680 ± 70	3.8	TKa-12777	2000.6.13	AMS
				5,740 ± 70	2.6	TKa-11853	再測定	AMS
			EL-23.5cm 採取個体の殻頂部	5,750 ± 80	2.6	TKa-12778	2000.6.13	AMS
			EL-23.5cm 採取個体腹縁部および殻頂部	5,620 ± 60	(0.0)	PAL-660	2000.6.30	β線
	貝（シャコ）	こ－101南壁	EL-30cm	5,920 ± 80	2.2	TKa-12779	2000.6.13	AMS
				5,860 ± 60	(0.0)	PAL-659	2000.6.30	β線
Ⅷ	土器付着物	け・こ-101	胎土分析試料番号a（薄手）	5,870 ± 70	(－ 25.0)	TKa-11891	2000.7.21	AMS
				5,920 ± 80	(－ 25.0)	TKa-11893	2000.7.21	AMS
	土器付着物	こ－101	胎土分析試料番号b（薄手）	5,930 ± 90	(－ 25.0)	TKa-11880	2000.7.18	AMS
	土器付着物	さ－100	胎土分析試料番号22（条痕文）	5,970 ± 80	－ 27.4	TKa-12595	2003.5.6	AMS
	土器付着物	し－100	胎土分析試料番号23（薄手）	5,930 ± 60	－ 26.8	TKa-12560	2003.5.6	AMS
	土器付着物	さ－99・100	胎土分析試料番号37（薄手）	5,810 ± 80	(－ 25.0)	TKa-12561	2002.9.28	AMS
	炭化材	け・こ-101	EL-75～-87cm	6,060 ± 90	－ 28.4	TKa-11876	2000.7.18	AMS
	炭化材	け・こ-101	EL-96.5～-134cm	6,150 ± 90	－ 26.6	TKa-11877	2000.7.18	AMS
	炭化材	こ－101	炭多し	6,060 ± 80	－ 26.6	TKa-12780	2000.7.18	AMS
	炭化材	さ－100	炭多し	6,050 ± 80	－ 26.3	TKa-12781	2000.7.18	AMS
	人骨			6,233 ± 58	－	－	－	AMS
	人骨			6,188 ± 57	－	－	－	AMS

※年代は同位体補正を行ったもの。
※δ13Cが測定不能および未測定の試料について、炭化物はδ13C=－25.0として計算し、貝等海産物はδ13C=0.0として計算した。

大堂原貝塚の層序

14C年代(BP)	出土土器型式	海水準変動	海浜						谷底低地				谷側壁斜面	
			層名	堆積物	堆積構造など	地形	特記事項	環境	層名	堆積物	特記事項	環境	層名	特記事項
			I							細礫混じり砂質シルト（褐灰色）	現表土	盛土・耕作土	I	
1000	弥生土器	停滞	II	細礫混じり砂質シルト（赤褐色）	土壌	丘陵から海岸へ続く緩斜面	近世の遺物	斜面地	2 a	粘土質シルト（褐色）	土壌	耕作地？	2a	
									2 b	粘土質シルト（黒褐色）			2b	
			III a	シルト質砂（暗灰褐色）	土壌化	砂丘	縄文晩期～弥生の遺物多量、軽石の堆積	砂丘の固定	3 a	細礫混じりシルト（灰褐色）	斑状の酸化鉄多量に含む、海側で軽石の堆積	低湿地（谷周囲からの砕屑物供給多い→乾燥化）		
2000			III b	砂（赤褐色）	構造不明瞭		人骨出土、溝跡の検出	砂丘	3 b	細礫混じりシルト（褐灰色）	酸化鉄少量			
3000	伊波・荻堂式	海退			整合									
			IV	粗砂～中砂（白色）	構造不明瞭	バーム（砂質）～砂丘		前浜→後浜→砂丘				谷斜面（堆積よりも侵食が卓越）		
	具志川式 面縄前庭式			初生ビーチロック	整合	（礁嶺の形成）								
			V	サンゴ片含む砂礫	構造不明瞭	beach face, lowtide terrace								
					斜交	スカープ								
	条痕文	海進 (海進)	VI a	粗砂～中砂（白色）	構造不明瞭	バーム（砂質）	集石炉跡の検出	前浜→後浜						
4000		(海退)	VI b	サンゴ片主体の礫	海側に傾斜する平行葉理	beach face, lowtide terrace	土石流による巨礫・大礫の堆積							
		(海進)		初生ビーチロック	斜交	スカープ								
	室川下層式 曽畑式	(海退)	VII	サンゴ片主体の礫	海側に傾斜する平行葉理	beach face, lowtide terrace →浜堤	土石流による巨礫・大礫の堆積	前浜→後浜→浜堤	4	極粗砂～粗砂混じり粘土（灰色）	炭化物多量に含む	低湿地		
5000		(海進)			斜交	スカープ								
	爪形文 薄手式	(停滞)	VIII	サンゴ片主体の礫	ほぼ水平な平行葉理	バーム（礫質）	人骨（埋葬）、獣骨、土器、石器を含む遺物包含層狭在	後浜						
6000													マージ	チャート製石器出土
													石灰岩	
基盤			IX（泥岩・島尻層群）											

二、層序

今回の調査で海浜部から谷部までの層序が確認された。海浜部と谷部では地質層序が異なるため、層名を区別する。但し、「客土」、「かく乱」、「Ⅰ層」については、海浜部と谷部ともにそれぞれ共通する。Ⅰ層以下は、海浜部がローマ数字、谷部がアラビア数字を用いて記述する。海浜部と谷部それぞれの代表的な断面図を示した。以下、層序について概要を述べる。

海浜部

さ・し－101　東壁

Ⅰ層
現表土。褐色土。

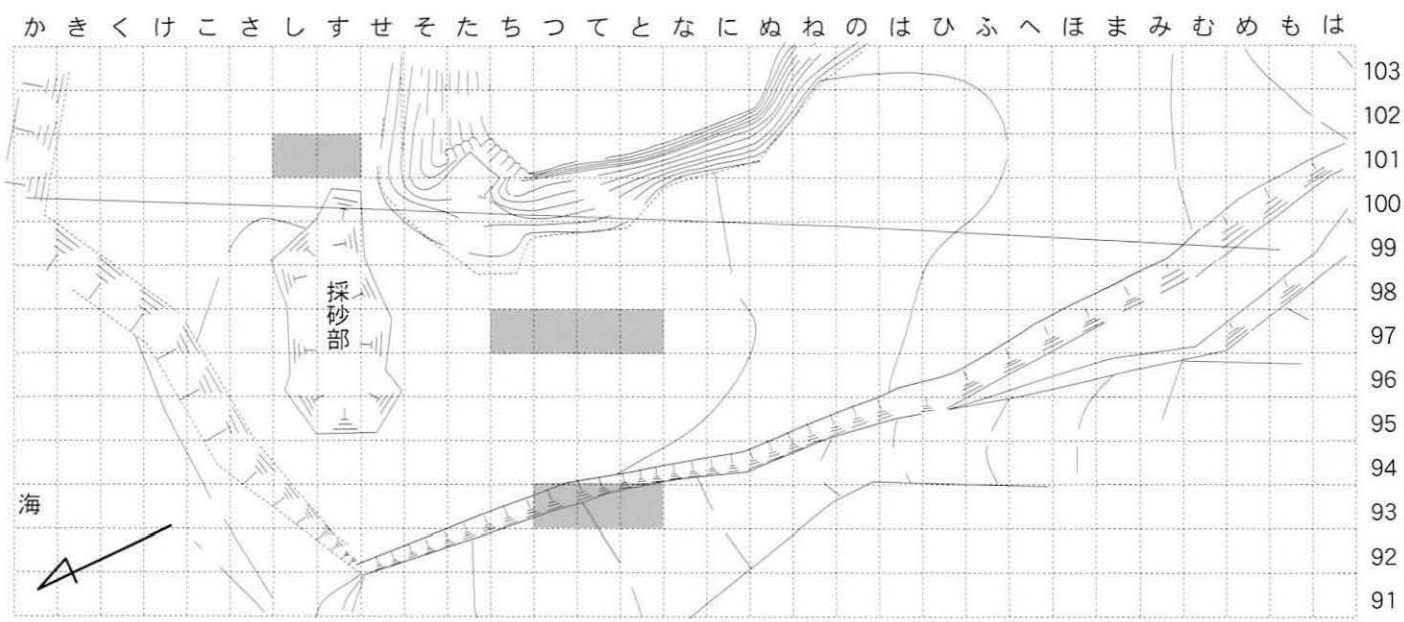
Ⅱa層
暗黄褐色混砂土。沖縄産陶器や弥生～平安時代並行期の土器を含む。

Ⅱb層
茶褐色混砂土で、部分的に礫が混入する。沖縄産陶器や弥生～平安時代並行期の土器を含む。

Ⅲa層
茶褐色混砂土～暗茶褐色砂からなる土壌で、礫、貝、土器が多く混入する。弥生～平安時代並行期の土器を含む。

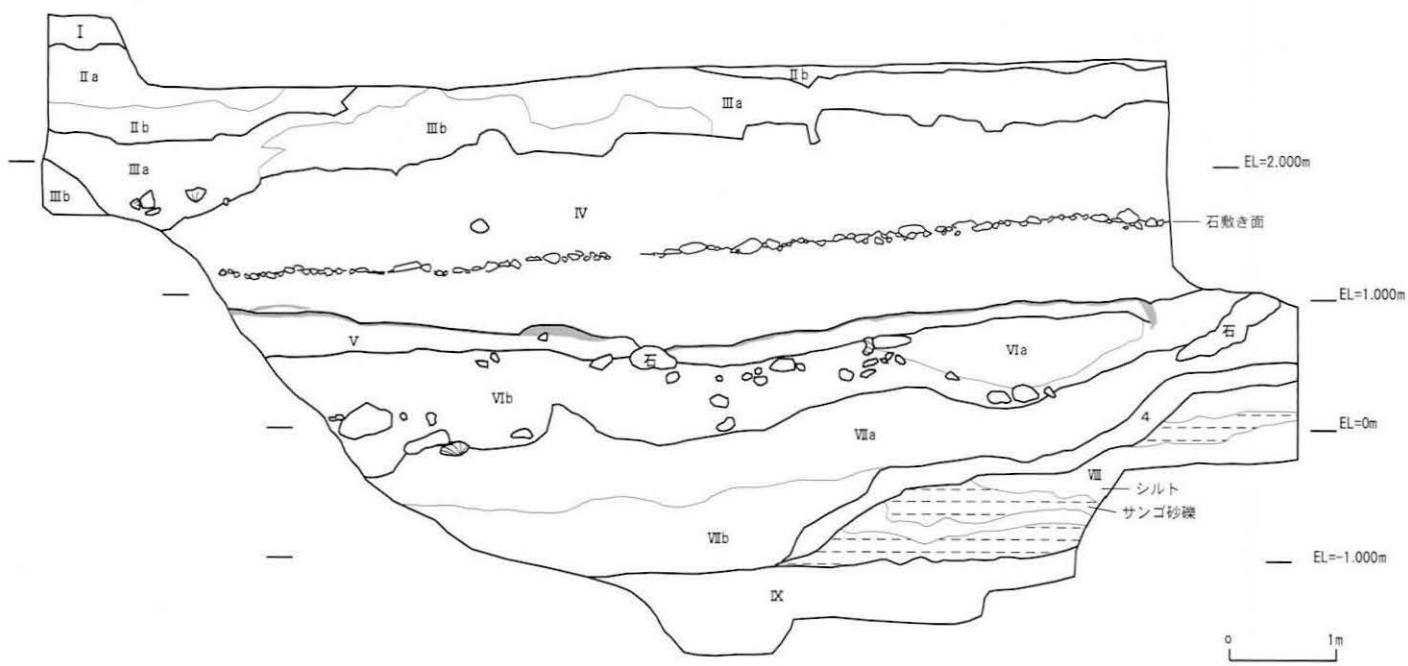
Ⅲb層
赤褐色～黄褐色細粒砂。弥生～平安時代並行期の土器を含む。

Ⅳ層
白色細粒砂。貝、礫の混入が少ない。層中位に石が敷かれたような面がみ



層序断面位置図

さ・し－101東壁



られたが、遺跡に隣接する海岸にて同様な面が広範囲に確認されたため、石敷きは人工ではなく、自然形成と判断した。自然に形成された石敷き面の下からは、砂の粒子がやや粗くなる。本層から集石炉が検出される。土器は縄文時代後期の土器を主体に含むが、一部、弥生～平安時代並行期の土器を含む。

Ⅴ層
赤褐色粗粒砂。層上面にはビーチロックが確認される。縄文時代後期の土器を含むが、曽畑式土器、室川下層式土器、条痕文土器など縄文時代前期の土器が増加し始め、主体を占める。

Ⅵａ層
白色中粒砂。枝サンゴの混入は少ない。部分的に赤褐色および灰色を帯びる。曽畑式土器、室川下層式土器、条痕文土器など縄文時代前期の土器を主体に含む。縄文時代前期の土器出土数は、本層が最も多い。その他、縄文時代中期の面縄前庭Ⅰ～Ⅲ式土器を含む。

Ⅵｂ層
黄灰色～灰白色中粒砂。枝サンゴ、貝、中～巨礫が多く混入する。出土土器は、Ⅵａ層と同様。

Ⅶａ層
黄褐色粗粒砂。枝サンゴを多く混入する。曽畑式土器、室川下層式土器、条痕文土器など縄文時代前期の土器を主体に含み、なかでも曽畑式土器がⅤ層およびⅥ層と比べて増加する。爪形文土器を僅かに含む。

さ－101東壁Ⅰ層～Ⅳ層中面

し－101東壁Ⅱ層～Ⅳ層上面

さ・し－101東壁Ⅳ層下面～Ⅸ層

Ⅶb層
灰白色砂層。枝サンゴ、中礫を混入し、部分的に上位の黄褐色を帯びる。曽畑式土器、室川下層式土器、条痕文土器など縄文時代前期の土器を主体に含み、なかでも曽畑式土器がⅤ層およびⅥ層と比べて増加する。薄手土器、爪形文土器も含む。

4層
赤褐色シルト層。部分的に〇・五～一cm大の枝サンゴや礫が混入する。谷部の堆積層と考えられる。

Ⅷ層
暗茶褐色シルト及びサンゴ砂礫層。シルトの下にサンゴ礫が交互に確認される。薄手土器を最も多く含み、細沈線文土器は本層でのみ出土する。爪形文土器を僅かに含む。

Ⅸ層
灰緑色シルト層。層中位にサンゴ砂礫を狭在する。薄手土器を僅かに含む。

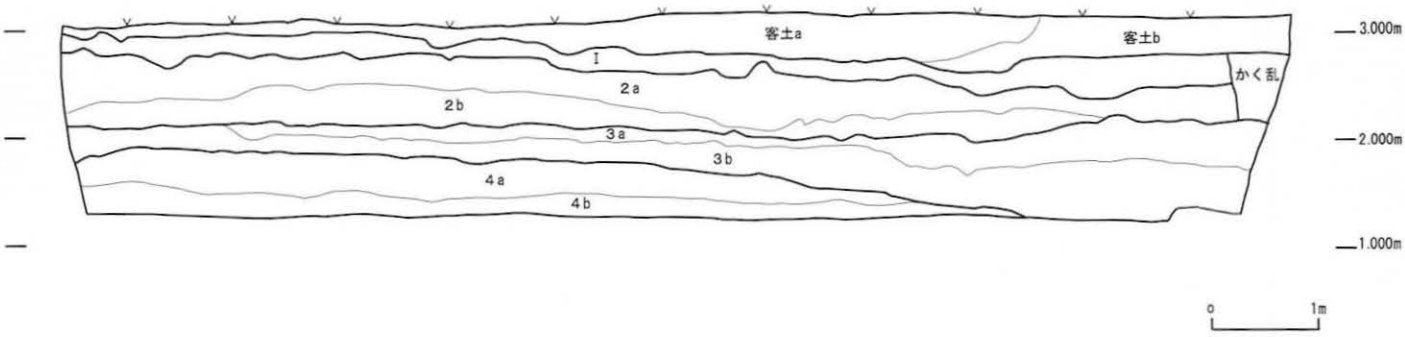
谷部
ち・つ・て-97　西壁

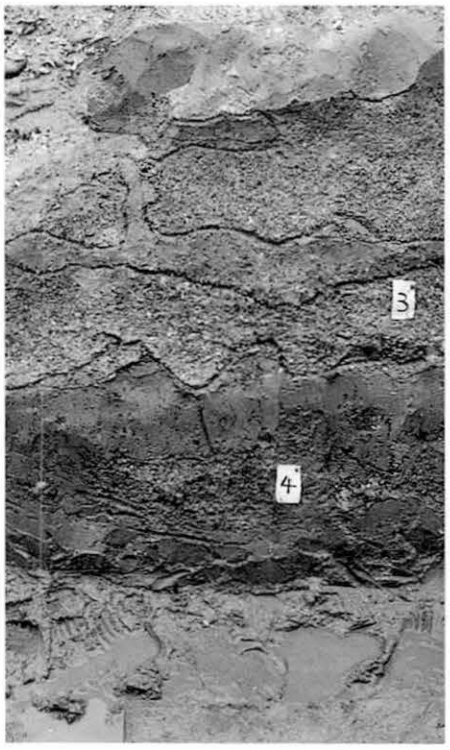
客土a
現表土。現代の盛土で、黄褐色土に軽石が多く混入する。

客土b
客土aと同じく現代の盛土であるが、褐色砂で軽石は混入しない。

Ⅰ層
旧表土と考えられる層で、褐色土である。

ち・つ・て－97西壁





さ・し－101東壁Ⅳ層～Ⅸ層（部分拡大）

同左

さ・し－101Ⅳ層石敷面

2a層
褐色～赤褐色粘土質シルトからなる土壌で、耕作による撹乱を受ける。沖縄産陶器や弥生～平安時代並行期の土器を含む。出土遺物は、海浜部のⅡ層と同時期である。

2b層
黒褐色～茶褐色粘土質シルトからなる土壌で、耕作による撹乱を受ける。焼土粒および炭化粒が少量みられる。沖縄産陶器や弥生～平安時代並行期の土器を含む。出土遺物は、海浜部のⅡ層と同時期である。

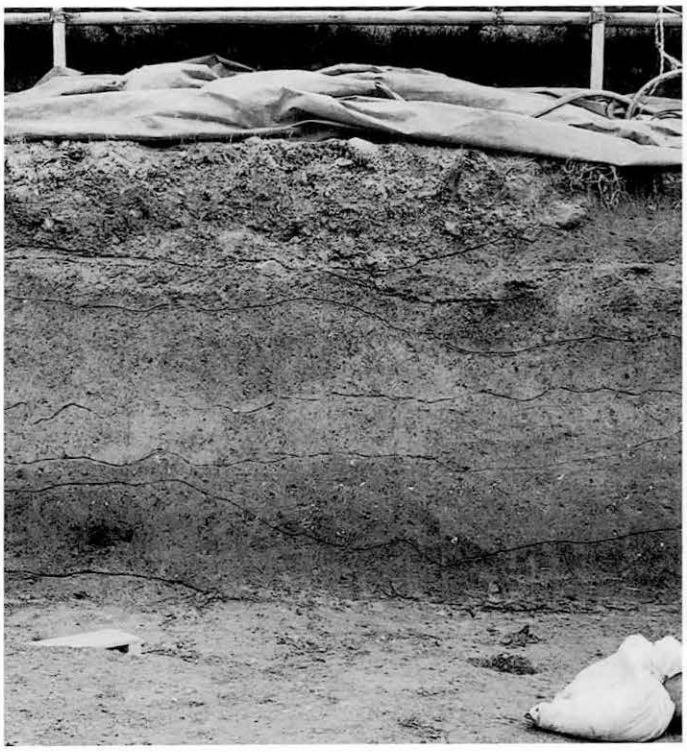
3a層
茶褐色～黒褐色シルト質の土壌で、礫、酸化鉄、貝殻が多く混入する。弥生～平安時代並行期の土器を含む。出土遺物は、海浜部のⅢ層と同時期である。

3b層
黒褐色シルト質の土壌で、礫、酸化鉄、貝殻は3a層と比較すると少ない。弥生～平安時代並行期の土器を含む。出土遺物は、海浜部のⅢ層と同時期である。

4a層
赤褐色～黄褐色粘土層である。軽石が多く混入し、酸化鉄を多く含む。縄文時代後期の土器を主体に含む。出土遺物は、海浜部のⅣ層と同時期である。

4b層
緑黄褐色粘土層である。酸化鉄は部分的にみられるが、軽石は混入しない。縄文時代後期の土器を主体に含む。出土遺物は、海浜部のⅣ層と同時期である。

ち・つ・て－97西壁



ち・つ・て－97西壁（部分拡大）

ち・つ・て－97付近作業風景

谷部

つ・て・と-93　東壁

Ⅰ層
現表土。暗茶褐色土。

2a層
褐色～暗茶褐色粘土質シルトからなる土壌。一～二cmの礫が少量混入する。層の上部は道路工事によって大部分が削平される。沖縄産陶器や弥生～平安時代並行期の土器を含む。出土遺物は、海浜部のⅡ層と同時期である。

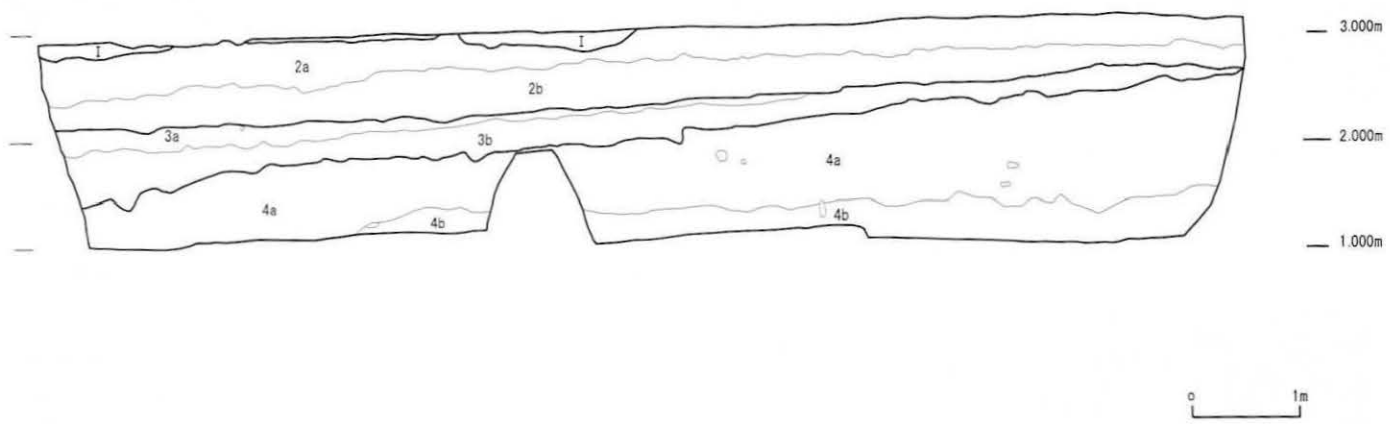
2b層
黒褐色～茶褐色粘土質シルトからなる土壌で、二～三cmの礫および貝が混入する。層の下部は比較的固く締まる土壌となる。弥生～平安時代並行期の土器を含む。出土遺物は、海浜部のⅡ層と同時期である。

3a層
黒褐色シルト質の土壌で、二～三cmの礫および貝が混入する。比較的固く締まる土壌となる。本層からピットが検出される。弥生～平安時代並行期の土器を含む。出土遺物は、海浜部のⅢ層と同時期である。

3b層
黒褐色シルト質の土壌で、締まりは3a層よりさらに固く、質感も細かい。本層からピットが検出される。弥生～平安時代並行期の土器を含む。出土遺物は、海浜部のⅢ層と同時期である。

4a層
淡褐色粘土層である。一〇～一五cm

つ・て・と－93東壁



つ・て・と－93付近

つ・て・と－93　3層

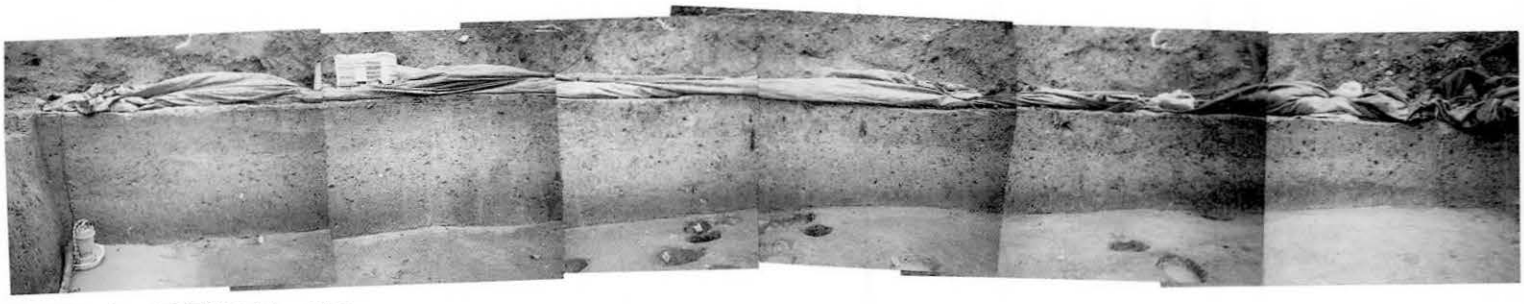
の礫が混入する。マンガンとみられる黒色の斑点が確認される。縄文時代前期の室川下層式土器および条痕文土器と縄文時代後期の土器が混在して出土する。また、弥生～平安時代並行期の土器も部分的に混在する。出土遺物は、海浜部のⅣ層、Ⅴ層、Ⅵ層、Ⅶ層と同時期である。

4b層

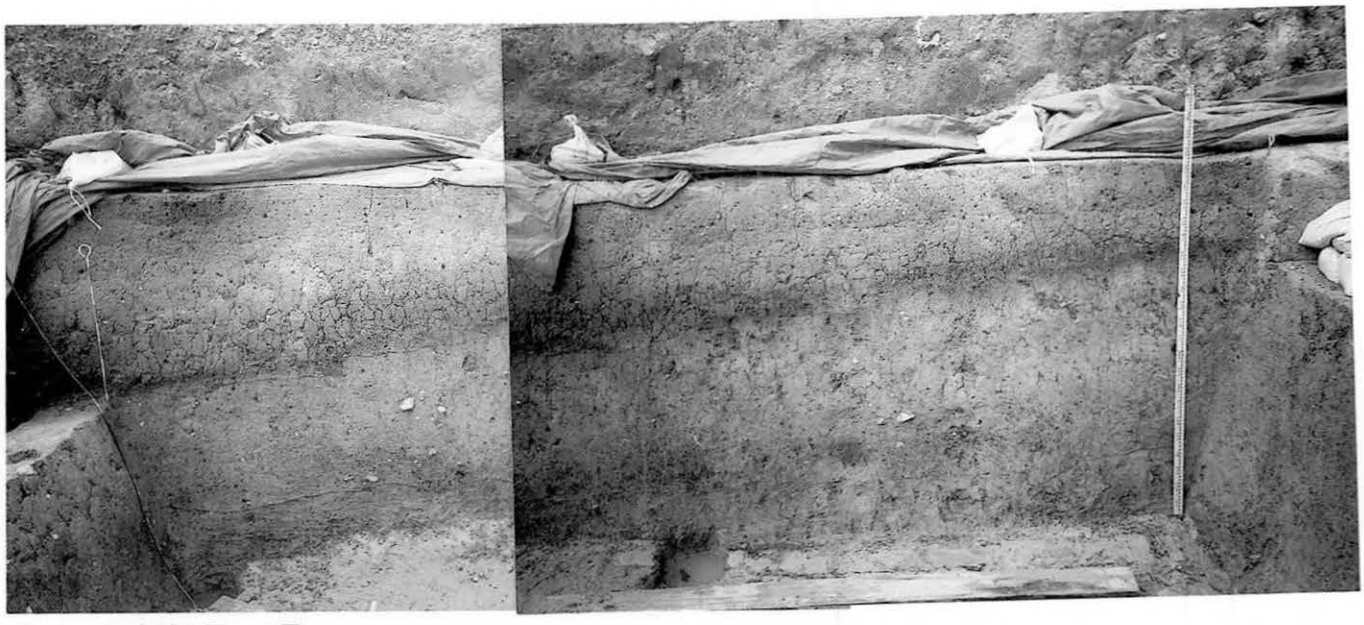
緑灰色混黄褐色粘土層である。縄文時代前期の室川下層式土器および条痕文土器と縄文時代後期の土器が混在して出土する。出土遺物は、海浜部のⅣ層、Ⅴ層、Ⅵ層、Ⅶ層と同時期である。

※Ⅴ・Ⅵ層

海浜部の層序において、土壌や出土土器がⅤ層とⅥ層で類似する箇所が存在した。そのようなⅤ層とⅥ層を明確に区別できなかった層をⅤ・Ⅵ層として出土遺物の項で扱った。



つ・て・と－93東壁Ⅰ層～3層

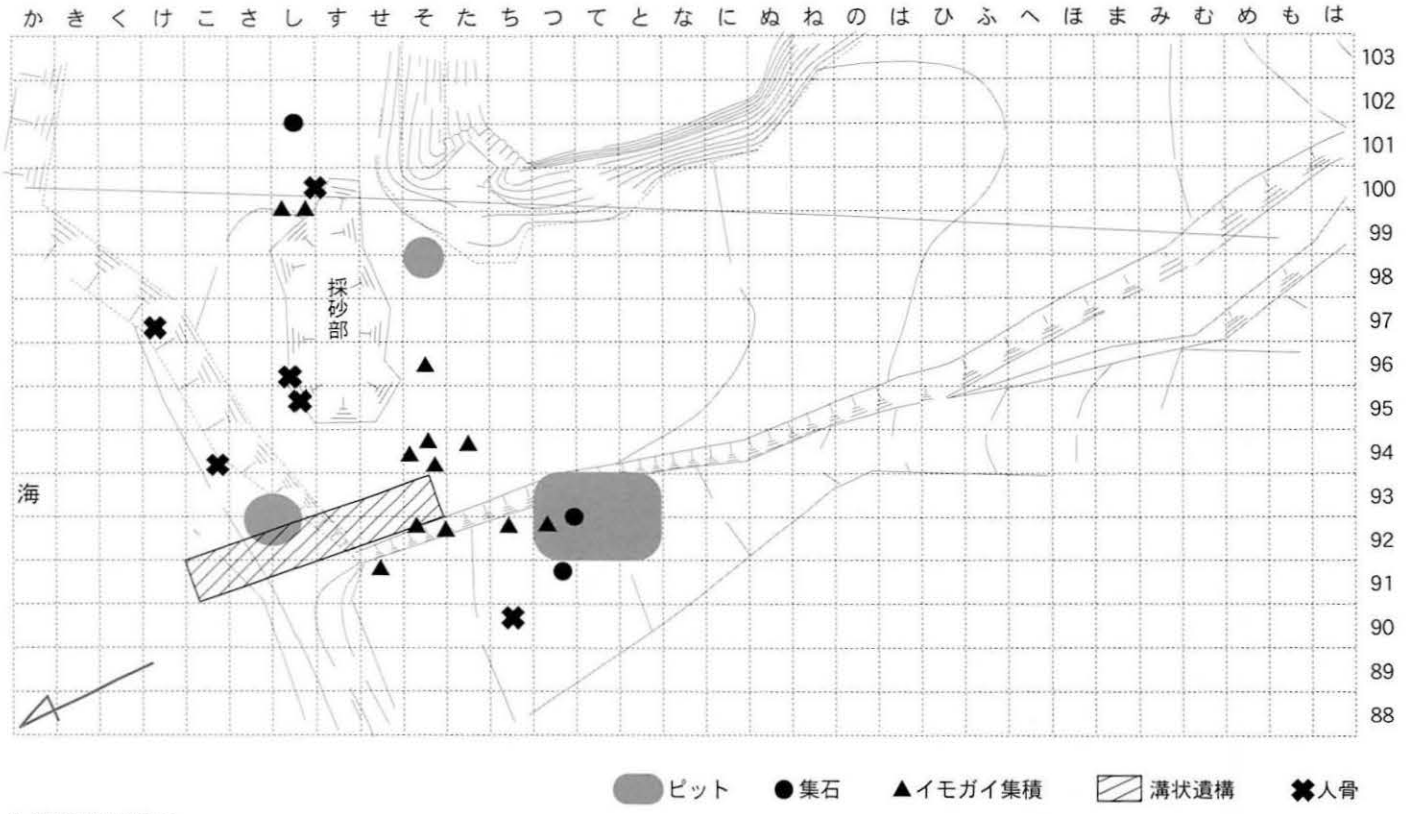


て・と－93東壁Ⅰ層～4層

第三節　遺構

大堂原貝塚から検出された遺構は集石炉、ピット、溝状遺構、貝集積、埋葬人骨である。それぞれの検出数は集石炉が三基、ピット一三五本、溝状遺構一本、貝集積一二基、埋葬人骨四体である。検出層は、集石炉がⅣ層およびⅢ層、ピットがⅢ層（3層含む）およびⅣ層、溝状遺構および貝集積がⅢ層である。埋葬人骨はⅧ層およびⅢ層から検出されている。なお、埋葬人骨については後述する第五節の人骨で詳細があるため、ここでは、人骨以外の遺構について概要を述べる。

つ・て・と－91・92・93検出遺構



全遺構検出箇所

し－96Ⅷ層検出の埋葬人骨

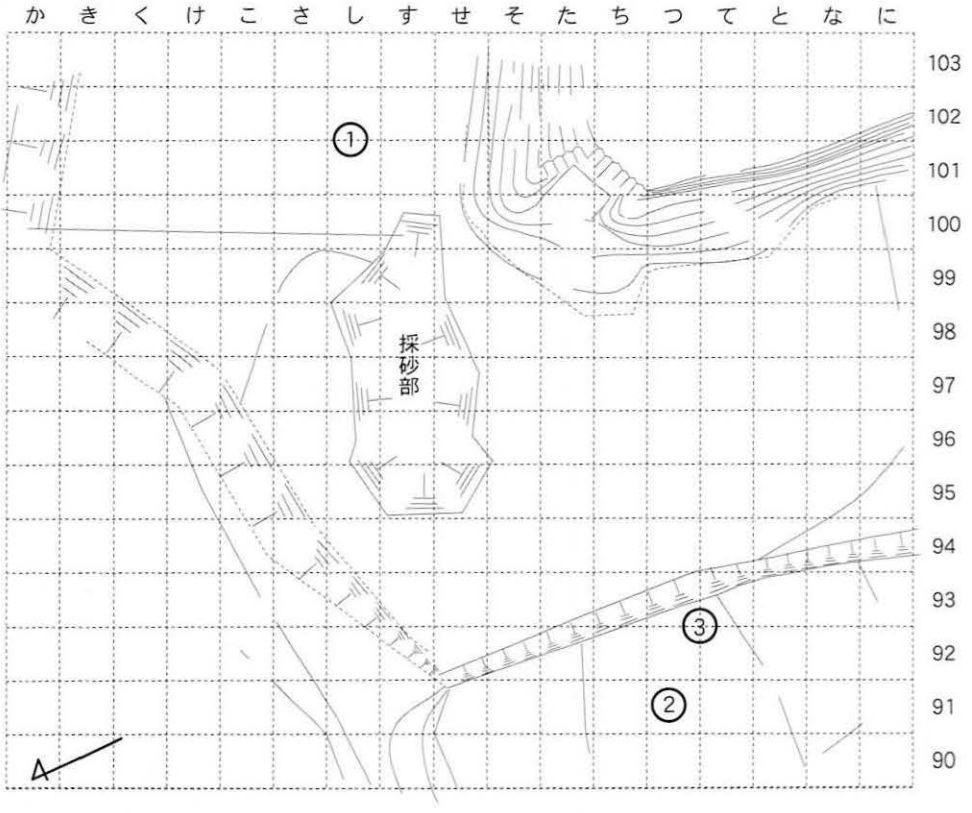
こ－94Ⅲ層検出の埋葬人骨

一、集石炉

集石炉と考えられる遺構が三基検出された。検出層は一基（1号集石炉）がⅣ層、残る二基（2号集石炉、3号集石炉）がⅢ層である。

以下、それぞれの集石炉の概要を述べる。

1号集石炉



集石炉検出箇所

3号集石炉

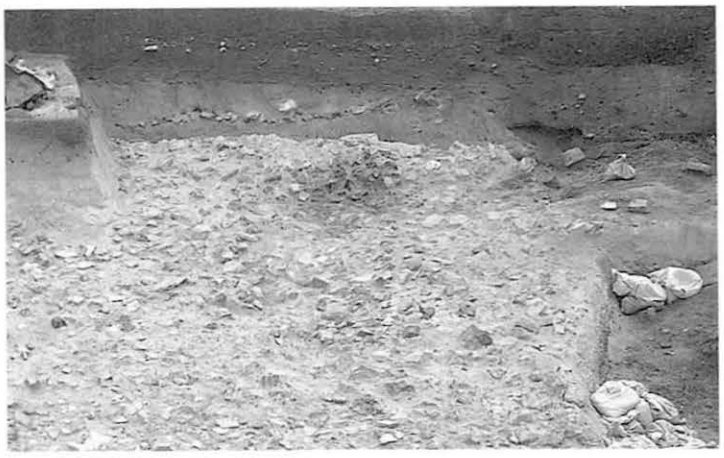
2号集石炉

1号集石炉

し－101・102で検出された遺構である。Ⅳ層の白色砂を約三四cm掘り込んで形成され、内部の土壌は黒褐色砂である。当遺構が検出された面は、当遺構も含めて白色砂に一〇～二五cmの角礫または、やや角のとれた隅丸の礫が広範囲にわたり確認されたが、当遺構のみ黒褐色砂を呈していた。遺構の平面は円形を呈し、長さは南北一一八cm、東西一一六cmである。

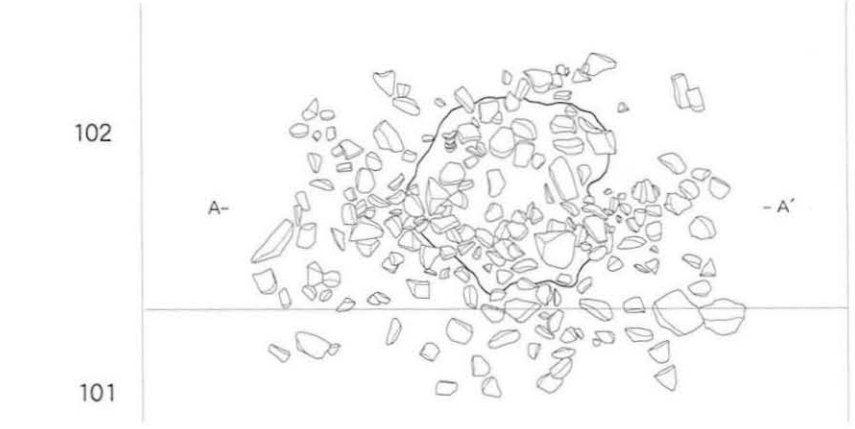
遺構内の出土遺物は炭化物、貝類、獣骨、イモガイ科製貝玉（P260図83）がふるいによって得られた。

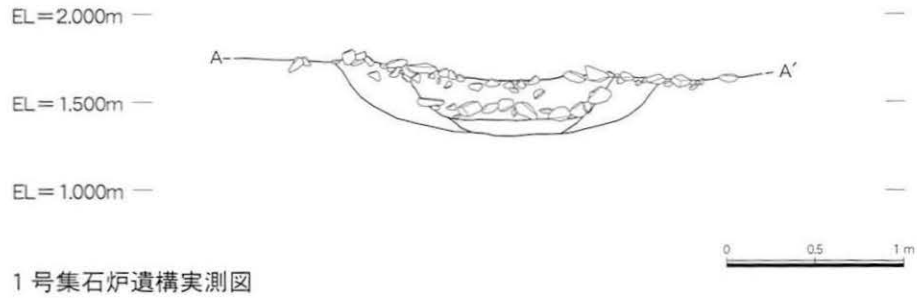
遺構内の堆積物を分析した結果、4620±100BPの数値が得られ、約四六〇〇年前の年代を示す。



1号集石炉検出状況

し





1号集石炉遺構実測図

1号集石炉完掘状況

1号集石炉平面および断面

2号集石炉

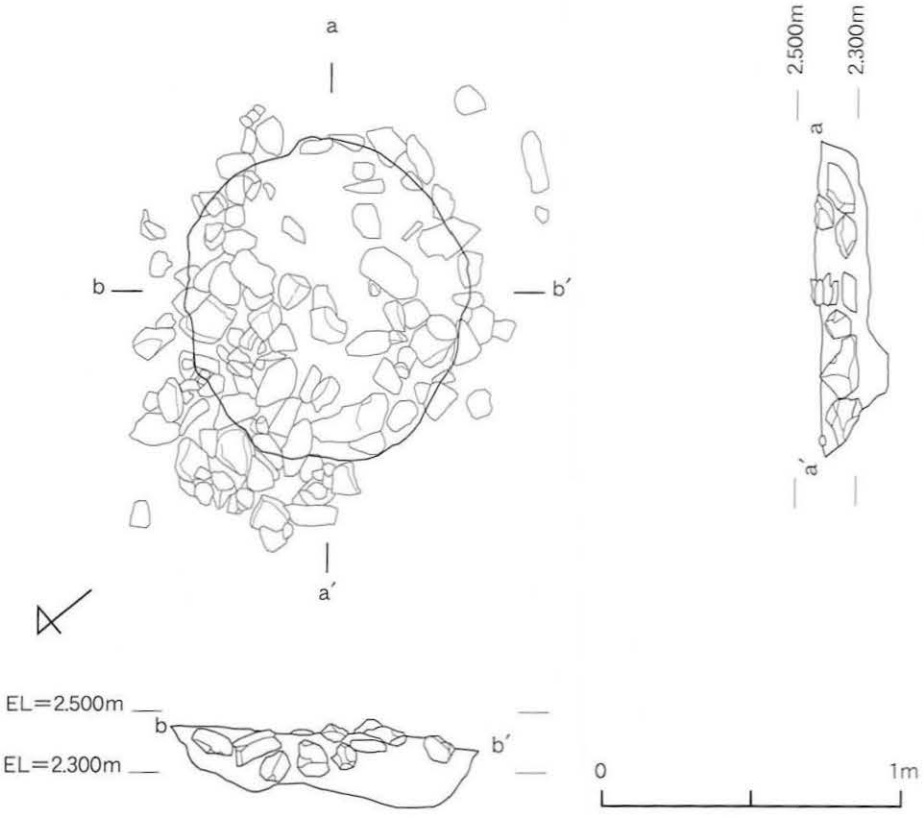
つ－91で検出された遺構である。Ⅲ層の赤褐色砂を約二五cm掘り込んで形成され、内部の土壌は黒褐色砂である。断面では確認できなかったが、上部の土壌は固く締まり、下部は脆く軟らかい。

配置された石は、角礫を使用する。石の並びや角度は一定ではないが、ＥＬ２３０cmより下方から石は検出されない。遺構の平面は円形を呈する。遺構の長さは、南北一〇三cm、東西一〇五cmである。

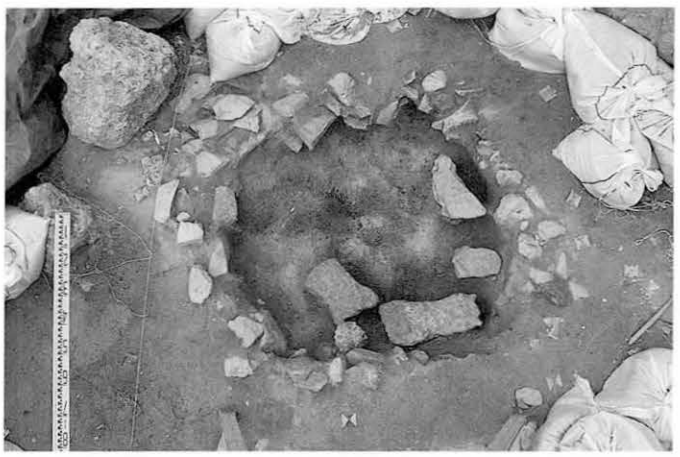
遺構内の出土遺物をみると弥生～古墳時代並行期の土器無文胴部がＥＬ２３６．４３～２３２．５１cmで二点出土している。

集石炉の炭化物を分析した結果、３５２０±３０ＢＰの数値が得られ、約三五〇〇年前の年代を示す。

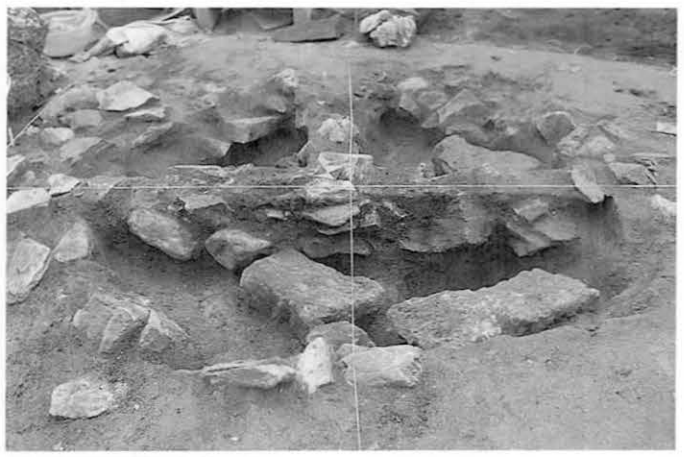
２号集石炉検出状況



２号集石炉遺構実測図



２号集石炉完掘状況



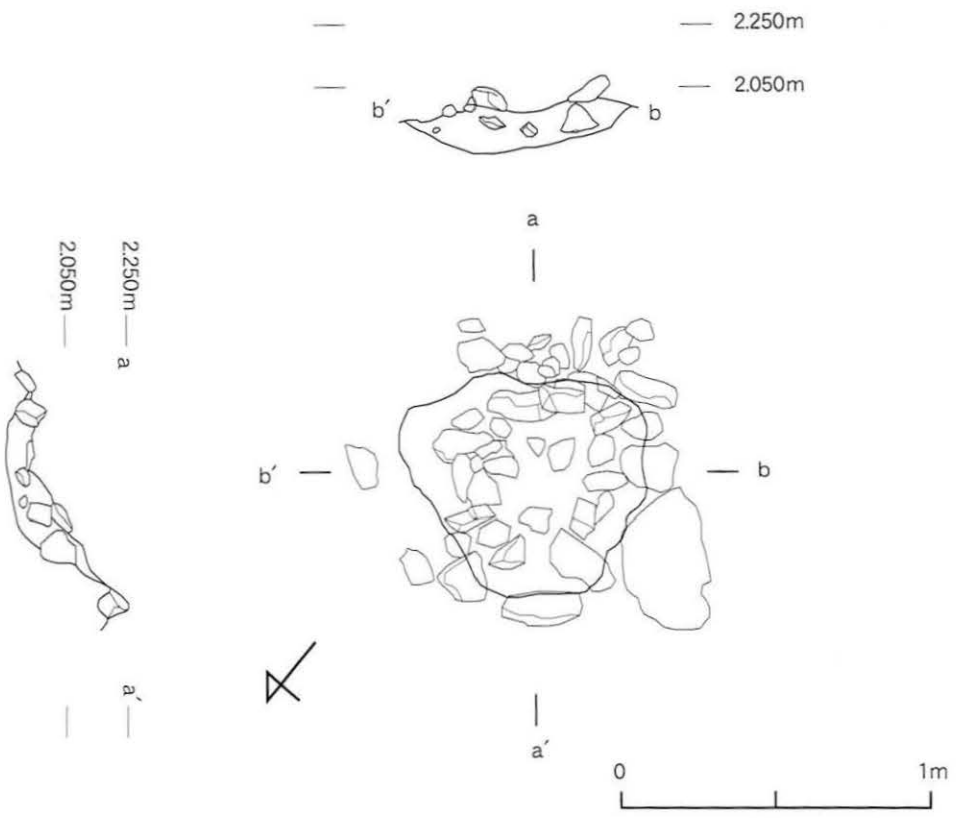
２号集石炉断面（a′－a）

3号集石炉

つ・て－92・93で検出された遺構である。Ⅲ層の赤褐色砂と暗褐色土を約一五㎝掘り込んで形成され、内部の土壌は黒褐色土である。配置された石は、2号集石炉跡と同様に角礫を使用し、石の並びや角度は一定ではない。遺構の平面形は隅丸台形状を呈し、遺構の長さは、南北七八㎝、東西八〇㎝である。

遺構内の出土遺物は確認されていないが、遺構が検出された同地区および同層からの出土土器をみると弥生～古墳時代並行期の土器が主体をなす。

3号集石炉検出状況



3号集石炉遺構実測図

3号集石炉完掘状況

3号集石炉断面（b－b′）

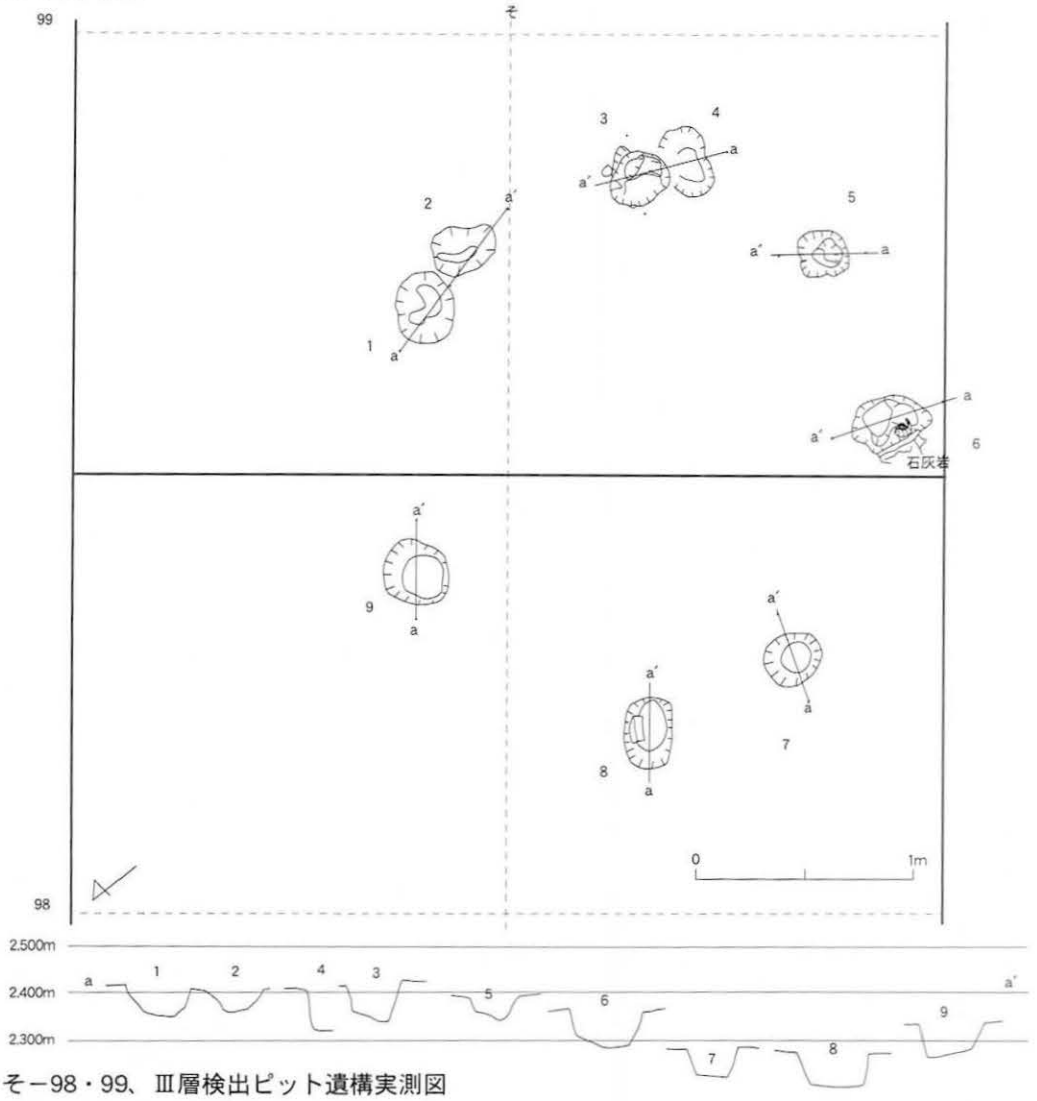
二、ピット

ピットと考えられる遺構が、検出された。検出層はⅢ層（3層含む）およびⅣ層である。但し、竪穴などは伴っていないため、その性格については不明である。以下、ピットの平面配列でプランの推測可能なものや、特徴的なピットについて概要を述べる。

そ－98・99　Ⅲ層

そ－98・99、Ⅲ層の暗褐色砂の面で検出された遺構である。直径二〇～三〇cmのピットが九本検出され、最も深いもので二一・五cm、浅いもので一〇cm、平均すると一四・五cmを測る。竪穴等は検出されなかったが、ピットの配列は円形を呈し、ピット間の径が一五〇cm×一八〇cmであることから、何らかの小規模な施設があったと推測される。遺構の実測図及び各々のピットの情報は下に示した。

そ－98・99Ⅲ層ピット検出状況



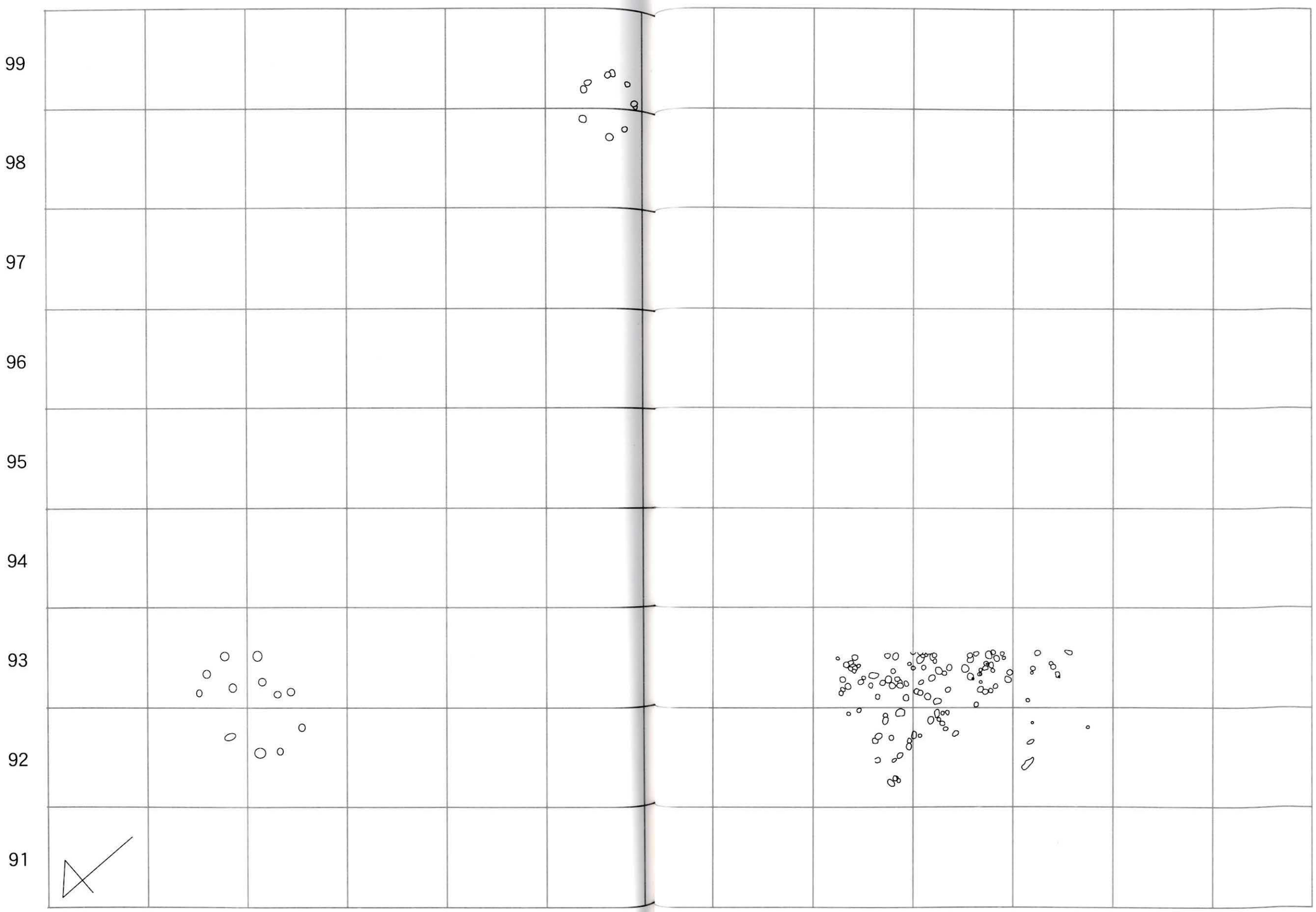
そ－98・99、Ⅲ層検出ピット遺構実測図

そ－98・99Ⅲ層検出ピット観察表

ピット番号	地区	縦の径(cm)	横の径(cm)	深度(cm)	土色	出土遺物	備　考
1	そ-99	30	24	13.5	暗褐色砂	貝・土器	－
2	そ-99	27	21	13	暗褐色砂	貝	－
3	そ-99	30	24	13.5	暗黄褐色砂	貝・土器	ピット４を切る
4	そ-99	30	－	21.5	暗褐色砂	貝・土器	ピット３に切られる
5	そ-99	22	24.5	10	暗褐色砂	貝・土器	－
6	そ-98	30	20	16.5	暗黄褐色砂	貝・土器・軽石	ピットの縁の一部に石灰岩有り。
7	そ-98	22	20	13	暗褐色砂	貝・土器	－
8	そ-98	30	20	15.5	暗褐色砂	貝・土器・石	－
9	そ-98	30	27	14	暗黄褐色砂	貝・土器・獣骨	－

こ　さ　し　す　せ　そ　た　ち　つ　て　と　な　に

99
98
97
96
95
94
93
92
91

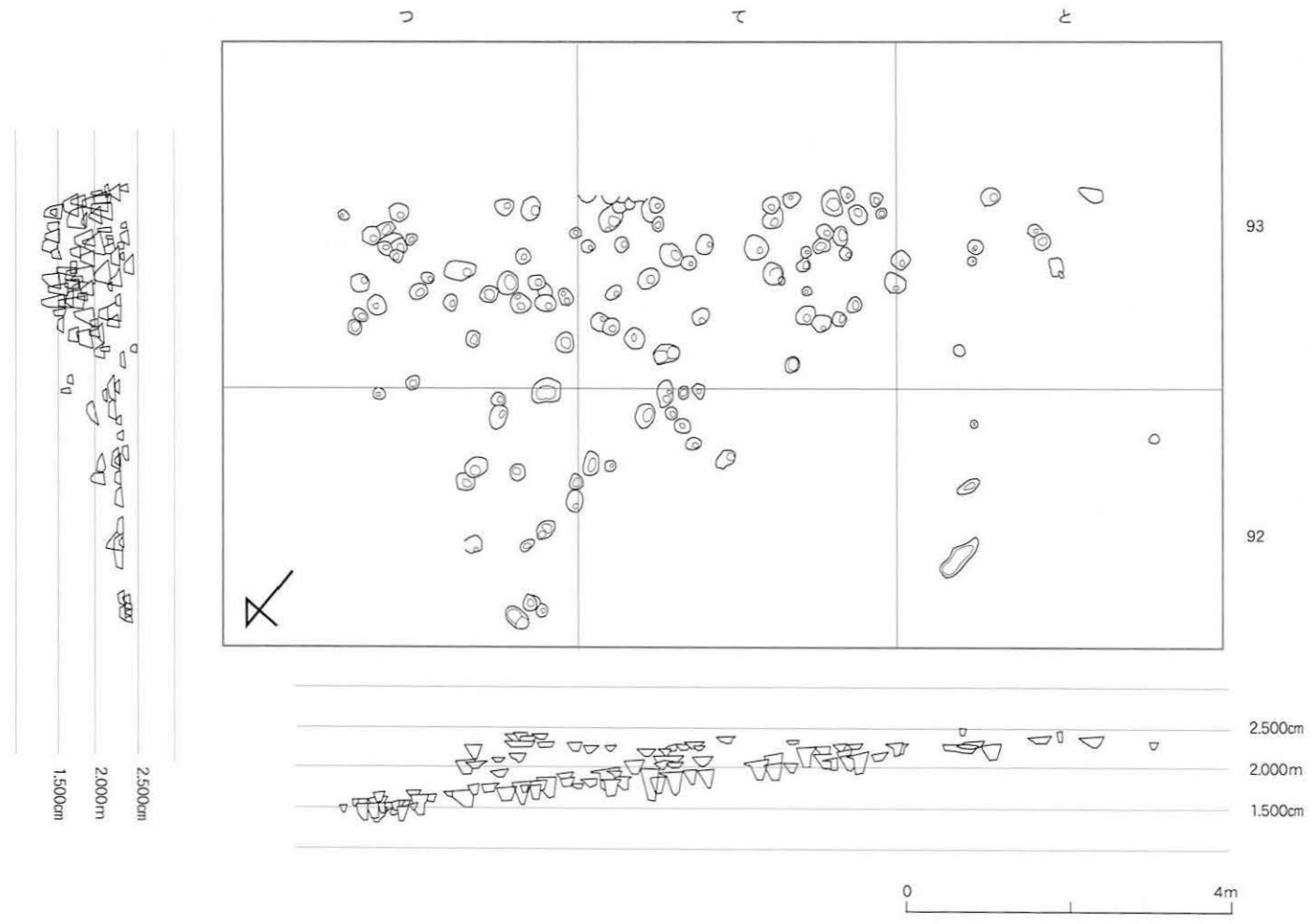


ピット検出平面図

つ・て・と－92・93　3層

つ・て・と－92・93、3層の黒褐色土の面で、北東方向に傾斜する地形で検出された遺構である。直径七・五～四五cmのピットが一一四本検出されたが、平均は一七・〇八cmである。ピットの深さは、最も深いもので二二・五cm、浅いもので五cm、平均すると一一・〇三cmを測る。竪穴等は検出されていない。平面形でピットのプランを推測することはできなかったが、ピットが傾斜地に形成されることから、住居跡に伴う遺構以外の可能性も有る。

つ・て・と－92・93、3層ピット検出状況



つ・て・と－92・93、3層検出ピット遺構実測図

さ・し－92・93　Ⅳ層

さ・し－92・93、Ⅳ層の黄褐色砂の面で検出された遺構である。直径一二・八～三三cmのピットが一二本検出された。最も深いもので二九cm、浅いもので九cm、平均すると一一・五八cmを測る。竪穴等は検出されていない。ピットの配列は楕円形を呈する。遺構の写真のみ示した。

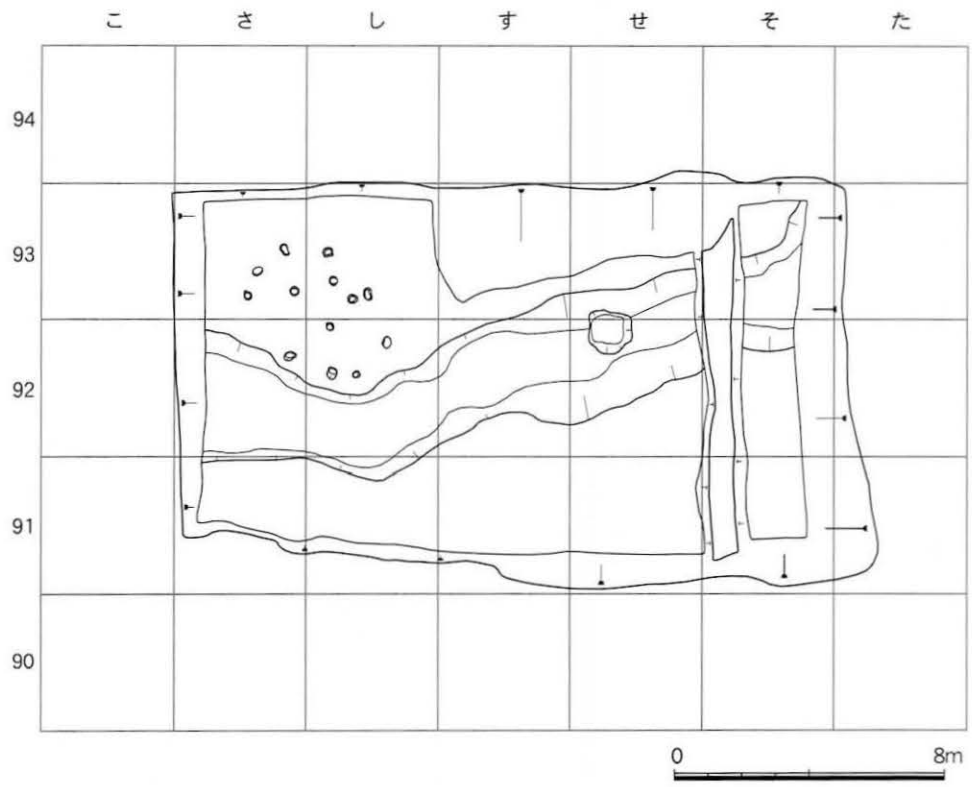
三、溝状遺構

溝と考えられる遺構が、こ・さ・し・す・せ・そ－91・92・93にかけて検出された。

検出層は、Ⅲ層の暗褐色土EL180cm前後で、部分的に石灰岩の石列を伴う検出であった。溝の覆土を掘り下げると、溝の上場の縁を中心に石列の広がりが確認され、溝内からもシャコガイを中心とした貝類、土器が出土した。

溝の幅は約八五cm、深さ約七五cm、全長約一四・四mである。

さ・し－92・93、Ⅳ層ピット検出状況



溝状遺構平面実測図

溝状遺構検出状況（2）

溝状遺構検出状況（1）

四、貝集積

弥生時代北九州では南島産のゴホウラやイモガイで作られた貝輪が流行し、南島の海にあるその貝を求めた弥生人と南島との交易がはじまった。

貝の集積は九州地域との交易品を貯蔵していたものだと考えられ、出土した集積は何らかの理由で運ばれなかった貝と考えられている。

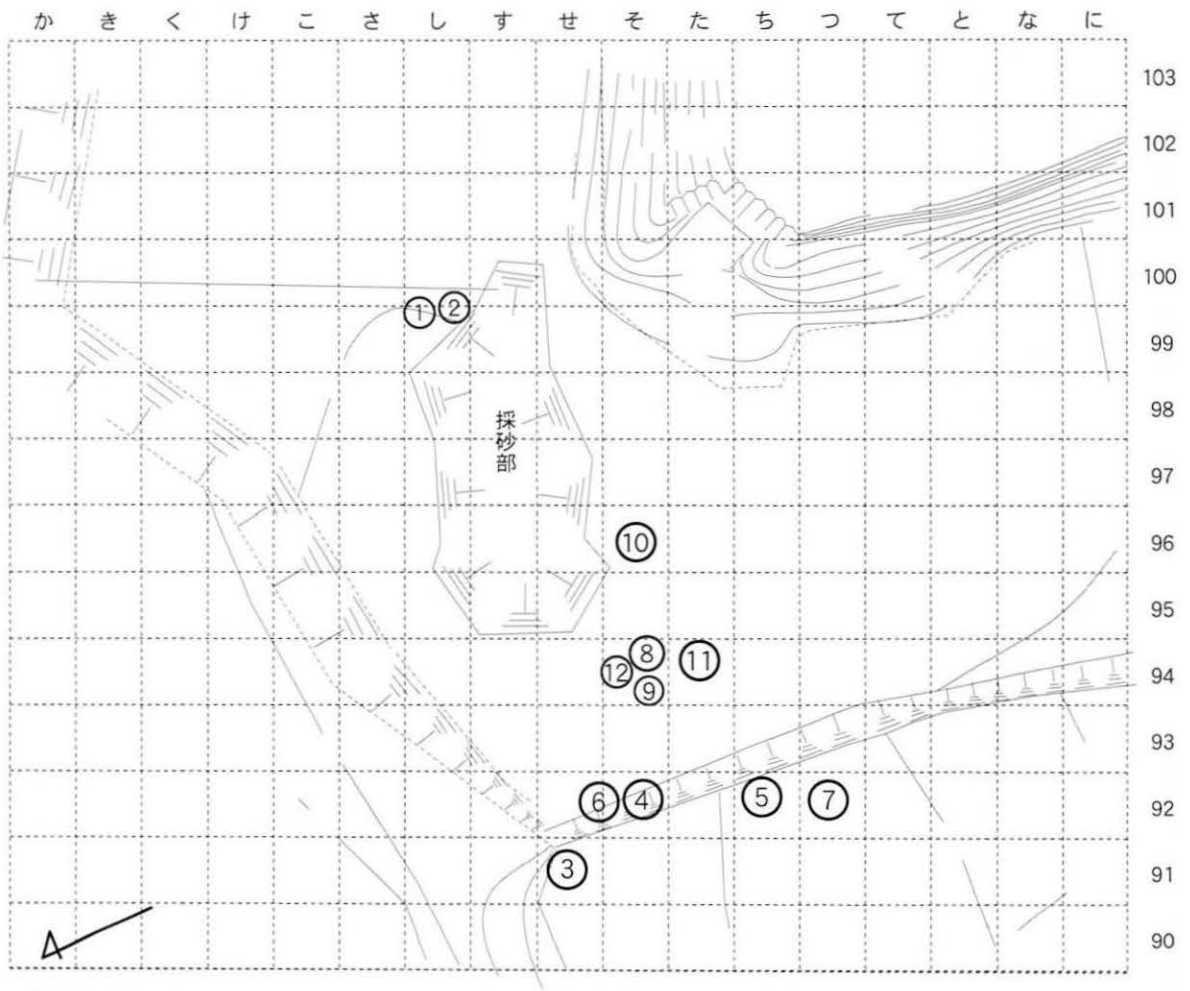
本貝塚のⅢ層でゴホウラやイモガイ（アンボンクロザメ・クロフモドキなど）の集積が十二基検出された。

本貝塚における貝集積の検出状況は下図で示したように「し－100」から「つ－92」の範囲で確認された現在の汀線から二五mほど陸に入った砂丘のトップと思われる箇所からその裏側に集中している。

1号集積と12号集積はイモガイとゴホウラの出土した集積である。2号集積はゴホウラ集積。しかし1号と2号は比較的近い場所に位置し、2号集積が溝へ流れ込むような形で出土していることからひとつの集積であった可能性もある。残りの九基の集積はイモガイのみの集積である。その中で4号集積・8号集積・10号集積・11号集積は平面に散在していているが、状況からみてイモガイが集中して出土したのでイモガイ集積として扱った。

今回集積から出土したイモガイは一六四個。殻幅は最小四・六cm、最大十二・七cm、平均値五・九cm。殻長は最小七・九cm、最大十五・一cm、平均十・五cmであった。ゴホウラは九個、アツソデガイが二個出土した。

なお集積の号数は検出した順に番号をふり、集積の状況は（P64）に記載した。以下それぞれの集積の概要を述べる。



貝集積検出箇所

1号集積

「し－99」と「し－100」の間、Ⅲ層の黒褐色層の下にある赤褐色砂層の中から出土した。掘り込みは見られない。

二個のゴホウラを下に、八個のイモガイがその間を埋めるように平面に集積。イモガイ一個がやや離れた状態で出土した。

出土したゴホウラ二個のうち一個は、背面の中央に一・二cm×〇・八cmの略楕円形の粗孔を穿つ。もう一個は非加工で体層の内部にまでゴカイ類の付着がみられる。九個のイモガイの殻幅は、最小五・八cm、最大六・四cm、平均よりも大きめなイモガイで、体層部にはどれも魚類などに攻撃を受けた際にできたと思われる亀裂がみられた。

2号集積

「し－99・100」Ⅲ層の赤褐色砂層から出土。

ゴホウラのみの集積で、1号集積の北東一mに位置し、溝と思われる傾斜面に背面を上にして転がるような形で出土した。

ゴホウラは六個、うち一個は背面中央部に孔を穿ち、孔には丁寧な打欠のあとが見られる。また六個のうち五個（有孔のゴホウラも含む）が貝の内部までカキ類やゴカイ類などが付着していた。

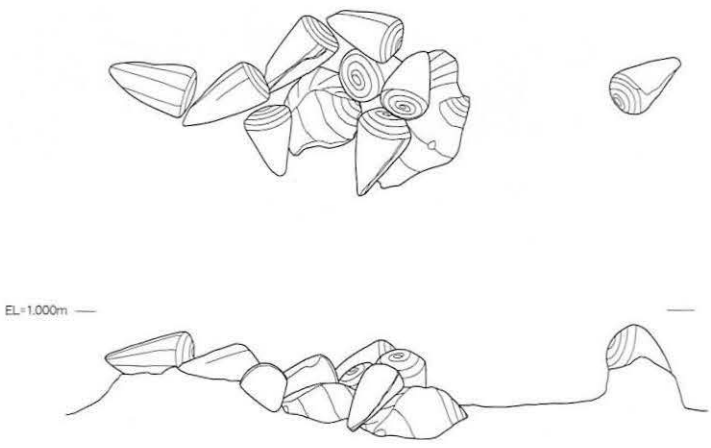
なお、溝の下部と思われる場所から土器や貝とともにゴホウラとイモガイが数個出土している。そのゴホウラの中には腹面部を欠き背面中央部に丁寧な打欠による孔を穿つものがあり、2号集積から崩れ落ちたものとも考えられる。

3号集積

「せ－91」Ⅲ層の暗褐色砂層下の暗黄褐色砂層から出土した。掘り込みは見られない。イモガイ五個、サラサバテイが一個の集積。集積の上部の暗黄褐色砂層には貝だまりがあった。

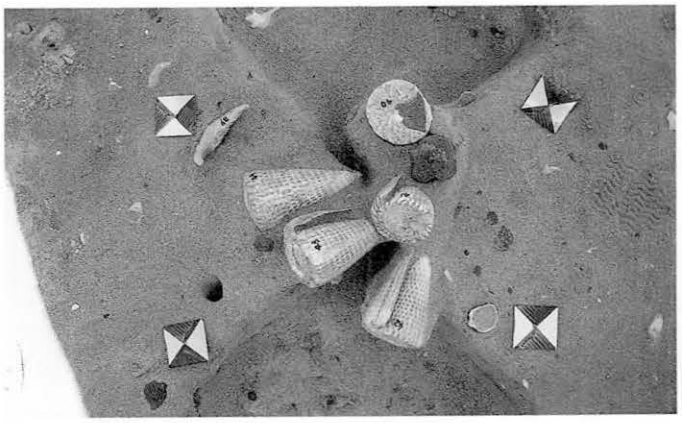
いずれも一緒に出土した軽石に殻軸を向けた形で出土した。

イモガイの殻幅は最小六・二cm、最大七・八cmと平均値よりも少し大きめ、四個のうち三個は体層部に魚類などによる攻撃の際にできたと思われる亀裂や、かなり太い成長線が見られた。いずれも殻軸は軽石のほうに向いている。



1号貝集積遺構実測図

1号貝集積遺構



3号貝集積遺構

2号貝集積遺構

4号集積

「そ－92」Ⅲ層の暗褐色土層下の暗黄褐色砂層から出土。イモガイが七個、アツソデガイ一個が、「そ－92」の南壁際にその他の貝とともに散乱した形で出土したが、今回集積として取り扱かった。

イモガイの殻幅は最小五・九cm、最大八・二cmと平均より大きめ。七個のうち五個はかなりはっきりとした成長線や魚類によると思われる攻撃痕が見られる。

アツソデガイは背面の溝近くに粗孔がある。全体的虫食いがみられるが体層内部まではいたっていない。

5号集積

「ち－92」Ⅲの暗褐色土層から出土したが、集積の下部は暗黄褐色砂層にいたる。本貝塚の集積の中では最大の集積である。

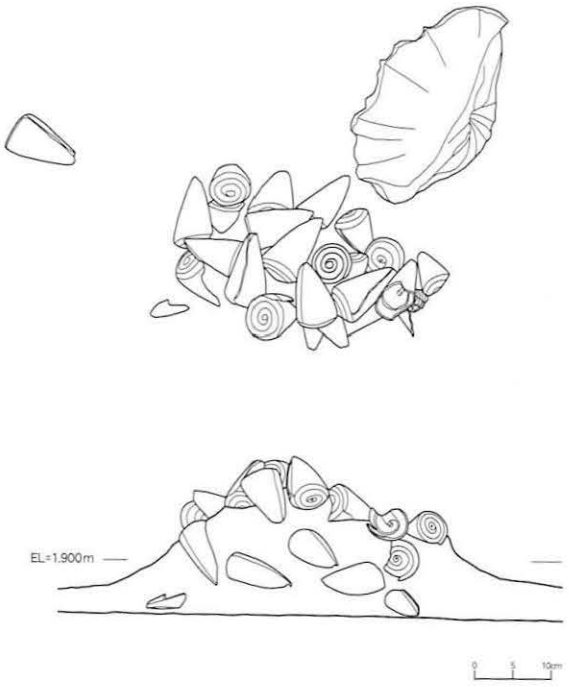
平成九年の試掘調査の際、イモガイ十六個は既に取り上げられた。今回取り上げたのが三十三個、合計四十九個の集積である。

無造作に積み上げられた集積の高さは二一cm、長辺三六cm×短辺二四cmの範囲にイモガイが集められ、一五cmほどはなれた場所にイモガイが一個出土。集積のすぐそばにはヒレジャコ一個が出土した。

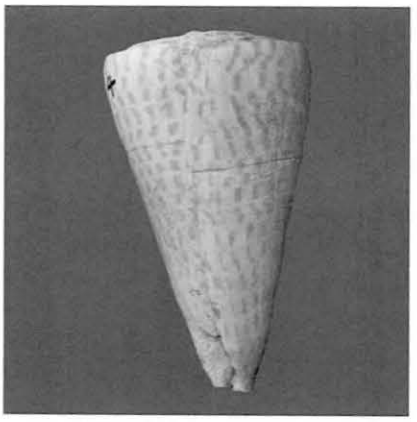
イモガイの殻幅は最小五・三cm、最大六・二cmと平均よりやや小さめのイモガイが出土している。体層部に傷もなく綺麗なものは十個のみで、残りの三十九個は魚類などの攻撃によると思われる浅く細い溝がみられた。その中に、殻頂から四cm下の体層にほぼ水平に浅い溝が一周しているイモガイが一個あり、その溝は内芯の中までいたっているが人為的な加工による溝なのか判断できない。

4号貝集積遺構

5号貝集積遺構



5号貝集積遺構実測図



5号貝集積から出土した溝のあるイモガイ

6号集積

「せ・そ－92」Ⅲ層もしくはⅣ層上部をなす黄褐色砂から出土。

集積から十六個のイモガイとともにクロチョウガイ一個とチトセボラ一個、下部からはヒレジャコの片が一片出土した。

イモガイの殻幅は最小五・五㎝、最大六・四㎝。体層部は無傷なものは二個、他多少の虫食いや傷が見える。

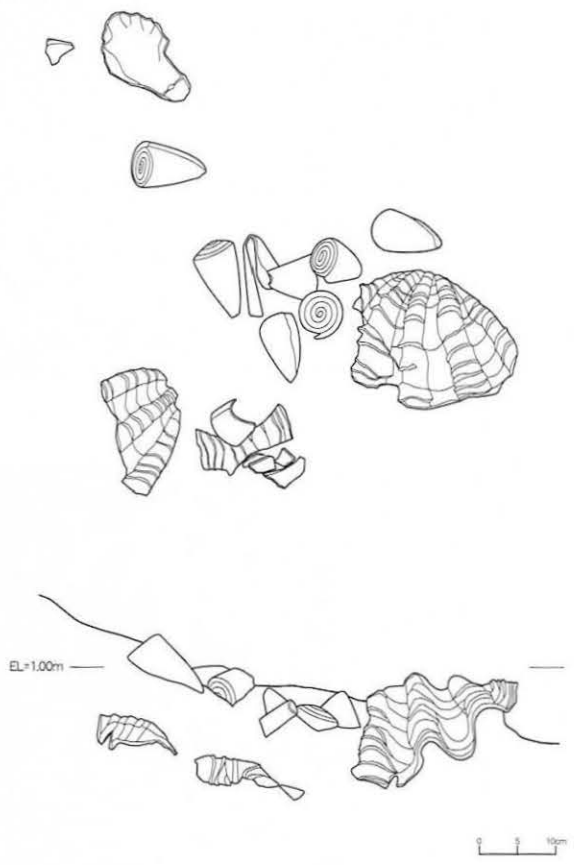
その層からは大量の貝が出土している。

7号集積

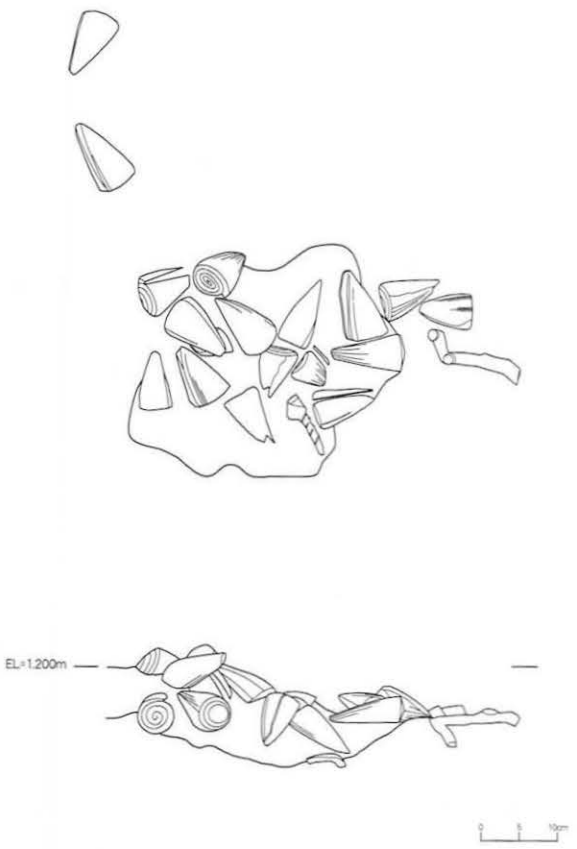
「つ－92」Ⅲ層の赤褐色砂層から出土。

集積は斜面を流れるようにヒレジャコ、シャコガキに囲まれ、イモガイが十二個雑然と出土。ややはなれて斜面の下にアツソデガイ一個が出土した。

イモガイの殻幅は最小四・八㎝、最大八・七㎝。イモガイは大きさにばらつきが見られる。体層部に傷のまったく見られないものが二個、それ以外は全て大きな太い成長線や傷や虫食いが見られた。また螺塔部のみのイモガイも一個出土した。



7号貝集積遺構実測図



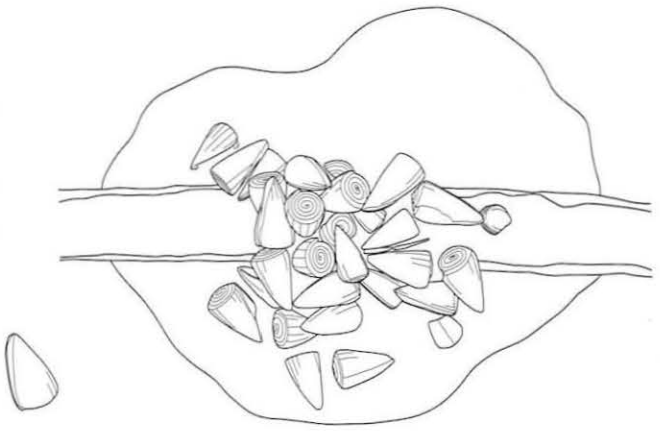
6号貝集積遺構実測図

7号貝集積遺構

6号貝集積遺構

8号集積

「そ－94」Ⅲ層の上部をなす黒褐色砂層と、その下の赤褐色砂層が交じり合った場所から出土した。集積は赤褐色砂層の貝溜まりの上に乗るような形で、イモガイ四個が点在し、残り三個が平面に集積した状態で出土した。イモガイの殻幅は最小五・二cm、最大七・五cm。七個中五個が五・九cm以上のもので平均値より大きめである。また体層部に無傷なものはなく、全てに多少の傷や虫食いが見られた。



9号貝集積遺構実測図

8号貝集積遺構

10号貝集積遺構

11号貝集積遺構

9号集積

「そ－94」Ⅲ層、8号集積と同地区から出土。

8号集積と同地区の貝だまりの黒褐色砂層の部分から集積の一部が出土したが、その時点では掘り口の線は確認できなかった。周辺の貝溜まりを除去した時点で、赤褐色砂層上部に黒褐色の不規則な楕円状の掘り込みの線を検出。その中心にイモガイ四十個が雑然した形で出土した。集積の高さは十九・五㎝。しかし集積は大量の貝を含んだ土壙に一部切られており正確な掘り込みの線は確認できなかった。イモガイの殻幅は最小四・六㎝、最大六・五㎝、平均よりも小さいイモガイが出土している。ほとんどの貝の体層部に傷や虫食いがみられた。

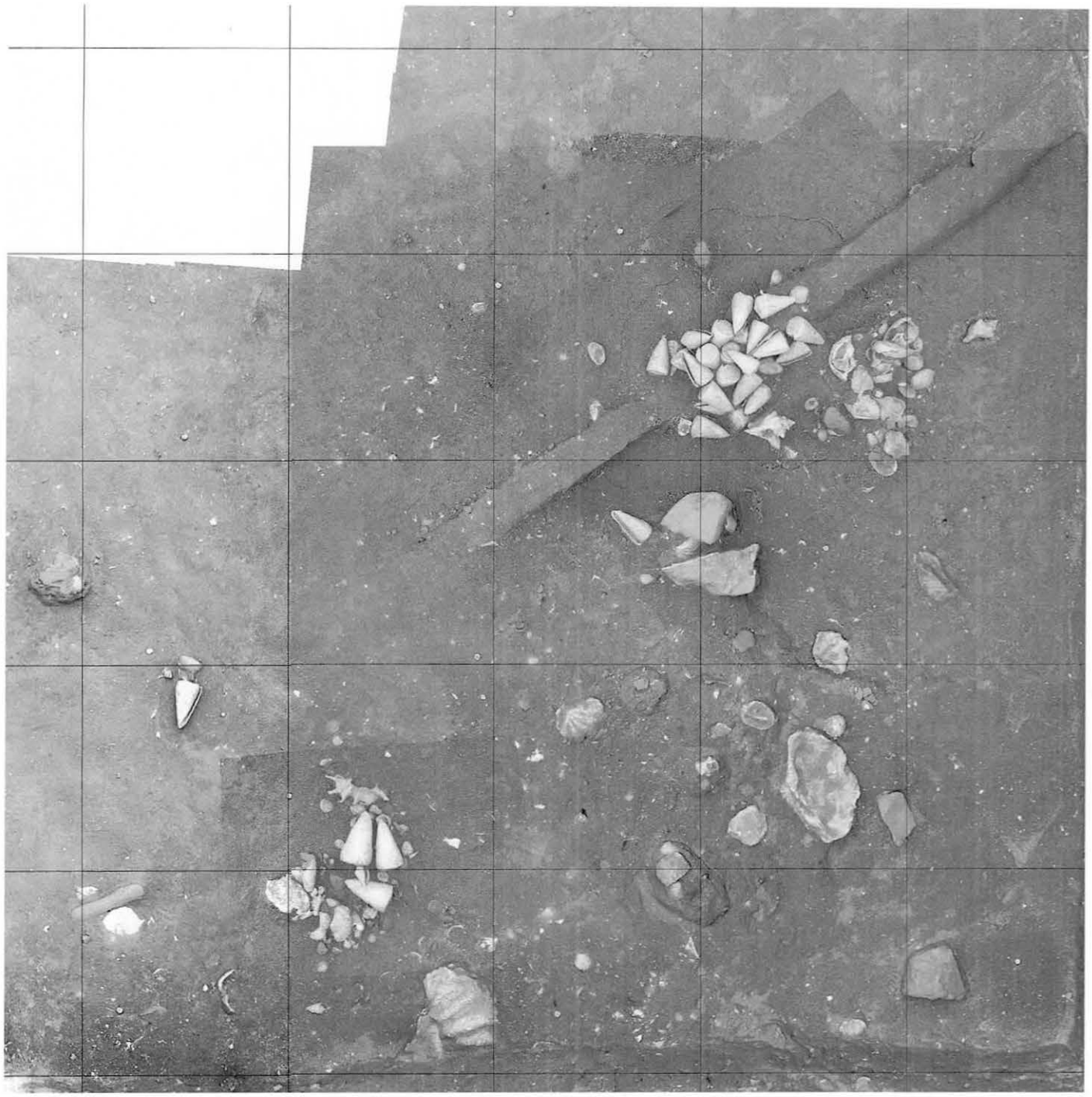
10号集積

「そ－96」Ⅲ層の黒褐色砂層から出土。

出土したイモガイ八個のうち、五個は集中して出土したが、残りの三個はサラサバテイ一個と共に少し離れたところで散らばるように出土した。殻幅は最小五・二㎝、最大七・六㎝。大きめのイモガイにはいずれも太い成長線や虫食いがみられた。

11号集積

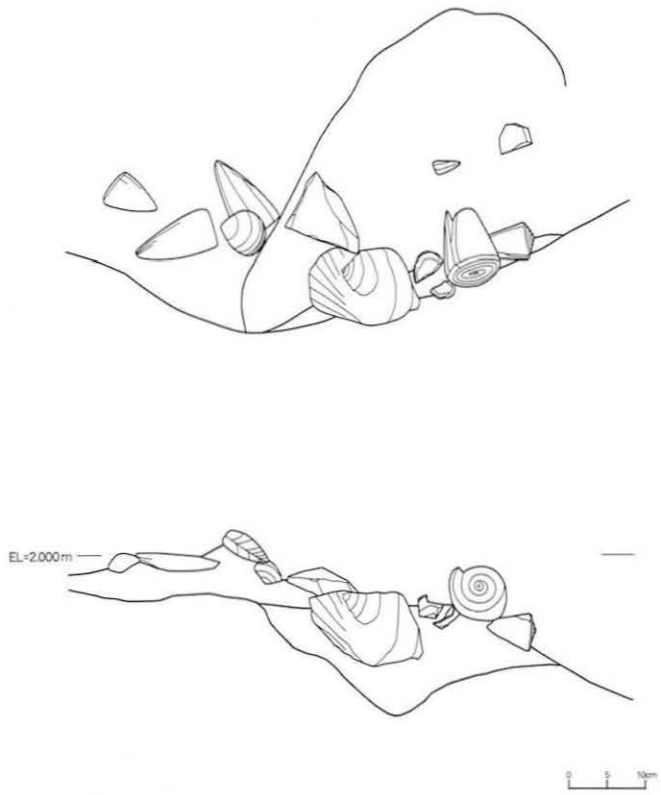
「た－94」Ⅲ層、黒褐色土層から傾斜面に沿って散らばるような形でイモガイが八個出土した。イモガイの殻幅は最小六・四㎝、最大十二・七㎝とどれも平均値よりも大きく、風化がひどい。全ての貝の体層部の全体にわたり太い成長線が入る。



9号貝集積遺構

12号集積

「そ－94」Ⅲ層、赤褐色砂層から出土した。イモガイ五個、ゴホウラ一個の集積。八号、九号集積を除去し、掘り進めたところからイモガイ五個とゴホウラ一個が出土。平面には掘り込みは見えないが、深さは二十㎝。最下部からは石が二個出土している。すぐ側からヒメジャコ九個が集中して出土した。イモガイの殻幅は最小五・四㎝、最大七・二㎝。多少傷を持つものが多く、ゴホウラは体層内部にまで虫食いが見られた。



12号貝集積遺構実測図

12号貝集積遺構

貝集積の状況とイモガイの個数

集積番号	集積状況	イモガイの個数	地区	土色	説明
1号	○	9個	し－99・100	黒褐色砂層	平面的に集積。２個のゴホウラを下に８個のイモガイがその間を埋めるように出土
2号	▲	0個	し－99・100	赤褐色砂層	ゴホウラの集積。１号集積のそばの溝の傾斜面に転がるように６個のゴホウラが出土。
3号	○	5個	せ－91	暗黄褐色砂層	平面に集積。イモガイ５個、サラサバテイ１個が出土。
4号	▲	7個	そ－92	暗黄褐色砂層	散乱した状態で出土。イモガイ７個、背面に粗孔のあるアツソデガイ１個がそのほかの貝一緒に散乱した状態で出土。
5号	◎	49個	ち－92	暗褐色土層～暗黄褐色砂層	雑然と積まれている。長辺36cm×短辺24cmの範囲に積まれたイモガイが出土。集積のそばからはヒレジャコが１個出土。
6号	○	16個	せ・そ－92	黄褐色砂層	平面に集積。イモガイ16個と一緒にクロチョウガイとチトセボラが１個出土。
7号	△	12個	つ－92	赤褐色砂層	平面的で掘りこみは見られない。イモガイ12個と一緒にシャコガイやシャコガキが出土。
8号	▲	7個	そ－94	黒褐色砂層～赤褐色砂層	散乱した状態で出土。イモガイ４個が点在し残り３個が一緒に出土。
9号	◎	40個	そ－94	黒褐色砂層～赤褐色砂層	不規則な楕円形の掘り込み内にイモガイ40個が雑然と積まれていた。集積の高さ19.5cm。
10号	▲	8個	そ－96	黒褐色砂層	散乱した状態で出土。イモガイ５個は集中して出土。残り三個はサラサバテイ１個とともに散らばるように出土。
11号	▲	8個	た－94	黒褐色土層	散乱した状態で出土。
12号	△	5個	そ－94	赤褐色砂層	平面での掘り込みは確認できない。イモガイ５個とゴホウラ１個が出土。すぐ側からはヒメジャコが集中して９個出土。

◎　積み重なった状態で出土　　○　平面に集中して出土　△　その他の貝も混ざって出土　　▲　散乱して出土

今回検出された十二基の貝集積は2号以外全ての集積にイモガイが出土している。表に示すように十一基のイモガイ集積を比べて見ると、積み重なった状態で出土したものが5号と9号集積でどちらも四十以上のイモガイが出土している。次に平面に集積ものは1号、3号、6号。次にイモガイと一緒にその他の貝も多く出土した集積は7号と12号、散乱した状態で出土したものは、4号、8号、10号集積となっている。

次に出土したイモガイの大きさを表に示す。その結果積み重なった状態で出土した5号集積と9号集積から出土したイモガイは四・五cm～六・五cm以内とある程度大きさがそろっているのに対し、4号、10号、11号集積などの状態が崩れている集積では、出土するイモガイの大きさがばらついていくことが分かった。次にイモガイの大きさと傷の有無を下表に示す。その結果傷がないものは百六十二点中二九点と最も少なく、全体の82%は全て傷のあるものが出土していることが分かった。また傷と大きさの関係では傷の有無にかかわらず五・六cm～六・〇cm台のものが最も多く出土し、サイズが大きくなるにつれ無傷のイモガイの出土量が減少していることが分かった。

大堂原貝塚貝集積出土イモガイ計測表（殻幅）

サイズ(cm)	4.5/5	5.1/5.5	5.6/6.0	6.1/6.5	6.6/7.0	7.1/7.5	7.6/8.0	8.1/8.5	8.6 以上	合計
1号			3	3						6
3号				1	1	1	2			5
4号			1	2		1	1	1		6
5号		4	41	3						48
6号		1	7	8						16
7号	1	1	2	4	1	1		1		11
8号		1	2	2	1	1				7
9号	10	12	17	1						40
10号		2	3	1		1	1			8
11号				1		3	2	1	1	8
12号		1	2	1		1				5
合計	11	22	78	27	3	9	6	3	1	160

瀬底島・アンチの上貝塚4号集積イモガイ計測表（殻幅）比較資料

サイズ(cm)	4.5/5	5.1/5.5	5.6/6.0	6.1/6.5	6.6/7.0	7.1/7.5	7.6/8.0	8.1/8.5	8.6 以上	合計
個数	15	34	44	19	4	1				117

大堂原貝塚貝集積出土イモガイ計測と傷の有無比較表

サイズ(cm)	4.5/5	5.1/5.5	5.6/6.0	6.1/6.5	6.6/7	7.1/7.5	7.6/8	8.1/8.3	8.4 以上	合計
傷なし	2	5	13	6	2	1	0	0		29
多少傷有り	4	8	40	14	1	2	0	1	1	71
傷有り	5	9	25	7	0	6	6	2		60
合計	11	22	78	27	3	9	6	3		160

貝集積計測一覧

番号	集積号数	貝種	殻高(cm)	殻幅（cm)	重量（g）	備考
1	1号－1	ゴホウラ	14.6	11.5	359.74	内部までゴカイ類が付着
2	1号－2	ゴホウラ	18.2	13.8	532.89	背面中央に粗孔がある
3	1号－8	アンボンクロザメ	9.7	5.8	222.75	魚類などに攻撃された傷がある
4	1号－9	アンボンクロザメ	10.5	6.4	261.66	魚類などに攻撃された傷が複数みられる
5	1号－10	クロフモドキ	10.6	6.1	243.59	－
6	1号－11	アンボンクロザメ	11.1	6.3	277.11	－
7	1号－13	アンボンクロザメ	10.4	6	263.84	魚類などに攻撃された傷がある
8	1号－15	クロフモドキ	10.7	5.9	213.68	魚類などに攻撃された傷がある
9	1号－12	イモガイ不明	－	－	－	－
10	1号－7	イモガイ不明	－	－	－	－
11	1号－14	イモガイ不明	－	－	－	－
12	2号－1	ゴホウラ	15.8	10.9	590	内部にゴカイ類が付着
13	2号－2	ゴホウラ	－	11.7	479.36	水管部欠如。内部にゴカイ類が付着
14	2号－3	ゴホウラ	18.1	12.8	975	背面中央に粗孔がある。(粗孔ではあるが面を持つ)内部にゴカイ類が付着
15	2号－4	ゴホウラ	19	13.3	800	背面全体に大きな傷を持つ。内部にまでカキ類が付着
16	2号－5	ゴホウラ	16.2	11.2	501.09	傷もなくきれい
17	2号－6	ゴホウラ	17.7	12.6	835	内部にゴカイ類が付着
18	3号－1	クロフモドキ	10.4	6.2	233.3	魚類などによる攻撃痕・成長線が顕著
19	3号－2	スイジガイ	－	－	－	爪のみが出土
20	3号－3	サラサバテイ	－	－	－	－
21	3号－4	アンボンクロザメ	11.8	7	280.4	傷もほとんどなくきれいな形をしている
22	3号－5	アンボンクロザメ	12.6	7.7	393.2	成長線が顕著
23	3号－6	クロフモドキ	13.4	7.8	489.9	成長線が顕著
24	3号－7	クロフモドキ	13.1	7.3	359.7	口唇部近くに魚類による攻撃痕が残るが比較的きれいな形
25	4号－1	アンボンクロザメ	10.8	6.1	239.2	傷もなくきれい
26	4号－2	アンボンクロザメ	12	6.5	327	傷もなくきれい
27	4号－3	アンボンクロザメ	10.8	5.9	200.7	口唇部に一本強い成長線が入る。
28	4号－4	アンボンクロザメ	12.8	7.2	402.5	魚類による攻撃痕と強い成長線が口唇部近くにある
29	4号－5	クロフモドキ	13.2	7.9	459.8	全体に成長線が入る。
30	4号－6	クロフモドキ	15.1	8.2	518	かなり大型。魚類による攻撃痕は残るが比較的きれい
31	4号－7	クロフモドキ	－	－	281.7	螺塔部が破損。
32	4号－8	アツソデガイ	－	－	－	背面の溝付近に粗孔がある。全体に虫食いがみられるが内部まではいたっていない
33	5号－1	アンボンクロザメ	101	5.8	224	魚類による攻撃痕が小さく残る
34	5号－2	アンボンクロザメ	10.1	5.6	211.3	魚類による攻撃痕が数ヶ所残る
35	5号－3	アンボンクロザメ	10.3	6.2	264.8	数箇所に魚類による小さな攻撃痕が残るが比較的きれい
36	5号－4	アンボンクロザメ	10.1	6	227.7	体層部に水平な溝をもつ
37	5号－5	クロフモドキ	10.3	5.7	217.7	魚類による攻撃痕が大きく一本残る
38	5号－6	クロフモドキ	10.5	6	248.8	数箇所に魚類による小さな攻撃痕が残るが比較的きれい
39	5号－7	クロフモドキ	10.6	6.1	262.2	傷もなくきれい
40	5号－8	クロフモドキ	11	6.2	249.3	螺塔部に魚類による攻撃痕が残るが比較的きれい
41	5号－9	クロフモドキ	10	5.9	230.8	数箇所に魚類による小さな攻撃痕が残るが比較的きれい
42	5号－10	クロフモドキ	10.9	5.8	243.4	数箇所に魚類による小さな攻撃痕が残るが比較的きれい
43	5号－11	クロフモドキ	11	6	257.7	魚類による攻撃痕が大きく一本残る
44	5号－12	アンボンクロザメ	9.9	5.76	215.4	魚類による攻撃痕が大きく一本残る
45	5号－13	アンボンクロザメ	9.7	5.64	212.6	魚類による攻撃痕が一本残る

番号	集積号数	貝種	殻高(cm)	殻幅 (cm)	重量 (g)	備考
46	5号−14	アンボンクロザメ	10.2	5.82	196.9	傷もなくきれい
47	5号−15	アンボンクロザメ	10.7	5.86	239.9	傷もなくきれい
48	5号−16	クロフモドキ	9.8	5.3	155.4	小さいが魚類による攻撃痕が複数残る
49	5号−17	アンボンクロザメ	10	5.5	194.9	螺塔部近くに魚類による攻撃痕が残るが比較的きれい
50	5号−18	アンボンクロザメ	10.4	6	241.1	螺塔部から水管にかけて魚類による攻撃痕が大きく走る
51	5号−19	アンボンクロザメ	10.4	6	243.2	螺塔部と胴部に魚類による攻撃痕が複数残る
52	5号−20	アンボンクロザメ	10.1	5.8	226.2	傷もなくきれい
53	5号−21	アンボンクロザメ	10	5.8	224.1	小さいが魚類による攻撃痕が一ヶ所あるが比較的きれい
54	5号−22	アンボンクロザメ	10.4	5.9	253	小さいが魚類による攻撃痕が複数残るが比較的きれい
55	5号−23	アンボンクロザメ	10	5.7	213	魚類による攻撃痕が複数残る
56	5号−24	アンボンクロザメ	10	5.6	217.6	小さいが魚類による攻撃痕が複数残るが比較的きれい
57	5号−25	アンボンクロザメ	10.5	5.7	211	小さいが魚類による攻撃痕が複数残るが比較的きれい
58	5号−26	アンボンクロザメ	10.5	6	261.4	小さいが魚類による攻撃痕が複数残るが比較的きれい
59	5号−27	アンボンクロザメ	10	5.5	169.7	傷もなくきれい
60	5号−28	アンボンクロザメ	10	5.7	224.6	小さいが魚類による攻撃痕が複数残るが比較的きれい
61	5号−29	アンボンクロザメ	10.9	6	249.8	魚類による攻撃痕が複数残る
62	5号−30	アンボンクロザメ	10.5	5.9	242.4	魚類による攻撃痕が残るが比較的きれい
63	5号−31	アンボンクロザメ	10	5.8	193.9	螺塔部と胴部に魚類による攻撃痕が残るが比較的きれい
64	5号−32	アンボンクロザメ	9.3	5.6	208.2	小さいが魚類による攻撃痕が複数残る
65	5号−33	アンボンクロザメ	−	−	−	螺塔部が破損。胴部には魚類による攻撃痕が残る
66	5号−34	クモガイ	−	−	−	水管のみ残る
67	5号−35	アンボンクロザメ	10.7	5.9	200.9	口唇部近くに魚類による攻撃痕が残るが比較的きれい
68	5号−36	アンボンクロザメ	10	5.8	196.8	小さな傷が残るがきれい
69	5号−37	アンボンクロザメ	10	5.6	205.1	小さいが魚類による攻撃痕が複数残るが比較的きれい
70	5号−38	アンボンクロザメ	10.3	5.6	191.7	小さいが魚類による攻撃痕が複数残るが比較的きれい
71	5号−39	アンボンクロザメ	10.1	5.6	171.8	大きな傷も見られず比較的きれい
72	5号−40	アンボンクロザメ	9.8	5.6	155.3	傷もなくきれい
73	5号−41	アンボンクロザメ	10.3	5.6	175.7	小さな傷が残るがきれい
74	5号−42	アンボンクロザメ	9.8	5.7	180	小さいが魚類による攻撃痕が複数残るが比較的きれい
75	5号−43	アンボンクロザメ	10.3	5.8	238.2	ほとんど傷もなくきれい
76	5号−44	アンボンクロザメ	10.3	5.6	196.4	小さいが魚類による攻撃痕が複数残るが比較的きれい
77	5号−45	アンボンクロザメ	10.3	5.8	189	小さいが魚類による攻撃痕が複数残るが比較的きれい
78	5号−46	アンボンクロザメ	9.5	5.5	154.8	魚類による攻撃痕が複数残る
79	5号−47	アンボンクロザメ	10.5	5.8	215.1	傷もなくきれい
80	5号−48	アンボンクロザメ	10.1	5.6	167	小さいが魚類による攻撃痕が複数残るが比較的きれい
81	5号−49	アンボンクロザメ	10.2	5.9	228	ほとんど傷もなくきれい
82	5号−50	アンボンクロザメ	10.4	5.8	234.5	小さいが魚類による攻撃痕が複数残るが比較的きれい
83	6号− 1	アンボンクロザメ	10.4	6	188.6	小さな傷が複数みえる
84	6号− 2	アンボンクロザメ	9.7	5.7	194.7	−
85	6号− 3	アンボンクロザメ	10.7	6	239.4	傷もなくきれい
86	6号− 4	アンボンクロザメ	10.1	5.8	182.5	螺塔部と口唇部に傷があるが比較的きれい
87	6号− 5	アンボンクロザメ	9.5	5.5	149.1	傷もなくきれい
88	6号− 6	アンボンクロザメ	10.7	6	185.9	小さな傷は見えるがきれい
89	6号− 7	アンボンクロザメ	10.8	5.9	189.5	小さな傷が残るがきれい
90	6号− 8	アンボンクロザメ	10	5.8	192.8	小さな傷が残るがきれい
91	6号− 9	アンボンクロザメ	10.7	6.4	256.2	大きな傷と複数の小さな傷がみえる
92	6号−10	アンボンクロザメ	11.3	6.1	226.4	小さな傷が残るがきれい
93	6号−11	アンボンクロザメ	11.3	6.3	262.7	小さな傷が複数みえる

番号	集積号数	貝種	殻高(cm)	殻幅 (cm)	重量 (g)	備考
94	6号−12	アンボンクロザメ	10.6	6.2	216	小さな傷が残るがきれい
95	6号−13	アンボンクロザメ	10.4	6.3	223.8	小さな傷があるが比較的きれい
96	6号−14	アンボンクロザメ	11.5	6.4	260.2	魚類による攻撃痕があるがきれい
97	6号−15	アンボンクロザメ	11	6.2	243	小さな傷が残るがきれい
98	6号−16	アンボンクロザメ	10.8	6.4	238.4	螺塔部と口唇部に傷があるが比較的きれい
99	6号−17	チトセボラ	−	−	−	−
100	7号− 1	クロフモドキ	14.2	8.4	539.4	太い成長線が何本もはいっている
101	7号− 2	アンボンクロザメ	11.3	6.4	302.1	小さな傷があるがきれい
102	7号− 3	アンボンクロザメ	10.6	5.9	225.9	傷はあるが比較的きれい
103	7号− 4	アンボンクロザメ	11	6.1	233.4	一本太い成長線が入るが比較的きれい
104	7号− 5	アンボンクロザメ	9.7	5.7	181.8	小さな傷が複数はいる
105	7号− 6	アンボンクロザメ	9.8	5.5	156	小さな傷が複数あるが比較的きれい
106	7号− 7	アンボンクロザメ	10.3	6.2	248.9	大きな傷が二箇所に入る
107	7号− 8	アンボンクロザメ	−	4.8	77.3	水管部破損。二箇所に大きな傷が見える
108	7号− 9	アンボンクロザメ	−	−	−	螺塔部の 3/4 のみ残る
109	7号−10	クロフモドキ	12.7	6.9	357.1	傷もなくきれい
110	7号−11	クロフモドキ	11.6	6.4	241.7	傷もなくきれい
111	7号−12	クロフモドキ	13.7	7.5	364.8	太い成長線と傷がみえるが大きいので比較的きれい
112	8号− 1	アンボンクロザメ	9.6	5.2	187.3	太い成長線が複数はいる
113	8号− 2	クロフモドキ	10.3	5.8	218.9	小さな傷があるが比較的きれい
114	8号− 3	アンボンクロザメ	11	6.1	256.5	小さな傷が数はいるが比較的きれい
115	8号− 4	クロフモドキ	13.1	7.5	422.3	複数の太い成長線と小さな傷がある
116	8号− 5	クロフモドキ	12.2	6.4	250.6	小さな傷があるが比較的きれい
117	8号− 6	アンボンクロザメ	11.7	6.6	251.9	螺塔部から一本大きな傷と複数の小さな傷がある
118	8号− 7	アンボンクロザメ	10.9	5.9	231	螺塔部から一本大きな傷と複数の小さな傷がある
119	9号− 1	アンボンクロザメ	10.5	6.5	246.5	傷もなくきれい
120	9号− 2	アンボンクロザメ	10	5.7	171.5	小さな傷が複数残る
121	9号− 3	アンボンクロザメ	7.9	4.7	96.7	小さな傷が複数残るがきれい。小型
122	9号− 4	アンボンクロザメ	9.4	5.4	58.2	−
123	9号− 5	アンボンクロザメ	9.9	5.8	214.9	太い成長線と虫食いがみえる
124	9号− 6	アンボンクロザメ	9.4	5.7	188.6	小さな傷と虫食いが見える
125	9号− 7	アンボンクロザメ	11.5	5.6	178.4	傷も少なくきれい
126	9号− 8	アンボンクロザメ	9.6	5.5	158.9	複数の傷が残る
127	9号− 9	アンボンクロザメ	10.1	5.6	200.2	小さな傷が複数見えるが比較的きれい
128	9号−10	アンボンクロザメ	10.2	5.6	183.6	小さな傷が複数見えるが比較的きれい
129	9号−11	アンボンクロザメ	10.3	5.6	178.5	複数の成長線が入る。
130	9号−12	アンボンクロザメ	9.7	5.6	159.5	傷も少なくきれい
131	9号−13	アンボンクロザメ	10	5.7	199.5	胴部の半分に複数の成長線がはいる。
132	9号−14	アンボンクロザメ	8.6	4.8	120.4	傷もなくきれい。小型
133	9号−15	アンボンクロザメ	10	5.6	212.2	小さな傷は見えるが比較的きれい
134	9号−16	アンボンクロザメ	9.7	5.5	182.9	傷が入るが比較的きれい
135	9号−17	クロフモドキ	10.1	5.4	163.6	太い成長線が二本入る。
136	9号−18	アンボンクロザメ	8.8	4.9	128.4	傷もなく比較的きれい
137	9号−19	アンボンクロザメ	10.2	5.9	223.4	傷と虫食いがある
138	9号−20	アンボンクロザメ	10.1	5.6	178.4	傷もなくきれい
139	9号−21	アンボンクロザメ	9.2	5.1	136.6	傷もなくきれい
140	9号−22	アンボンクロザメ	10.1	5.5	172.6	傷は少ないが全体的に崩れている
141	9号−23	アンボンクロザメ	9.5	5.3	149.8	口唇部の近くの成長線が数本目立つが比較的きれい

番号	集積号数	貝種	殻高(cm)	殻幅 (cm)	重量 (g)	備考
142	9号−24	アンボンクロザメ	9	5	140.3	小さな傷が少しあるが比較的きれい
143	9号−25	アンボンクロザメ	8.5	4.6	119.7	口唇部の近くの成長線が数本目立つが比較的きれい
144	9号−26	クロフモドキ	9.5	4.9	132.1	小さな傷が複数見えるが比較的きれい
145	9号−27	アンボンクロザメ	10.1	5.8	213	少し傷が入るが全体的にきれい
146	9号−28	アンボンクロザメ	9.8	5.8	192.4	傷もなく比較的きれい
147	9号−29	クロフモドキ	9.8	5.7	174	小さな傷が入るが比較的きれい
148	9号−30	アンボンクロザメ	8.6	4.8	126.9	全体的に傷が入る
149	9号−31	アンボンクロザメ	9	4.8	125.3	小さな傷が入るが比較的きれい
150	9号−32	アンボンクロザメ	9	4.7	121.1	小さな傷が全体的に入る
151	9号−33	アンボンクロザメ	9.5	5.4	171.7	傷が入るが比較的きれい
152	9号−34	クロフモドキ	10	5.5	196.4	大きな傷が見える
153	9号−35	アンボンクロザメ	9.4	5.7	158.4	傷もなくきれい
154	9号−36	アンボンクロザメ	9.9	5.7	205.2	全体的に太い成長線がはいる
155	9号−37	アンボンクロザメ	9.6	5.1	141.2	傷もなくきれい
156	9号−38	アンボンクロザメ	9.1	5	127.8	全体的に小さな傷が入る
157	9号−39	アンボンクロザメ	9.5	5.3	162.1	全体的に小さな傷が入る
158	9号−40	アンボンクロザメ	9.8	5.3	179.7	小さな傷が少しあるが比較的きれい
159	10号− 1	アンボンクロザメ	10	5.7	194.6	ちいさな傷があるが比較的きれい
160	10号− 2	アンボンクロザメ	9.9	5.5	172.2	傷があるが比較的きれい
161	10号− 3	クロフモドキ	13.5	7.6	354.3	数本の太い成長線と虫食いが見られる
162	10号− 4	アンボンクロザメ	10.5	6	207.9	複数の傷がある。
163	10号− 5	クロフモドキ	13.9	7.3	352.9	全体的に成長線が深く刻まれ虫食いも目立つ。胴部に孔が開いている
164	10号− 6	アンボンクロザメ	11	6.2	233.7	傷もなく比較的きれい
165	10号− 7	クロフモドキ	10.1	5.9	204	複数の傷がある。
166	10号− 8	アンボンクロザメ	9.5	5.2	165.5	螺塔部からの傷が入るが比較的きれい
167	10号− 9	サラサバテイ	−	−	−	螺塔部欠如
168	10号−10	イトマキボラ	−	−	−	オカヤドカリの使用痕あり
169	10号−11	マガキガイ	−	−	−	−
170	10号−12	アラスジケマンガイ	−	−	−	−
171	11号− 1	クロフモドキ	11	7.5	297.7	風化が著しい。全体的に太い成長線が何本も入る
172	11号− 2	クロフモドキ	11.8	7.1	290.3	風化が著しい。数箇所に太い成長線が入る。螺塔部近くに傷がある
173	11号− 3	クロフモドキ	12.7	8	418.3	風化が著しい。全体的に太い成長線が入る
174	11号− 4	クロフモドキ	12.4	7.7	366.4	風化が著しい。全体的に太い成長線が入る。大きな傷もある
175	11号− 5	クロフモドキ	12.4	8.3	455.8	風化が著しい。全体的に太い成長線が入る
176	11号− 6	クロフモドキ	−	12.7	289.2	風化が著しい。口唇部近くに成長線が数本入るが比較的きれい
177	11号− 7	クロフモドキ	−	6.4	212.6	風化が著しい水管部破損。数箇所に太い成長線が入る。螺塔部近くに傷がある
178	11号− 8	クロフモドキ	11.7	7.2	302.8	風化が著しい。全体的に太い成長線が入る
179	12号− 1	アンボンクロザメ	9.98	5.66	210.13	一ヶ所傷が入るが比較的きれい
180	12号− 2	アンボンクロザメ	10.26	5.98	245.9	小さな傷が数ヶ所見えるが比較的きれい
181	12号− 3	アンボンクロザメ	10.27	6.15	240.16	太い成長線が数ヶ所入る。大きな傷がある
182	12号− 4	クロフモドキ	12.88	7.24	383.84	傷もなくきれい
183	12号− 5	アンボンクロザメ	10.02	5.45	165.63	傷もなくきれい
184	12号− 6	ゴホウラ	16.9	12.6	528.25	腹面に虫食いがある。内部にも虫食いが見える。
185	12号− 7	シレナシジミ	5.61	6.25	20.74	右左合弁
186	12号− 8	キクザルガイ科	−	−	8.94	片
187	12号− 9	マガキガイ	2.61	5.23	17.22	口唇部欠如

第四節　出土遺物

一、土器概要

本貝塚調査によって得られた土器は総数六八、五七三点である。これらは縄文早期から弥生時代から古墳時代並行期までの流れがみられた。それらの内、現代から近世の陶磁器が混じるⅠ層及びⅡ層、かく乱、表採出土の土器は時間の都合上分類を割愛し、安定した包含層であるⅢ層以降から出土した土器を分類の基本対象とした。但し、重要と思われる資料に関してはこの限りではない。それに従い土器型式に基づき次の1類から24類に分類した。なお、時代区分については縄文時代を表2の沖縄県史考古編年に、弥生～古墳時代並行期を表3の新里編年に従った。

縄文時代早期
1類土器／薄手土器（一五一三点）
2類土器／細沈線文土器（五点）
3類土器／爪形文土器（十三点）
縄文時代前期
4類土器／曽畑式土器（八一点）
5類土器／室川下層式土器（二九点）
6類土器／条痕文土器（四九点）
7類土器／沈線文土器（七六点）
8類土器／無文土器（二五点）
9類土器／神野A・B式土器（三点）
底部／4類～8類の底部（四六点）
縄文時代中期
10類土器／面縄前庭Ⅰ～Ⅲ式土器（十一点）
11類土器／面縄前庭Ⅴ式土器（二二点）
縄文時代後期
12類土器／仲泊式土器（九点）
13類土器／伊波式土器（九三点）

17類		13・14類不明		9～16類不明		弥生～古墳時代並行期																																合計
				底部		18類	19類		20類		21類		底部			22類		底部				23類		底部	24類		18～20類不明											
口縁	胴部	口縁	胴部	平底	乳房状尖底	口縁	口縁	胴部	口縁	胴部	口縁	胴部	平底	くびれ平底	その他	口縁	胴部	乳房状尖底	平底	くびれ平底	その他	口縁	胴部	脚台	口縁	胴部	尖底	乳房状尖底	丸底	平底	くびれ平底							
3	3	70	135	29	1	1	4		16	1	7	1	1		1	6			1						4	1	2	1		1	1							311
	1	6	4	1																										1							62
							1																														1
						2	2		8		3														5			1		1							22
4	19	33	93	14		64	220	3	205		14	36	2	2	2	53	23	1	12	2	3	4	7	2	23	4	71	62	23	30	22						1069
55	90	260	593	186	2	25	135		77		6	6	5			13	12	1	1		1	3			11	2	21	37	5	5	4						1739
5	13	2	3	2							1																										149
2	4																																				65
3	1	3	10	2	2																																1007
2	8	9	14	2	1	1										2									1													180
		1	1																																		918
																																					1355
																																					67
74	139	384	853	236	6	93	362	3	306	1	31	43	8	2	3	74	35	2	14	2	4	7	7	2	44	7	94	101	28	37	28						6945

表2．沖縄県史考古編年（縄文時代）

時代区分		土器型式	沖縄諸島発見の九州系土器	その他の編年資料
縄文時代	草創期			
	早　期	野国第4群 ヤブチ式土器 東原式土器	爪形文土器	ヤブチ式（6670±140yBP） 東原式土器（6450±140yBP）
	前　期	条痕文土器 室川下層式土器 曽畑式土器 神野A式土器 神野B式土器	条痕文土器 曽畑式土器	曽畑式土器（渡具知東原） 4880±130yBP
	中　期	面縄前庭Ⅰ式土器 面縄前庭Ⅱ式土器 面縄前庭Ⅲ式土器 面縄前庭Ⅳ式土器 面縄前庭Ⅴ式土器	←旧具志川A式 ←旧具志川B式 ←旧具志川C式 ←旧神野C式 ←旧面縄前庭式	
	後　期	神野D式土器 神野E式土器 伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器		伊波式（熱田原）3370±80yBP 伊波式（室川）3600±90yBP
	晩　期	室川上層式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器		入佐式並行 黒川式土器

（沖縄県教育委員会　2003『沖縄県史　各論編　第二巻　考古』より作成）

14類土器／荻堂式土器（二点）
15類土器／面縄東洞式土器（十六点）
16類土器／嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器（二一点）
17類土器／縄文時代後期相当の不明土器（二一三点）
底部（二四二点）
弥生～古墳時代並行期
18類土器／阿波連浦下層式土器（九三点）
19類土器／浜屋原式土器（三六五点）
20類土器／大当原式土器（三〇七点）
21類土器／九州弥生土器（七四点）
22類土器／奄美諸島系土器（一〇九点）
23類土器／スセン當式土器（十四点）
24類土器／弥生～古墳時代並行期の不明土器（五一点）
18類～23類土器の底部（三二五点）

図化した資料は五二六点で、その内、縄文時代の資料が二八八点、弥生～古墳時代並行期の資料が二三八点である。図化した資料についての詳細は観察表に示した。以下、類ごとで土器について述べる。

土器の実測図の縮尺は全て1／3です。

表1．土器出土状況

層	縄文時代早期						縄文時代前期												縄文時代中期			縄文時代後期								
	1類				2類	3類	4類		5類		6類		7類		8類		9類	4~6類不明	4~6類	10類	11類		12類		13類		14類	15類		16類	
	口縁	胴部	底部 丸底	底部 尖底	胴部	胴部	口縁	胴部	口縁	胴部	口縁	胴部	口縁	胴部	口縁	胴部	口縁	胴部	底部	口縁	口縁	胴部	口縁	胴部	口縁	胴部	口縁	口縁	胴部	口縁	胴部
かく乱									1									11							3	1	1		1	3	
表採・不明		13												1				33							1			1			
Ⅰ																															
Ⅱ																															
Ⅲ																		4			1				6					2	3
Ⅳ						1			1	2	1			3				50	3	5	2	8	4	2	71	4	1	6	8	7	4
Ⅴ							1	1	2	1	2	3		2	1		1	101	4				2		1					1	
Ⅴ・Ⅵ		4							1					5		1		46	1					1							
Ⅵ		2					3	15	4	6	13	6	1	27	3		1	886	9	5					5						
-								1	2				3	3	1	5		104	8	1	8	2			1						1
Ⅶ		157	1			9	20	39	5	4	9	11	3	27	5		1	603	21			1									
Ⅷ	4	1312	2	1	5	3	1				2					9		16													
Ⅸ	1	16									2			1				47													
合計	5	1504	3	1	5	13	25	56	16	13	29	20	7	69	10	15	3	1901	46	11	11	11	6	3	88	5	2	7	9	13	8

表3．南西諸島における弥生時代並行期の土器編年（新里編年）

時期	南部九州	奄美諸島	沖縄諸島
弥生前期	高橋Ⅰ・Ⅱ式		阿波連浦下層式
弥生中期	入来Ⅰ式		
	入来Ⅱ式		浜屋原式
	山ノ口Ⅰ式		
	山ノ口Ⅱ式		
弥生後期	松木園式・高付式		
弥生終末期	中津野式		
古墳時代	東原式	スセン當式	大当原式
	辻堂原式		
	笹貫式		
奈良・平安時代	土師器	兼久式	アカジャンガー式
	土師器		フェンサ下層式

（新里貴之　1999　の編年表に除筆し、作成）

新里貴之　1999「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究11』人類史研究会より

二、縄文時代の土器

（1）1類土器

1類土器は主にⅧ層からの出土で、薄手の土器である。県下でも嘉手納町野国貝塚群B地点下層出土の無文土器（注1）に次いで二例目である。本貝塚出土の土器の中で最も古い土器で、縄文早期に位置づけられる。出土数は一五一三点である。出土量は多いものの土器全体の形を把握できる資料は少なく、残存する資料から特徴を記述する。

口縁部を見ると深鉢形で、直口口縁がほとんどであるが、若干外反するものと小型の碗形になると思われる資料もみられる。口唇部は丸みをおびた舌状のものと方形状を呈するものがみられる。この土器の特徴である器壁は四～六・五㎜と薄いものである。器面調整はナデによってなされるが、とても丁寧で、裏面のみに若干輪積み接合部が残る。底部は尖底もしくは丸底である。胎土を中心にみると三種類に分類することが可能であるが、胎土分類で新旧を分けることはできなかった。胎土分類は以下の通り。

① 砂質っぽい胎土で土は細かく精選される。器色は黄褐色と黒褐色の二種類を基準色とする。ほとんどの資料が輪積み接合部からの破損である。積まれる粘土の幅は二・五～四㎝と土器の部位によって変わるようである。混入物の粒は小さく細かい。

② 砂質っぽい胎土で、土は細かく精選されるが、若干粉っぽく粉が手に付着する。器色は淡黄褐色や桃褐色を基準色とする。器面調整は丁寧であるが、①のように輪積み接合部から破損するようなことはなく、細かい破片である。混入物は石英・長石の粒

1類（薄手土器）

第1図

に比べ千枚岩？の粒が大粒でめだつ。

③　泥質っぽい胎土で①②のような精選さはあまりみられない。褐色を基準色とする。①②の胴部資料に比べて混入物の粒が大きく、器面調整が雑で、また器壁も若干厚めである。

①～③の内訳（表4）をみると①が一二二六点と圧倒的に多く、次いで②の一六八点、③が一一九点となっている。器壁の厚みは②の八㎜、③の九㎜と厚みのある資料が数点含まれるが、前述の四～六・五㎜と平均的である。図化したものについての観察は表12に示した。

以下に、図化した資料の概要を述べる。

口縁部（第1図1～5）

1は深鉢形の直口縁で、口唇より二・六cm下に細い隆起がみられる。胎土は砂質で焼成は良好。け・こ－99Ⅷ層出土。

2は深鉢形の直口縁であるが、若干外へ傾く。胎土は砂質で焼成は良好。け・こ－101Ⅷ層出土。

3は深鉢形の直口縁で、口唇部は方形を呈する。胎土は砂質で焼成は良好。け・こ－101Ⅷ層出土。

4は外反口縁である。胎土は砂質で焼成は良好。け・こ－101Ⅷ層出土。

5は口縁部が逆「八の字」状に開き、小型の鉢形に属すると思われる。外面に煤が付着する。胎土は泥質で焼成は良好。し－100Ⅸ層出土。

胴部（第1図6～12）

6は外面に煤が付着する。胎土は砂質で焼成は良好。け・こ－100・101Ⅷ層出土。

7は有孔胴部である。内面に煤が付着する。胎土は砂質で焼成は良好。さ－100Ⅶ層出土。

8は胎土が泥質で焼成はやや良好。け・こ－101Ⅸ層出土。

9は器面に指頭圧痕が若干みられる。胎土は砂質で焼成は良好。け－100Ⅶ層出土。

10は本類土器のなかで、比較的残存の良い大きめの胴部片である。外面に煤が付着する。胎土は砂質で焼成は良好。さ－100Ⅶ層出土。

11は胴部で、外面には煤が付着する。胎土は砂質で焼成は良好。し－100Ⅸ層出土。

12は胴部で、外面に煤が付着する。胎土は砂質で焼成は良好。さ－99・100Ⅶ層出土。

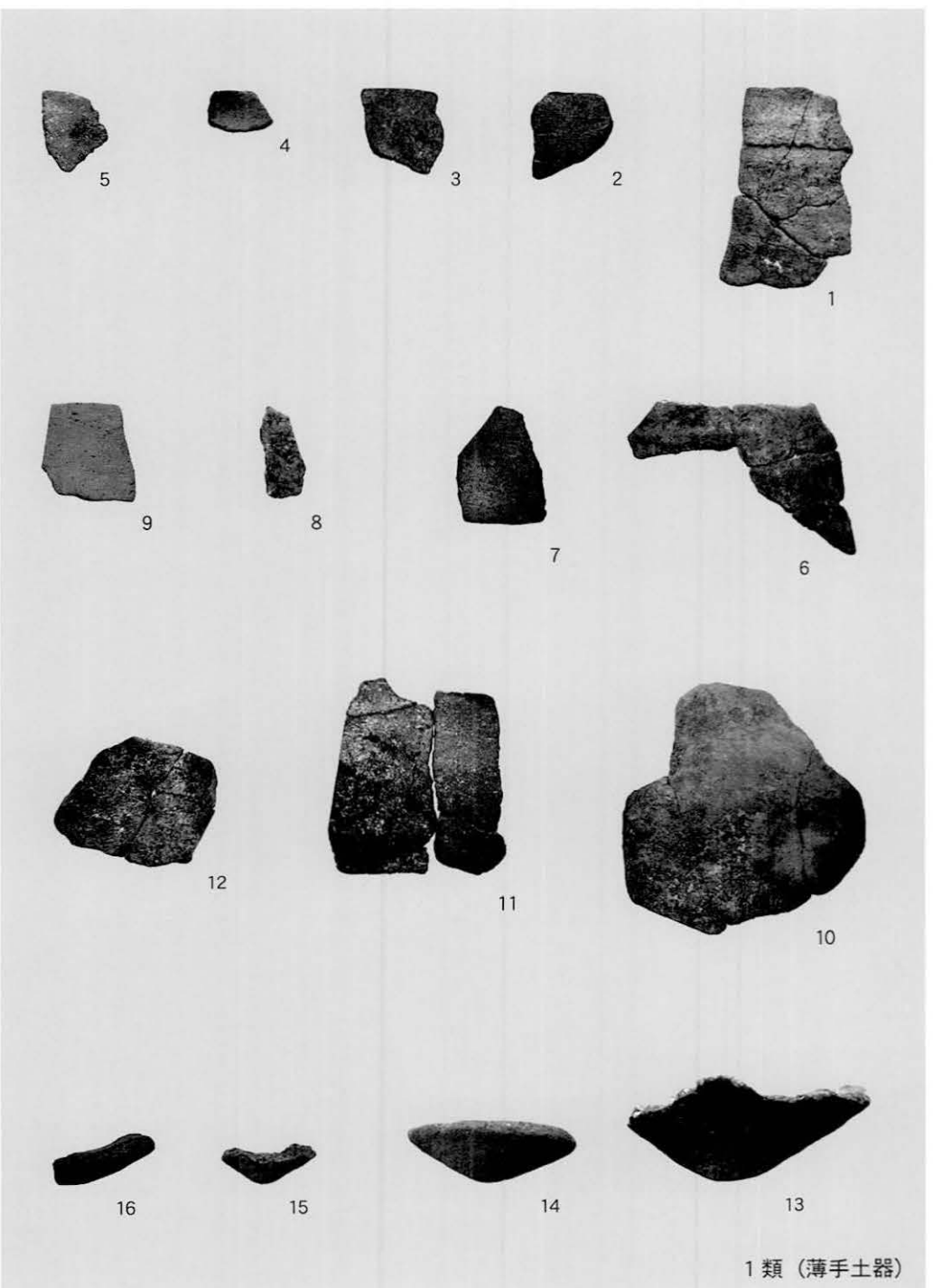
底部（第1図13～16）

13は尖底的な丸底である。外面に煤が付着する。両面とも「ナデ」がなされ丁寧な調整である。胎土は砂質で焼成は良好。す－96Ⅷ層出土。

14は尖底的な丸底である。両面とも「ナデ」がなされ、丁寧な調整である。胎土は砂質で焼成は良好。さ・し－99・100Ⅶ層出土。

15は尖底であるが、内底面は丸底状を呈する。立ち上がりが強い。胎土は砂質で焼成は良好。ち－95Ⅷ層出土。

16は底の厚みが薄い丸底である。胎土は砂質で焼成は良好。け・こ－101Ⅷ層出土。



1類（薄手土器）

（2）2類土器

2類土器は全てⅧ層からの出土で、主に細沈線を施す有文胴部である。五点のみの検出である。なお胎土分類は1類土器と同様である。以下に資料の概要を述べる。

胴部（第2図17～21）

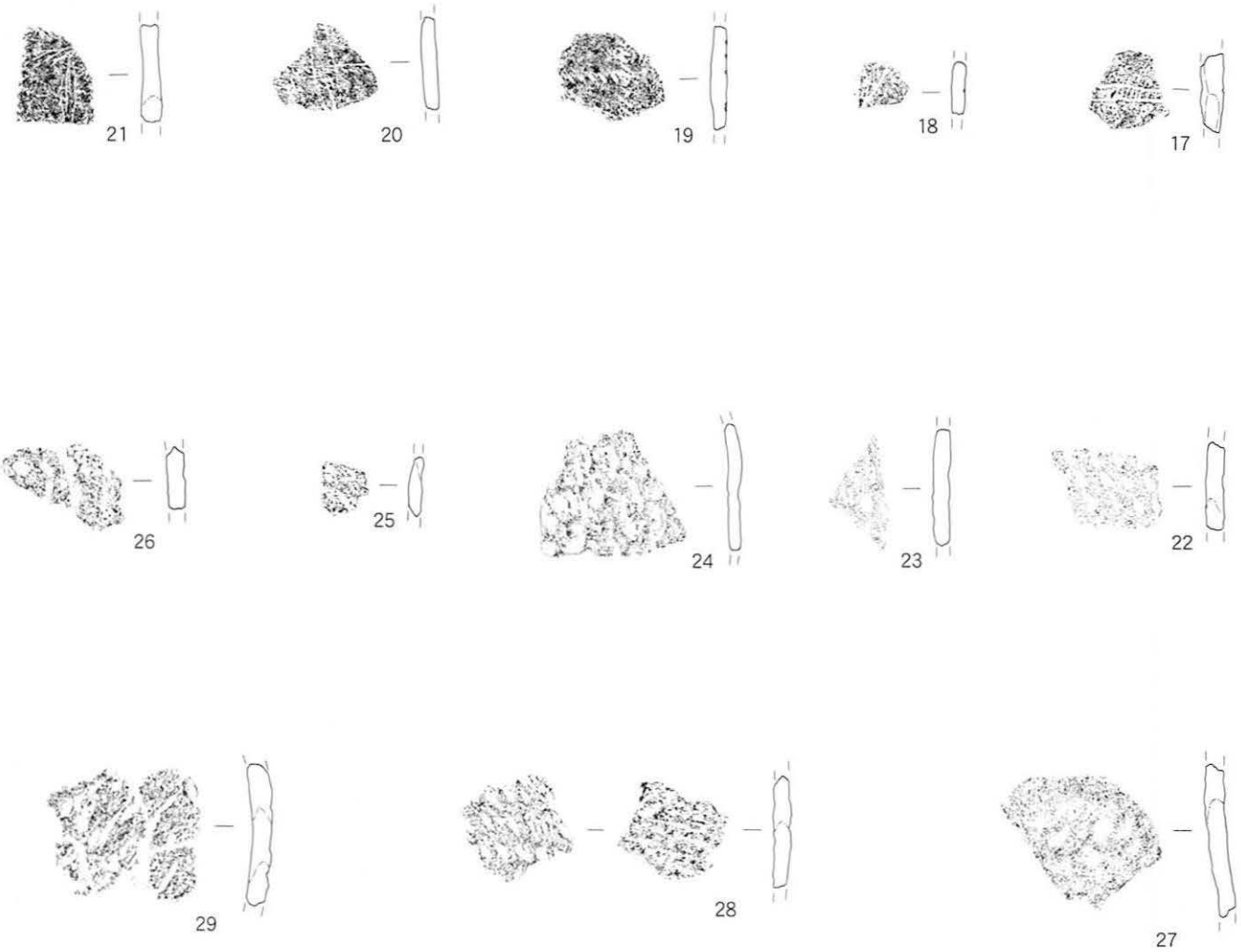
17は細沈線により梯子状の文様を描く。それに沿って上下に連点文が配される。さらに上部には細かい沈線が三条みられる。胎土は泥質で焼成はややもろい。調整は雑で、器面には凹凸がみられる。す－95Ⅷ層出土。

18は細沈線により長めの斜沈線を、その両側に短沈線を数条描く。胎土は泥質で焼成は良好。け・こ－99Ⅷ層出土。

19は縦横方向の連点文を組み合わせる。縦方向の文様は深く、横方向のそれは若干浅い。五㎜幅の工具を使用したと思われる。胎土は砂質で焼成はややもろい。す－95Ⅷ層出土。

20は横位の細沈線を一条描き、その下方に斜位の短沈線を描く。胎土は泥質で焼成はややもろい。し－95Ⅷ層出土。

21は横位細沈線を一条、その直下に斜めの細沈線を数条、さらに右下方にはやや長めの縦位細沈線を描く。胎土は泥質で焼成はやや良好。す－96Ⅷ層出土。



2類（細沈線文）17～21
3類（爪形文）22～29

第2図

(3) 3類土器

3類土器とした資料は縄文早期に位置づけられ、器面全体に爪や指頭を押し付けて文様を施している土器で、爪形文土器と呼ばれる土器である。出土はわずか十三点のみである。十三点のうち一点は与那城村薮地島ヤブチ洞穴遺跡（注2）出土の土器を標式とするヤブチ式土器で、他のすべては読谷村渡具知東原遺跡（注3）出土のものを標式とする東原式土器に類似するものであった。出土はⅦ層下部からⅧ層にかけてである。残念ながら口縁部・底部は検出されず、十三点とも胴部の破片である。胎土分類は1類土器に同じ。以下に、資料の概要を述べる。

胴部（第2図22～29）

22は縦位の爪形文が並列し、個々の爪形は「D字状」を呈し、若干斜めに傾く。東原タイプに類似する。胎土は泥質で焼成は良好。さ・し－99・100Ⅶ層出土。

23は横位に2列、細く浅い爪形文を施す。東原タイプに類似する。胎土は砂質で焼成は良好。け・こ－99Ⅷ層出土。

24は器面全体に楕円形状の指頭圧痕がみられる。縦の並びを意識したと思われる。指頭圧痕の際の爪痕を残す部分も若干みられる。ヤブチタイプに類似する。胎土は砂質で焼成は良好。し－99Ⅶ層出土。

25は縦位の爪形文が平行する。個々の爪形は「D字状」を呈し、若干斜めに傾く。東原タイプに類似する。胎土は泥質で焼成はやや脆い。ち－98Ⅳ層出土。

26は横位一列とその下部に縦位の浅い指頭圧痕が三列みられる。さらに下方にも爪形文が微かにみられる事から、爪形文と指頭圧痕を組み合わせる資料と思われる。東原タイプに類似する。胎土は泥質で焼成は良好。さ・し－99・100Ⅶ層出土。

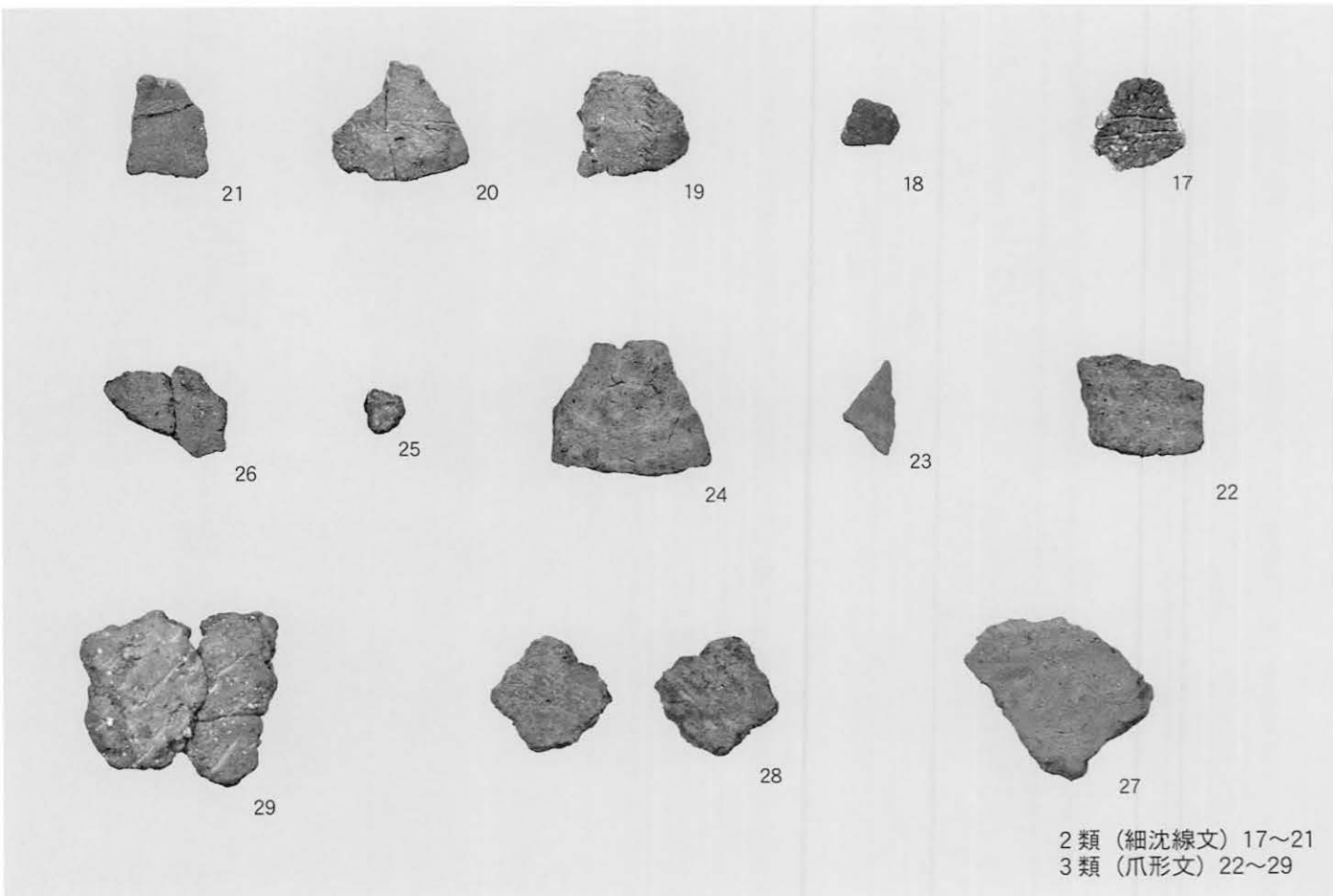
27は弱い段を有し、それより上部は無文である。段より下部は横位の指頭圧痕が二列みられ、浅く不鮮明であるが、やや長めの楕円形状となる。東原タイプに類似する。胎土は泥質で焼成はやや良好。け・こ－99Ⅶ層出土。

28は爪形が右側に深く左側にはねる「逆D字状」を呈する。東原タイプに類似する。胎土は泥質で焼成は良好。ち－95Ⅶ層出土。

29は爪形が長い楕円形を呈する。東原タイプに類似する。胎土は泥質で焼成はやや良好。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

表4．1～3類土器　胎土分類

胎土分類	1類土器	2類土器	3類土器	合計
①	1226	1	2	1229
②	168			168
③	119	4	11	134
合計	1513	5	13	1531



2類（細沈線文）17～21
3類（爪形文）22～29

（4）4類土器

4類に分類される土器は縄文時代前期に位置づけられる土器である。器種は深鉢形と僅かに壺形がみられ、底部は丸底となる。器面に篦や棒状工具で刺突文・鋸歯文・平行文・羽状文などを連続的に描き、幾何学的文様を口縁部から底部まで施す。本土器は熊本県宇土市岩古層町曽畑の曽畑貝塚出土の土器を標式とする曽畑式土器の範疇に入るものである。本貝塚出土の曽畑式土器は、特徴ともいえる、胎土にみられる滑石は含まれていない。本土器は器形・文様から次の三種に細分可能である（表5）。

分類結果は表6に示した通りである。以下、資料の概要を述べる。

深鉢形（第3図30～32・34～38）

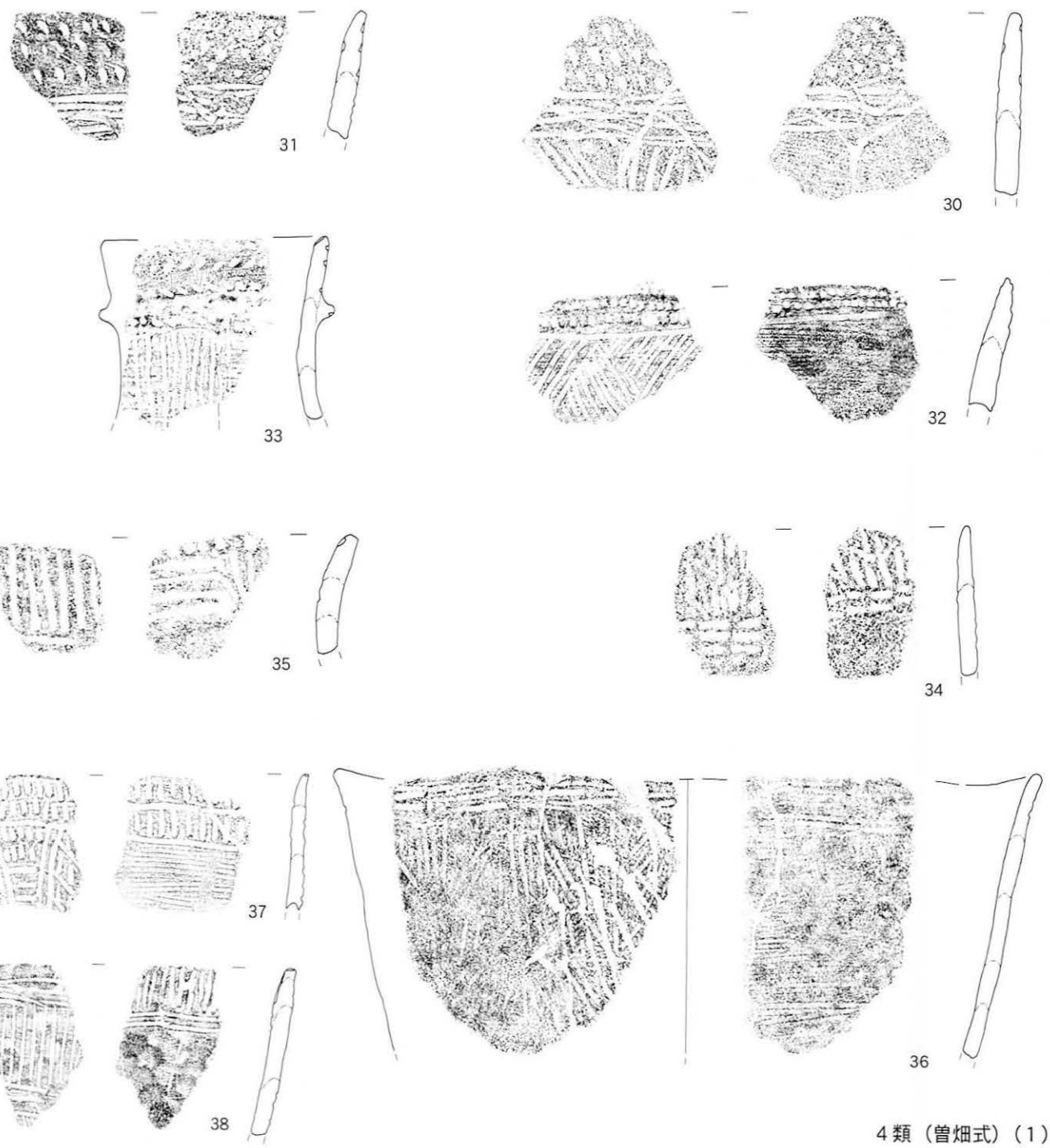
壺形（第3図33）

30は口唇部が隅丸方形を呈する。文様は外面に列点文を三列施し、その下方に横位と斜位の押し引き文を数条施す。三㎜幅の棒状工具で施文する。内面も同様の文様だが、斜位の押し引き文はみられない。胎土は泥質で焼成は良好。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

31は口唇部が隅丸方形を呈し、文様構成は同図30と同様である。胎土は泥質で焼成は良好。こ－100Ⅶ層出土。

32は口唇部が舌状を呈する。文様は外面に三列の列点文と一条の沈線文を、その下方に綾杉文を施す。内面には二列の列点文に一条の沈線文を施す。三㎜幅の棒状工具を使用している。胎土は砂質で焼成はやや良好。け・こ－99・100Ⅶ層出土。

33は壺形に属する。口唇部から三・五㎝下方に三角突帯を貼付ける。外面に三列の列点文を施し、突帯の両端にも列点



第3図　4類（曽畑式）（1）

文がみられる。突帯下は縦位沈線七条とその両端には格子状の沈線文を施文する。内面には斜沈線文が細かく刻まれる。推算口径は一一・四cm。胎土は泥質で焼成は良好。こ－100Ⅶ層出土。

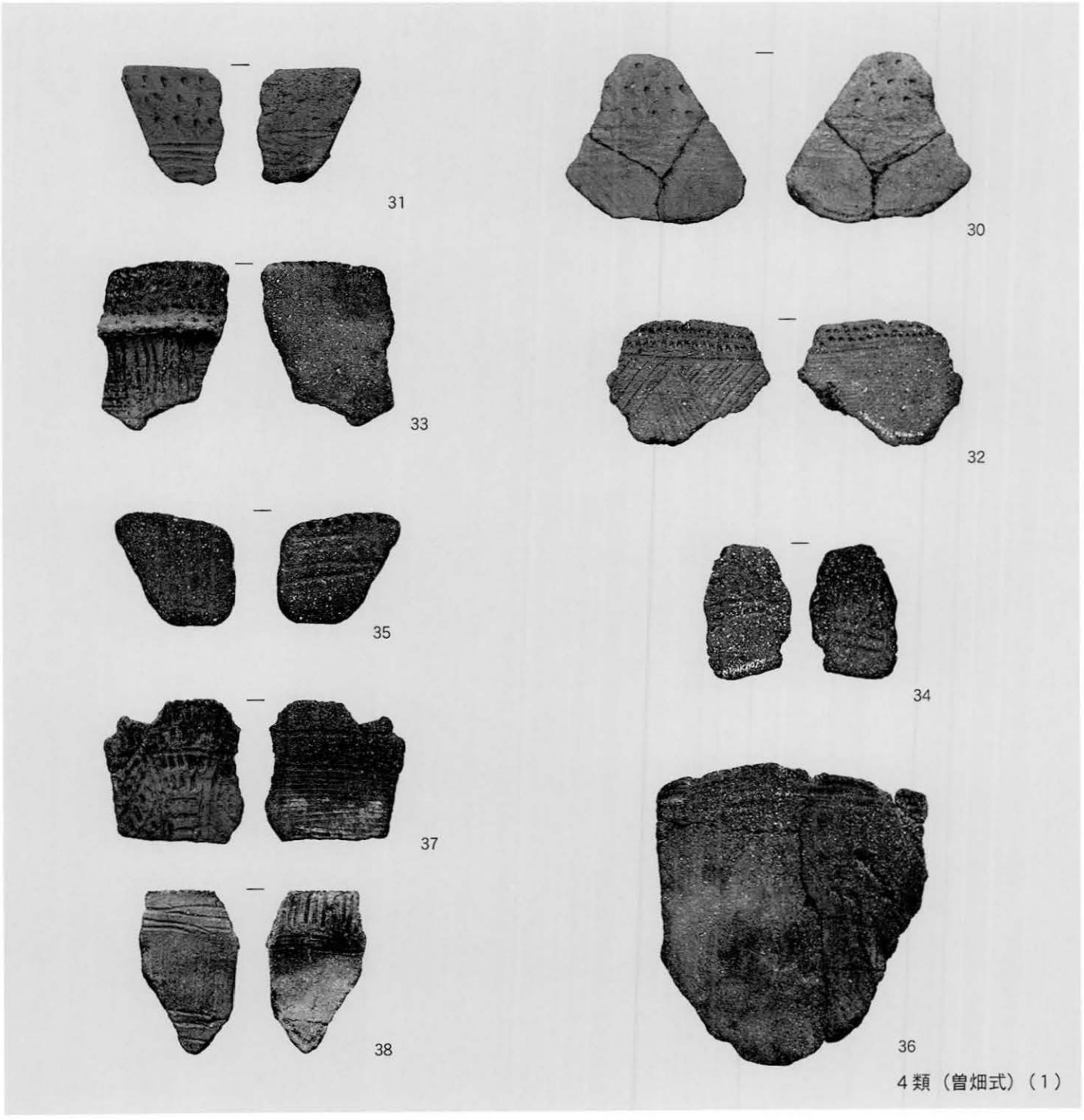
34は山形口縁である。外面は口唇部直下から縦位沈線を施し、その下方は横位短沈線が三条と不鮮明な斜位の沈線がみられる。内面も外面と同様の文様を施すが、後者に比べて縦位沈線が短い。胎土は砂質で焼成は不良。さ－99Ⅶ層出土。

35は口縁部が若干外反する。外面は口唇直下から数条の縦位沈線を施し、その下方に横位沈線が一条みられる。内面は列点文を一列施し、その下方は縦・横の沈線を施文する。胎土は砂質で焼成は不良。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

36は直口口縁で若干ラッパ状に開く。山形口縁の可能性が高い。外面には横位の長沈線文を三列配し、その下方に縦位沈線文を施す。縦位沈線文の間には斜位の沈線文を施す。推算口径は四三・六cm。胎土は砂質で焼成はややもろい。し－95Ⅴ層出土。

37は口唇部が舌状を呈し、直口口縁となる。文様は口唇部に刺突文を施し、外面口縁部直下から横位沈線文二列の下に縦・横・斜めの長短沈線、さらに曲線文を組み合わせる。内面は縦横沈線を組み合わせる。胎土は泥質で焼成は良好。け－99Ⅶ層出土。

38は口唇部が舌状を呈し、口縁直下から不規則な横位沈線を上下に施文し、その間を縦位の長沈線文を配する。内面は長さのまばらな縦位沈線とその下方に横位沈線を二条施文する。胎土は泥質で焼成は良好。け－99Ⅶ層出土。



4類（曽畑式）（1）

口縁部（第4図39・40・42）胴部（第4図41・43～46）

39は深鉢形に属し、口唇部は丸みを帯び、直口口縁部となる。外面は縦位の短沈線で列点文を三条施し、その下方は縦横の組み合わせで雑な四角組合文を施す。内面は口唇部から延長して二列の横位沈線を施文する。胎土は砂質で、焼成はやや良好。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

40は深鉢形に属し、山形口縁ではないが、若干盛り上がる。外面には条痕のような雑な横位沈線文を五～六条、その下方に鋸歯状の浅い沈線文を施す。胎土は砂質で、焼成は不良。こ・さ－100・101Ⅶ層出土。

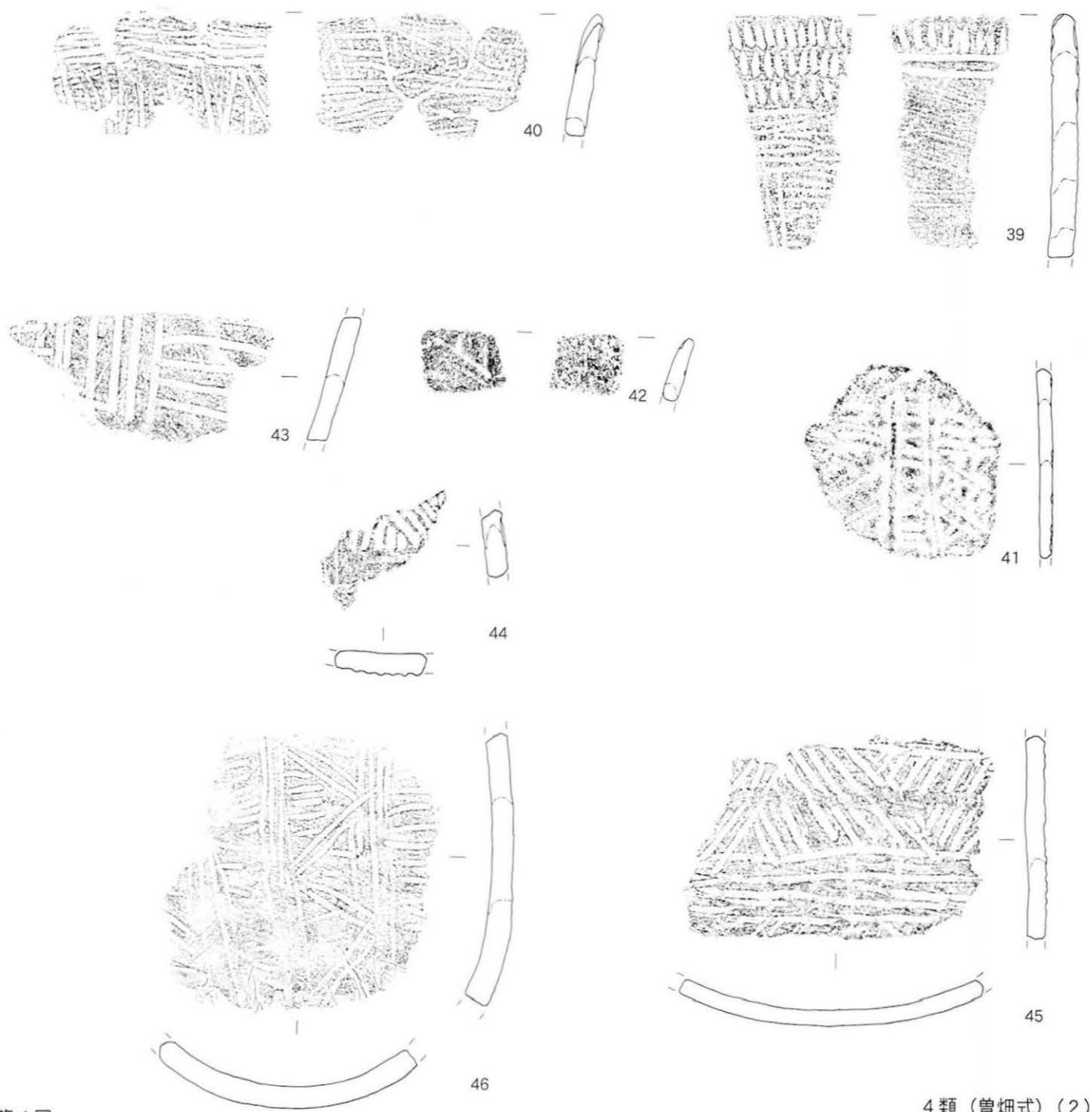
41は有文胴部で、深鉢形に属すると思われる。中央に梯子状の文様を描き、上部は横位六条の沈線文、下部は上部同様の梯子状の文様を斜めに配する。胎土は砂質で、焼成は不良。さ－96Ⅶ層出土。

42は深鉢形に属し、直口口縁である。外面にはやや太めの工具により縦横・斜めに施文する。内面は刺突文を一列施す。胎土は砂質で、焼成はややもろい。せ－95Ⅷ層出土。

43は有文胴部である。四㎜幅の篦状工具により縦横方向の沈線で四角組合文を施す。部分的に交差する箇所がみられる。胎土は砂質で、焼成は良好。け－99Ⅶ層出土。

44は有文胴部である。四～五㎜幅の短沈線で鋸歯状の文様を施す。三角組合文の可能性が高いと思われる。胎土は砂質で、焼成はやや良好。け・こ・さ－100・101Ⅶ層出土。

45は有文胴部である。横位沈線文と三角組合文を交互に施す。四㎜幅の篦状工具を使用したと思われる。胎土は泥質で、焼成は良好。す・そ－92Ⅵ層出土。



第4図　4類（曽畑式）（2）

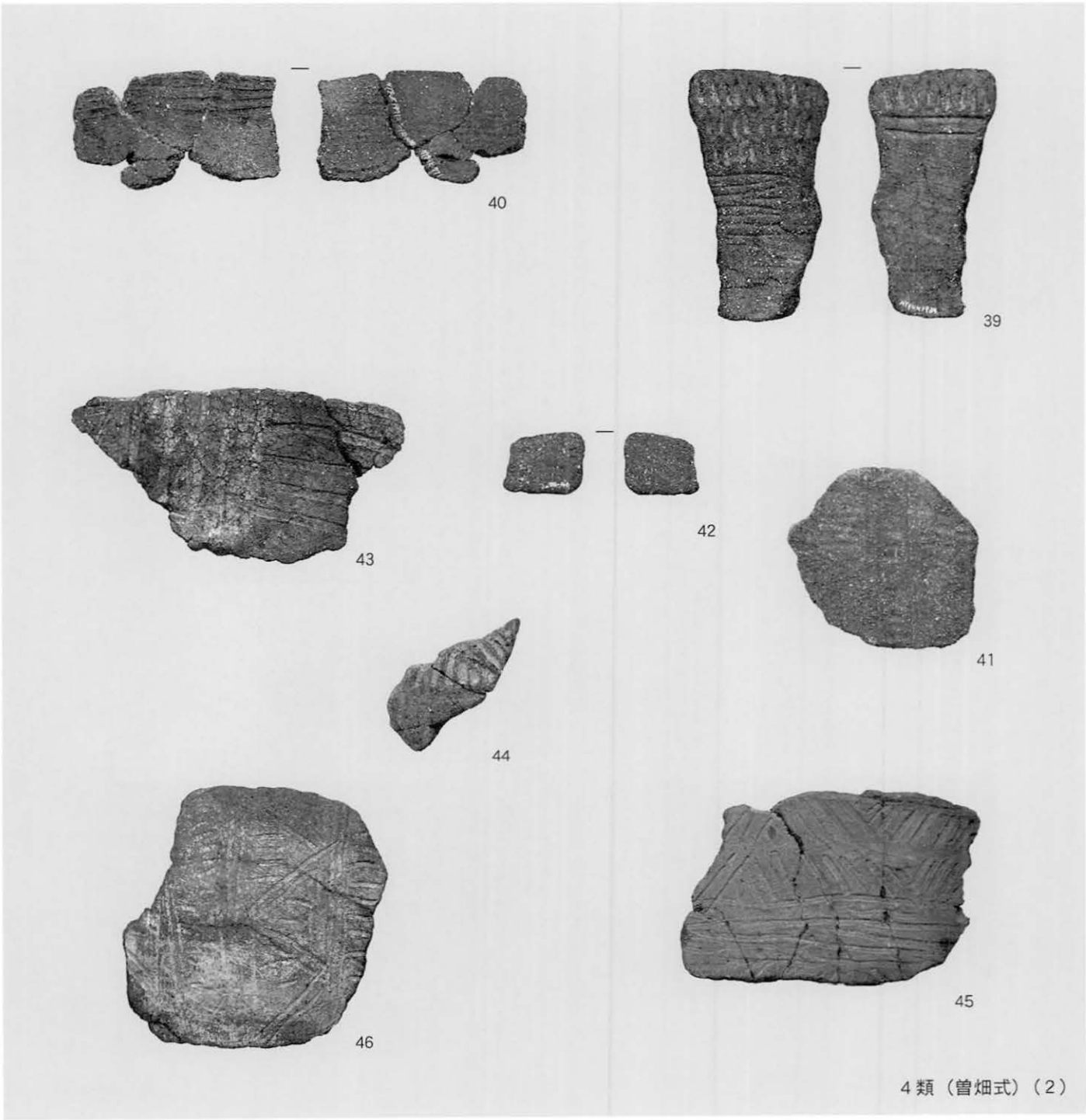
表６．４類土器分類結果

分類	口縁部	胴部	合計
①	7	1	8
②	11	13	24
③	7	26	33
不明			16
合計			81

表５．４類類土器分類基準

分類	器形	文様				
		口唇部	口縁部	頸部	胴部	内面
①	直線的	－	刺突連点三～四条	横位沈線・短沈線を数条	三角組合文もある	必ずしも同様でない
②	直線的	刺突文もある	縦横位の長短沈線	羽状文・三角又は四角組合文、まれに曲線文を上書き		縦横位の沈線文を主体、まれに刺突連点文
③	若干外反	刺突文もある	沈線による羽状文・三角組合文。区画はみられず雑。			縦横位・斜位の沈線文

46は有文胴部で、底部に近い部分と思われる。縦位沈線で割り付けを行い、その間に横位短沈線文と鋸歯状の文様を施す。胎土は泥質で、焼成は良好。こ－99 Ⅶ層出土。



４類（曽畑式）（２）

口縁部（第5図49～51）

胴部（第5図47・48）

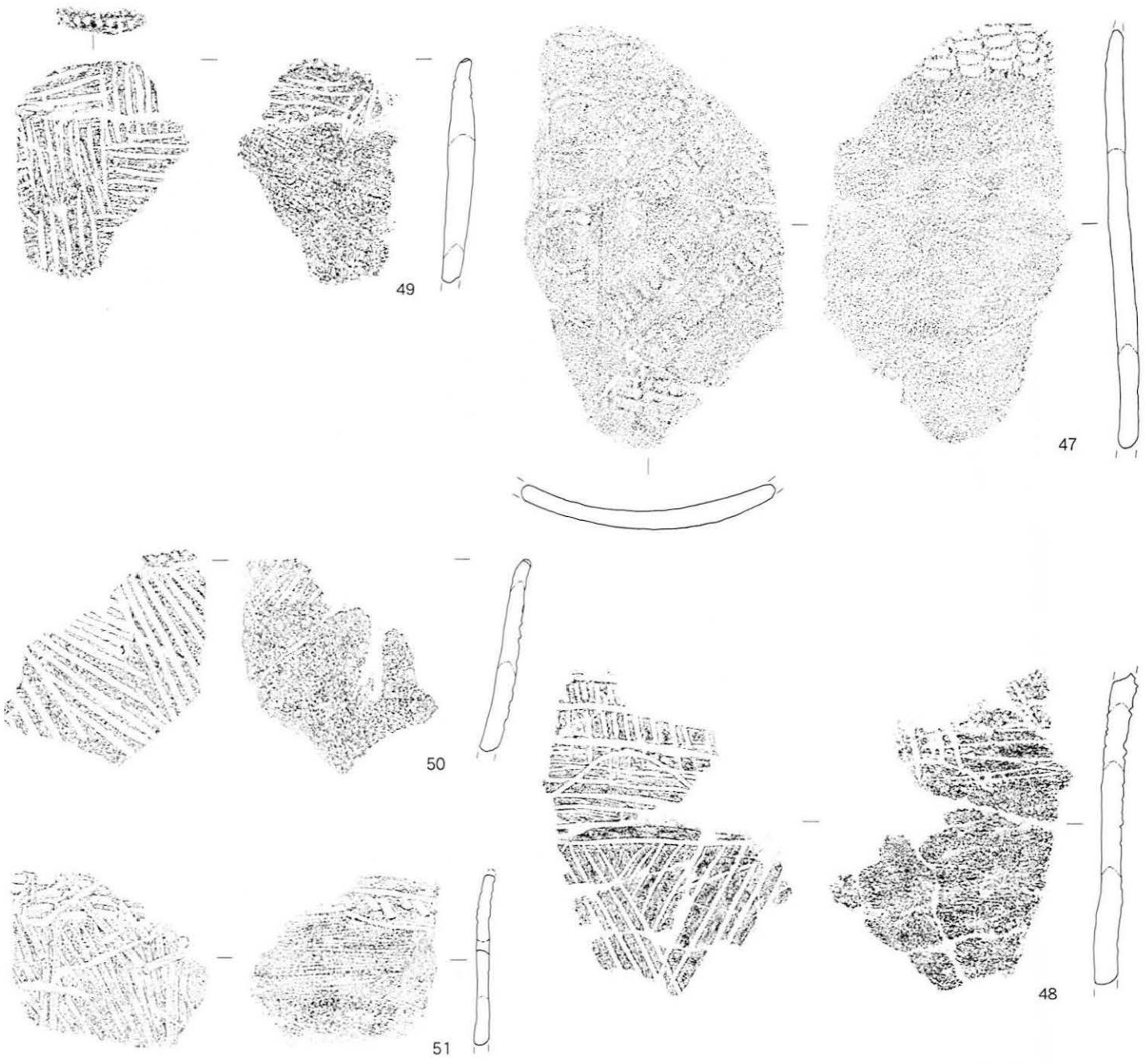
47は有文胴部である。水磨を強く受ける。外面には横位短沈線で数条の列点を施し、胴中央に押し引きと思われる文様がみられる。内面は四条の横位短沈線がみられる。施文工具は五㎜幅の物を使用したと思われる。胎土は砂質で、焼成はやや良好。そ－91Ⅵ層出土。

48は有文胴部で、深鉢形に属する。外面には縦横の沈線の組合せの下方に三角組合文を施す。その上方には緩やかな波状文を施す。内面はくずれた縦横沈線を施文する。胎土は砂質で、焼成はやや良好。つ－95Ⅶ層出土。

49は深鉢形に属し、山形口縁と思われる。口唇部には刺突文を施す。口縁部外面には縦横の沈線文を組み合わせるが、割り付け線はみられない。内面も同様の文様を施すが、胴部まで施文は及ばない。施文工具は三～四㎜幅の棒状工具を使用したと思われる。胎土は砂質で、焼成は不良。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

50は深鉢形に属する。口唇部に刺突文を施し、外面口唇直下から斜位の長沈線を深く施文する。内面は斜位の短沈線を浅く施文する。施文工具は三㎜幅の物を使用したと思われる。胎土は砂質で、焼成はやや良好。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

51は深鉢形に属し、四㎜幅の篦状工具により短沈線を三～四条施文する。その下方には四～六㎜幅の有る、斜めV字状の長沈線を施文する。内面は沈線のなかに斜位の短沈線を刻む。胎土は砂質で、焼成はやや良好。け・こ－100・101Ⅶ層出土。



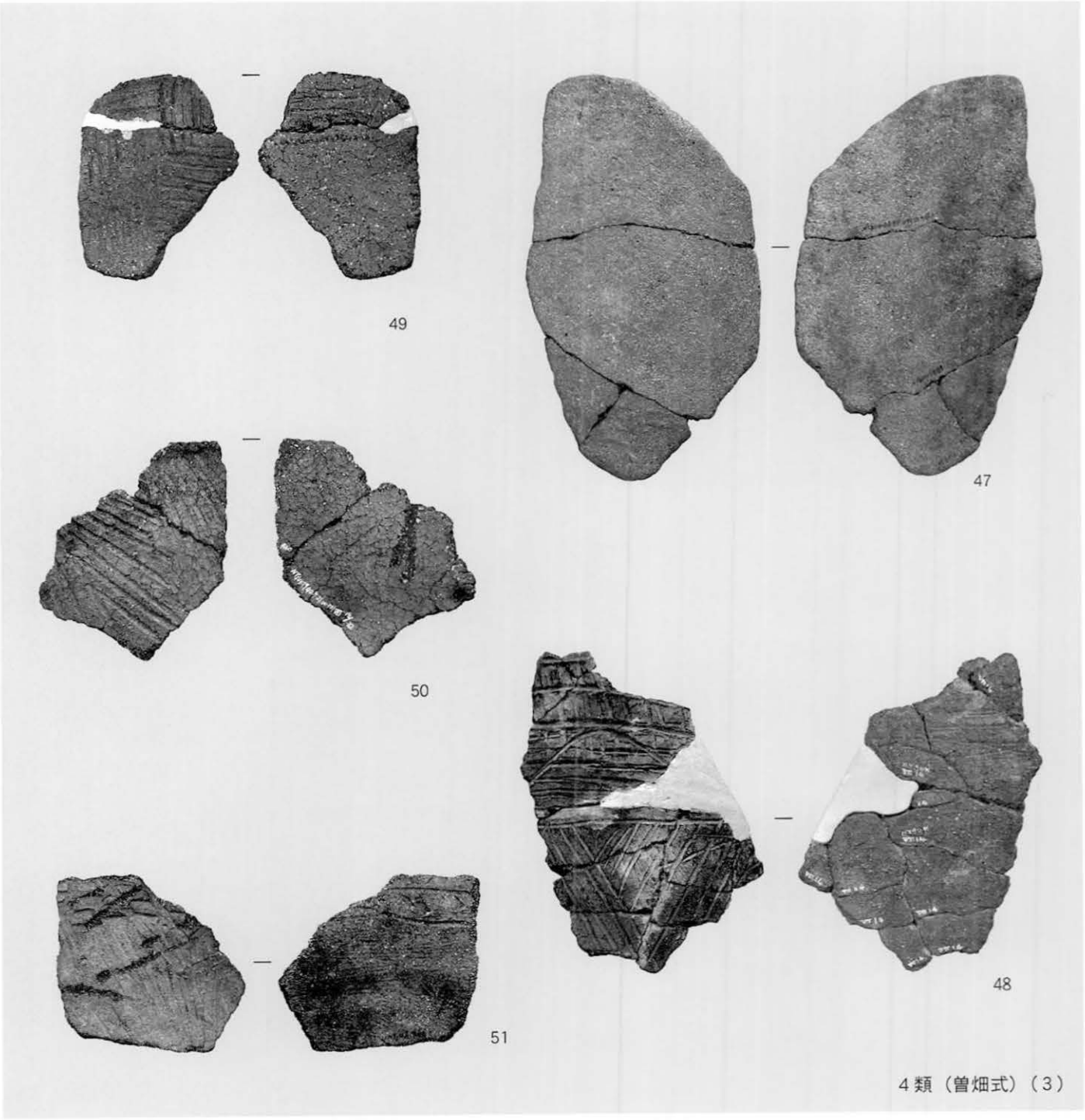
第5図　4類（曽畑式）（3）

4類－44　分類②

4類－37　分類②

4類－33　分類①

4類－32　分類①



4類（曽畑式）（3）

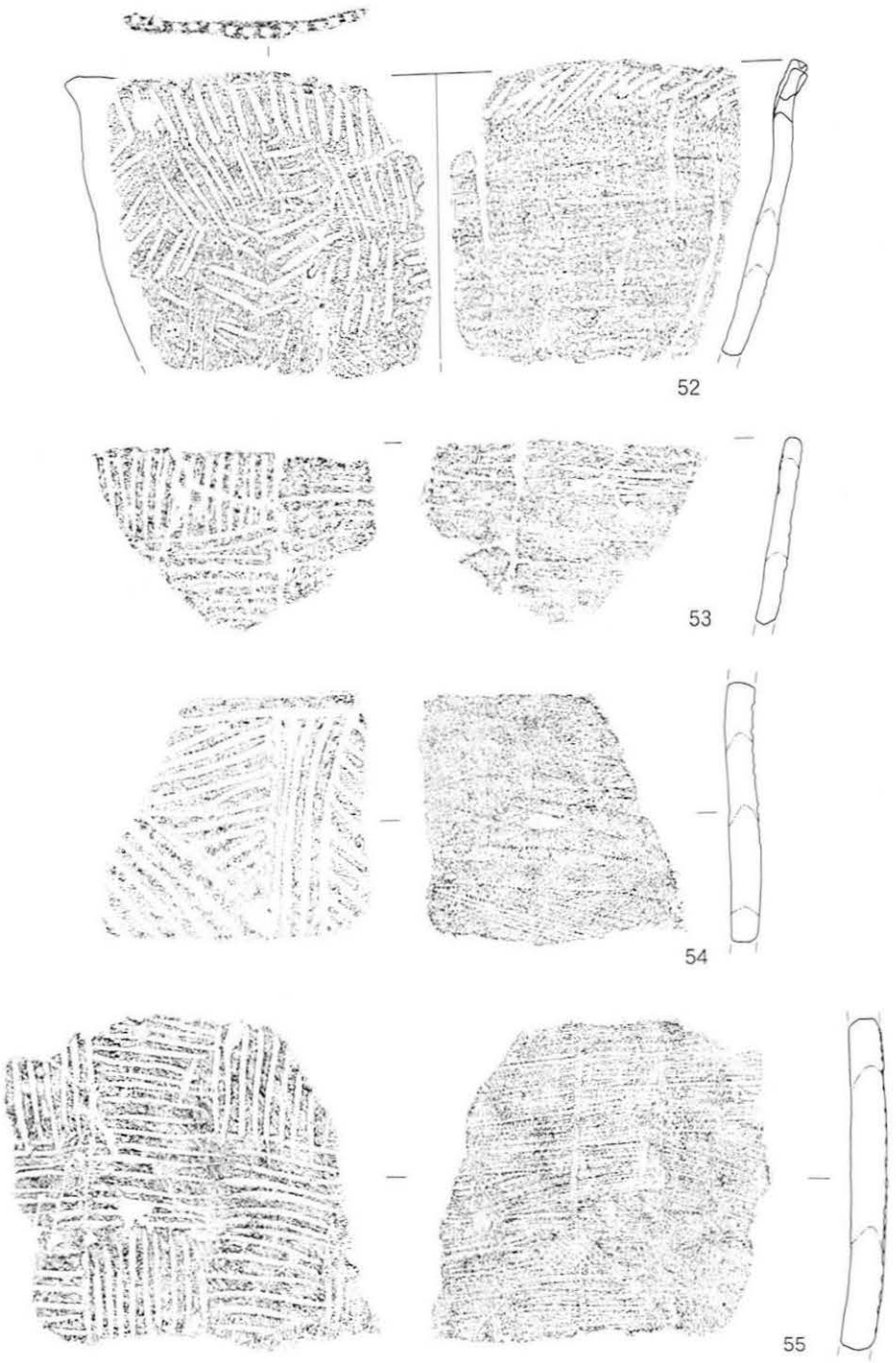
口縁部（第6図52・53）
胴部（第6図54・55）

52は深鉢形に属する。口縁部から一cm下方に孔がみられ、焼成後に穿孔されている。孔径は外一cm、内五mmを測る。文様は口唇部に刺突文を施し、口縁部から三mm幅の棒状工具により短沈線を施文する。内面は長さのまばらな沈線を施す。推算口径は三〇・二cm。胎土は砂質で、焼成はやや良好。け・こ－100・101Ⅵ層出土。

53は深鉢形に属し、口唇部が丸みを帯び、直口口縁となる。外面は長沈線を縦と横に組み合わせる。内面は横位沈線を二～三本施文し、一部に斜沈線を施文する。胎土は砂質で、焼成はもろい。し－95Ⅶ層出土。

54は口縁部付近で破損した有文胴部である。外面に横位沈線文を一条、それに直角に五条一組の縦位沈線文を描く。縦位沈線から「ハ」の字状に広がり、菱形を形成すると思われる。施文工具は三mm幅の棒状の物を使用したと思われる。す－95Ⅵ層出土。

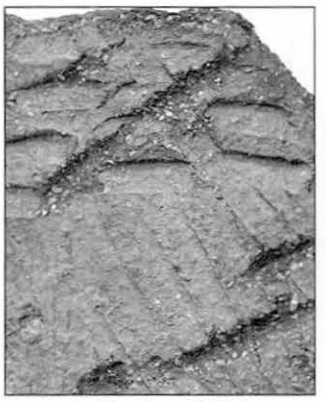
55は有文胴部である。外面は縦横位の沈線を平行に組合せる。文様は下方から上方へ向かって施文されるが、縦と横の沈線は必ずしも交互に施されない。内面には調整痕の上に浅い縦位沈線を引く。胎土は砂質で、焼成はもろい。す－95Ⅵ層出土。



第6図　4類（曽畑式）（4）

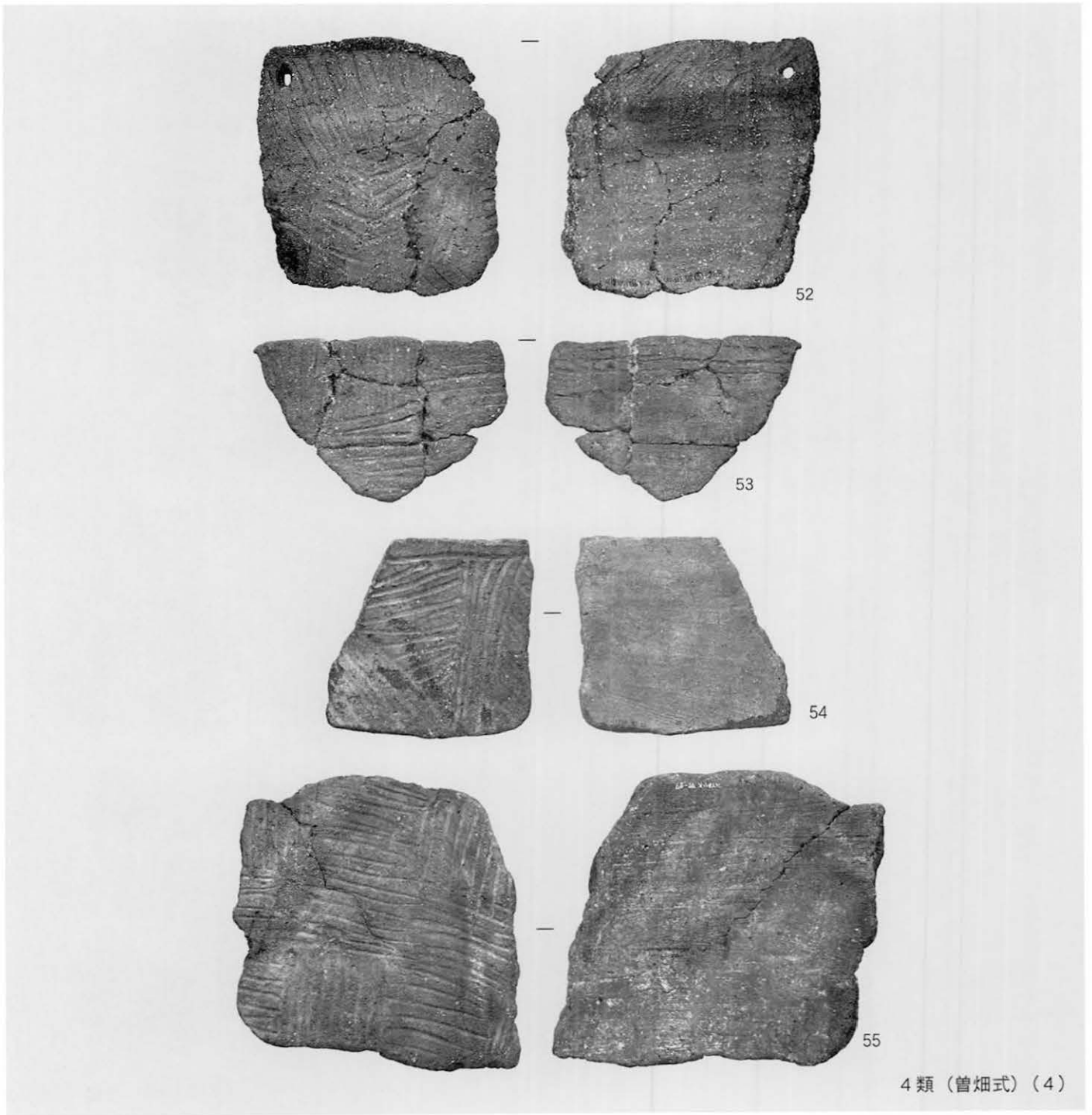
4類－54　分類③

4類－52　分類③



4類－51　分類③

4類－48　分類②



4類（曽畑式）（4）

（5）5類土器

5類に分類される土器も縄文時代前期に位置づけられる土器である。器種はすべて深鉢形で、底部は尖底あるいは丸底。器面には粗い沈線や条痕などをもつ。貝殻や棒状工具による刺突文や沈線文が施文されるものもある。口縁部形態は直口口縁と口縁が外側へやや開くものがある。本土器は、沖縄市仲宗根室川原の室川貝塚（注4）最下層出土の土器を標式とする室川下層式土器に含まれる。さらに本類土器は室川下層式土器の特徴を明確に有するものを5類土器A、後述する6類土器との共通性をもつが広義で5類土器に含めるものを5類土器Bとする。

表7．5類土器分類結果

分類	口縁部	胴部	合計
A	13	9	22
B	3	4	7
合計	16	13	29

5類土器Aは、文様から次の通りに細分可能である。

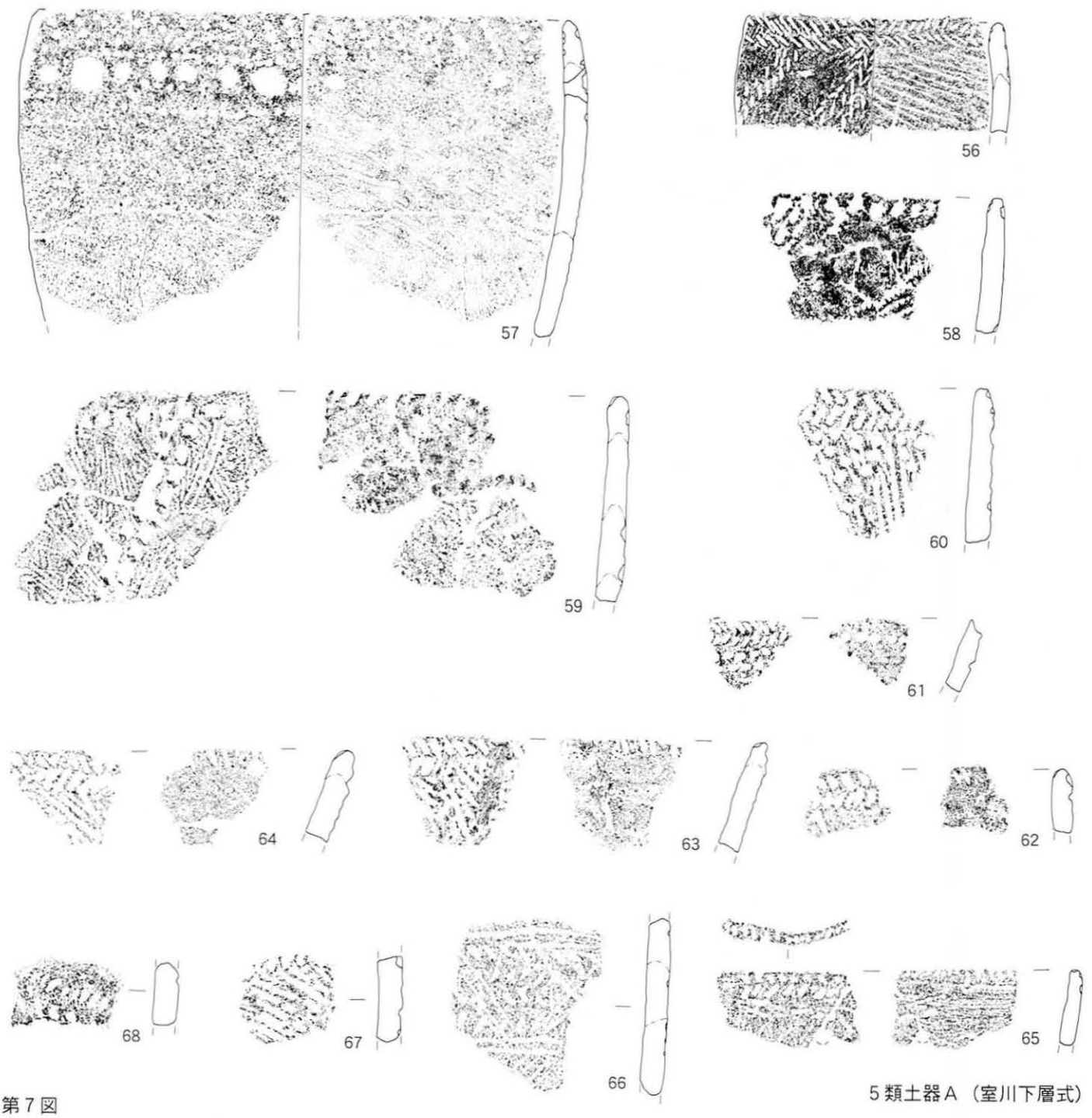
文様の分類

①羽状文＋（斜行）列点文
②羽状文又は列点文＋（斜行）沈線文
③羽状文
④列点文のみか羽状文のみ
⑤刺突文＋沈線文あるいは条痕
⑥羽状文＋不明

なお①～⑥の番号は観察表に記載したので参考されたい。以下に資料の概要を述べる。

口縁部（第7図56～65）
胴部（第7図66～68）

56は口唇部が丸みを帯び、器形は若干



第7図　5類土器A（室川下層式）

マリ状を呈する。文様は外面に二条一組の斜位の刻文を施し、その下方に二列一組の列点を施文する。斜行及び二列一組の羽状文をやや間隔を空けて施す。内面は羽状文に横位沈線文を施す。推算口径は一三・五cm。胎土は砂質で、焼成はやや良好。さ－100Ⅵ層出土。

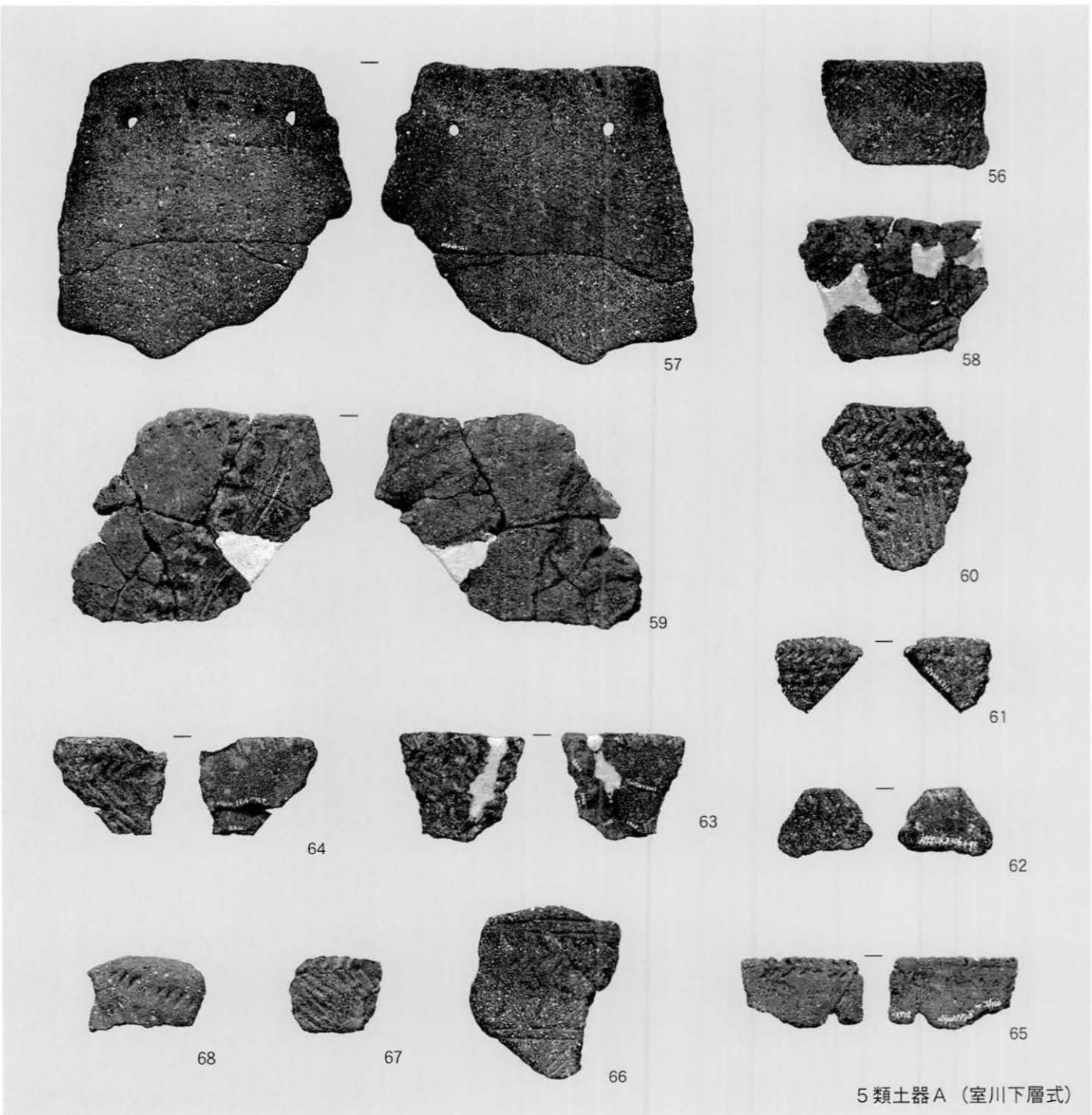
57は口縁が若干内湾する。口縁部直下に二個の孔がみられ、いずれも外面から穿孔されている。文様は外面最上段に三～四個一組の斜行列点文、中段に上下二列の小型列点文、その間に大型の列点文を施す。下段は一列の列点文に斜行の列点文を配する。内面は四～五個一組の斜行列点文を施す。推算口径は二八・四cm。胎土は砂質で、焼成は不良。し－96Ⅶ層出土。

58は外面に刺突連点、その下方に右斜め方向の長方形型の列点文を施す。列点文の両側に細かい刺突が施文され、胴部にも右斜め方向の細かい刺突がみられる。内面には斜位の刺突文を施す。胎土は泥質で、焼成は良好。と－93４層出土。

59は外面に一条の刺突連点文、その下方に二条一組の右斜め大型列点文を施す。列点文と平行し、六・五㎜幅の太い沈線を施文する。内面は斜位の刺突文を施す。胎土は泥質で、焼成は良好。と－93４層出土。

60は山形口縁になると思われ、文様は口唇部に刺突文を施し、口縁部上部に羽状文、その下方に五㎜幅の刺突で逆三角形を四列配する。間には斜位の条痕がみられる。胎土は砂質で焼成は良好。つ－99Ⅴ層出土。

61は口縁部が外面に大きく傾く。口唇部は舌状口唇であるが、施文のため外面は若干くぼむ。外面には羽状文、その下方に二列の横位列点文を施す。さらにそ



５類土器Ａ（室川下層式）

の下方には斜行列点を施文すると思われる。内面は一列の刺突文がみられるのみである。胎土は砂質で、焼成は良好。つ－98Ⅵ層出土。

62は口唇部が丸みを帯びる。外面に羽状文を施し、その下方に四㎜幅の沈線文がみられるが、詳細は不明である。内面は口唇近くに浅い短沈線を施文する。胎土は泥質で、焼成はやや良好。ち－98Ⅳ層出土。

63は口縁部が外面に大きく傾く。口唇部は施文の為、細くなる部分もある。外面は羽状文の下方に斜位の沈線文を施し、施文は深い。内面は口唇に縦位の刺突文を施す。胎土は泥質で焼成は良好。つ－98Ⅴ・Ⅵ層出土。

64は63と同様の器形を呈し、同様の文様を施す。胎土は泥質で、焼成は良好。つ－98Ⅴ層出土。

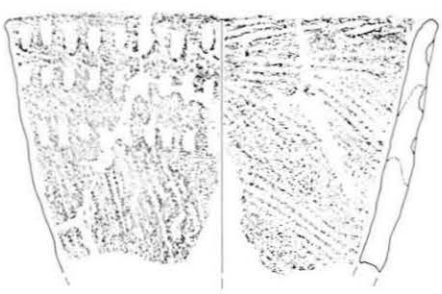
65は口唇部に刺突文を施し、部分的に深く施文されたため、内面にくい込む。外面は羽状文を施す。胎土は砂質で、焼成は良好。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

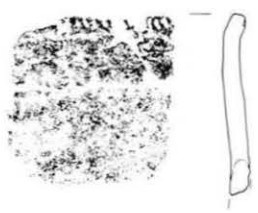
66は二～三条の横位沈線文の間に羽状文を二列施す。これらの文様の下に斜位の沈線文が僅かにみられる。胎土は砂質で、焼成はやや良好。た・ち－91・92Ⅵ層出土。

67は残部上方に刺突文がみられるが、羽状文の一部と思われる。下方は深い施文の条痕がみられる。胎土は泥質で、焼成は良好。つ－98Ⅳ層出土。

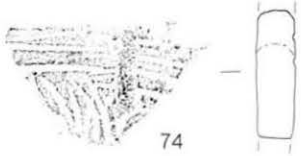
68は三㎜幅の短沈線によりやや深めの羽状文を施す。胎土は砂質で、焼成は良好。こ－99Ⅶ層出土。

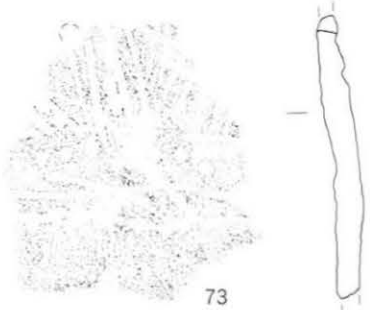
口縁部（第8図69～71）
胴部（第8図72～75）

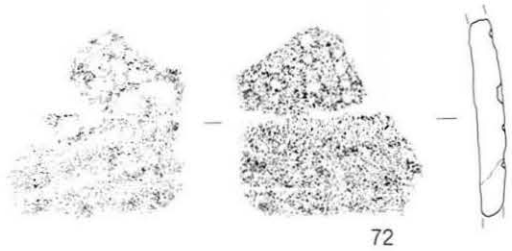

70


69

71


74


73


72

75

5類土器B（室川下層式に近い）

第8図

5類土器Bは文様から次の通りに細分可能である。

文様分類

① 沈線文
② 刺突文＋条痕
③ 沈線文＋曲線文
④ 刺突文のみ
⑤ 刺突文＋沈線文
⑥ 沈線文のみ（条痕も含む）

但し、条痕をナデ消しているものをa、ナデ消していないものをbとして観察表に記した。

以下に資料の概要を述べる。

69は口唇部が若干外反する。口縁部に斜位の浅い刺突文を施す。胎土は砂質で、焼成はやや良好。せ－95Ⅵ層出土。

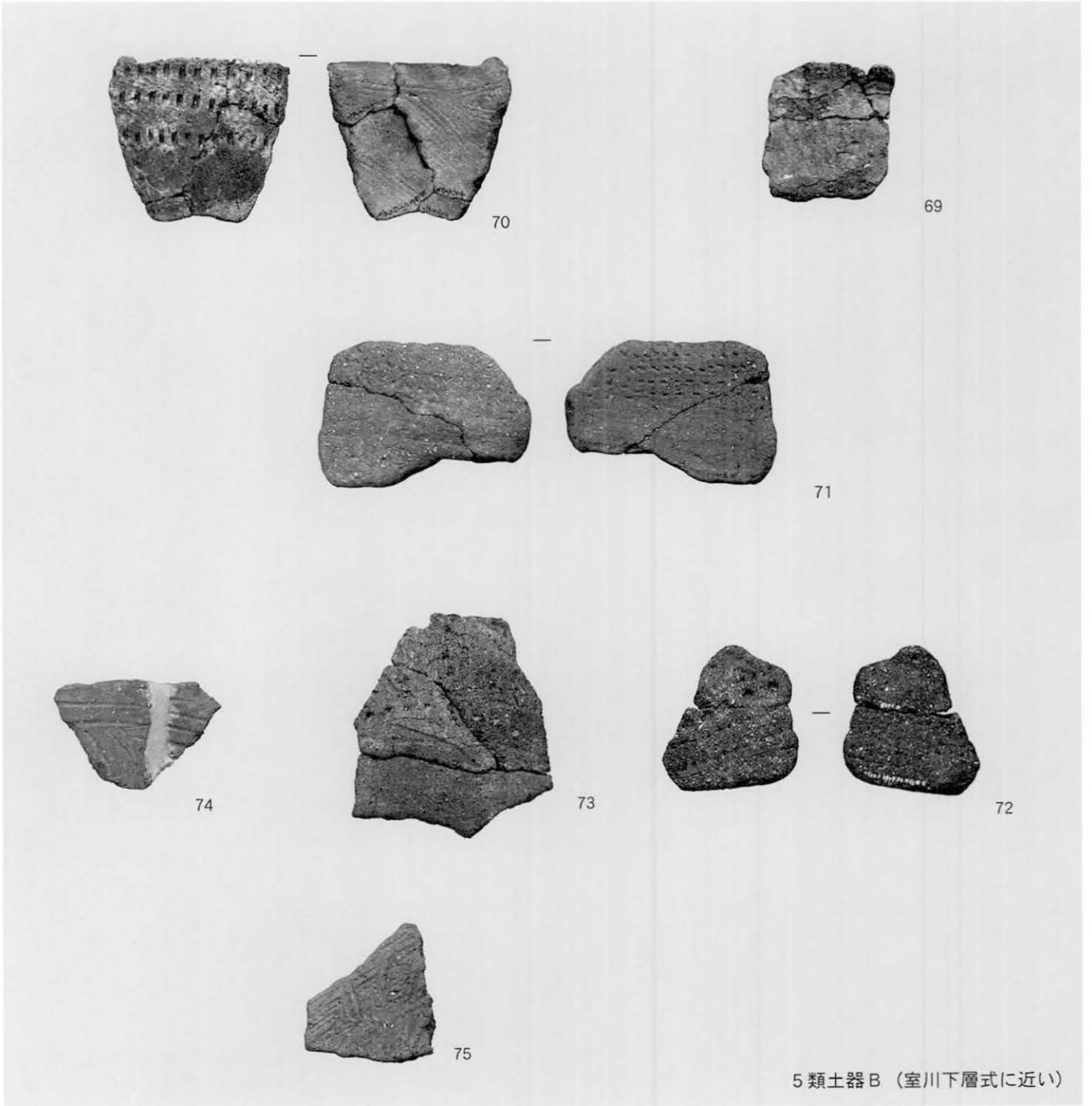
70は小型の深鉢形土器で、推算口径は一七・四㎝を測る。口縁部外面に三㎜幅の棒状工具により縦位の列点文が三列施される。胎土は泥質で、焼成は良好。し－99Ⅵ層出土。

71は直口口縁で、口縁部外面に三条の刺突連点文を施すが、若干雑である。内面も同様に刺突連点文を五条施す。胎土は砂質で、焼成は不良。さ－96Ⅶ層出土。

72は外面に七㎜の刺突列点文を施し、その上下に二～三㎜幅の細かい刺突列点文がみられる。内面は縦位の刺突文が二条確認される。胎土は砂質で、焼成はもろい。た・ち－91・92Ⅵ層出土。

73は口縁部近くの胴部であると思われる。四㎜幅の浅い沈線を施文し、それに沿うように刺突文を施す。文様構図は明確ではない。胎土は砂質で、焼成はもろい。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

74は横位の沈線文を施し、その下方に縦位の曲線を施文する。胎土は泥質で、焼成は良好。す－102Ⅵ層出土。



5類土器B（室川下層式に近い）

75は外面に斜位の条痕を施し、その上から二本一組の短沈線を縦位に施文する。内面も同様、横位の条痕の上に二本一組の短沈線を施文する。胎土は泥質で焼成は良好。け・こ－99・100Ⅶ層出土。

（6）6類土器

6類に分類される土器は条痕文土器で、全て深鉢形、直口口縁である。底部は尖底。本土器は条痕文＋文様（6類A）、条痕文のみ（6類B）、前述した5類土器と共通性をもつが、広義で6類土器に含めるもの（6類C）の3種に細分できる。

表8．6類土器分類結果

分類	口縁部	胴部	合計
A	6	6	12
B	14	4	18
C	9	10	19
合計	29	20	49

6類土器Aは、器面の条痕を軽く撫でたあと、文様を施文する。文様は大小の列点文を組み合わせたり、沈線で横位や斜行文もみられる。

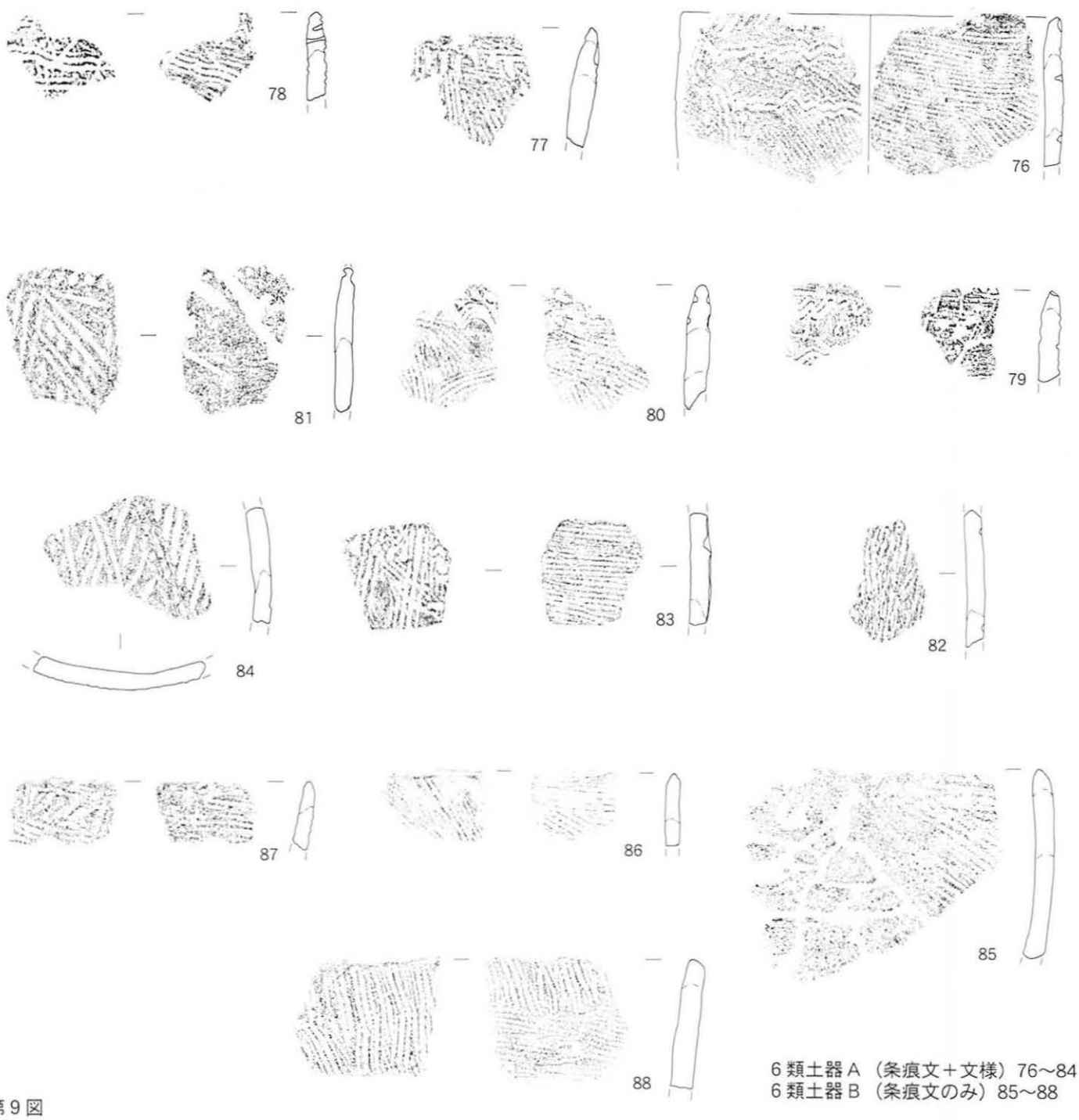
文様分類

① 刺突文＋沈線文（波状）
② 刺突文＋沈線文（直線）
③ 刺突文のみ

6類土器Bは、文様はみられず地文である条痕のみである。条痕文を深く施すため、口唇部形態にバラエティーがある。以下に資料の概要を述べる。

口縁部（第9図76～81、85～88）
胴部（第9図82～84）

76は口唇部が舌状を呈し、直口口縁である。外面に斜位の列点文、その下方に三条一組の羽状文が二列、その間に深い



6類土器A（条痕文＋文様）76～84
6類土器B（条痕文のみ）85～88

第9図

列点が一条施される。また三条一組の縦位波状文がみられ、両サイドには列点の組み合わせ文が上書きされる。推算口径は一九・六㎝。胎土は泥質で、焼成は良好。さ－100Ⅵ層出土。

77は舌状口唇で、若干外へ傾く。縦位および横位の条痕の上に深めの列点を一条施文する。胎土は泥質で、焼成は良好。す－100Ⅳ層出土。

78は口唇部が舌状を呈し、口唇近くに二個の孔がみられ、上の孔は深さ五㎜、下の孔は貫通している。孔の上下に二条一組の波状文が施される。内面は二～四条の波状文が横走する。胎土は泥質で、焼成は良好。す－100・101Ⅵ層出土。

79は口唇が舌状を呈し、斜めの刻みを施す。口縁直下に雑な波状文を施し、その中に刺突文を深く施す。胎土は泥質で、焼成は良好。す－100Ⅵ層出土。

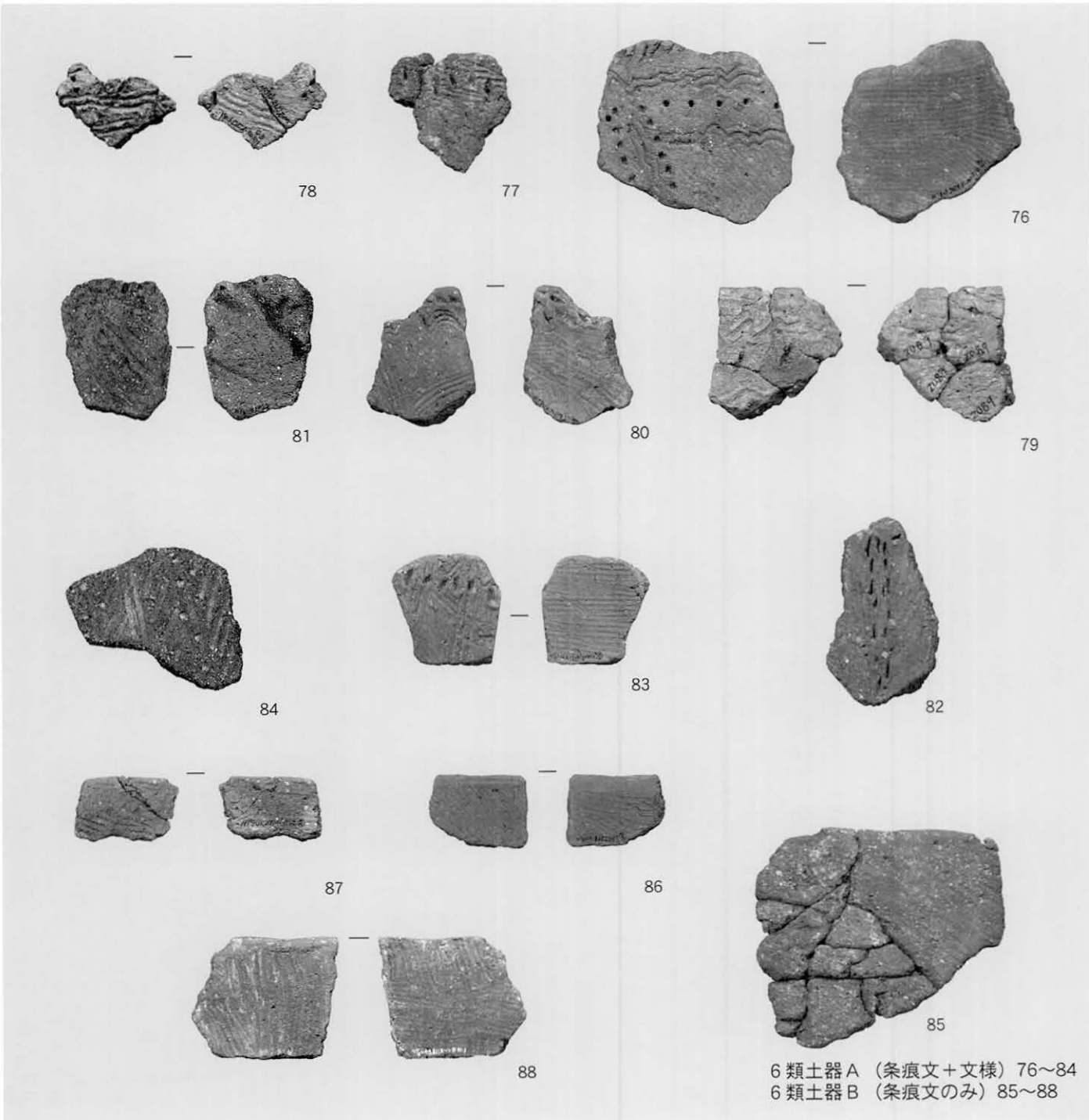
80は口縁部に一列の列点文、その下方に三条一組の横位波状文を施す。胴部分には三～四条一組で縦・斜めの沈線が施文される。内面の列点文は雑である。胎土は泥質で、焼成は良好。し－99Ⅵ層出土。

81は口唇部が破損する。外面に横位列点文、その下方に斜行の沈線文とそれに沿って列点が施文される。内面は横位列点文のみである。胎土は砂質で、焼成はやや良好。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

82は細かく細い列点が縦に施文される。胎土は泥質で、焼成は良好。し－99Ⅵ層出土。

83は横位列点文が一条みられ、その上の波状文は縦沈線に消される。列点の下は三条の縦位沈線文が間隔をあけて施文される。胎土は泥質で、焼成は良好。さ－100Ⅵ層出土。

84は斜位の長沈線の間に逆方向の斜めの短沈線を施す。列点は沈線の先端部分



6類土器A（条痕文＋文様）76～84
6類土器B（条痕文のみ）85～88

を意識して深くしたものと思われる。胎土は砂質で、焼成はもろい。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

85は口唇部が舌状を呈するが、やや丸みを帯び、口縁部はやや内湾する。外面は斜位の条痕が、内面は横方向を基本に部分的に斜め方向の条痕がみられる。胎土は泥質で、焼成はもろい。そ・た－92Ⅵ層出土。

86は口唇部に二本の横位沈線を施文し、その直下から斜位の条痕を施す。内面は横・斜位の条痕がみられる。胎土は泥質で、焼成は良好。こ－101Ⅴ層出土。

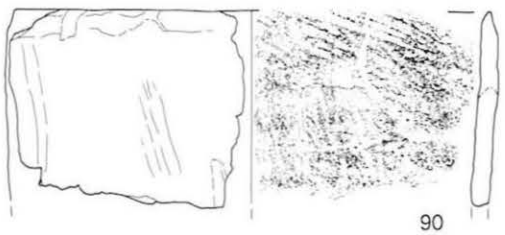
87は口唇付近に浅い条痕が、下部ははっきりとした条痕がみられる。内面は器面がはがれ破損している。胎土は砂質で、焼成はややもろい。け・こ－99Ⅷ層出土。

88は口唇部が外面に傾斜し舌状を呈する。口唇部は横方向の調整で形成され、口縁から縦位の条痕を施す。内面は横位の条痕の後、二～三cmの長さの縦位条痕を施す。条痕は文様として意識している。胎土は泥質で、焼成は良好。そ－91Ⅵ層出土。

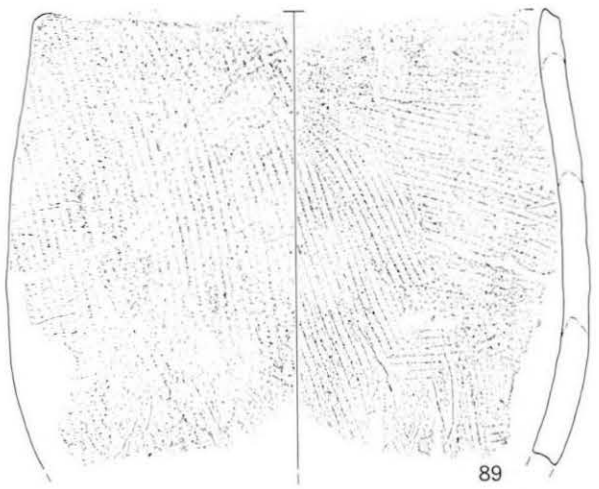
口縁部（第10図89～93・96～98）
胴部（第10図94・95）

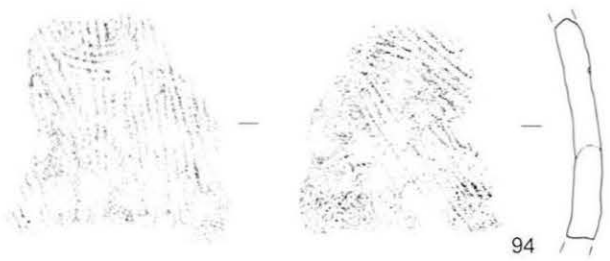
89は口唇部が舌状を呈するが外面は若干くぼむ。胴から口縁にかけてやや膨らむ器形となる。外面は口唇直下からやや斜めの条痕を施す。内面は縦・横・斜めの条痕を施す。推算口径は二一cm。胎土は泥質で、焼成は良好。こ－100Ⅶ層出土。

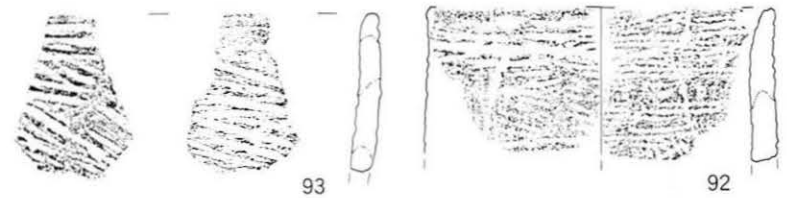
90は口唇部が舌状を呈する。外面に部分的に縦位の条痕がうすく残り、内面は口唇から斜位の条痕がのびる。下部はナデ消される。推算口径は一九・二cm。胎土は砂質で、焼成は良好。け・こ－100・


90

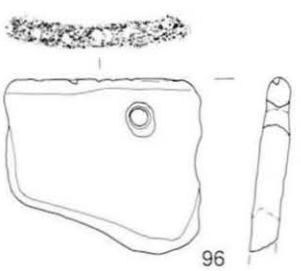
91

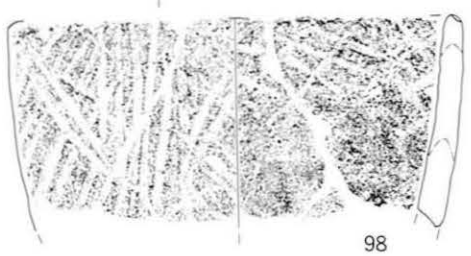

89

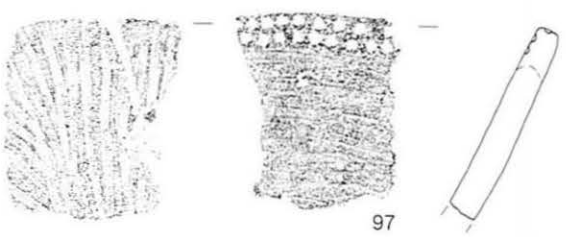

94


93 92

95


96


98


97

6類土器B（条痕文のみ）89～95
6類土器C（条痕文に近い）96～98

第10図

101 Ⅶ層出土。

91は口唇が舌状を呈し、外面に粘土が突出する。口縁外面は横位、その下方は斜位の条痕がみられるが、ナデ消され、うすい。内面は胴近くまで横位、下方は斜位の条痕がみられる。胎土は泥質で、焼成は良好。こ－100 Ⅶ層出土。

92は内外面とも横位の条痕を施すが、均一的な条痕ではなく、深さに「むら」がみられる。推算口径一四㎝。胎土は泥質で、焼成は良好。す－100・101 Ⅷ層出土。

93は両面とも、深くはっきりとした横位の条痕を施し、外面下方のそれは斜位である。胎土は泥質で、焼成は良好。こ・さ－100・101 Ⅶ層出土。

94は外面に縦位の条痕と曲線が、内面に斜位の擦痕がみられる。胎土は泥質で、焼成は良好。そ－91 Ⅵ層出土。

95は両面とも斜位の条痕がみられ、内面は輪積み接合部が見受けられる。胎土は泥質で、焼成は良好。け－99 Ⅶ層出土。

6類土器C（第10図96～98、第11図及び第12図110～114）は、文様から次の通りに細分可能である。

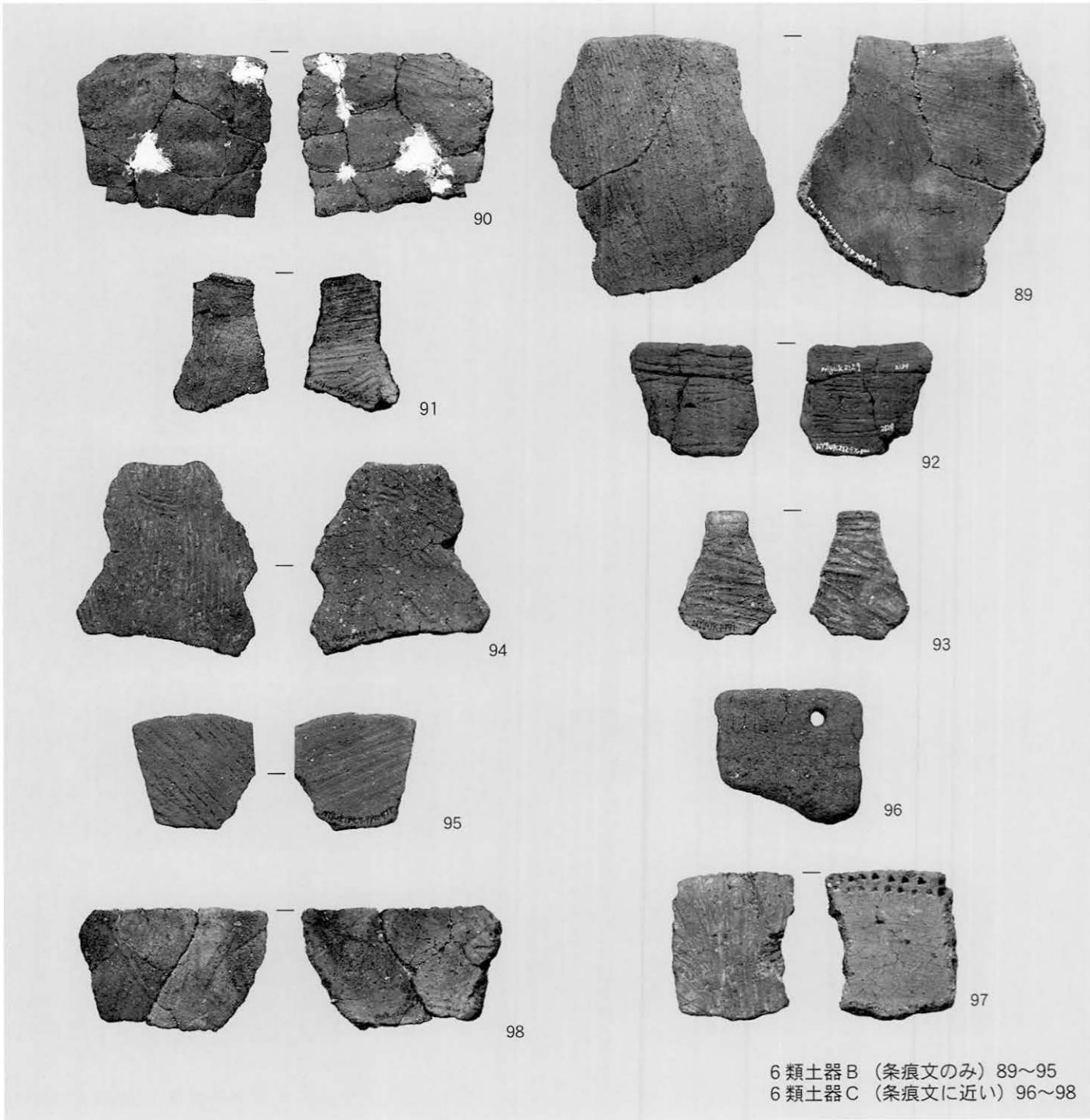
文様分類

① 沈線文
② 刺突文＋条痕
③ 沈線文＋曲線文
④ 刺突文のみ
⑤ 刺突文＋沈線文
⑥ 沈線文のみ（条痕も含む）

＊なお条痕はナデ消しているものをa、ナデ消していないものをbとして観察表に記した。

以下に資料の概要を述べる。

96は口唇部が丸みを帯び、口縁部に焼成後に穿孔された直径七㎜の孔がみられる。文様は口唇に丸く深い刺突文を施す。



6類土器B（条痕文のみ）89～95
6類土器C（条痕文に近い）96～98

胎土は泥質で、焼成はやや良好。す－92 Ⅵ層出土。

97は口唇部が方形を呈し、フラットな面を作る。全体的に外に強く傾く。文様は口唇に刺突文、口縁部外面に縦位の条痕を施す。口縁内面に二列の刺突連点文を施す。施文具は四㎜幅の半載竹管状工具と思われる。胎土は砂質で、焼成は良好。け－100 Ⅶ層出土。

98は口唇部に、浅く丸い刺突連点文を施す。両面とも方向の異なる斜位の条痕が交差する。推算口径は一八・二㎝。胎土は砂質で、焼成は良好。け・こ－100・101 Ⅶ層出土。

口縁部（第11図99～101・105・106・109）

胴部（第11図102～104・107・108）

99は口唇部に丸い刺突文を施し、両面とも斜位の細かい擦痕が残る。胎土は砂質で、焼成はやや良好。す－92 Ⅵ層出土。

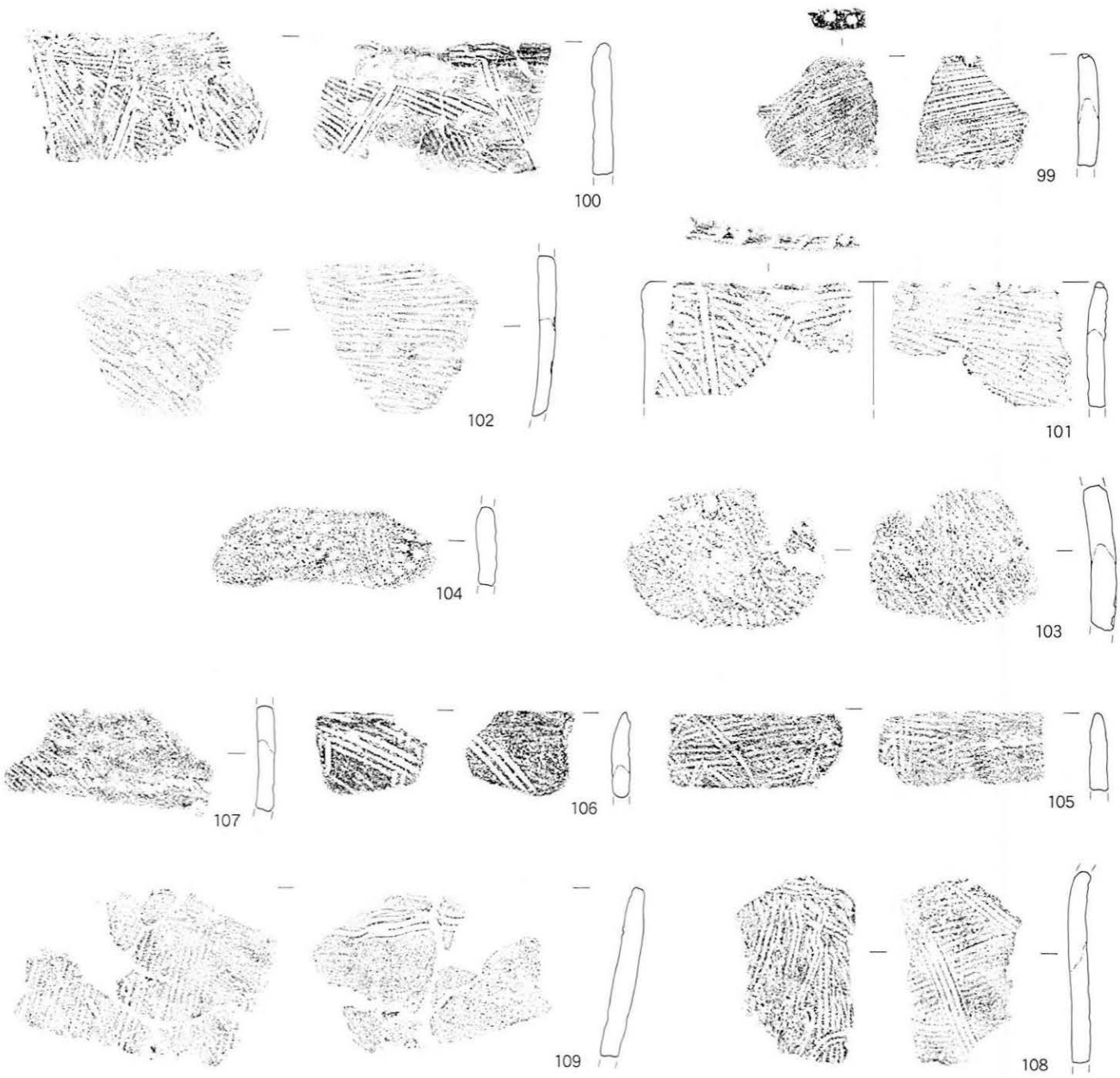
100は外面に一～二条の波状を、その下方に縦・横位の沈線を施文する。内面は横位沈線を、その下方は方向の異なる縦位沈線を施文する。条痕文土器と曽畑式土器の中間タイプのようにみえる。胎土は泥質で、焼成は良好。す－102 Ⅸ層出土。

101は口唇に深い刺突文を施す。縦・横・斜位の長・短沈線文を組み合わせる。条痕文土器と曽畑式土器の中間タイプか？

推算口径は二三㎝。胎土は泥質で、焼成は良好。そ－92 Ⅵ層出土。

102は外面に五㎜幅の二叉状工具による押し引き文を斜めに二条施文する。胎土は砂質で、焼成は良好。こ－101 Ⅴ層出土。

103は外面に斜め方向に二列、横方向に一列の細かい列点文を施す。本資料は混入物が多く手触りはザラザラする。胎土は泥質で、焼成はもろい。し－100 Ⅵ層出



第11図　6類土器C（条痕文に近い）

土。

104は外面に篦状工具によって二列一組の連点文を施す。文様構図は鋸歯文と思われる。胎土は泥質で、焼成は良好。け－100Ⅴ層出土。

105は口唇部が舌状を呈する。文様は横位条痕に縦位曲線を加える。文様構図は不明である。内面は縦・横・斜位の沈線を施文する。胎土は砂質で、焼成はややもろい。そ－92Ⅵ層出土。

106は口唇部が舌状を呈する。口唇直下から斜位の沈線を、その間に縦位の短沈線を二条一組で施文する。内面は斜位の沈線が三条みられるのみである。胎土は砂質で、焼成は良好。け・こ－99Ⅵ層出土。

107は二㎜幅の細かい刺突列点文を横位に施す。胎土は砂質で、焼成はやや良好。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

108は外面に三条一組の波状文を、その下方に縦位の波状文と斜位の沈線文を施す。内面は方向の異なる条痕で縦位の鋸歯状に見受けられる。胎土は泥質で、焼成は良好。さ－99Ⅶ層出土。

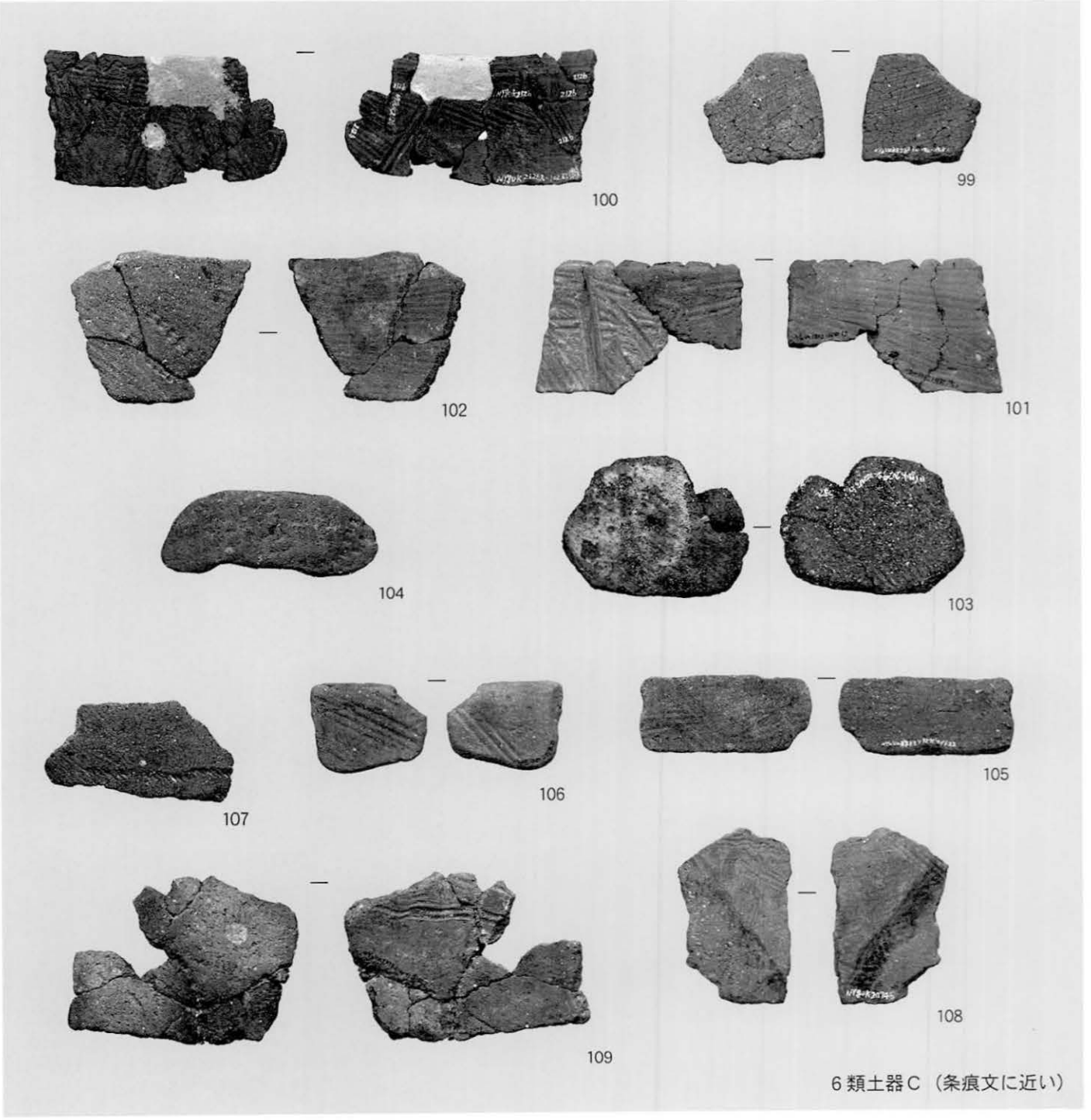
109は外面に文様はみられず、内面口縁部に横位の直線文と波状文が数条施される。胎土は泥質で、焼成は良好。す－101Ⅸ層出土。

胴部（第12図110～114）

110は二～三条の波状文を施し、その間にナデ消しで残った縦位の条痕がうすく残る。胎土は砂質で、焼成は良好。け－100Ⅴ層出土。

111は縦位の条痕の上に二～三条の一組の波状文が施される。胎土は泥質で、焼成はやや良好。さ－99Ⅶ層出土。

112は文様のようにみえる縦・横・斜めの条痕に楕円形状の曲線文がみられる。



6類土器C（条痕文に近い）

胎土は泥質で、焼成は良好。け－99 Ⅶ層出土。

113は外面に斜めの沈線文のみがみられる。内面は横位沈線の区画のなかに斜位の短沈線を施文する。胎土は泥質で、焼成は良好。け・こ－100 Ⅶ層出土。

114は曲線を組み合わせた文様がみられる。胎土は泥質で、焼成は良好。け－101 Ⅶ層出土。

(7) 7類土器

7類土器に分類される土器は沈線文土器である。ほとんどの資料が胴部であるが、数少ない口縁部をみると、深鉢形で直口口縁となる。文様は沈線文を施すが、幾何学文はなさず、縦・横・斜め方向の不規則的な構成となる。

口縁部（第12図115～118）

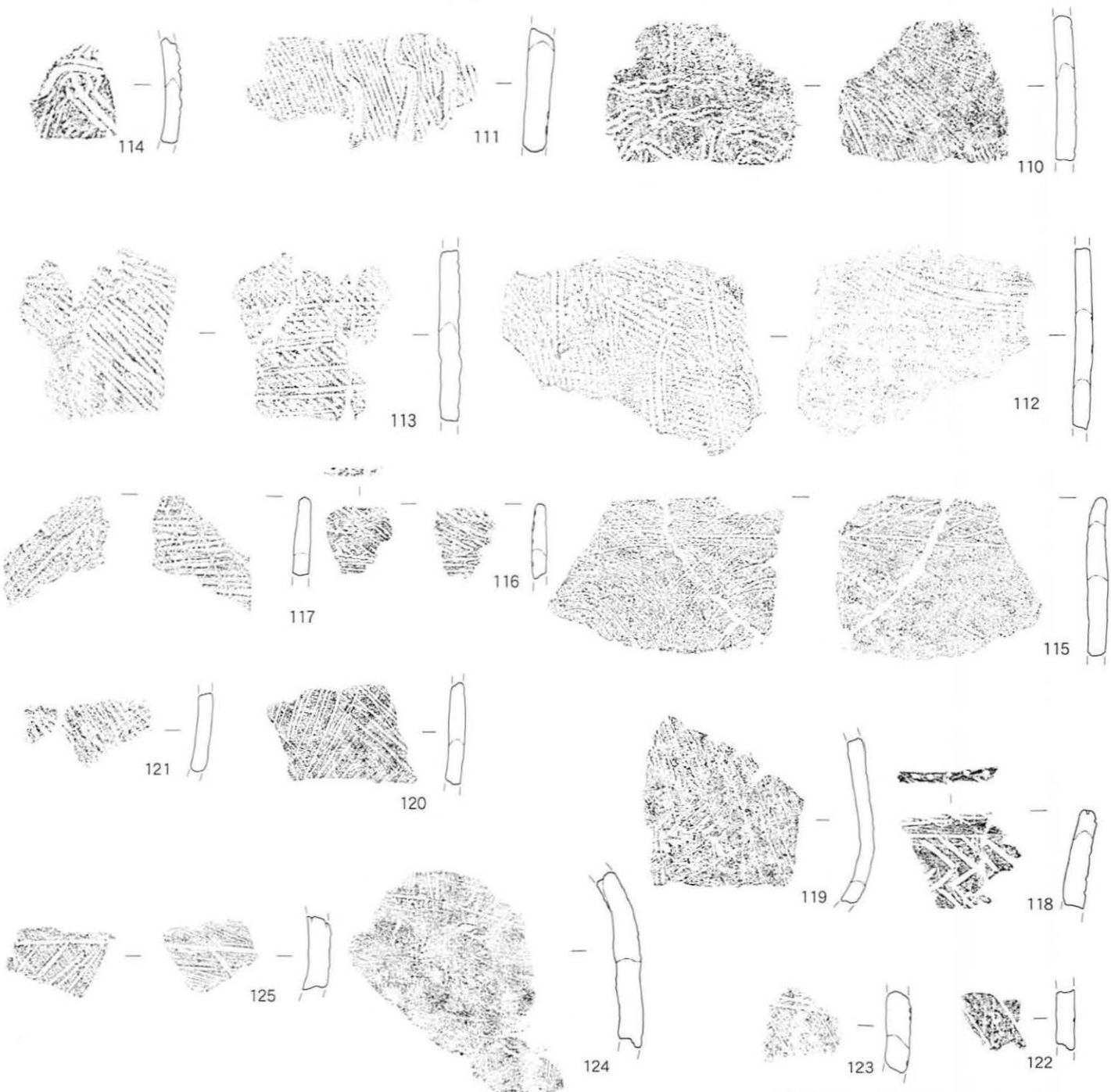
胴部（第12図119～125）

115は外面に横位の細沈線を数条施し、その後口縁の斜線と曲線を施文する。内面も横位と斜位の沈線文を組み合わせる。曽畑式土器の範疇に入るものと思われる。胎土は砂質で、焼成はやや良好。け－100 Ⅶ層出土。

116は口唇に浅い沈線を施文する。口縁部外面には先端の鋭い工具により三列の斜位の列点文を施し、それに波状文を上書きする。下方には横位沈線文を施す。内面は波状文がみられない。曽畑式土器の範疇に入るものと思われる。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－92 Ⅵ層出土。

117は口唇部が舌状を呈するが、シャープな形状をなす。外面は無文であるが、内面は横方向の条痕の上に斜位の格子文を施す。胎土は砂質で、焼成は良好。け・こ－100 Ⅶ層出土。

118は口唇部が丸みを帯びる。文様は口



6類土器C（条痕文に近い）110～114
7類（沈線文）115～125

第12図

唇に二～三㎜の棒状工具によって刺突文を施す。口縁部には横位沈線の上に斜位の列点を施文する。さらにその下方に鋸歯状文を縦位に施す。胎土は泥質で、焼成は良好。け・こ－101Ⅶ層出土。

119は斜位の異なる細沈線が交差する。胎土は泥質で、焼成は良好。け－99Ⅶ層出土。

120は119と同様の文様がみられる。胎土は砂質で、焼成は良好。そ・た－91・92Ⅵ層出土。

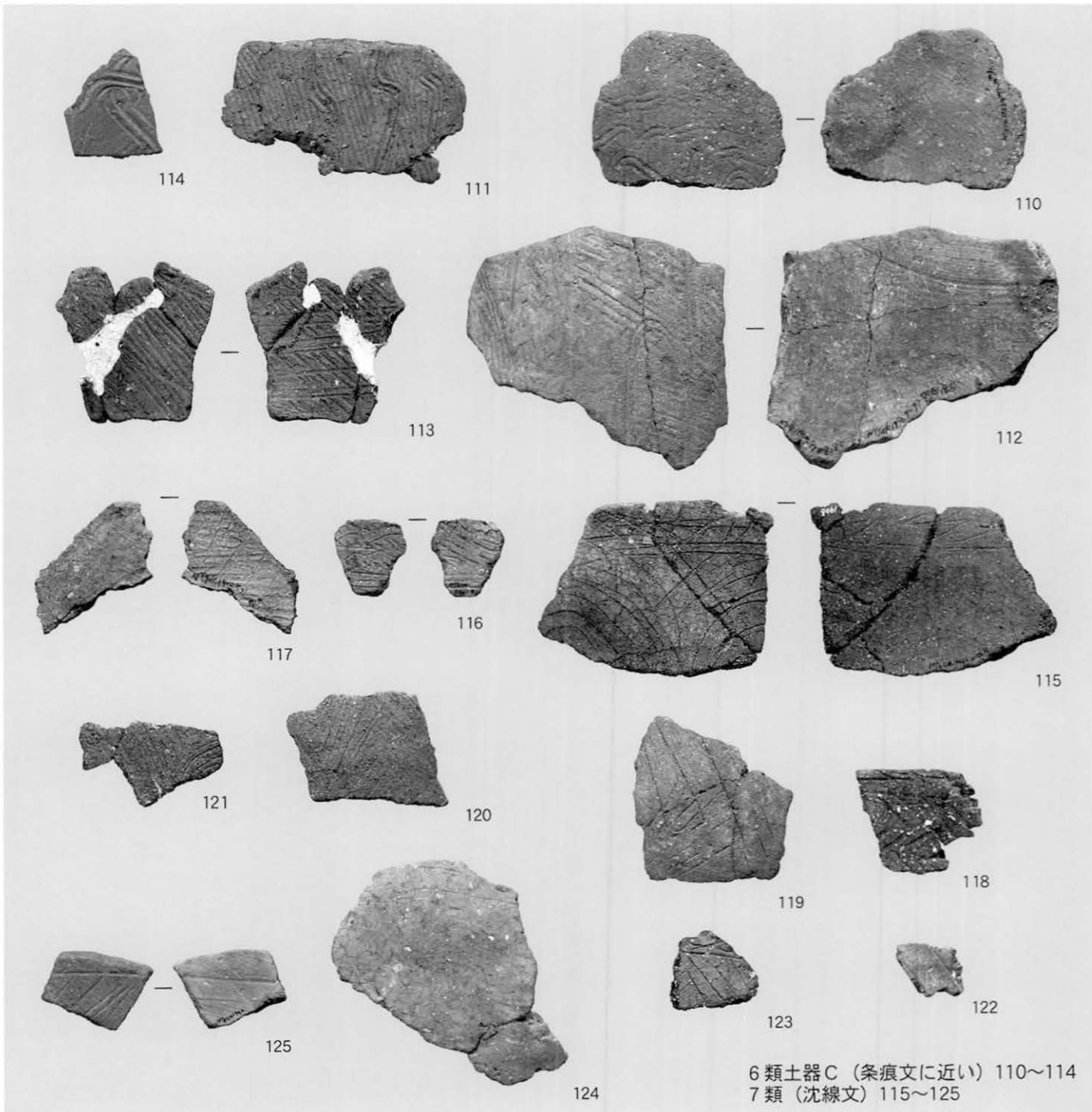
121は細沈線により曲線文を施す。胎土は砂質で、焼成はややもろい。こ－101Ⅴ層出土。

122は細沈線により斜位の文様を施す。胎土は泥質で、焼成は良好。さ－99Ⅶ層出土。

123は横位細沈線の上は線どうしを交差させ、下は斜位の文様を施す。胎土は砂質で、焼成は良好。こ－100Ⅶ層出土。

124は底部付近の胴部片と思われる。残部上方に縦・横位の細沈線を施文する。胎土は泥質で、焼成は良好。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

125は輪積み接合部で破損した胴部片である。横位沈線の下方に斜位の沈線を施文する。胎土は泥質で、焼成は良好。け・こ－100・101Ⅶ層出土。



6類土器C（条痕文に近い）110～114
7類（沈線文）115～125

（8）8類土器

8類土器に分類される土器は無文土器である。図化した三点のうち、二点は深鉢形、一点は壺形である。以下、資料の概要を述べる。

126は壺形に属する。口唇部は丸みを帯び、外面に粘土が突出する。口縁はすぼまり胴上部が張る器形となる。推算口径一八・三㎝。曽畑式土器の範疇か？胎土は泥質で焼成はやや良好。こ－100Ⅶ層出土。

127は深鉢形に属する。口唇部は隅丸方形を呈し、口縁部は若干内湾する。胎土は砂質で焼成は良好。こ－100Ⅶ層出土。

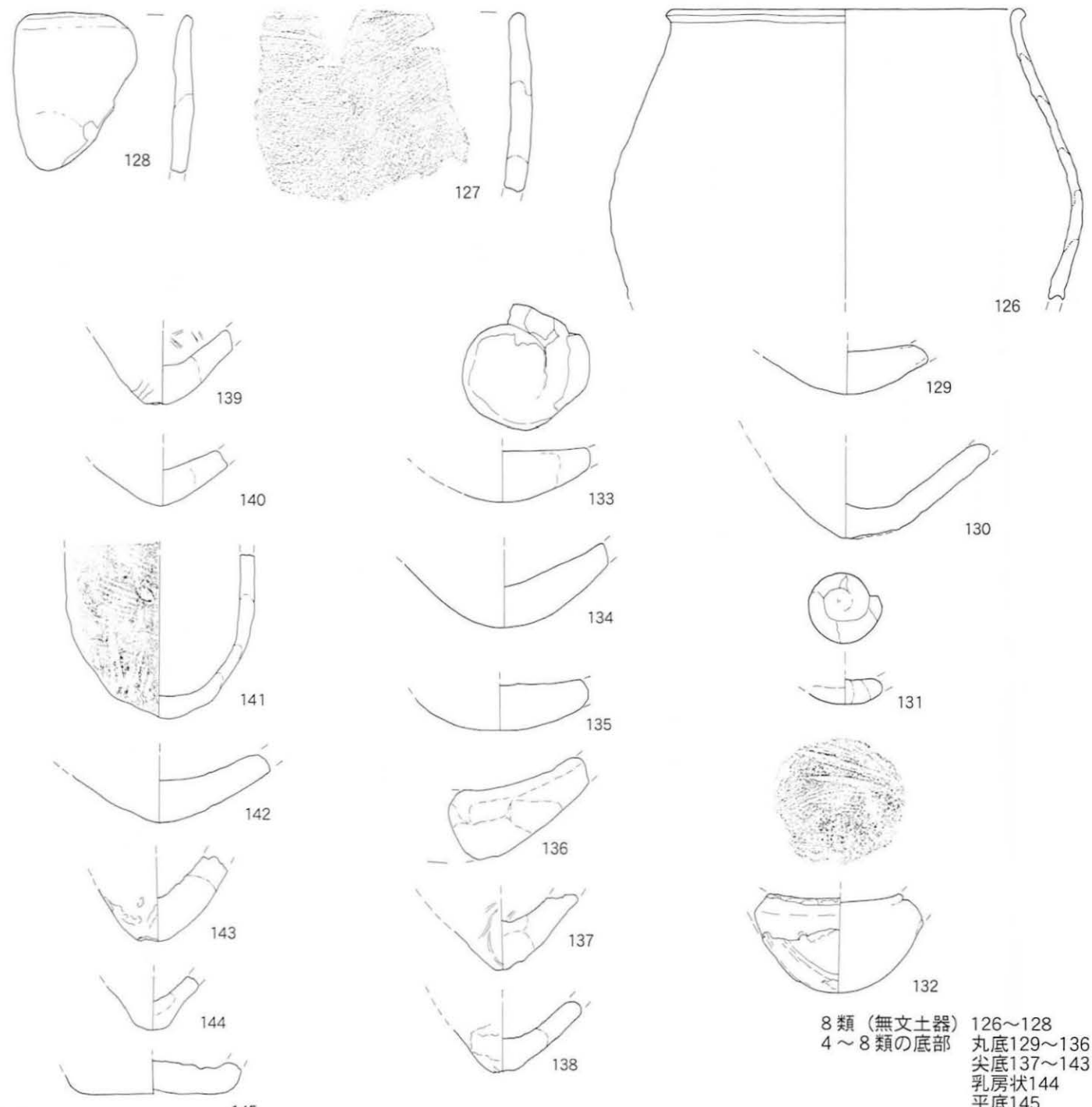
128は深鉢形に属し、口唇部は舌状を呈する。胎土は砂質で焼成はややもろい。そ－91Ⅵ層出土。

（9）底部（4類～8類）

曽畑式土器、室川下層式土器、条痕文土器に伴って出土する底部は、丸底・尖底・乳房状尖底・平底がみられた。一般的にこれらの型式土器の底部は、尖底あるいは丸底と認識されており、また乳房状尖底及び平底はそれぞれ一点ずつの出土で出土量の少なさなどから、上層からの流れ込みとも考えられる。丸底は重みがあり、底が厚く、底面が平たくなる資料が多い。それに比べ尖底をみると、やや小さめで、器壁が薄い。また、丸底は粘土で底を作る際のうずまきの様子がよく観察される。以下、資料の概要を述べる。

129は丸底で、底面は丸く内面はほぼ平らになる。重みのある資料である。曽畑式土器の範疇か？胎土は泥質で焼成は良好。つ－100古墓横岩盤間出土。

130は丸底で、底面は一部破損しているが、若干尖り気味である。厚みはあるが、



8類（無文土器）126～128
4～8類の底部　丸底129～136
尖底137～143
乳房状144
平底145

第13図

軽い。室川下層式土器または条痕文土器の範疇か？胎土は泥質で焼成はもろい。こ－101Ⅴ層出土。

131は丸底で、粘土を渦巻き状にまいて底面を作る。室川下層式土器または条痕文土器の範疇か？胎土は泥質で焼成は良好。そ－92Ⅵ層出土。

132は丸底で、ボウルを半分に切ったような底部で、とても重みのある資料である。胎土は泥質で焼成は良好。そ－92Ⅵ層出土。

133は丸底で、同図131と同様、渦巻き状に底部を成形する様子が見受けられる。外面は丸みを帯びるが、内面はほぼ平らである。混入物の入り方・胎土などから曽畑式土器の範疇か？胎土は泥質で焼成はややもろい。そ・た－91・92Ⅵ層出土。

134は丸底で、両面とも形が整い、重みのある資料である。胎土は砂質で焼成は良好。さ－99Ⅶ層出土。

135は丸底で、若干摩耗する。外面及び内面がほぼ平らになる。重みのある資料である。形状からみると曽畑式土器の範疇か？胎土は泥質で焼成は良好。け－101Ⅶ層出土。

136は丸底で、何度も粘土を合わせて厚みのある底部を成形している。重みのある資料である。混入物の入り方・胎土などから曽畑式土器の範疇か？胎土は砂質で焼成はやや良好。け・こ－100・101Ⅶ層出土。

137は尖底で、丸い粘土塊の周りに粘土を巻き付けて底部を成形する。形・胎土より室川下層式土器または条痕文土器の底部と思われる。胎土は泥質で焼成は良好。ち－98Ⅳ層出土。

138は尖底で、先端が若干潰れる。内面は丸底状を呈する。室川下層式土器または条痕文土器の範疇か？胎土は砂質で焼成は良好。ち－91Ⅵ層出土。

139は若干重みのある尖底である。室川下層式土器または条痕文土器の範疇か？胎土は泥質で焼成は良好。さ－100Ⅶ層出土。

140は尖底で、形状の整った丁寧な作りである。胎土は砂質で焼成は良好。こ－101Ⅴ層出土。

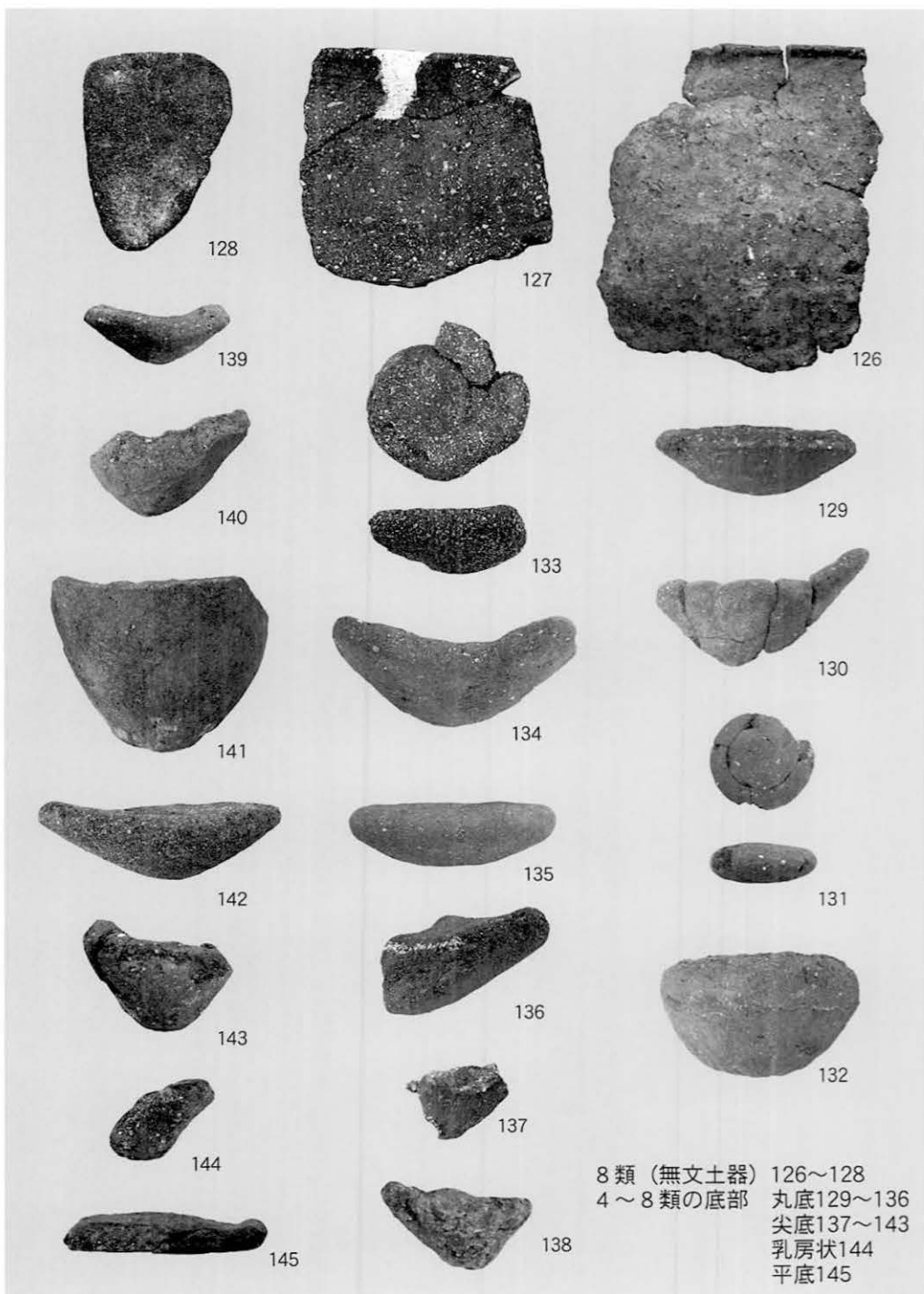
141は尖底で、小型土器の底部である。先端は若干潰れる。約二cm幅の輪積み接合部がみられる。室川下層式土器または条痕文土器の範疇か？胎土は泥質で焼成は良好。け－100Ⅶ層出土。

142は丸底に近い尖底である。作りは丁寧で混入物が多量に含まれザラザラする。曽畑式土器の範疇か？胎土は砂質で焼成はやや良好。け－100Ⅶ層出土。

143は尖底で、厚みがあり重量感のある資料である。器面調整が雑で凹凸が目立つ。胎土は砂質で焼成はやや良好。た－95Ⅶ層出土。

144は小さめの乳房状尖底である。胎土は砂質で焼成はやや良好。せ－92Ⅵ層出土。

145は推算底径八cmのやや大きめの平底である。外底面中央は若干上げ底状になる。内面の調整が雑なため積み痕が明瞭にみられる。立ち上がり部分は丸みを帯びる。胎土は砂質で焼成は良好。つ－98Ⅵ層出土。



(10) 9類土器

9類土器に分類されるものは縄文前期後半の土器で、鹿児島県沖永良部島知名町南西部の神野貝塚下層出土の土器を標式とする神野A・B式土器（注5）の範疇に含まれると思われる。平口縁の深鉢形で、口縁及び口縁から胴部にかけて文様を施文する。

9類～11類、13類～16類土器の施文具は、

イ、叉状工具
ロ、篦状工具
ハ、単篦工具
ニ、棒状工具
ホ、半載竹管状工具
ヘ、先端の尖った工具

の六種のいずれかに分類される。詳細は観察表に記した。

なお9類土器の施文具はイ・ロ・ニの三種に分類される。以下、各資料について概要を述べる。

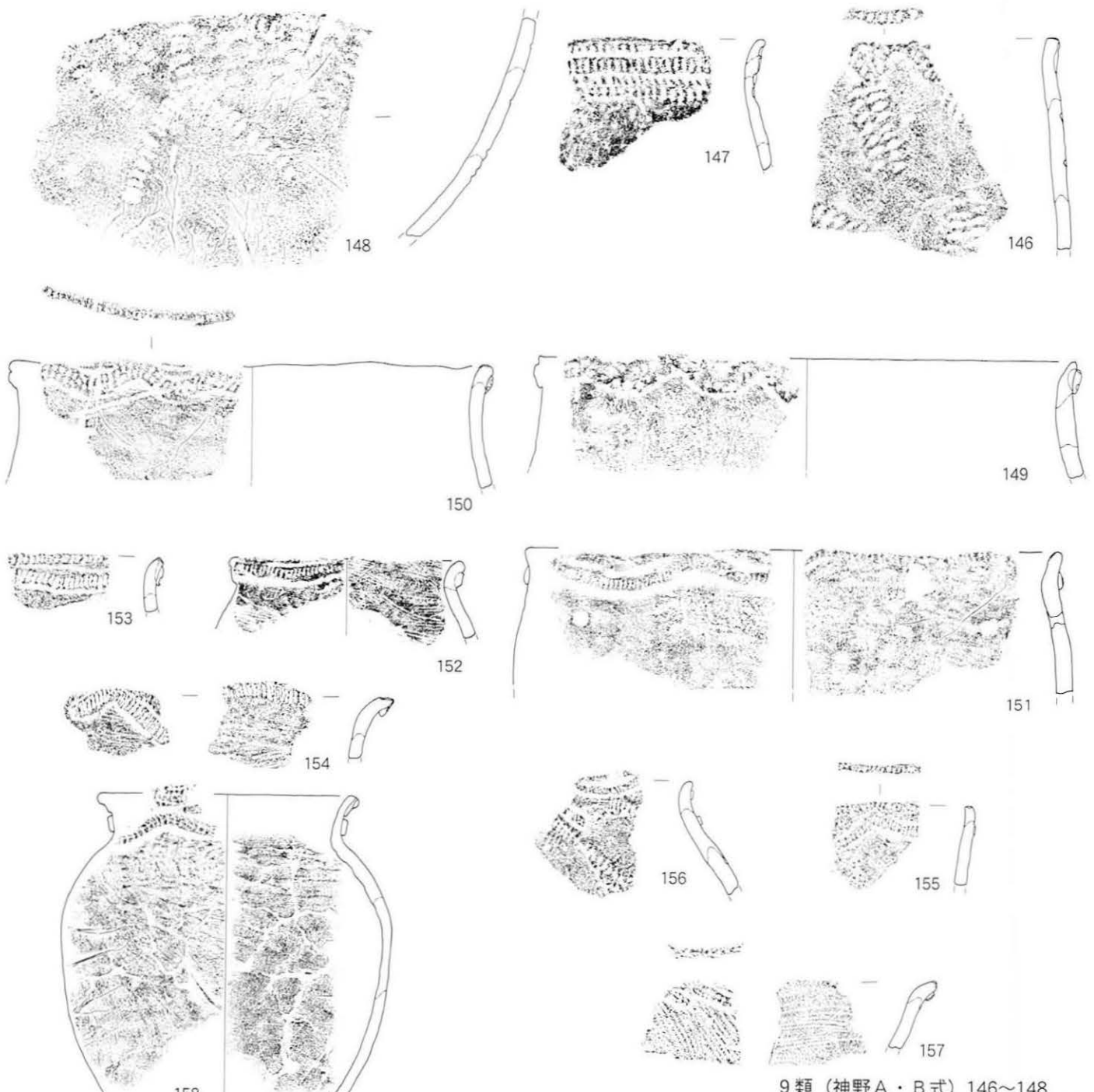
146は頸部のくびれがなく胴部は膨らまず、口縁に薄い波状突帯を貼付け、突帯上に刺突文を施す。胴部には二枚貝の腹縁によって刻文を施す。胎土は砂質で、焼成はやや良好。ち－95Ⅶ層出土。

147は頸部がくびれ胴部は膨らむ。口唇から頸部に四段の押し引き文を施す。二段目に方形状の薄い突帯を付ける。施文具は幅五㎜の篦状工具と思われる。胎土は砂質で、焼成は不良。さ－93Ⅴ層出土。

148は八㎜幅の工具により刺突列点文を施す。刺突施文の端が深い。文様構成は整然としない。神野B式土器の範疇と思われる。胎土は砂質で、焼成はやや良好。せ・そ－91・92Ⅵ層出土。

(11) 10類土器

10類に分類されるものは、平口縁の深



9類（神野A・B式）146～148
10類（面縄前庭Ⅰ～Ⅲ式）149～158

第14図

鉢形で、胴の張りの弱いものと、最大径が胴上部にある二種類がみられる。口唇部に波状突帯を廻らし、突帯頂部は口唇に接する。突帯上には刺突文を密に施すが、二点一組の刺突と刻目のみを施すものがみられた。これらは伊是名村具志川島岩立地区出土の土器を標式とし、以前、具志川式土器と称された土器(注6)で、現在の面縄前庭Ⅰ～Ⅲ式土器(注7)に属する。なお施文具はイ・ロ・ニの三種に分類される。以下、各資料の概要を述べる。

149は直口口縁であるが若干外へ反る。口縁に波状突帯を貼付け、その上に列点文を施す。胎土は泥質で、焼成は良好。そ?ち－91・92Ⅵ層出土。

150は波状突帯上部及び口唇上に丁寧な点刻文を施す。胎土は砂質で、焼成はやや良好。さ－100Ⅳ層出土。

151は内面頸部が若干「く」の字状となり、胴部がやや膨らむ。焼成後に穿孔された三～四㎜の孔がみられる。波状突帯上及び内面口唇に細かい刺突を施文する。推算口径二七㎝。胎土は泥質で、焼成は良好。ち－91・92Ⅵ層出土。

152は口唇直下からくびれ、胴部に最大径がくると思われる。口縁に突帯を貼付し、その上に刺突文を施す。推算口径は十二㎝。胎土は泥質で、焼成は良好。せ・そ－91・92Ⅳ層出土。

153は頸部のくびれが弱い。緩やかな波状突帯上及び口唇に細かい刺突文を施す。胎土は泥質で、焼成は良好。つ－98Ⅵ層出土。

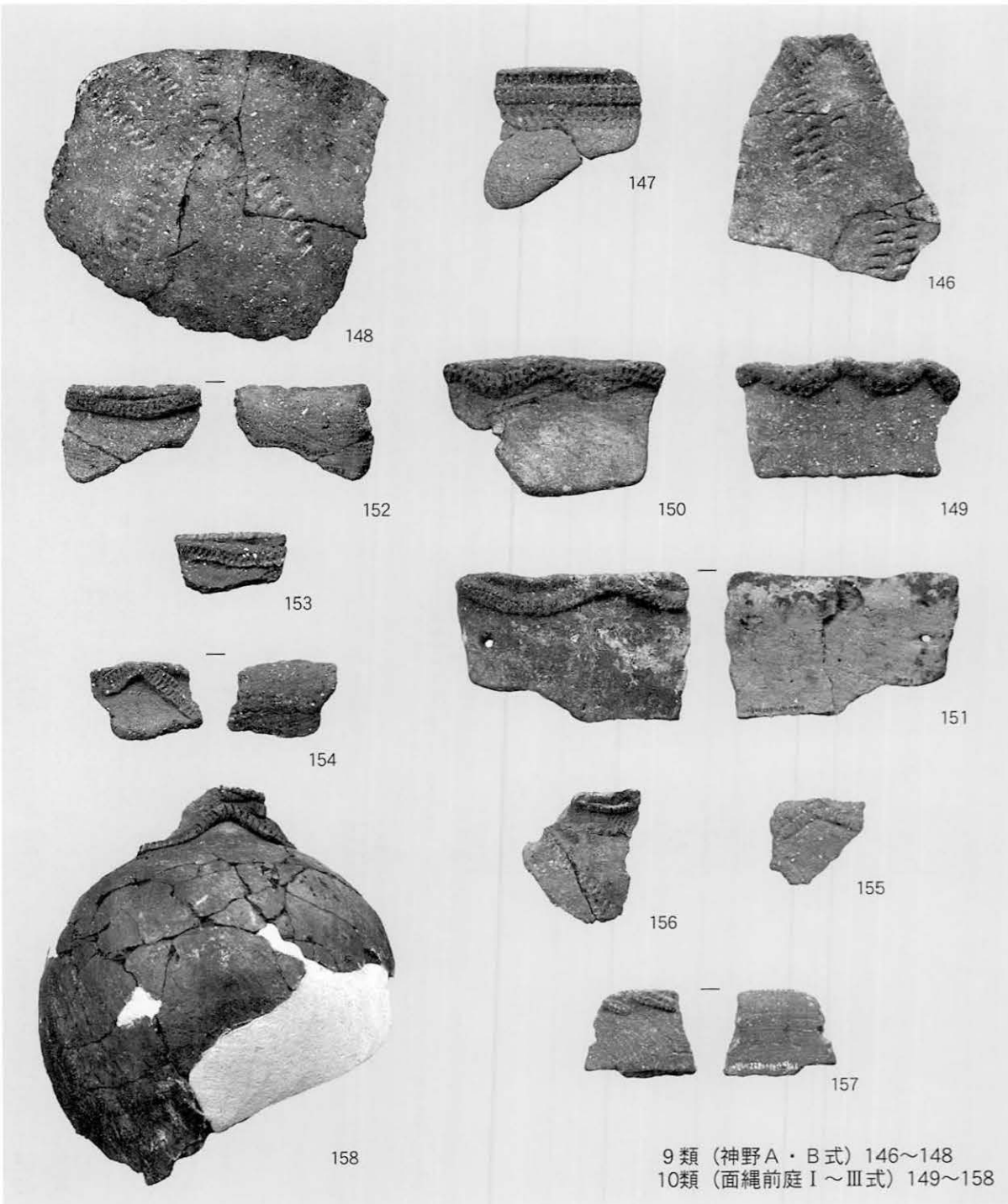
154は波状突帯上及び内面口唇に細かい刺突文を施す。胎土は砂質で、焼成はやや不良。し－99Ⅵ層出土。

155は波状突帯上及び口唇に細かい刺突文を施す。胎土は砂質で、焼成はやや良好。つ－98Ⅵ層出土。

156は口縁に波状突帯、頸部の一部分にも突帯を貼付ける。浅く細かい刺突文を突帯上から胴部まで施す。胎土は泥質で、焼成はやや良好。て－93４層出土。

157は浅めの鉢形か?斜めの突帯を貼付け、突帯上及び口唇に点刻文を施す。胎土は泥質で、焼成はやや良好。ち－98Ⅳ層出土。

158は頸部がくびれ最大径は胴部に位置する。口唇に直線突帯を、頸部に波状突帯を貼付ける。口唇及び突帯上にやや粗めの刺突文を施す。肩部あたりに押し引きがみられるが文様か調整痕が判然としない。推算口径一三・三㎝。胎土は泥質で、焼成は良好。た－95Ⅳ層出土。



9類（神野Ａ・Ｂ式）146～148
10類（面縄前庭Ⅰ～Ⅲ式）149～158

(12) 11類土器

11類土器は深鉢形で口縁及び胴上部に突帯を貼付する。頸部は若干くびれ最大径は胴部にくる。突帯間及び胴部には沈線文が施文される。本土器は面縄第Ⅳ貝塚の前庭部の出土土器を標式とし、以前、面縄前庭式土器（注8）と称され、現在の面縄前庭Ⅴ式土器（注9）に類する。なお施文具はイ・ロ・ニの三種に分類される。以下、各資料の概要を述べる。

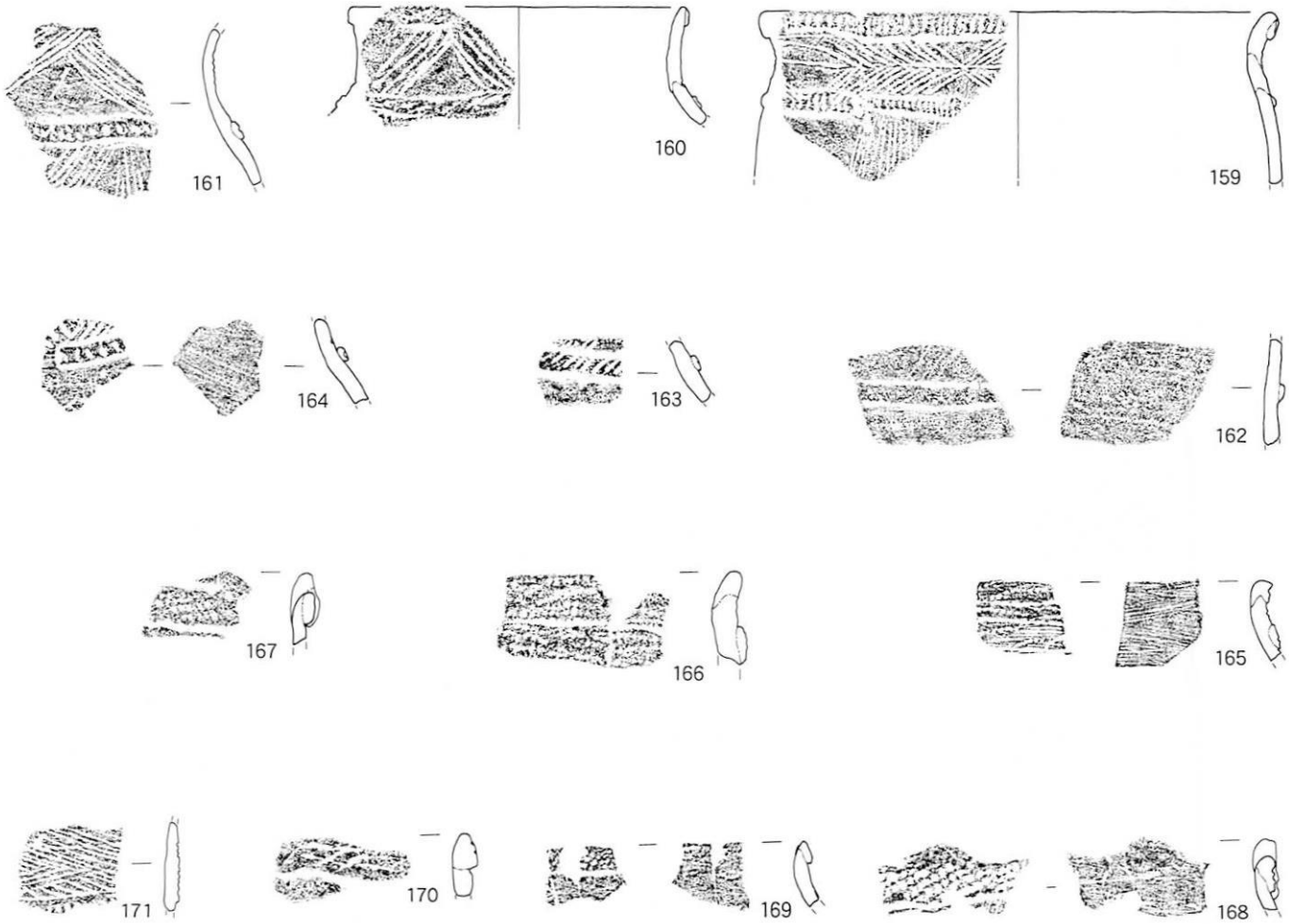
159は口縁部が若干外反し、頸部は弱くくびれる。胴の張りは弱い。口唇及び肩部に突帯を貼付け、突帯上には叉状工具により点刻文を施す。突帯間には対になった有軸羽状文、突帯下の胴部には縦位細沈線を施文する。胎土は砂質で焼成は良好。た－95Ⅳ層出土。

160は頸部のくびれがやや直線的で、最大径は胴部に位置する。口唇及び肩部に突帯を貼付け、突帯上には斜めの短沈線を刻む。突帯間には鋸歯文状、突帯下の胴部には縦位沈線を施文する。胎土は砂質で焼成はやや良好。そ－96Ⅳ層出土。

161は口唇部を欠く資料である。口縁から胴部へ緩やかにカーブし、肩部に突帯を廻らせる。口縁にも突帯はあったと思われる。突帯上に列点文を施す。突帯間には鋸歯状文、突帯下には七本一組の縦位沈線文を施す。胎土は泥質で焼成はやや不良。そ－92Ⅳ層出土。

162は肩部に突帯を貼付けるが、突帯上は磨耗がひどく詳細は不明。突帯の上面は斜位の沈線を施文する。傾きは不明。胎土は砂質で焼成はやや不良。せ－91Ⅳ層出土。

163は肩部と思われる部分に突帯を貼付け、突帯上に斜位の刻文、頸部あたりにも斜位の沈線を施文する。壺形か？　胎土は砂質で焼成は良好。さ－99Ⅳ層出土。



11類（面縄Ⅴ式）159～164
12類（仲泊式）165～171

第15図

164は163とほぼ同様の文様を施すが、頸部は鋸歯文と思われる。壺形か？　胎土は砂質で焼成は良好。た－91Ⅳ層出土。

(13) 12類土器

12類土器は縄文後期ごろの土器で、恩納村仲泊比屋根原の仲泊遺跡第四貝塚から発見された仲泊式土器(注10)に類する。五点出土し、すべて深鉢形である。口縁は口縁と山形口縁がみられる。口縁は肥帯があり、その上部に貝殻文を施すものと、沈線文を施すものがある。両者とも肥厚帯の下には沈線文が施される。本土器は文様の種類により次の二種に細分される。

①仲泊A式／口縁部文様が貝殻文を主体とする。

②仲泊B式／口縁部文様が沈線文を主体とする。分類結果は表9に示した。

以下、各資料の概要を述べる。

165は口縁に二本の肥厚帯がみられ、ここにほぼ横位の貝殻文を施す。肥厚帯下は斜位の沈線（羽状文？）を施す。胎土は泥質で焼成は良好。す－101Ⅳ層出土。

166は頸部にかまぼこ状の突帯を貼付ける。口唇直下から突帯上に横位の刺突文を施す。施文具は棒状工具か貝殻と思われる。胎土は砂質で焼成は良好。さ－95Ⅳ層出土。

167は山形口縁である。口縁直下に平たい突帯を貼付け、突帯上に貝殻？で横位の刺突文を施す。胎土は砂質で焼成は良好。そ－92Ⅳ層出土。

168は山形口縁である。口縁部が肥厚帯となり、その上に斜位の貝殻文を施す。肥厚帯下には斜位の細沈線を施文する。胎土は泥質で焼成は良好。て－97Ⅴ層出土。

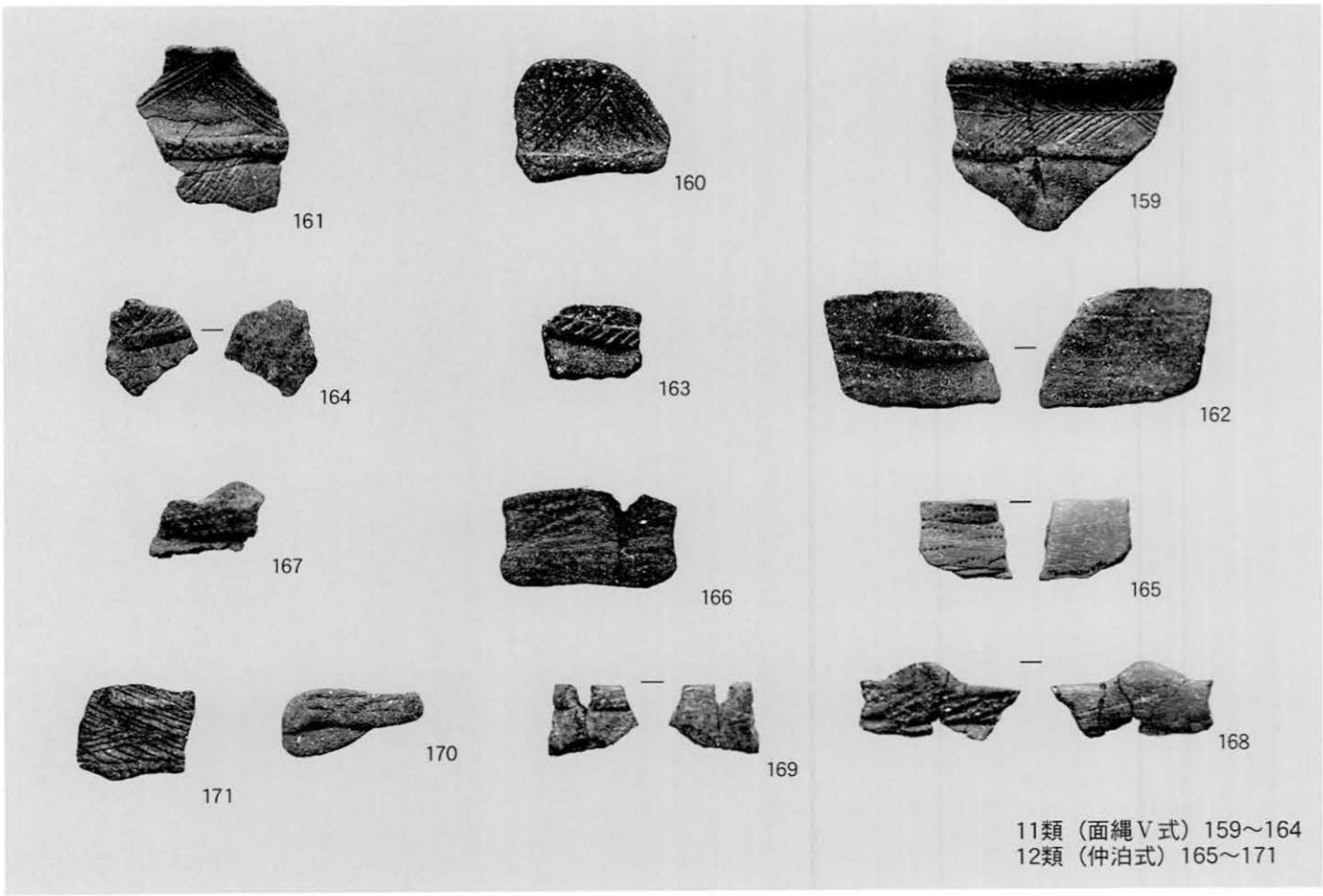
169は胴部に最大径がくると思われる。口縁が肥厚帯となり、断面三角形を呈する。肥厚帯上に貝殻文で刺突を施し、肥厚帯の下には斜位の細沈線を施文する。胎土は泥質で焼成は良好。つ－98Ⅴ層出土。

170は山形口縁である。肥厚口縁で、その上に沈線文を施す。胎土は砂質で焼成はやや不良。た－91Ⅳ層出土。

171は口唇部を欠く資料である。口唇直下から斜位の沈線文と綾杉状文を施し、その下方にも若干太めの文様を施す。肥厚しないタイプと思われる。胎土は砂質で焼成はやや不良。こ・さ－99Ⅳ層出土。

表9.12類土器分類結果

分類	口縁部	胴部	合計
①	5	2	7
②	1	1	2
合計	6	3	9



11類（面縄Ⅴ式）159～164
12類（仲泊式）165～171

(14) 13類土器

この類は縄文後期に位置づけられる土器である。石川市字伊波、伊波貝塚出土の土器を標式とする伊波式土器（注11・12）に属する。伊波式土器の先行型式である神野D・E式土器（注13）（鹿児島県沖永良部島知名町神野貝塚中層の土器を標式とする）も出土している可能性もあるが、小破片で判断できないものが多いため、とりあえずこの13類土器に含めた。器形は深鉢形で、底部は平底となる。口縁部が開き朝顔状の器形がほとんどで、口縁部は平口縁が主であるが、山形口縁も多くみられる。文様は口縁部から胴上部に施文される。13類土器と後述する14類土器は次の表の通り分類する。

表10. 13・14類土器分類基準表

文様帯	A	B	C
第一・三文様帯	①点刻文 ②列点文 ③連点文 ④押し引き文 ⑤沈線文	①点刻文 ②列点文 ③連点文 ④押し引き文 ⑤沈線文	無文
第二文様帯	無文	a鋸歯状文 b縦位区画文 c縦位沈線文 d羽状（綾杉）状文	無文

分類結果は表11に示した。なお施文具はイ・ハ・ニ・ホの四種に分類される。

以下に各資料の概要を述べる。

172は口縁部から底部までの形状が窺える資料である。山形口縁で、口縁は外反し頸部はくびれ、胴部はあまり膨らまな

第16図　13類（伊波式）（1）

い。口縁及び五cm下の肩部に二点一組二列の点刻文を施す。推算口径は二一・二cm。胎土は砂質で焼成は良好。ち・つ－90Ⅲ層出土。

173は山形口縁で、口縁はほぼ直口である。文様構成は172と同様であるが、刺突の長さはやや長い。胎土は砂質で焼成は良好。け－100Ⅳ層出土。

174は山形口縁と思われるが、緩やかなS字状の器形を呈する。文様構成は173と同様。文様帯は二cmを測る。胎土は砂質で焼成は良好。こ－100Ⅳ層出土。

175は口唇が双頭突起で、若干膨らむ。口縁に二点一組の点刻文を施す。文様下の余白をみると一組のみの点刻文で、その場合、神野E式土器に該当する可能性があると思われる。胎土は砂質で焼成は良好。ち－91Ⅳ層出土。

176は山形口縁である。口縁に二点一組の点刻文を施文する。口唇は点刻文を施す。175と同様、神野E式土器か？胎土は砂質で焼成は良好。さ－100Ⅳ層出土。

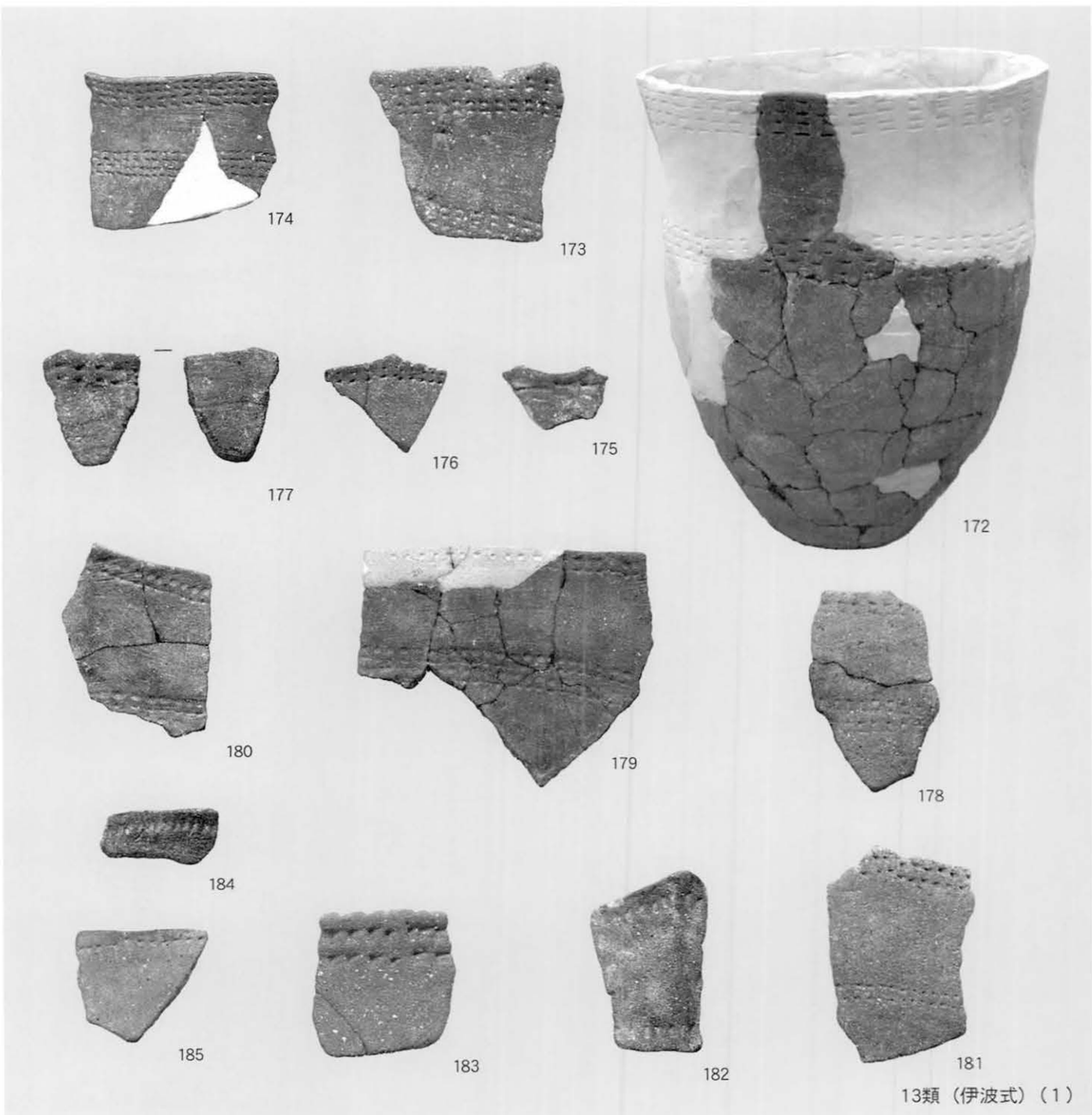
177は山形口縁で、頂部の片側が若干窪む。文様構成は175と同様である。胎土は砂質で焼成はやや良好。し－101Ⅳ層出土。

178は口縁に一列、肩部辺りに二列の点刻文を施す。胎土は砂質で焼成はややもろい。た－90Ⅳ層出土。

179は山形口縁で、第三文様帯あたりから強く外反する。第一文様帯は二点一組一列、第三文様帯は二列施文される。上の点は丸く四㎜を呈するのに対し、下の点は二㎜と小さめである。神野E式土器か？胎土は砂質で焼成は良好。つ－97Ⅴ層出土。

180は山形口縁で、口縁の反りが弱い。文様構成は179と同様である。胎土は砂質で焼成は良好。つ－98Ⅵ層出土。

181は山形口縁である。頸部のくびれは



13類（伊波式）（1）

なく直線的である。口縁・肩部に二列一組の列点を施文する。第一文様帯は刺突が楔形を、第三文様帯は小さく丸状の形をなす。胎土は砂質で焼成は良好。す－91Ⅳ層出土。

182は山形口縁で、山形部分に縦位の稜がみられる。口縁・肩部に一列の列点を施文する。胎土は砂質で焼成はややもろい。け－99かく乱層出土。

183は口縁が弱く外反する。口唇に深く刻目を施文し、口縁は二列の列点文を施す。点は深く若干三角形状を呈する。胎土は砂質で焼成はやや良好。く－100Ⅳ層出土。

184は山形口縁と思われる。口縁部に五㎜幅の工具による刺突を施文する。胎土は砂質で焼成はややもろい。し－99Ⅳ層出土。

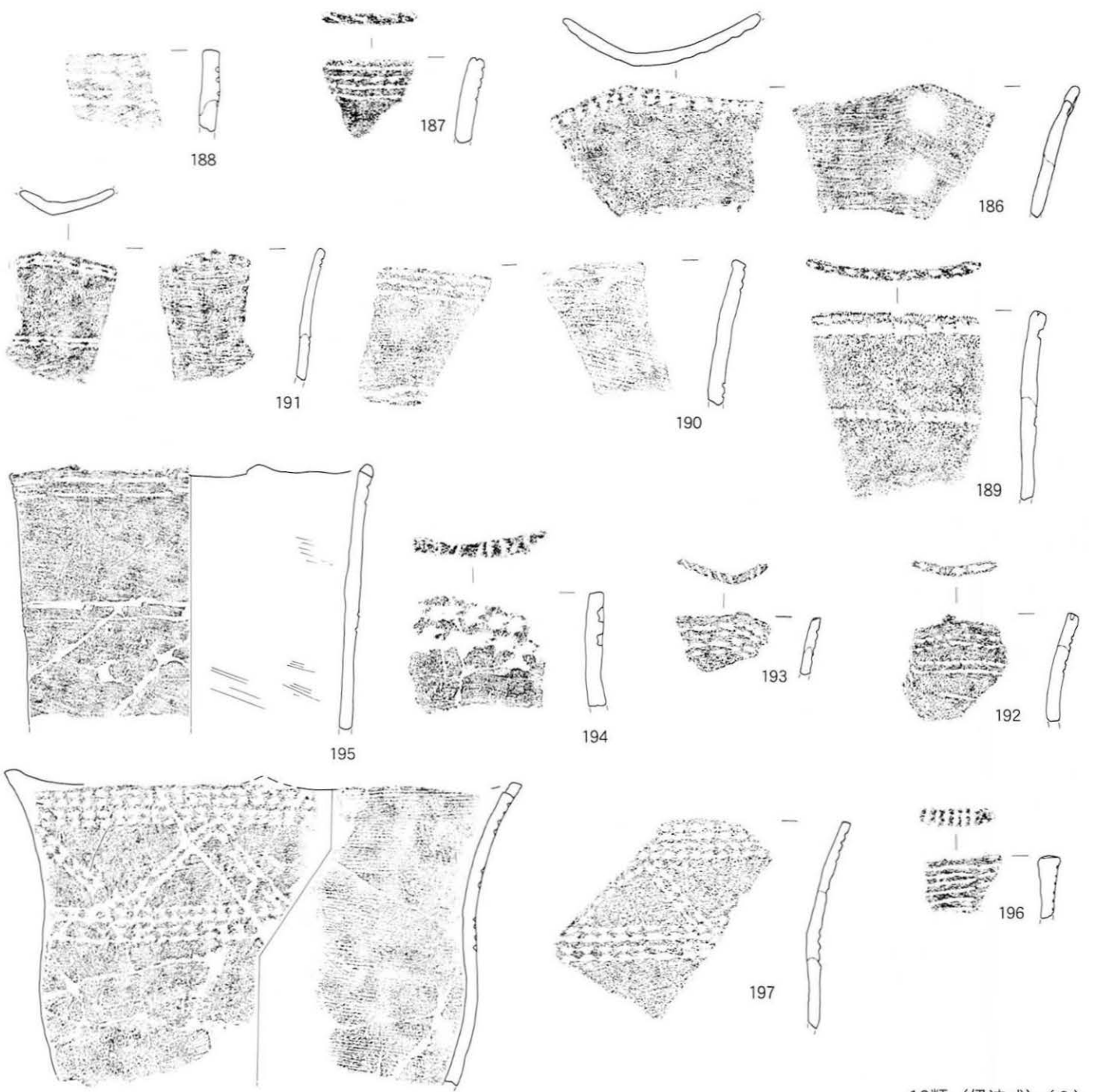
185は山形口縁である。口縁部に九㎜幅の工具による刺突を施文する。胎土は砂質で焼成は良好。し－100Ⅳ層出土。

186は山形口縁で、そのため強く外反するようにみえる。口縁・肩部に細かく小さい連点文を施す。点は連結されない部分もみられる。胎土は砂質で、焼成はやや良好。す－101Ⅲ層出土。

187は口唇に斜めの沈線を施文する。口縁に不揃いの四条の連点文を施すが、連点は途切れる部分もみられる。胎土は砂質で、焼成は良好。し－99Ⅳ層出土。

188は口縁に二点一組の深めの連点文を施すが、部分的に途切れる箇所がみられる。胎土は砂質で、焼成は良好。し－99Ⅳ層出土。

189は直口口縁で、山形口縁と思われる。口唇に間隔の離れた刺突文を施す。外面の文様は同じ工具で押し引きされるが、下段の施文は浅い。胎土は砂質で、焼成は良好。さ－99Ⅳ層出土。



第17図　13類（伊波式）（2）

190は山形口縁と思われる。口唇内面が部分的に突出する。第一文様帯は棒状工具による押し引きであるが、第三文様帯は篦状工具により太い沈線状に施文されているように見受けられる。胎土は砂質で、焼成は良好。た－90Ⅳ層出土。

191は山形口縁である。器壁は薄い。押し引き文は細く、細かい施文で、部分的に途切れる所もみられる。胎土は泥質で、焼成は良好。け・こ－99Ⅳ層出土。

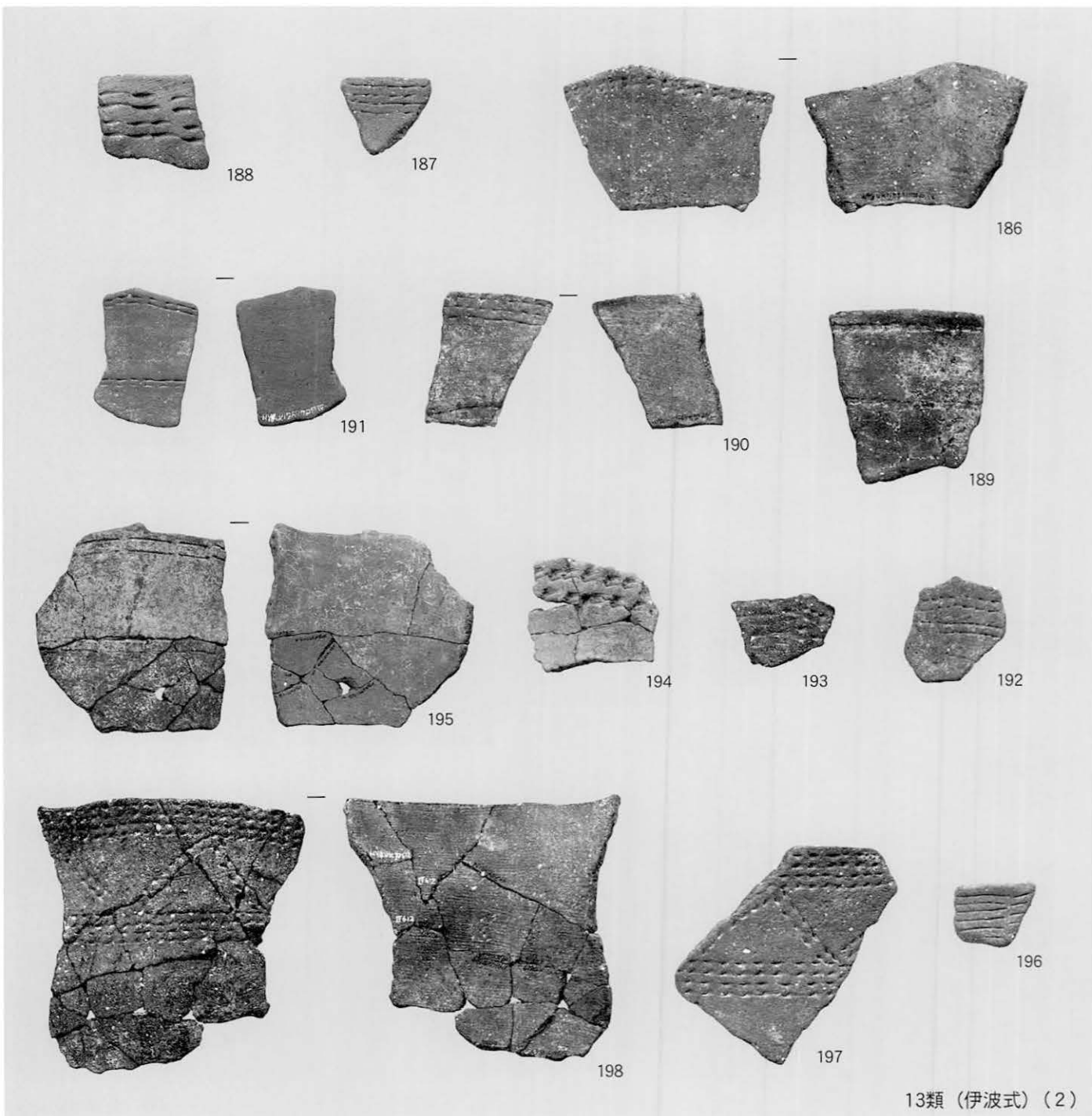
192は山形口縁であるが、山形の頂部は小さく、緩やかな山ではない。口唇に刺突及び沈線を施文する。外面の押し引きは山形になるが、下段はほぼ直線となる。胎土は砂質で、焼成は良好。せ－92Ⅳ層出土。

193は山形口縁である。口唇山形頂部を中心として斜めの刻みを施す。口縁山形の右側は押し引き、左側は短沈線と均一性がみられない。胎土は砂質で、焼成はややもろい。ち－98Ⅳ層出土。

194は山形口縁であるが、文様のためか階段状となり、変形した山形口縁となる。口唇に縦の刻みを施す。外面の文様は深く施文され、雑な感がある。胎土は砂質で、焼成は良好。た－98Ⅳ層出土。

195は直線的な器形である。口縁の山形は片方の傾斜が急で山自体も小さい。また山と山との間隔は短い。文様は口唇直下及び五・五cm下方に長沈線を施文する。施文具は沈線の長さや止めの位置が揃わないことから、棒状工具の可能性があると思われる。推算口径は一八・二cmを測る。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－96Ⅲ層出土。

196は口唇部に厚みのある山形口縁である。口唇部は山形口縁を除いて縦位に刻みを施す。口縁部には二本一組の長沈線が三列みられる。胎土は砂質で、焼成は



13類（伊波式）（2）

良好。ち－90Ⅳ層出土。

197は口縁が朝顔状に広がり、間延びした肩部から直線的になる。二点一組の二列の点刻文を上下に施し、その間に同様の施文方法で鋸歯状文を施文する。鋸歯状文は二点一組の一列のみである。胎土は砂質で、焼成はやや良好。こ－99Ⅳ層出土。

198は山形口縁であり、器形的な特徴および文様構成は同図197と同様である。推算口径は二五・四㎝を測る。胎土は砂質で、焼成はやや良好。た－95Ⅳ層出土。

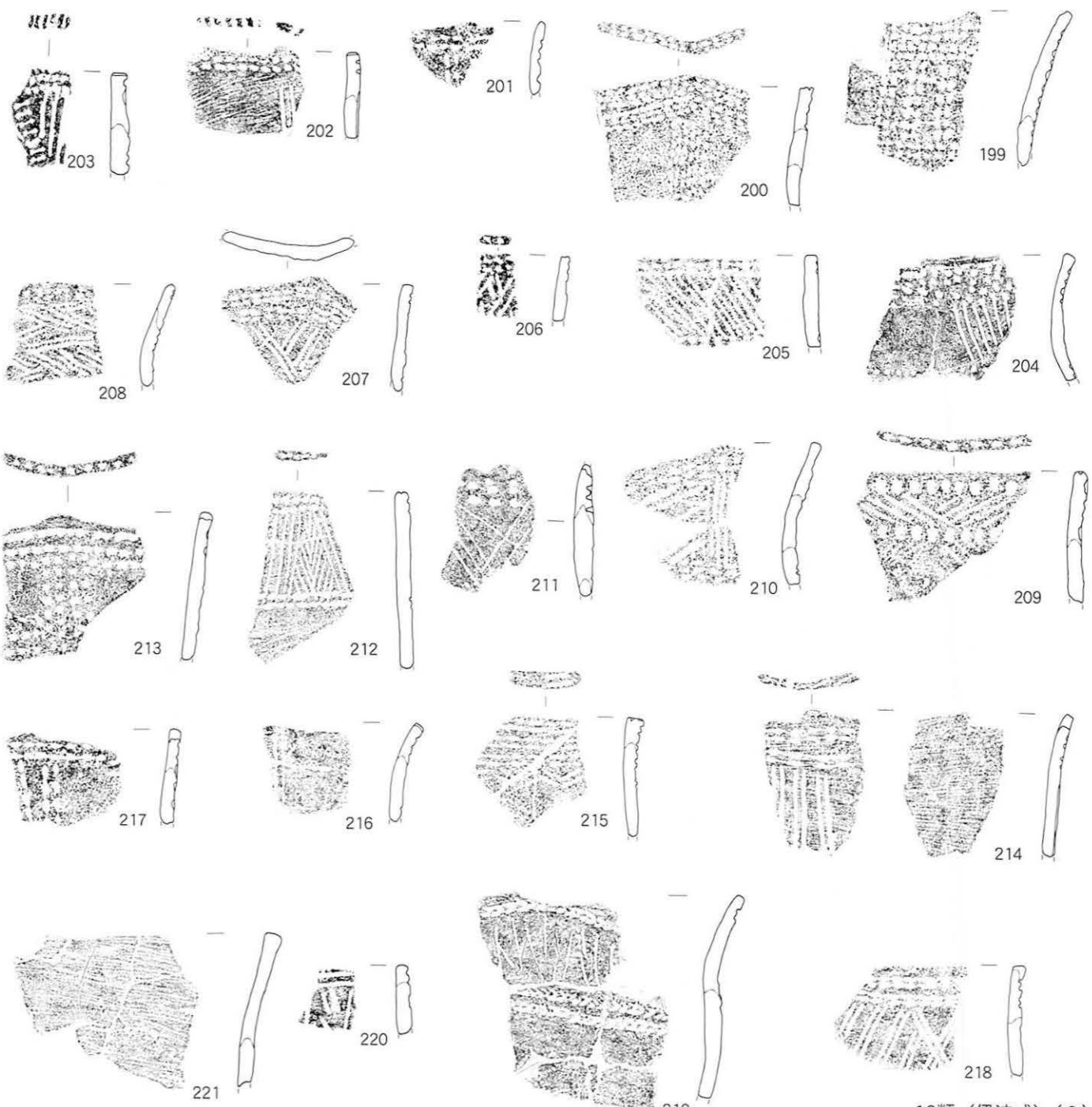
199は山形口縁で、口縁部は強く外反する。二点一組の二列の下方に二点一組三列の縦位区画文を施す。第三文様も第一文様帯と同様と思われる。胎土は砂質で焼成はやや良好。け－101かく乱層出土。

200は山形口縁で、山形頂部の外面に縦位の稜がみられる。口唇に二点一組の点刻文を施す。口縁も同様に二点一組の三列を施し、その下方に二点一組三列の縦位区画文を施す。その下方も第一文様帯と同様と思われる。胎土は砂質で焼成は良好。く－100Ⅳ層出土。

201は山形口縁で、山形の片方の傾斜が急で小さい。文様は二点一組一列の施文で縦位区画文も同様である。胎土は泥質で焼成はやや良好。さ－100Ⅳ層出土。

202は口唇に縦位の刻みを施す。口縁に二点一組一列の点刻文を施し、一部は口唇施文のためつぶれる。山形頂部直下は二本の縦位沈線を施文する。胎土は砂質で焼成は良好。さ－99Ⅳ層出土。

203は山形口縁の可能性がある。口唇に縦位の刻みを施し、口縁に二点一組一列の点刻文を施す。その下方に同様の点刻文及び沈線文を縦位に施す。施文は深い。胎土は砂質で焼成は良好。こ－101Ⅳ層出土。



第18図　13類（伊波式）（3）

204は山形口縁で、山形の裾部で一段下がる。第一・三文様帯は二点一組二列の点刻文を施し、その間に斜位の沈線を施文する。胎土は砂質で焼成は良好。つ－98Ⅵ層出土。

205は文様構成が204と同様である。胎土は砂質で焼成は良好。つ－98Ⅵ層出土。

206は口唇に刺突を施文し、口縁に二点一組一列と、その下方に細かい綾杉状文を施す。胎土は砂質で焼成はややもろい。す－91Ⅳ層出土。

207は山形口縁である。文様構成は206と同様であるが、綾杉状文は大柄である。胎土は砂質で焼成は良好。く－100Ⅳ層出土。

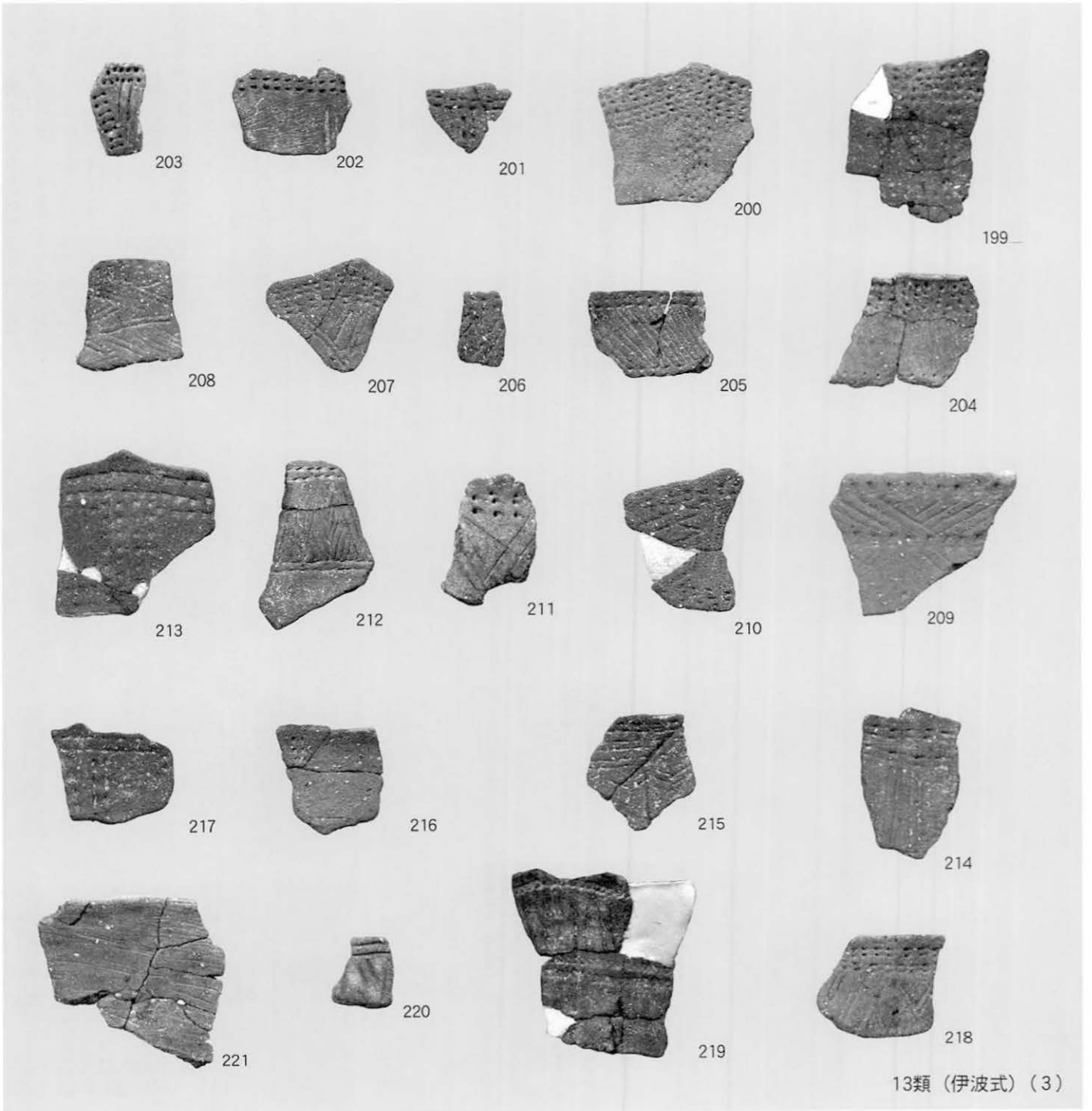
208は口縁が朝顔状に広がり、屈曲がやや強い。口縁に二点一組一列の点刻文を施す。その下方の綾杉状文は二列見られ、その間に横位長沈線で区画されているようである。胎土は砂質で焼成はややもろい。け－101かく乱層出土。

209は口唇に刺突連点文を施す。口縁には列点文を二組配し、その間に間延びしたような羽状文を施す。さらに下段の列点文の下方にも鋸歯状文を施す。胎土は砂質で焼成は悪い。出土地区不明、盛土より表採。

210は山形口縁で口縁は強く外反する。第一文様帯は一列、第三文様帯は二列の点刻文を施す。山形頂部直下に縦位沈線を施文し、その間には鋸歯状文を施す。胎土は砂質で焼成はややもろい。く－100Ⅳ層出土。

211は器壁が厚い。四列の列点文を深く施文し、その下方に細沈線の鋸歯状文を施す。胎土は砂質で焼成はやや良好。た・ち－90Ⅳ層出土。

212は口唇に刺突文を施す。口縁第一・三文様帯に二本一組の連点状の列点を施



13類（伊波式）（3）

文する。その間には斜位沈線と羽状文を施す。丁寧な細かい施文である。胎土は砂質で焼成は良好。さ－101Ⅳ層出土。

213は山形口縁で、山形に稜がみられる。口唇に刺突文を施し、口縁第一文様帯に三列の列点を施文する。第三文様帯は二列のみ確認される。第二文様帯は山形頂部下に四列の列点文を施す。胎土は砂質で焼成はやや良好。け－99Ⅳ層出土。

214は204と同様に山形の形状が裾部で一段下がる。口唇に斜位の沈線を施文する。第一文様帯は二点一組二列の連点文を施す。第三文様帯も同様か？第二文様帯は山形頂部下に二本一組三列の縦位沈線を施文する。胎土は砂質で焼成はやや良好。そ－95Ⅲ層出土。

215は山形口縁と思われる。口唇は膨らみ、二本一組の沈線を施文する。第一文様帯は二点一組の細かい連点文を三列配し、口縁下方に鋸歯状文を施す。荻堂式土器の可能性もある。胎土は砂質で焼成はやや良好。こ－100Ⅳ層出土。

216は山形口縁で、山形の形は弱い有段がみられる。第一文様帯に文様はみられず、口唇から二点一組の連点が一列縦位に施文され、その下方に長めの連点文が一列見られる。胎土は砂質で焼成はやや良好。さ－100Ⅳ層出土。

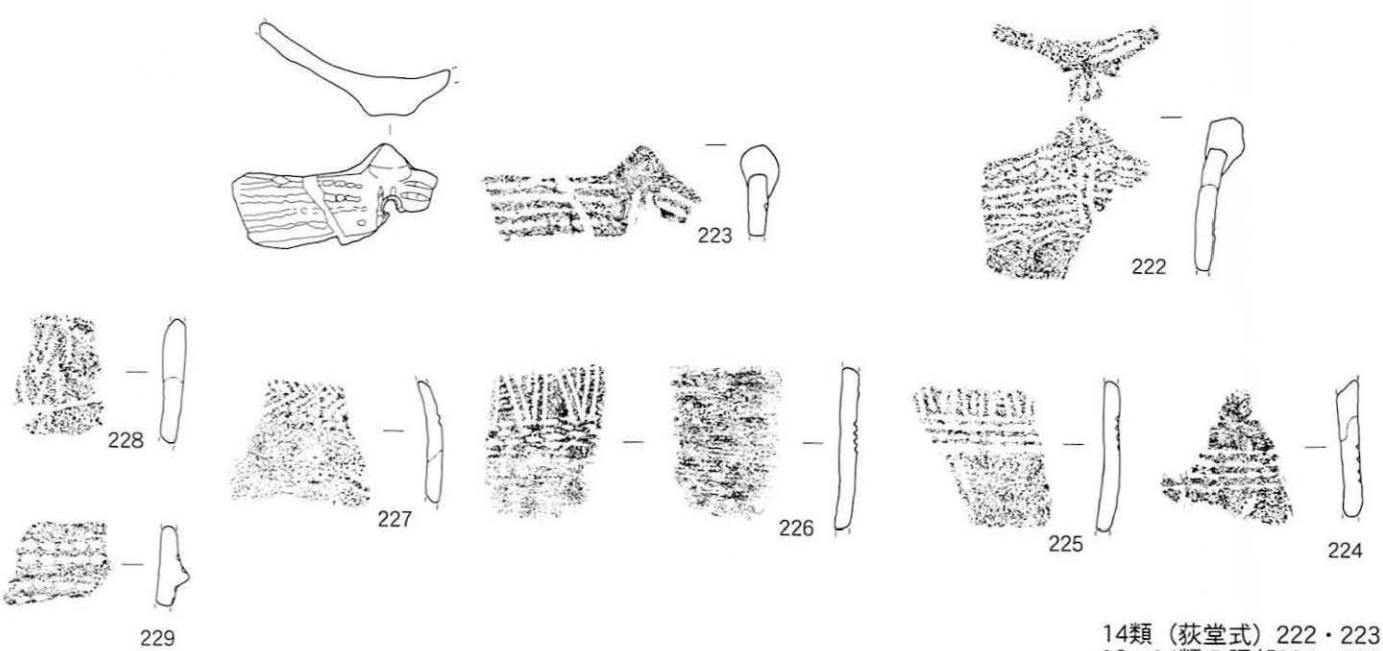
217は山形口縁で、山形は双頭突起になる可能性がある。第一文様帯に二点一組の連点文を一列施し、山形頂部下に同様の文様を縦位に二列配する。胎土は砂質で焼成はやや良好。し－99Ⅳ層出土。

218は山形口縁と思われる。第一文様帯に二点一組の押し引きが二列、その下方に縦位沈線と鋸歯状文がみられる。胎土は砂質で焼成は良好。け－100Ⅳ層出土。

219は山形口縁と思われる。第一文様帯に一列、第三文様帯に二列の押し引きを施文し、個々の形が楔状を呈する。第二文様帯は細沈線でくずれた羽状文を施す。神野E式土器か？胎土は砂質で焼成はやや良好。し－99Ⅳ層出土。

220は口縁に二本一組の沈線を施し、その下方に縦の区画、その中に斜めの短沈線文を施文する。胎土は砂質で焼成は良好。た－90Ⅳ層出土。

221は無文である。口唇はやや膨らみ口縁は若干外反する。胎土は泥質で焼成は良好。つ－98Ⅵ層出土。



14類（荻堂式）222・223
13・14類の胴部224～229

第19図

(15) 14類土器

この類は縄文後期に位置づけられる土器で、北中城村荻堂の荻堂貝塚出土の土器を標識とする荻堂式土器（注14）に属する。明確に本類に属するのは二点のみで、荻堂式土器に特徴的な山形突起の山頂部が瘤状に肥厚する。いずれも深鉢形である。分類基準は13類土器と同一である。以下、資料の概要を述べる。

222は山形頂部に瘤を貼付ける。瘤は指で押され外面は平坦となる。文様は二点一組の押し引きを三列配し、その下方に短めの鋸歯状文を施す。山形頂部は瘤部分から鋸歯状文まで縦位の区画文を施す。胎土は砂質で焼成はややもろい。こ－99かく乱層出土。

223は直径六㎜の孔を焼成後に穿つ。文様は二点一組の押し引きを二列配する。瘤の部分は無文で下部から縦位の区画文を配する。磨耗の為、沈線状にみられる。胎土は砂質で焼成はややもろい。こ－99Ⅳ層出土。

224～229は13類及び14類に属する胴部である。

224は四本の列点文を施し、部分的に点が連結される箇所がみられる。胎土は砂質で焼成はやや良好。そ－91Ⅳ層出土。

225は第二文様帯に細かい鋸歯状文を施す。第三文様帯は二点一組の点刻文を二列配するが、部分的に点が連結される箇所がみられる。胎土は砂質で焼成はやや良好。さ－99Ⅳ層出土。

226は文様構成が225と同様である。胎土は砂質で焼成はややもろい。す－92かく乱層出土。

227は第二文様帯に細かい線で羽状文を施し、第三文様帯に小さな点で点刻文を施す。傾きは不明である。胎土は砂質で焼成はややもろい。け－100Ⅳ層出土。

表11. 13類及び14類土器分類結果

分類	13類		14類	不明※1		合計
	口縁部	胴部	口縁部	口縁部	胴部	
A	25		1			26
B	25	5	1			31
C	38					38
不明※1				384	853	1,237
計	88	5	2	384	853	1,332

※1　小破片であるため分類不可能。

14類（荻堂式）222・223
13・14類の胴部224～229

228は形の崩れた羽状文と、その上部に一本の沈線がみられる。傾きは不明。胎土は砂質で焼成は悪い。せ－91Ⅳ層出土。

229は三角突帯をめぐらし、その上下に二点一組の点刻文を施す。傾きは不明。胎土は砂質で焼成はややもろい。せ－91Ⅳ層出土。

(16) 15類土器

15類土器は平底の深鉢形土器で、口縁部は若干外反し、文様帯がわずかに肥厚する。文様は籠編み状の文様をモチーフとした押し引き沈線文が施される。

これらの土器は縄文後期に該当する面縄東洞式土器（注15）の範疇に入るものと思われる。面縄東洞式土器は徳之島伊仙町面縄第四貝塚東洞穴第五層出土の土器を標式とするものである。しかし、本貝塚出土の面縄東洞式土器に該当する資料は完全な籠の編み目は少なく、若干間延びしたような文様が主流となっている。文様による分類は次の通りである。

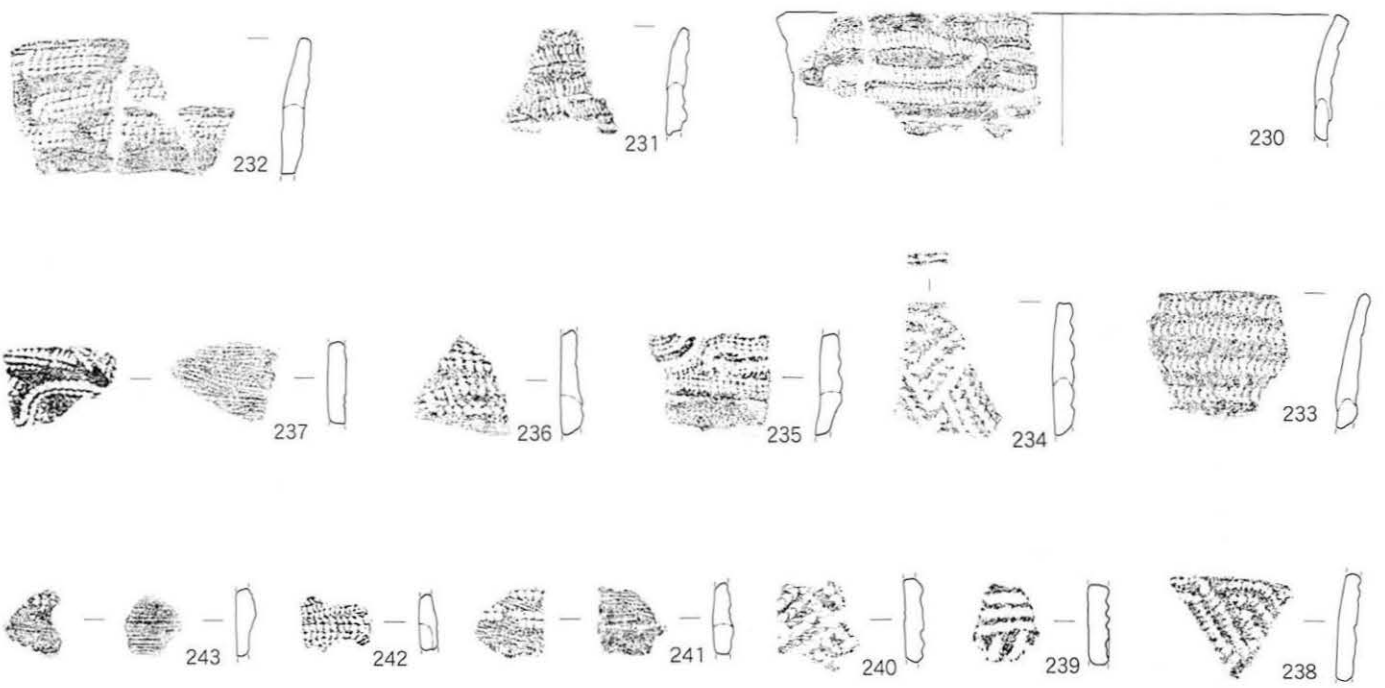
① 横位文主体
② 籠編み状文様
③ ①の文様が平行線化したもの
④ ①か③のどちらかはっきりしないもの

なお施文具はイ・ロ・への三種に分類される。以下、各資料の概要を述べる。

230は丸みを帯びた工具で押し引きを連続的に施す。文様施文部位は弱く肥厚する。推算口径は二二・六cm。胎土は砂質で焼成は良好。す－102Ⅳ層出土。

231は230と同様の文様構成である。工具は篦であるが、中央に節がみられる。施文部位は肥厚する。胎土は砂質で焼成は良好。す－101Ⅳ層出土。

232は文様構成が231と同様である。肥厚はあるが、稜線はみられない。胎土は砂



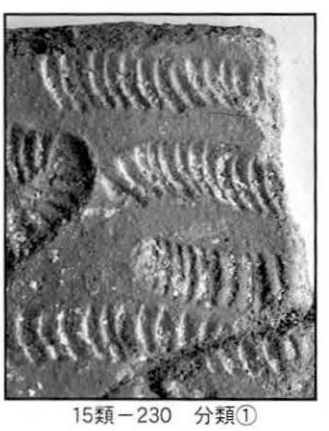
15類（面縄東洞式）230～243

第20図

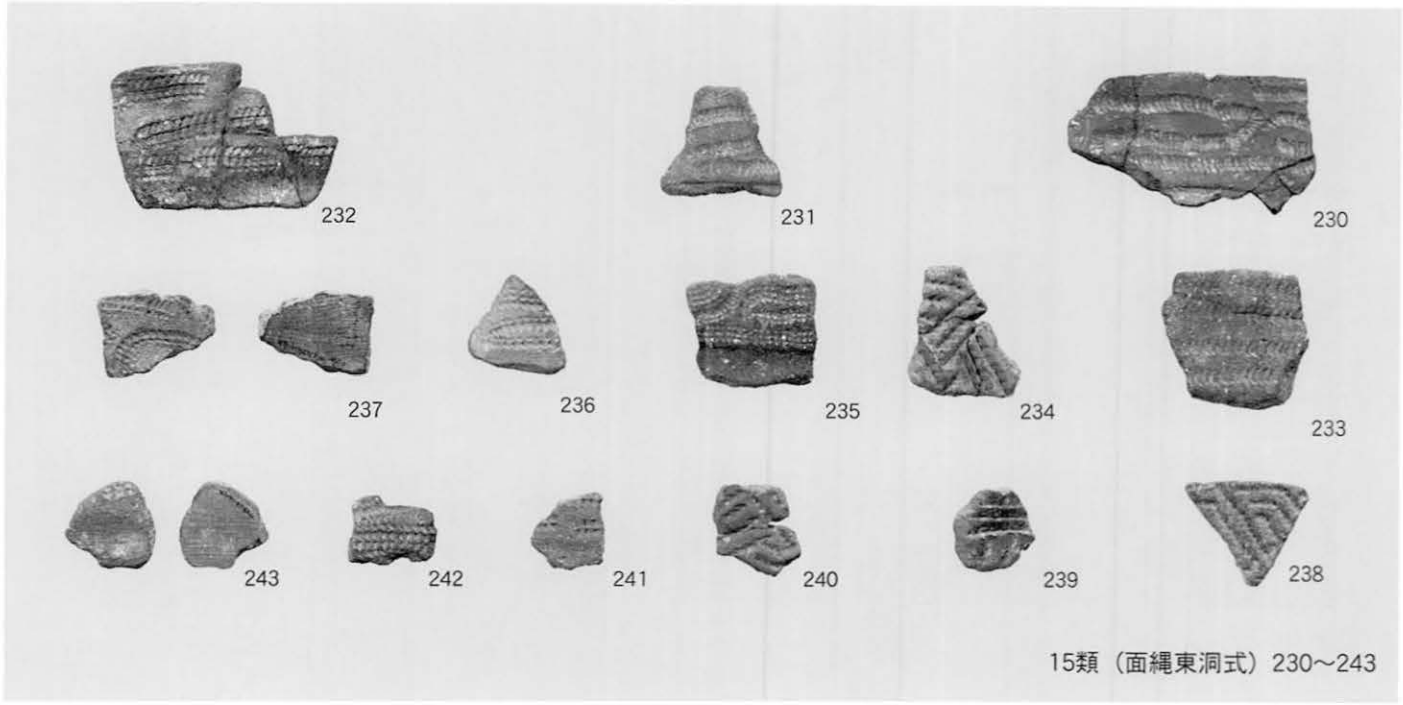
15類－233　分類①

15類－232　分類①

15類－231　分類①


15類－230　分類①

質で焼成はやや良好。し－101Ⅳ層出土。
233は横位文のみで曲線はみられない。押引きの間隔が粗い。胎土は砂質で焼成は良好。そ－96Ⅳ層出土。
234は口唇に浅い押し引きを施文する。口縁文様は深く施文される。胎土は砂質で焼成は良好。せ・そ－100Ⅳ層出土。
235は三叉の工具によって押し引かれる。曲線の部分もみられる。胎土は砂質で焼成はやや良好。す－102Ⅳ層出土。
236は工具の叉状部分の長さが異なる。曲線部分は完全なカーブではなく直線が接しているのみ。胎土は砂質で焼成は良好。せ－99かく乱層出土。
237は工具の叉状部分の長さが異なる。一部段を有するステップ文が組み合わされる。胎土は砂質で焼成は良好。す－100Ⅳ層出土。
238は幅が小さく先端が丸みのある篦によって施文される。胎土は砂質で焼成はやや良好。し－100Ⅳ層出土。
239は深い施文の為、沈線状に見うけられる。胎土は砂質で焼成は良好。た－98Ⅳ層出土。
240は深い施文で、点の形は楔状を呈する。胎土は砂質で焼成は良好。す－100Ⅳ層出土。
241は直線的文様のみがみられる。工具の先端の長さは同じである。胎土は砂質で焼成は良好。す－101Ⅳ層出土。
242は文様構成が不明であるが、浅い施文を施す。胎土は砂質で焼成は良好。す－102Ⅳ層出土。
243は文様構成が不明である。胎土は砂質で焼成はやや良好。す－102Ⅳ層出土。



15類（面縄東洞式）230～243

15類－239　分類③

15類－238　分類②

15類－235　分類②

15類－234　分類②

(17) 16類土器

16類土器は縄文後期後半ごろの土器である。すべて平口縁で、深鉢形と一点のみ壺形がみられる。口縁部は直口か若干外反するものである。文様は口唇部及び口縁部に施文されるが、胴部までの資料が出土していないため、胴部以下の施文は不明である。施文された文様は、押し引き文や細沈線文で籠編み状や綾杉状文を描く。また、沈線のみの文様もみられる。

これらの土器は、奄美大島瀬戸内町嘉徳遺跡を標式遺跡とする嘉徳Ⅰ式・Ⅱ式土器（注16）の範疇に入る。分類は次の通り。

① 押し引き沈線＋細沈線
② 刺突＋沈線
③ 沈線のみ

文様構成

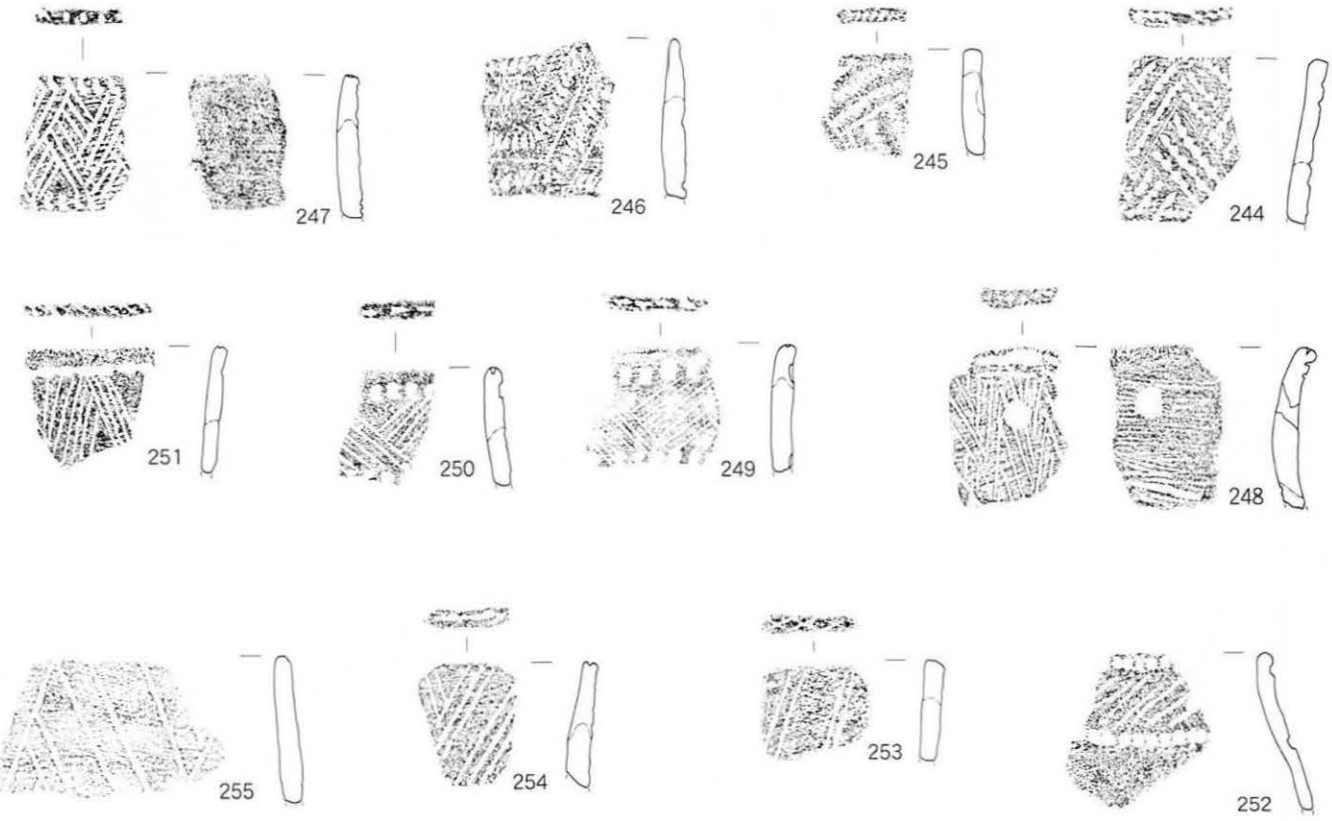
a 籠編み目状文
b ステップ状文
c 羽状（綾杉状）文
d 斜位沈線文

なお施文具は口・への二種に分類される。以下、各資料の概要を述べる。

244は口唇内面がカットされ、斜面を作る。口唇に押し引きで左右対称の文様を施文する。外面は区画として細沈線文を描き、押し引きで籠編み目状を施文する。胎土は砂質で焼成は良好。す－101Ⅳ層出土。

245は口唇に押し引き文を施す。文様構成は244と同様であるが、前者に比べて施文が深い。胎土は砂質で焼成はやや良好。た・ち－91・92Ⅳ層出土。

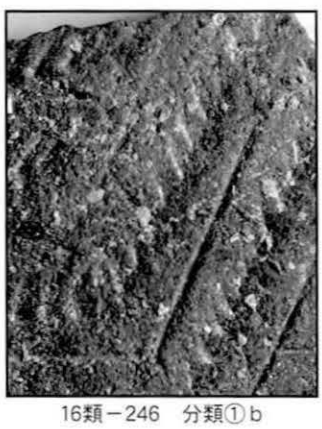
246は沈線で区画し、押し引き文を施す。施文は浅い。胎土は砂質で焼成は良好。そ－96Ⅳ層出土。



16類（嘉徳Ⅰ式・Ⅱ式）

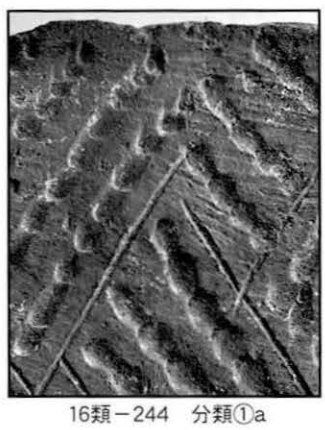
第21図

16類－249　分類②b



16類－246　分類①b

16類－245　分類①a



16類－244　分類①a

247は口唇に浅い刺突列点文を施す。口唇直下及び五cm下方に一列の刺突を施文し、その間に沈線の羽状文を施す。胎土は砂質で焼成は良好。つ－97Ⅴ層出土。

248は口縁部に五mm幅の孔がみられる。孔は内外両面から焼成後に穿孔されている。口唇には深い刺突を施文する。口唇直下には二本一組の短沈線を施文し、その下方に羽状文を施す。胎土は砂質で焼成は良好。し－97かく乱層出土。

249は口唇にやや長めで深い刺突を、口唇直下及び三cm下方に幅広の刺突を施す。その間には羽状文を施す。胎土は砂質で焼成は良好。く－100Ⅳ層出土。

250は文様構成が249と同様であるが、器形は若干内傾する。胎土は砂質で焼成は良好。し－99Ⅳ層出土。

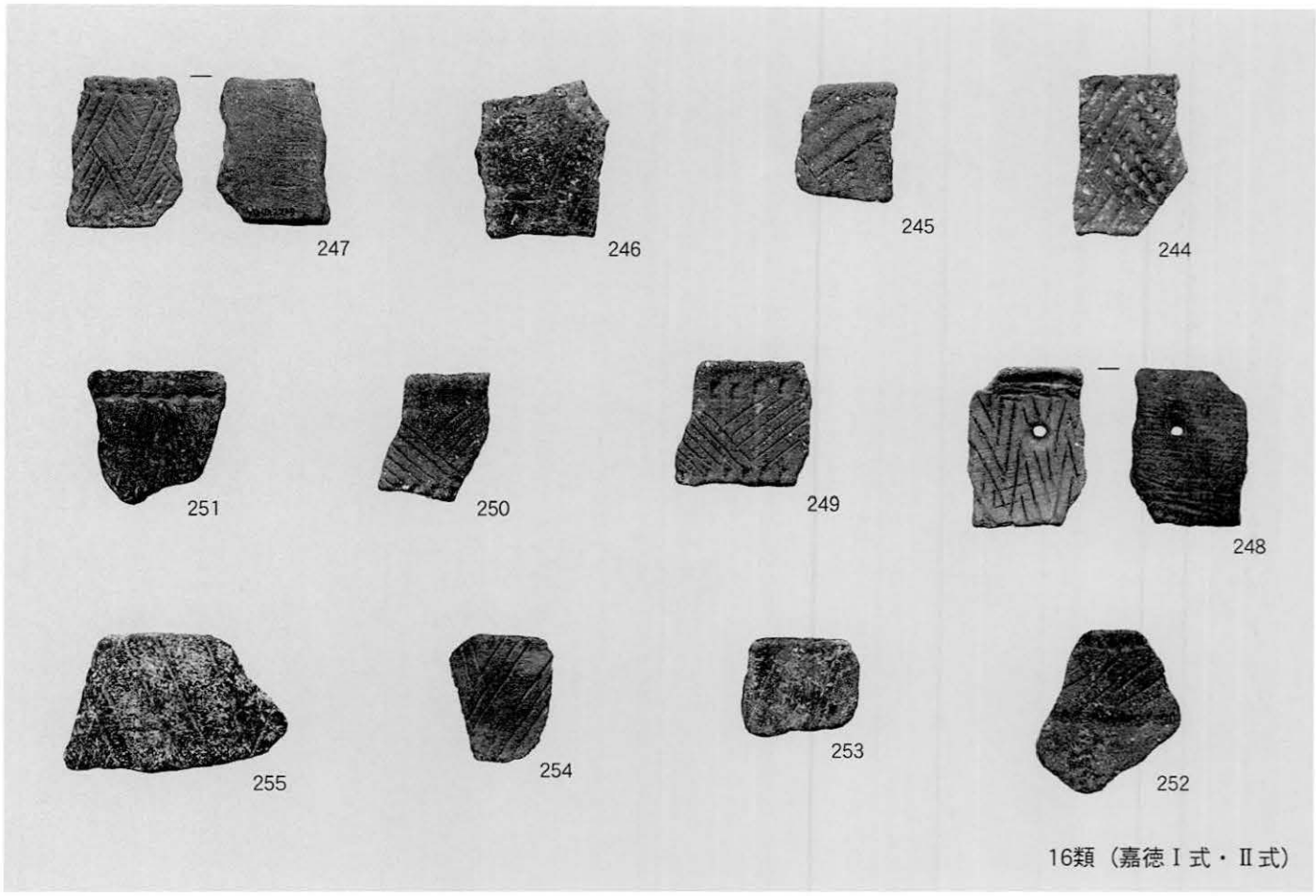
251は口唇に斜位の沈線文を施し、口唇直下に刺突文を一本施し、その下方は羽状文となる。刺突の点は楔状を呈する。胎土は砂質で焼成はやや良好。す－93かく乱層出土。

252は壺形に属すると思われる。口縁及び肩部に一条の刺突文を施し、その間に斜位の沈線を施文する。施文は雑である。胎土は砂質で焼成はやや不良。け－99かく乱層出土。

253は口唇に「X字状」の沈線を施文する。外面には二本一組の斜位の細沈線を口唇から施文する。胎土は砂質で焼成はやや良好。ち－90Ⅳ層出土。

254は口唇の先端に、口唇に沿って深い沈線を施文する。外面には口唇直下から羽状文を施す。胎土は砂質で焼成は良好。ち－94Ⅲ層出土。

255は口唇直下から大柄の羽状文を施す。胎土は砂質で焼成は良好。し－100Ⅳ層出土。



16類（嘉徳Ⅰ式・Ⅱ式）

16類－255　分類③c

16類－253　分類③d

16類－252　分類②d

16類－251　分類②c

(18) 17類土器

17類土器は概ね縄文後期に位置づけられる土器であるが、出土量が少なくこれまでの9～16類土器に該当しづらいものをまとめた。器種は深鉢形と壺形があり、有文及び無文がみられる。この類は統一性がないため、観察のみにとどめる。以後、類似資料の出現を待ちたい。以下、各資料の概要を述べる。

口縁部（第22図256～264）

胴部（第22図265～277）

256は口唇に棒状工具による刺突列点文を施す。外面は口唇直下より篦状工具により刺突文を施す。胎土は砂質で焼成はやや悪い。そ－95Ⅴ層出土。

257は外面口唇直下に一列、その下方に鋸歯状文を施す。内面は一列のみの施文である。施文工具は篦状工具及び半截竹管状工具である。胎土は砂質で焼成は良好。そ－96Ⅵ層出土。

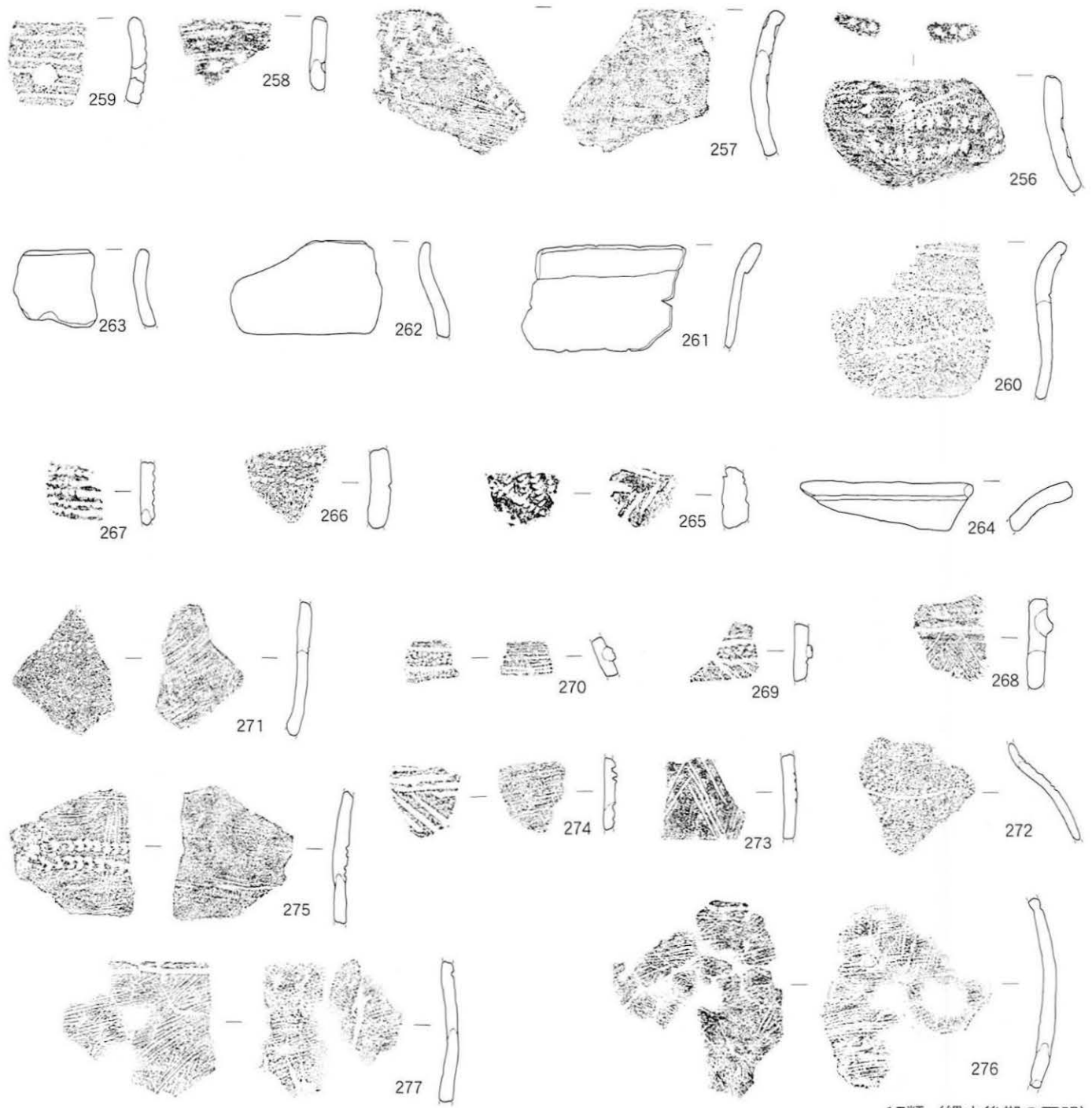
258は口唇に斜位の刻みを深く施文する。外面は刺突文を施すが、文様構成は不明である。胎土は砂質で焼成は良好。た－90Ⅳ層出土。

259は口縁部やや下方に直径五㎜の孔がみられ、焼成前に穿孔されたと思われる。口唇直下から七本の横位沈線を施文するが、均一性がなく口唇直下はつぶれて消える。施文工具は棒状工具である。胎土は砂質で焼成は良好。し－100Ⅳ層出土。

260は口唇直下及び肩部に一本の沈線を施文する。胎土は砂質で焼成はやや悪い。せ・そ－92Ⅳ層出土。

261は無文である。口縁は一・五㎝幅の肥厚帯をなす。胎土は砂質で焼成はもろい。け・こ－100・101Ⅳ層出土。

262は無文で、口縁は若干すぼまり肩部から膨らんでいく。胎土は砂質で焼成は



第22図　17類（縄文後期の不明）

良好。す－91Ⅳ層出土。

263は無文である。口径の小さな壺でゆるやかに膨らむと思われる。胎土は砂質で焼成はやや良好。け－101Ⅳ層出土。

264は無文である。口広の壺で、口唇は方形を呈する。胎土は砂質で焼成はややもろい。ち－97Ⅳ層出土。

265は外面に細かい刺突を連続して施文する。内面には太めの沈線で羽状文を施す。文様・胎土・器壁の厚さなどから縄文前期の土器とも考えられる。胎土は泥質で焼成は良好。つ－97Ⅴ層出土。

266は貝殻文と思われる文様を施す。縄文前期の土器である可能性もある。胎土は砂質で焼成はやや良好。す－100Ⅳ層出土。

267は先端の尖った工具で細かく押し引きを施す。文様から奄美系か？胎土は砂質で焼成は良好。そ－99Ⅲ層遺構出土。

268は丸みのある三角突帯を貼付ける。突帯の上下に細沈線で綾杉状の文様を施す。胎土は砂質で焼成は良好。し－97かく乱層出土。

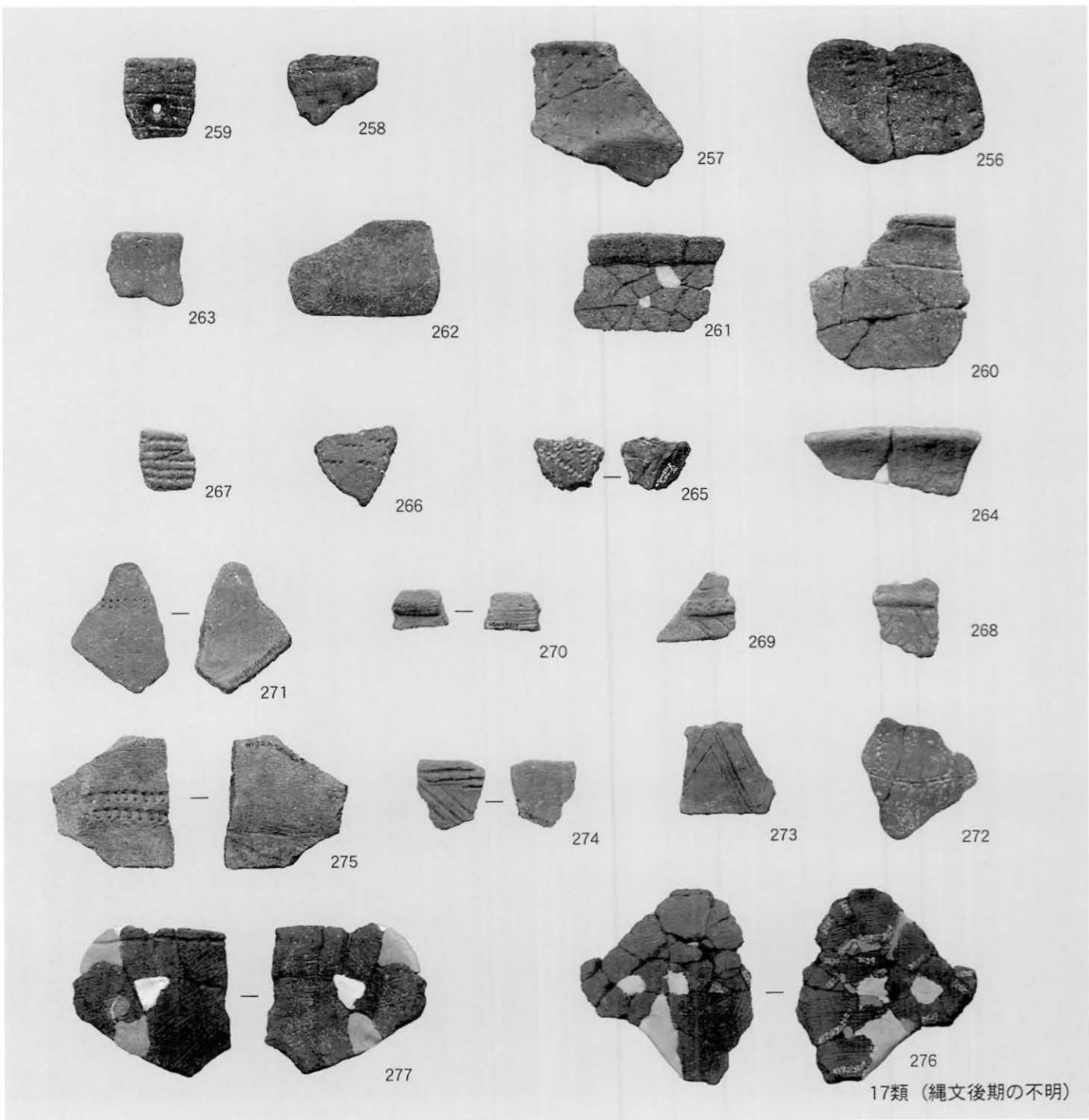
269は方形状の突帯を貼付け、突帯上に貝殻文？その下方に斜位沈線文を施す。胎土は砂質で焼成は良好。つ－98Ⅵ層出土。

270は269と同様の突帯を貼付け、突帯上に貝殻文？を施文する。胎土は砂質で焼成は良好。そ－99Ⅲ層出土。

271は壺形の可能性がある。叉状工具により二点一組の列点文を施す。胎土は砂質で焼成はやや良好。ち－90Ⅳ層出土。

272は壺形と思われる。縦横の沈線の周りに刺突文を施す。奄美系か？胎土は砂質で焼成はやや良好。け－100Ⅳ層出土。

273は雑な鋸歯状文を施す。奄美系か？胎土は泥質で焼成は良好。す－102Ⅲ層出土。



274は二㎜幅の棒状工具により横・斜め方向の数条の沈線を施文する。奄美系か？胎土は砂質で焼成は良好。と－93 4層出土。

275は半截竹管状工具により沈線を二本施す。奄美系か？胎土は砂質で焼成は良好。つ－91Ⅲ層出土。

276は細かい棒状工具で押し引き文を施す。奄美系か？胎土は泥質で焼成は良好。せ・そ－100Ⅳ層出土。

277は276と同様の文様を施す。奄美系か？胎土は泥質で焼成は良好。す－102Ⅳ層出土。

(19) 底部（13類～16類）

9類～12類土器はほとんどが平底となる。これらに該当する底部資料は少なく、尖底に関しては資料が小破片で図化不可能であったため、平底のみ図化した。

平底は形態からさらに次の二種に分類される。

① 立ち上がりにシャープさがなく、丸みがある

② 立ち上がりがシャープで、あまり丸みがない

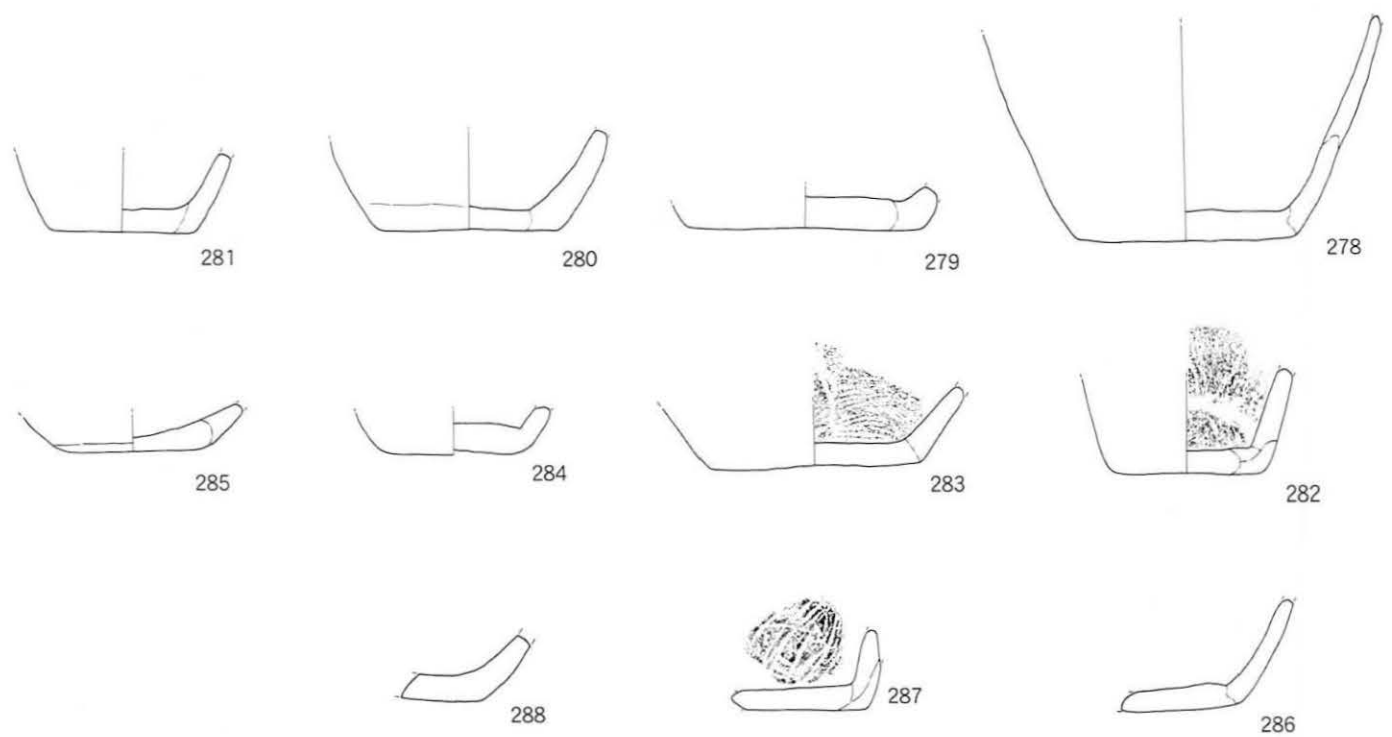
以下、各資料の概要を述べる。

278は推算底径が八・八㎝を測る。立ち上がりにシャープさがないが、胴部へほぼ直線的に立ち上がる。胎土は砂質で焼成はやや良好。け・さ－100Ⅳ層出土。

279は底径が九㎝を測る。底の内面に粘土の接合部がみられる。胎土は砂質で焼成はやや良好。こ－101Ⅳ層出土。

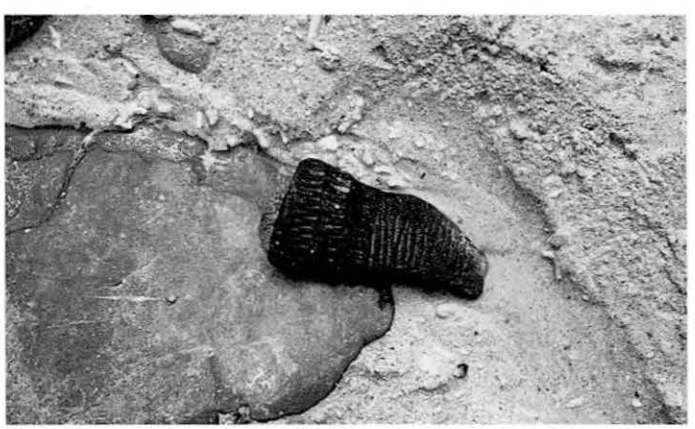
280は推算底径が七・二㎝を測る。胎土は砂質で焼成はやや良好。く・け－100Ⅳ層出土。

281は推算底径五㎝を測る小型の平底である。胎土は砂質で焼成はやや良好。



13～16類の底部

第23図



曽畑式土器出土状況　け・こ－100・101

Ⅷ層検出状況　け・こ－100・101

け・こ－99Ⅳ層出土。

282は推算底径五・六cmを測る小型の平底である。立ち上がりがシャープで丸みがない。胎土は砂質で焼成は良好。せ－92Ⅳ層出土。

283は推算底径が八・二cmを測る。立ち上がりの開きが他資料より大きい。胎土は砂質で焼成は良好。す－91Ⅳ層出土。

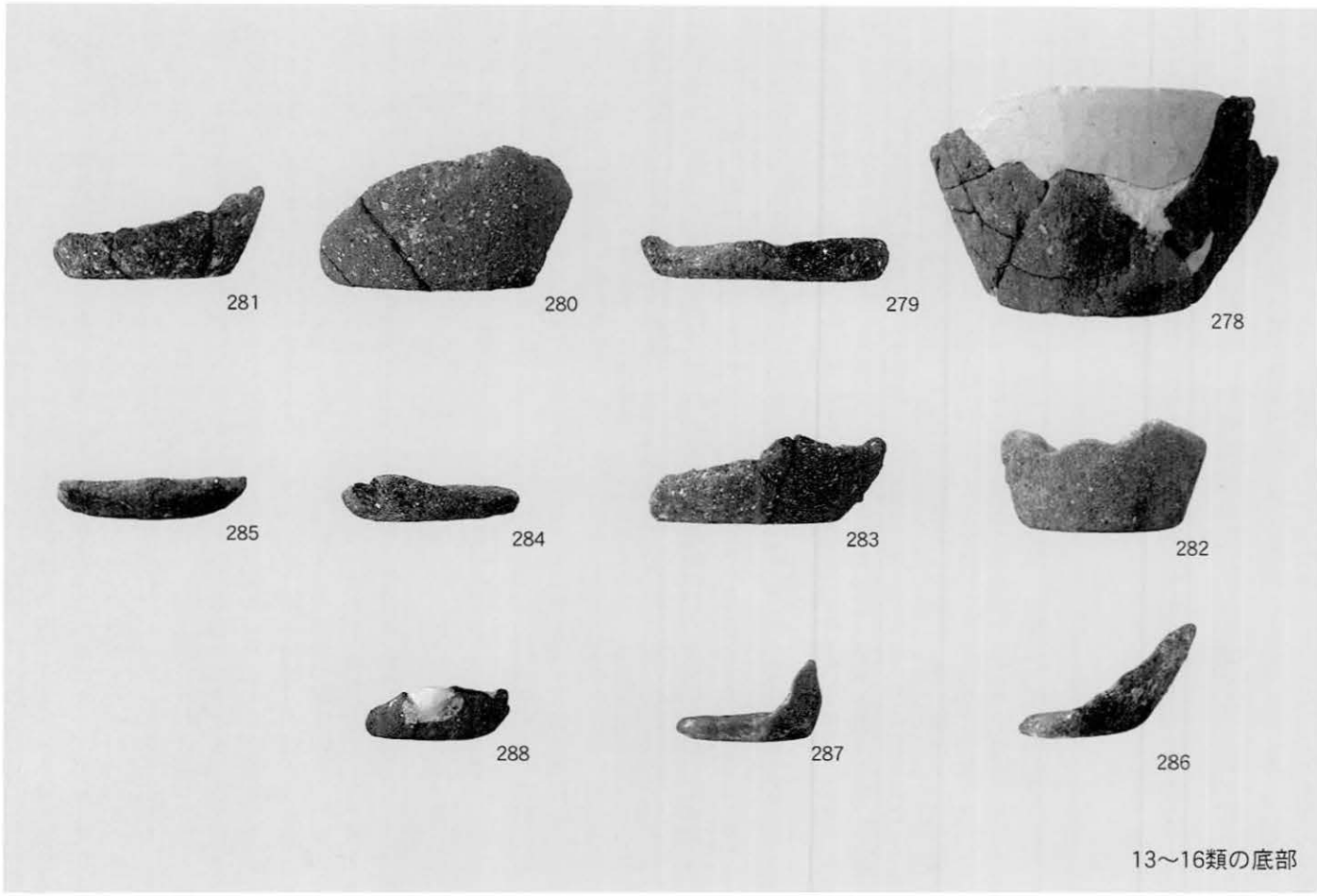
284は推算底径が五・八cmを測る。内面に粘土の接合部が残り、若干上げ底状となる。胎土は泥質で焼成は良好。そ－92Ⅳ層出土。

285は推算底径が六・四cmを測る。底の内面は稜がみられず、丸底状となる。立ち上がりの開きが大きいため、壺の底部とも考えられる。胎土は砂質で焼成は良好。ち－98Ⅳ層出土。

286は底の立ち上がり部が粘土で若干くぼむ。底径は不明である。胎土は砂質で焼成はやや良好。さ－99Ⅳ層出土。

287は立ち上がりがシャープである。底の内面は調整が雑である。底径は不明である。け－100Ⅳ層出土。

288は底の外面の稜は弱く、内面は丸底状になる。底径は不明である。胎土は砂質で焼成は良好。け－100Ⅳ層出土。



13～16類の底部

縄文時代後期底部出土状況　せ・そ－92

条痕文土器出土状況　す－100～102

(20) 縄文時代の土器小結

以上、今回の発掘調査で出土した縄文時代の土器について略述した。縄文時代の土器は1類から17類まで分類を行った。1類から3類土器は縄文時代早期、4類から9類土器が縄文時代前期、10類・11類土器が縄文時代中期、12類から17類土器が縄文時代後期に位置づけられる。縄文時代の土器は総数五六〇七点出土し、各時期別で出土数を比較すると、縄文時代早期（1類から3類）が一五三一点、縄文時代前期（4類から9類・底部含む）が二二一〇点、縄文時代中期（10類・11類）が三三点、縄文時代後期（12類から17類・底部含む）が一八三三点である。縄文時代前期の土器が最も多く、次に後期、早期、中期の順である。さらに縄文時代早期では1類の薄手土器が圧倒的に多く、同時代前期では4類の曽畑式土器が多く、同時代後期では土器型式の明確な資料に限ると13類の伊波式土器が多い。以下に各時期別に特徴を述べる。

縄文時代早期

1類土器は、薄手土器である。胴部も含めて一五一三点と出土数は多い。沖縄県内での出土は嘉手納町の野国貝塚B地点からの報告があるが、まとまった数量の出土は本貝塚が初めてである。僅かではあるが口縁部及び底部が得られたことは本資料が県内で少ない現状において重要である。胎土は砂質が圧倒的で、泥質は少ない。全形を窺える資料はないが、出土した資料によると、口唇部は丸みを帯びた舌状のものと、方形状のものがあり、口縁部は直口ないし僅かに外反し、底部は尖底もしくは尖底的な丸底である。また口縁部・胴部・底部は基本的に無文であるが、一点のみ口唇部の二・六cm下方に細い隆帯を貼付ける有文口縁部が得られている。

2類土器は細沈線文土器で全て胴部である。出土数は僅か五点と少ない。混入物は大粒のものが多く、焼成はおおむねもろい。胎土は一点のみ砂質で他は泥質である。本類土器は1類土器に伴う出土で、文様等から新型式の土器である可能性もあるが、出土数も少なく、器形など不明な点も多いため、今後の資料の追加を待ちたい。

3類土器の爪形文土器は出土数が十三点と少なく、全て胴部であり、器形は不明である。出土数の内、一点のみヤブチ式土器で、残りは全て東原式土器である。なお3類土器の爪形文土器については、本土の縄文草創期に属する爪形文土器との年代や系統、当土器に伴って出土する石器組成が異なるとして奄美・沖縄諸島出土の爪形文土器を別系統の土器とみる意見もある（注17a・b・c）。

1類・2類土器は3類土器の爪形文土器の下層から出土し、後者より古いことがいえる。また薄手土器のなかに有文口縁が一点含まれていたこと、そして細沈線を施す胴部が少数存在することから、現段階では爪形文土器に先行する土器として、薄手土器（無文が圧倒的で、有文は一点のみ）と細沈線文土器（胴部）があげられる。

縄文時代前期

4類土器は曽畑式土器、5類土器は室川下層式土器、6類土器は条痕文土器に属する。7類土器は沈線文土器、8類土器は無文土器に属する。出土数は4類土器が八一点、7類土器が七六点、6類土器が四九点、5類土器が二九点、8類土器が二五点の順である。4・5・6類土器のいずれかと思われる胴部は一九〇一点出土している。4類から8類土器に属する底部は四六点出土しており、乳房状尖底および平底はそれぞれ一点ずつのみで、丸底および尖底が多数を占める。4類土器・5類土器・6類土器については出土レベルの違いにより漠然とではあるが、上下関係をみることが可能である。すなわち5類・6類土器よりも4類土器は下部から出土する傾向がみられる。

縄文時代前期後半に属する9類土器（神野A・B式土器）は僅かに三点の出土である。

縄文時代中期

10類土器は面縄前庭Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式土器に、11類土器は面縄前庭Ⅴ式土器に属する。出土数は10類土器が十一点、11類土器が二二点である。本貝塚出土の縄文時代の土器では中期に属するものが最も少なく、沖縄諸島においても当該期の遺跡数は現在のところ少ないようである（注18）。

縄文時代後期

12類土器は仲泊式土器に、13類土器は伊波式土器に、14類土器は荻堂式土器に属する。出土数は12類土器が九点、13類土器が九三点、14類土器が二点である。また小破片のため分類が困難であった口縁部・胴部は一二三七点と多く存在するが、13類・14類のいずれかに含まれると思われる。

15類土器は面縄東洞式土器に、16類土器は嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器に属する。出土数は15類土器が十六点、16類土器が二一点である。

17類土器はおおむね縄文時代後期に位置づけられる土器であると思われるが、型式が判然としないためこれまでの9類から16類に該当しづらいものをまとめた。また胎土や文様から漠然と奄美系土器に分類されるものは全て本類土器に含めた。今後、さらに細分が必要と思われる。

9類土器から16類土器に属する底部は総数二四二点出土し、その内、平底が二三六点、乳房状尖底が六点と平底が圧倒的に多い。9類から12類土器の底部は尖底もしくは乳房状尖底、13類から16類の底部は平底になると思われる。底部の出土数は他の類に比べて多い特徴がみられる。

本貝塚から出土した縄文時代の土器は縄文時代早期から縄文時代後期までの長期にわたるものである。縄文時代後期後半の大山式・室川式土器や縄文時代晩期の土器は出土していないが、沖縄県内でもこのような複合遺跡は稀であり、各土器型式について例外はあるが、おおむね層位的に出土したといえる。今後、さらに細分可能な資料や比較検討する資料などもあり、残された課題は数多い。

注1　岸本義彦ほか　一九八四　『野国－野国貝塚B地点発掘調査報告－』沖縄県教育委員会

注2　国分直一・三島格　一九六五　「ヤブチ式土器－琉球と奄美大島における文化交流の一証跡－」『水産大学校研究報告　人文科学篇』十　水産大学校

注3　高宮廣衛・知念勇ほか　一九七七　『渡具知東原遺跡－第一～二次発掘調査報告－』読谷村教育委員会

注4　高宮廣衛ほか　一九七八　『沖国大考古』二　沖縄国際大学文学部考古学研究室

注5　高宮廣衛　一九八四　「暫定編年（沖縄諸島）の第三次修正」『沖縄国際大学文学部紀要社会学科篇』第一二巻第一号　沖縄国際大学文学部

注6　高宮廣衛・安里嗣淳　一九八六　「具志川式土器」『南島考古』十　沖縄考古学会

注7　高宮廣衛　一九九一　「南島考古雑録（1）」『南島考古』十一　沖縄考古学会

注8　河口貞徳　一九七四　「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』九　鹿児島県考古学会

注9　注7に同じ

注10　當眞嗣一・上原靜　一九八二　「伊武部貝塚の発掘調査について」『南島考古だより』二五　沖縄考古学会

注11　大山柏・小原一夫　一九三三　「奄美大島群島徳之島貝塚出土遺物（第一回）」『史前學雑誌』第五巻第五号　史前學會

注12　多和田眞淳　一九五六　「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会

注13　注5に同じ

注14　注12に同じ

注15　河口貞徳　一九七四　「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』九　鹿児島県考古学会

注16　注15に同じ

注17a　新東晃一　一九九八　「南九州の縄文文化」『日本考古学協会一九九八年度大会　研究発表要旨』日本考古学協会

注17b　上村俊雄　二〇〇〇　「南島考古学の問題点」『琉球・東アジアの人と文化（上巻）高宮廣衛先生古稀記念論集』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会

注17c　水ノ江和同　二〇〇五　「南島の縄文石斧」『南島考古』二十四　沖縄考古学会

注18　安里嗣淳　二〇〇三　「概説」『沖縄県史　各論編　第二巻　考古』沖縄県教育委員会

表12. 土器観察表（1類～17類）

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
1	け・こ	Ⅷ	1類	有文	深鉢形・甕形	砂質①	暗褐色	4～6	－
1	99	-89.5/-101	－	口縁	良好	黒〉石・長	暗褐色	－	－
1	け・こ	Ⅷふるい	1類	無文	深鉢形・甕形	砂質①	黒褐色	4～5	－
2	101	-96.5/-134	－	口縁	良好	石・長〉ウ〉千?〉黒	黒褐色	－	－
1	け・こ	Ⅷ	1類	無文	深鉢形・甕形	砂質①	黒褐色　褐色	5～6.5	－
3	101	-75/-87	－	口縁	良好	黒のみ	黒褐色	－	－
1	け・こ	Ⅷふるい	1類	無文	深鉢形・甕形	砂質①	淡黄褐色	4	－
4	101	-96.5/-134	－	口縁	良好	黒〉ウ	淡黄褐色	－	－
1	し	Ⅸ	1類	口縁	小型碗	泥質③	褐色	3～4	－
5	100	-108/-173	－	無文	良好	石・長〉千?〉ウ	褐色　若干煤付着	－	－
1	け・こ	Ⅷ	1類	無文	－	砂質①	黄褐色	6	－
6	100・101	-96.5/-121	－	胴部	良好	石・長〉ウ	暗褐色　煤付着	－	－
1	さ	Ⅶ	1類	無文	－	砂質①	暗褐色　煤付着	6	－
7	100	-108.6	－	胴部	良好	石・長〉ウ〉緑	暗褐色	－	－
1	け・こ	Ⅸ	1類	無文	－	泥質③	褐色	6	－
8	101	-134以下	－	胴部	やや良好	石・長〉緑〉角	褐色	－	－
1	け	Ⅶ	1類	無文	－	砂質①	桃褐色	5	－
9	100	-75/-89	－	胴部	良好	石・長〉ウ	黄褐色	－	－
1	さ	Ⅶ	1類	無文	－	砂質①	暗褐色	5.5	－
10	100	-105.8	－	胴部	良好	石・長〉ウ〉輝〉緑・花	暗褐色　煤付着	－	－
1	し	Ⅸ	1類	無文	－	砂質①	暗褐色　部分的に淡黄褐色。	6	－
11	100	－	－	胴部	良好	石・長〉ウ〉輝〉緑・花	暗褐色　部分的に淡黄褐色。煤付着	－	－
1	さ	Ⅶ	1類	無文	－	砂質①	暗褐色　一部赤褐色	5	－
12	99・100	-108/-110	－	胴部	良好	石・長〉ウ	黄褐色　煤付着	－	－
1	す	Ⅷ	1類	無文	－	砂質①	暗褐色	5	－
13	96	-117.71		底部(丸底)	良好	石・長〉石〉黒　大粒	黒褐色・茶褐色　若干煤が付着	底面15	－
1	さ・し	Ⅶ	1類	無文	－	砂質①	黄褐色	7	－
14	99・100	-51/-55.5	－	底部(丸底)	良好	黒〉石・長〉ウ	褐色	底面10	－
1	ち	Ⅷ	1類	無文	－	砂質①	暗褐色	4.5	－
15	95	4.77	－	底部(尖底)	良好	石〉石・長	淡褐色	9	－
1	けこ	Ⅷ	1類	無文	－	砂質①	黄褐色	6	－
16	101	-75/-87	－	底部(丸底)	良好	黒〉石・長〉ウ	黄褐色	9	－
2	す	Ⅷ	2類	有文	－	泥質③	褐色	7.5～9	－
17	95	-151.51	－	胴部	ややもろい	石・長〉千?〉黒大粒	黒褐色	－	－
2	け・こ	Ⅷふるい	2類	有文	－	泥質③	茶褐色	5.5	－
18	99	-82/-126	－	胴部	良好	石・長〉千?〉ウ大粒	暗褐色	－	－
2	す	Ⅷ	2類	有文	－	砂質①	黒褐色・暗褐色	5～8	－
19	95	-162.05	－	胴部	ややもろい	石・長〉千?〉黒大粒	暗茶褐色・黒褐色	－	－
2	し	Ⅷ	2類	有文	－	泥質③	茶褐色	6	－
20	95	-161.84	－	胴部	ややもろい	石・長〉石	茶褐色	－	－
2	す	Ⅷ	2類	有文	－	泥質③	茶褐色	7～9	－
21	96	-131.35	－	胴部	やや良好	石・長〉石〉千?	茶褐色	－	－
2	さ・し	Ⅶ	3類	有文	－	泥質	淡茶褐色	8	－
22	99・100	-51/-55.5	－	胴部	良好	石・長〉石〉黒〉ウ	淡黄褐色	－	－
2	け・こ	Ⅷ	3類	有文	－	砂質	淡褐色	7.5	－
23	99	-82/-126	－	胴部	良好	石・長〉黒〉ウ〉赤	淡褐色	－	－
2	し	Ⅶ	3類	有文	－	砂質	暗黄褐色	5	－
24	99	-3/-9.5	－	胴部	良好	黒〉石・長〉ウ〉赤	暗黄褐色	－	－
2	ち	Ⅳ	3類	有文	－	泥質	暗褐色	6	－
25	98	171/166	－	胴部	若干もろい	石・長〉千?〉ウ	暗黄褐色	－	－
2	さ・し	Ⅶ	3類	有文	－	泥質	淡茶褐色	7～8	－
26	99・100	-51/-55.5	－	胴部	良好	石・長〉石〉黒	淡黄褐色	－	－
2	け・こ	Ⅶ	3類	有文	－	泥質	褐色	6.5～8	－
27	99	-58.5/-80	－	胴部	やや良好	石・長〉千?〉ウ〉赤	淡褐色	－	－
2	ち	Ⅶ	3類	有文	－	泥質	暗茶褐色	7	－
28	95	40/30	－	胴部	良好	石・長〉石	暗茶褐色部分的に黒褐色	－	－
2	け・こ	Ⅶ	3類	有文	－	泥質	黄褐色	8～9	－
29	100・101	-50/-60	－	胴部	やや良好	石・長〉石	褐色	－	－

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
3	け・こ	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色	8～11	－
30	100・101	2/-7	器形・文様①	口縁部	良好	石・長＞千？	黄褐色	－	－
3	こ	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色	8～11	－
31	100	0/-4	器形・文様①	口縁部	良好	石・長＞ウ	黄褐色	－	－
3	け・こ	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	7～13	－
32	99・100	-36	器形・文様①	口縁部	良好	石・長のみ	暗茶褐色	－	－
3	こ	Ⅶ	4類	有文	壺形	泥質	淡褐色	8	11.4
33	100	-41.3	器形・文様①	口縁部	良好	石＞石・長	淡褐色	突帯15	－
3	さ	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	9	－
34	99	14/-3	器形・文様②	口縁部	不良	石＞石・長	黒褐色・褐色	－	－
3	け・こ	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色	11	－
35	100・101	-7/-18	器形・文様②	口縁部	不良	石・長＞石＞ウ	黒褐色	－	－
3	し	Ⅴ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色。若干煤が付着。	10	43.6
36	95	-69.85/-83.8	器形・文様②	口縁部	ややもろい	石＞石・長	口縁付近は暗褐色、下は赤褐色・黒褐色	－	－
3	け	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色	9～10	－
37	99	-29.3	器形・文様②	口縁部	良好	石・長＞石	暗褐色・褐色	－	－
3	け	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗黄褐色	11	－
38	99	-34.7	器形・文様②	口縁部	良好	石＞石・長＞輝	黄褐色　部分的に煤付着	－	－
4	け・こ	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	10～13	－
39	100・101	-7/-18	器形・文様②	口縁部	やや良好	石・長＞石＞ウ	黒褐色・暗茶褐色	－	－
4	こ・さ	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色	6～10	－
40	100・101	－	器形・文様②	口縁部	不良	石＞石・長＞赤	黒褐色　煤が付着	－	－
4	さ	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色　部分的に暗黄褐色	7	－
41	96	-42.2/-104.7	器形・文様②	胴部	不良	石＞石・長	茶褐色　部分的に暗黄褐色	－	－
4	せ	Ⅷ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色	8	－
42	95	-75.97	器形・文様②	口縁部	ややもろい	石・長＞石＞ウ	赤褐色	－	－
4	け	Ⅶ	4類	有文	－	砂質	暗茶褐色	9～10	－
43	99	3.4	器形・文様②	胴部	良好	石・長＞石＞ウ	暗褐色	－	－
4	け～さ	Ⅶ	4類	有文	－	砂質	黄褐色・茶褐色	10.5	－
44	100・101	22／-7	器形・文様②	胴部	やや良好	石・長＞ウ＞花＞角	黄褐色・茶褐色	－	－
4	す～そ	Ⅵ	4類	有文	－	泥質	暗黄褐色	10	－
45	92	0.3	器形・文様②	胴部	良好	石・長＞緑＞輝	淡赤褐色・黄褐色	－	－
4	こ	Ⅶ	4類	有文	－	泥質	褐色　部分的に黄褐色	11～13	－
46	99	-16.3	器形・文様②	胴部	良好	石・長＞黒＞石	褐色　部分的に黄褐色	－	－
5	そ	Ⅵ	4類	有文	－	砂質	褐色・黄褐色	9	－
47	91	-41.26	器形・文様②	胴部	やや良好	石＞石・長＞角？	淡褐色	－	－
5	つ	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色・黒褐色	12～13	－
48	95	39.19	器形・文様②	胴部	やや良好	石・長＞石＞ウ	暗茶褐色・黒褐色	－	－
5	け・こ	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色・褐色	12	－
49	100・101	-2/-4	器形・文様③	口縁部	不良	石＞石・長	暗黄褐色　煤付着	－	－
5	け・こ	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色を基調に暗黄褐色・暗褐色	9.5	－
50	100・101	-18/-32	器形・文様③	口縁部	やや良好	石＞石・長	褐色を基調に暗黄褐色・暗褐色	－	－
5	け・こ	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色　一部煤付着	5～7.5	－
51	100・101	-18/-32	器形・文様③	口縁部	やや良好	石＞石・長	黄褐色	－	－
6	け・こ	Ⅵ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色　一部煤付着	8～11	30.2
52	100・101	-21.8	器形・文様③	口縁部	やや良好	石・長＞石	暗褐色・黄褐色	－	－
6	し	Ⅶ	4類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	7～9	－
53	95	-45.3/-85	器形・文様③	口縁部	もろい	石・長＞石	暗茶褐色	－	－
6	す	Ⅵ	4類	有文	－	砂質	暗茶褐色	11	－
54	95	-52.05	器形・文様③	胴部	良好	石・長＞石＞ウ	暗褐色	－	－
6	す	Ⅵ	4類	有文	－	砂質	暗茶褐色	15	－
55	95	-49.24	器形・文様③	胴部	もろい	石・長＞石＞ウ	暗茶褐色	－	－
7	さ	Ⅵ	5類A	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色・黒褐色	8～9	13.5
56	100	34	文様①	口縁部	やや良好	石・長＞石＞ウ	暗茶褐色・黒褐色	－	－
7	し	Ⅶ	5類A	有文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色・暗茶褐色	8～12	28.4
57	96	11.22	文様④	口縁部	不良	石・長＞石＞ウ	黒褐色・茶褐色	－	－
7	と	4	5類A	有文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色	11	－
58	93	173.58	文様④	口縁部	良好	石・長＞石	暗褐色	－	－
7	と	4	5類A	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色　部分的に暗黄褐色	11	－
59	93	180.78	文様②	口縁部	良好	石・長＞石＞千？	褐色　部分的に暗黄褐色	－	－

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
7	つ	V	5類A	有文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色	7～12	－
60	99	245/201.5	文様①	口縁部	良好	石・長＞石＞ウ	黒褐色・茶褐色	－	－
7	つ	Ⅵ	5類A	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	8	－
61	98	199/183	文様①	口縁部	良好	石・長＞石＞ウ	黒褐色	－	－
7	ち	Ⅳ	5類A	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗茶褐色	11	－
62	98	204.5/201	文様④	口縁部	やや良好	石・長＞石＞ウ	暗茶褐色	－	－
7	つ	V・Ⅵ	5類A	有文	深鉢形・甕形	泥質	黒褐色	11	－
63	98	170	文様②	口縁部	良好	石・長＞石＞ウ	茶褐色	－	－
7	つ	V	5類A	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗茶褐色	13	－
64	98	175/164.5	文様②	口縁部	良好	石・長＞石＞ウ	暗茶褐色	－	－
7	け・こ	Ⅶ	5類A	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色	8	－
65	100・101	-35	文様③	口縁部	良好	石・長＞石	褐色　口唇に煤付着	－	－
7	た・ち	Ⅵ	5類A	有文	－	砂質	暗茶褐色	11	－
66	91・92	54.5/21	文様⑤	胴部	やや良好	石・長＞石＞ウ	黒褐色・褐色	－	－
7	つ	Ⅳ	5類A	有文	－	泥質	暗茶褐色	12	－
67	98	148	文様⑥	胴部	良好	石・長＞石＞ウ	暗茶褐色	－	－
7	こ	Ⅶ	5類A	有文	－	砂質	暗褐色　部分的に褐色	12	－
68	99	-55.5	文様⑦	胴部	良好	石・長＞石＞千？＞貝	暗褐色　部分的に褐色	－	－
8	せ	Ⅵ	5類B	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	7	－
69	95	19.8	文様②a	口縁部	ややもろい	石＞石・長＞千？	茶褐色	－	－
8	し	Ⅵ	5類B	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色・淡黄褐色	10	－
70	99	58.5/25	文様②b	口縁部	良好	石・長＞千？＞石	褐色	－	－
8	さ	Ⅶ	5類B	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色　部分的に黒褐色	10	－
71	96	表採	文様②a	口縁部	不良	石・長＞石＞千？	暗茶褐色　部分的に黒褐色	－	－
8	た・ち	Ⅵ	5類B	有文	－	砂質	暗茶褐色	11	－
72	91・92	79.16	文様⑥a	胴部	もろい	石・長＞石＞ウ	暗茶褐色	－	－
8	け・こ	Ⅶ	5類B	有文	－	砂質	茶褐色	10	－
73	100・101	-2/-4	文様）a	胴部	もろい	石・長＞石＞赤	黒褐色・褐色	－	－
8	す	Ⅵ斜面	5類B	有文	－	泥質	暗褐色	14	－
74	102	146/144	文様⑦a	胴部	良好	石＞石・長	褐色	－	－
8	け・こ	Ⅵ	5類B	有文	－	泥質	褐色	9	－
75	99・100	－	文様⑦b	胴部	良好	石・長＞石＞ウ	暗褐色	－	－
9	さ	Ⅵ	6類A	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡黄褐色	8～9	－
76	100	34/32.5	文様①a	口縁部	良好	石・長＞千？＞ウ	淡黄褐色	－	－
9	す	Ⅳ	6類A	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	10	－
77	100	107/52.5	文様①a	口縁部	良好	石・長＞石	暗茶褐色	－	－
9	す	Ⅵ	6類A	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	7～10	－
78	100・101	123/118.8	文様①b	口縁部	良好	石・長＞石＞千？	褐色	－	－
9	す	Ⅵピーチロック内	6類A	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗褐色・黄褐色	10	－
79	100	76.5/40	文様①a	口縁部	良好	石・長＞石	暗褐色・黄褐色	－	－
9	し	Ⅵ	6類A	有文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色	11	－
80	99	46.5/24	文様①a	口縁部	良好	石・長＞石＞黒	褐色	－	－
9	け・こ	Ⅶ	6類A	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色	9	－
81	100・101	2/-7	文様①b	口縁部	やや良好	石＞石・長	茶褐色	－	－
9	し	Ⅵ	6類A	有文	－	泥質	赤褐色　若干煤付着	9.5	－
82	99	75.5/58.5	文様④	胴部	良好	石・長＞緑＞ウ	赤褐色	－	－
9	さ	Ⅵ	6類A	有文	－	泥質	褐色	10	－
83	100	32.5/22	文様③a b	胴部	良好	石・長＞緑	暗黄褐色	－	－
9	け・こ	Ⅶ	6類A	有文	－	砂質	暗褐色	9	－
84	100・101	-7/-18	文様③b	胴部	もろい	石・長＞花＞ウ	茶褐色	－	－
9	そ・た	Ⅵ	6類B	有文	深鉢形・甕形	泥質	赤褐色　一部黄褐色	10	－
85	92	42.51	条痕①	口縁部	もろい	石・長＞石＞千？	赤褐色　一部黄褐色	－	－
9	こ	V	6類B	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	7	－
86	101	43/35	条痕②	口縁部	良好	石・長＞石	褐色	－	－
9	け・こ	Ⅷ	6類B	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色・褐色	8	－
87	99	-82/-126	条痕②	口縁部	ややもろい	石・長＞石	淡褐色	－	－
9	そ	Ⅵ	6類B	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗褐色	11	－
88	91	-9.5	条痕②	口縁部	良好	石＞千？	褐色	－	－
10	こ	Ⅶ	6類B	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色・黒褐色・黄褐色	10～12	－
89	100	19.6	条痕①	口縁部	良好	石・長＞石	褐色・黒褐色	－	－

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
10	け・こ	Ⅶ	6類B	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	7.5	19.2
90	100・101	2 /-7	条痕①	口縁部	良好	千?〉石〉石・長	暗褐色	－	－
10	こ	Ⅶ	6類B	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡黄褐色	6	－
91	100	0/-4	条痕①	口縁部	良好	石・長〉石〉ウ	暗黄褐色　口唇に煤付着	－	－
10	す	Ⅷ	6類B	有文	深鉢形・甕形	石〉千？	茶褐色	10	14
92	100・101	－	条痕①	口縁部	良好	石〉千？	茶褐色	－	－
10	こ・さ	Ⅶ	6類B	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗黄褐色・褐色	9	－
93	100・101	－	条痕①	口縁部	良好	石・長〉石〉千？	黒褐色　若干煤付着	－	－
10	そ	Ⅵ	6類B	有文	－	泥質	褐色	9	－
94	91	21.56	条痕④	胴部	良好	石・長〉千?〉石	褐色	－	－
10	け	Ⅶ	6類B	有文	－	泥質	褐色・黄褐色	8～9	－
95	99	18.5/0.1	条痕④	胴部	良好	石・長〉緑	褐色・黄褐色	－	－
10	す	Ⅵ	6類C	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色	11	－
96	92	-110.5	文様②a	口縁部	やや良好	石・長〉石	暗茶褐色	－	－
10	け	Ⅶ	6類C	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡黄褐色	10～12	－
97	100	20/16	文様④b	口縁部	良好	石〉千？	淡黄褐色	－	－
10	け・こ	Ⅶ	6類C	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色　部分的に黄褐色	7～11.5	18.2
98	100・101	2 /-7	文様④a	口縁部	良好	石・長〉石〉千?〉黒	暗褐色　部分的に黄褐色	－	－
11	す	Ⅵ	6類C	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	9	－
99	92	-110.5	文様④b	口縁部	やや良好	石・長〉石	暗茶褐色	－	－
11	す	Ⅸ斜面	6類C	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色	9	－
100	102	140.5/107.5	文様③b	口縁部	良好	石・長のみ	褐色	－	－
11	そ	Ⅵ	6類C	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡褐色・褐色・黄褐色	8～9	23
101	92	29.29/12.09	文様⑤b	口縁部	良好	石・長〉石〉ウ	淡褐色・褐色・黄褐色	－	－
11	こ	Ⅴ	6類C	有文	－	砂質	黄褐色	7～8	－
102	101	62/48.5	文様⑥b	胴部	砂質良好	石・長〉石〉ウ〉黒	黄褐色	－	－
11	し	Ⅵ	6類C	有文	－	泥質	暗茶褐色・黒褐色	11～12	－
103	100	43.5	文様⑥a	胴部	もろい	石・長〉石〉ウ	暗茶褐色	－	－
11	け	Ⅴ	6類C	有文	－	泥質	淡褐色	9	－
104	100	57/44.5	文様⑥b	胴部	良好	石・長〉千？	淡褐色	－	－
11	そ	Ⅵ	6類C	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色	9	－
105	92	26.07	文様①a b	口縁部	ややもろい	石・長〉石〉ウ	暗茶褐色	－	－
11	け・こ	Ⅵ	6類C	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	9	－
106	99	21	文様①a	口縁部	良好	石・長〉石	褐色	－	－
11	け・こ	Ⅶ	6類C	有文	－	砂質	黒褐色	9	－
107	100・101	-44	文様⑥a	胴部	やや良好	石〉石・長〉ウ	茶褐色	－	－
11	さ	Ⅶ	6類C	有文	－	泥質	褐色・黄褐色　若干煤付着	9	－
108	99	38.5	文様⑧ab	胴部	良好	石〉石・長〉千？	褐色・黄褐色　若干煤付着	－	－
11	す	Ⅸ	6類C	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色	9	－
109	101	30.2	文様①a	口縁部	良好	石〉石・長〉千？	褐色	－	－
12	け	Ⅴ	6類C	有文	－	砂質	褐色	9～10	－
110	100	44.5/27.5	文様⑧ab	胴部	良好	石・長〉石〉千？	褐色	－	－
12	さ	Ⅶ	6類C	有文	－	泥質	茶褐色・黒褐色	13	－
111	99	22.5	文様⑧b	胴部	やや良好	石・長のみ	茶褐色	－	－
12	け	Ⅶ	6類C	有文	－	泥質	茶褐色・暗褐色	9	－
112	99	18.5	文様⑧ab	胴部	良好	石・長〉石〉黒〉千？	褐色・暗黄褐色	－	－
12	け・こ	Ⅶ	6類C	有文	－	泥質	暗黄褐色　一部黄褐色	10	－
113	100	0	文様⑦a	胴部	良好	石・長〉千?〉ウ	暗黄褐色　一部黄褐色	－	－
12	け	Ⅶ	6類C	有文	－	泥質	褐色	8	－
114	101	4	文様⑧b	胴部	良好	石・長〉緑	褐色	－	－
12	け	Ⅶ	7類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色　部分的に赤色部分	7～10	－
115	100	7/0	－	口縁部	やや良好	石〉石・長	暗褐色　部分的に赤色部分	－	－
12	そ	Ⅵ	7類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡黄褐色	7	－
116	92	6.38	－	口縁部	良好	石・長〉角	淡褐色	－	－
12	け・こ	Ⅶ	7類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	7.5	－
117	100	0	－	口縁部	良好	石・長〉ウ	暗褐色	－	－
12	け・こ	Ⅶ	7類	有文	深鉢形・甕形	泥質	黒褐色　一部に暗黄褐色	10	－
118	101	-57.6	－	口縁部	良好	石〉石・長〉貝	黒褐色　一部に暗黄褐色	－	－
12	け	Ⅶ	7類	有文	－	泥質	暗黄褐色	7～8	－
119	99	12.2	－	胴部	良好	石〉石・長〉千？	暗褐色	－	－

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
12	そ・た	Ⅵ	7類	有文	−	砂質	暗茶褐色	7.5	−
120	91・92	26.55	−	胴部	良好	石・長＞石＞ウ	黒褐色	−	−
12	こ	Ⅴ	7類	有文	−	砂質	黒褐色	7	−
121	101	62/48.5	−	胴部	ややもろい	石・長＞石	暗茶褐色	−	−
12	さ	Ⅶ	7類	有文	−	泥質	褐色	10	−
122	99	4 /-3	−	胴部	良好	石英＞貝	褐色	−	−
12	こ	Ⅶ	7類	有文	−	砂質	暗黄褐色	12	−
123	100	0 /-4	−	胴部	良好	石＞石・長	淡褐色	−	−
12	け・こ	Ⅶ	7類	有文	−	泥質	褐色・暗黄褐色	13	−
124	100・101	-35	−	胴部	良好	石＞石・長＞貝＞赤	褐色・暗黄褐色	−	−
12	け・こ	Ⅶ	7類	有文	−	泥質	褐色	10	−
125	100・101	-18／-32	−	胴部	良好	石・長＞黒	黄褐色	−	−
13	こ	Ⅶ	8類（4類?）	無文	壺形	泥質	茶褐色	5～7	18.3
126	100	-66.5	−	口縁部	やや良好	石・長＞石	茶褐色	−	−
13	こ	Ⅶ	8類	無文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色・褐色	11	−
127	100	-7.3	−	口縁部	良好	貝＞石	淡褐色・黒褐色	−	−
13	そ	Ⅵ	8類	無文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色　黒褐色	9	−
128	91	-9.77	−	口縁部	ややもろい	石・長のみ	暗茶褐色　黒褐色	−	−
13	つ	古墓横岩盤間	4類?	無文	−	泥質	黒褐色	15	−
129	100	323.5	丸底	底部	良好	石・長＞石＞赤＞千?	褐色　断面中央は暗茶褐色でサンドイッチ状となる。	底面22	−
13	こ	Ⅴ	5類?6類?	無文	−	泥質	赤褐色	10	−
130	101	62/48	丸底	底部	もろい	千?＞石＞石・長	黄褐色	底面18	−
13	そ	Ⅵ	5類?6類?	無文	−	泥質	黄褐色	−	−
131	92	19/-36	丸底	底部	良好	石＞千?	黄褐色	底面13	−
13	そ	Ⅵ	−	無文	−	泥質	褐色・暗褐色	19	−
132	92	6.33	丸底	底部	良好	石・長＞石＞千?	褐色	底面46	−
13	そ・た	Ⅵ	4類?	無文	−	泥質	赤褐色・黄褐色	12	−
133	91・92	19.2	丸底	底部	ややもろい	石・長＞石	赤褐色・黄褐色	底面26	−
13	さ	Ⅶ	−	無文	−	砂質	暗黄褐色	12	−
134	99	17.8	丸底	底部	良好	石・長＞千?＞石	褐色・黄褐色	底面21	−
13	け	Ⅶ	4類?	無文	−	泥質	暗褐色	14	−
135	101	4	丸底	底部	良好	千?＞石＞石・長＞ウ	褐色	底面23	−
13	け・こ	Ⅶ	4類?	無文	−	砂質	茶褐色	18	−
136	100・101	-33.9	丸底	底部	やや良好	石・長＞石＞ウ	黄褐色・褐色	底面35	−
13	ち	Ⅳ	5類?6類?	無文	−	泥質	黒褐色	13	−
137	98	159/132	尖底	底部	良好	石・長＞石	茶褐色	底面25	−
13	ち	Ⅵ	5類?6類?	無文	−	砂質	暗褐色・黒褐色	10	−
138	91	102.13	尖底	底部	良好	石＞石・長＞千?	褐色・黒褐色	底面17	−
13	さ	Ⅶ	5類?6類?	無文	−	泥質	黄褐色	10	−
139	100	18.2	尖底	底部	良好	石・長＞石＞千?	褐色	底面21	−
13	こ	Ⅴ	−	無文	−	砂質	黄褐色	10	−
140	101	62/48	尖底	底部	良好	千?＞石・長＞黒	暗黄褐色	底面18	−
13	け	Ⅶ	5類?6類?	無文	−	泥質	褐色・淡黄褐色	7	−
141	100	27.5/21	尖底	底部	良好	石＞石・長	褐色・淡黄褐色	底面11.5	−
13	け	Ⅶ	4類?	無文	−	砂質	暗黄褐色・褐色	13	−
142	100	0 /-4.5	尖底	底部	やや良好	石＞石・長	暗黄褐色・褐色	底面21	−
13	た	Ⅶ	−	無文	−	砂質	暗茶褐色　断面中央は黒褐色でサンドイッチ状となる。	15	−
143	95	57.44	尖底	底部	やや良好	石・長＞石＞チ?	暗茶褐色　断面中央は黒褐色でサンドイッチ状となる。	底面22	−
13	せ	Ⅵ	−	無文	−	砂質	暗褐色	8	−
144	92	18.06	乳房状尖底	底部	やや良好	石・長＞石	褐色	底面15	−
13	つ	Ⅵ	−	無文	−	砂質	赤褐色	12	−
145	98	195	平底	底部	良好	石・長＞石	褐色・暗褐色	底面15	8
14	ち	Ⅶ	9類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色　部分的に黒褐色	7	−
146	95	77.62	施文具ニ	口縁部	やや良好	石・長＞石＞ウ	暗茶褐色　部分的に黒褐色	−	−
14	さ	Ⅴ	9類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色	6～6.5	−
147	93	−	施文具ロ	口縁部	不良	石・長＞石	茶褐色	−	−
14	せ・そ	Ⅵ	9類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	8	−
148	91・92	21.85	施文具ニ	胴部	やや良好	石・長＞石	暗茶褐色　外面の一部に煤付着	−	−
14	そ～ち	Ⅵ	10類	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色	9	−
149	91・92	59.45	施文具ニ	口縁部	良好	石＞チ?＞石・長	暗茶褐色　突帯部暗褐色	−	−

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
14	さ	Ⅳ	10類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色　口唇は黒褐色	6	−
150	100	94/73	施文具イ	口縁部	やや良好	石＞ウ	暗褐色　口唇は黒褐色	−	−
14	ち	Ⅵ	10類	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色	8	27
151	91・92	71.06	施文具ロ	口縁部	良好	石＞石・長	茶褐色	−	−
14	せ・そ	Ⅳ	10類	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗黄褐色	7～9	12
152	91・92	65.14	施文具ロ	口縁部	良好	石・長＞石	暗褐色	−	−
14	つ	Ⅵ	10類	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗茶褐色	6～9.5	−
153	98	160.5/156	施文具ロ	口縁部	良好	石＞チ	茶褐色	−	−
14	し	Ⅵ	10類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色　下方は暗褐色	6.5～8	−
154	99	143/75.5	施文具ロ	口縁部	やや不良	チ＞石	茶褐色	−	−
14	つ	Ⅵ	10類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗赤褐色	6	−
155	98	160.5/156	施文具ロ	口縁部	やや良好	石＞石・長＞チ	暗黄褐色	−	−
14	て	4	10類	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色	5～7	−
156	93	160.37	施文具ロ	口縁部	やや良好	チ＞石・長	茶褐色	−	−
14	ち	Ⅳ	10類	有文	浅鉢形？	泥質	茶褐色	6～7.5	−
157	98	166/154.5	施文具イ	口縁部	やや良好	石＞ウ	茶褐色	−	−
14	た	Ⅳ	10類	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗黄褐色	5～7	13.3
158	95	93.8	施文具ロ	口縁部	良好	石・長＞石	暗黄褐色	−	−
15	た	Ⅳ	11類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	5.5～9	−
159	95	79.66	施文具イ・ニ	口縁部	良好	石・長＞チ＞石＞ウ	暗茶褐色	−	−
15	そ	Ⅳ	11類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色	6～7	−
160	96	135.4	施文具ニ	口縁部	やや良好	石・長＞ウ　大粒	黒褐色	−	−
15	そ	Ⅳ	11類	有文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色	3～8	−
161	92	91.04	施文具ニ	胴部	やや不良	石＞石・長＞チ？	黄褐色	−	−
15	せ	Ⅳ	11類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色	5～6	−
162	91	124/105	施文具ニ	口縁部	やや不良	石・長＞石＞チ？	暗褐色	−	−
15	さ	Ⅳ	11類	有文	壺？	砂質	暗灰褐色	5～9	−
163	99	195/185	施文具ニ又はロ	口縁部	良好	石・長＞ウ＞石	灰褐色	−	−
15	た	Ⅳ	11類	有文	壺？	砂質	黄褐色　一部淡褐色	5.5～9	−
164	91	101/81	施文具ニ	口縁部	良好	石＞石・長	黄褐色　一部淡褐色	−	−
15	す	Ⅳ	12類	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡褐色	7～8	−
165	101	185/175	文様①	口縁部	良好	石・長	淡褐色	−	−
15	さ	Ⅳ	12類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色・黒褐色	9～12	−
166	95	151.91	文様①	口縁部	良好	チ＞石・長＞石	淡褐色・黒褐色	−	−
15	そ	Ⅳ	12類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡黄褐色	5～12	−
167	92	154/139	文様①	口縁部	良好	石・長＞石＞チ？	淡黄褐色　突帯上は部分的に黒褐色	−	−
15	て	Ⅴ	12類	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色	5～9	−
168	97	160	文様①	口縁部	良好	石＞石・長＞チ	茶褐色	−	−
15	つ	Ⅴ	12類	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗黄褐色	6～6.5	−
169	98	199/183	文様①	口縁部	良好	石・長	暗黄褐色	−	−
15	た	Ⅳ	12類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	7～10	−
170	91	108.5/97.5	文様②	口縁部	ややわるい	石＞チ？	褐色	−	−
15	こ・さ	Ⅳ	12類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡黄褐色	4～5	−
171	99	114	文様②	胴部	ややわるい	石・長＞ウ＞石	暗褐色	−	−
16	ち・つ	Ⅲ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色　一部黄褐色	6～10	21.2
172	90	246.93/227.29	文様・施文具A①イ	口縁部	良好	石＞石・長	口縁暗褐色　下方は褐色・暗黄褐色	底面12	9
16	け	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色	8～10	−
173	100	120/110	文様・施文具A①イ	口縁部	良好	石・長＞石	暗黄褐色	−	−
16	こ	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	5～6	−
174	100	91.5/85	文様・施文具A①イ	口縁部	良好	石・長＞石＞チ？	暗黄褐色・黒褐色	−	−
16	ち	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	6	−
175	91	155/123	文様・施文具A①イ	口縁部	良好	石＞石・長＞チ？	暗茶褐色	−	−
16	さ	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	5～6	−
176	100	145.5/122	文様・施文具A①イ	口縁部	良好	チ＞石・長	暗茶褐色	−	−
16	し	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色	8～10	−
177	101	198.5/193.5	文様・施文具A①イ	口縁部	やや良好	チ＞石・長＞角？	暗黄褐色	−	−
16	た	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色　部分的に黒褐色	7～10	−
178	90	94.5/78.5	文様・施文具A②ハ	口縁部	ややもろい	チ＞石・長＞石	茶褐色　部分的に黒褐色	−	−
16	つ	Ⅴ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色	5～7	−
179	97	158/150	文様・施文具A②ニ	口縁部	良好	石・長＞石	暗黄褐色・褐色	−	−

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
16	つ	Ⅵ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色　部分的に黒褐色	6～8	－
180	98	174	文様・施文具A②ニ	口縁部	良好	石・長＞石＞チ？	暗茶褐色　部分的に黒褐色	－	－
16	す	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡黄褐色　下方は黒褐色	5～8	－
181	91	62.24	文様・施文具A②ニ	口縁部	良好	石・長＞石＞チ	淡褐色　下方は黒褐色	－	－
16	け	かく乱	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色	4.5～6	－
182	99	151.5/88	文様・施文具A②ハ	口縁部	ややもろい	石＞石・長＞千？	暗褐色・暗茶褐色	－	－
16	く	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	7	－
183	100	165/75	文様・施文具A③ハ	口縁部	やや良好	石＞石・長　粒があらい	褐色	－	－
16	し	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	7～9	－
184	99	155/150	文様・施文具A②ハ	口縁部	ややもろい	石・長＞チ＞石	黒褐色	－	－
16	し	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色　口唇の一部に黒褐色	7～9	－
185	100	155/150	文様・施文具A②ハ	口縁部	良好	石・長＞チ	黄褐色　口唇の一部に黒褐色	－	－
17	す	Ⅲ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色・暗褐色	5～6	－
186	101	260	文様・施文具A③イ	口縁部	やや良好	石＞チ？＞石・長	赤褐色	－	－
17	し	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	9.5	－
187	99	181/123.5	文様・施文具A③ニ	口縁部	良好	石・長＞チ	褐色	－	－
17	し	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	9	－
188	99	181/123.5	文様・施文具A③イ	口縁部	良好	石・長＞チ＞石	赤褐色	－	－
17	さ	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	7～8	－
189	99	170/165	文様・施文具A④イ	口縁部	良好	石・長＞チ＞角	暗褐色	－	－
17	た	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色	7～7.5	－
190	90	146/110	文様・施文具A④イ・ニ	口縁部	良好	チ＞石・長	暗褐色	－	－
17	け・こ	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	5	－
191	99	103/93	文様・施文具A④イ	口縁部	良好	石・長＞千？	褐色	－	－
17	せ	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色・褐色	6～7	－
192	92	88.5/81.5	文様・施文具A④イ	口縁部	良好	石・長＞石＞チ	黄褐色・褐色	－	－
17	ち	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	5	－
193	98	166/154.5	文様・施文具A④イ	口縁部	ややもろい	石・長＞チ	暗褐色	－	－
17	た	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色・褐色	7～8	－
194	98	230	文様・施文具A④イ	口縁部	良好	石＞石・長＞チ	黄褐色・褐色	－	－
17	そ	Ⅲ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	6～8	18.2
195	96	160.88	文様・施文具A⑤イ	口縁部	良好	石・長のみ	茶褐色・暗褐色	－	－
17	ち	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色	6.5～11	－
196	90	181.5/113.5	文様・施文具A⑤イ	口縁部	良好	石・長＞チ	茶褐色	－	－
17	こ	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	4.5～5.5	－
197	99	83/73	文様・施文具B①aイ	口縁部	やや良好	石＞チ？＞石・長	茶褐色　断面中央は暗黄褐色でサンドイッチ状となる。	－	－
17	た	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色・黒褐色	6～7	25.4
198	95	116.09/121.99	文様・施文具B①aイ	口縁部	やや良好	石・長＞石＞チ？　大粒	赤褐色・黒褐色	－	－
18	け	かく乱	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色	7	－
199	101	170/155	文様・施文具B①bイ	口縁部	やや良好	チ＞石・長＞砂　大粒	暗褐色・黄褐色・褐色	－	－
18	く	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	6～7	－
200	100	140/130	文様・施文具B①bイ	口縁部	良好	石＞石・長＞チ	黄褐色	－	－
18	さ	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡褐色	4～5	－
201	100	145.5/122	文様・施文具B①bイ	口縁部	やや良好	石・長＞チ＞石	暗茶褐色	－	－
18	さ	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色	7	－
202	99	195/185	文様・施文具B①bイ	口縁部	良好	石＞石・長＞チ	暗褐色	－	－
18	こ	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色	8～9	－
203	101	130/115	文様・施文具B①Cイ	口縁部	良好	石・長のみ	暗茶褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	－	－
18	つ	Ⅵ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗赤褐色	5～6.5	－
204	98	177	文様・施文具B①Cイ	口縁部	良好	石＞石・長＞赤＞千？	暗茶褐色	－	－
18	つ	Ⅵ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色・黒褐色	7	－
205	98	174	文様・施文具B①Cイ	口縁部	良好	石・長＞石＞チ？	暗茶褐色・黒褐色	－	－
18	す	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	6～6.5	－
206	91	65.5/44	文様・施文具B①dイ	口縁部	ややもろい	石・長＞チ＞石？	暗褐色	－	－
18	く	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	6	－
207	100	170/125	文様・施文具B①dイ	口縁部	良好	石・長＞チ　石・長は大粒	黄褐色	－	－
18	け	かく乱	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色	5.5～6	－
208	101	170/155	文様・施文具B①dイ	口縁部	ややもろい	チ＞砂＞石・長　大粒	褐色	－	－
18	－	盛土	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色・黄褐色	7～8	－
209	－	表採	文様・施文具B②adハ	口縁部	悪い	石・長＞チ＞石大粒	赤褐色断面中央は黄褐色でサンドイッチ状となる。	－	－

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
18	く	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	6	−
210	100	95/85	文様・施文具B①abイ	口縁部	ややもろい	石・長＞チ	茶褐色	−	−
18	た・ち	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	6.5～10	−
211	90	120.44	文様・施文具B②aニ	口縁部	やや良好	石・長＞チ＞石	茶褐色	−	−
18	さ	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	6	−
212	101	170/165	文様・施文具B②cdニ	口縁部	良好	チ＞石・長	茶褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	−	−
18	け	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	6～6.5	−
213	99	180/160	文様・施文具B②bハ	口縁部	砂質やや良好	石・長＞石	暗茶褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	−	−
18	そ	Ⅲ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	5.6～6	−
214	95	161.1/151.5	文様・施文具B③bイ	口縁部	やや良好	石・長＞チ＞石	暗茶褐色	−	−
18	こ	Ⅳ	13類？	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色	5～9	−
125	100	175/170	文様・施文具B③aイ	口縁部	やや良好	チ＞石・長＞千？	暗茶褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	−	−
18	さ	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色　口唇は部分的に黒褐色	5.5～6	−
216	100	116/111	文様・施文具B③bイ	口縁部	やや良好	チ＞石・長	茶褐色　口唇は部分的に黒褐色	−	−
18	し	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色	6～6.5	−
217	99	155/150	文様・施文具B③bイ	口縁部	やや良好	チ＞石・長	黒褐色　下方は暗茶褐色	−	−
18	け	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色・黄褐色	6.5～7	−
218	100	105/95	文様・施文具B④aイ	口縁部	良好	石・長＞チ	赤褐色	−	−
18	し	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色・黒褐色	6～8	−
219	99	165/160	文様・施文具B④dホ	口縁部	やや良好	石・長＞チ＞角？	茶褐色・黒褐色	−	−
18	た	Ⅳ	13類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色・口唇褐色	4.5～7	−
220	90	94.5/78.5	文様・施文具B⑤cイ	口縁部	良好	石・長＞角＞石	褐色　一部暗黄褐色	−	−
18	つ	Ⅵ	13類	無文	深鉢形・甕形	泥質	赤褐色	6～9	−
221	98	176	C	口縁部	良好	石・長＞チ　大粒	暗茶褐色	−	−
19	こ	かく乱	14類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	5.5～7	−
222	99	225/200	文様・施文具B④aイ	口縁部	ややもろい	石・長＞石	赤褐色	瘤12	−
19	こ	Ⅳ	14類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	6	−
223	99	131.5/108	文様・施文具B④イ	口縁部	ややもろい	石・長のみ	赤褐色　瘤の一部黒褐色	瘤14	−
19	そ	Ⅳ	13・14類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	6～8	−
224	91	116/101	文様・施文具②ニ	胴部	やや良好	石・長＞チ	暗茶褐色	−	−
19	さ	Ⅳ	13・14類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色	5～6	−
225	99	175/170	文様・施文具B①aイ	胴部	やや良好	石・長＞石	暗褐色	−	−
19	す	かく乱	13・14類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色・暗茶褐色	6.5	−
226	92	200/172	文様・施文具B①aイ	胴部	ややもろい	石＞石・長　微量	淡褐色・暗茶褐色	−	−
19	け	Ⅳ	13・14類	有文	−	砂質	赤褐色	4.5～6	−
227	100	120/110	文様・施文具B①dイ	胴部	ややもろい	石・長＞チ＞石	赤褐色	−	−
19	せ	Ⅳ	13・14類	有文	−	砂質	淡褐色	7～7.5	−
228	91	124/105	文様・施文具B⑤dニ	胴部	悪い	石・長＞チ	暗褐色	−	−
19	せ	Ⅳ	13・14類	有文	深鉢形・甕形？	砂質	茶褐色	7～12	−
229	91	105/82.5	文様・施文具B①イ	胴部	ややもろい	石・長＞チ	茶褐色	−	−
20	す	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色	5～7	22.6
230	102	180/175	文様・施文具①ロ	口縁部	良好	石・長＞石	淡黄褐色	−	−
20	す	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色	6～8	−
231	101	125/120	文様・施文具①ロ	口縁部	良好	チ＞石	淡茶褐色	−	−
20	し	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	5～8	−
232	101	170/165	文様・施文具①イ	口縁部	やや良好	石・長＞石	赤褐色・黒褐色・黄褐色	−	−
20	そ	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	4.5～8	−
233	96	119.74	文様・施文具③ロ	口縁部	良好	チ＞石・長＞砂	暗茶褐色	−	−
20	せ・そ	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	6～7	−
234	100	252.5/237.5	文様・施文具②ヘ	口縁部	良好	石・長＞チ	黄褐色	−	−
20	す	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	6.5～9	−
235	102	195/190	文様・施文具①イ	胴部	やや良好	石・長＞チ＞千?＞赤	茶褐色　部分的に黒褐色	−	−
20	せ	かく乱	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色	6～7	−
236	99	−	文様・施文具①イ	胴部	良好	石・長＞チ？	黄褐色	−	−
20	す	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色	6.5～7	−
237	100	185/175	文様・施文具①イ	胴部	良好	石＞石・長	黒褐色	−	−
20	し	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	6～7	−
238	100	165/155	文様・施文具②ロ	胴部	やや良好	石・長＞チ＞石	黄褐色	−	−
20	た	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色	8	−
239	98	230.5/224.5	文様・施文具②ヘ	胴部	良好	石・長＞石	暗褐色	−	−

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
20	す	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	7	−
240	100	125/120	文様・施文具②ヘ	胴部	良好	石・長＞石＞角	暗茶褐色	−	−
20	す	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色	6	−
241	101	125/120	文様・施文具④イ	胴部	良好	チ＞石・長	茶褐色	−	−
20	す	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	5～6.5	−
242	102	180/175	文様・施文具④イ	胴部	良好	石・長のみ	暗茶褐色	−	−
20	す	Ⅳ	15類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色	5～8	−
243	102	180/175	文様・施文具④イ	胴部	やや良好	石・長のみ	茶褐色	−	−
21	す	Ⅳ	16類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色	7～9	−
244	101	203/193	文様・施文具①aロ・ヘ	口縁部	良好	石・長＞赤	暗褐色・褐色	−	−
21	た・ち	Ⅳ	16類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる	7～9	−
245	91・92	95.47	文様・施文具①aロ・ヘ	口縁部	やや良好	石＞石・長	褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる	−	−
21	そ	Ⅳ	16類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗灰褐色	5.5～9	−
246	96	151.18	文様・施文具①bロ・ヘ	口縁部	良好	石・長＞チ＞石	淡茶褐色	−	−
21	つ	Ⅴ	16類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色	6～8	−
247	97	175/165	文様・施文具②cロ・ヘ	口縁部	良好	石・長＞チ＞角?＞石	茶褐色	−	−
21	し	かく乱	16類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	8～10	−
248	97	−	文様・施文具②cヘ	口縁部	良好	石・長＞チ＞石	褐色	−	−
21	く	Ⅳ	16類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色	7～8	−
249	100	130/125	文様・施文具②cロ・ヘ	口縁部	良好	石＞石・長	暗黄褐色	−	−
21	し	Ⅳ	16類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色	6～7	−
250	99	165/160	文様・施文具②cロ・ヘ	口縁部	良好	石・長＞石＞チ	暗褐色	−	−
21	す	かく乱	16類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色・暗褐色	5.5～6	−
251	93	−	文様・施文具②cヘ	口縁部	やや良好	石・長＞石	黒褐色・暗褐色	−	−
21	け	かく乱	16類	有文	壺形	砂質	赤褐色	5.5～6	−
252	99	220/180	文様・施文具②dロ・ヘ	口縁部	やや不良	石＞石・長	赤褐色	−	−
21	ち	Ⅳ	16類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色	6.5～8	−
253	90	181.5/113.5	文様・施文具③dヘ	口縁部	やや良好	石・長＞チ?＞石	暗黄褐色	−	−
21	ち	Ⅲ	16類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色	6.5～9	−
254	94	79.74	文様・施文具③cヘ	口縁部	良好	石・長＞チ	暗黄褐色	−	−
21	し	Ⅳ	16類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	6～7	−
255	100	218/213	文様・施文具③cヘ	口縁部	良好	チ?＞石・長＞石	暗茶褐色	−	−
22	そ	Ⅴ	17類	有文	壺形	砂質	暗茶褐色	7.5～9	−
256	95	85.61		口縁部	ややわるい	石・長＞石＞ウ	暗茶褐色	−	−
22	そ	Ⅳ	17類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色　内面下暗黄褐色	6～7	−
257	96	151.18	−	口縁部	良好	石・長＞チ	褐色　下方は黒褐色	−	−
22	た	Ⅳ	17類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	7	−
258	90	164.5/137.5	−	口縁部	良好	石・長のみ	黒褐色	−	−
22	し	Ⅳ	17類	有文	鉢形	砂質	赤褐色	7.5	−
259	100	205/195	−	口縁部	良好	チ＞石・長＞石	暗褐色　口唇赤褐色	−	−
22	せ・そ	Ⅳ	17類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	5～7	−
260	92	122.3	−	口縁部	ややわるい	チ＞石・長＞石　大粒	黄褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	−	−
22	け・こ	Ⅳ	17類	無文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	3.5	−
261	100・101	105	−	口縁部	もろい	石・長＞石	淡褐色	肥厚部7	−
22	す	Ⅳ	17類	無文	甕形	砂質	淡褐色　一部暗褐色	5～6	−
262	91	121/107.5	−	口縁部	良好	石・長＞ガ?＞角?＞チ	淡褐色　一部暗褐色	−	−
22	け	Ⅳ	17類	無文	壺形	砂質	茶褐色	7	−
263	101	190/185	−	口縁部	やや良好	石・長＞チ	茶褐色	−	−
22	ち	Ⅳ	17類	無文	壺形	砂質	淡黄褐色	8～8.5	−
264	97	155	−	口縁部	もろい	石・長＞角＞石	褐色	−	−
22	つ	Ⅴ	17類	有文	−	泥質	暗黄褐色	9～12	−
265	97	175/165	−	胴部	良好	石・長＞石	暗黄褐色	−	−
22	す	Ⅳ	17類	有文	−	砂質	暗茶褐色	9～10	−
266	100	107/52.5	−	胴部	やや良好	石・長＞石＞黒	暗茶褐色	−	−
22	そ	Ⅲ	17類	有文	−	砂質	褐色	7	−
267	99	239	−	胴部	良好	石・長＞石＞チ	暗褐色	−	−
22	し	かく乱	17類	有文	−	砂質	灰褐色	8～9	−
268	97	−	−	胴部	良好	石・長＞赤＞黒	黄褐色	突帯11.5	−
22	つ	Ⅵ	17類	有文	−	砂質	淡褐色	7	−
269	98	183/177.5	−	胴部	良好	石・長＞石	淡褐色	突帯9	−

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
22	そ	Ⅲ	17類	有文	−	砂質	淡黄褐色	6	−
270	99	240.5	−	胴部	良好	石・長＞石	淡褐色　突帯は黒褐色	突帯8	−
22	ち	Ⅳ	17類	有文	壺形？	砂質	赤褐色　断面中央は黒褐色でサンドイッチ状となる。	6	−
271	90	181.5/113.5	−	胴部	やや良好	石＞石・長＞チ	赤褐色　断面中央は黒褐色でサンドイッチ状となる。	−	−
22	け	Ⅳ	17類	有文	壺形	砂質	黄褐色	4～5	−
272	100	155/145	−	胴部	やや良好	石・長＞ウ＞石	淡褐色	−	−
22	す	Ⅲ	17類	有文	−	泥質	茶褐色	5.5～6.5	−
273	102	209	−	胴部	良好	石・長＞石＞チ	茶褐色	−	−
22	と	4	17類	有文	−	砂質	淡褐色	5	−
274	93	約173	−	胴部	良好	石・長＞チ	淡桃褐色	−	−
22	つ	Ⅲ	17類	有文	−	砂質	黄褐色	6～7	−
275	91	220.3	−	胴部	良好	石・長＞石	暗黄褐色	−	−
22	せ・そ	Ⅳ	17類	有文	−	泥質	黄褐色　部分的に暗褐色	5～7	−
276	100	196	−	胴部	良好	石＞千?＞石・長	黄褐色　部分的に暗褐色	−	−
22	す	Ⅳ	17類	有文	−	泥質	黄褐色	6～7	−
277	102	160/155	−	胴部	良好	石＞千?＞石・長	黄褐色	−	−
23	け・さ	Ⅳ	13～16類	無文	−	砂質	褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	5～7	−
278	100	153/130	平底①	底部	やや良好	石・長＞チ?＞石	褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	底面11.5	8.8
23	こ	Ⅳ	13～16類	無文	−	砂質	褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	10	−
279	101	160/145	平底①？	底部	やや良好	石＞石・長＞チ	褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	底面12.5	9
23	く・け	Ⅳ	13～16類	無文	−	砂質	暗褐色	7	−
280	100	130/110	平底①	底部	やや良好	石・長＞チ＞貝？	赤褐色	底面9	7.2
23	け・こ	Ⅳ	13～16類	無文	−	砂質	褐色・暗褐色	6	−
281	99	103/93	平底①	底部	やや良好	石・長＞チ	褐色・暗褐色	底面9	5
23	せ	Ⅳ	13～16類	無文	−	砂質	黄褐色	7	−
282	92	108.59	平底②	底部	良好	石・長＞石＞チ	暗黄褐色	底面9	5.6
23	す	Ⅳ	13～16類	無文	−	砂質	茶褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	7	−
283	91	56.34	平底②	底部	良好	石＞チ＞石・長	茶褐色　断面中央は暗褐色でサンドイッチ状となる。	底面9	8.2
23	そ	Ⅳ	13～16類	無文	−	泥質	赤褐色	8	−
284	92	107.5/87.5	平底①	底部	良好	石＞石・長＞チ	暗褐色	底面10.5	5.8
23	ち	Ⅳ	13～16類	無文	壺形？	砂質	黄褐色	6	−
285	98	179/171	平底②	底部	良好	石・長＞石＞角	暗褐色　一部黒褐色	底面6	6.4
23	さ	Ⅳ	13～16類	無文	−	砂質	赤褐色	7	−
286	99	205/195	平底①	底部	やや良好	石・長＞チ＞石	暗赤褐色　断面中央は暗黄褐色でサンドイッチ状となる。	底面8	−
23	け	Ⅳ	13～16類	無文	−	泥質	褐色	9	−
287	100	120/110	平底②	底部	良好	石＞石・長	黄褐色	底面8	−
23	け	Ⅳ	13～16類	無文	−	砂質	赤褐色	7	−
288	100	135/130	平底①	底部	良好	石・長＞チ	赤褐色	底面10	−

混入物の略号

石・長：石英・長石／黒：黒色鉱物／ウ：雲母／千：千枚岩／赤：赤色粒／花：花崗岩類／石：石灰質砂粒／輝：輝石／緑：緑レン岩・緑色岩／角：角閃石／貝：貝殻片／チ：チャート／ガ：火山ガラス

(21) 土器の胎土分析

1 試料

試料は、大堂原貝塚より出土した土器片四三点である。いずれも、出土層位および型式学的特徴から、貝塚時代早期（縄文時代）の土器であるとされている。試料には、試料名a、b、cと試料番号1～41（試料番号14は欠番）が付けられている。全試料には、発掘調査者所見による部位、型式等、出土層位、出土地区が付されている。型式等の内訳は、出土した土器の中で最も古い薄手土器とされている土器が二〇点、曽畑式が十二点、条痕文土器が七点であり、他に爪形文と沈線文および室川下層式が各一点、室川下層式または条痕文とされた土器が一点である。

2 分析方法

薄片作製観察を用いて試料間のデータを比較検討する。

薄片は、試料の一部を予め樹脂により固化した後に、その部分をダイアモンドカッターで切断、正確に〇・〇三㎜の厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにした。また、胎土の基質については、孔隙度と粘土残存量について定性的に記載した。孔隙度とは、焼成後に胎土の基質に生じる孔隙がどの程度多いかということであり、粘土残存量とは、胎土の基質を構成する粘土の焼成によるガラス化の程度である。これは、焼成の状態（特に温度）により、ガラス化の程度が異なるため、土器の焼成に関わる情報となる。

3 結果

各試料の観察結果を表1に示す。

各試料の胎土中に認められた鉱物片および岩石片の種類構成から、以下のような胎土の分類を設定することができた。各試料の胎土分類を表2に示す。

① Ⅰ類

石灰岩片を多く含み、それ以外の岩石片が認められないことが特徴である。石灰岩片の中には、サンゴ片や有孔虫殻および貝殻片なども認められる。鉱物片では、石英が多く、微量の斜長石を伴う。

② Ⅱ類

後述するように片岩類は、屋我地島の地質学的背景を考慮すると重要な岩石となるが、これを含む試料をここではⅡ類として一括する。片岩類以外に含まれる鉱物片や岩石片の種類によって、以下のⅡa～Ⅱf類まで分類した。

【Ⅱa類】

石灰岩片を多く含むことが特徴となる。鉱物片の産状は、Ⅰ類と同様である。

【Ⅱb類】

緑色岩を伴うことが特徴である。鉱物片では、石英以外に緑レン石を含むことが特徴となる。

【Ⅱc類】

少量のチャートを伴うことと鉱物片において石英以外に少量～中量の白雲母を伴うことが特徴である。

【Ⅱd類】

岩石片では片岩類と花崗岩類を主体とし、鉱物片では石英以外に斜長石と黒雲母が多く含まれ、微量～少量のカリ長石および斜方輝石を伴うことが特徴である。

【Ⅱe類】

岩石片では片岩類と花崗岩類を主体とし、鉱物片では石英以外にカリ長石と黒雲母が多く含まれ、微量～少量の斜長石

表1．胎土薄片観察結果

試料番号	部位	型式等	出土層位	地区	砂粒 全体量	砂粒 淘汰度	砂粒 最大径	砂粒の種類 構成 鉱物片 石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	角閃石族	黒雲母	白雲母	緑レン石	岩石片 石灰岩（有孔虫殻・サンゴ片含む）	貝殻片	チャート	花崗岩類	緑色岩	片岩類	孔隙度	粘土残存量	胎土
a	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－101	◎	○	0.9	◎	○	○	＋				◎	○	＋			△	△		＋	×	◎	Ⅱd
b	胴部	薄手	Ⅷ	こ－101	◎	○	0.9	◎	○	○	＋				◎	○	＋			△	△		＋	×	◎	Ⅱd
c	胴部	薄手	Ⅷ	こ－101	◎	○	1.3	◎	○	○	＋				◎	○	＋			△	△		＋	×	◎	Ⅱd
23	胴部	薄手	Ⅸ	し－100	◎	×	2.3	◎	×	×	×				◎	×	×			×	×		×	×	◎	Ⅱd
31	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－101	◎	△	2.6	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
26	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－101	◎	△	1.6	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
27	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－101	◎	△	1.7	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
28	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－101	◎	△	0.9	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
29	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－101	◎	△	3.2	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
30	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－100・101	◎	△	2.7	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
33	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－101	◎	△	1.2	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
34	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－99	◎	△	1.3	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
38	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－101	◎	△	1.3	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
39	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－100	◎	△	1.0	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
40	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－100・101	◎	△	1.0	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
41	胴部	薄手	Ⅷ	け・こ－101	◎	△	1.3	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
25	胴部	薄手	Ⅶ	さ－100	◎	△	1.2	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
32	胴部	薄手	Ⅶ	け・こ－99	◎	△	2.5	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
35	胴部	薄手	Ⅶ	け－100	◎	△	1.1	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
37	胴部	薄手	Ⅶ	さ－99・100	◎	△	0.7	◎	△	△	△				◎	△	△			×	×		×	×	◎	Ⅱd
24	胴部	爪形文	Ⅶ	け・こ－101	○	△	1.3	○	△	△	△				○	＋	＋			△	△		△	△	○	Ⅱb
3	口縁部	曽畑式	Ⅶ	け－99	◎	△	1.4	◎	△	＋	＋				◎	＋	＋			△	△		△	△	◎	Ⅱb
5	口縁部	曽畑式	Ⅶ	け・こ－100・101	◎	△	1.4	◎	△	＋	＋				◎	＋	＋			△	△		△	△	◎	Ⅱb
6	胴部	曽畑式	Ⅶ	け・こ－100・101	◎	△	1.2	◎	△	＋	＋				◎	＋	＋			△	△		△	△	◎	Ⅱb
7	口縁部	曽畑式	Ⅶ	こ－100	◎	△	1.2	◎	△	＋	＋				◎	＋	＋			△	△		△	△	◎	Ⅱb
8	胴部	曽畑式	Ⅶ	け・こ－99・100	◎	△	1.3	◎	△	＋	＋				◎	＋	＋			△	△		△	△	◎	Ⅱb
9	胴部	曽畑式	Ⅶ	け・こ－100・101	◎	△	1.4	◎	△	＋	＋				◎	＋	＋			△	△		△	△	◎	Ⅱb
10	胴部	曽畑式	Ⅶ	け・こ－100・101	◎	△	1.6	◎	△	＋	＋				◎	＋	＋			△	△		△	△	◎	Ⅱb
11	胴部	曽畑式	Ⅶ	け・こ－101	◎	△	1.3	◎	△	＋	＋				◎	＋	＋			△	△		△	△	◎	Ⅱb
12	胴部	曽畑式	Ⅶ	こ－100	◎	△	1.9	◎	△	＋	＋				◎	＋	＋			△	△		△	△	◎	Ⅱb
13	胴部	曽畑式	Ⅶ	け・こ・さ－100・101	◎	△	1.0	◎	△	＋	＋				◎	＋	＋			△	△		△	△	◎	Ⅱb
16	口縁部	曽畑式	Ⅶ	さ－99	◎	△	1.0	◎	△	＋	＋				◎	＋	＋			△	△		△	△	◎	Ⅱb
1	胴部	曽畑式	Ⅵ	す・せ・そ－92	○	×	3.8	○	×	×	＋				○	＋	＋			×	○		＋	×	○	Ⅱb
36	胴部	沈線文	Ⅶ	さ－99	○	△	1.7	○	△	＋	＋				○	＋	＋			△	△		△	△	○	Ⅱb
15	胴部	室川下層式	Ⅶ	し－99	○	×	4.3	○	×	△	＋				○	＋	＋			△	○		＋	×	○	Ⅱb
17	胴部	室川下層式または条痕文	Ⅶ	こ－100	○	×	2.0	○	×	△	＋				○	＋	＋			△	○		＋	×	○	Ⅱb
2	胴部	条痕文	Ⅶ	け・こ－100・101	○	△	1.8	○	△	＋	＋				○	＋	＋			△	○		＋	×	○	Ⅱb
4	口縁部	条痕文	Ⅶ	け・こ－100・101	○	△	2.2	○	△	＋	＋				○	＋	＋			△	○		＋	×	○	Ⅱb
19	胴部	条痕文	Ⅶ	け－101	○	△	2.4	○	△	＋	＋				○	＋	＋			△	○		＋	×	○	Ⅱb
21	胴部	条痕文	Ⅶ	け－99	○	△	1.2	○	△	＋	＋				○	＋	＋			△	○		＋	×	○	Ⅱb
22	胴部	条痕文	Ⅶ	さ－100	○	△	1.4	○	△	＋	＋				○	＋	＋			△	○		＋	×	○	Ⅱb
18	胴部	条痕文	Ⅵ	し－99	○	△	2.5	○	△	＋	＋				○	＋	＋			△	○		＋	×	○	Ⅱb
20	胴部	条痕文	Ⅵ	さ－100	△	△	1.7	△	△	＋	＋				△	＋	＋			△	○		＋	×	○	Ⅱb

量比 ◎：多量 ○：中量 △：少量 ＋：微量
淘汰度 ◎：良好 ○：中程度 ×：不良
孔隙度 ◎：大きい △：中程度 ×：小さい

を伴うことが特徴である。

【Ⅱf類】

石英以外に斜長石と黒雲母の鉱物片を多く含むことが特徴である。

③Ⅲ類

岩石片では花崗岩類しか認められず、鉱物片では石英以外にカリ長石を比較的多く含み、斜長石および黒雲母を伴うことが特徴である。

4　考察

①胎土の地質学的背景

上記で分類した胎土は、鉱物片および岩石片の種類とその組み合わせから、その材料となった砂や粘土の採取地の地質学的背景を示唆している。

ここでは、胎土から推定した地質学的背景とそれに相当する地質の分布が屋我地島、名護市周辺および沖縄本島にあるかということについて述べる。なお、屋我地島の地質については神谷（2001）を参照とし、沖縄本島および奄美諸島の地質については、国土庁土地局（1974）、国土庁土地局（1977）および木崎編著（1985）を参照とした。

Ⅰ類の特徴である石灰岩の由来としてまず考えられるのは、屋我地島および沖縄本島の北部から南部の各地、さらには琉球列島の各島にも広く分布する琉球石灰岩である。すなわち、Ⅰ類の胎土を有する土器は、屋我地島における在地の土器である可能性を有すると同時に、屋我地島内の琉球石灰岩と沖縄本島各地に分布する琉球石灰岩とを区別することはできないため、沖縄本島各地さらには琉球列島各島まで由来する地域の対象となる。今回の試料では3点しか認められなかったことと、後述する片岩類を伴わないことなどを考慮すると、屋我地島および沖縄本島北部以外の地域に由来する可能性の方が高いと言えるかも知れない。

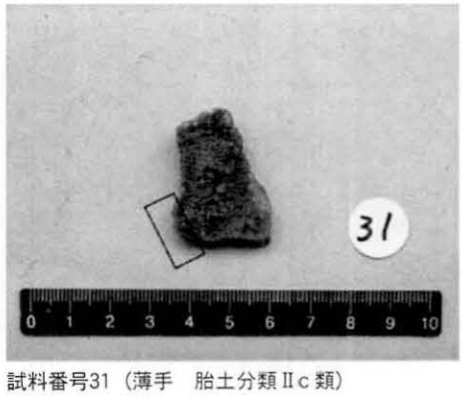
Ⅱ類は、片岩類を含むことが共通する特徴である。この片岩類については、沖縄本島の地質の中では、特に名護層と呼ばれる中生代の地層中に多く認められている。名護層は、北は辺戸御岳付近から南は嘉手納付近までの西岸側に広く分布している。また、名護層の上位に堆積し、やはり沖縄本島北端部から金武湾東部付近まで分布する嘉陽層は砂岩を主体とする地層であるが、千枚岩（片岩類に含まれる岩石）も含まれている。なお、本部半島および屋我地島には名護層および嘉陽層は分布していないが、神谷（2001）は、屋我地島に分布する運天原層には千枚岩からなる部層があることを記載している。したがって、片岩類を含むⅡ類の胎土は、沖縄本島北部から中部にかけての地域内に由来する可能性があり、屋我地島内の可能性もある。次に片岩類に伴う鉱物片および岩石片の種類により、推定される地域について述べる。

まず、Ⅱa類では石灰岩が伴われるが、石灰岩についてはⅠ類と同様の由来が考えられる。したがって、Ⅱa類の由来する地域は、屋我地島も含む沖縄本島北部から中部までの西岸地域である可能性がある。

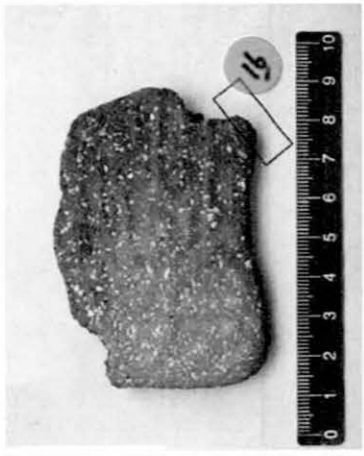
Ⅱb類に伴われる緑色岩は、片岩類とともに名護層を構成する主要な岩石の一つとされている。特に、名護市街付近から国頭村辺土名付近に至る地域には緑色岩を主体とする名護層の分布が記載されている。したがって、Ⅱb類の由来する地域も、Ⅱa類と同様の範囲を想定することができる。屋我地島においては、緑色岩の分布する地質の記載はないが、上述した運天原層は、本部半島の与那嶺層

試料番号34（薄手　胎土分類Ⅱf類）

試料番号23（薄手　胎土分類Ⅱd類）



試料番号31（薄手　胎土分類Ⅱc類）



試料番号16（曽畑式　胎土分類Ⅰ類）

試料番号28（薄手　胎土分類Ⅲ類）

胎土分析試料（薄手、曽畑式）

に対比されており、本部半島の与那嶺層中には緑色岩も含まれている。したがって、屋我地島内の堆積物中に緑色岩の岩片が全く含まれないということは、現時点では言えない。すなわち、Ⅱb類については屋我地島に由来する可能性もある。

Ⅱc類に伴われるチャートは、名護層中にも含まれるが、主要な岩石ではない。チャートを主体とする地質は、主に本部半島に分布しており、本部層、今帰仁層、与那嶺層などが、それに相当する。ただし、これらの地質が分布する本部半島主部には、名護層や嘉陽層は分布していないことから、Ⅱc類の由来する地域が本部半島主部である可能性は低いと考えられる。ただし、名護市北西部に相当する本部半島の基部では、本部半島主部に分布する地質に由来する砕屑物と名護層や嘉陽層に由来する砕屑物とが混在している可能性がある。すなわち、Ⅱc類の由来する地域として本部半島基部付近を想定することができる。なお、屋我地島では、運天原層を構成する岩石の中にチャートも含まれている。したがって、Ⅱc類についてもⅡb類と同様に、屋我地島に由来する可能性のあることは否定できない。なお、Ⅱc類のもう一つの特徴である白雲母の鉱物片は、おそらく千枚岩に由来すると考えられる。

Ⅱd、Ⅱe、Ⅱfの各類の特徴である黒雲母の鉱物片は、供伴する花崗岩類の岩石に由来すると考えられる。すなわち、黒雲母を主要な斑晶鉱物とする花崗岩類を伴うことがⅡd、Ⅱe、Ⅱfの各類の特徴となる。ここで、黒雲母を斑晶の主体とする花崗岩類の分布をみると、屋我地島内には、そのような地質の記載は認められない。

一方、沖縄本島では、北部西岸の恩納村名嘉真から名護市源河にかけて新第三紀の貫入岩である石英斑岩の岩脈が点在している。特に最大の岩体は名嘉真付近にある。したがって、Ⅱd、Ⅱe、Ⅱfの各類の由来する地域としては、名嘉真付近を有力な候補として考えることができる。

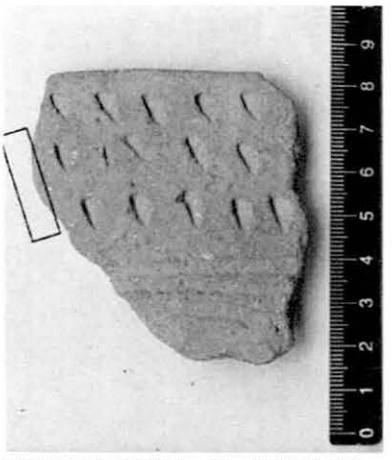
Ⅲ類については、片岩類を含まないことが第一の特徴であり、第二の特徴として花崗岩類の岩石片を含むことが上げられる。花崗岩類の由来については、上記の石英斑岩の岩脈の可能性もあるが、Ⅲ類の胎土では黒雲母の鉱物片が微量しか含まれないことも考慮すれば、Ⅱd～Ⅱf類とは異なる由来である可能性が高い。上記の石英斑岩以外には、沖縄本島内では花崗岩類の分布はほとんど認められていない。ここで、奄美大島以南の琉球列島まで広げてみれば、花崗岩類の比較的広い分布が認められる島としては、奄美大島、徳之島、沖永良部島、渡名喜島および石垣島がある。今回の試料が縄文時代の土器であることを考慮すれば、Ⅲ類の由来する地域としては奄美大島、徳之島および沖永良部島の3島内にある可能性がある。

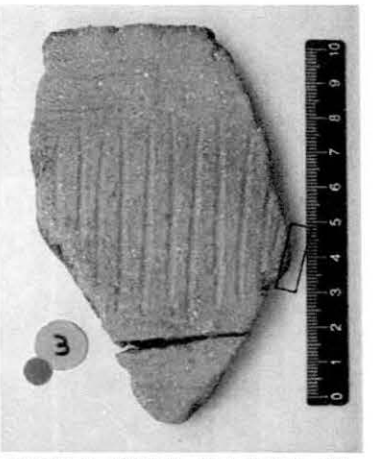
今後、沖縄本島および奄美諸島も含めた琉球列島各地における土器試料と自然堆積物試料の分析例を蓄積することができれば、Ⅰ～Ⅲ類までの各類の由来する地域をさらに限定する（もちろん上述の地質以外に由来する可能性も含めて検討する）ことができると考えられる。

②土器型式と胎土との対応

胎土分類を表示した表　をみると、型式等と胎土との間に次のような相関のあることが示唆される。

試料番号1（曽畑式　胎土分類Ⅱb類）


試料番号7（曽畑式　胎土分類Ⅱb類）


試料番号3（曽畑式　胎土分類Ⅱa類）

試料番号9（曽畑式　胎土分類Ⅲ類）

試料番号13（曽畑式　胎土分類Ⅱe類）

胎土分析試料（曽畑式）

【薄手土器】

全二〇点中の十一点がⅡf類に分類される。他にⅡc類が三点、Ⅱd類が五点、Ⅱb類が一点であり、全てⅡ類である。

【曽畑式土器】

十二点のうちⅡa類が五点あり、最も多い。他にⅠ、Ⅱb、Ⅱeの各類が二点ずつ、さらにⅢ類も一点あり、上記の薄手土器に比べると胎土の種類は分散する傾向が認められる。

【条痕文土器】

七点中四点がⅡb類に分類される。残る三点は、Ⅱa、Ⅱd、Ⅲの各類である。

【爪形文・沈線文・室川下層式】

今回はいずれも一点ずつであり、胎土の傾向は不明である。今回の分析では、爪形文はⅡb類、沈線文はⅠ類、室川下層式はⅡe類であった。

ここで、薄手、曽畑式、条痕文の各土器間の胎土の傾向を比べると、それぞれ主体となる胎土分類が異なり、特に薄手土器は他の二者の胎土分類と重なる試料の数はそれぞれ一点ずつしか認められない。また、曽畑式と条痕文との間でも、胎土分類が重なる試料は二点のみである。これらのことから、三者間における土器の製作事情が異なっていた可能性が高いことが推定される。

前述したように、各胎土の地域性についてはまだ検討の余地があり、また、今回の四三点が、大堂原貝塚出土土器の全体を表しているものでもない。したがって、各時期における土器の生産や移動に関わる動向を知るためには、今後も継続して、大堂原貝塚および周辺遺跡における土器の出土層位、出土位置、型式、文様等の分類と胎土の分類との対応を調べることが必要と考えられる。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

神谷厚昭（２００１）屋我地島の地形と地質。沖縄県立博物館紀要、27、15－28。

木崎甲子郎編著（１９８５）琉球弧の地質誌。278 p.、沖縄タイムス社。

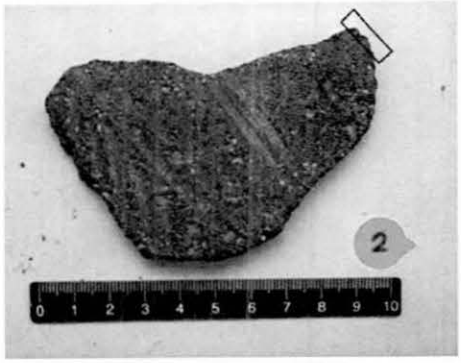
国土庁土地局（１９７４）土地分類基本調査　地形・表層地質・土じょう　名護。

国土庁土地局（１９７７）土地分類図47　沖縄県。

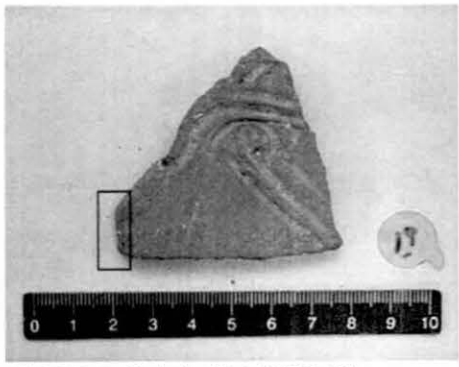
試料番号18（条痕文　胎土分類Ⅱb類）

試料番号15（室川下層式　胎土分類Ⅱe類）

試料番号36（沈線文　胎土分類Ⅰ類）



試料番号２（条痕文　胎土分類Ⅲ類）

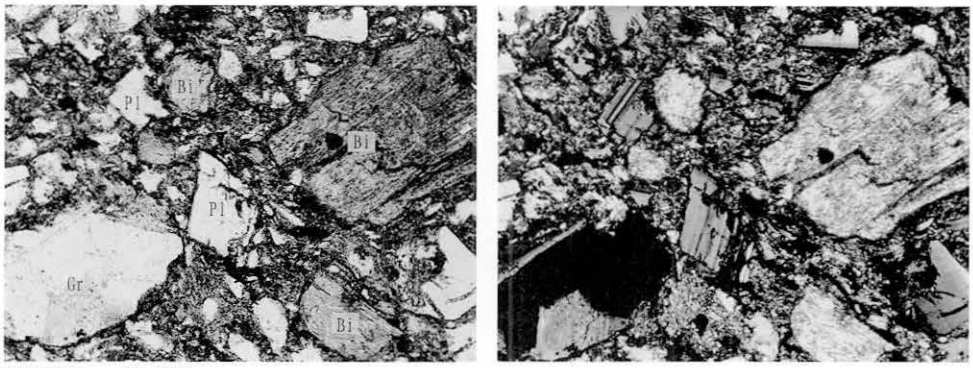


試料番号19（条痕文　胎土分類Ⅱb類）

胎土分析試料（沈線文、室川下層式、条痕文）

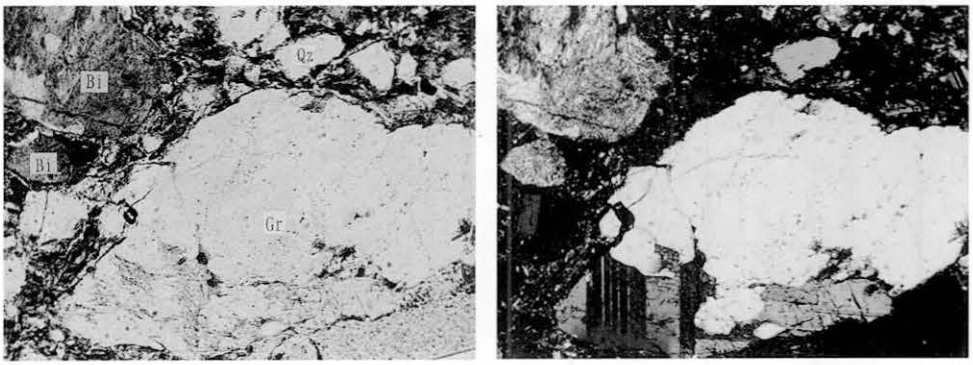
表2．胎土分類結果

試料番号	部位	型式等	出土層位	各地	沖縄本島北部～中部の西岸		本部半島基部	沖縄本島北部　西岸			奄美諸島
				I	II						III
					a	b	c	d	e	f	
a	胴部	薄手	Ⅷ					■			
b	胴部	薄手	Ⅷ					■			
c	胴部	薄手	Ⅷ					■			
23	胴部	薄手	Ⅸ					■			
31	胴部	薄手	Ⅸ				■				
26	胴部	薄手	Ⅷ					■			
27	胴部	薄手	Ⅷ							■	
28	胴部	薄手	Ⅷ			■					
29	胴部	薄手	Ⅷ				■				
30	胴部	薄手	Ⅷ				■				
33	胴部	薄手	Ⅷ							■	
34	胴部	薄手	Ⅷ							■	
38	胴部	薄手	Ⅷ							■	
39	胴部	薄手	Ⅷ							■	
40	胴部	薄手	Ⅷ							■	
41	胴部	薄手	Ⅷ							■	
25	胴部	薄手	Ⅶ							■	
32	胴部	薄手	Ⅶ							■	
35	胴部	薄手	Ⅶ							■	
37	胴部	薄手	Ⅶ							■	
24	胴部	爪形文	Ⅷ			■					
3	口縁部	曽畑式	Ⅶ		■						
5	口縁部	曽畑式	Ⅶ		■						
6	胴部	曽畑式	Ⅶ		■						
7	口縁部	曽畑式	Ⅶ			■					
8	胴部	曽畑式	Ⅶ		■						
9	胴部	曽畑式	Ⅶ								■
10	胴部	曽畑式	Ⅶ	■							
11	胴部	曽畑式	Ⅶ		■						
12	胴部	曽畑式	Ⅶ						■		
13	胴部	曽畑式	Ⅶ						■		
16	口縁部	曽畑式	Ⅶ	■							
1	胴部	曽畑式	Ⅵ			■					
36	胴部	沈線文	Ⅶ	■							
15	胴部	室川下層式	Ⅶ						■		
17	胴部	室川下層式または条痕文	Ⅶ			■					
2	胴部	条痕文	Ⅶ								■
4	口縁部	条痕文	Ⅶ		■						
19	胴部	条痕文	Ⅶ			■					
21	胴部	条痕文	Ⅶ			■					
22	胴部	条痕文	Ⅶ					■			
18	胴部	条痕文	Ⅵ			■					
20	胴部	条痕文	Ⅵ			■					



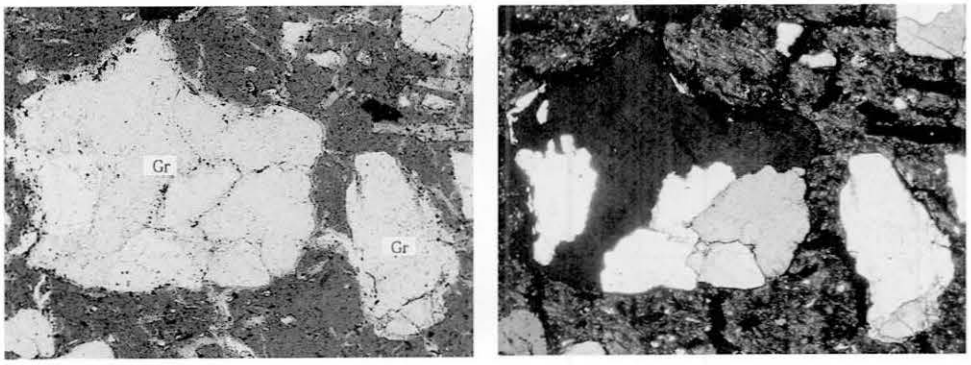
試料番号ａ（Ⅱd類）

試料番号ｂ（Ⅱd類）



試料番号ｃ（Ⅱd類）

Qz：石英　Pl：斜長石　Bi：黒雲母　Gr：カコウ岩
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

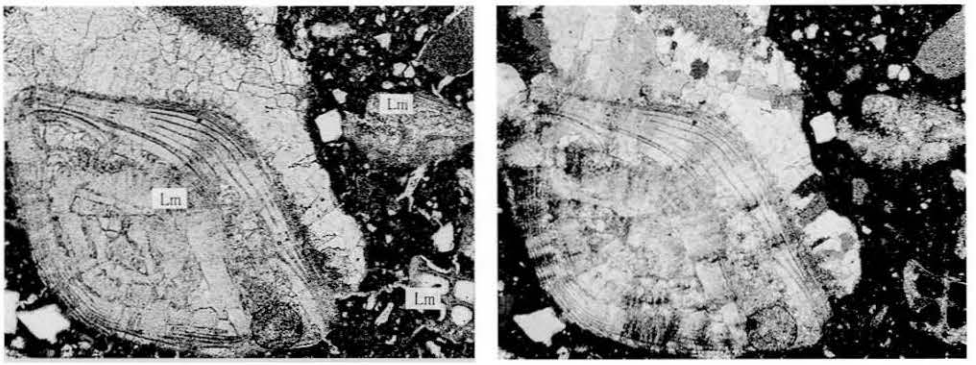


試料番号２（Ⅲ類）

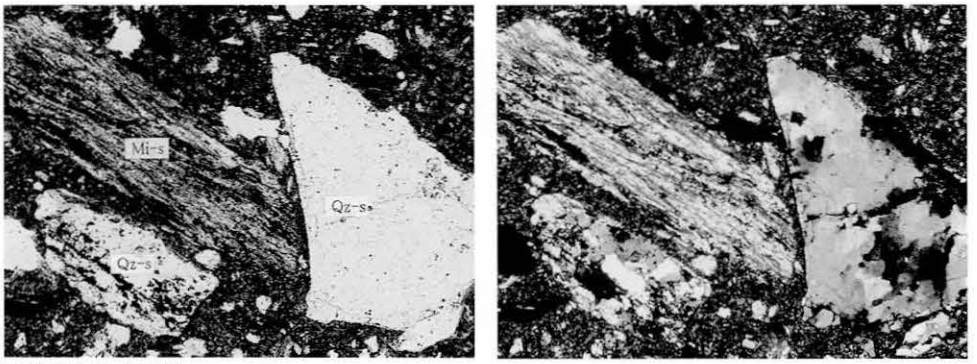
Lm：石灰岩　Gr：花崗岩類　Qz-s：石英片岩　Mi-s：雲母片岩
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

胎土薄片

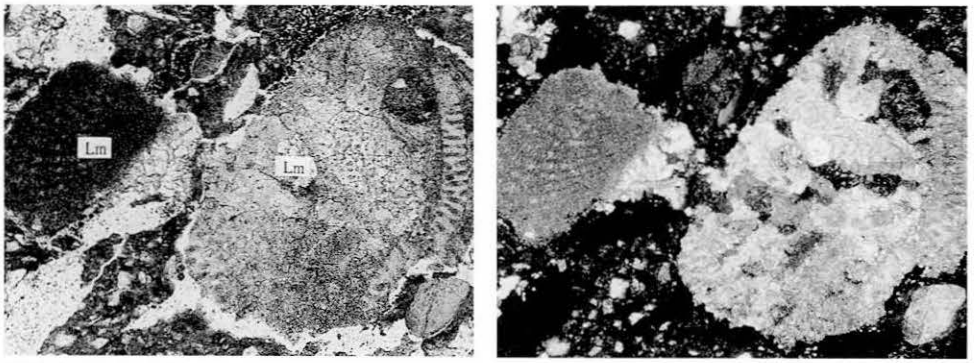


試料番号３（Ⅱa類）

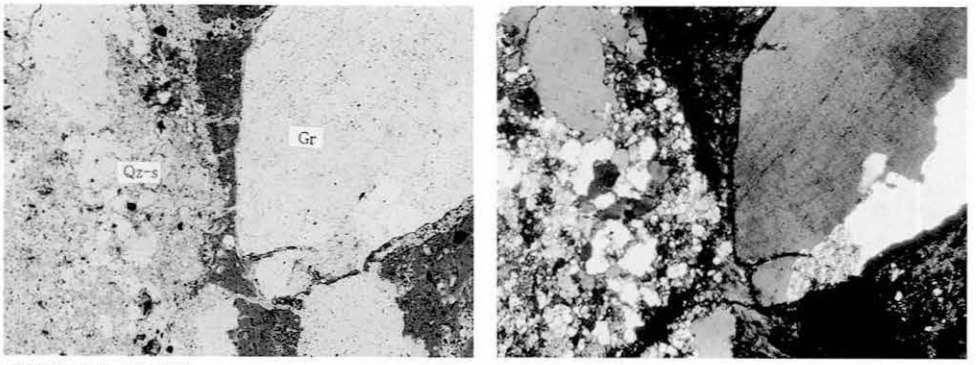


試料番号７（Ⅱb類）

Lm：石灰岩　Gr：花崗岩類　Qz-s：石英片岩　Mi-s：雲母片岩
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



試料番号10（Ⅰ類）

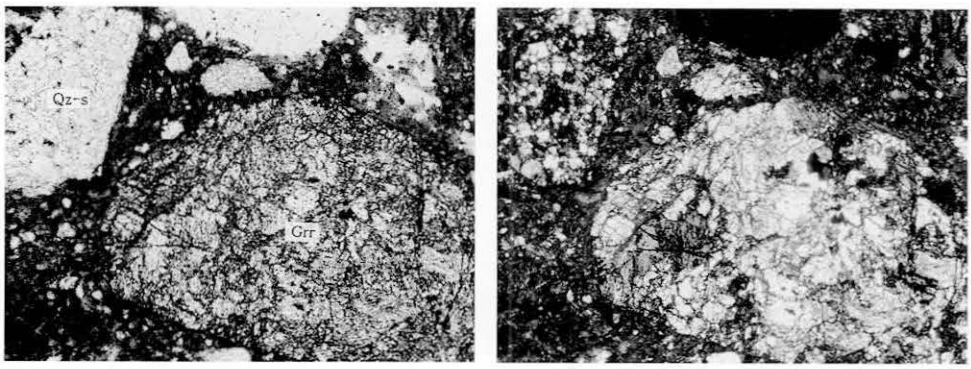


試料番号12（Ⅱe類）

Lm：石灰岩　Gr：花崗岩類　Grr：緑色岩　Qz-s：石英片岩
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

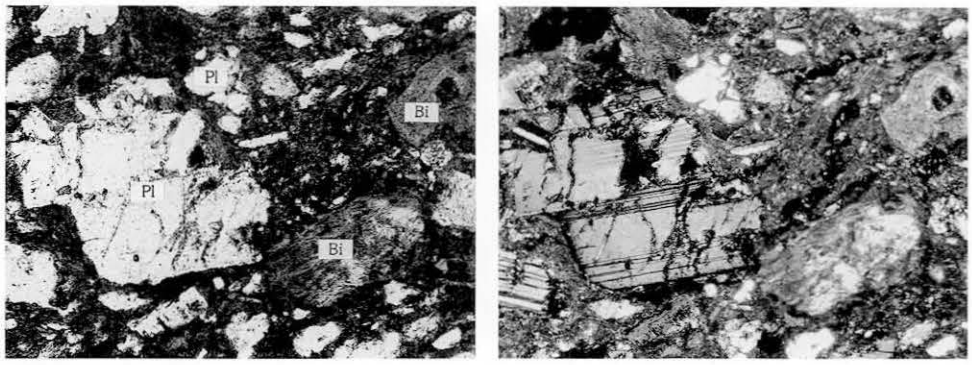
0.5㎜

胎土薄片

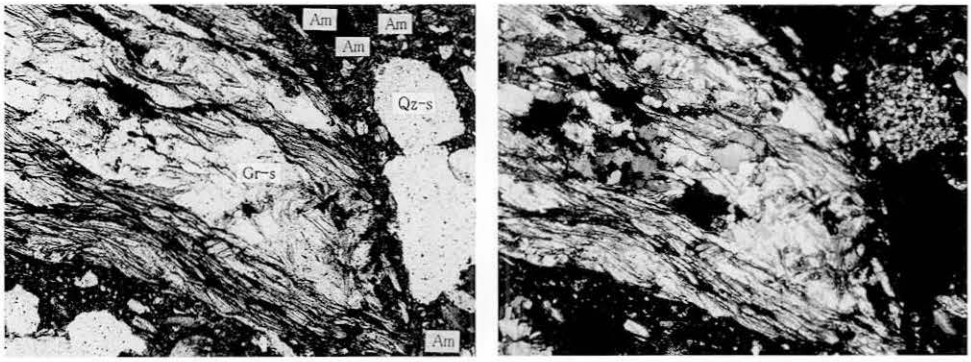


試料番号21（Ⅱb類）

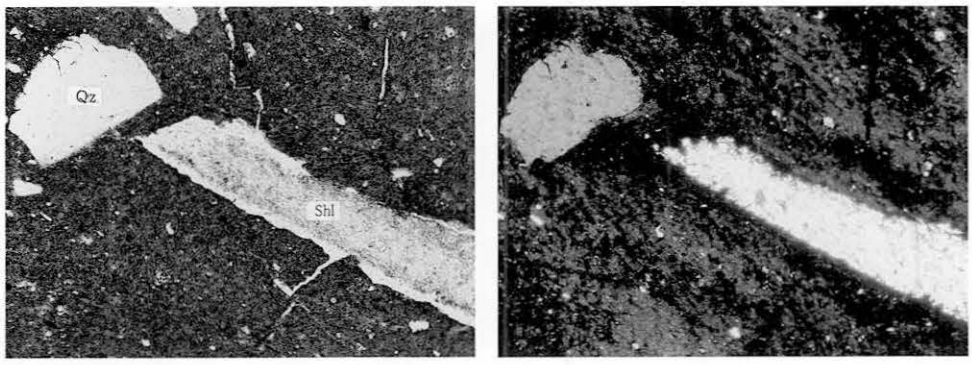
Lm：石灰岩　Gr：花崗岩類　Grr：緑色岩　Qz-s：石英片岩
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



試料番号26（Ⅱd類）



試料番号31（Ⅱc類）



試料番号36（Ⅰ類）

Qz：石英　Pl：斜長石　Am：角閃石族　Bi：黒雲母　Gr-s：緑色片岩　Qz-s：石英片岩　Shl：貝殻
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

胎土薄片

三、弥生～古墳時代並行期の土器

18類土器以下は、弥生～古墳時代並行期の土器である。いわゆる「沖縄貝塚時代後期」の土器である。当該期の土器は一三三八点を分類の対象とし、18類～24類土器の七種に分けた。その結果はP70～71の土器出土状況に示した通りである。

(1) 18類土器

本土器は、渡嘉敷村阿波連浦の阿波連浦貝塚第五層下部及び第六層出土土器を標識とし（注1）、阿波連浦下層式土器（注2）や阿波連浦第6式土器（注3）と呼称されている。器形は有文土器ともに口唇部が平坦に成形され、口縁部が「く」の字状に屈曲し、胴部は球胴形になる特徴をもつ。文様は、口縁部に山形突起もしくはリボン状突起を有するもの、細沈線文または幅広の沈線文を施文する特徴がある。胎土は砂質で、器面調整は外面が丁寧なナデによりなされるが、内面は口縁部を除けば、指頭圧痕を残すのが主である（注2）。本貝塚で得られたのは、全て深鉢・甕形である。分類の対象としたのは九三点で、その内訳は無文土器が六二点、有文土器が三一点である。以下、各特徴について述べる。

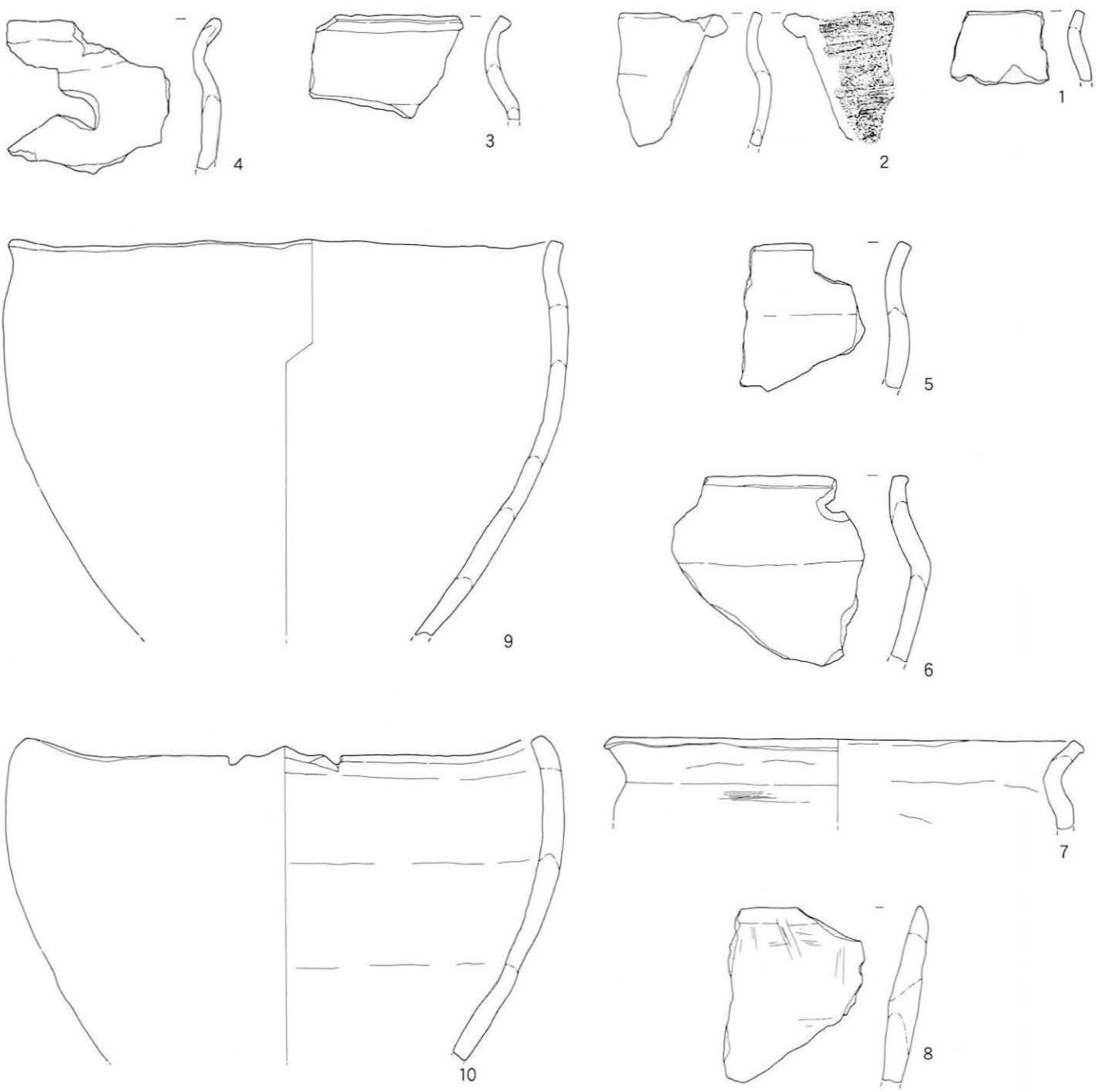
無文土器

深鉢・甕形（第1図）

1は口唇部が方形を呈し、口縁部は弱く外反する。胴部は膨らむ。胎土は砂質で、焼成は良好。た－92Ⅲ層出土。

2は口唇部が隅丸方形を呈し、口縁部は弱く外反する。肩部は「く」の字状屈曲を呈する。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－96Ⅲ層出土。

3は口唇部が方形を呈し、外面に僅か



第1図　18類（阿波連浦下層式）無文

に突出する。口縁部は弱く外反し、頸部でくびれ、肩部は「く」の字状に屈曲する。胎土は砂質で、焼成は良好。た－96Ⅲ層出土。

4は口唇部が丸みを帯び、口縁部は強く外反し、頸部から胴部にかけて膨らむ。内面には屈曲による強い稜がみられる。胎土は泥質で、焼成は良好。そ－92Ⅲ層出土。

5は口唇部が方形を呈し、口縁部は弱く外反する。胴部は膨らみ、肩部には弱い稜がみられる。胎土は砂泥質で、焼成は良好。そ・た－92Ⅲ層出土。

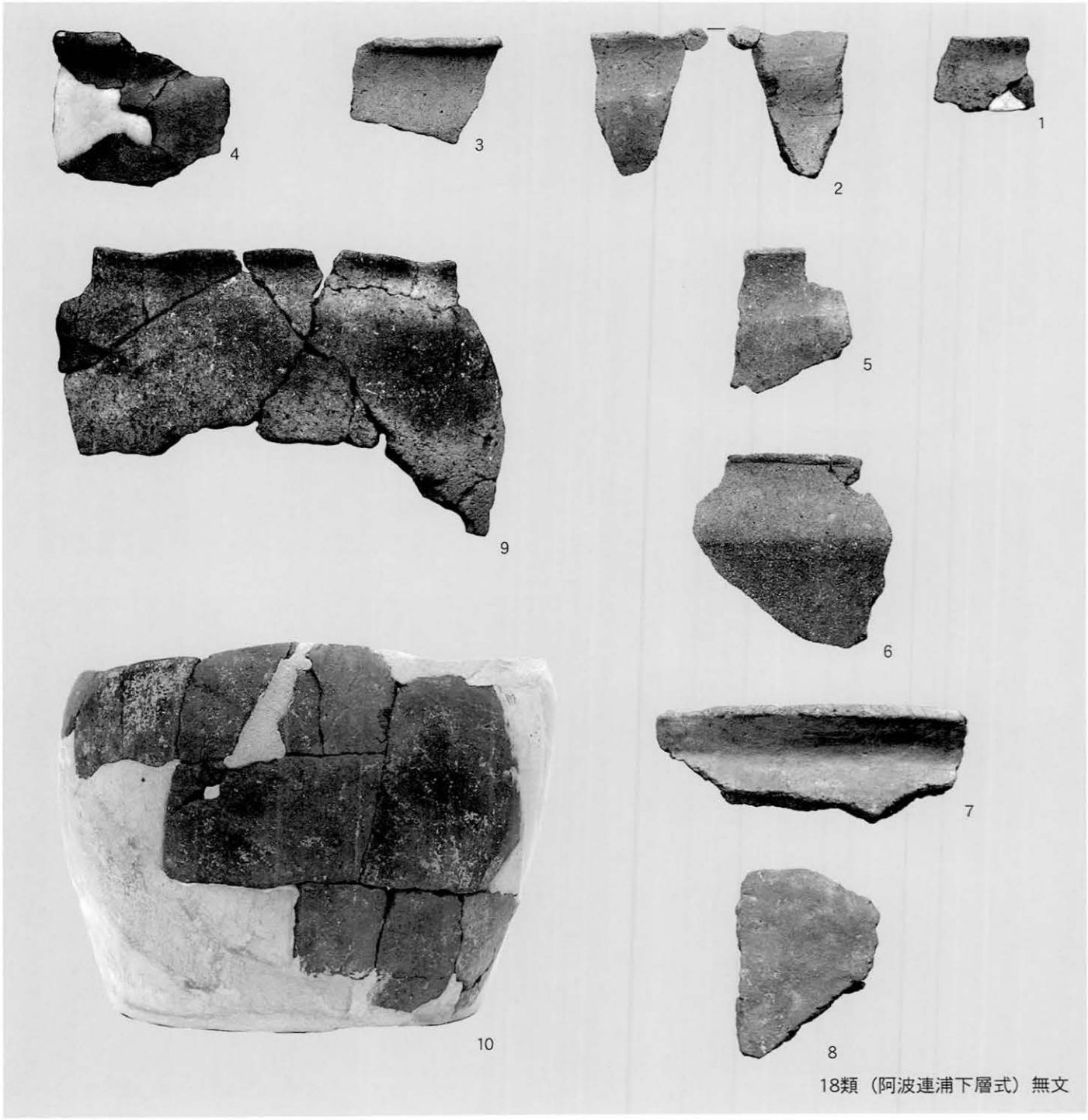
6は口唇部が方形を呈し、外面に僅かに突出する。口縁部は強く外反し、肩部は強く「く」の字状に屈曲する。胎土は砂質で、焼成は良好。た－95Ⅲ層出土。

7は口唇部が方形を呈し、外面に僅かに突出する。口縁部は強く外反し、頸部でくびれる。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－95Ⅲ層出土。

8は口唇部が舌状を呈し、口縁部は直立し、胴部へと直線的に伸びる。器壁は厚く、最大値で一五㎜を測る。胎土は泥質で、焼成は良好。ち－92Ⅲ層出土。

9は口唇部が方形を呈し、口縁部は弱く外反する。頸部は僅かにくびれ、胴上部が膨らむ。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は二七・二㎝。し・そ－91・92Ⅲ層出土。

10は口唇部が方形を呈し、口縁部は内湾する。器壁は全体的に厚く重量感のある土器である。鉢形になると思われる。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は二五・四㎝。す－101Ⅱ層出土。



18類（阿波連浦下層式）無文

有文土器（第2図、第3図）

有文土器は文様により以下のように分類を行った。

1群　山形文
2群　突帯文
3群　押し引き文
4群　沈線文

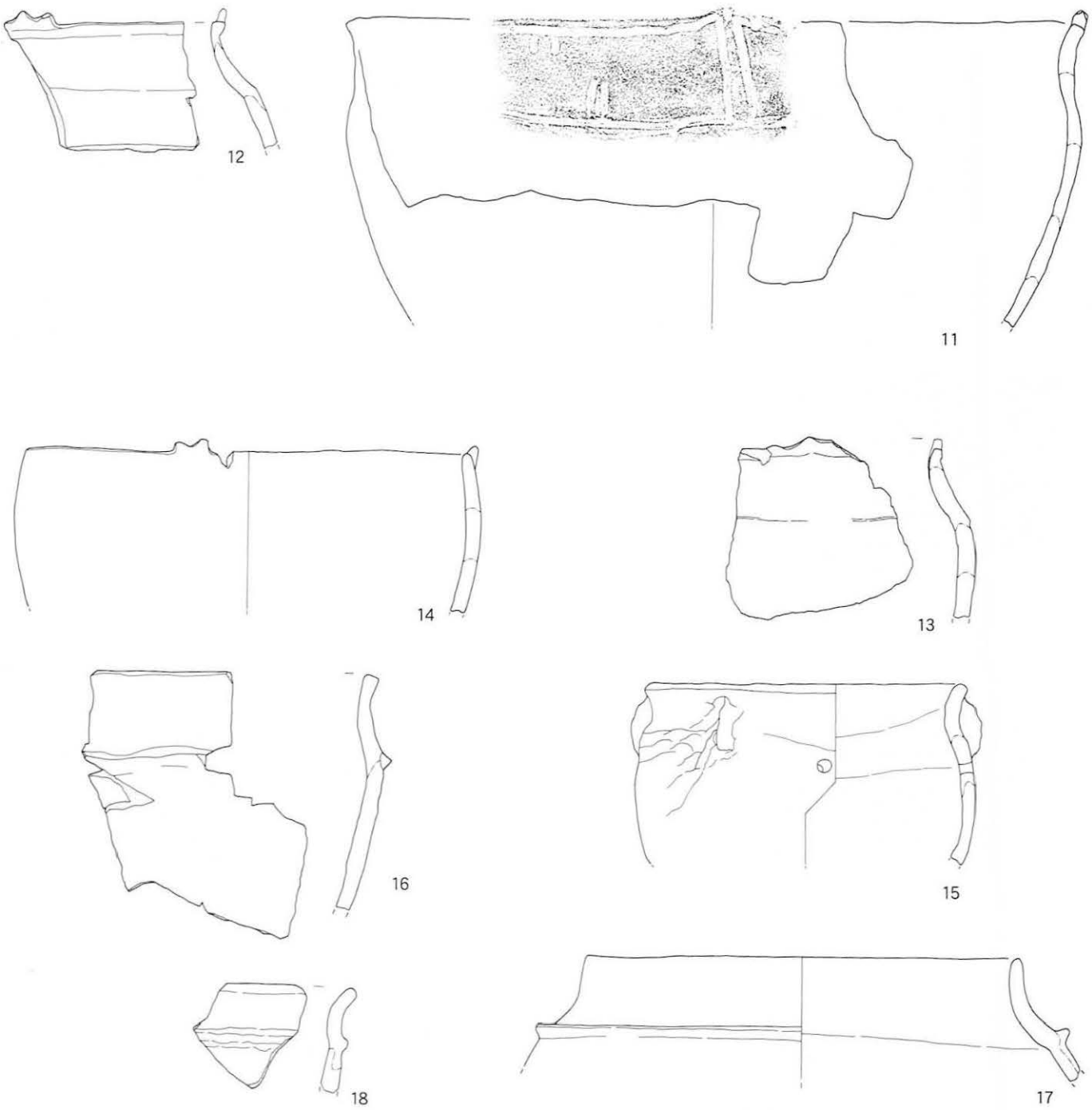
1群　山形文

11は口縁部にM字状の山形が二ヶ所みられる。やや幅広の沈線が山形部分の内面から頂部をへて外面に施文され、山形部分直下は二本一組の縦位長沈線と横位長沈線により区画される。区画内には上下交互に短沈線が施文される。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径三六・四㎝。せ・た－92Ⅲ層出土。

12は口縁部が若干すぼまり、最大径が胴部にある。口縁部にM字状の山形がみられる。胴部は「くの字」状に屈曲し、外面に稜がみられる。器面調整は内面では指頭圧痕が残るが、外面は工具による丁寧な調整がなされている。胎土は砂質で、焼成は堅緻。け－100Ⅳ層出土。

13は口縁部が直口し、胴部で「くの字」状に弱く屈曲する。屈曲部および口縁部直下では工具で粘土を削り取り、弱い有段を形成している。口唇部も同様に粘土を削り取りM字状の山形を形成する。胎土は砂質で、焼成はやや良好。た－96Ⅲ層出土。

14は口縁部が内湾し、胴部へかけて丸みを帯びていく。口縁部にはM字状の山形がみられるが、破損部分からみて本来はW字状の山形を呈するものと思われる。胎土は砂質で、焼成はやや良好。推算口径は二二・二㎝。そ－99Ⅲ層出土。



第2図

18類山形文11～14　突帯文：15～18

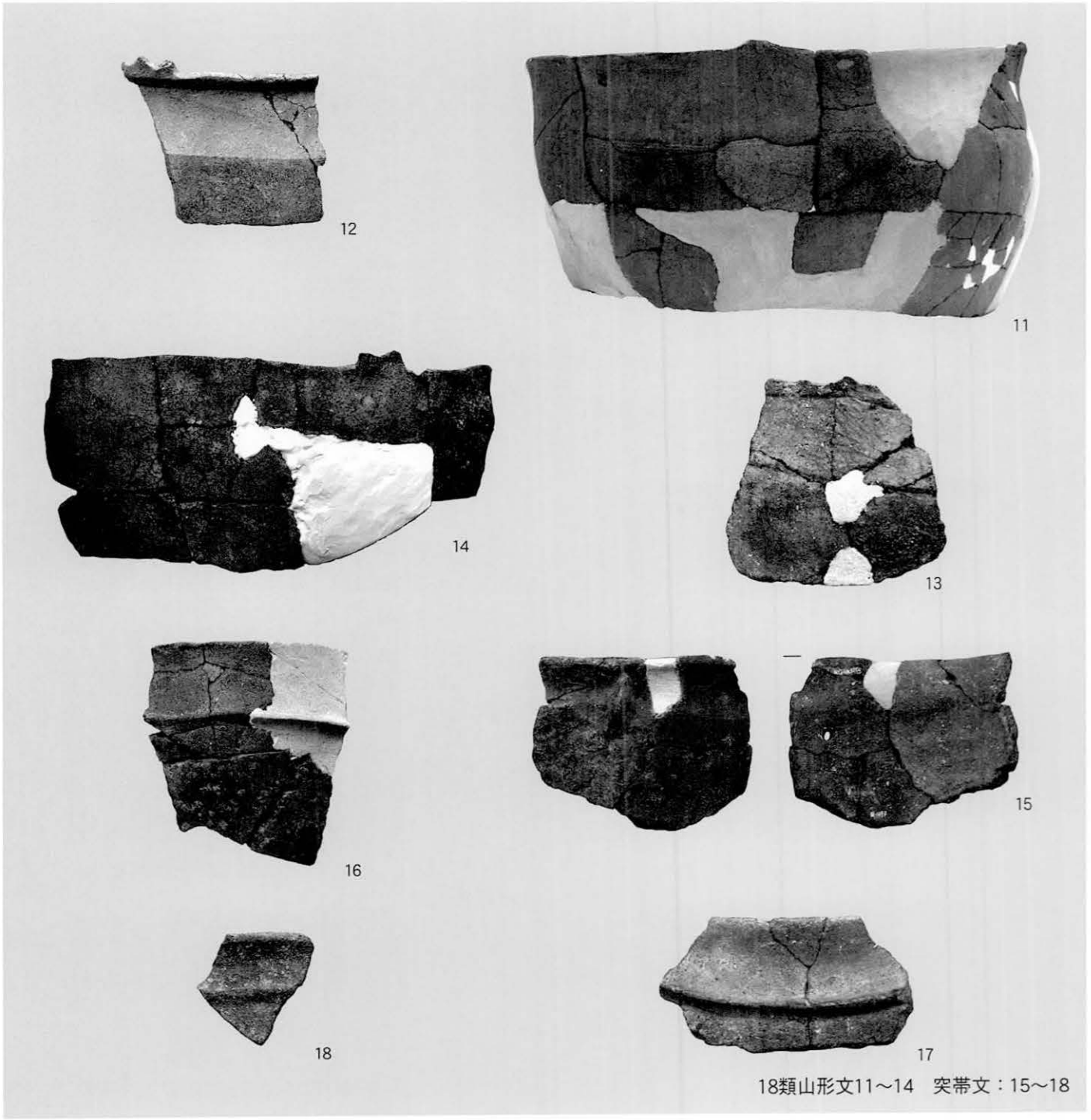
2群　突帯文

15は口唇部が丸みを帯び、外面に稜がみられる。口縁部は外反し、頸部でくびれる。頸部には縦位の外耳を貼付け、頸部は強い稜がみられ、「くの字」状を呈する。口縁部から四cm下方に孔を穿つ。外面の器面調整において、外耳を境に左右で調整が異なる。外耳の右方向は丁寧な調整であるが、左方向は粘土かたまりが残り雑である。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径一六cm。ち－94・95Ⅲ層出土。

16は口唇部が平坦を基本とするが、部分的に舌状を呈し、口縁部は弱く外反する。肩部に断面三角突帯を貼付ける。他の資料に比べて軽い。胎土は砂質で、焼成はやや良好。ち・つ－95Ⅳ層出土。

17は口唇部が舌状を呈し、口縁部が直口する壺と思われる。肩部に断面三角突帯を張付ける。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径二一・六cm。て－93 4層出土。

18は口唇部が丸みを帯び、口縁部が強く外反する。肩部に三角突帯を張付け、「くの字」状を呈する。胎土は砂質で、焼成は良好。さ・し－92Ⅲ層出土。



18類山形文11～14　突帯文：15～18

3群　押し引き文

19は口唇部が方形を呈し、口縁部が外反する。口唇直下に横位沈線を一条、その下に縦位沈線を三条施文する。胴部以下は不明であるが、縦位沈線の下にはさらに横位沈線が一条施文されると思われる。口縁部の四㎝下方には孔を穿つ。胎土は砂質で、焼成は良好。せ－95かく乱層出土。

20は口縁部が直口し、胴上部から膨らむ。口唇直下と肩部に四㎜幅の横位沈線をそれぞれ一条ずつ施文することで区画し、区画内には二条一組の縦位短沈線を上下に施す。本資料は第2図11と文様構成が類似する。胎土は砂質で、焼成は良好。た－92Ⅲ層出土。

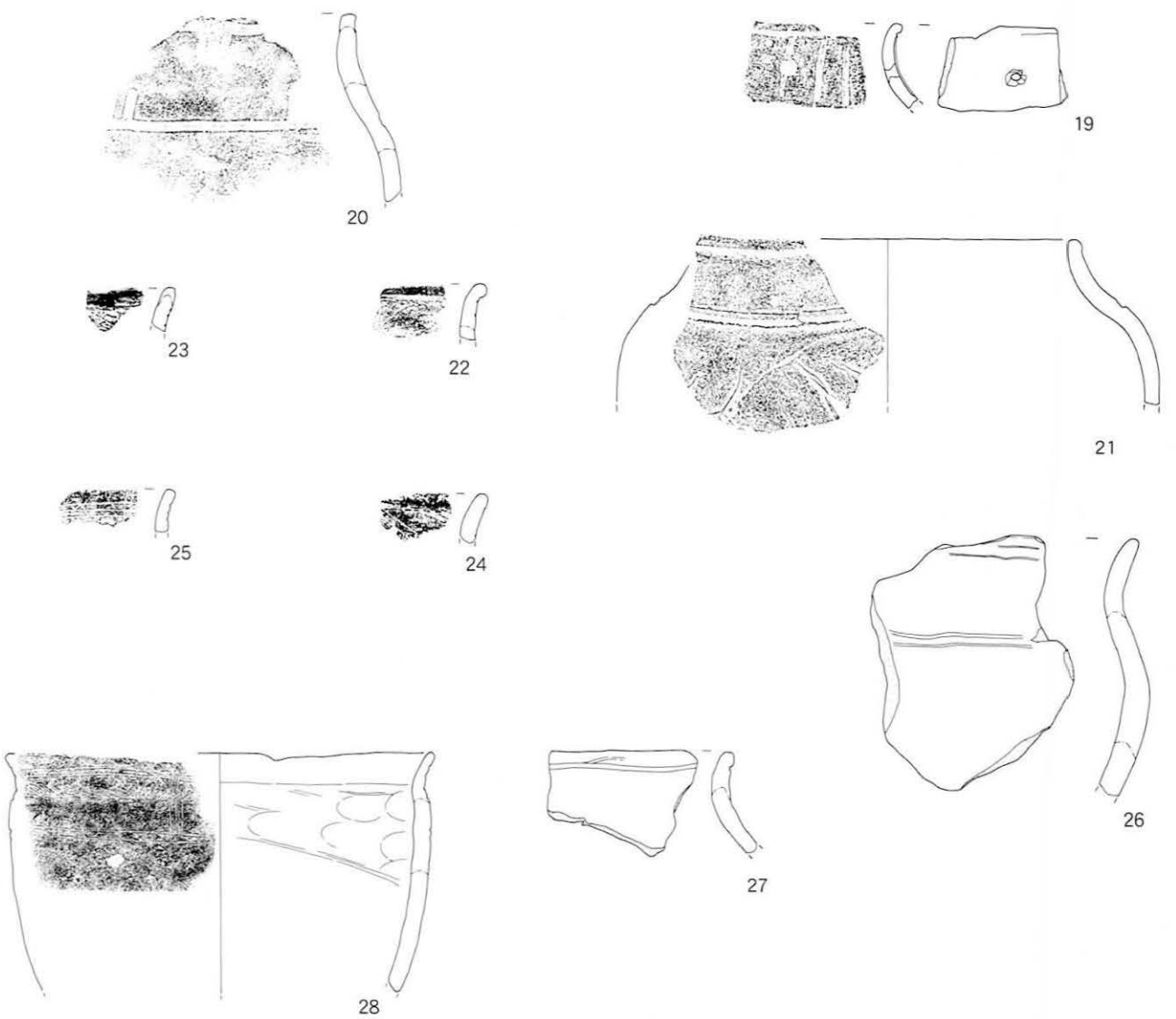
21は口縁部がすぼまり、肩部で大きく張る。口唇部は方形を呈し、その直下の粘土を削り取ることで有段状を形成する。肩部には四㎜幅の沈線を施す。器面調整では、外面が特に九州の縄文晩期土器を思わせるような磨きがみられる。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径一六・八㎝。す－102Ⅲ層出土。嘉門貝塚B（注4）で類似資料が出土。

4群　沈線文

22は口唇部が隅丸方形を呈し、口縁部は外反するものと思われる。器種は不明。口縁部直下に沈線による羽状文を横位沈線で区画する。胎土は砂質で、焼成は良好。し－101Ⅲ層出土。

23は口唇部が丸みを帯び、口縁部は外反するものと思われる。文様は22と同様に羽状文を施す。胎土は砂質で、焼成は良好。し－101Ⅲ層出土。

24は口唇部が方形を呈し、口縁部は外反するものと思われる。文様は口縁部直下に横位沈線を一条、その下に右方向へ



第3図　18類押し引き文：19～21　沈線文：22～28

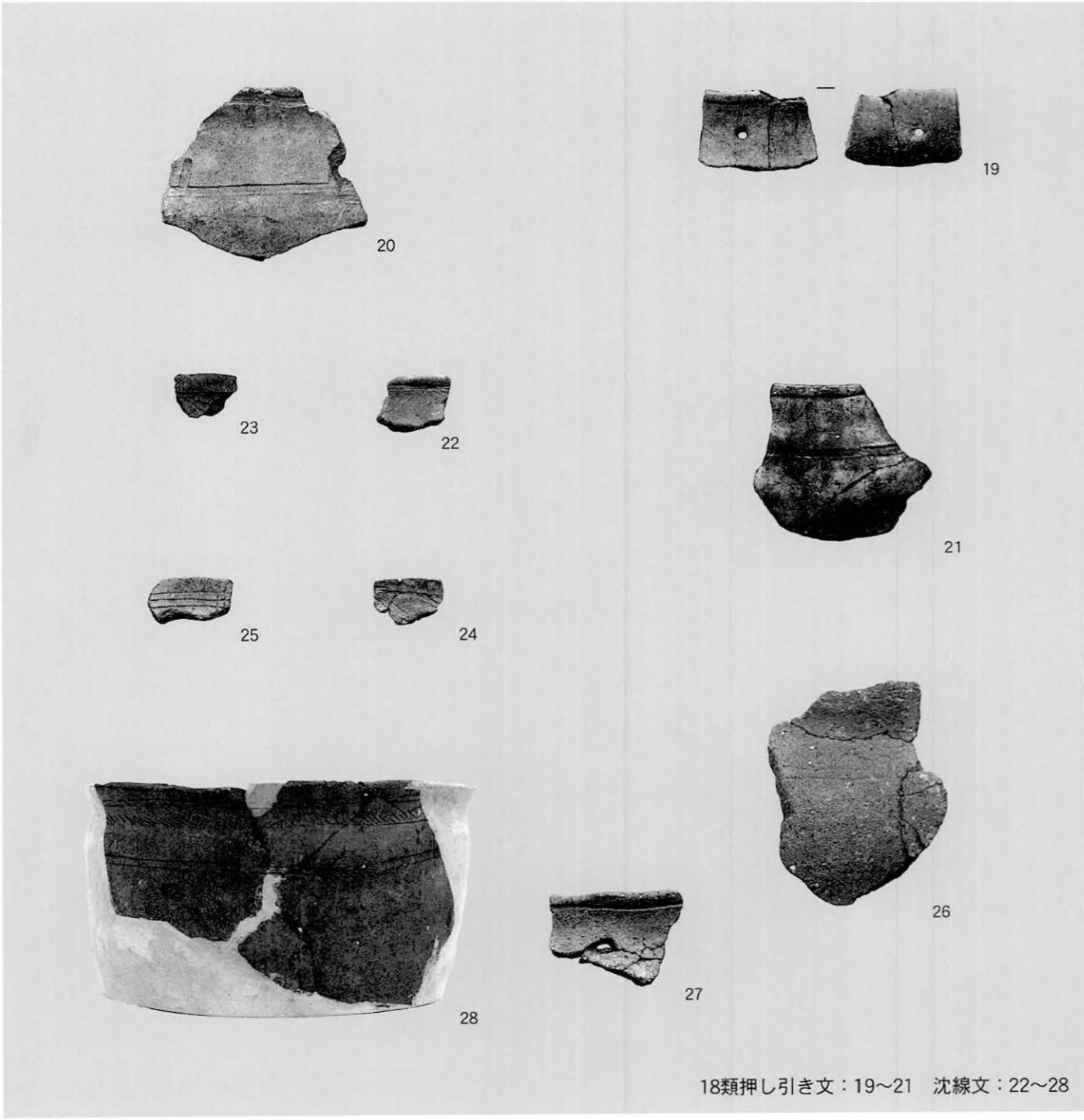
斜沈線を施し、羽状文になると思われる。23と色調および器面調整が類似することから同一個体である可能性が高い。胎土は砂質で、焼成は良好。し－102Ⅲ層出土。

25は口唇部が方形を呈し、口縁部は外反するものと思われる。口唇部から口縁部へかけて縦位沈線を二条、口縁部と平行して横位沈線を三条施す。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－99Ⅲ層出土。

26は口唇部が舌状を呈し、口縁部は外反し、胴部が張り出す。口縁部直下および肩部に二条一組の横位沈線を施すが、摩耗が著しいためにルーズな文様となっている。胎土は砂質で、焼成はやや不良。し・す・せ－92Ⅲ層出土。

27は口唇部が舌状を呈し、口縁部は僅かに外反する。口縁部直下に二㎜幅の横位沈線を施す。胎土は砂質で、焼成は良好。た－92Ⅲ層出土。

28は口唇部が舌状を呈し、口縁部は外反し、頸部で僅かにくびれ、胴部は張りださない深鉢形となる。口縁部直下より胴上部にかけて三条一組の縦位沈線を描き、頸部および胴上部に二条一組の横位沈線を施し区画する。さらに区画内には一条の横位沈線を描き、沈線上から短い斜沈線を施す。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は一八・八㎝。器面調整は丁寧になされ、混入物としては砂粒のみである。そ－99Ⅲ層出土。



18類押し引き文：19～21　沈線文：22～28

（2）19類土器

本土器は、読谷村字座浜屋原の浜屋原貝塚C点出土土器を標識とする（注5）。胎土は砂質を主体とするが泥質もしくは砂泥質もみられ、器面調整は外面がナデにより比較的丁寧になされるが、内面は指頭圧痕が残るのを特徴とする。有文土器はわずかにみられるのみで、主体は無文土器である。分類の対象としたのは三六五点で、無文土器三三五点、有文土器三〇点である。器種は壺形と深鉢・甕形の二種が見られ、前者が一二点、後者が三五三点である。以下、各特徴について述べる。

無文土器

壺形（第4図29～34）

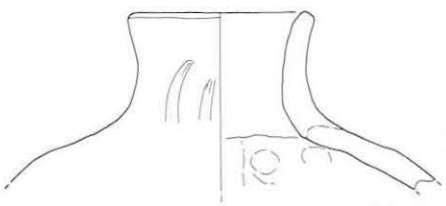
29は口唇部が丸みを帯び、口縁部が強く外反し、ラッパ状に広がる。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は七・四㎝。せ－92Ⅲ層出土。

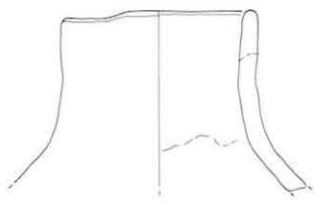
30は口唇部が丸みを帯び、口縁部は直口し、頸が長く、なで肩になる。器面調整は両面ともナデにより行われるが、外面は丁寧であるが、内面は雑である。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径七・八㎝。さ－99Ⅲ層出土。

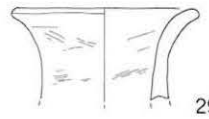
31は口唇部が方形を呈し、口縁部は弱く外反し、肩部で大きく膨らみ胴部へいたる。焼成は堅緻である。胎土は砂質で、焼成は堅緻。推算口径は七・三五㎝。た－91・92Ⅲ層出土。

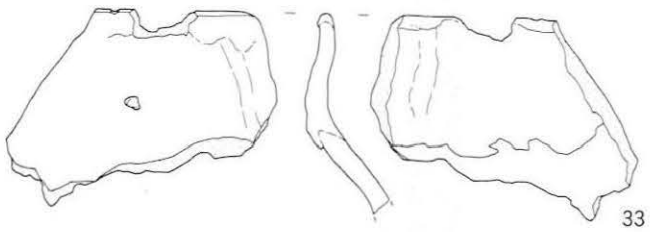
32は口唇部が方形を呈し、口縁部は強く外反し、ラッパ状に広がる。器面調整は両面とも工具による調整後、ナデ仕上げを施すが、あまり丁寧ではない。胎土は泥質で、焼成は良好。ち－94・95Ⅲ層出土。

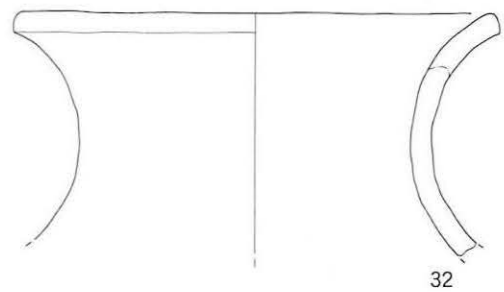
33は口唇部が隅丸方形を呈し、口縁部

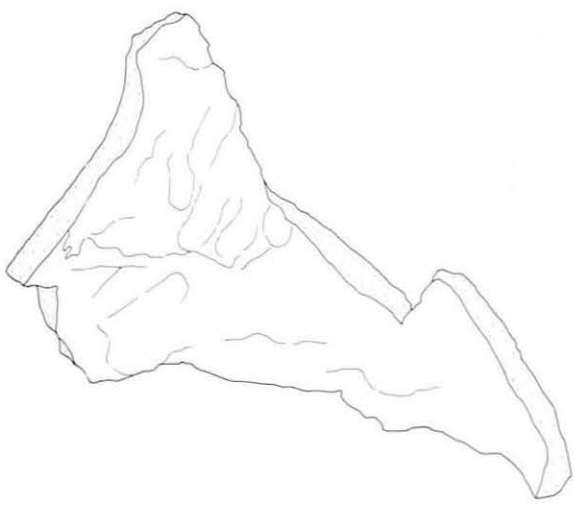

31

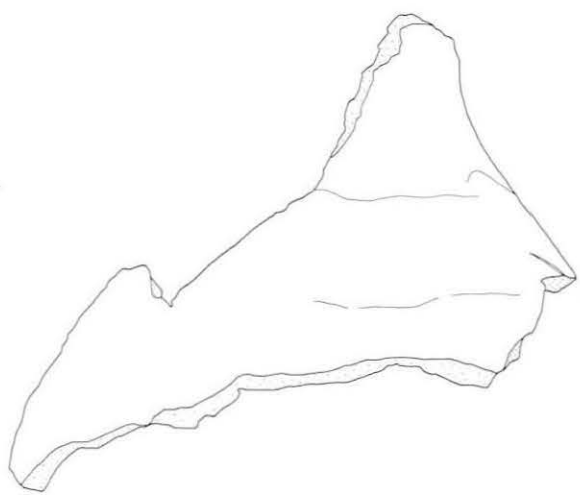

30

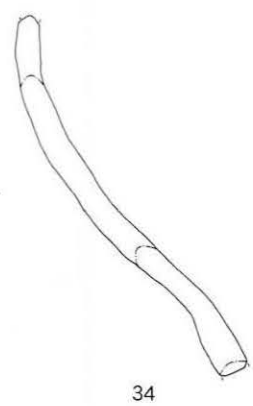

29


33


32



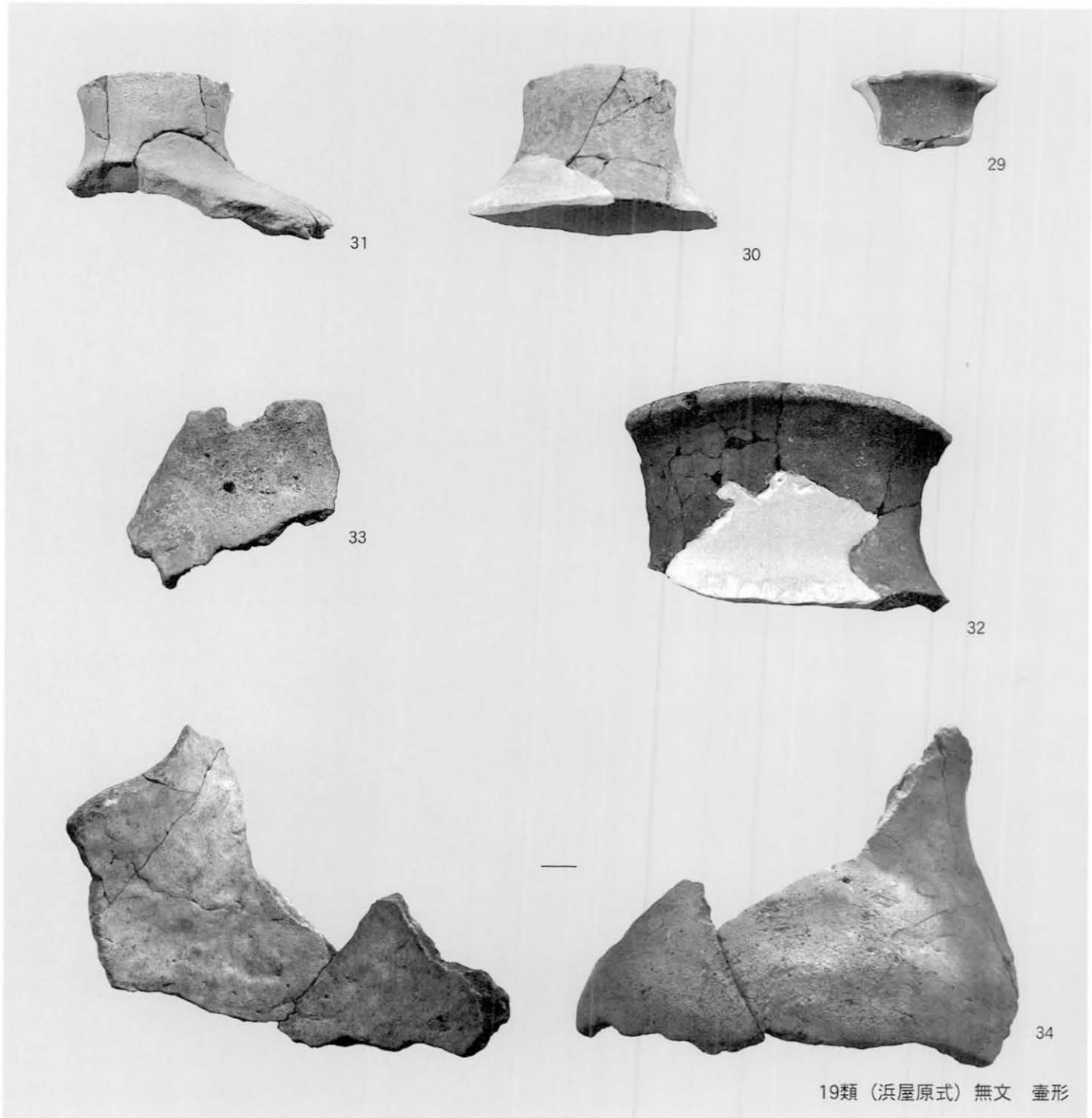



34

第4図　19類（浜屋原式）無文　壺形

は直口し、肩部から胴部へ大きく膨らむ。器面調整は両面ともナデによるが、内面の輪積み接合部は調整されずにそのまま残る。胎土は泥質で、焼成は良好。こ－95かく乱層出土。

34は口縁部が僅かに欠損する資料である。口縁部から胴部へかけてなだらかに流れ、なで肩状になる。器面調整は両面ともナデによるが、内面は指頭圧痕が顕著である。胎土は泥質で、焼成は良好。た－94Ⅲ層出土。



19類（浜屋原式）無文　壺形

深鉢形・甕形（第5図35～42・第6図43～47）

35は口唇部が舌状を呈し、口縁部は外反し、胴部は張らない器形となる。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は二五・六cm。そ－92Ⅳ層より出土。

36は口唇部が方形を呈し、口縁部は外反し、頸部でくびれ、胴部は僅かに膨らむ。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は二二・二cm。ち－98Ⅳ層出土。

37は口唇部が方形を呈し、口縁部は弱く外反し、胴部へ向けてS字状になる。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は二五・四cm。そ－93・97Ⅲ層出土。

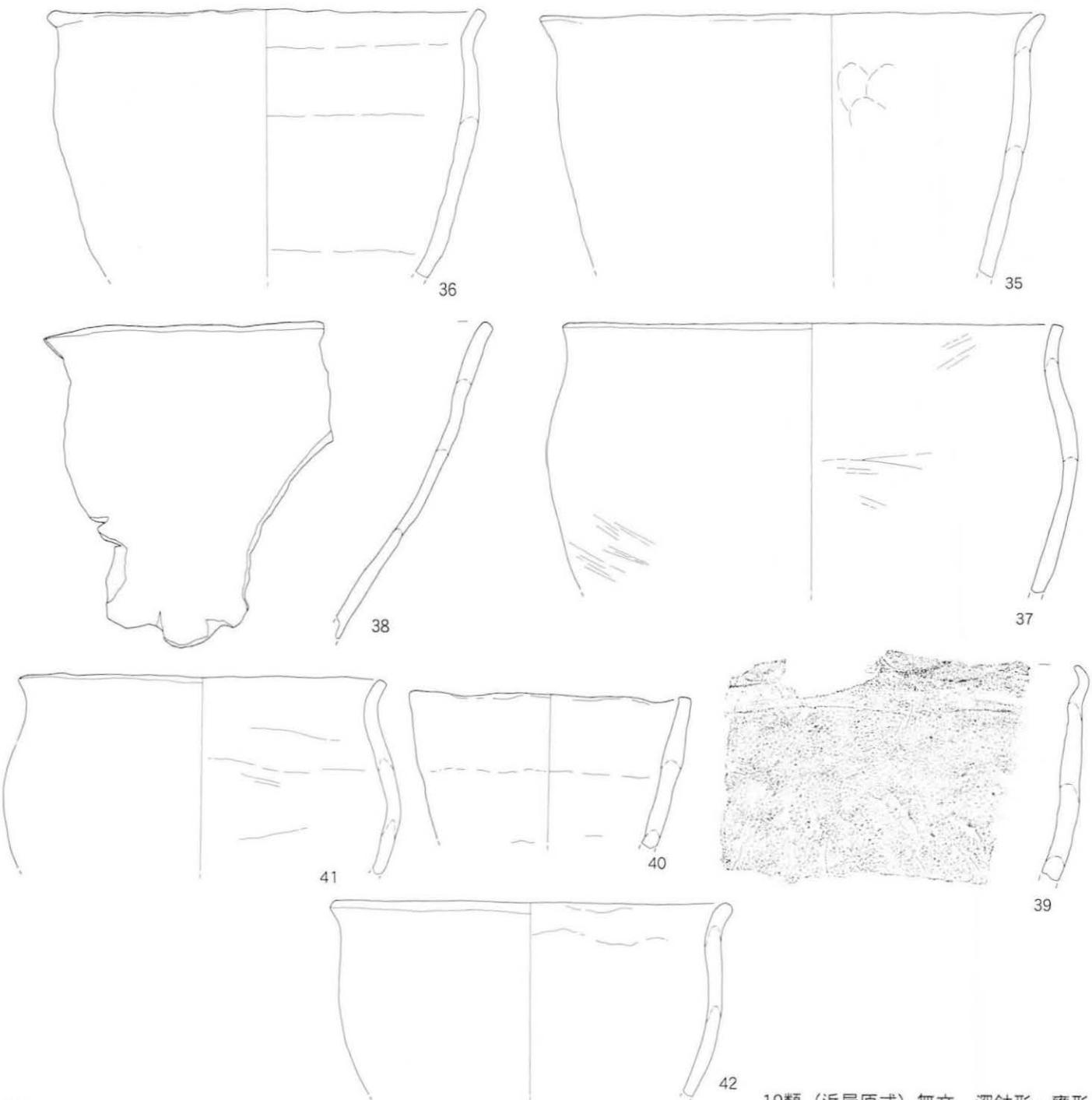
38は口唇部が方形を呈し、口縁部から胴部へかけて傾斜する器形となる。胎土は泥質で、焼成はやや良好。そ－92Ⅲ層出土。

39は口唇部が舌状を呈し、口縁部はキャリパー状に内湾する。口縁部は作りが雑で、若干波打つ。器面調整は両面とも工具およびナデによりなされるが、内面では指頭圧痕が顕著である。胎土は砂泥質で、焼成は堅緻。さ－100Ⅱ層出土。

40は口唇部が方形を呈し口縁部は直口し、ストレートに胴部へいたる。小型の碗形に属すると思われる。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は一四・二cm。ち－94Ⅲ層出土。

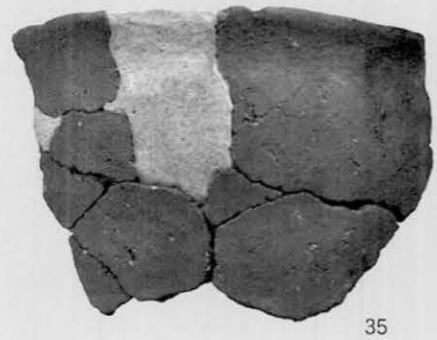
41は口唇部が方形を呈し、口縁部は強く外反する。頸部で僅かにくびれ、胴部が張りだし、最大径は胴部にある。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は一八・六cm。ち－94Ⅲ層出土。

42は口唇部が若干丸みを帯びた方形を呈する。口縁部は弱く外反し、胴部はあまり張らず、ゆるやかなS字状になる。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は二〇・四cm。た－94Ⅲ層出土。



第5図　19類（浜屋原式）無文　深鉢形・甕形

36


35

38

37

41

40

39

42

19類（浜屋原式）無文　深鉢形・甕形

43は口唇部が丸みを帯び、口縁部は外反する。胴部は張らない器形になると思われる。器壁が一〇㎜と厚く、重量感のある土器である。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－91Ⅲ層出土。

44は口唇部がやや丸みを帯びた方形を呈する。口縁部は僅かに外反し、ストレートに胴部へいたる。器壁は口縁で七㎜、胴部で十一㎜となり厚手の土器である。胎土は泥質で、焼成は良好。そ－91Ⅲ層出土。

45は口唇部がやや丸みを帯びた方形を呈する。口縁部は外反し、頸部でくびれ、胴部が僅かに張り出す。口縁部直下に孔を穿つ。混入物の石英・長石が器表面に露出する。胎土は砂質で、焼成はやや不良である。つ－92Ⅲ層出土。

46は口唇部が方形を呈し、口縁部は外反する。頸部がくびれ、ストレートに胴部へいたる。胎土は泥質で、焼成は良好。そ－96Ⅲ層出土。

47は口唇部が方形、丸状、舌状と形態が不安定である。口縁部は外反し、頸部で僅かにくびれ、胴部へいたる。口縁部直下に孔を穿つ。胎土は泥質で、焼成は良好。ち－94Ⅲ層出土。

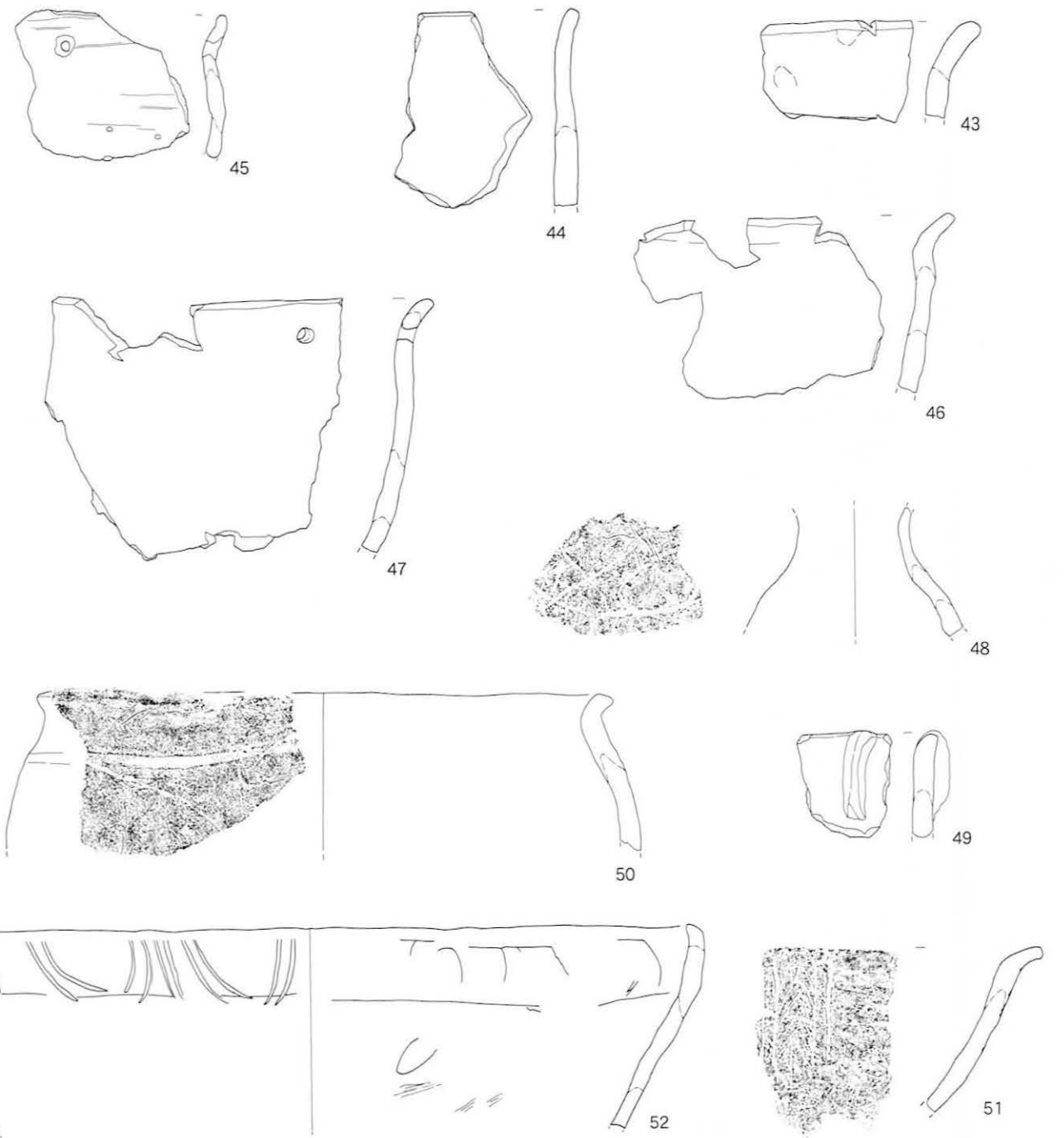
有文土器

壷形（第6図48）

48は口縁部が欠損する。頸部が強くすぼまり、ゆるやかに胴部へいたる。細沈線により斜線および曲線が施文される。胎土は砂質で、焼成は良好。頸部の推算径は五・二㎝。さ・し－92・93Ⅳ層出土。

深鉢・甕形（第6図49～52）

49は口唇部が舌状を呈し、口縁部は直口する。口唇部から、四㎝の縦状の外耳を貼付ける。器面調整は両面ともナデに



19類無文　深鉢形・甕形43～47
有文　壷形48　有文　深鉢形・甕形49～52

第6図

よるが、内面は外面よりも雑である。内面には混入物である大粒の千枚岩が露出している。胎土は砂質で、焼成は良好。ち－94Ⅲ層出土。

50は口唇部が方形を呈し、先端部は部分的に舌状になる。口縁部は外反し、胴部が張りだし、最大径は胴部にある。肩部に二本の稜線がみられるが、沈線状を呈している。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は二七・四㎝。し－95Ⅳ層出土。

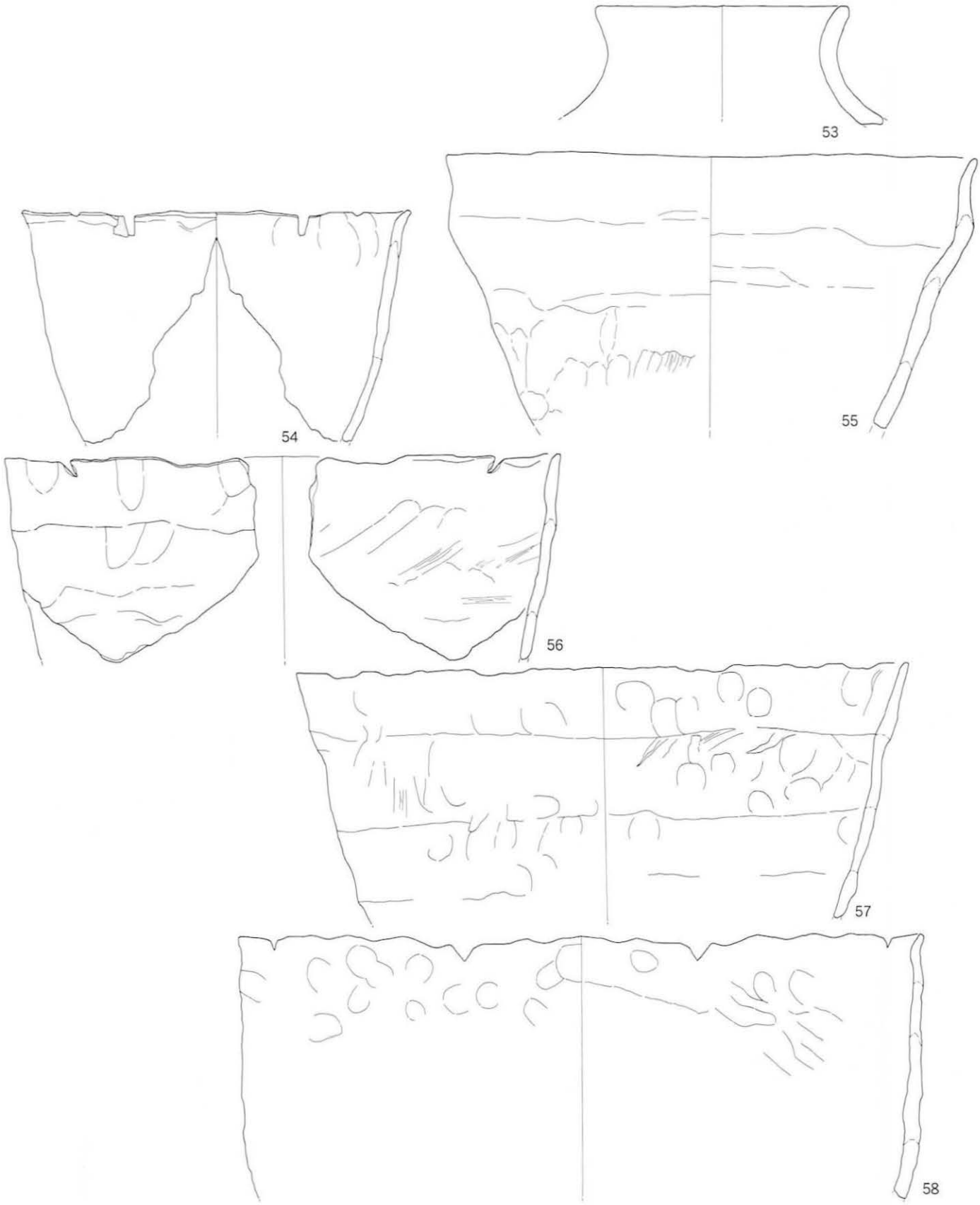
51は口唇部が隅丸方形を呈し、口縁部は外反する浅鉢形になると思われる。口唇部先端から沈線による縦位の羽状文、その両側に縦位沈線を施す。胎土は泥質で、焼成は良好。た－94Ⅲ層出土。

52は口唇部が方形を呈し、内面に突出する部分がみられる。口縁部はキャリパー状に内湾し、外面には稜がみられる。口唇部先端から稜の部分まで、二条一組の沈線文で曲線を描く。曲線文は対になり対応する部分と、その間を斜沈線で描く箇所がみられる。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は三七・四㎝と大型の甕になると思われる。こ・さ－97かく乱層出土。

(3) 20類土器

本土器は読谷村字波平の大当原貝塚出土土器を標識とする(注6)。土器内外面に製作時の粘土接合部や指頭圧痕が多く残ることを最大の特徴とする。無文土器を主体とするが、文様の種類が弥生～平安時代並行期のなかでは、多く複雑である(注7)。分類の対象は、三〇七点で、その内、無文土器一四六点、有文土器一六一点である。器種は壺形と深鉢・甕形の二種が見られ、前者は四点、後者が三〇三点である。以下、各特徴について述べる。

19類無文　深鉢形・甕形43～47
有文　壺形48　有文　深鉢形・甕形49～52



20類（大当原式）無文　壷形53
無文　深鉢形・甕形54～58

第7図

無文土器

壷形（第7図53）

53は口唇部が丸みを帯び、口縁部は強く外反し、肩の張る器形となる。器面調整は内外面ともナデによるが、内面は凹凸が顕著である。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は一四・二cm。ち－98Ⅲ層出土。

深鉢形・甕形（第7図54～58、第8図）

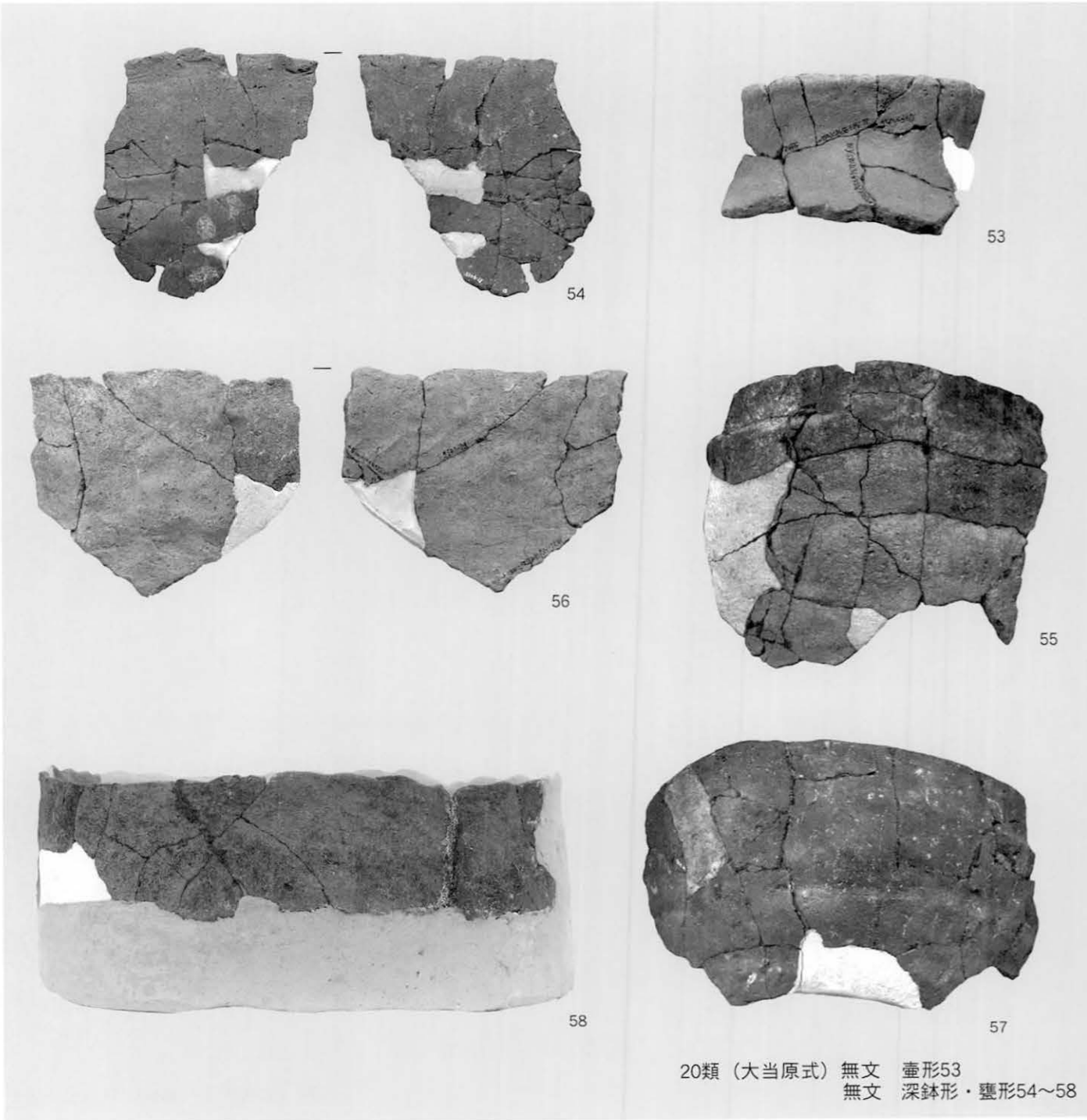
54は口唇部が舌状で内面に弱い稜がみられる部分と丸みのある方形を呈する部分がみられる。口縁部は弱い外反を示し、胴部までほぼ直線にのびる。胎土は泥質で、焼成はやや不良。推算口径は二〇cm。さ・し－92Ⅲ層出土。

55は口唇部が舌状を呈し、口縁部は弱く外反する。二段の輪積み接合部で屈曲し、断面では波打つようにみえる。胎土は泥質で、焼成は堅緻。推算口径は二九・七cm。第18図170の平底と一括出土。こ－99Ⅳ層出土。

56は口唇部が舌状を呈し、口縁部は直口する。そのまま胴部までほぼ真っ直ぐにのびる。胎土は砂泥質で、焼成は良好。推算口径は三一cm。せ－92Ⅲ層出土。

57は口唇部が舌状を呈し、口縁部は直口するが、全体的に外側に開く形状となる。内外面とも輪積み接合部、指頭圧痕が顕著である。胎土は砂泥質で、焼成は良好。推算口径は三四・二cm。そ－92Ⅲ層出土。

58は口唇部が舌状を呈し、口縁部は直口する。波状口縁ともみられるが、ナデ調整のために波状を呈していると思われる。胎土は砂質、焼成は良好。推算口径は三一cm。せ－91・92Ⅲ層出土。



20類（大当原式）無文　壷形53
無文　深鉢形・甕形54～58

59は口唇部が丸みを帯び、口縁部は直口する。混入物の石灰質砂粒が抜け落ちたためか所々に孔がみられる。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は二三・一cm。せ－91・92Ⅲ層出土。

60は口唇部が丸みのある方形を呈し、口縁部は直口する。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は三七cm。す－92Ⅲ層出土。

61は口唇部のほとんどが方形を呈し、一部舌状を呈する。口縁部は直口し、弱く波打つ。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は二六・六cm。せ－92Ⅳ層出土。

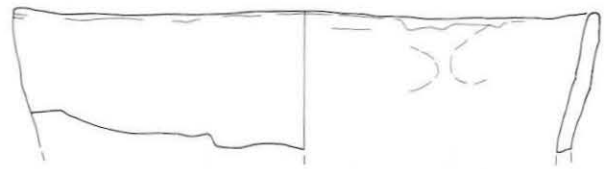
62は口唇部が舌状を呈し、口縁部は直口する。口縁部から肩部までは直立し、そこから屈曲し胴部へ直線的に伸びる。胎土は砂泥質で、焼成はやや良好。推算口径は二二・三cm。せ－92Ⅲ層出土。

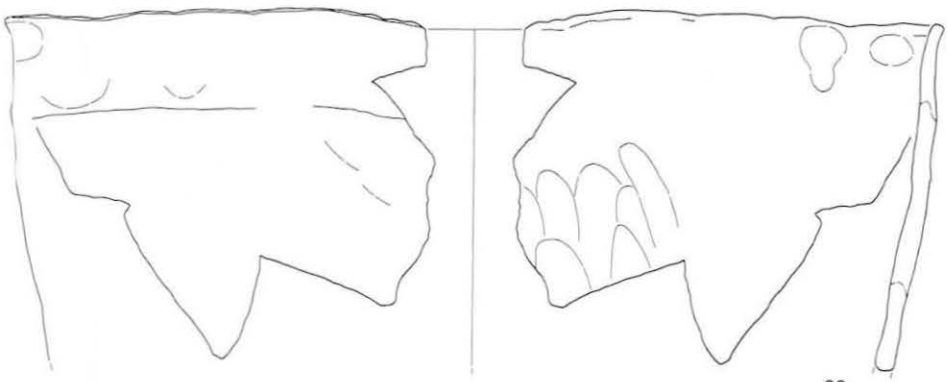
63は口縁部から底部までの全形を窺える資料である。口唇部が丸みを帯び、口縁部は直口する。頸部は僅かにくびれ、内面にみられる輪積み接合部で屈曲し、底部にいたる。底部形態は尖底である。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は八・五cm。つ－92Ⅲ層出土。

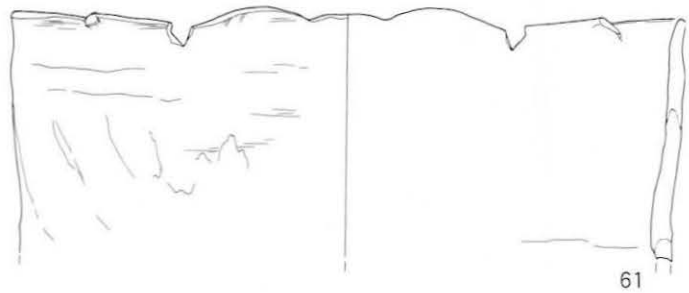
64は全形を窺える小型の深鉢形土器である。口唇部が舌状を呈し、口縁部は直口し、胴下半までほぼストレートにながれ、胴下半で隆起するがそこから底部にゆるやかにいたる。底部は乳房状尖底となる。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は一一・九cm。ち－95Ⅲ層出土。

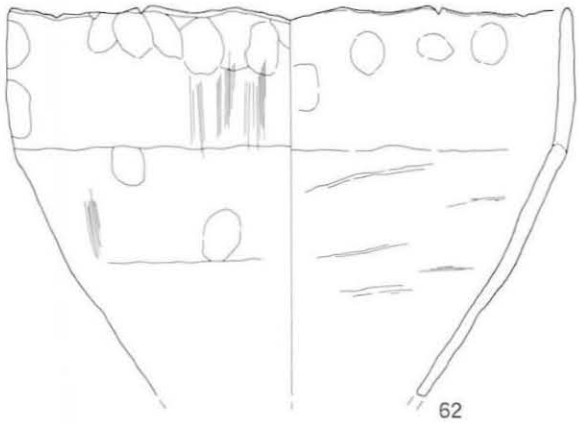
65は口唇部が丸みを帯び、口縁部は直口する浅鉢形土器になると思われる。口唇部から肩部まで直立し、そこから弱く屈曲し胴部へいたる。胎土は泥質で、焼成は良好。そ－91・92Ⅲ層出土。

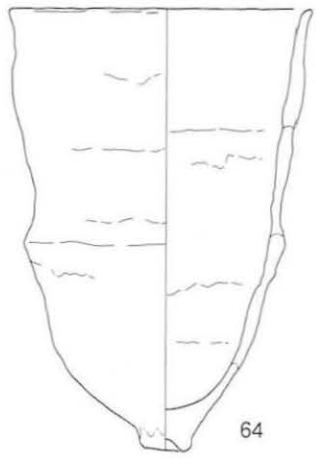
66は口唇部が舌状を呈し、口縁部は直口するが、口縁部内面はキャリパー状に

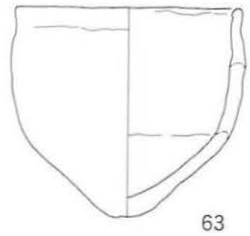

59

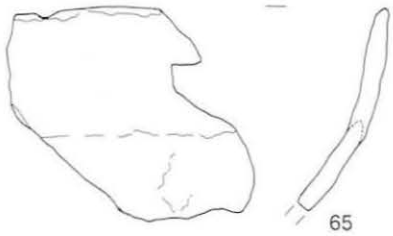

60

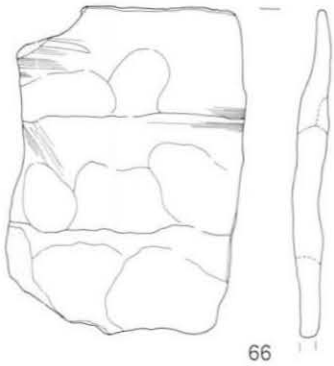

61


62


64


63

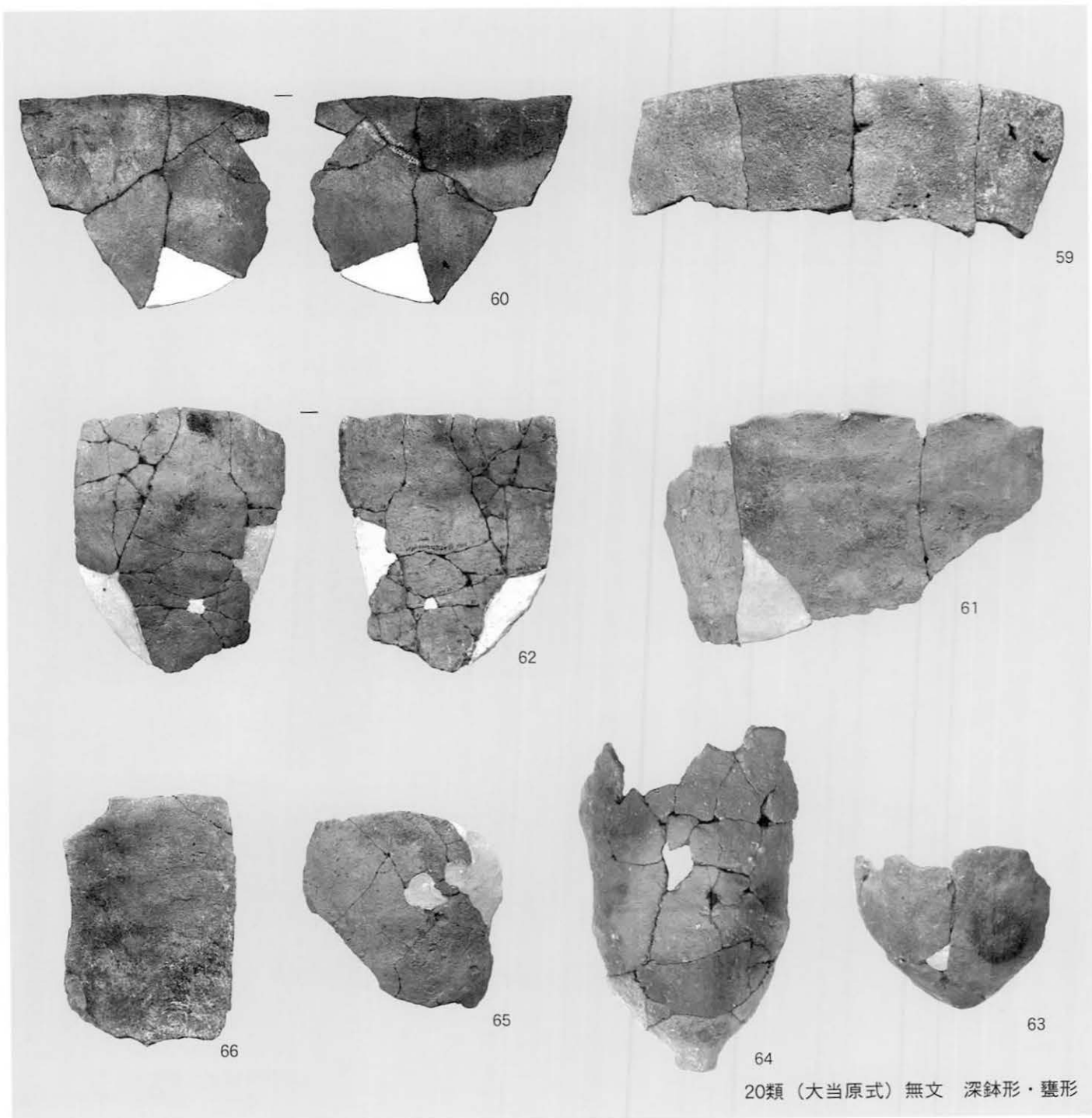

65


66

第８図

20類（大当原式）無文　深鉢形・甕形

僅かにくぼむ。胎土は泥質で、焼成は良好。せ－91・92Ⅲ層出土。



20類（大当原式）無文　深鉢形・甕形

有文土器（第9図～13図）

有文土器は文様構成により以下のように分類を行った。

1群　突帯文
2群　押し引き文
3群　沈線文
4群　口唇施文

1群　突帯文

壷形（第9図67・68）

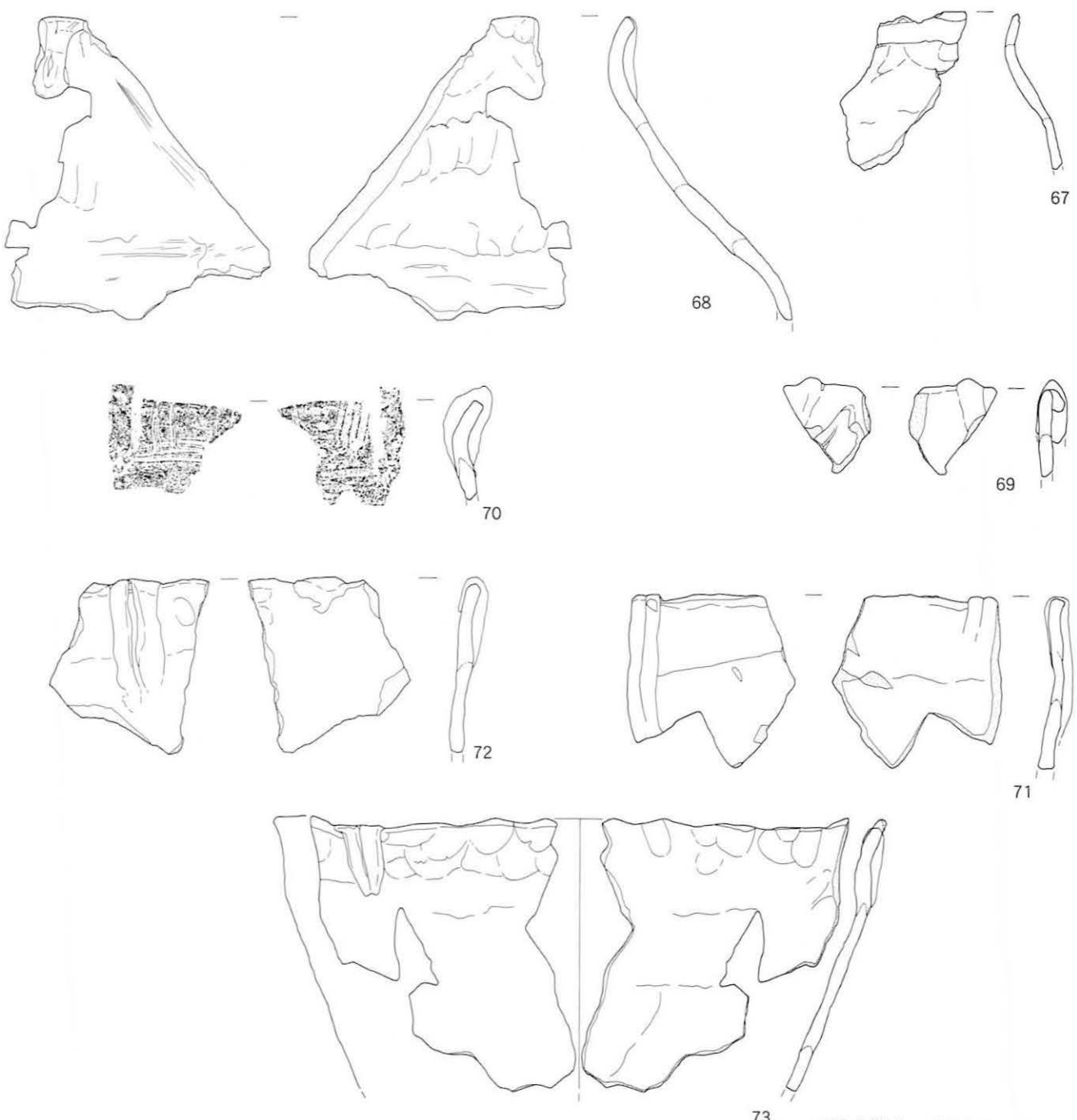
67は口唇部が丸みを帯び、口縁部は外反する。口唇直下に幅の広い突帯文を貼付ける。口縁部は上部からの平面形が楕円となり注ぎ口があった可能性もあると思われる。突帯から胴部にかけてあまり膨らまず、ゆるやかである。胎土は泥質で、焼成は良好。ち－94Ⅳ層出土。

68は口唇部に鞍状突帯文を張付けるが、内面の突帯はつぶされ平坦になされる。突帯は元々二本の帯をつけ、それを一つにまとめているものと思われる。口縁部は僅かに外反し、やや胴部が張る器形となる。胎土は砂質で、焼成は堅緻。そ－91・92Ⅲ層出土。

深鉢形・甕形（第9図69～73、第10図74～81、第11図82～88、第12図89～96、第13図97～103）

69は口唇部が舌状を呈し、直口する口縁部に貼付突帯文を施す。突帯は馬蹄形のものと口唇内面にも及ぶ鞍状突帯の二種を貼り付ける。胎土は砂質で、焼成はやや良好。せ－92Ⅲ層出土。

70は口唇部が方形を呈し、口縁部は強く外反し、屈曲する。口縁部に太い鞍状突帯を貼付ける。外面の口唇部先端から口縁部にかけて縦位の沈線を、その下方に横位の沈線を施す。内面は口唇部先端からやや斜め方向の沈線文を施す。外面



20類突帯文　壷形67・68
突帯文　深鉢形・甕形69～73

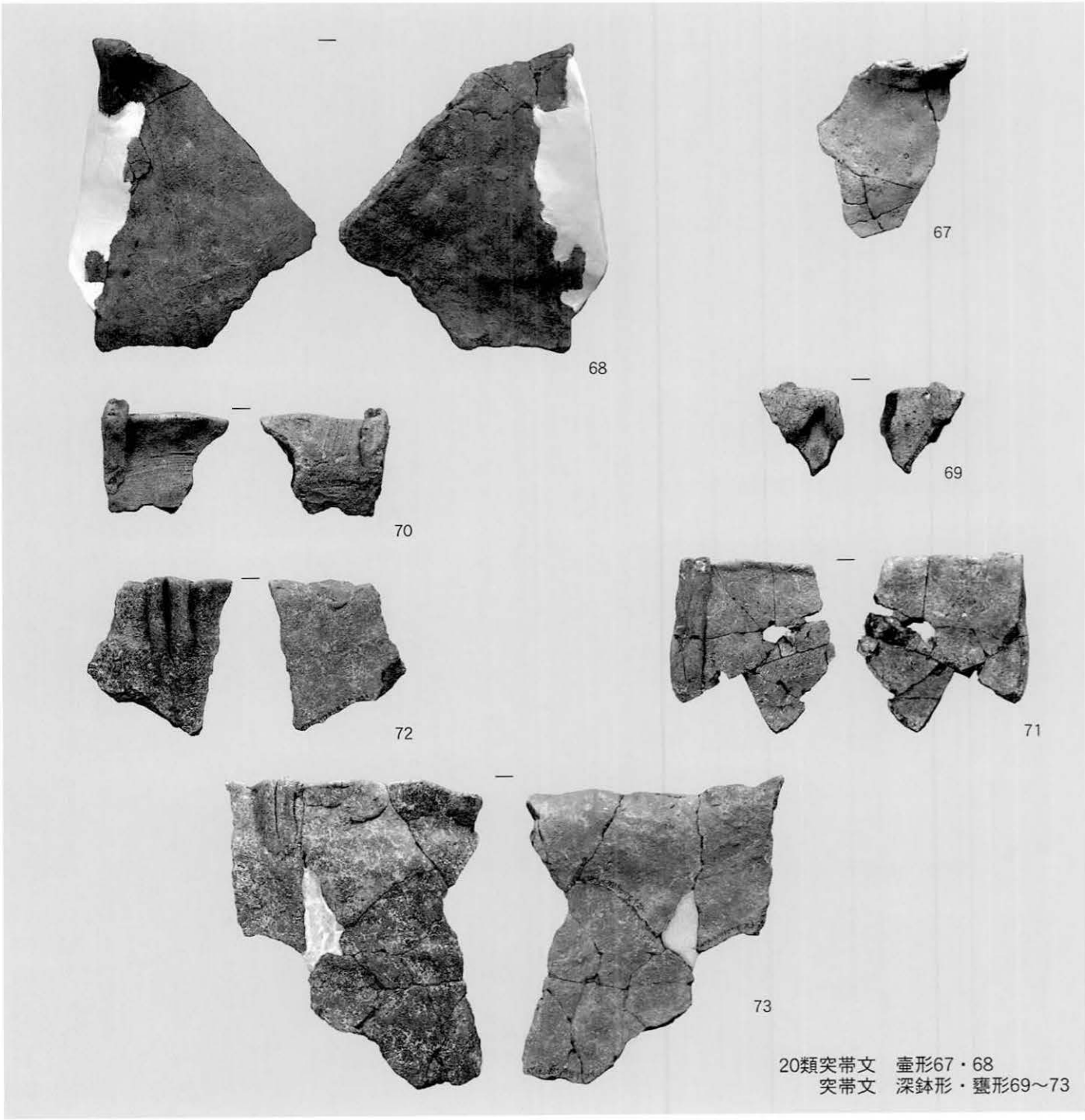
第9図

の文様は浅いが、内面は深いものとなる。胎土は泥質で、焼成は良好。た－97Ⅲ層出土。

71は口唇部が方形を呈し、口縁部は直口する。口唇部先端は粘土を折り曲げ、肥厚を意識したと思われる。口縁部には二本一組の断面方形の鞍状突帯を貼付け、口唇部をまたいで内面まで及ぶ。胎土は泥質で、焼成は堅緻。さ－92・93Ⅳ層出土。

72は口唇部が丸みを帯び、口縁部は直口する。口縁部には鞍状突帯を貼り付けるが、外面では二本、内面では一本になる。胎土は泥質で、焼成は堅緻。せ－91Ⅲ層出土。

73は口唇部の粘土を外側に折り曲げ、舌状に成形する。口縁部は外反し、頸部で僅かにくびれ、肩部が張り、胴部は直線的にのびる。口縁部には二本一組の鞍状突帯を貼り付ける。器面調整は内外面とも指頭圧痕が残り、雑な作りとなっている。胎土は泥質で、焼成は堅緻。推算口径は二九・四㎝。せ－91Ⅲ層出土。



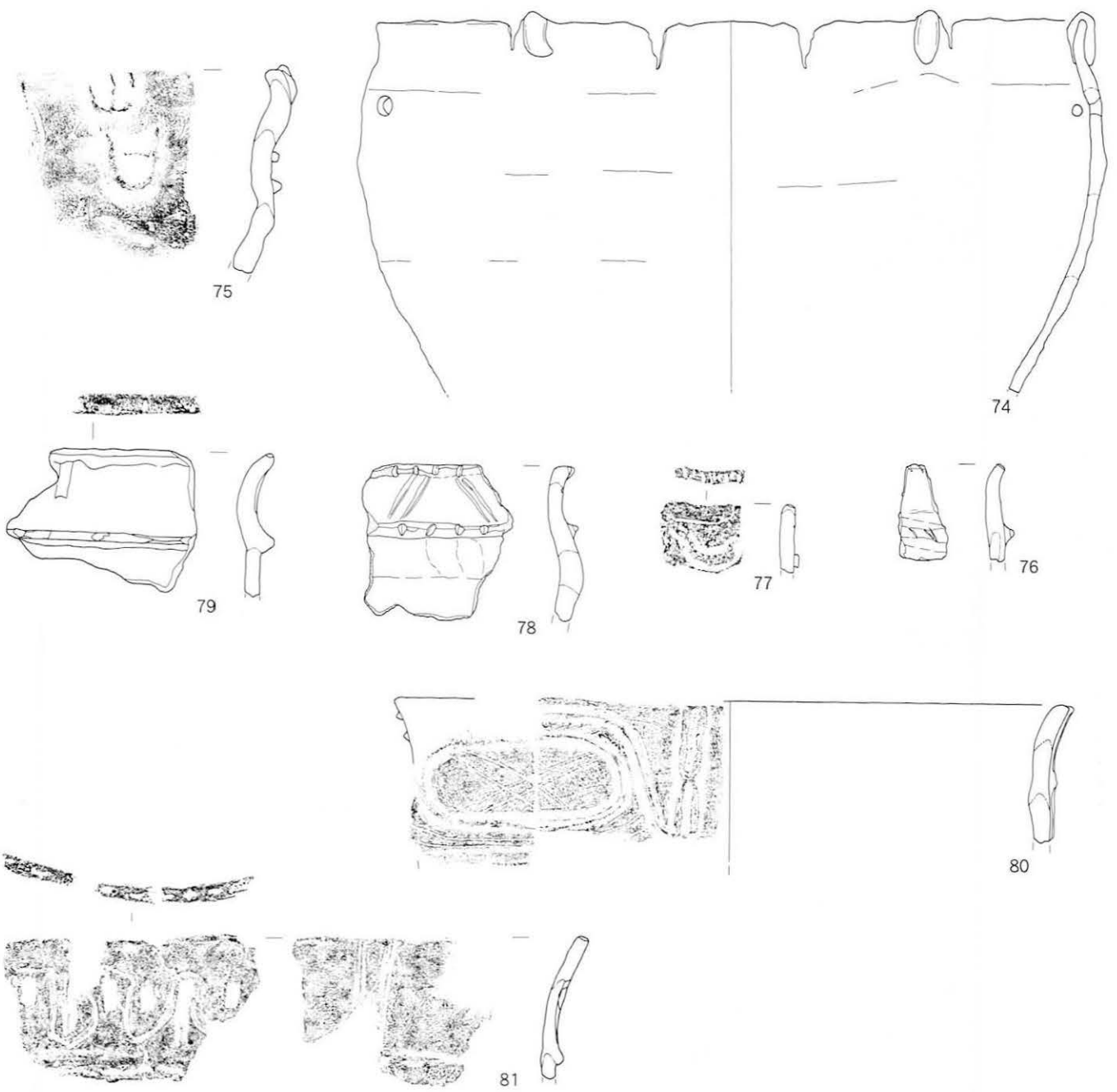
74は口縁部から胴下半部までの器形が窺える資料である。口唇部が舌状を呈し、口縁部は弱く外反し、胴部が膨らむ器形となる。口唇部に鞍状突帯は二個貼付け、推算口径が三四・四cmとなることから、本来突帯は五個貼付けたと思われる。胴上部には一つの孔を穿つ。上部からみた口縁の平面形は楕円となる。胎土は砂質で、焼成はやや良好。す－92Ⅲ層出土。

75は口唇部が方形を呈し、内面に若干突出する。口縁部はキャリパー状に内湾し、口縁部から胴部へ波打つように曲がり、内面では特に目立っている。口唇から口縁にかけて三叉鍬状の突帯を貼付け、その下部のくびれた頸部に、逆A字状の突帯を貼付ける。両突帯の周りに調整と文様を兼ねてか、沈線文による縁取りを施す。左端にも同様の突帯が貼付けられたと思われるが、破損のため詳細は不明である。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－90かく乱層出土。

76は口唇部が方形を呈し外反し、胴部まで直線的にのびる。口縁部三cm下方には断面三角突帯を貼り付ける。口唇および突帯には深く鋭い刻みがみられる。胎土は泥質で、焼成は良好。し－99・100Ⅳ層出土。

77は口唇部が方形を呈し、口縁部は直口する。口唇部に刻目を施し、口縁部直下にはやや波打つ沈線文、その下方にU字状の細い突帯を貼り付ける。胎土は砂質で、焼成はやや良好。た－94Ⅲ層出土。

78は口唇部が方形を呈し、口縁部は直立し、胴上部で屈曲しS字状の器形となる。口唇の外面先端部に断面三角形の突帯を貼り付け、三cm下方にも同様の突帯を貼り付ける。突帯上には刻み目が施され、突帯間には二本一組の「ハの字」状の沈線文がなされる。胎土は砂質で、焼



第10図　20類突帯文　深鉢形・甕形

成はやや良好。す－92Ⅲ層出土。

79は口唇部が舌状を呈し、口縁部は強く外反し、断面三角突帯下より直線的に胴部にいたる。口縁部直下から縦位の不鮮明な沈線文が施され、口唇部には間隔の広い刺突文が施される。胎土は砂質と泥質の中間で、焼成は良好。せ－92Ⅲ層出土。

80は口唇部が方形を呈し、口縁部は弱く外反するが、胴部までは直線的にのびる。断面三角突帯によって曲線が描かれ、その後、細沈線によってクロス状文と曲線文がほどこされる。胎土は砂質で、焼成は良好。さ・し－92・93Ⅳ層出土。

81は口唇部がやや丸みを帯びた方形を呈し、口縁部はゆるやかに外反し、肩部あたりで耳たぶ状に肥厚する。口唇部は刺突文が施される。口縁部には幅五㎜の短・長それぞれの縦位押引き文を施文し、その間を浅い沈線文による曲線を描く。内面には浅い縦位沈線を二本施文する。胎土は砂質で、焼成は良好。せ－94かく乱層出土。

20類突帯文　深鉢形・甕形

82は口唇部が隅丸方形を呈し、口縁部は弱く外反する。口縁部より四㎝下方に三角突帯文を貼付け、口縁部と突帯間に二条一組の幅五㎜の縦位沈線文を施す。口唇部には縦・横位の刺突文を不規則に施す。胎土は砂泥質で、焼成は良好。推算口径は三六・四㎝。す・せ－91・92Ⅲ層出土。

83は口縁部から胴下半部まで残存する資料である。口唇部がやや丸みのある方形を呈し、口縁部は弱く外反する。口唇部には刺突文が、口縁部から四・五㎝下方に横位細沈線文を施し、そこで弱く屈曲する。横位沈線間には刺突がなされた円形の突帯文を二個貼付け、さらに突帯間には幅三㎜の縦位沈線文を三条施す。胎土は泥質で、焼成は良好。器壁は最小四㎜と薄く、重量も軽い。復元可能な土器で、推算口径は三六・六㎝。せ－92Ⅲ層出土。

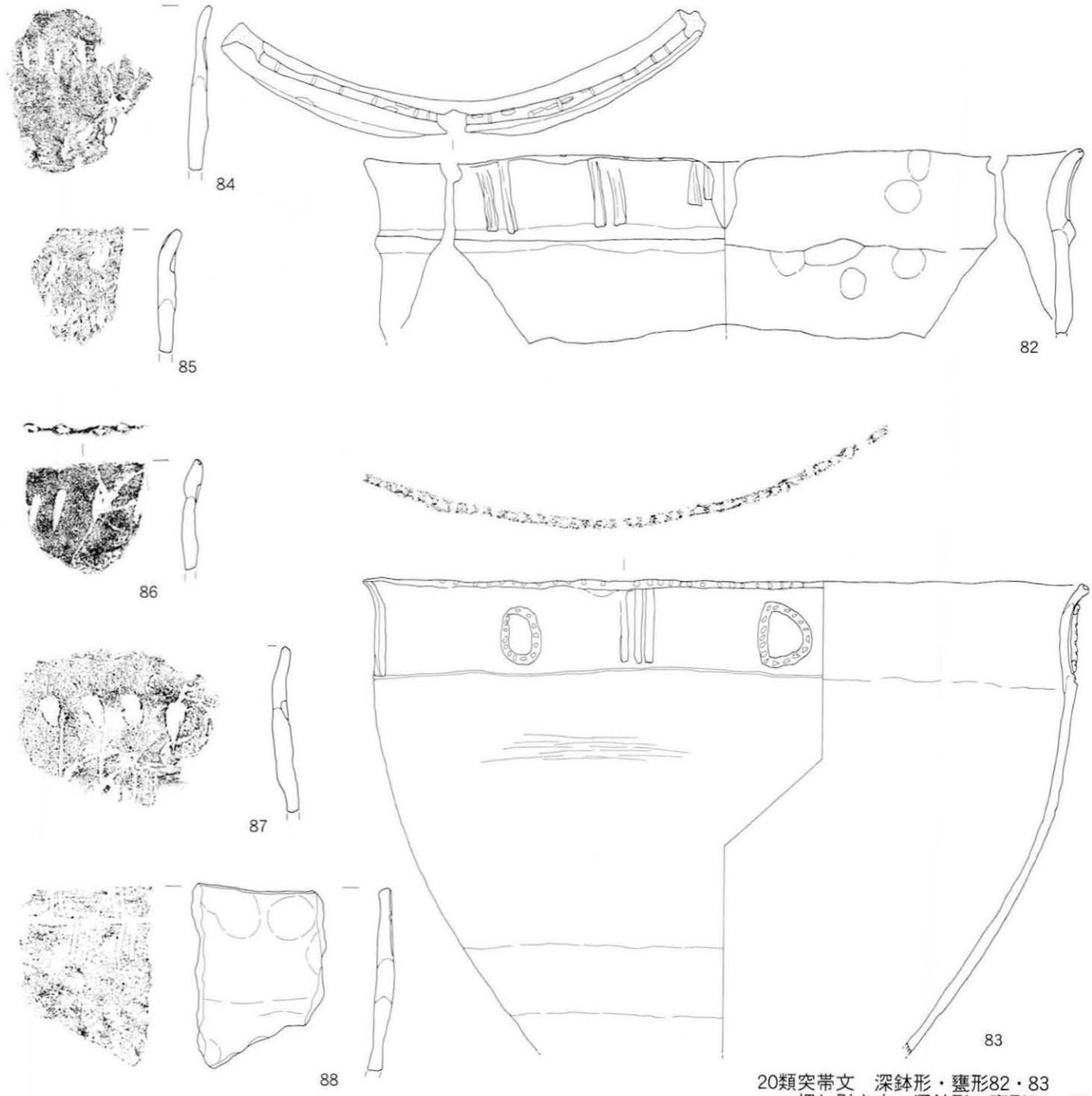
2群　押し引き文

84は口唇部が隅丸方形を呈し、口縁部は口唇部近くで僅かに外反する。口縁部に不規則な押引き文を施す。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－93Ⅲ層出土。

85は口唇部が舌状を呈し、口縁部は直口する。口縁部直下に縦位の幅の狭い押引き文を施文する。胎土は砂質で、焼成は良好。ち－96Ⅲ層出土。

86は口唇部が舌状を呈し、口縁部はやや内湾気味に直口する。口唇部には刺突文がなされ、そのためか波状を呈している。口縁部直下には幅四㎜の押引き文を施文する。胎土は砂質で、焼成は良好。さ－91Ⅲ層出土。

87は口唇部が舌状を呈し、口縁部は弱く外反する。口縁部直下に幅八㎜の深い刺突文を施文する。その直下に縦位の細

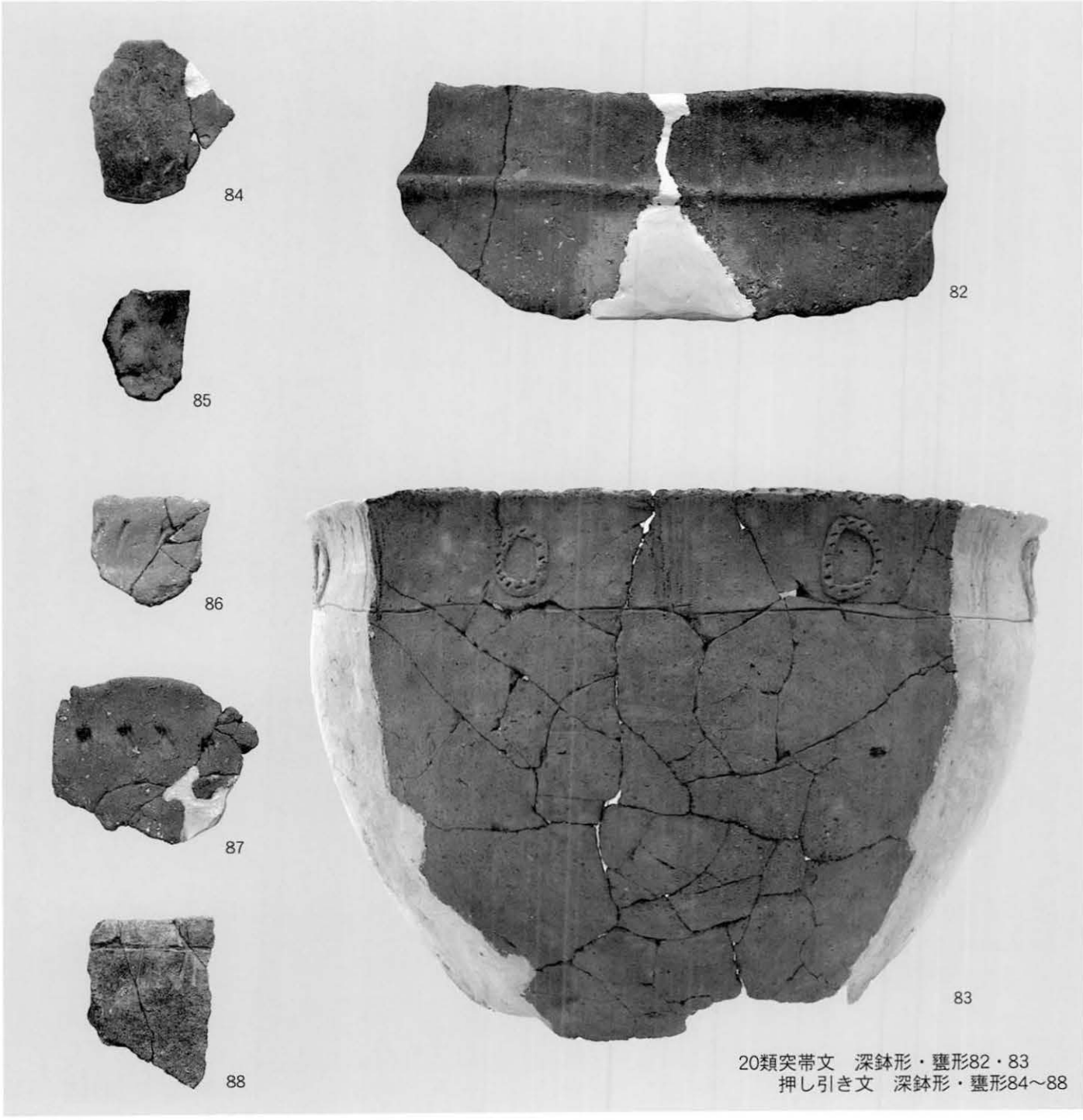


20類突帯文　深鉢形・甕形82・83
押し引き文　深鉢形・甕形84～88

第11図

沈線文を描く。胎土は砂泥質で、焼成は良好。さ－92Ⅲ層出土。

88は口唇部が方形を呈し、口縁部は直口する。口唇から二本一組の縦位沈線を横位沈線一本につなげる。その下方にも同様の二本一組の縦位沈線を施す。胎土は泥質で、焼成は良好。そ－91・92Ⅲ層出土。



20類突帯文　深鉢形・甕形82・83
押し引き文　深鉢形・甕形84～88

3群　沈線文

89は口唇部が丸みを帯び、弱く外反する。頸部にくびれないが、胴上部が膨らむため「くの字」状を呈する。口縁部から胴上部にかけて、縦・横位の沈線により格子状に区画し、一ヶ所にS字状の曲線文を施文する。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は二〇・四㎝。そ－91～93Ⅲ層出土。

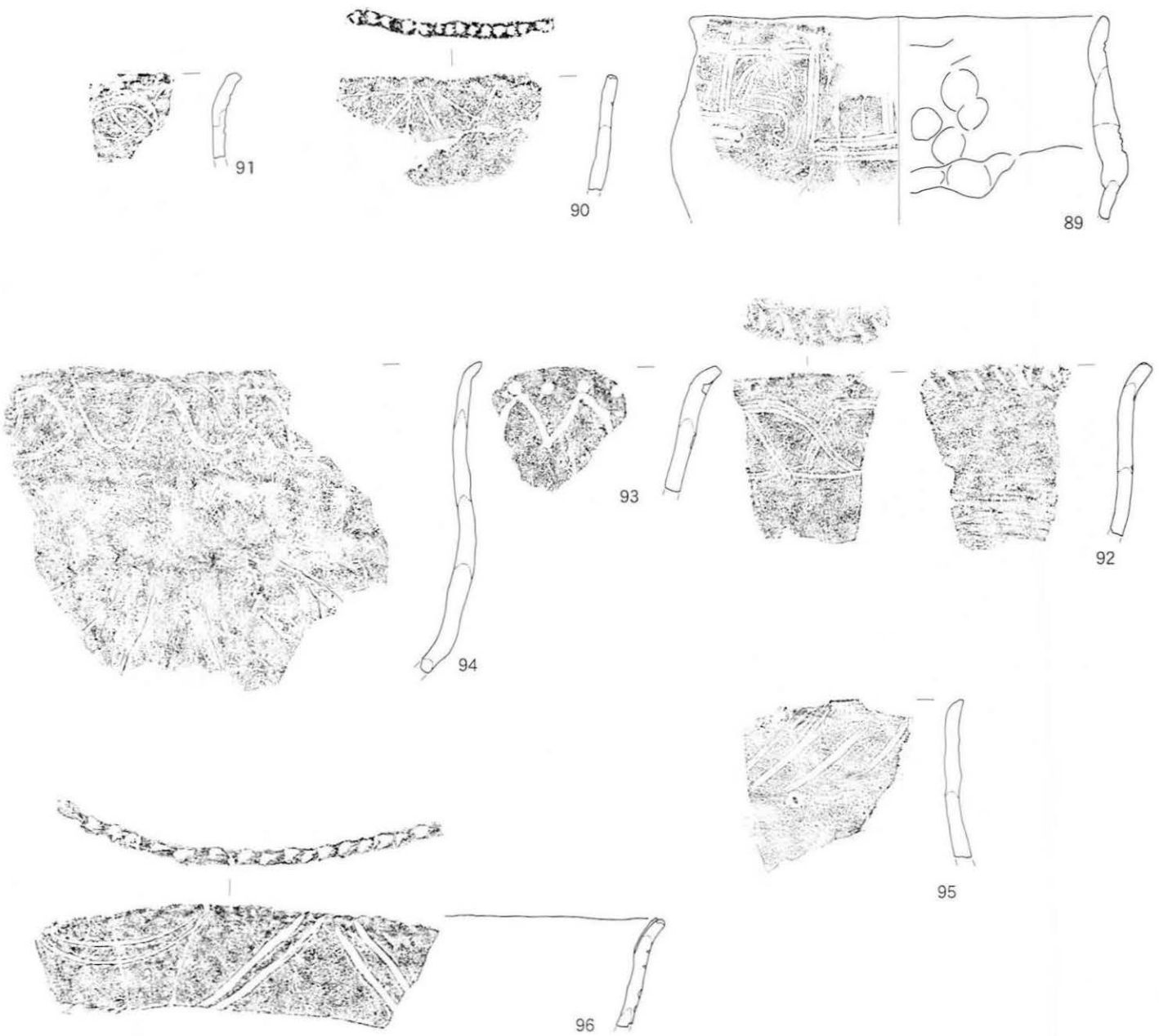
90は口唇部が舌状を呈し、口縁部は直口する。口唇部には半截竹管状工具によって刺突文を施文する。口縁部直下には不鮮明な横位沈線を一本描き、その下にシャープな細沈線により鋸歯文を描き、そのあとから幅の広いヘラ状工具でカーブのゆるいやや不鮮明な鋸歯文を施文する。胎土は泥質で、焼成は良好。ち－95Ⅲ層出土。

91は口唇部がやや丸みを帯び、外反する。口唇直下から沈線により曲線文を施す。胎土は泥質で、焼成は良好。そ－92Ⅲ層出土。

92は口唇部が方形を呈し、口縁部は外反する。口唇には斜め方向の刻みを施し、口縁部から幅三㎜の波状の沈線をクロスし、その下には横位沈線文を描く。波状沈線の間に斜沈線を施文する。胎土は泥質で、焼成は良好。さ・し－92Ⅲ層出土。

93は口唇部が方形を呈し、口縁部は外反し、胴部へ直線的にのびる。口縁部に円形の刺突文を施し、その直下に沈線により鋸歯文を描く。胎土は泥質で、焼成は良好。た－96Ⅲ層出土。

94は口唇部が舌状を呈し、弱く外反する。頸部から胴部にかけてはほぼ直線的にのび、胴下部より内側に入る。口縁部には幅三～四㎜の沈線により波状文を施す。平敷屋トウバル遺跡（注8）で類似資料がみられる。胎土は泥質で、焼成は



第12図　20類沈線文　深鉢形・甕形

良好。さ－94Ⅳ層出土。

95は口唇部が舌状を呈し、僅かに外反し、胴部へ向け直立する。口縁部から幅四㎜の斜沈線を施す。胎土は砂質で、焼成は堅緻。そ－91Ⅲ層出土。

96は口唇部が舌状を呈し、口縁部は朝顔状に大きく開く器形である。口唇部に深い刺突文を施す。口縁残存部左端には細沈線によって曲線文を二本描き、その右端にはやや深めの沈線で鋸歯状の文様を、その下方に横位沈線文を施し、そこから破損している。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は三〇㎝。し・す－95かく乱層出土。

20類沈線文　深鉢形・甕形

4群　口唇施文

97は口唇部が丸みを帯び、強く外反する。口唇には深さ約四㎜の深い刺突文が施され、口唇の形状は不規則に波打つ。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－92Ⅲ層出土。

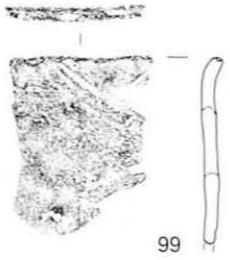
98は口唇部が方形を呈し、口縁部は弱く外反し、僅かにくびれ、胴部へ膨らむ。口唇部には斜め方向の刻みを施し、頸部に横位の細沈線文を一本、その上部に浅い刺突文を二点、下部に一点配する。胎土は砂質で、焼成は良好。た－92Ⅲ層出土。本資料は胎土・色調・器面調整等で阿波連浦下層式土器に類似するが、口唇部に刻目を施す点が先の土器にみられないことから、大当原式土器に含めた。

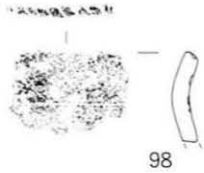
99は口唇部が丸みを帯び、弱く外反する。胴部まではストレートにのびる。口唇部には刺突文を施し、口縁部にも沈線？が本来施文されていたと思われるが、摩耗が著しいために不鮮明である。胎土は泥質で、焼成は堅緻。さ－92Ⅲ層出土。

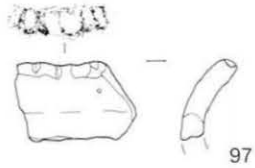
100は口唇部が方形を呈し、口縁部は強く外反する。口唇部には丸みのある刺突文を施し、頸部には一個の孔を穿つ。胎土は泥質で、焼成は良好。そ－93Ⅲ層出土。

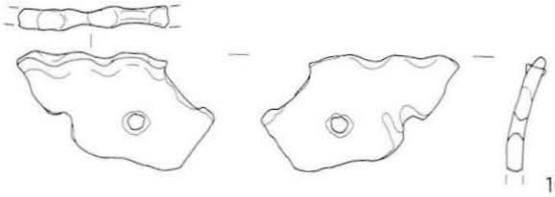
101は口唇部が方形に近い舌状を呈する。胴部は直立するが、口縁部から口唇部にかけて外反する。口唇部は刺突文がなされ、均一のとれた波状口縁となる。口唇部から二・五㎝下方に孔を穿つ。胎土は砂質で、焼成は良好。さ・し－92Ⅲ層出土。

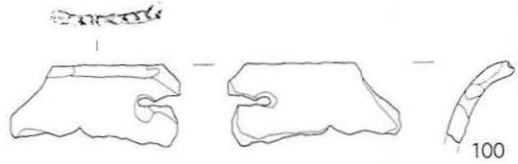
102は口唇部が方形を呈し、口縁部は直口する。口唇部内面には部分的に粘土の膨らみがみられる。口唇部には斜め方向の深い刺突文が施される。胎土は砂質で、焼成はやや良好。す－92Ⅲ層出土。

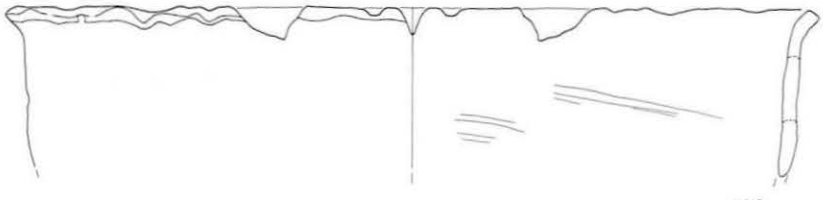

99

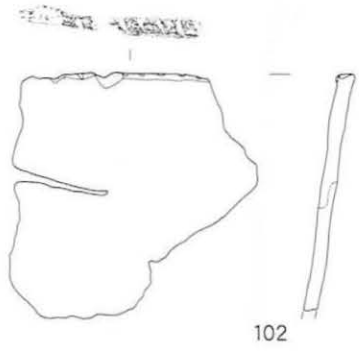

98


97


101

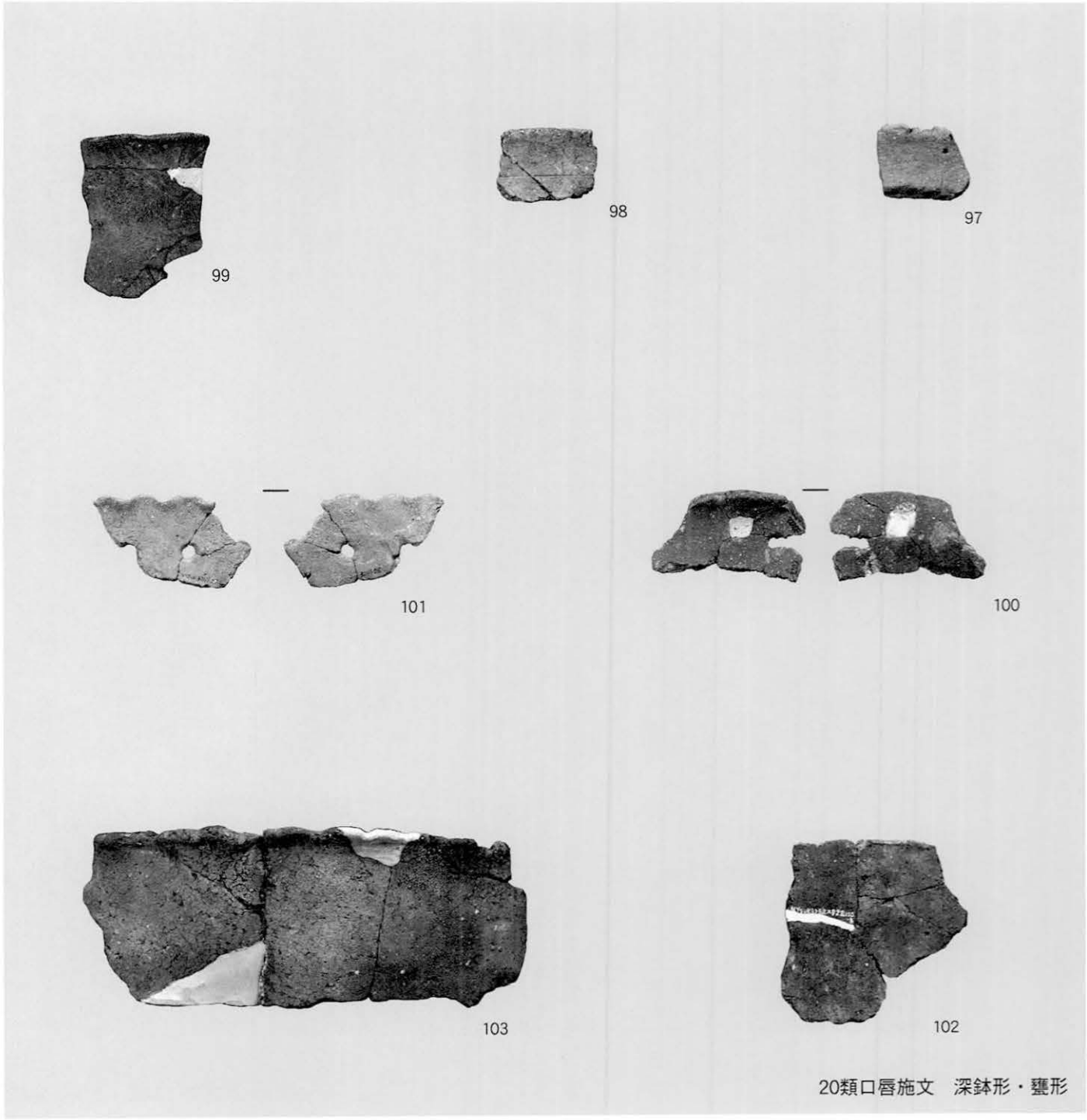

100


103


102

第13図　20類口唇施文　深鉢形・甕形

103は雑な作りで均一性のない波状口縁である。波状口縁をつくるためか口唇部のみ外反し、胴部まではほぼ直立する。胎土は砂質で、焼成はやや不良。推算口径は三二cm。す－92Ⅲ層出土。



20類口唇施文　深鉢形・甕形

（4）在地土器底部

在地土器底部は二八八点を分類の対象とした。底部形態から尖底、乳房状尖底、丸底、平底、くびれ平底の五種に分類できる。以下、各特徴について述べる。

尖底（第14図104～110・112）

104～110・112は尖底、同図111のみ丸底である。104は底面が厚く、胴部への傾斜は角度をもつ。105は内外底面が丸みを帯びる尖底である。107は外底面先端がくぼみ、一見、乳房状尖底にみえる。109は胴部への傾斜は緩やかである。104・106・108・110は泥質、105・107・109は砂質である。111は底面が厚く、重みのある丸底である。器色は外面が褐色、内面が茶褐色であるが、破損部の断面は紫がかった色を呈する。

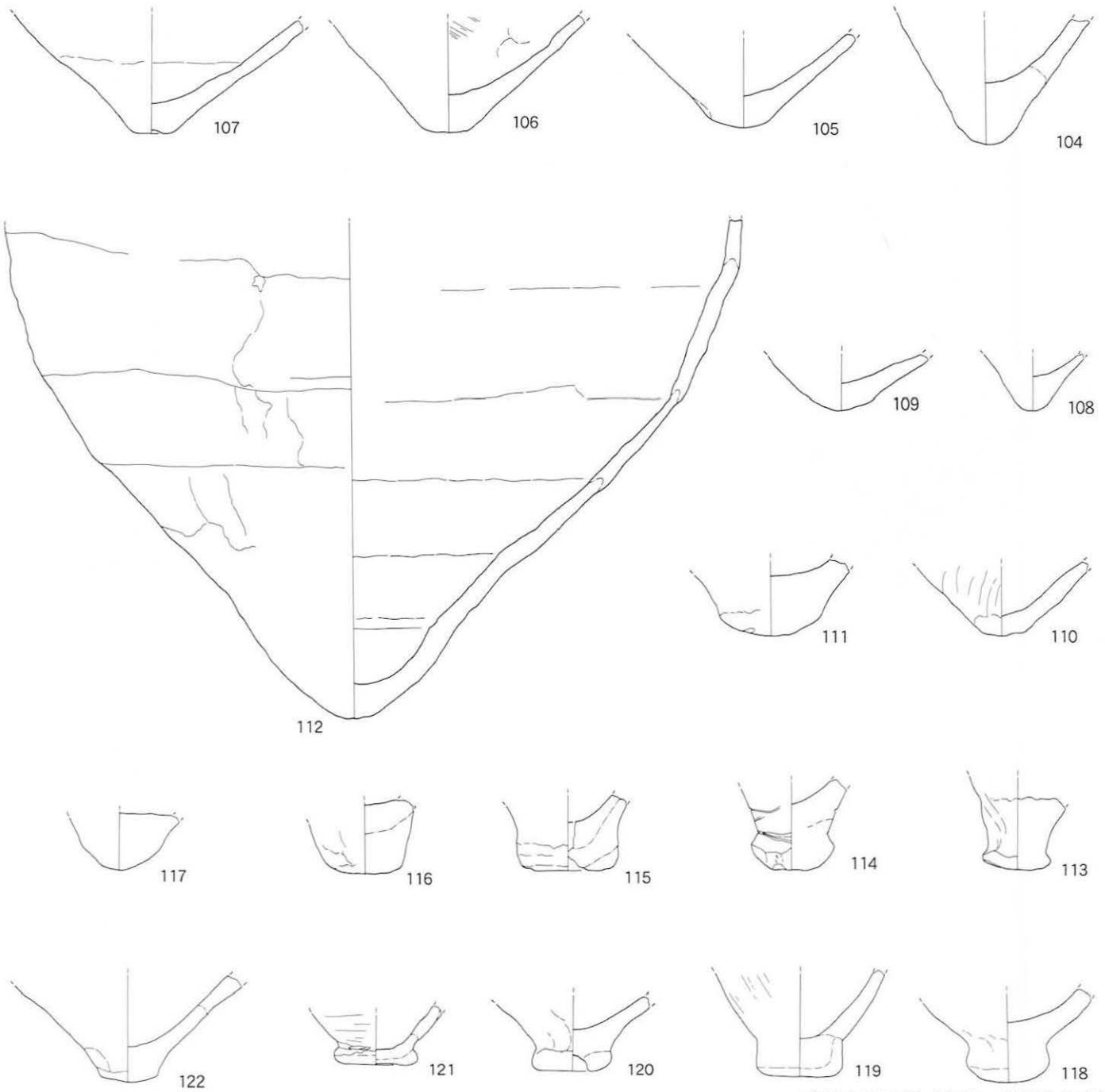
出土地区は、104が「し－91」、105が「す－92」、106が「せ－91」、107が「す・せ－92」、108が「さ－92」、109が「せ－92」、110が「せ－91」、111が「た－96」である。出土層位は、104～111は全てⅢ層より出土。

112は尖底であるが、底部から胴上半部まで残存する資料である。内底面は丸みを帯び、立ち上がり部に段を有する。胴部～底部までの内外面ともに粘土接合部が明瞭に残るが、外面では底部に移行するに従い、接合部が目立たなくなり、丁寧な調整となる。残部の最大径は三六・六cm。胎土は泥質で、焼成は良好。せ－90・91かく乱層より一括出土。大当原式土器に属する。

乳房状尖底（第14図113～122）

113～122は乳房状尖底である。113は乳房部が細く長い乳房状尖底である。底径は三・四cm。つ－89かく乱層出土。

114は乳房部が大きく、立ち上がり部が角度をもつ。立ち上がり部に沈線文を施



第14図　在地土器底部（尖底・乳房状尖底）

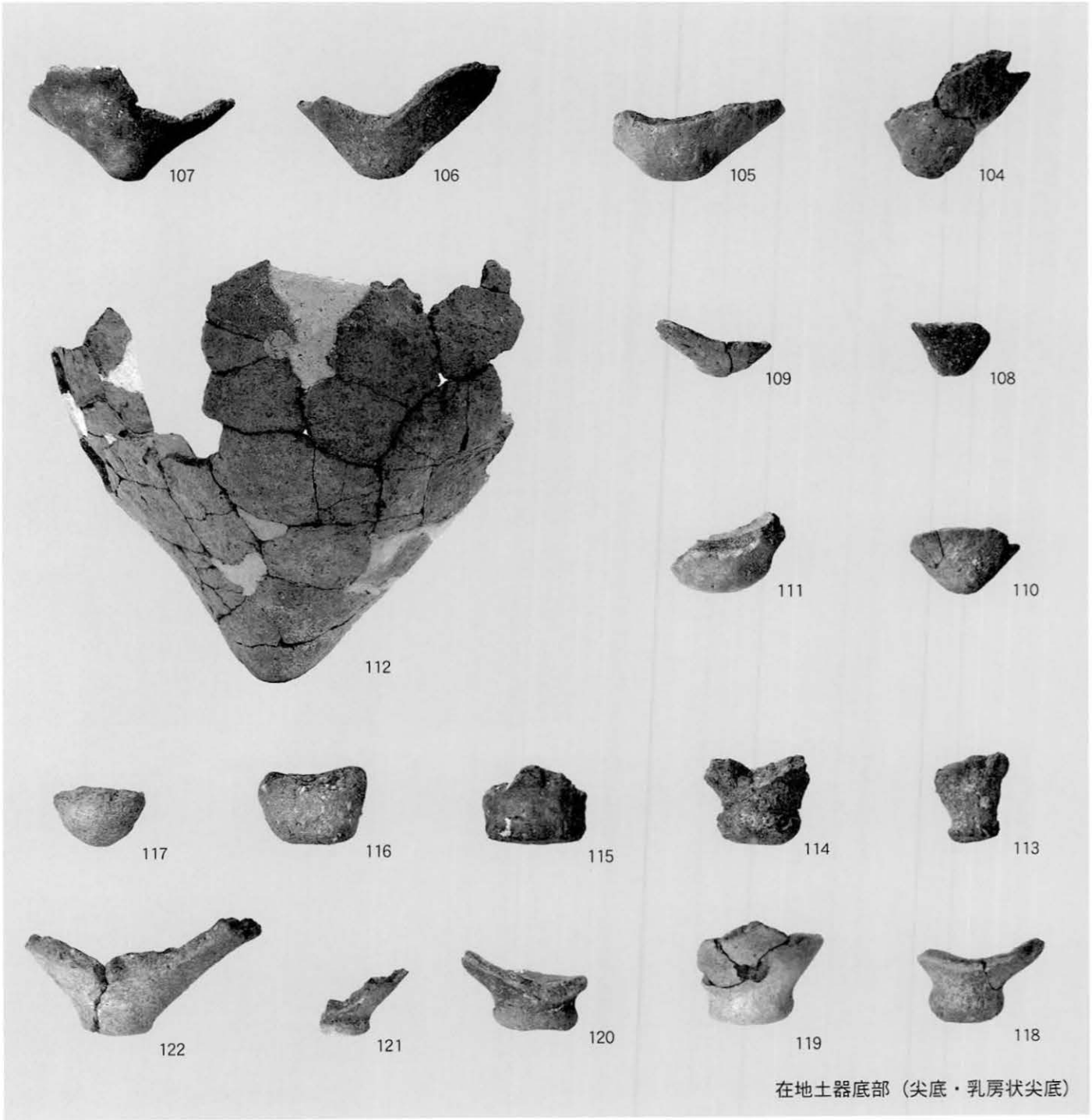
し、乳房部を強調するようである。底径は四・一㎝。た－92Ⅲ層出土。

116は乳房部で破損した資料で、厚さ三一㎜を測り、重みのある底部片である。混入物である石英・長石の粒が大きく、露出している。し－94Ⅲ層出土。117は立ち上がり部が僅かに残ることから、乳房の部分で破損した資料と思われる。厚さ二九㎜を測る。さ－99Ⅲ層出土。

胎土は113・117が砂質、114～116は泥質である。

118～121は乳房部が突出し、立ち上がり部に角度をもつ資料である。118は立ち上がり部および外底面が丸みを帯びる。底径は四・二㎝。た－95Ⅲ層出土。120は外底面がくぼみ、その部分中央に二㎜幅の小さな刺突痕が見られる。さ－100Ⅱ層より出土。121は厚さ六㎜と薄手で、一見くびれ平底状をしているが、内外底面とも形状が安定しないため、乳房状尖底とした。立ち上がり部に工具による調整痕が残る。底径推算は四・二㎝。せ・そ－91・92Ⅳ層出土。122は底径が三㎝と乳房部の小さな底部である。立ち上がり部から胴部へ大きく開く。た－92Ⅲ層出土。

胎土は118・120・121が泥質、119・122が砂質である。



在地土器底部（尖底・乳房状尖底）

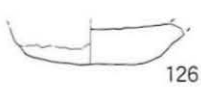
平底（第15図123～133）

123～133は平底である。123・124は外底面が僅かに上げ底となり、123は底径四・四cm、124は推算底径五cmと径の小さな平底となる。126は底径五・五cmで、外底面が僅かに突出し、立ち上がり部が丸みを帯びる底部である。浜屋原式土器の底部と思われる。127・128は焼成が堅緻で、127の底径は七・六cm、128は六・六cmと径の大きな平底である。127の外底面は白みを帯び、凹凸がみられる。128の外底面はやや雑な成形であるが、内底面は丁寧なつくりである。129は底径三・九cm、底面が二八mmの小径厚手の平底である。130は底径五・七cmで、立ち上がりが横に大きく傾く。外底面に一ヶ所、植物の種子痕と思われるのが残る。131は底面が一cmと薄く、外底面が僅かに突出し、立ち上がり部が横に大きく傾く。推算底径は四・四cm。132は底径が三・三cmと小さな平底である。外底面からストレートに胴部へ立ち上がる。133は底径三・六cmと小さな平底である。外底面は僅かに突出し、立ち上がり部から横に開きながら胴部へいたる。131～133は外底面の形状が類似し、混入物として角閃石が目立つ。浜屋原式土器の口縁部資料と胎土、混入物が共通する点が多いため、本土器の底部である可能性が高い。

胎土は123・126・128～130が泥質、124・127・131～133が砂質、125のみ砂質と泥質の中間である。

出土地区は、123が「こ・さ－92」、124が「せ－92」、125・129・132・133が「た－92」、126が「ち－92」、127が「ち－91」、128が「す－91・92」、130が「こ－96」、131が「そ－92」である。

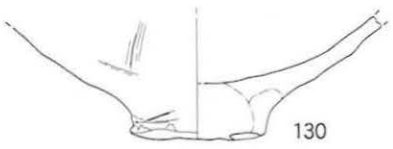
出土層位は、131のみⅣ層で123～130・132・133は全てⅢ層である。

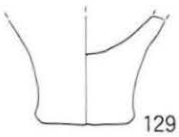

126

125

124

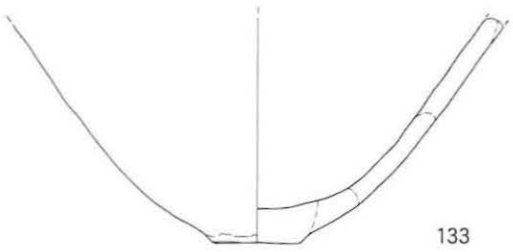
123

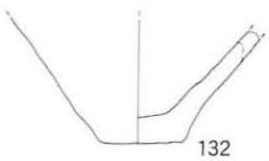

130

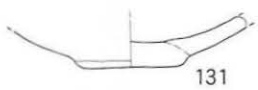

129

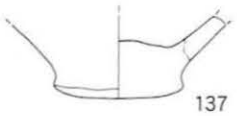
128

127

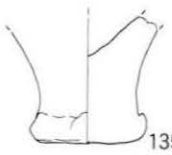

133

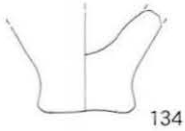

132

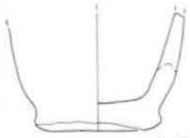

131

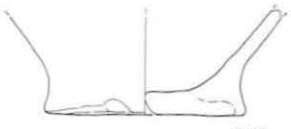

137

136


135


134


141


140

139

138

第15図　在地土器底部（平底・くびれ平底）

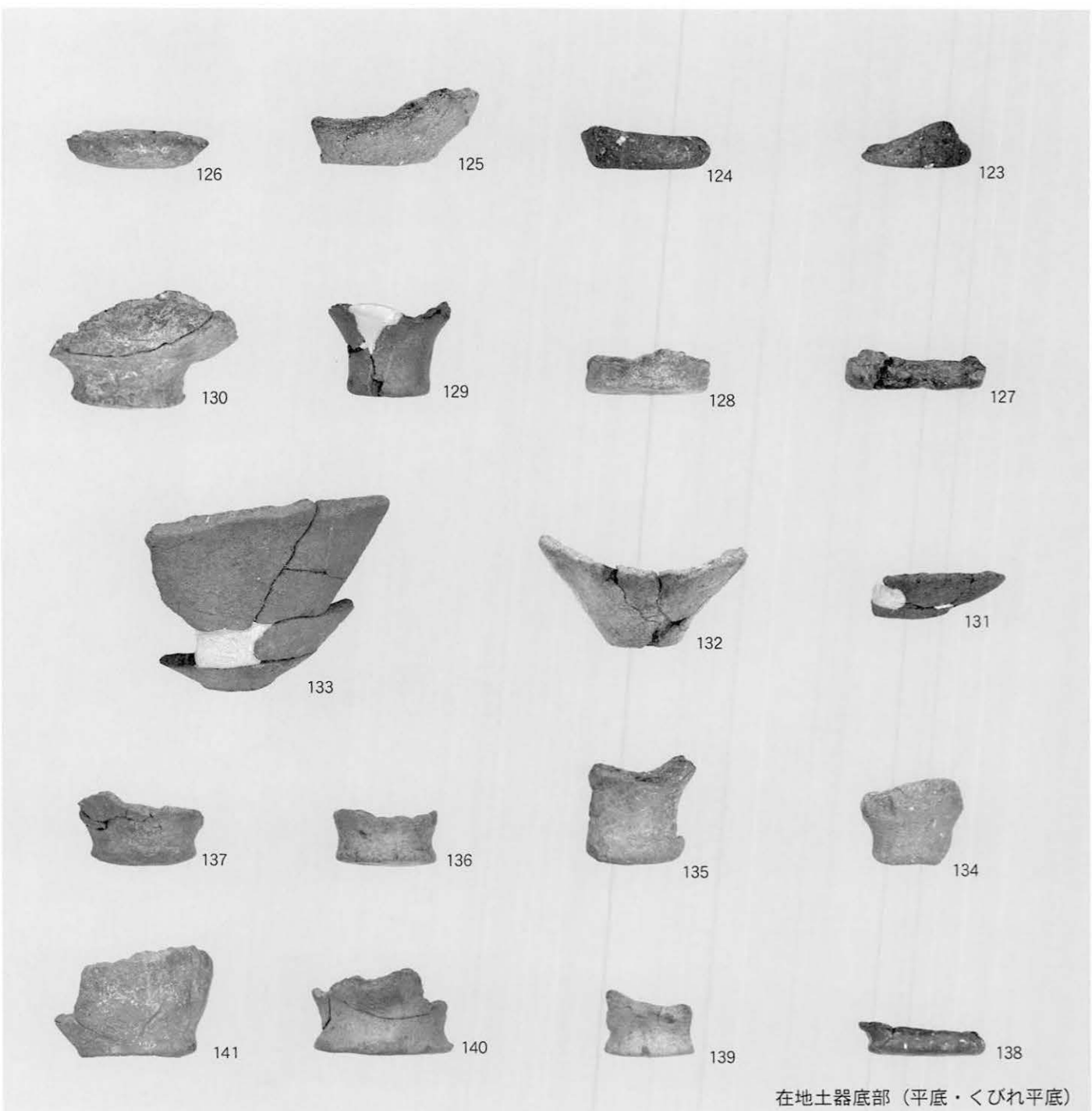
くびれ平底（第15図134～141）

134～141はくびれ平底である。134・135は底面の厚いくびれ平底である。134は底面が二四・五㎜、底径が三・九㎝を測り、外底面が若干上げ底となる。135は底面が三五㎜で、底径が四・六㎝である。136は底径四・六㎝で、内外底面には工具による調整痕が明確に残り、特に外底面は丁寧に調整され、平滑である。137は底径五・一㎝で、外底面は丸みを帯び、内底面中央は膨らみ、側縁部がくぼみ、胴部へ立ち上がる。139は推算底径が六㎝で、磨耗を受けているが、くびれの器形はしっかりとし、器面も丁寧に調整され、平滑である。140は推算底径が八㎝で、器形、調整とも丁寧になされ、典型的なくびれ平底である。141は外底面がほとんど破損している底部である。推算底径は五㎝で、くびれが弱く、あまり外に開かずに胴部へと立ち上がる。小型の深鉢形に属すると思われる。

胎土は134・139が砂質、135・137・138・140・141は泥質、136のみ砂質と泥質の中間である。

出土地区は、134が「そ－92」、135・137が「ち－91」、136が「せ－92」、137が「ち－91」、138が「さ・し－92」、139が「そ－93」、140が「と－95」、141が「ち－92」である。

出土層位は、134～141まで全てⅢ層である。



在地土器底部（平底・くびれ平底）

(5) 21類土器

本土器は九州地方から搬入された土器で、土器の色調・胎土・器面調整及び器形などで、在地土器と区別が可能である。土器の所属時期は弥生時代前期末のものが僅かにみられ、中期の土器が主体を占める。分類の対象としたのは、七四点で、その内、無文土器三一点、有文土器四三点である。器種は壷形、深鉢・甕形の二種で、前者が三五点、後者が三九点となり、他の土器と比べて、前者の割合が高い。以下、各特徴について述べる。

無文土器

壷形（第16図142～149）

142は口唇部が舌状を呈し、強く屈曲し胴部にいたる。胎土は泥質で、焼成は良好。器色は両面とも乳白色を呈する。こ－101Ⅱ層出土。

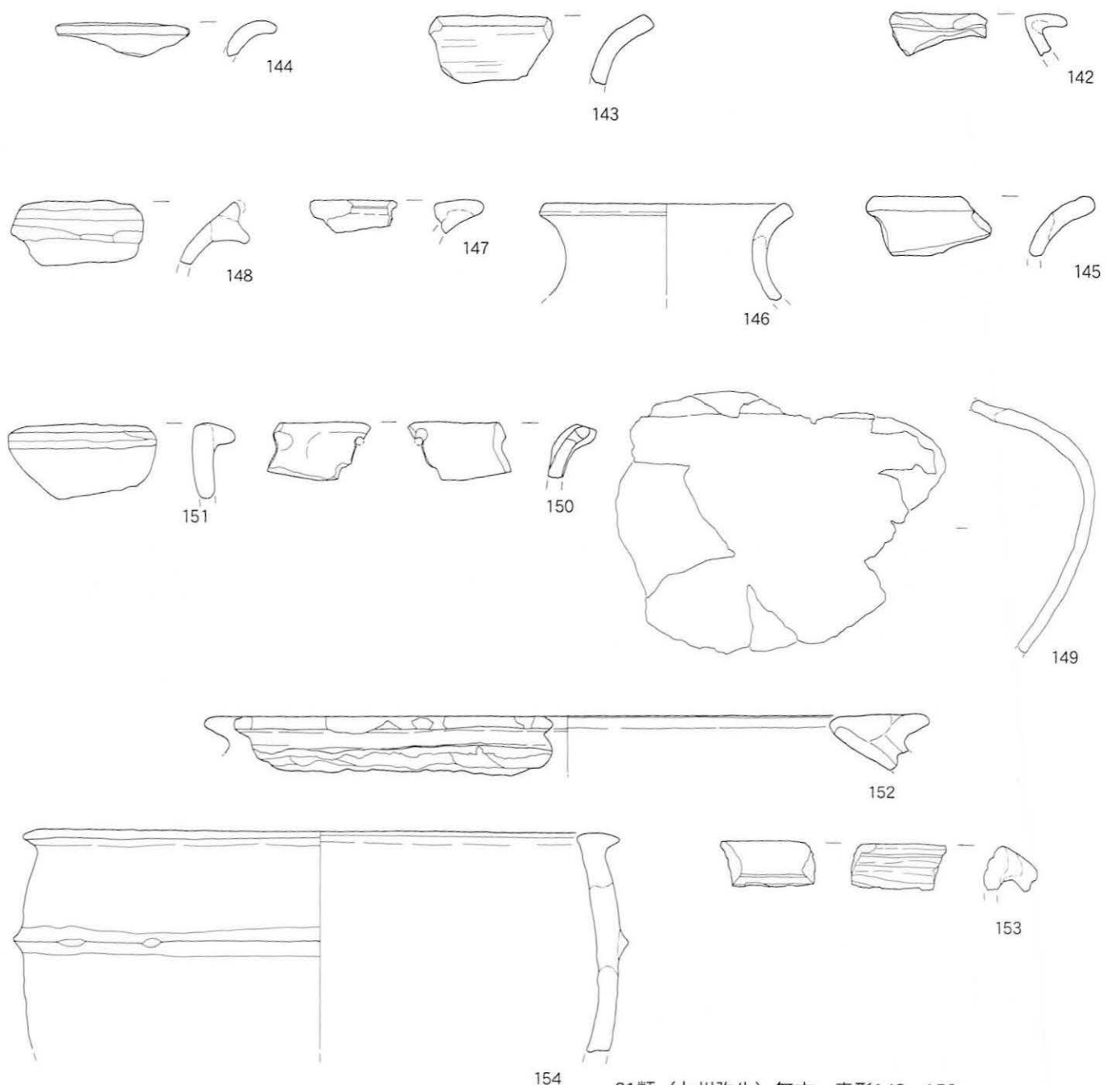
143は口唇部が方形を呈し、口縁部がラッパ状に強く外反する。胎土は砂質で、焼成はやや良好。た－97Ⅲ層出土。

144は口唇部がやや丸みを帯び、口縁部は強く外反する。外面は光沢がみられるほどに丁寧に磨かれている。胎土は砂質で、焼成は良好。た－98Ⅳ層出土。

145は口唇部が丸みを帯び、口縁部は強く外反し、頸部がくびれる器形となる。内面に調整痕か文様かいずれと思われる沈線がみられるが、摩滅しているため詳細は不明である。胎土は砂質で、焼成は良好。く－100Ⅳ層出土。

146は口唇部が方形を呈し、口縁部は強く外反する。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は一二・四㎝。た－94Ⅲ層出土。

147は壷形の口縁部である。口唇部は舌状を呈し、口縁内面には工具によって稜を形成する。胎土は砂質で、焼成は堅緻。そ－92かく乱層出土。



21類（九州弥生）無文　壷形142～152
有文　壷形153　有文深鉢形・甕形154

第16図

148は口唇部が二叉状に分かれる壺の口縁部である。胎土は砂質で、焼成はやや良好。弥生時代中期の山ノ口式土器と思われる。つ－89かく乱層出土。

149は壺形の胴部である。胴部が大きく膨らみ、肩部には輪積痕か調整痕のいずれかと思われる弱い段を形成する。内外面には弱い研磨を施す。胎土は泥質で、焼成は堅緻。弥生時代前期の板付式土器と思われ、後述する底部の第18図172と同一個体の可能性がある。そ－98Ⅲ層出土。

深鉢・甕形（第16図150～152）

150は口唇部が僅かに肥厚し、口縁部が外反する。口縁部直下に孔を穿つ。胎土は泥質で、焼成は良好。混入物がほとんどみられない。つ－93Ⅲ層出土。

151は口唇部が丸みを帯びた舌状を呈し、つば状に外面に突出する。口縁部から胴部へストレートにのびる。胎土は泥質で、焼成は良好。せ・そ－91・92Ⅳ層出土。

152は甕棺の口縁部である。口唇部上端は平坦に成形され、胴部が強く張る器形になると思われる。胎土・器形などから「有明海沿岸部に多い胴部が丸みを帯びた小型～中型の弥生時代中期中頃の甕棺である可能性が高い。」との御教示を鹿児島国際大学の中園氏より頂いた。胎土は泥質で、焼成は堅緻。推算口径は三五・五cm。し－102Ⅲ層出土。

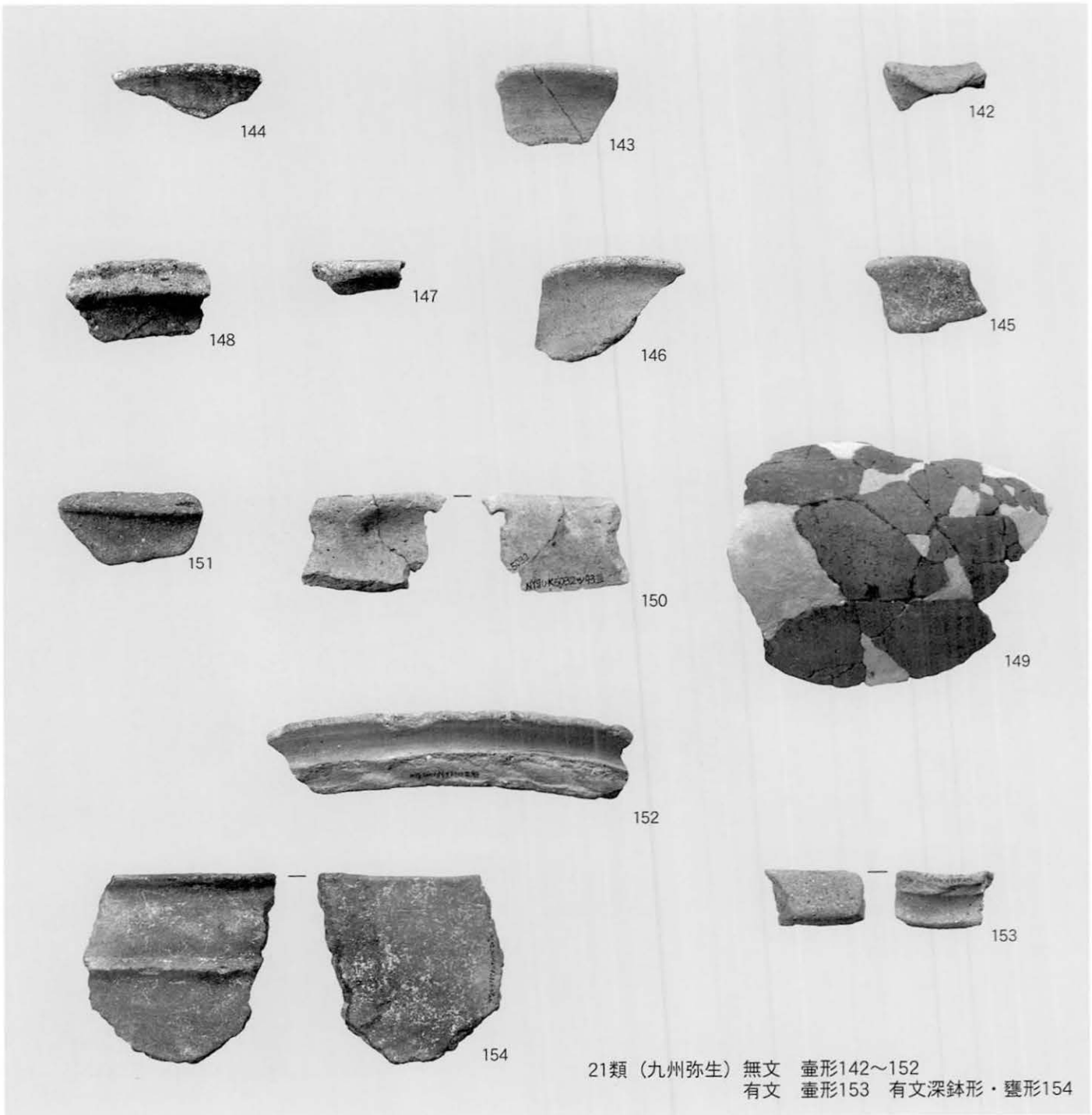
有文土器

壺形（第16図153）

153は口縁部がつば状に外面に突出し、口唇部先端には一条の沈線を施す。口縁部内面にも同様に二条の沈線を施す。胎土は砂質で、焼成は良好。ち－98 4層出土。

深鉢・甕形（第16図154、第17図155～160）

154は口唇部およびその五・五cm下方に三角突帯を施し、口縁部は若干、内湾気



21類（九州弥生）無文　壺形142～152
有文　壺形153　有文深鉢形・甕形154

味になる。胎土は泥質で、焼成は堅緻。重量のある土器である。推算口径は二九・二cm。こ・さ－101Ⅱ層出土。

155は口唇部及び二cm下方に三角突帯を貼付ける。突帯上には浅く細かい刻目を施す。高橋Ⅰ式または入来Ⅰ式土器と思われる。胎土は泥質で、焼成は良好。ち－95Ⅲ層出土。

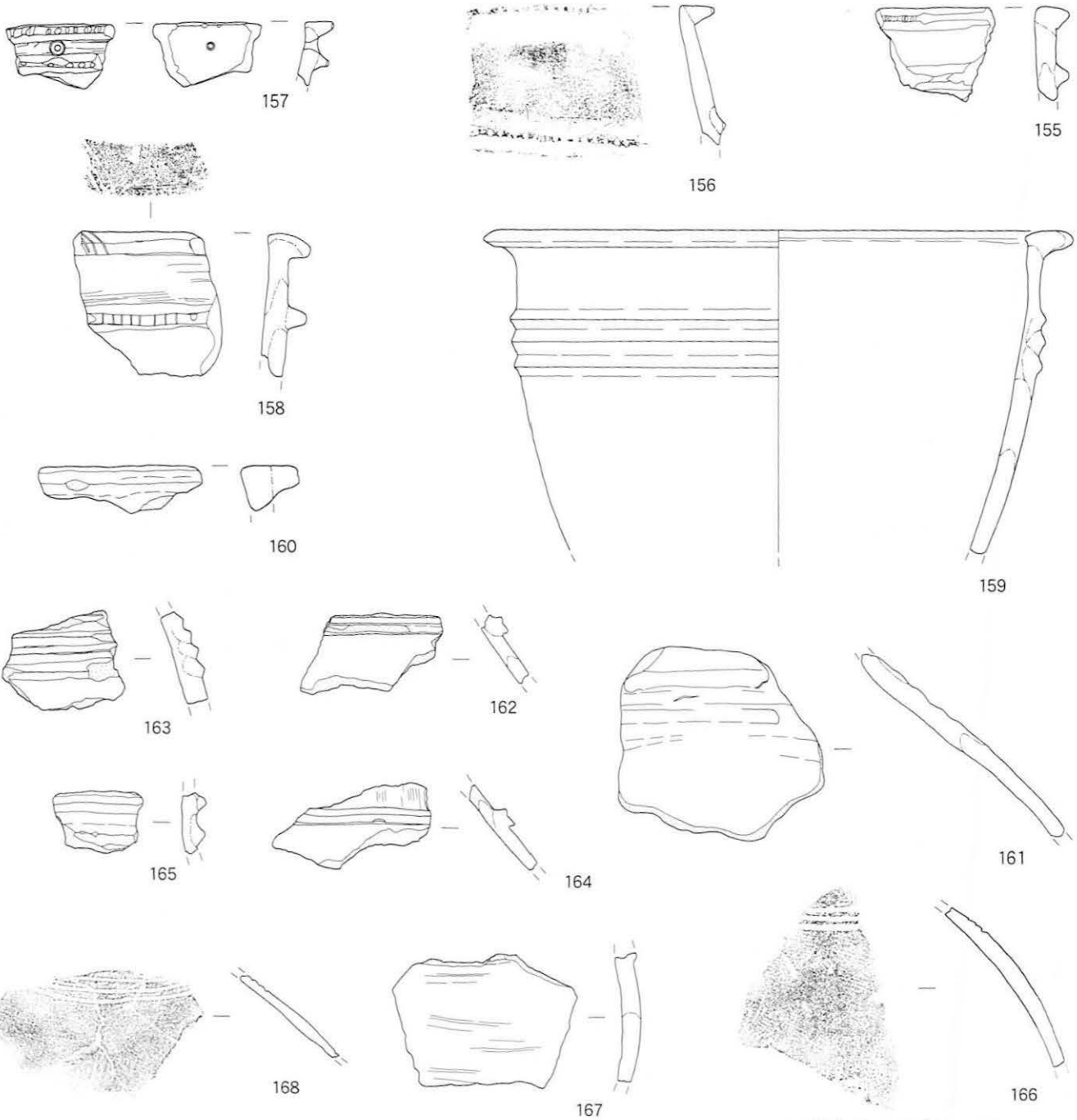
156は口縁部が内湾して立ち上がり、口唇部には刻目を有する大きめの三角突帯を貼付ける。胴上半部には上部より小さい刻目を有する三角突帯を貼付けるが、上部より作りが雑である。入来Ⅰ式土器と思われる。胎土は砂質で、焼成は良好。こ－99Ⅱ層出土。

157は口唇部及び二cm下方に浅く細かい刻目を有する三角突帯を貼付ける。突帯間には孔を穿つ。入来Ⅰ・Ⅱ式土器と思われる。胎土は砂質で、焼成は堅緻。し－102Ⅲ層出土。

158は口唇部及び三cm下方に三角突帯を貼付ける。口唇部の突帯には刻目は無いが、口唇平坦部には斜位の細沈線文が施される。下部の突帯には細い刻目が施される。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－92Ⅳ層出土。

159は口唇部が舌状を呈し、外面に突出し、内面にも若干突出する。肩部にシャープな三角突帯を三条貼付ける。入来Ⅰ式土器と思われる。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は二八・四cm。そ－94Ⅲ層出土。

160は甕形の口縁部である。口唇部先端に沈線文を施し、つば状に外面に突出する。胎土は砂質で、焼成はやや良好。弥生時代中期前半の入来Ⅱ式土器と思われる。し－91Ⅲ層出土。



21類有文　深鉢形・甕形155～160
有文　胴部壷形161～168

第17図

有文胴部

壷形（第17図161～168）

161は肩部付近の破片と思われる。五条の三角突帯を貼付けたと思われるが、摩耗が著しいため、詳細は不明である。胎土は泥質で、焼成は堅緻。さ－99Ⅳ層出土。

162は断面M字状の形状をした突帯を有する資料である。胎土は泥質で、焼成は堅緻。さ－94Ⅳ層出土。

163は四条の三角突帯を有する土器である。器面調整は両面とも工具によるものと思われるが、擦痕が全く見られない。胎土は砂質で、焼成は良好。ち－95Ⅲ層出土。

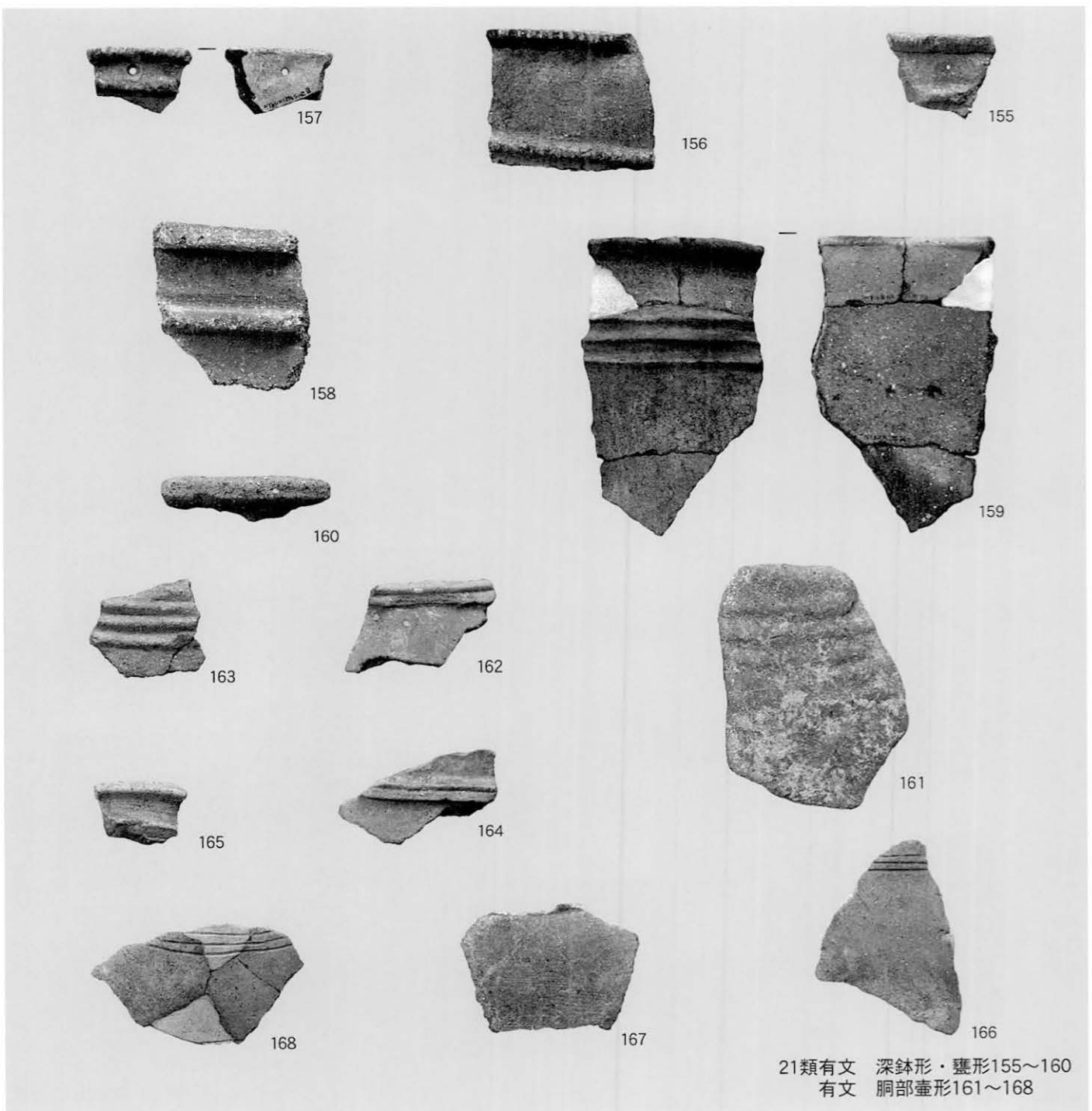
164は162と同様の断面M字状の突帯を有する土器である。全面丁寧なナデにより調整されるが、突帯上方の頸部思われる部分に刷毛目が見られる。胎土は泥質で、焼成は堅緻。ち－98Ⅳ層出土。

165は二条の三角突帯を有する胴部である。上下及び傾きは不明である。器色は乳白色。胎土は砂質で、焼成は良好。し－102Ⅲ層出土。

166は肩部から胴部の資料と思われる。三条の丁寧な沈線文が施され、外面には刷毛目調整がみられる。弥生時代前期末に属する土器と思われる。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－92Ⅲ層出土。

167は突帯を有する胴部であるが、突帯部分で破損しているため形状は不明である。外面に一定幅の擦痕が横方向にみられる。胎土は砂質で、焼成は堅緻。せ－91Ⅳ層出土。

168は残部上位に三条の沈線文を、その四cm下位にも一条の沈線文を施す。本来、下位の沈線文は数条存在したと考えられるが、破損しているため一条しか見られない。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－98Ⅲ層出土。



21類有文　深鉢形・甕形155～160
有文　胴部壷形161～168

底部

21類に属する底部は十三点を分類の対象とした。以下、各特徴について述べる。

高杯形（第18図169）

169は高杯の底部と思われる。残部上面が平坦をなし、僅かにくびれて底部にのびる。底径二・一cm。胎土は砂質で、焼成は良好。ち－98Ⅲ層出土。

壺形（第18図170～173）

170は推算底径七・八cmの平底片である。器壁は六mmと薄く、外底面は僅かに上げ底となる。第7図55と一括出土。胎土は泥質で、焼成は堅緻。こ－99Ⅳ層出土。

171は推算底径九cmの平底片である。底面は十四mmと厚く、重量感のある底部である。外底面は僅かに上げ底となる。胎土は砂質で、焼成は良好。た－96Ⅲ層出土。

172は底径八cmを測り、底部から胴下半部まで残存する資料である。底部は平底で、外底面は若干、上げ底となる。焼成は堅緻であるが、非常に軽い土器である。弥生時代前期末から中期の板付式土器に属すると思われる。胎土は泥質で、焼成は堅緻。そ－98Ⅲ層出土。

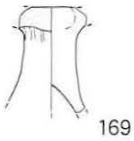
173は推算底径七・三cmの平底片である。底面が十七mmと厚く、重量感のある土器であるが、内面は摩滅が著しい。胎土は砂質で、焼成は良好。す－94かく乱層出土。

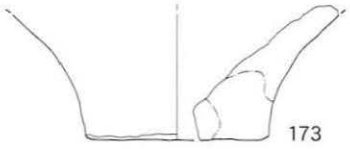
深鉢形・甕形（第18図174）

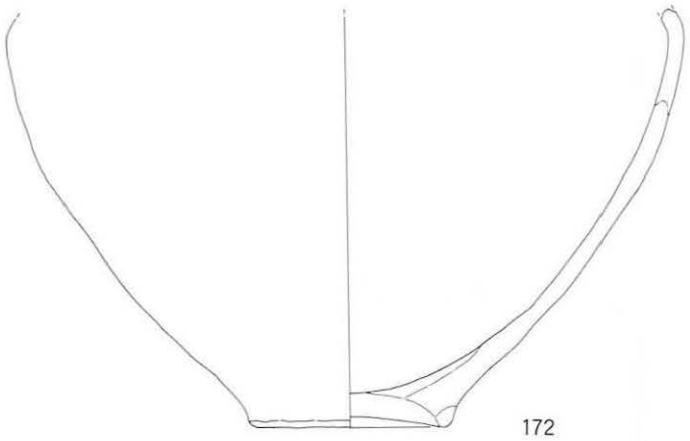
174は底径五・八cmの深鉢形の中空脚台である。外器面の脚部分は横方向の刷毛目が、立ち上がり部からは上位は縦方向の刷毛目調整が見られる。外底面も非常に丁寧に調整され、平滑である。焼成は

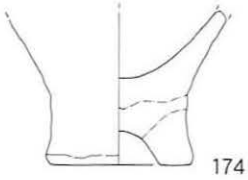
171

170


169

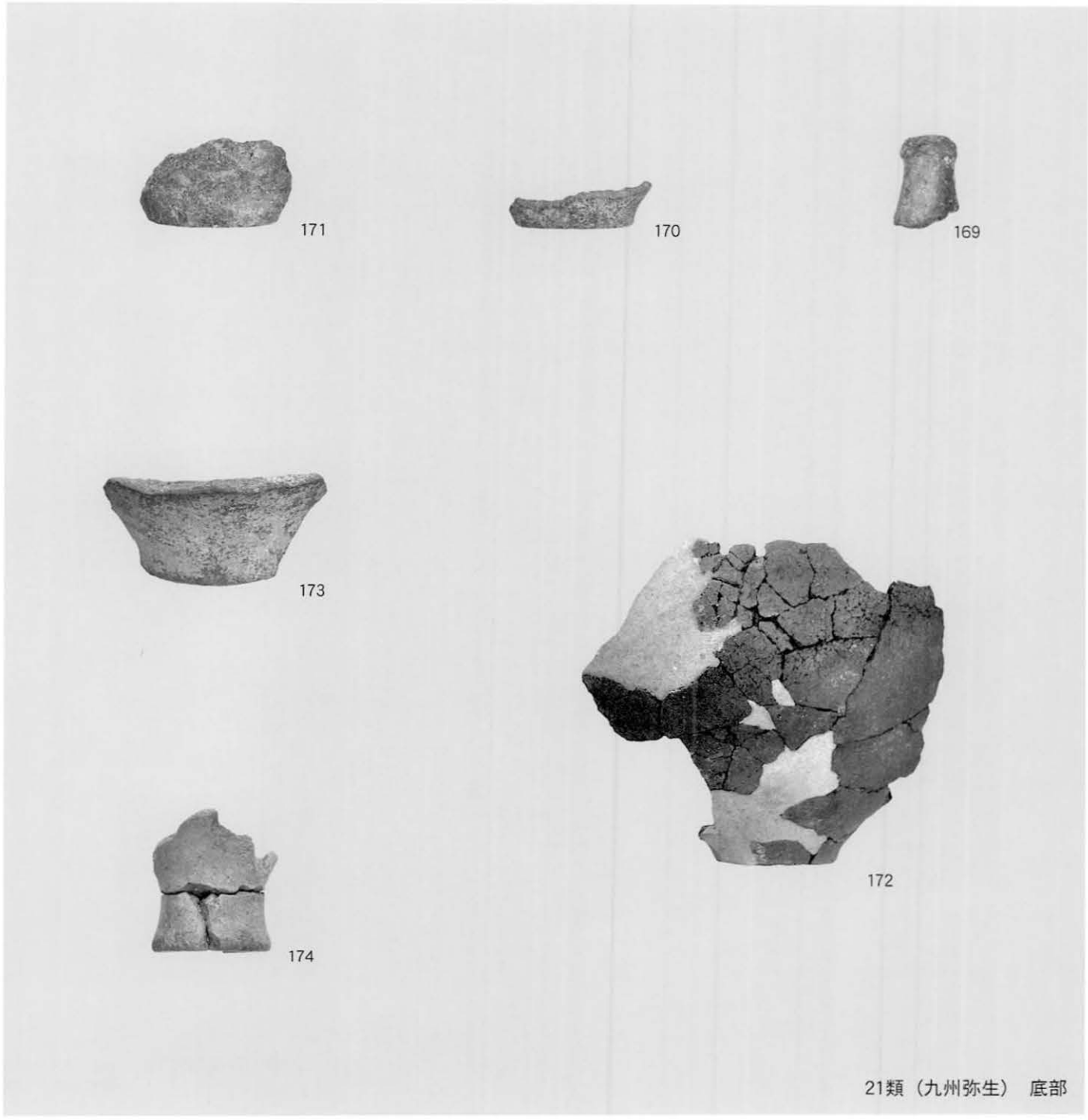

173


172


174

第18図　21類（九州弥生）　底部

堅緻。弥生時代後期から古墳時代の土器に属すると思われる。胎土は砂質で、焼成は堅緻。さ－97かく乱層出土。



21類（九州弥生） 底部

（6）22類土器

本土器は奄美諸島地域を分布の中心とする土器である。九州弥生土器の影響を受けつつも、沈線文を多用するなどの在地的要素をもち、また土器色調は主に赤褐色を呈することを特徴とする（注7）。分類の対象としたのは一〇九点で、その内、無文土器三一点、有文土器七八点である。器種はすべて深鉢・甕形に属する。以下、各特徴について述べる。

無文土器（第19図175～179）

175は口唇部が平坦に整形され、口縁部は内湾気味に直立する。口縁部直下に指頭によってできたと思われる稜が形成されている。胎土は泥質で、焼成は良好。つ－93 4層出土。

176は口唇部が平坦に整形され、口縁部は内湾気味に直立する。173と同様に指頭によるものと思われる稜がみられる。胎土は泥質で、焼成はやや良好。つ－92 Ⅲ層出土。

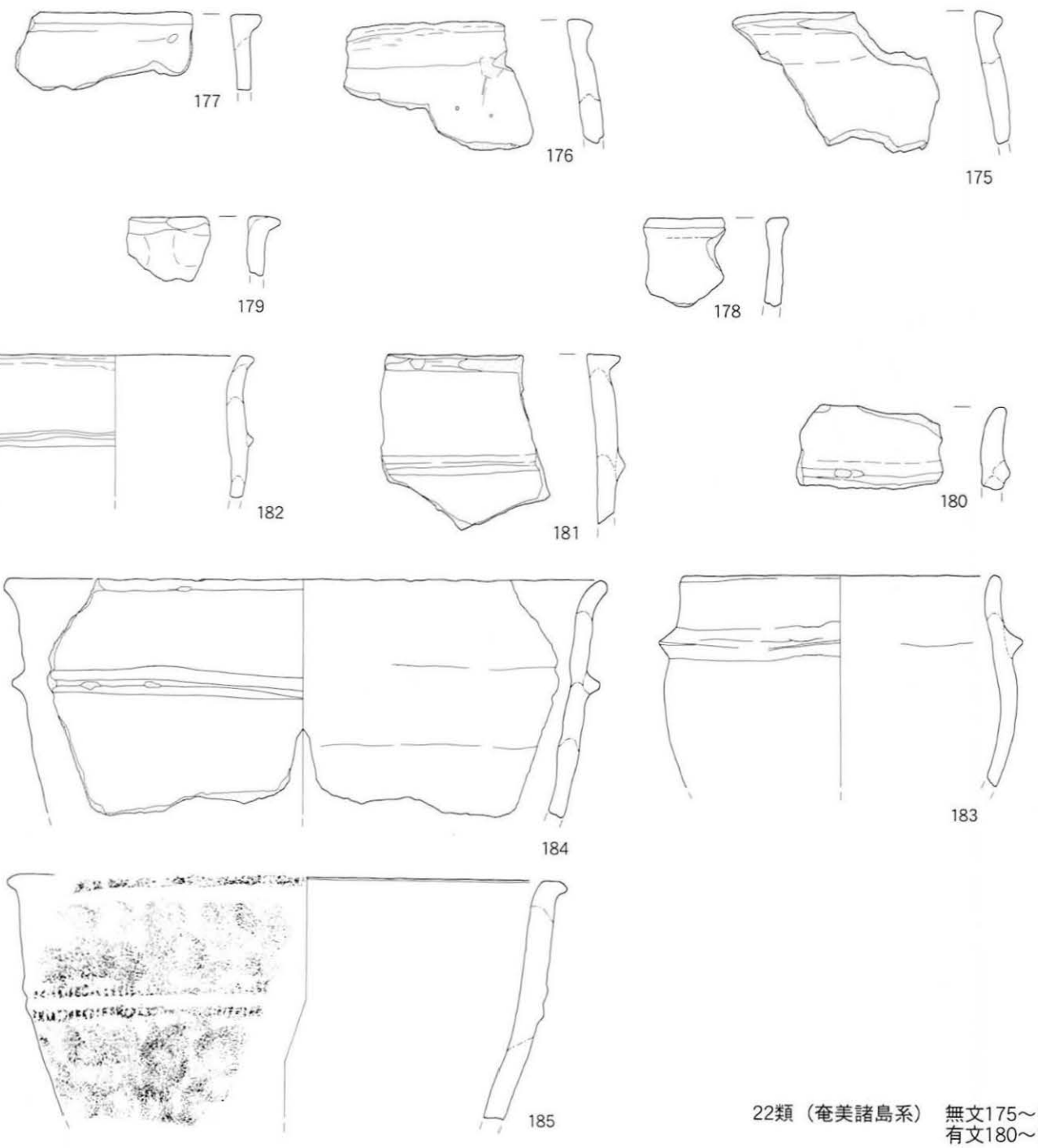
177は口唇部上面が平坦に整形され、外面につば状に突出する。胎土は砂質で、焼成はやや良好。し－92 Ⅲ層出土。

178は177と同様に口唇部上面が平坦に整形されるが、外面はあまり突出せず、若干外に膨らむ程度である。胎土は泥質で、焼成は良好。す－90 Ⅲ層出土。

179は口唇部先端が舌状を呈し、外につば状に突出する。胎土は泥質で、焼成は良好。た－96 Ⅲ層出土。

有文土器（第19図180～185、第20図186～195、第21図196～204）

180は口唇部が舌状を呈し、口縁部は直立する。三cm下方に三角突帯を貼付ける。胎土は砂質で、焼成は良好。て－93 4層出土。



22類（奄美諸島系）　無文175～179
有文180～185

第19図

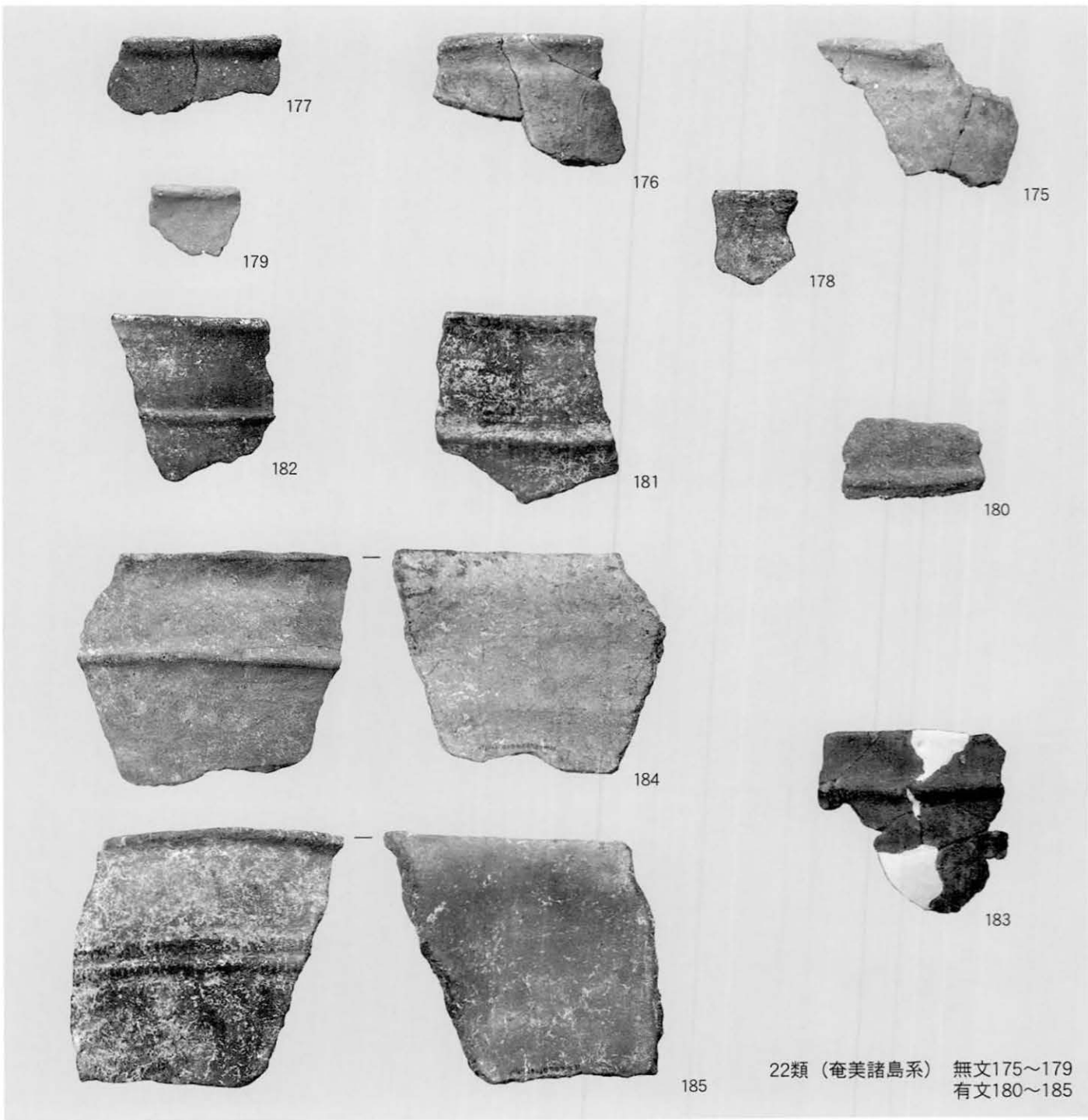
181は口縁部が内湾気味に直立し、口唇部および五・五cm下方に三角突帯を貼付ける。胎土は泥質で、焼成は堅緻。重みのある土器である。け・こ－100・101Ⅳ層出土。

182は口唇部が舌状を呈し、口縁部は外反する。四cm下方に三角突帯を貼付ける。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は一三・六cm。そ－98Ⅲ層出土。

183は口唇部が弱い稜をもつ方形を呈する。口縁部は外反し、胴部が膨らむ器形となる。口唇部から三・五cm下方に三角突帯を貼付ける。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は一五・六cm。た－92Ⅲ層出土。

184は口唇部が舌状を呈し、口縁部は外反する。口唇から五cm下方に三角突帯を貼付ける。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は二九・四cm。そ－91・92Ⅲ層出土。

185は口唇部外面に方形状の突帯を貼付け、胴上部にも突出の弱い突帯を2条貼付ける。いずれの突帯にも細沈線による刻みを施す。口縁部は直立し、胴部は張らずに底部にいたると思われる。胎土は砂質で、焼成はやや良好。推算口径は二七・二cm。せ－91Ⅳ層出土。



22類（奄美諸島系）　無文175～179
有文180～185

186は口唇部先端が舌状を呈する部分と丸みを帯びる部分とがあり、外面につば状に突出し、内面にも僅かに張り出す。口縁部から五・五cm下方に突出の弱い三角突帯を貼付ける。突帯間には孔を穿ち、浅い細沈線で波状文を施すが、器面が剥がれているため不鮮明である。口唇上部の平坦面には細沈線で有軸羽状文を描く。口縁部から胴部までは直線的で胴下部から屈曲し、底部にいたる。胎土は砂質で、焼成はやや良好。推算口径は三三・七cm。そ－92・93Ⅲ層出土。

187は口唇部が僅かに肥厚し、刻目を施す。二cm下方には口唇部の突帯より突出した刻目突帯を施し、いずれの刻目とも不規則で雑である。胎土は泥質で、焼成は良好。た－92Ⅲ層出土。

188は口縁部が短く鍔状になり、口唇部から短めの突帯を貼付ける。口唇上面には短沈線を施す。胎土は泥質で、焼成は良好。そ－96Ⅲ層出土。

189は口唇部が平坦に成形され、口縁部は直立し、マリ状の器形を呈する。口唇部および二・三cm下方に三角突帯を貼付け、突帯上には刻みを施す。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は一六cm。た－92Ⅲ層出土。

190は口唇部が平坦に成形され、口縁部は僅かに外に開く。口唇部先端は若干突出し、二cm下方には口唇部の突帯より大きい突帯を貼付ける。突帯上には細い刻みを施す。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径一四・一cm。そ・た－92Ⅲ層出土。

191は口唇部がやや丸みを帯び、口縁部から胴部にかけてS字状にゆるやかにカーブする。口唇部には粘土を追加して肥厚部を形成し、肩部には三角突帯を貼付け、刺突文を施す。口唇肥厚部と肩部突帯との間には山形状の突帯を貼付け、

第20図　22類（奄美諸島系）　有文（1）

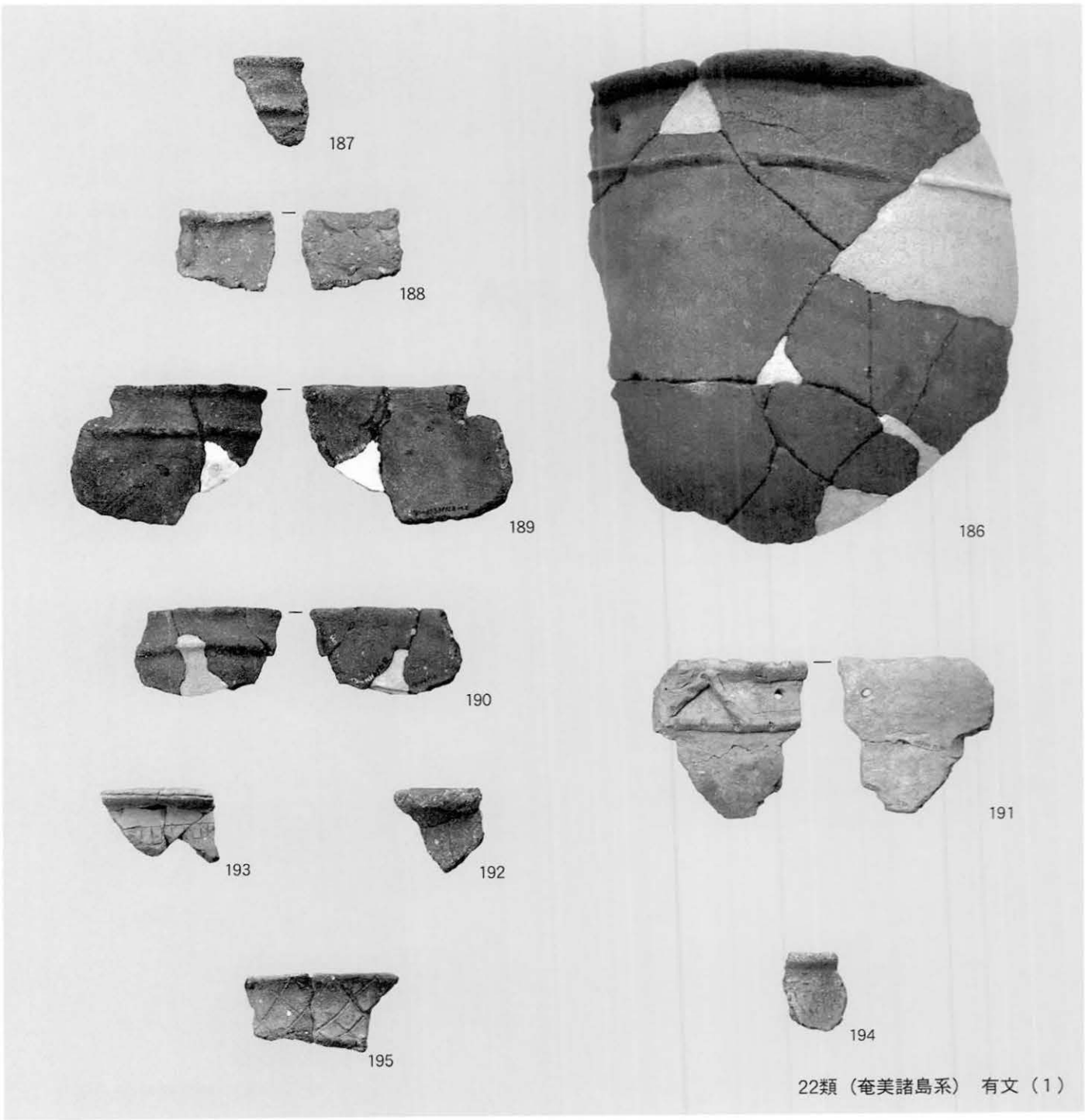
刺突文を施す。山形状の突帯の右方向には不規則な細沈線を施文し、孔を穿つ。口唇部には突帯上と同様の刺突文を施す。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径は二三・八cm。た－95Ⅲ層出土。

192は口唇部に三角突帯を貼付け、先端が破損しているが、舌状を呈すると思われる。頸部には縦位の細沈線文を施し、口唇部上面にも同様の細沈線を施す。入来Ⅱ式土器と思われる。胎土は砂質で、焼成は不良。そ－93Ⅳ層出土。

193は口唇部に突帯を貼付け、先端に横位沈線文を一条施す。口縁部約二cm下方には沈線によって梯子状の文様を施す。口唇部上部には元来、有軸羽状文が施文されたと思われるが、破損が著しいために判然としない。胎土は砂質で、焼成は良好。そ－94Ⅲ層出土。

194は先端が丸みを帯びた突帯を口唇部に貼付け、口唇部上面には有軸羽状文を、先端には斜め方向の刻みを施文する。頸部には横位の爪形状の文様を、その下方には縦位の爪形状の文様を施す。入来Ⅰ式土器と思われる。胎土は砂質で、焼成は不良。そ－92・93Ⅳ層出土。

195は口唇部が方形を呈し、口縁部は強く外反し、胴部が張る器形になると思われる。外面には沈線文によって網目状を描く。胎土は砂質で、焼成はやや良好。推算口径は二二・六cm。そ・た－94Ⅲ層出土。



22類（奄美諸島系）　有文（1）

196は口唇部が舌状を呈し、短めの鍔状となる。口唇部上面には二つの有軸羽状文の間に細沈線文で区画した刺突文を描く。口縁部直下からは縦位細沈線で区画した刺突文を描き、下方に横位細沈線を、さらにその下方に波状の細沈線を施文する。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は一九・八cm。た－95Ⅲ層出土。

197は口唇部が丸みを帯び、内面に僅かに張り出し、キャリパー状になる。口縁部直下より縦位沈線文と横位沈線文を施し、横位沈線の直下には曲線文を描く。胎土は砂質で、焼成はやや良好。さ－93Ⅳ層出土。

198は口唇部が強く屈曲し、鍔を形成する。口縁部直下より曲線文と横位沈線文を施す。胎土は泥質で、焼成は堅緻。し－102Ⅲ層出土。

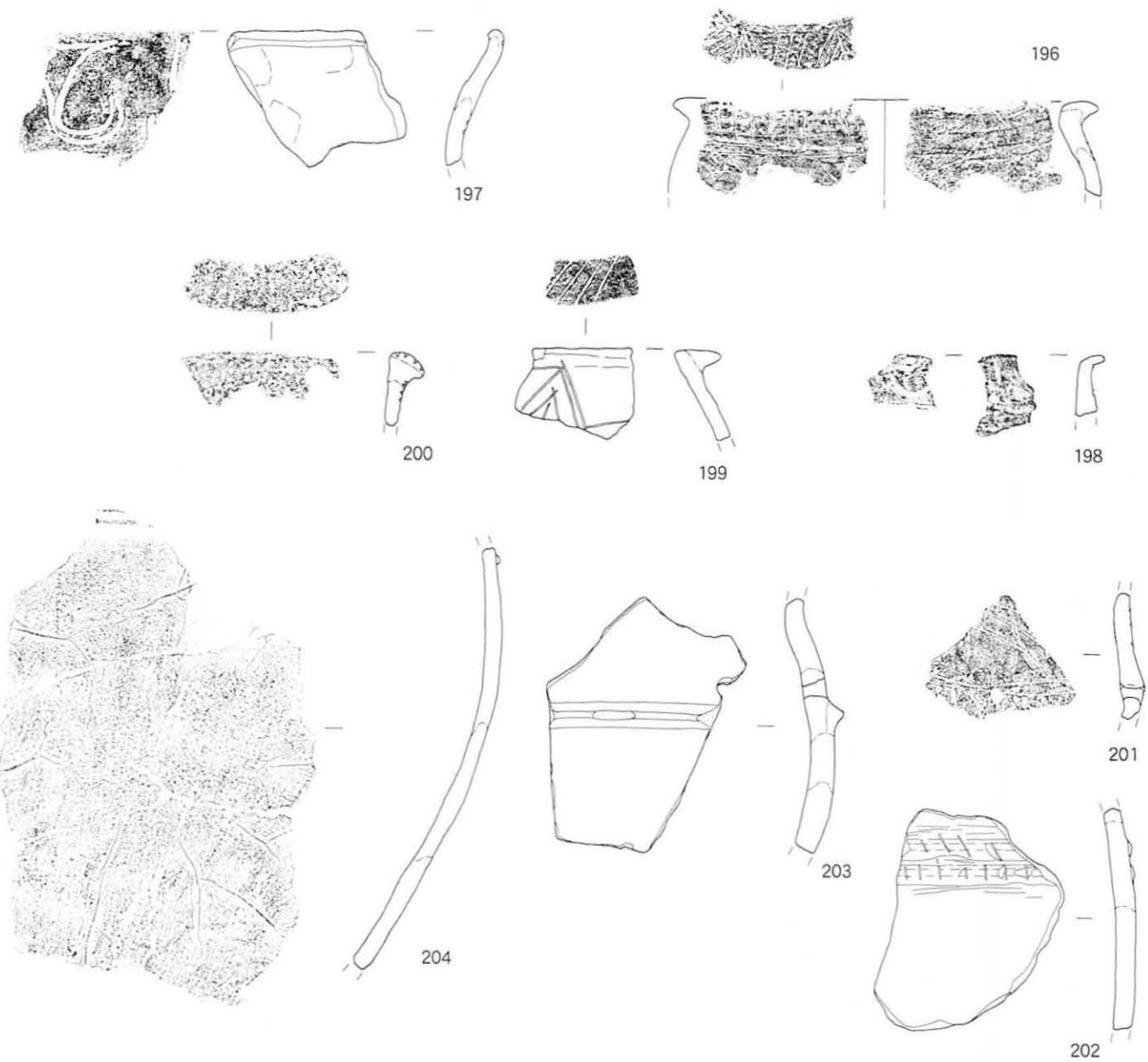
199は、口唇部外面に三角突帯を貼付け、口唇部平坦面には斜沈線文を施す。突帯直下には山形状の沈線と横位沈線を施す。胎土は泥質で、焼成は堅緻。弥生時代中期頃に属する土器と思われる。さ－98かく乱層出土。

200は口唇部が断面三角形状に肥厚し、直線的に胴部へ至る。口唇部および口縁部直下には円形の細かい刺突文を施し、孔を穿つ。胎土は砂質で、焼成は不良。し－91Ⅲ層出土。

胴部（第21図201～204）

201は弧状を描く沈線文と横位沈線文とが施され、残部下方には孔を穿つ。孔付近で粘土接合部が膨らみ、屈曲を意識した可能性もある。胎土は砂質で、焼成は良好。こ－95Ⅲ層出土。

202は低い三角突帯を二条貼付け、突帯上には細く鋭い刻みを施す。弥生時代中期前半の入来Ⅰ・Ⅱ式土器と思われる。

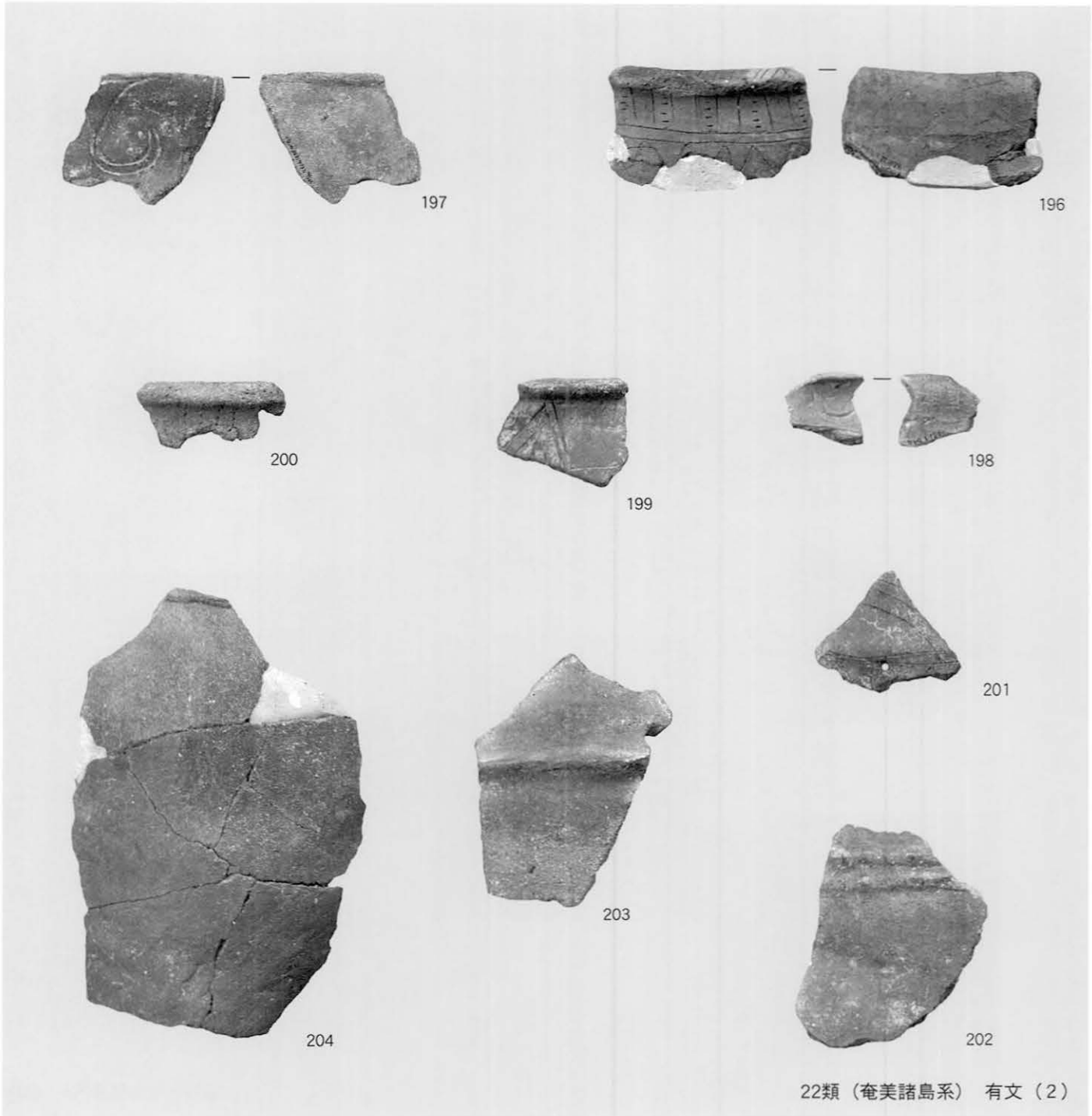


第21図　22類（奄美諸島系）　有文（2）

胎土は砂質で、焼成は良好。し－102Ⅲ層出土。

203は口縁部近くで破損し、マリ状に膨らむ胴部である。肩部に孔を穿ち、その直下にシャープな三角突帯を一条貼付ける。器壁は厚く、重量感のある土器である。胎土は砂質で、焼成はやや良好。す－92Ⅲ層出土。

204は残部上方に断面が丸みを帯びる細い突帯がみられる。大型の甕に属する胴部片と思われる。胎土は泥質で、焼成は良好。す－91・92Ⅲ層出土。



22類（奄美諸島系） 有文（2）

底部

22類土器に属する底部は二二点を分類の対象とした。以下、各特徴について述べる。

壺形（第22図205～209）

205～209は全て壺形に属する。

205は推算底径八・五cmの平底片である。206は底径一〇cm、底面一三mmの平底である。底径から大型の壺の底部であると思われる。外底面は僅かに上げ底となる。207は推算底径六・四cmの平底片である。内外底面とも指頭による調整がなされた為か、若干凹凸が見られる。本底部は、205と胎土や色調が類似する。208・209は底径が不明であるが、平底片である。208は外底面が僅かに上げ底になるが、やや摩滅している。

胎土は208のみ泥質で、他は全て砂質である。

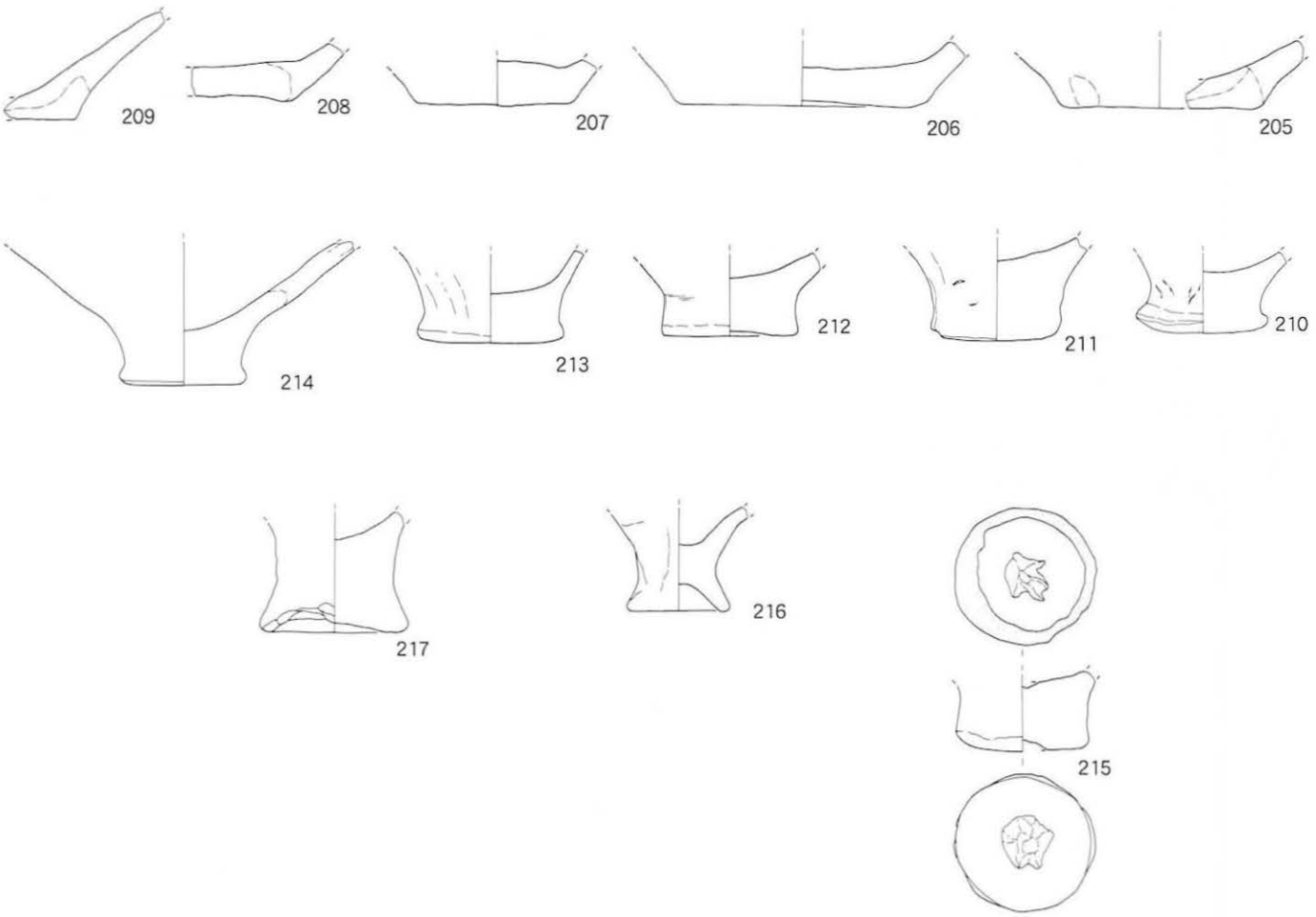
出土地区は、205が「せ－92」、206が「ち－95」、207が「た－95」、208が「ち－94」、209が「ち－96」である。

出土層位は、205～209まで全てⅢ層である。

深鉢形・甕形（第22図210～217）

210は底径四・五cmの乳房状尖底である。くびれ平底にもみられるが、内外底面が平坦でなく、丸みを帯びることから、乳房状尖底とした。

211・212・215は平底である。211は底径五四cm、底面三三mmと厚く、重量感のある底部である。212は底径五・六cmで、外底面は僅かに上げ底となる。215は底径五・二cmの平底であるが、立ち上がり部が意識してカットされ、整えられた感がある。内外底面には敲打痕と思われる窪みがみられる。土器としての機能を終えた後、



第22図　22類（奄美諸島系）　底部

底部を敲打器として使用したものと思われる。

213・214はくびれ平底である。213は底径六・一cmのくびれ平底で、輪積み接合部で破損している。砂粒や千枚岩が多量に混入し、肉眼で容易に観察できる。214は底径五・二cmのくびれ平底である。くびれ自体は弱いが、胴部への立ち上がりは大きく外に開く器形となる。丁寧な調整のなされた底部である。

216・217は脚台である。いずれも深鉢形・甕形に属する。216は底径四・二cmで、胴部への立ち上がり部の器壁は五mmと薄手である。小型の器に付くものと思われる。217は底径六・二cm、底面三三mmの厚い脚台である。外底面は僅かに上げ底となる中実脚台である。外底面には八mm前後の楕円形を呈した痕が残る。植物痕か砕石痕かどうかは不明。

胎土は213・215・216が砂質で、他はすべて泥質である。

出土地区は、210が「そ－93」、211が「た－96」、212が「た－91」、213が「た・ち－95」、214が「そ－92」、215が「た－95」、216が「た－94」、217が「し－101」である。

出土層位は、210～217まで全てⅢ層である。

22類（奄美諸島系）　底部

（7）23類土器

本土器は沖永良部島知名町字屋子母のスセン當貝塚出土土器を標識とし、古墳時代並行期に属する（注10）。器形は、口唇部が平坦に成形され、口縁部が緩やかな「く」の字或いは直状で、頸部が緩く屈曲し、脚台もしくは上げ底状の底部となる。文様は突帯文・沈線文のいずれかの組み合わせを直線的ないし曲線的に施す（注11）。分類の対象としたのは、十四点で、全て有文で、器種は甕形に属する。以下、各特徴について述べる。

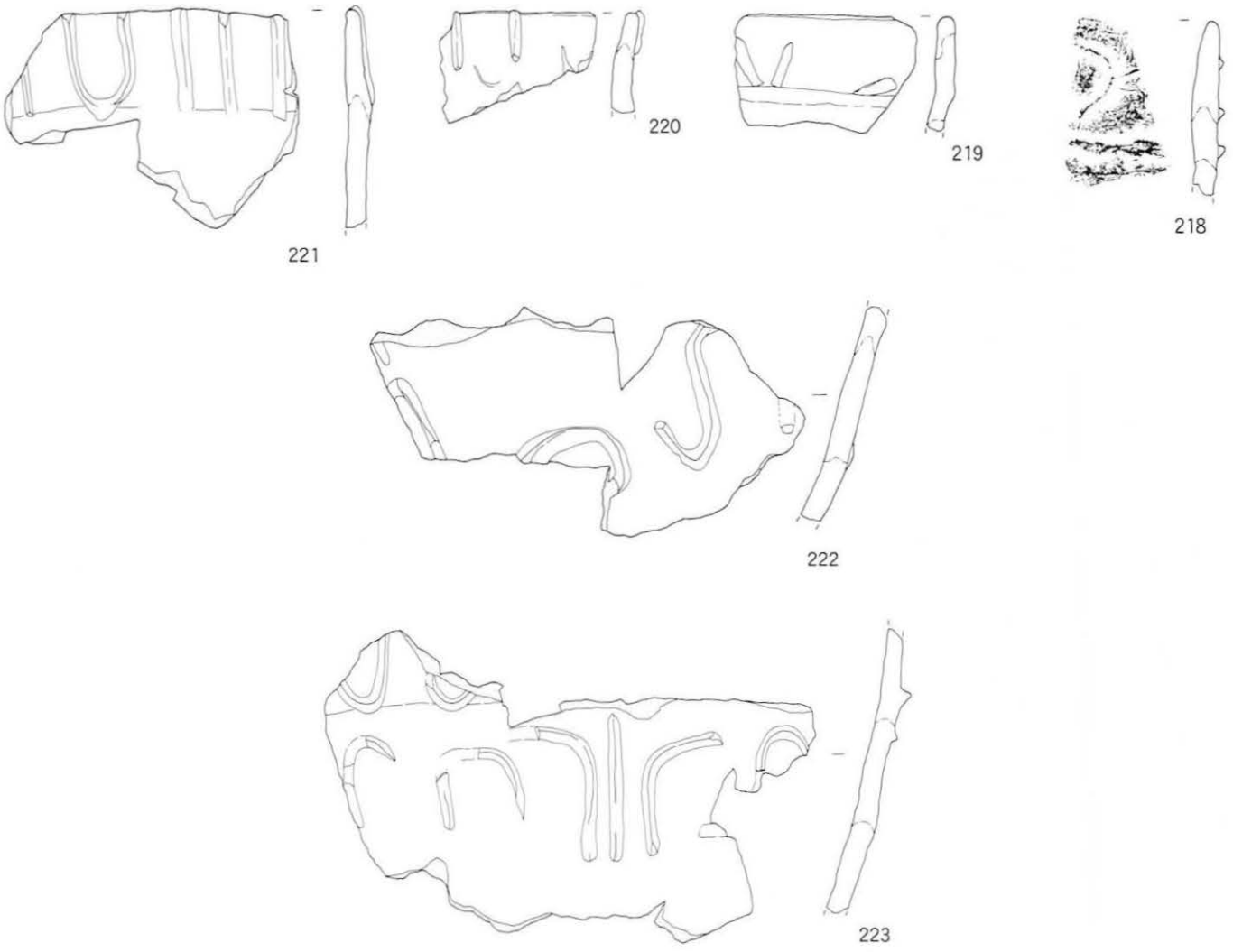
218は口唇部が舌状を呈し、口縁部は直立する。口縁部直下に三角突帯による曲線文を施し、その下方に横位の突帯文を施す。胎土は砂質で、焼成は良好。し－92Ⅳ層出土。

219は口唇部が方形を呈し、口縁部は直立する。口縁部直下にU字状の三角突帯を貼付けたと思われるが、破損が著しいため判然としない。突帯施文部から下方は器壁が薄くなり、屈曲を呈する。胎土は砂質で、焼成はやや良好。さ・し－92・93Ⅳ層出土。

220は口唇部が方形を呈し、口縁部は弱く外反する。口唇部からU字状の三角突帯を貼付左けたと思われるが、突帯下部は欠落している。胎土は泥質で、焼成は良好。す－92Ⅲ層出土。

221は口唇部が方形を呈し、口縁部は直立する。口唇部からU字状の三角突帯を貼付け、方向に一条、右方向に三条の縦位突帯を貼付ける。肩部は僅かに膨らみ、弱い屈曲を呈する。胎土は泥質で、焼成は良好。す－91・92Ⅲ層出土。220と同一個体と思われる。

222は規則性のない曲線を三角突帯で施す胴部である。胎土は泥質で、焼成は良好。し・す－92Ⅲ層出土。



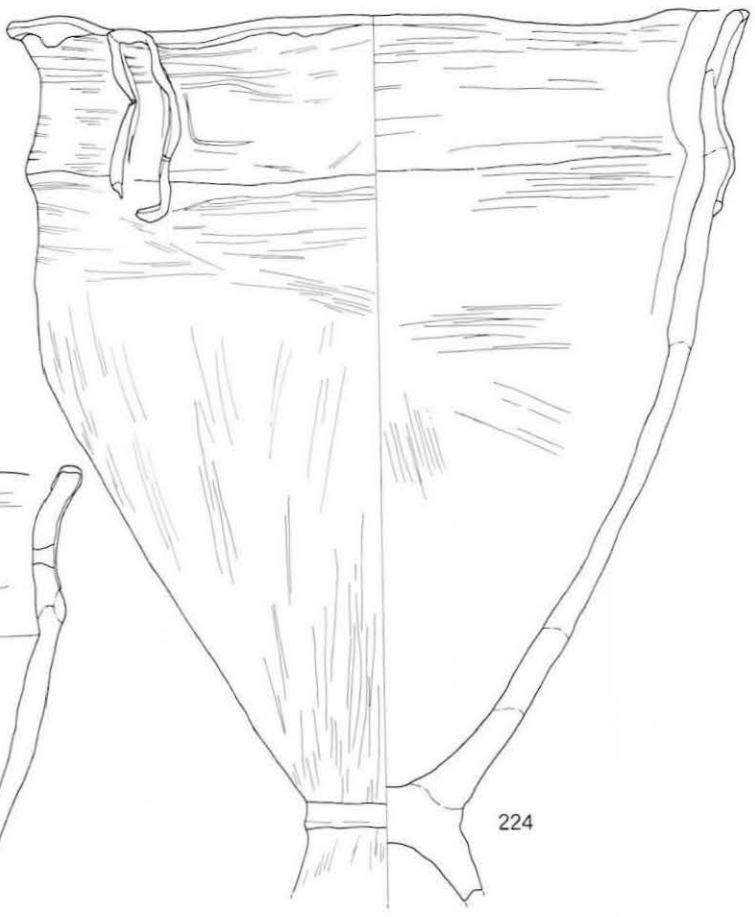
第23図　23類（スセン當式）（1）

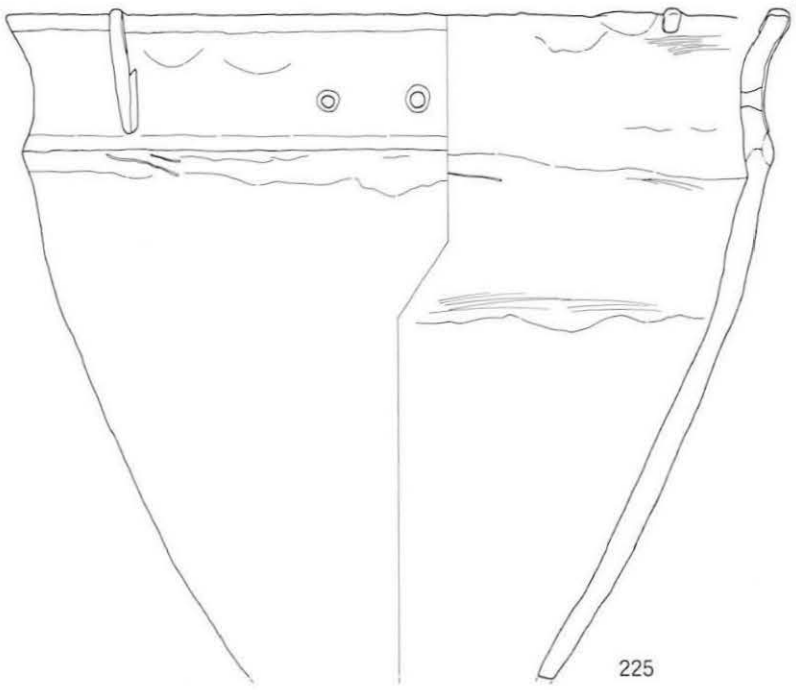
223は多くの三角突帯を貼付ける胴部である。残部上方にU字状の三角突帯を貼付け、肩部と思われる部分が僅かに膨らむ。下方には縦位の突帯を境に、左右に逆「し」の字状および逆「J」字状の突帯を施す。さらに側方には逆「U」字状の突帯を数個貼付けたと思われる。胎土は泥質で、焼成は良好。さ・す－92Ⅲ層出土。222と同一個体か。

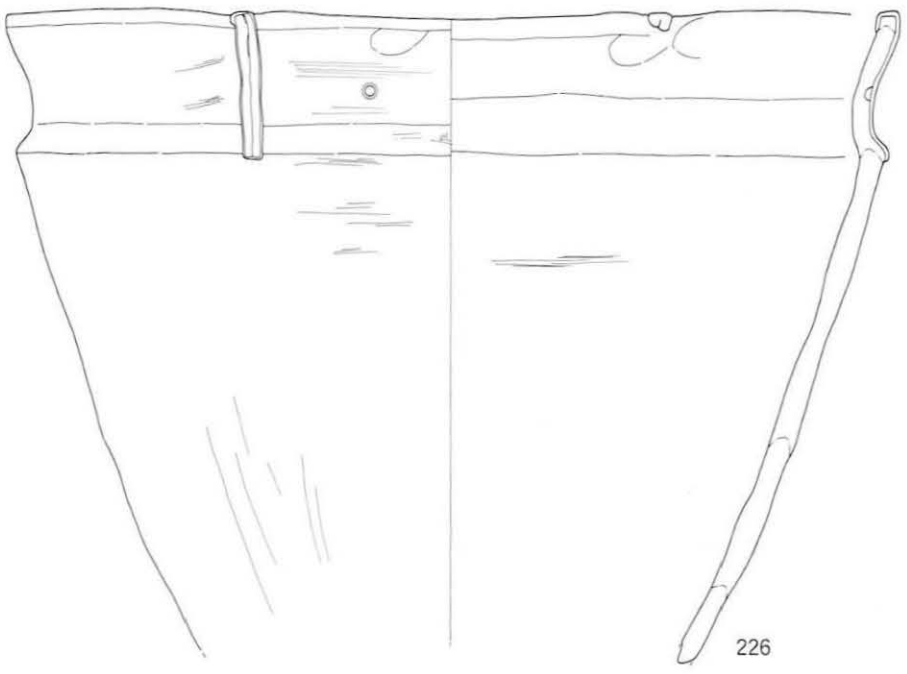
23類（スセン當式）（1）

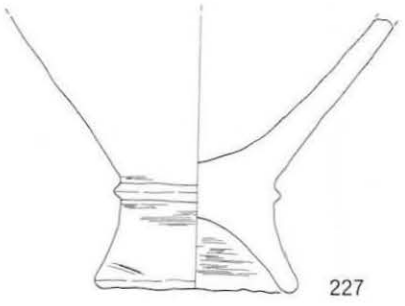
224は口縁部から底部までの全形を窺える資料である。器形は、口唇部は方形を呈するが、粘土が外面に張り出す箇所もみられる。口縁部は外反し、頸部はくびれ、「く」の字状に屈曲し、直線的に胴部へいたる。底部は先端を破損するが、脚台となり、胴部に移行する部分に弱い突帯をめぐらす。口唇部から肩部にかけて、細長い楕円状の三角突帯を7個貼付ける。胎土は泥質で、焼成は良好。口径は二九・二cm。さ・し－92・93Ⅳ層出土。

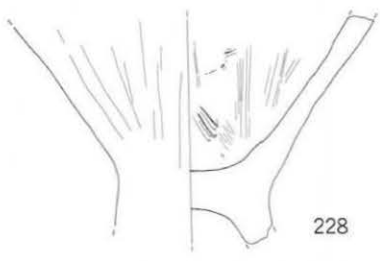
225は口唇部が方形を呈し、口縁部は外反し、頸部はくびれ、「く」の字状に屈曲し、直線的に胴部へいたる。口唇部内面から頸部にかけて二本対となる縦位の突帯を貼付けるが、一本は破損している。











23類 （スセン當式）（2）

第24図

頸部には孔を二つ穿つ。胎土は砂泥質で、焼成はやや良好。推算口径は三一㎝。さ・し・す－92Ⅲ層出土。スセン當式土器の範疇と思われる。

226は口唇部が方形を呈し、口縁部直立するが、頸部でくびれ、「く」の字状に屈曲し、直線的に胴部へいたる。口唇部内面から頸部にかけて二本対となる縦位の突帯を二箇所に貼付け、突帯間には穿孔途中の孔と思われるものが、一点ある。胎土は砂泥質で、焼成はやや良好。推算口径は三五㎝。す－92Ⅲ層出土。スセン當式土器の範疇と思われる。

底部

23類土器に属する底部は二点である。

227・228はスセン當式土器の底部である。

227は底径六・一㎝の中空の脚台である。くびれ部分に断面カマボコ状の突帯を貼付ける。胎土は泥質で、焼成は良好。す－92Ⅲ層出土。

228は底径六㎝で、外底面を破損する中空の脚台である。内外面には工具による調整痕が顕著であるが、外面は器面がはがれた部分もみられる。胎土は泥質で、焼成はやや不良。す－92Ⅲ層出土。

23類 （スセン當式）（2）

(8) 24類土器

不明土器としたものは、前述した18類～23類土器までのいずれの分類にも当てはまらないものである。これらはさらに在地土器に属するが時期不明なものと、文様・胎土・器形などが、在地土器、弥生土器、奄美系土器のいずれかの要素を重複してもち、明確に分類しがたい型式不明土器が存在する。分類の対象は、五一点で、在地土器時期不明が二四点、型式不明土器が二七点である。器種は壺形と深鉢・甕形の二種が見られ、前者は在地土器時期不明で一点見られるのみである。以下、各特徴について述べる。

在地土器時期不明（第25図229～231）

229～231は在地土器に属し、時期不明なものである。

229は壺形に属し、口唇部はやや丸みを帯び、口縁部は弱く外反する。内面の頸部から下方に縦位の調整痕？が雑に残る。内外面ともにアバタ状を呈する。胎土は砂質で、焼成は良好。口径六・八cm。つ－934層出土。

230は口唇部が舌状を呈し、口縁部は弱く外反し、胴部が若干張る器形となる。口縁部一cm下方に三日月状の外耳を貼付ける。底部への立ち上がり部で破損したとみられ、底部は平底になる可能性があり、小型の鉢形になると思われる。胎土は泥質で、焼成は良好。推算口径一一・八cm。し－101Ⅱ層出土。

231は深鉢形に属し、口唇部が舌状を呈し、口縁部は弱く外反する。口縁部二cm下方に三日月状の外耳を貼付ける。外耳上には二つの孔を穿つ。胎土は泥質で、焼成は良好。し－102Ⅲ層出土。

229～231は器形や文様構成からは阿波連浦下層式土器の特徴がみられるが、胎土の相違点や器面調整などにおいて雑な点もみられることから、現段階では阿波連浦下層式土器～浜屋原式土器の段階の土器として捉える。

型式不明（第25図232～238）

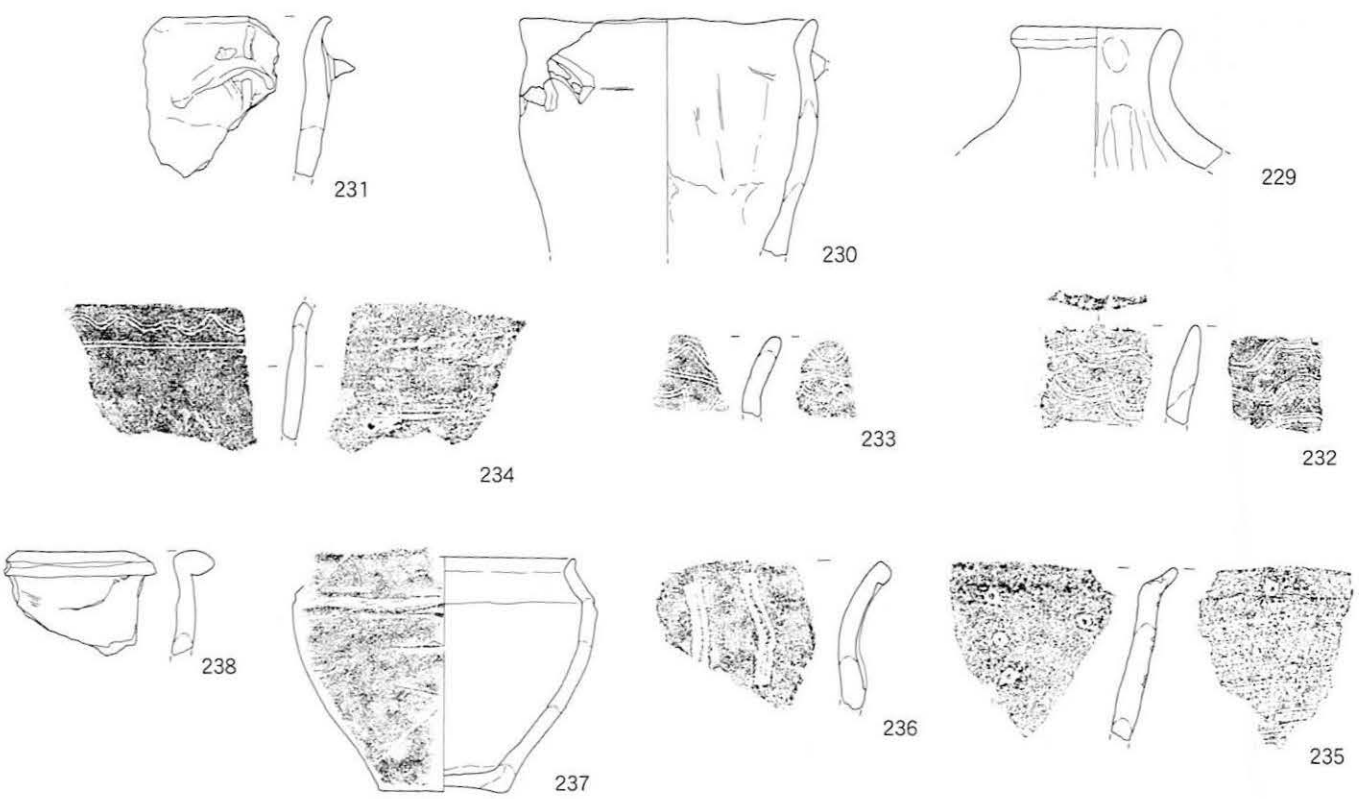
232は口唇部が舌状を呈し、口縁部は直立する。口唇部には刺突文を施し、口縁部内外面に沈線文により波状を描く。胎土は泥質で、焼成は良好。さ－101Ⅳ層より出土。

233は口唇部が丸みを帯び、口縁部は外反し、頸部が僅かにくびれる。口縁部外面には沈線文により波状を描き、その間に直線を描く。口縁部内面には直線はみられず、波状のみを描く。二叉状工具による施文と思われる。胎土は泥質で、焼成は良好。こ－99Ⅳ層出土。

234は口唇部を欠く口縁部付近の資料である。口縁部外面に沈線文により波状を描き、その下方に直線を施文する。二叉状工具による施文と思われる。口縁部内面には文様はみられない。胎土は泥質で、焼成は堅緻。け－100Ⅳ層出土。

235は口唇部が外面に折れ、舌状を呈し、口唇部内面はしゃくれる。口縁部外面には竹などの筒状の工具で刺突したと思われる円形の文様を、三個と二個の二列施す。口唇部内面には外面同様の文様を一個、施文する。胎土は泥質で、焼成は良好。こ・さ－101Ⅱ層出土。奄美諸島系土器に属する可能性もあるが、現段階では判断しがたい。類例資料として部瀬名貝塚（注12）での報告がある。

236は口唇部が方形を呈し、口縁部は強く外反し、頸部でくびれ、肩部が屈曲する。口縁部から肩部にかけて、斜位の押し引き文を二条施す。胎土は泥質で、焼成は良好。さ－100Ⅱ層出土。文様構成は

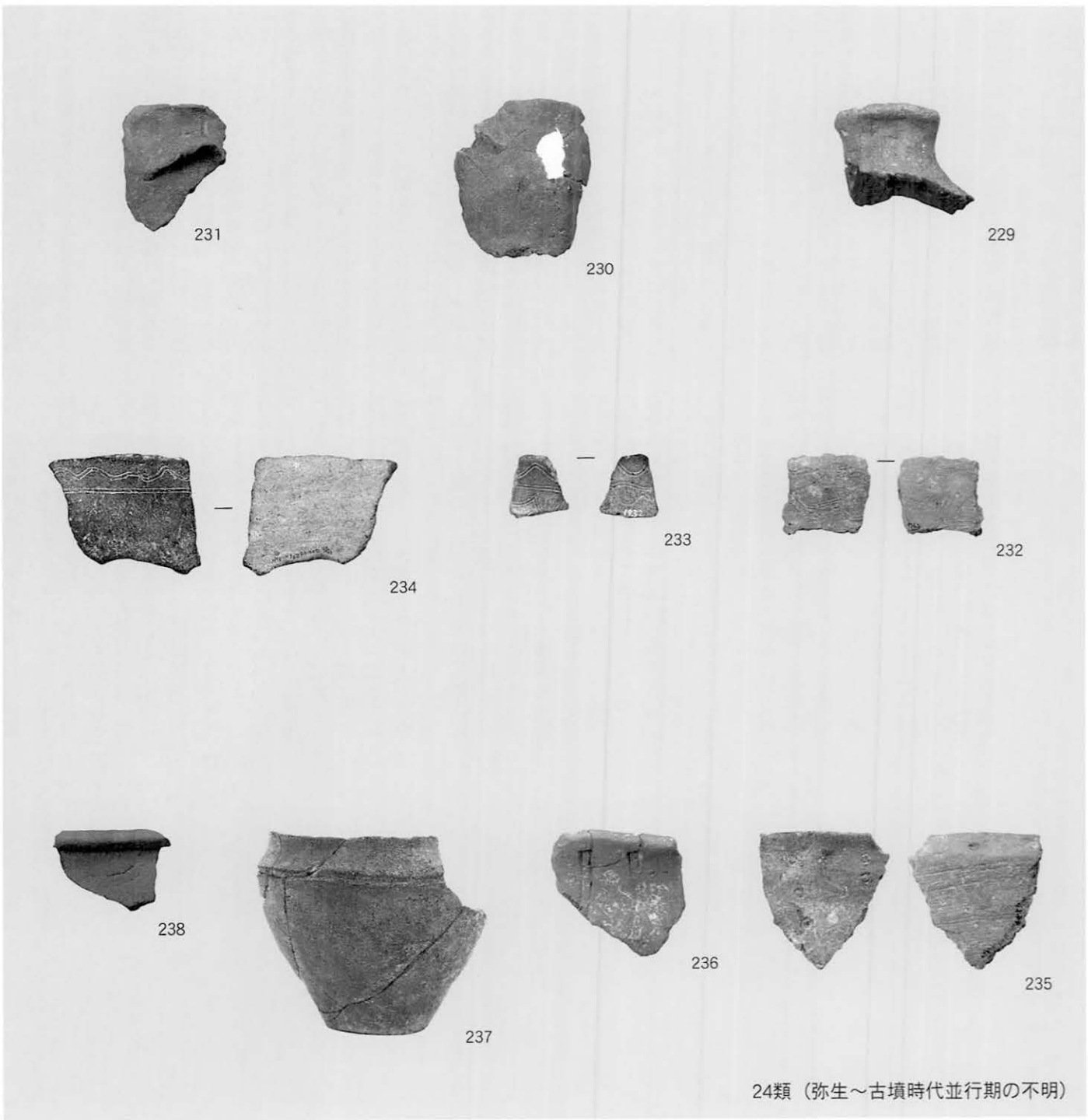


第25図　24類（弥生～古墳時代並行期の不明）

在地土器の大当原式土器に類似するが、焼成・色調などで奄美諸島系土器に属する可能性もあるため、不明とする。

237は小型の鉢形で、口唇部から底部までの全形を窺える資料である。口唇部は舌状を呈し、口縁部は直立し、肩部は「く」の字状に屈曲する。胴上部が若干膨らみ、上げ底状の平底にいたる。肩部には一条の横位沈線文を施し、屈曲部を強調している。胎土は砂質で、焼成は良好。推算口径は一〇・四cm。推算底径は五・二cm。た－94Ⅲ層出土。「く」の字状屈曲は縄文時代晩期の黒川式土器の特徴と類似するが、研磨による光沢はなく、口縁部の形状がすぼまることや、底部が上げ底状になることなどから弥生土器になるかと思われる。しかしながら屈曲部に沈線文を有する南島的な要素をもつこと、器面調整において内面で雑な点もみられることから在地土器に属する可能性もある。在地土器に属するならば、阿波連浦下層式土器の段階であると思われるが、現段階では判然としない点が多いため、不明とする。

238は口唇部に粘土帯を足し、折り曲げて突出させ、先端は舌状を呈する。口縁部は直立する。胎土は砂質で、焼成は良好。す－94かく乱層出土。口縁部の器形的な特徴は、在地土器には見られず弥生土器に類似すると思われるが、器面調整は弥生土器に見られるような丁寧な調整がなく雑なことから、弥生土器を模倣した在地土器に属する可能性もあるため、不明とする。



24類（弥生～古墳時代並行期の不明）

(9) 弥生～古墳時代並行期の土器小結

以上、本貝塚から出土した弥生から古墳時代並行期の土器について略述した。今回得られた当該期の土器は、18類から24類土器まで分類を行った。

得られた在地土器は、18類土器、阿波連浦下層式土器、19類土器・浜屋原式土器、20類土器・大当原式土器の三型式である。前記三型式は尖底土器群として土器編年では阿波連浦下層式土器→浜屋原式土器→大当原式土器へ移行することが知られているが（注13）、本貝塚では三型式土器の層位的関係は認められず、混在している状況であった。在地土器の出土数は18類土器が九三点（十二・一五%）、19類土器が三六五点（四七・七一%）、20類土器が三〇七点（四〇・一三%）と、後二者が多数を占める。また18類土器は小破片が多いのに対し、後二者は器形復元可能な大型の資料が多いのも特徴であった。20類土器の有文土器は当該期のなかでも文様の種類が多いことは先に述べたが、第10図75、同図80のような特異な突帯を貼付ける資料があり、本来、別型式で扱うべきかもしれないが、数量の少なさから今回は20類土器の文様の一種として取り扱った。今後の類例資料の増加によっては再検討を要する。

在地土器底部については二八八点出土し、その内訳は、尖底が九四点（三二・六三%）、乳房状尖底が一〇一点（三五・〇六%）、丸底が二八点（九・七二%）、平底が三七点（十二・九八%）、くびれ平底二八点（九・七二%）である。尖底・乳房状尖底が多く、在地土器底部の六七・七%を占める。胎土・器面調整などから尖底は大当原式土器に、乳房状尖底は浜屋原式土器におおむね属すると思われる。また平底はどの型式に属するかは不明であるが、なかには胎土・器面調整等が阿波連浦下層式土器および浜屋原式土器に類似するものが僅かに含まれている。

21類土器の九州弥生土器は出土数が総数七四点と多くはないが、壷形が三五点と本類土器の四七・二九%を占め、他類より壷形の増加傾向が目立つ。型式のわかる土器として弥生時代中期に属する入来Ⅰ・Ⅱ式、山ノ口式土器など南部九州系の弥生土器が主体を占める。北部九州系の土器として胴部が大きく膨らむ弥生時代前期末の板付式土器に類似する壷形胴部と底部から胴部まで残存する資料が二点得られた。また特筆すべき事として、弥生時代中期中頃に属すると思われる甕棺の口縁部が一点出土しており、沖縄県内初の出土である。交易品であることは明らかであるが、産地や沖縄での甕棺の用途など不明な点は多い。産地などは今後の胎土分析等にゆだねられる事も大きいが、本貝塚から出土する九州弥生土器が南部九州系のものが多いことからも、南部九州を経由して本貝塚に甕棺が持ち込まれた可能性が高いと思われる。

これらの九州弥生土器の出土は、18～20類土器と22類土器と混在しており、層位的状況は把握できない。本類の出土地区は特に「そ－98」に集中しており、そのほとんどが板付式系と思われる壷の頸部または胴部である。また甕棺が出土した地区は「し－102」であるが、在地土器との混在した出土状況は変わらないが、やや19類土器の出土数が多いことのみ言える。

23類土器のスセン當式土器は、出土数は少ないが、口縁部から底部まで残存する資料が得られたことは、全体像を把握する重要な成果である。復元資料によると、器形は口唇部が方形を呈し、口縁部は外反し、頸部はくびれ、「く」の字状に屈曲し、直線的に胴部へいたる。底部は中空の脚台となる。口唇部から肩部にかけて細長い楕円形の突帯を貼り付け、胴部への移行部に微弱な突帯を貼り付ける。口縁部のみの資料では、口唇部が舌状もしくは方形を呈し口縁部は直立するものもみられる。本類土器は局地的な出土分布を示し、底部も含めた十六点中十二点が「す－92」地区から出土した。当該地区に限れば、18類土器は僅かに出土し、21類土器は出土しない。23類土器全出土地区についても同様であるが、22類土器は僅かに存在し、20類土器の出土が最も多く、次に19類土器である。

24類土器の不明土器のなかで第25図232・233のように表裏面に文様を施文する土器は奄美地域と沖縄地域で類例資料がみられ、特に沖縄地域では沖縄本島北部及び周辺離島に偏りがみられることが宮城弘樹氏により指摘されている（注14）。本貝塚でも微量ながら出土しているが、奄美諸島系土器との判別ができず不明とした。

本貝塚出土の弥生から古墳時代並行期の土器を今一度整理すれば、在地土器では尖底土器を主体とする土器型式、九州弥生土器及び奄美諸島系土器では弥生時代前期から中期の土器型式、そして古墳時代並行期とされるスセン當式土器が得られた。特に在地土器では尖底土器群に続く平底土器群のアカジャンガー式土器やフェンサ下層式土器は得られなかったが、このことは本貝塚の遺跡が砂丘に立地（注15a・b）していることによるものと思われる。

注1　高宮廣衞ほか　一九九九　『沖国大考古』十二　沖縄国際大学文学部考古学研究室

注2　新里貴之　一九九九　「南西諸島における弥生並行の土器」『人類史研究』十一　人類史研究会

注3　宮城弘樹　一九九七　「弥生時代並行期の沖縄在地土器の編年」『沖縄考古学会定例会　レジュメ』沖縄考古学会

注4　松川章ほか　一九九三　『嘉門貝塚B』　浦添市教育委員会

注5　宮城朝光ほか　一九七七　『島嶼の考古』創刊号　沖国大考古学研究会

注6　高宮廣衞ほか　一九九三　「読谷村大当原貝塚発掘調査概報」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』十七　読谷村立歴史民俗資料館

注7　新里貴之　二〇〇四　「沖縄諸島の土器」『考古資料大観　十二　貝塚後期文化』　小学館

注8　島袋洋ほか　一九九六　『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県教育委員会

注9　注7と同じ

注10　上村俊雄・本田道輝　一九八四　「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」『鹿大考古』二　鹿児島大学法文学部考古学研究室

注11　新里貴之　二〇〇〇　「スセン當式土器」『琉球・東アジアの人と文化（上巻）　高宮廣衞先生古稀記念論集』　高宮廣衞先生古稀記念論集刊行会

注12　岸本利枝ほか　一九九六　『部瀬名貝塚』　名護市教育委員会

注13　岸本義彦ほか　二〇〇〇　「沖縄編年後期の土器様相について」『琉球・東アジアの人と文化（上巻）　高宮廣衞先生古稀記念論集』　高宮廣衞先生古稀記念論集刊行会

注14　宮城弘樹　一九九八　「貝塚時代後期の研究（Ⅰ）－部瀬名貝塚出土表裏面有文土器資料に着目して－」『あじまぁ』八　名護市立博物館

注15ａ　藤本強　一九九八　『もう二つの日本文化　－北海道と南島の文化－』　東京大学出版会

注15ｂ　宮城弘樹　二〇〇〇　「貝塚時代後期土器の研究（Ⅱ）－後期遺跡の集成－」『南島考古』一九　沖縄考古学会

表1．土器観察表（18類～24類）

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
1	た	Ⅲ	18類	無文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	7	－
1	92	213.5～184.5	－	口縁部	良好	石・長>石？	黄褐色	－	－
1	そ	Ⅲ	18類	無文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	5～6	－
2	96	214.5	－	口縁部	良好	石・長>角>ガ>石	赤褐色	－	－
1	た	Ⅲ	18類	無文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色	5～7	－
3	96	119	－	口縁部	良好	ガ>石・長	赤褐色	－	－
1	そ	Ⅲ	18類	無文	深鉢形・甕形	泥質	暗茶褐色	6～8	－
4	92	北壁	－	口縁部	良好	チ>石	茶褐色	－	－
1	そ・た	Ⅲ	18類	無文	深鉢形・甕形	砂泥質？	褐色	7～9	－
5	92	177.5～155	－	口縁部	良好	石・長>チ>石>赤	暗黄褐色	－	－
1	た	Ⅲ	18類	無文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	8～10	－
6	95	130.8	－	口縁部	良好	石・長>石>角	赤褐色	－	－
1	そ	Ⅲ	18類	無文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	8	24
7	95	205.4	－	口縁部	良好	石・長>石灰	褐色	－	－
1	ち	Ⅲ	18類	無文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	10～15	－
8	92	191.8	－	口縁部	良好	石・長>角>赤	褐色	－	－
1	し・そ	Ⅲ	18類	無文	深鉢形・甕形	泥質	淡褐色及び淡黄褐色	8～9	27.2
9	91・92	216.5/196	－	口縁部	良好	石・長>赤>角	暗褐色及び黄褐色	－	－
1	す	Ⅱ	18類	無文	深鉢形・甕形	砂質	淡赤褐色	8～10	25.4
10	101	269/232	－	口縁部	良好	砂	淡茶褐色	－	－
2	せ・た	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	6～8	36.4
11	92	181/148.5	文様1群	口縁部	良好	石・長>角>石	赤褐色	－	－
2	け	Ⅳ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色	4～7	－
12	100	95	文様1群	口縁部	堅緻	石>石・長>角>ウ	黄褐色及び褐色	－	－
2	た	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	4.5～8.5	－
13	96	175.2	文様1群	口縁部	やや良好	石・長>チ>石	暗褐色及び黒褐色	－	－
2	そ	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗黄褐色及び暗褐色	6.5～7	22.2
14	99	248/191	文様1群	口縁部	やや良好	石>石・長>角>ウ	赤褐色	－	－
2	ち	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色及び黒褐色	7	16
15	94・95	94.1/75.9	文様2群	口縁部	良好	石・長>石>千>赤>チ	黒褐色	外耳20	－
2	ち・つ	Ⅳ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	7～12.5	－
16	95	83.6/68.3	文様2群	口縁部	やや良好	石・長>石>千？	褐色	－	－
2	て	4	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	12	21.6
17	93	197.7	文様2群	口縁部	良好	石・長>チ>石	赤茶褐色	－	－
2	さ・し	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	7～10	－
18	92	107.5/71	文様2群	口縁部	良好	石>石・長>	褐色	－	－
3	せ	かく乱	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	4～6	－
19	95	－	文様3群	口縁部	良好	石・長>角>石	淡褐色	－	－
3	た	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色及び暗茶褐色	7～9.5	－
20	92	209/201.5	文様3群	口縁部	良好	角>石・長>石	褐色	－	－
3	す	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色及び黒褐色	6～8	16.8
21	102	－	文様3群	口縁部	良好	石>石・長	黒褐色	－	－
3	し	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色	6	－
22	101	－	文様4群	口縁部	良好	石・長>石	橙褐色	－	－
3	し	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	7	－
23	101	269/243	文様4群	口縁部	良好	石・長>石	黄褐色	－	－
3	し	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡黄褐色	7	－
24	102	－	文様4群	口縁部	良好	石・長>石	暗褐色	－	－
3	そ	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	5～6	－
25	99	北壁	文様4群	口縁部	良好	石・長>チ？>石	淡黄褐色	－	－
3	し・す・せ	Ⅲ溝	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	8～12	－
26	92	101.3	文様4群	口縁部	やや不良	石・長>石>千？	黄褐色及び褐色	－	－
3	た	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡黄褐色	6～8	－
27	92	213.5/184.5	文様4群	口縁部	良好	石・長>角>石>ガ？	淡黄褐色	－	－
3	そ	Ⅲ	18類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	7～8	18.8
28	99	248.5/243	文様4群	口縁部	良好	石	暗茶褐色	－	－
4	せ	Ⅲ	19類	無文	壺形	泥質	褐色	6～7	7.4
29	92	185/167	－	口縁部	良好	石・長>石>角？	褐色	－	－

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
4	さ	Ⅲ	19類	無文	壺形	砂質	淡褐色	7～7.5	7.8
30	99	258/203	−	口縁部	良好	石・長？>黒>赤	淡褐色	−	−
4	た	Ⅲ	19類	無文	壺形	砂質	淡褐色及び淡黄褐色	8～9.5	7.35
31	91・92	213.5/174	−	口縁部	堅緻	石・長>角>石	淡褐色及び淡黄褐色	−	−
4	ち	Ⅲ	19類	無文	壺形	泥質	茶褐色	9～10	18.4
32	94・95	94.1/75.9	−	口縁部	良好	赤>石	茶褐色	−	−
4	こ	かく乱	19類	無文	壺形	泥質	褐色	6.5～11	−
33	95	−	−	口縁部	良好	石・長>石	褐色	−	−
4	た	Ⅲ	19類	無文	壺形	泥質	淡黄褐色	9～13	−
34	94	130.8/110.1	−	胴部	良好	黒>赤>石・長>石	淡黄褐色	−	−
5	そ	Ⅳ	19類	無文	深鉢形・甕形	泥質	暗茶褐色及び黄褐色	5～9	25.6
35	92	163/114.2	−	口縁部	良好	石>石・長>千？	褐色	−	−
5	ち	Ⅳ	19類	無文	深鉢形・甕形	泥質	褐色及び黄褐色	6～9	22.2
36	98	179/149	−	口縁部	良好	石>赤>角	暗茶褐色及び褐色	−	−
5	そ	Ⅲ	19類	無文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色及び黒褐色	6～8	25.4
37	93・97	208.3/195.8	−	口縁部	良好	石・長>チ	黄褐色及び黒褐色	−	−
5	そ	Ⅲ	19類	無文	深鉢形・甕形	泥質	暗茶褐色	7	−
38	92	102.1	−	口縁部	やや良好	石・長>石	赤褐色	−	−
5	さ	Ⅱ	19類	無文	深鉢形・甕形	砂泥質	赤褐色	5～8.5	−
39	100	140	−	口縁部	堅緻	角>赤>石	褐色及び暗褐色	−	−
5	ち	Ⅲ	19類	無文	深鉢形・甕形	泥質	褐色及び黄褐色	6～11	14.2
40	94	125.1/86.1	−	口縁部	良好	石・長>石>チ？>赤	茶褐色及び暗褐色	−	−
5	ち	Ⅲ	19類	無文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	6～8	18.6
41	94	81.3/75.4	−	口縁部	良好	石>石・長>赤	褐色及び黒褐色	−	−
5	た	Ⅲ	19類	無文	深鉢形・甕形	砂質	淡黄褐色及び黒褐色	5.5～8	20.4
42	94	183.5	−	口縁部	良好	石・長>チ>石>赤	黒褐色及び赤褐色	−	−
6	そ	Ⅲ	19類	無文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	10	−
43	91	214.8/195.5	−	口縁部	良好	石>石・長>	暗黄褐色	−	−
6	そ	Ⅲ	19類	無文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色	7～11	−
44	91	226/219	−	口縁部	良好	赤>角？	淡褐色	−	−
6	つ	Ⅲ	19類	無文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色	5～7	−
45	92	200.7	−	口縁部	やや不良	石>石・長	茶褐色	−	−
6	そ	Ⅲ	19類	無文	深鉢形・甕形	泥質	赤褐色	7～10	−
46	96	207.7	−	口縁部	良好	石・長>石>赤	赤褐色	−	−
6	ち	Ⅲ	19類	無文	深鉢形・甕形	泥質	赤褐色	7～9	−
47	94	77.5/65.2	−	口縁部	良好	石>黒>角>赤	赤褐色及び黄褐色	−	−
6	さ・し	Ⅳ	19類	有文	壺形	砂質	褐色	6～8	−
48	92・93	148.3/104.8	−	胴部	良好	石>石・長>赤	褐色	頸部5.2	−
6	ち	Ⅲ	19類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色及び淡黄褐色	9.5	−
49	94	130.8	−	口縁部	良好	千？>角>石・長>赤	淡褐色	突帯19	−
6	し	Ⅳ	19類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	10～11	27.4
50	95	−	−	口縁部	良好	石>石・長>チ	褐色及び暗褐色	−	−
6	た	Ⅲ	19類	有文	浅鉢形	泥質	暗褐色	6～8	−
51	94	134.5	−	口縁部	良好	石>石・長>角	暗茶褐色	−	−
6	こ・さ	かく乱	19類	有文	深鉢形・甕形	泥質	口縁部付近黒褐色　胴部付近赤褐色	8	37.4
52	97	−	−	口縁部	良好	石・長>石>ウ	口縁部付近黒褐色　胴部付近赤褐色	−	−
7	ち	Ⅲ	20類	無文	壺形	泥質	褐色	9～10	14.2
53	98	277.5/137	−	口縁部	良好	石>石・長>赤>角	口縁付近黄褐色　胴部付近褐色	−	−
7	さ・し	Ⅲ	20類	無文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	6	20
54	92	119.6	−	口縁部	やや不良	石>石・長>赤	上部褐色　下部暗褐色	−	−
7	こ	Ⅳ	20類	無文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色及び赤褐色	8～10	29.7
55	99	237	−	口縁部	堅緻	石>石・長	黄褐色及び赤褐色	−	−
7	せ	Ⅲ	20類	無文	深鉢形・甕形	砂泥質	淡黄褐色	5.5	31
56	92	179.8/179.1	−	口縁部	良好	石>赤>千？	淡黄褐色　口縁部付近黒褐色	−	−
7	そ	Ⅲ	20類	無文	深鉢形・甕形	砂泥質	淡黒褐色及び黒褐色	4.5～8	34.2
57	92	157.5/131.5	−	口縁部	良好	角>石>赤	上部黒褐色　下部赤褐色	−	−
7	せ	Ⅲ	20類	無文	深鉢形・甕形	砂質	褐色及び口縁部付近黒褐色	5～7	31
58	91・92	223.5/204.5	−	口縁部	良好	石	褐色及び口縁部付近黒褐色	−	−
8	せ	Ⅲ	20類	無文	深鉢形・甕形	泥質	暗灰褐色　一部黄褐色	6	23.1
59	91・92	223.5/173.4	−	口縁部	良好	角>石>赤	褐色　一部淡褐色	−	−

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
8	す	Ⅲ溝	20類	無文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色　一部黒褐色	7	37
60	92	120.7/93	−	口縁部	良好	石>石・長>	黄褐色　一部黒褐色	−	−
8	せ	Ⅳ	20類	無文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色　一部褐色	5～6	26.6
61	92	166.7	−	口縁部	良好	石>千>石・長	褐色　一部黄褐色	−	−
8	せ	Ⅲ溝	20類	無文	深鉢形・甕形	砂泥質	淡黄褐色	4.5～6	22.3
62	92	117.5	−	口縁部	やや良好	石>千？>赤>石・長	淡褐色　下部暗褐色	−	−
8	つ	Ⅲ	20類	無文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	4	8.5
63	92	241.5/216.1	尖底	口縁部～底部	良好	石>石・長>千？	黄褐色　一部黒褐色	底面9	−
8	ち	Ⅲ	20類	無文	深鉢形	砂質	褐色　底面黒褐色	4～7	11.9
64	95	104.8/82.3	乳房状尖底	口縁部～底部	良好	石>石・長>角	褐色　一部黒褐色　底面褐色	底面12～19	−
8	そ	Ⅲ	20類	無文	浅鉢形	泥質	淡黄褐色	7	−
65	91・92	216	−	口縁部	良好	石>石・長>チ	淡黄褐色	−	−
8	せ	Ⅲ	20類	無文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色	6～12	−
66	91・92	211.8	−	口縁部	良好	石>赤>石・長	暗褐色　下部黒褐色	−	−
9	ち	Ⅳ	20類	有文	壺形	泥質	淡黄褐色	4.5～6	−
67	94	99.4	文様1群	口縁部	良好	石・長>赤>石>チ	褐色及び黄褐色	−	−
9	そ	Ⅲ	20類	有文	壺形	砂質	淡褐色	6～10	−
68	91・92	210.7/196	文様1群	口縁部	堅緻	石>千？	淡褐色	−	−
9	せ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色	5.5	−
69	92	198/181	文様1群	口縁部	やや良好	石	淡褐色	突帯部15	−
9	た	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色	6	−
70	97	176.4	文様1群	口縁部	良好	赤>石	茶褐色	突帯19	−
9	さ	Ⅳ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗黄褐色	7.5	−
71	92・93	145/140.2	文様1群	口縁部	堅緻	チ>石	黄褐色	突帯11	−
9	せ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡褐色	5.5	−
72	91	208.9	文様1群	口縁部	堅緻	石・長>石	暗褐色	突帯部15	−
9	せ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡褐色	5～6	29.4
73	91	201.1	文様1群	口縁部	堅緻	石>赤	暗褐色及び淡褐色	−	−
10	す	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色及び淡褐色	6	34.4
74	92	128.8	文様1群	口縁部	やや良好	石>角>赤	黄褐色及び暗褐色	−	−
10	そ	かく乱	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色	8～12	−
75	90	248.5/211	文様1群	口縁部	良好	石>石・長>白ウ・ガ	暗黄褐色　口縁部黒褐色	−	−
10	し	Ⅳ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色　口唇部黒褐色	7	−
76	99・100	205/190	文様1群	口縁部	良好	石・長>角	暗褐色	突帯14	−
10	た	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色　口唇部黒褐色	6～7	−
77	94	154.6	文様1群	口縁部	やや良好	石・長>石	淡黄褐色	−	−
10	す	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色及び暗褐色	7～11	−
78	92	135.3	文様1群	口縁部	やや良好	石・長>角	黄褐色及び暗褐色	−	−
10	せ	Ⅲ溝	20類	有文	深鉢形・甕形	砂泥質	黄褐色　一部黒褐色	7	−
79	92	64	文様1群	口縁部	良好	石・長>石	黄褐色　一部黒褐色	突帯15	−
10	さ・し	Ⅳ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色及び黄褐色	8	32.4
80	92・93	156.5/135.1	文様1群	口縁部	良好	石・長>石	暗茶褐色	突帯12	−
10	せ	かく乱	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色及び褐色	6.5～7	−
81	94	−	文様1群	口縁部	良好	石・長>チ>石	黄褐色及び褐色	−	−
11	す・せ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂泥質	暗褐色　一部黄褐色	9～11.5	36.4
82	91・92	99.4/64	文様1群	口縁部	良好	石・長>赤>千？	褐色	−	−
11	せ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡褐色　一部褐色	4～6	36.6
83	92	125.8	文様1群	口縁部	良好	石・長>赤>黒>石	淡褐色　一部褐色	−	−
11	そ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	5.5～10	−
84	93	193.4	文様2群	口縁部	良好	石・長>石	赤褐色　胴部黒褐色	−	−
11	ち	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色及び黒褐色	5～9.5	−
85	96	107.7	文様2群	口縁部	良好	石・長>石>ウ？	褐色及び黒褐色	−	−
11	さ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	6～8.5	−
86	91	105.5/50.5	文様2群	口縁部	良好	石・長>石	褐色	−	−
11	さ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂泥質	赤褐色	5～9	−
87	92	114/100	文様2群	口縁部	良好	石	赤褐色	−	−
11	そ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	6～9	−
88	91・92	203.4	文様2群	口縁部	良好	石>赤>	暗黄褐色	−	−
12	そ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗茶褐色	6～13	20.4
89	91・92・93	251/185.3	文様3群	口縁部	良好	石>石・長>赤	赤褐色	−	−

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
12	ち	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色及び淡褐色	7	−
90	95	109.4	文様3群	口縁部	良好	石・長>石>千？>赤	黄褐色及び淡褐色	−	−
12	そ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡褐色	6	−
91	92	206/196	文様3群	口縁部	良好	石・長>石	黄褐色	−	−
12	さ・し	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	7	−
92	92	142/107.5	文様3群	口縁部	良好	石・長>千>赤>角	褐色	−	−
12	た	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡褐色	7～8	−
93	96	185.6	文様3群	口縁部	良好	石・長>石	淡褐色　胴部付近褐色	−	−
12	さ	Ⅳ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡暗褐色	5～9	−
94	94	147.6	文様3群	口縁部	良好	石>赤	淡黄褐色	−	−
12	そ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡黄褐色	7～8	−
95	91	北壁	文様3群	口縁部	堅緻	石>角	淡黄褐色	−	−
12	し・す	かく乱	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗黄褐色　一部黒褐色	7～7.5	30
96	95	−	文様3群	口縁部	良好	石	淡黄褐色　一部黒褐色	−	−
13	そ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	9	−
97	92	177/161.5	文様4群	口縁部	良好	石・長>石	赤褐色	−	−
13	た	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色	6～7	−
98	92	177.5/150	文様4群	口縁部	良好	石・長>チ	褐色及び黄褐色	−	−
13	さ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	黒褐色	4～5	−
99	92	135/115.5	文様4群	口縁部	堅緻	石	黒褐色及び暗茶褐色	−	−
13	そ	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色	6	−
100	93	160/148.5	文様4群	口縁部	良好	石>石・長>赤	茶褐色	−	−
13	さ・し	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	6	−
101	92	121.9	文様4群	口縁部	良好	石>赤	褐色	−	−
13	す	Ⅲ	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色及び褐色	6	−
102	92	120.5	文様4群	口縁部	やや良好	石・長>石>赤	黒褐色	−	−
13	す	Ⅲ溝	20類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	6	32
103	92	83/75	文様4群	口縁部	やや不良	石・長>石>千？>赤	黄褐色　一部暗黄褐色	−	−
14	し	Ⅲ溝	在地土器	無文	−	泥質	淡黒褐色　一部黒褐色	8.5	−
104	91	121/66	尖底	底部	良好	石>黒>赤	赤褐色	底面3.2	−
14	す	Ⅲ溝	在地土器	無文	−	砂質	底面黒色及び淡黄褐色	6	−
105	92	141	尖底	底部	やや良好	石>石・長>赤	淡黄褐色	底面15.5	−
14	せ	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	淡赤褐色	6	−
106	91	224.4	尖底	底部	堅緻	石>赤	淡赤褐色	底面9.5	−
14	す・せ	Ⅲ溝	在地土器	無文	−	砂質	赤黄褐色	6.5	−
107	92	96.2/55	尖底	底部	良好	石・長>石>千？	赤褐色	底面16	−
14	さ	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	暗褐色	4	−
108	92	122	尖底	底部	良好	石>石・長>赤	暗茶褐色	底面17	−
14	せ	Ⅲ溝	在地土器	無文	−	砂質	淡黄褐色	6	−
109	92	132.3	尖底	底部	やや良好	千？>石>角	赤褐色及び淡褐色	底面13.5	−
14	せ	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	淡褐色	6	−
110	91	224.4	尖底	底部	良好	石>赤	淡黄褐色	底面10	−
14	た	Ⅲ	在地土器	無文	−	砂質	茶褐色	12	−
111	96	183.3	尖底	底部	良好	石・長>石>チ？	褐色	底面30	−
14	せ	かく乱	在地土器	無文	−	泥質	淡褐色	8	36.6
112	90・91	−	尖底	底部	良好	石>赤>石・長	淡褐色	底面7	−
14	つ	かく乱	在地土器	無文	−	砂質	不明	不明	−
113	89	−	乳房状尖底	底部	良好	石・長>石	赤茶褐色	−	3.4
14	た	Ⅲ	在地土器	有文	−	泥質	黄褐色	9	−
114	92	213.5/184.5	乳房状尖底	底部	良好	石・長>石	赤褐色	底面32.5	4.1
14	せ	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	赤褐色	9.5	−
115	92	198/181	乳房状尖底	底部	良好	石>石・長	赤褐色	底面24	−
14	し	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	暗褐色	−	−
116	94	162.6	乳房状尖底	底部	良好	石・長>石	淡褐色	底面34	−
14	さ	Ⅲ	在地土器	無文	−	砂質	淡黄褐色	−	−
117	99	240/235	乳房状尖底	底部	良好	石>赤	淡赤褐色	底面29	−
14	た	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	淡褐色	10	−
118	95	163.8	乳房状尖底	底部	良好	石・長>石>千？	淡褐色	底面31	4.2
14	そ	Ⅲ	在地土器	無文	−	砂質	淡褐色及び暗褐色	6～9	−
119	96	南壁	乳房状尖底	底部	良好	石・長>千？>石	黄褐色及び暗褐色	底面19	4.2

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
14	さ	Ⅱ	在地土器	無文	−	泥質	褐色	7	−
120	100	−	乳房状尖底	底部	良好	石>石・長	暗茶褐色及び黒褐色	底面13	−
14	せ・そ	Ⅳ	在地土器	無文	−	泥質	淡黄褐色	6	−
121	91･92	110.5	乳房状尖底	底部	良好	赤>石>角	淡黄黒褐色	底面6	4.2
14	た	Ⅲ	在地土器	無文	−	砂質	黒褐色	8.5	−
122	92	212/209	乳房状尖底	底部	良好	赤>角>石	淡赤褐色	底面18	3
15	こ・さ	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	暗茶褐色	3	−
123	92	141.5/119.5	平底	底部	良好	石>赤>千？	褐色	底面7.5	5
15	せ	Ⅲ溝	在地土器	無文	−	砂質	黒褐色		−
124	92	145.5/96.5	平底	底部	良好	石>石・長>	黒褐色	底面9	4.4
15	た	Ⅲ	在地土器	無文	−	砂泥質	赤褐色　一部黒色	8	−
125	92	213.5/184.5	平底	底部	良好	石・長>石	赤褐色	底面11.5	4.4
15	ち	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	淡褐色	8	−
126	92	210	平底	底部	良好	石>石・長〉角>赤	暗褐色	底面14.5	5.5
15	ち	Ⅲ	在地土器	無文	−	砂質	黒褐色	12	−
127	91	227.5/222	平底	底部	堅緻	石・長>石>ウ	暗灰褐色	底面15	7.6
15	す	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	淡褐色　一部黒褐色	5	−
128	91･92	142.2	平底	底部	堅緻	石・長>石	淡褐色	底面15	6.6
15	た	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	暗赤褐色	6	−
129	92	204.3	平底	底部	良好	石・長>角>石	赤褐色	底面28	3.9
15	こ	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	黒褐色	6	−
130	96	−	平底	底部	良好	石・長>石	淡褐色	底面22	5.7
15	そ	Ⅳ	在地土器	無文	−	砂質	淡灰褐色	6	−
131	92	134.9/134.8	平底	底部	良好	石・長>角>石	淡黒褐色	底面10	4.4
15	た	Ⅲ	在地土器	無文	−	砂質	淡赤褐色一部黒褐色	6	−
132	92	213.5/184.5	平底	底部	良好	角>石	淡赤褐色　一部黒褐色	底面10.5	3.3
15	た	Ⅲ	在地土器	無文	−	砂質	黒褐色	8	−
133	92	196.6/188	平底	底部	良好	石・長>角>石>ウ	淡茶褐色	底面13.5	3.6
15	そ	Ⅲ	在地土器	無文	−	砂質	淡赤褐色	12	−
134	92	216.5/209	くびれ平底	底部	良好	石・長>石	赤褐色	底面24.5	3.9
15	ち	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	淡黄褐色	11	−
135	91	227.5/222	くびれ平底	底部	良好	石・長>角	赤褐色	底面32.5	4.6
15	せ	Ⅲ	在地土器	無文	−	砂泥質	淡赤褐色	5	−
136	92	155/119.8	くびれ平底	底部	良好	石・長>石>赤	淡赤褐色	底面14	4.6
15	ち	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	淡褐色	6	−
137	91	216.5/201	くびれ平底	底部	良好	赤>角	暗褐色	底面23	5.1
15	さ・し	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	黒褐色	−	−
138	92	142/107.5	くびれ平底	底部	良好	石>千？>石・長	淡褐色	底面10	5.6
15	そ	Ⅲ	在地土器	無文	−	砂質	黄褐色	5	−
139	93	176/161	くびれ平底	底部	良好	石>石・長	黄褐色	底面17	6
15	と	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	黄褐色	5	−
140	95	191.2	くびれ平底	底部	良好	石・長>石	褐色	底面9	8
15	ち	Ⅲ	在地土器	無文	−	泥質	赤褐色	5	−
141	92	171/154.5	くびれ平底	底部	堅緻	石・長>石>チ	赤褐色	底面13	5
16	こ	Ⅱ	21類	無文	壺形	泥質	乳白色	6	−
142	101	−	−	口縁部	良好	石・長>ウ>砂	乳白色	−	−
16	た	Ⅲ	21類	無文	壺形	砂質	内面淡黄褐色	9	−
143	97	149.1	−	口縁部	やや良好	ガ？>石・長>角>石	外面淡褐色	−	−
16	た	Ⅳ	21類	無文	壺形	砂質	内面暗茶褐色	8	−
144	98	187/183	−	口縁部	良好	石・長>角>赤>ガ？	外面黒褐色	−	−
16	く	Ⅳ	21類	無文	壺形	砂質	淡褐色	7～9	−
145	100	175/160	−	口縁部	良好	石・長>ウ>角>石？	淡褐色	−	−
16	た	Ⅲ	21類	無文	壺形	砂質	淡黄褐色	5～7.5	12.4
146	94	106.2	−	口縁部	良好	石・長>角>赤>ガ？	淡黄褐色	−	−
16	そ	かく乱	21類	無文	壺形	砂質？	灰褐色	6	−
147	92	−	−	口縁部	堅緻	石・長>石	灰褐色	−	−
16	つ	かく乱	21類	無文	壺形	砂質	淡黄褐色	6.5	−
148	89	−	−	口縁部	良好	ウ>石・長>石	淡赤褐色	−	−
16	そ	Ⅲ	21類	無文	壺形	泥質	淡黄褐色　一部黒褐色	6～7	−
149	98	227.5/213	−	胴部	堅緻	石・長>角>石	淡褐色	−	−

挿図番号	グリット	層 レベル（cm）	分類1 分類2	文様 部位	器種 焼成	胎土 混入物	器色（内） 器色（外）	器壁（mm） 部分（mm）	口径（cm） 底径（cm）
16	つ	Ⅲ	21類	無文	深鉢形・甕形	泥質	淡黄褐色	7	−
150	93	247.5/231.2	−	口縁部	良好	なし？	淡黄褐色	口唇部14	−
16	せ・そ	Ⅳ	21類	無文	深鉢形・甕形	泥質	暗茶褐色	9	−
151	91・92	107	−	口縁部	良好	黒＞石	暗茶褐色	−	−
16	し	Ⅲ	21類	無文	深鉢形・甕形	泥質？	黄褐色	14	35.5
152	102	−	−	口縁部	堅緻	石・長＞ウ	黄褐色	口唇部7	−
16	ち	4	21類	有文	壺形	砂質	黄褐色	9	−
153	98	217	−	口縁部	良好	石・長＞ウ＞石	黄褐色	口唇部14	−
16	こ・さ	Ⅱ	21類	有文	深鉢形・甕形	泥質	黒褐色及び褐色	11	29.2
154	101	136	−	口縁部	堅緻	石・長？＞石？	黒褐色及び褐色	突帯部15～21	−
17	ち	Ⅲ	21類	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡褐色	9	−
155	95	118	−	口縁部	良好	石・長＞石＞赤＞角	黄褐色	突帯部14～16	−
17	こ	Ⅱ	21類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色	9	−
156	99	200/165	−	口縁部	良好	ガ＞角＞石・長＞石＞赤	暗黄褐色	突帯部12～12.5	−
17	し	Ⅲ	21類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡黄褐色	7	−
157	102	−	−	口縁部	堅緻	石・長＞石＞赤	淡黄褐色	突帯部13～14	−
17	そ	Ⅳ	21類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	11.5	−
158	92	132.7	−	口縁部	良好	千？＞石＞チ？	淡茶褐色	突帯部20.5～21.5	−
17	そ	Ⅲ	21類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡灰褐色　下部黒色混じり	6	28.4
159	94	208.1/194.5	−	口縁部	良好	石・長＞黒（角？）＞石＞ガ？	灰褐色　口唇部及び突帯部黒色混じり	口唇部9.5 突帯部9～11.5	−
17	し	Ⅲ溝	21類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	11	−
160	91	121/66	−	口縁部	やや良好	石・長＞千？＞赤＞角	淡褐色	−	−
17	さ	Ⅳ	21類	有文	壺形	泥質	淡褐色	7.5～10	−
161	99	240	−	胴部	堅緻	ウ＞石・長＞石	淡黄褐色	−	−
17	さ	Ⅳ	21類	有文	壺形	泥質	淡黄褐色	6.5	−
162	94	−	−	胴部	堅緻	ガ？＞石・長＞ウ＞黒	淡黄褐色	突帯部10.5	−
17	ち	Ⅲ	21類	有文	壺形	砂質	黒褐色	10～13	−
163	95	198/169	−	胴部	良好	石・長＞石＞ウ＞赤（チ？）	茶褐色	−	−
17	ち	Ⅳ	21類	有文	壺形	泥質	黄褐色	6	−
164	98	168.5/156.5	−	胴部	堅緻	石・長＞ガ？＞ウ	淡褐色	突帯部11	−
17	し	Ⅲ	21類	有文	壺形	砂質	灰褐色	7～8	−
165	102	−	−	胴部	良好	石・長＞角＞黒？＞石	乳白色	突帯部12	−
17	そ	Ⅲ	21類	有文	壺形	砂質	黄褐色	6～9	−
166	92	90	−	胴部	良好	石・長＞角＞ガ？＞赤	淡褐色	−	−
17	せ	Ⅳ	21類	有文	壺形	砂質	褐色	7～11	−
167	91	185.5/162	−	胴部	堅緻	ウ＞石	暗褐色	−	−
17	そ	Ⅲ	21類	有文	壺形	砂質	淡黄褐色	4～6	−
168	98	214/201	−	胴部	良好	石・長＞角＞ガ？	淡黄褐色	−	−
18	ち	Ⅲ	21類	無文	高杯形	砂質	暗褐色	5～9	−
169	98	156.5/138	−	底部	良好	石＞赤＞黒	暗褐色　一部茶褐色	底面39	2.1
18	こ	Ⅳ	21類	無文	壺形	泥質	褐色	6	−
170	99	237	平底	底部	堅緻	石・長＞石＞角	暗黄褐色	底面6	7.8
18	た	Ⅲ	21類	無文	壺形	砂質	暗黄褐色	15	−
171	96	113.3	平底	底部	良好	石・長＞ガ＞石＞赤＞角	暗黄褐色	底面14	9
18	そ	Ⅲ	21類	無文	壺形	泥質	淡黄褐色　一部灰褐色	6～7	−
172	98	230.5/218	平底	底部	堅緻	石・長＞角＞石	外面橙褐色　外底面黄褐色	底面10	8
18	す	かく乱	21類	無文	壺形	砂質	淡黄褐色	9	−
173	94	−	平底	底部	良好	角＞石＞ガ	淡茶褐色	底面17	7.3
18	さ	かく乱	21類	無文	深鉢形・甕形	砂質	灰褐色	立ち上がり6 脚部14～16	−
174	97	−	脚台	底部	堅緻	石・長＞ガ＞	褐色～黄褐色　外底面黒褐色	底面20.1	5.8
19	つ	4	22類	無文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	7～14	−
175	93	155.8	−	口縁部	良好	石・長＞千？	淡褐色	−	−
19	つ	Ⅲ	22類	無文	深鉢形・甕形	泥質	赤褐色	9～13	−
176	92	170.2/154.2	−	口縁部	やや良好	石＞石・長＞チ	暗黄褐色	−	−
19	し	Ⅲ	22類	無文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色及び暗茶褐色	7～15	−
177	92	121/102.9	−	口縁部	やや良好	石・長＞石＞ウ	暗褐色	−	−
19	す	Ⅲ	22類	無文	深鉢形・甕形	泥質	暗褐色	8	−
178	90	190.3	−	口縁部	良好	石・長＞石	茶褐色	−	−

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
19	た	Ⅲ	22類	無文	深鉢形・甕形	泥質	淡褐色及び黄褐色	9～16	−
179	96	194.2	−	口縁部	良好	石・長>チ？>ウ	赤褐色	−	−
19	て	4	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色	11	−
180	93	172.7	−	口縁部	良好	石・長>チ>ウ	茶褐色	突帯部14	−
19	け・こ	Ⅳ	22類	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗茶褐色　一部黒褐色	9	−
181	100・101	258	−	口縁部	堅緻	石>石・長	暗茶褐色　一部黒褐色	突帯部14～15	−
19	そ	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	6.5～7.5	13.6
182	98	245/234	−	口縁部	良好	石・長>石>角>ウ	暗褐色及び黒褐色	突帯部12	−
19	た	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	7～8	15.6
183	92	200.8/198.6	−	口縁部	良好	石・長>石>ウ	黒褐色	突帯部14.5	−
19	そ	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	9	29.4
184	91・92	−	−	口縁部	良好	石>石・長	暗茶褐色	突帯部15	−
19	せ	Ⅳ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色及び黄褐色	10.5～12.5	27.2
185	91	141.2	−	口縁部	やや良好	千？>石>石・長>チ？	淡褐色及び黒褐色	突帯部14	−
20	そ	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色及び黄褐色　一部黒褐色	9～9.5	33.7
186	92・93	160/106.2	−	口縁部	やや良好	石>黒>チ？>石・長	褐色及び黄褐色	口唇部24～26 胴部突帯12.5	−
20	た	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡灰褐色	7	−
187	92	213.5/184.5	−	口縁部	良好	石・長>石>ガ？>角>ウ	暗褐色	突帯部11.5	−
20	そ	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	8～14	−
188	96	209.3	−	口縁部	良好	石・長>石>チ	褐色	−	−
20	た	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色及び褐色	7～10	16
189	92	196.7	−	口縁部	良好	石・長>石>ウ>角	暗茶褐色	突帯部12	−
20	そ・た	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色	8	14.1
190	92	213.5/155	−	口縁部	良好	石・長>石>ウ	茶褐色及び黒褐色	突帯部10.5～12	−
20	た	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色一部赤褐色	6～7	23.8
191	95	138.5	−	口縁部	良好	石・長>石	赤褐色	口唇部8 突帯部11	−
20	そ	Ⅳ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色	9	−
192	93	179/158	−	口縁部	不良	石・長>石>ウ？	赤褐色	突帯部17	−
20	そ	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	10	−
193	94	198.9	−	口縁部	良好	石・長>砂	淡褐色	突帯部16	−
20	そ	Ⅳ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	6	−
194	92・93	108	−	口縁部	不良	石	褐色	突帯部14	−
20	そ・た	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	赤褐色	7.5～9	22.6
195	94	198.9/164	−	口縁部	やや良好	石・長>石>チ	暗褐色	−	−
21	た	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	7～11	19.8
196	95	166.3/148.7	−	口縁部	良好	石・長	暗茶褐色　口唇部上面黒褐色	−	−
21	さ	Ⅳ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	8	−
197	93	162/125.5	−	口縁部	やや良好	石・長>石	黒褐色及び褐色	−	−
21	し	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗茶褐色	6.5～10	−
198	102	−	−	口縁部	堅緻	赤>角	暗茶褐色	口唇部3	−
21	さ	かく乱	22類	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色　口唇部先端黒褐色	6.5	−
199	98	−	−	口縁部	堅緻	チ？>ガ？>角	茶褐色　口唇部先端黒褐色	突帯部7.5	−
21	し	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	暗茶褐色	6	−
200	91	114/57.5	−	口縁部	不良	赤>石	赤褐色	肥厚部18	−
21	こ	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	7～11.5	−
201	95	149.2	−	胴部	良好	石・長>石	褐色　下部黒褐色混じり	−	−
21	し	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色及び暗褐色	9	−
202	102	260/256	−	胴部	良好	石>石・長>千？	黄褐色及び褐色	突帯部10～11	−
21	す	Ⅲ溝	22類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	8.5～11	−
203	92	55.8	−	胴部	やや良好	石・長>石>ウ>赤	褐色及び黄褐色	突帯部18	−
21	す	Ⅲ	22類	有文	深鉢形・甕形	泥質	黄褐色及び褐色	7～8	−
204	91・92	151.8/138.7	−	胴部	良好	石・長>石	上部暗茶褐色　下部褐色	突帯部8	−
22	せ	Ⅲ	22類	無文	壺形	砂質	淡褐色	9.5	−
205	92	176/158.5	平底	底部	良好	石・長>角>石>赤	赤褐色	底面13.5	8.5
22	ち	Ⅲ	22類	無文	壺形	砂質	褐色～黄褐色　一部黒褐色	10	−
206	95	76.5	平底	底部	良好	石>千？>黒>石・長	褐色	底面13	10
22	た	Ⅲ	22類	無文	壺形	砂質	暗灰褐色	8	−
207	95	117.7	平底	底部	良好	石・長>石>チ	褐色	底面19	6.4
22	ち	Ⅲ	22類	無文	壺形	泥質	黄褐色～黒褐色	8	−
208	94	93.3	平底	底部	良好	千？>チ	黄褐色	底面17	−

挿図	グリット	層	分類1	文様	器種	胎土	器色（内）	器壁(mm)	口径(cm)
番号		レベル（cm）	分類2	部位	焼成	混入物	器色（外）	部分(mm)	底径(cm)
22	ち	Ⅲ	22類	無文	壺形	砂質	淡黒褐色	7	−
209	96	113.7	平底	底部	やや良好	石・長>石>チ	淡黄褐色	底面15	−
22	そ	Ⅲ	22類	無文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色	5	−
210	93	165.3	乳房状尖底	底部	良好	石・長>石>黒	茶褐色	底面26	4.5
22	た	Ⅲ	22類	無文	深鉢形・甕形	泥質	暗茶褐色	8	−
211	96	121.7	平底	底部	良好	石・長>石	暗茶褐色	底面33	5.4
22	た	Ⅲ	22類	無文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	8	−
212	91	214.8	平底	底部	堅緻	石・長>石	褐色	底面22	5.6
22	た・ち	Ⅲ	22類	無文	深鉢形・甕形	砂質	黒褐色	4	−
213	95	137.6/68.7	くびれ平底	底部	良好	石>千？>石・長	黄褐色～赤褐色　一部黒褐色	底面20	6.1
22	そ	Ⅲ	22類	無文	深鉢形・甕形	泥質	黒褐色	8	−
214	92	89.5	くびれ平底	底部	良好	石>石・長>角>ウ？	茶褐色	底面22	5.2
22	た	Ⅲ	22類	無文	深鉢形・甕形	砂質	茶褐色	7	−
215	95	136	平底	底部	良好	石・長>石	茶褐色	底面29	5.2
22	た	Ⅲ	22類	無文	深鉢形・甕形	砂質	暗褐色	5	−
216	94	140.6	脚台	底部	良好	石・長>石>千？	外底面褐色 立ち上がり部淡黄褐色	底面16	4.2
22	し	Ⅲ	22類	無文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	7	−
217	101	269/243	脚台	底部	堅緻	石・長>石>ウ>角？	褐色　外底面一部灰褐色	底面36	6.2
23	し	Ⅳ	23類	有文	深鉢形・甕形	砂質	淡褐色	9～12	−
218	92	141/127	−	口縁部	良好	石>赤>石・長>角	黄褐色	−	−
23	さ・し	Ⅳ	23類	有文	深鉢形・甕形	砂質	褐色	7～8	−
219	92・93	125.8	−	口縁部	やや良好	石>チ？>ウ	暗褐色	突帯部10	−
23	す	Ⅲ	23類	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗褐色	9	−
220	92	118.7	−	口縁部	良好	石>千？>石・長	暗茶褐色	突帯部6.5	−
23	す	Ⅲ溝	23類	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	8	−
221	91・92	108.3/40	−	口縁部	良好	石>石・長>角>千？>ウ	暗茶褐色　口唇部黒褐色	−	−
23	し・す	Ⅲ溝	23類	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色　一部黒褐色	9	−
222	92	153/73.9	−	胴部	良好	石>千？>ウ	茶褐色　一部黒褐色	−	−
23	さ・す	Ⅲ溝	23類	有文	深鉢形・甕形	泥質	暗茶褐色	7～9	−
223	92	141.1/117.5	−	胴部	良好	石>石・長>角>ウ	暗茶褐色　上部黒褐色	−	−
24	さ・し	Ⅳ	23類	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色　内底面黒褐色	5～7.5	29.2
224	92・93	141/118.9	脚台	口縁部～底部	良好	石・長>石>黒	淡褐色　口縁部～胴部赤褐色及び黒褐色	底面22	−
24	さ～す	Ⅲ溝	23類	有文	深鉢形・甕形	砂泥質	淡褐色	6～9	31
225	92	120.3/34.5	−	口縁部	やや良好	石>石・長>赤	赤褐色　内外面口縁部～肩部一部黒褐色	−	−
24	す	Ⅲ溝	23類	有文	深鉢形・甕形	砂泥質	赤褐色	6.5～10	35
226	92	115.5/34.5	−	口縁部	やや良好	石>石・長>赤	赤褐色　内外面口縁部～肩部一部黒褐色	−	−
24	す	Ⅲ溝	23類	有文	深鉢形・甕形	泥質	黒褐色	胴部7.5 脚部7	−
227	92	115.5 /75	脚台	底部	良好	石>石・長>ウ	茶褐色	底面22	6.1
24	す	Ⅲ溝	23類	無文	深鉢形・甕形	泥質	暗赤褐色	胴部9 脚部12	−
228	92	72.6/34.5	脚台	底部	やや不良	石・長>砂	赤褐色	底面16	6
25	つ	4	24類	無文	壺形	砂質	暗茶褐色	9～12	6.8
229	93	123.7	−	口縁部	良好	石・長>石>チ？	赤褐色	−	−
25	し	Ⅱ	24類	有文	鉢形	泥質	赤褐色	8～10	11.8
230	101	−	−	口縁部	良好	石>石・長>赤	赤褐色　胴部一部黒褐色	−	−
25	し	Ⅲ	24類	有文	深鉢形・甕形	泥質	赤褐色	8	−
231	102	−	−	口縁部	良好	石>石・長>赤	赤褐色　外耳直下一部黒褐色	外耳20	−
25	さ	Ⅳ	24類	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	8	−
232	101	−	−	口縁部	良好	石>千？	褐色	−	−
25	こ	Ⅳ	24類	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡褐色	7	−
233	99	191.5/131.5	−	口縁部	良好	赤>角	暗褐色　口唇部黒褐色	−	−
25	け	Ⅳ	24類	有文	深鉢形・甕形	泥質	淡黄褐色	6～7	−
234	100	175/165	−	胴部	堅緻	赤>石	黒褐色	−	−
25	こ・さ	Ⅱ	24類	有文	深鉢形・甕形	泥質	茶褐色　口唇部一部黒褐色	8	−
235	101	−	−	口縁部	良好	石>赤	暗茶褐色及び黒褐色　下部黄褐色	−	−
25	さ	Ⅱ	24類	有文	深鉢形・甕形	泥質	褐色	8～9	−
236	100	145/100	−	口縁部	良好	石・長>石	褐色	−	−
25	た	Ⅲ	24類	有文	鉢形？	砂質	黒褐色及び暗茶褐色	5～6	10.4
237	94	138	平底	口縁部～底部	良好	石・長>石	黒褐色　外底面側縁部暗茶褐色	底面4	5.2
25	す	かく乱	24類	有文	深鉢形・甕形	砂質	黄褐色　口唇部内面一部黒褐色	6～8	−
238	94	−	−	口縁部	良好	黒>赤>石・長	黄褐色	口唇部16.5	−

混入物の略号

石・長：石英・長石／黒：黒色鉱物／ウ：雲母／千：千枚岩／赤：赤色粒／花：花崗岩類／石：石灰質砂粒／輝：輝石／緑：緑レン岩・緑色岩／角：角閃石／貝：貝殻片／チ：チャート／ガ：火山ガラス

四、石器

石器は一一八九点得られ、その内訳は表4（P222）に示した通りである。

六三点を図化した。以下、資料の概要をⅧ層から各層ごとに述べるが、Ⅴ層およびⅤ・Ⅵ層については時間の都合上、図化は行っていない。図化した資料の法量等は観察表を参考されたい。

（1）Ⅷ層

石斧（第1図1～5）

1は小型の半磨製石斧である。基端部分が破損し、刃部のみ研磨され、他は調整剥離がなされる。左側縁は母岩から剥離した面で、そのままの形状を使用したと思われる。刃縁には僅かな刃こぼれがみられる。緑色片岩製。

2は小型の半磨製石斧である。基端部分及び刃部は破損する。両側縁は粗い調整がなされ、若干雑な作りである。

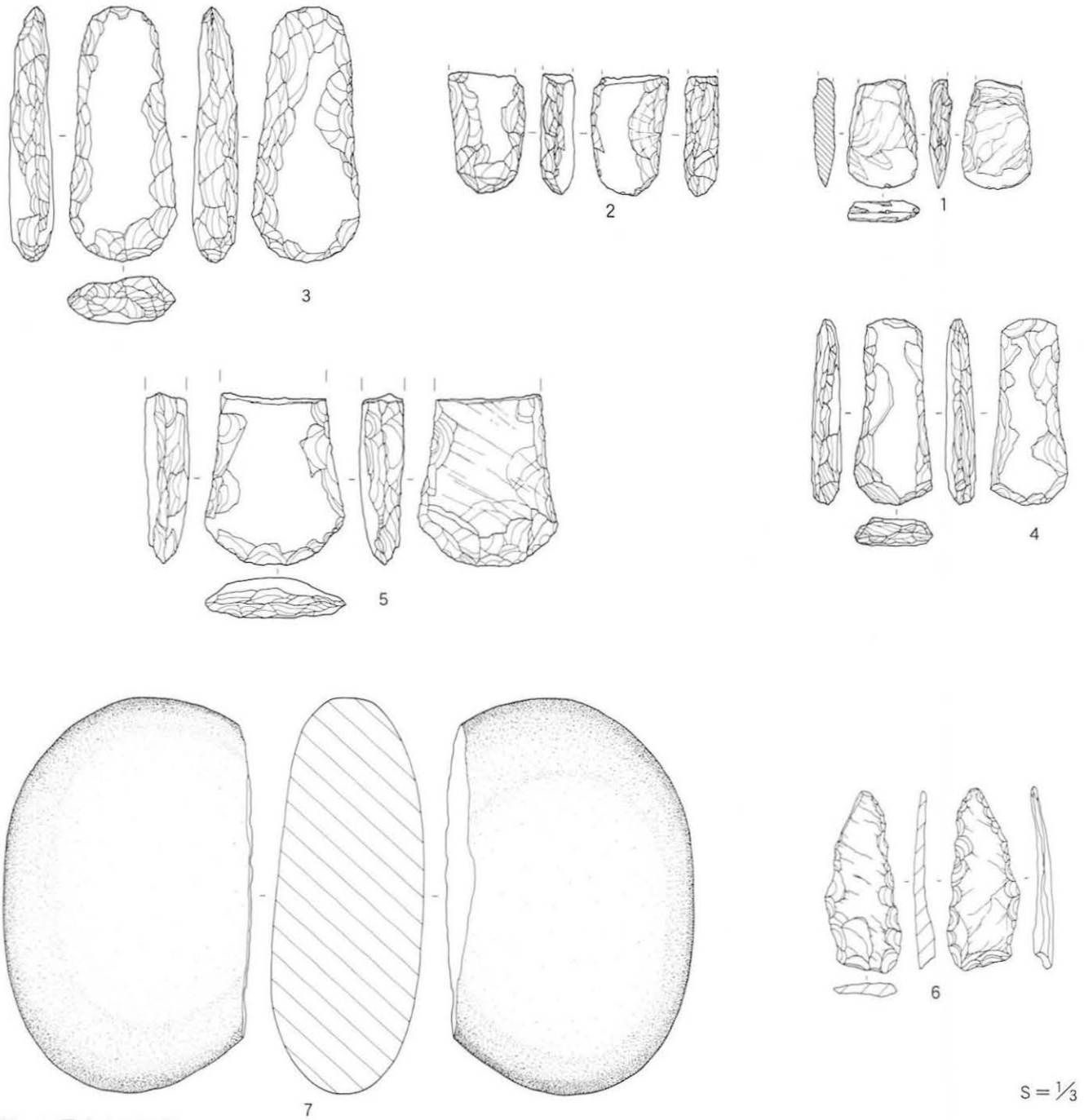
3は半磨製石斧である。完形。平面形が撥形（ばちがた）を呈し、基部周縁が全体的に調整剥離される。砂岩製。

4は小型の打製石斧である。完形。平面形は撥形を呈し、基部側縁及び刃縁は両面とも調整剥離がなされる。表面は母岩面が残るが、裏面は自然面か調整剥離面かは不明である。砂質千枚岩製。

5は打製石斧である。基端部は破損しているが、平面形は撥形を呈すると思われる。基部側縁及び刃縁は両面とも調整剥離がなされる。表面は母岩面が残る。砂質千枚岩製。

石槍状石器（第1図6）

6は石槍状石器である。完形。平面形は二等辺三角形状を呈し、両側縁には調整剥離がなされる。砂粒千枚岩製。

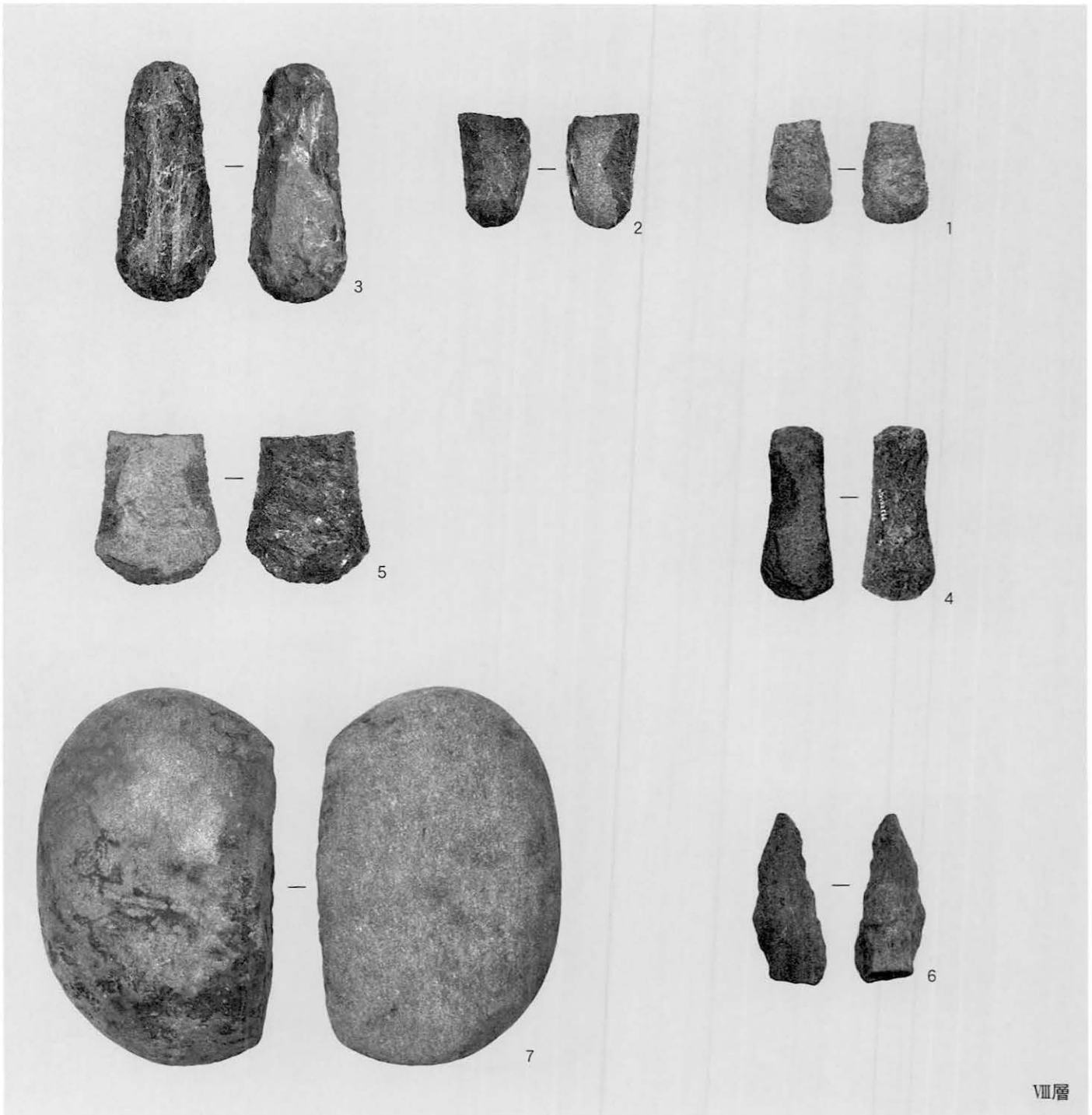


第1図　Ⅷ層出土の石器

磨石（第1図7）
　7は、やや大型の磨石である。側面を欠く破損品である。表裏面に微弱な磨面がみられる。砂岩製。

＊撥形（ばちかた）／三味線の撥（ばち）に似た形のこと。石斧の平面形分類の一例として使用され、石斧の刃部が撥のように広がる資料を呼ぶ。

＊石槍／柄をつけて槍として使用したと考えられる打製石器。



(2) Ⅶ層

石斧（第2図8～10）

8は半磨製石斧である。大部分が破損し、全形状は不明であるが、残部表面は全て研磨され、刃部を形成する。刃縁には刃こぼれが僅かにみられる。裏面は刃部と残部中央に若干研磨面がみられるのみである。緑色岩製。

9は半磨製石斧である。完形。平面形は撥形を呈し、両側縁は形を整えるための調整剥離痕が顕著である。表面は母岩面が残るが、裏面は母岩から剥離された面が残る。刃縁には細かい刃こぼれが観察される。砂質千枚岩製。

10は半磨製石斧である。基端は破損しているが、平面形は短冊形を呈する。刃部を中心に研磨がなされ、両側面には調整剥離がみられる。基部表裏面にも剥離痕がみられるが、調整時の剥離か使用時の剥離かは不明。刃部の摩滅が著しい。輝緑岩（ランプロファイヤー）製。

くぼみ石（第2図11）

11は小型で、卵形を呈するくぼみ石である。完形。表裏面の中央に敲打痕がみられ、窪みを呈する。砂岩製。

敲石（第2図12）

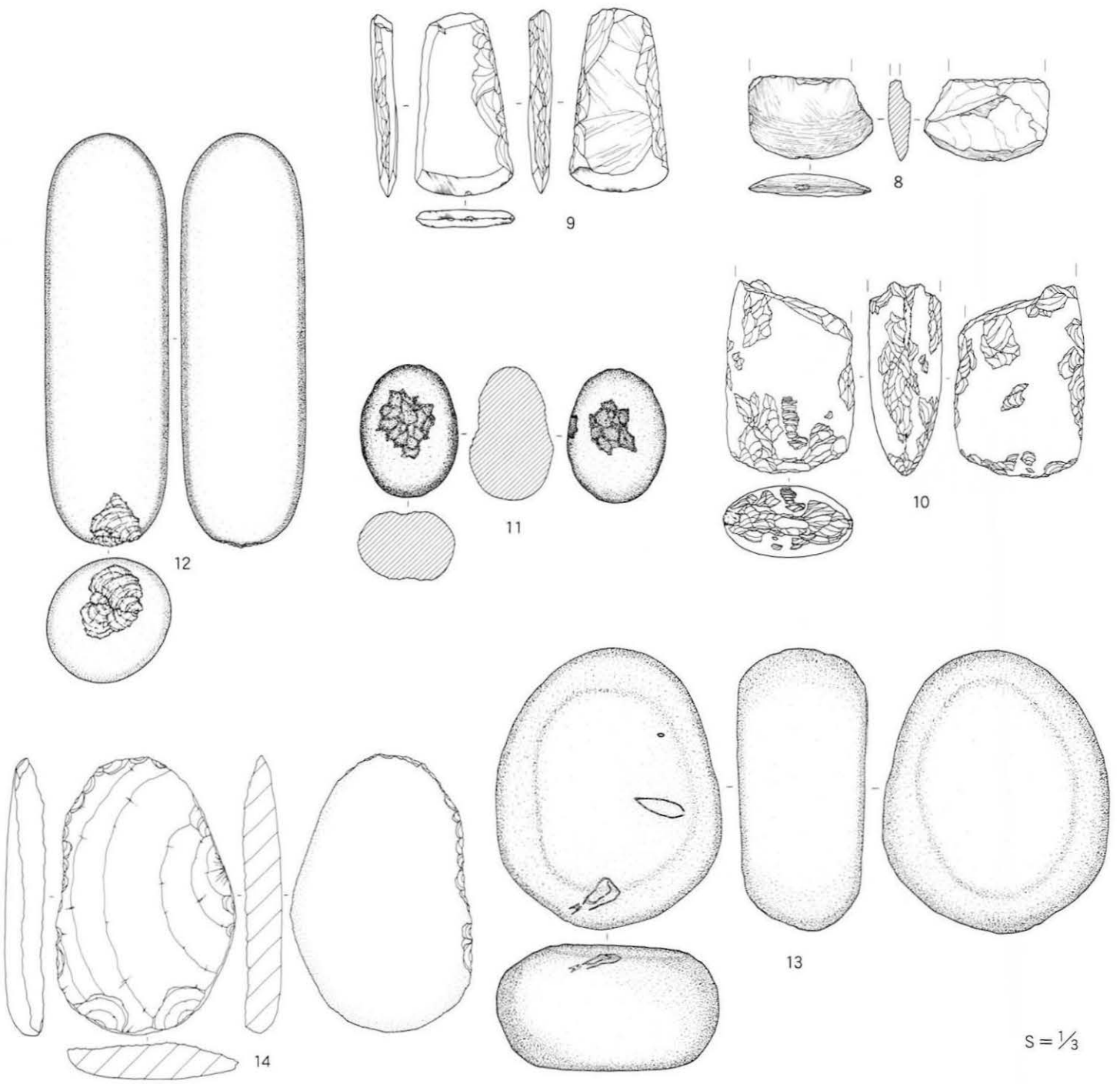
12は棒状を呈する敲石である。完形。下端に敲打痕がみられる。砂岩製。

磨石（第2図13）

13は平面形が卵形を呈する磨石である。完形。表裏面に磨面がみられるが、全体的に器面に蜂の巣状の凹凸がみられる。砂岩製。

スクレイパー（第2図14）

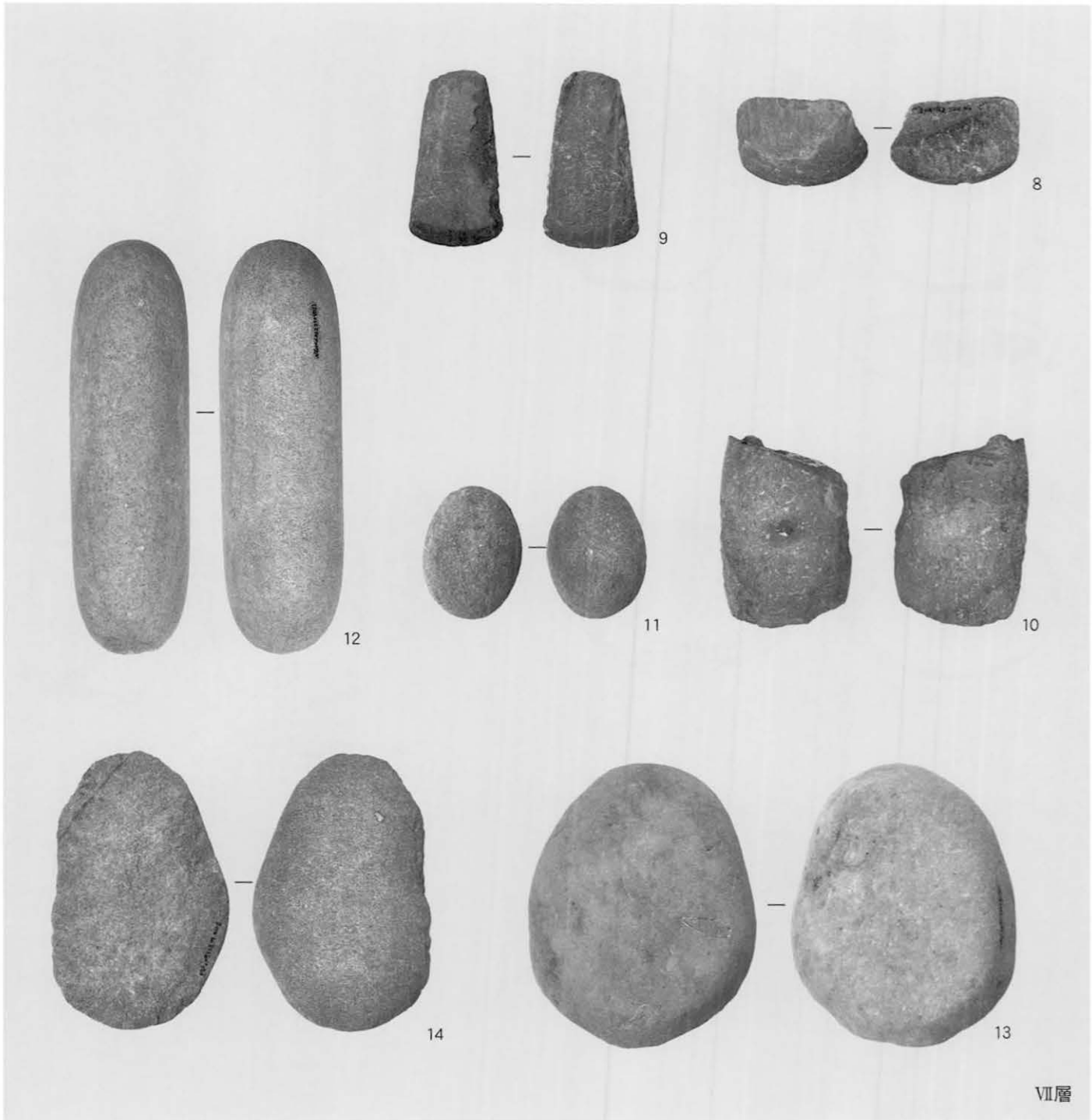
14は横刃形スクレイパーである。やや



第2図　Ⅶ層出土の石器

大型の礫剥片の縁辺部に調整剥離を加え、刃部を形成している。砂岩製。

＊スクレイパー／切ったり、削ったりする石器を総称したもの。加工は、剥片の側縁（縁辺）部にスクレイパー・エッジを作り出したもので、刃縁部分は弧状や直線を呈している。



(3) Ⅵ層

石斧（第3図15・16）

15は打製石斧である。完形。全体的に敲打調整が施される。緑色千枚岩製。

16は半磨製石斧である。完形。平面形は撥形（ばちがた）を呈する。刃部を中心に丁寧な研磨が施されるが、部分的に敲打調整や剥離が深いため、研磨の及ばない箇所も見受けられる。刃部表面には僅かな刃こぼれがみられる。珪長岩製。

スクレイパー（第3図17）

17は縦刃形スクレイパーである。下端部は欠損する。両側縁及び上端にかけて調整を行い、刃部を形成する。砂岩製。

磨石兼敲石（第3図18）

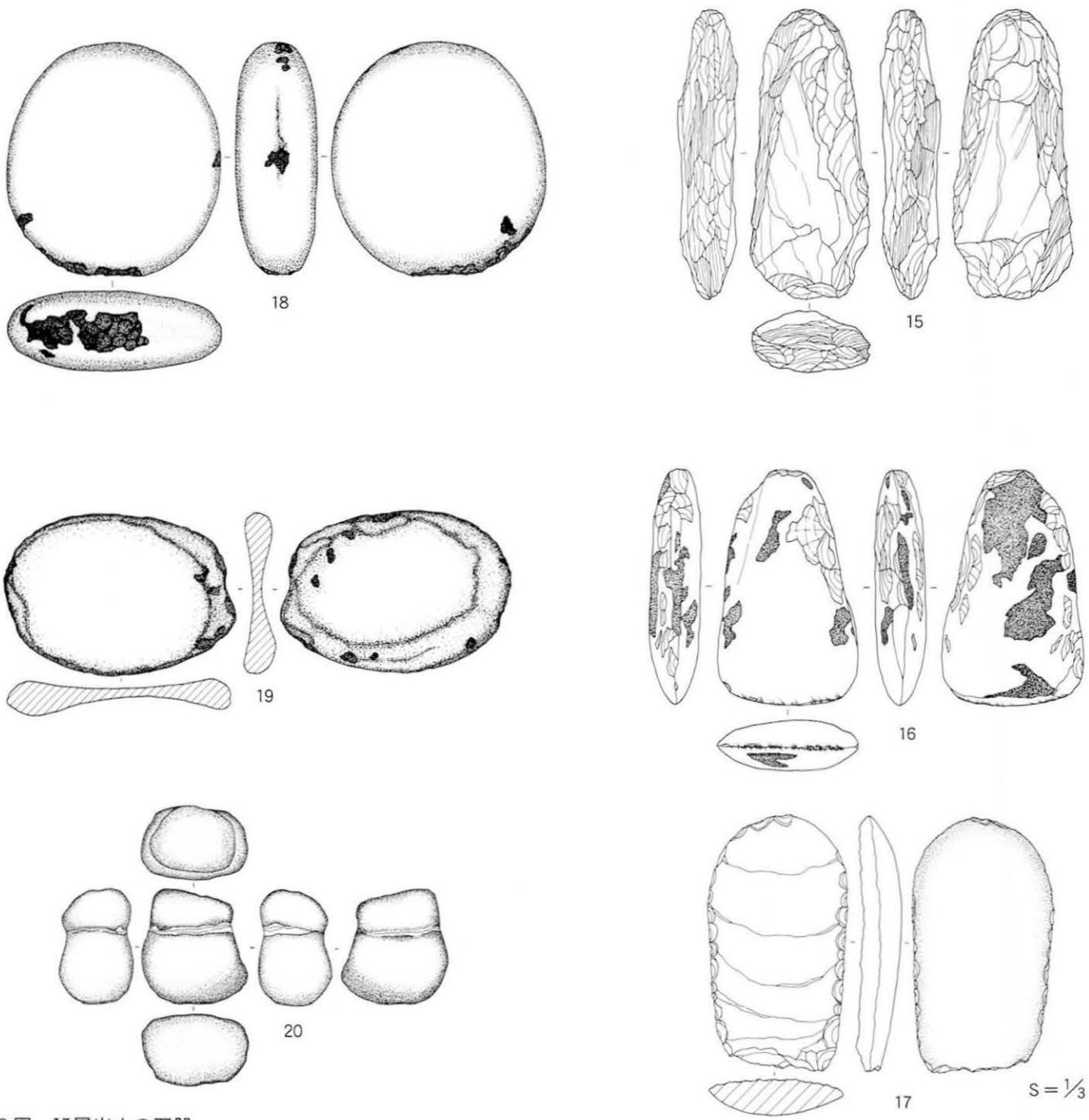
18は平面形が円形を呈し、全面に磨面がみられる。敲打痕は上端及び右側縁に僅かにみられ、下端に顕著にみられる。地層に含まれるマンガンの色素が付着しているため、本資料は、黒色を呈する。完形。砂岩製。

石皿（第3図19）

19は平面形が卵形を呈する小型の石皿である。完形。両面とも深い窪みがみられる程、使用されている。周縁は敲打調整がなされるが、全体的に磨耗し丸みを帯びる。砂岩製。

異形石器（第3図20）

20は、平面形が雪だるま状の形状を呈する資料である。中心からやや上部に幅約一～三㎝の沈線？を描くが、深さは均等ではない。研磨面はみられないが、上下端部は若干フラットな面をもつ。用途は、不明である。凝灰質砂岩製。



第3図　Ⅵ層出土の石器

＊磨石兼敲石／物を磨り潰す磨石としての機能と、物をたたく敲石としての機能を両方有する石器。

（4）Ⅳ層

石斧（第4図21・22）

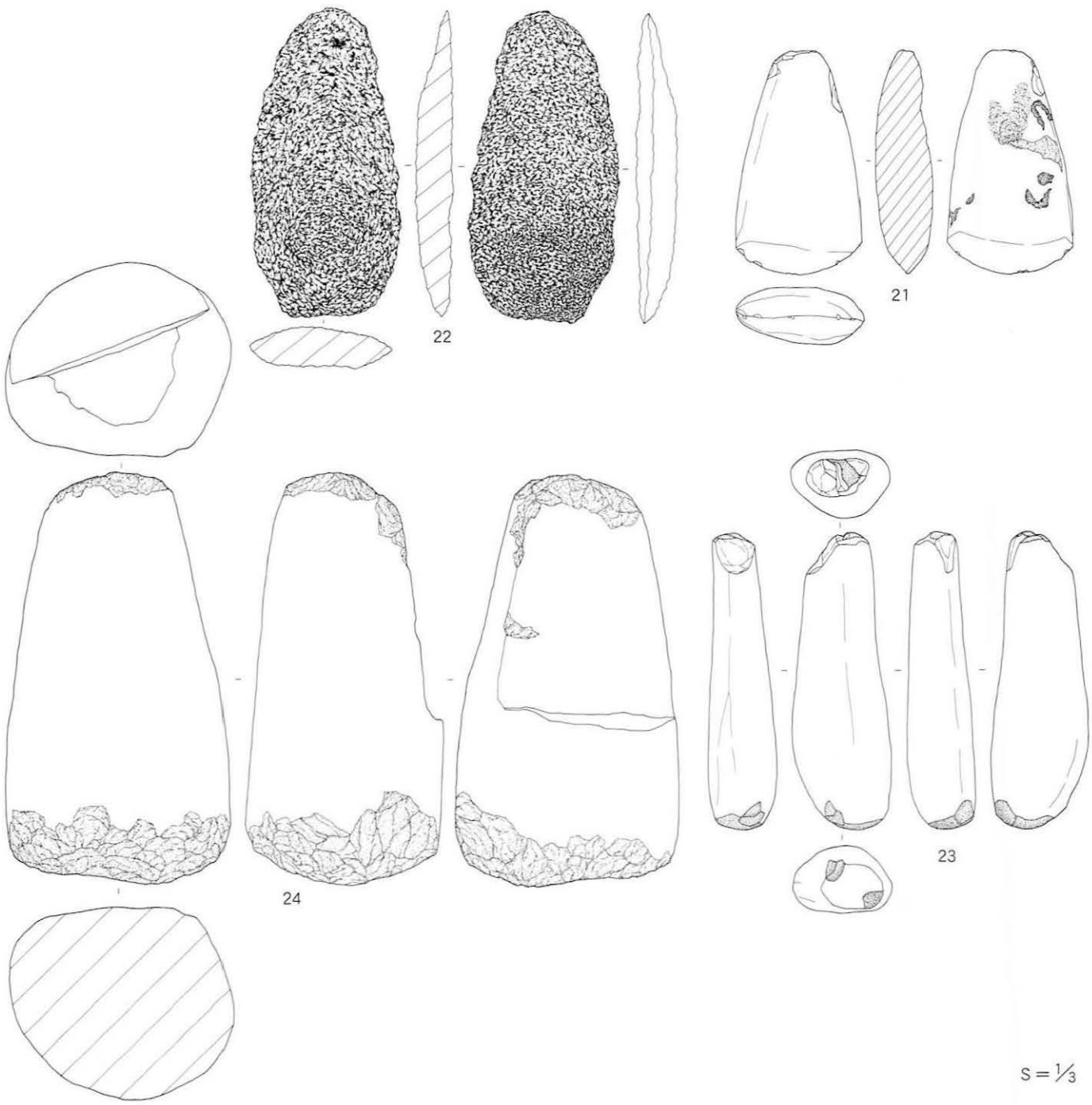
21は磨製石斧である。完形。平面形が撥形（ばちがた）を呈し、全体的に研磨されるが、一部研磨の及ばない箇所もみられる。基部には石灰が付着する。側縁は敲打調整後、研磨を施す。刃縁には刃こぼれが観察される。砂岩製。

22は打製石斧である。完形。扁平な石材に調整剥離を施す。とりわけ基端部から側縁部にかけて丁寧な調整がなされる。刃縁は直線的で、薄く鋭い。黒色千枚岩製。

敲石（第4図23・24、第5図25～28）

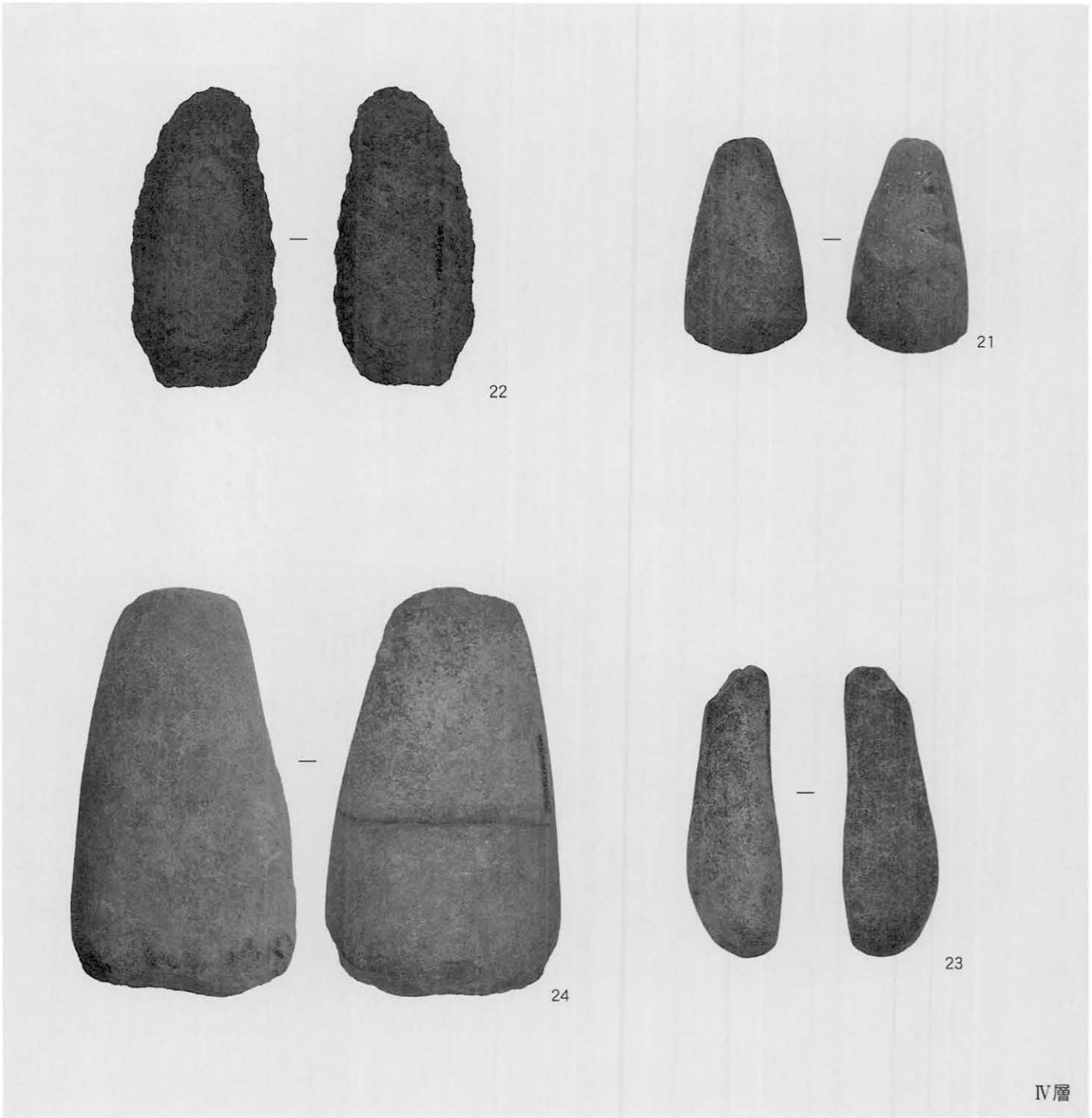
23は棒状を呈し、下端が上端より膨らむ。全体的に丸みを帯び、手に馴染む大きさである。胴体部には石灰が付着しているが、全面丁寧な研磨が施されている。下端部には敲打痕がみられるが、上端部は破損か、敲打痕かは不明である。完形。砂岩製。

24は大型の敲石で、平面形は分銅形を呈する。長軸上下端には敲打痕が顕著で、下端部中央は細かい敲打痕はなく、縁辺にいくに従い細かい敲打痕がみられる。平面表は平坦であるが、裏面は丸みを帯びる。全体的に研磨されるが、磨石としての使用はみられない。完形。砂岩製。



第4図　Ⅳ層出土の石器（1）

＊分銅形／はかりや天秤などで物の目方を量るとき標準とするおもりに似た形のこと。左右がくびれる形となる。



敲石（第5図25～28）

25は、平面形が球状、断面形は卵形となり、面は不定形である。表面中央に敲打痕がみられる。下端部に一部磨面がみられるが、使用頻度は低いため、敲石とした。完形。砂岩製。

26は平面形が楕円形を呈する。表裏面中央及び上下端・両側面には敲打痕がみられる。完形。砂岩製。

27は表裏面に弱い研磨が施され、表裏面中央及び上下端・両側面には敲打痕が顕著である。岩石に含まれる鉱物の粒子が大きく、それが抜け落ち、あばた状を呈する。また火を受けたためか、もろく、表面の色調はグレーがかり、側面の敲打痕は淡い肌色を呈する。完形。石英斑岩製。

28は、平面形が隅丸方形、断面形は三角形を呈する。上下及び三ヶ所の稜に敲打痕がみられ、三ヶ所の稜は窪みを呈する。右側面及び裏面にも敲打痕がみられる。右側面及び裏面の一部にも僅かな磨面がみられるが、敲石としての痕跡が目立つため、敲石として扱った。本資料は敲石のなかでも三稜石器（注1）として分類される。完形。砂岩製。

磨石兼敲石（第5図29・30、第6図31）

29は平面形が隅丸方形を呈し、表裏面には磨面が顕著である。上下端・両側面には敲打痕がみられ、特に両側面のものが目立つ。表裏面中央には弱い敲打痕がみられるが、くぼみを呈する程ではない。完形。砂岩製。

30は平面形が隅丸方形を呈する。表裏面及び側縁の一部に磨面がみられ、表裏面と下端及び両側縁には敲打痕がみられる。完形。砂岩製。

第5図　Ⅳ層出土の石器（2）

＊敲石／物をたたいたり、磨り潰したりする石器。形は円形のもの、楕円形のもの、棒状のものなどがある。

磨石兼敲石（第6図31）

31は大型で、平面形が隅丸方形を呈し、裏面の一部は傾斜している。傾斜面には磨面がみられるが、石灰分がほぼ全面に付着している。下端及び両側縁には敲打痕が顕著である。完形。砂岩製。

磨石（第6図32）

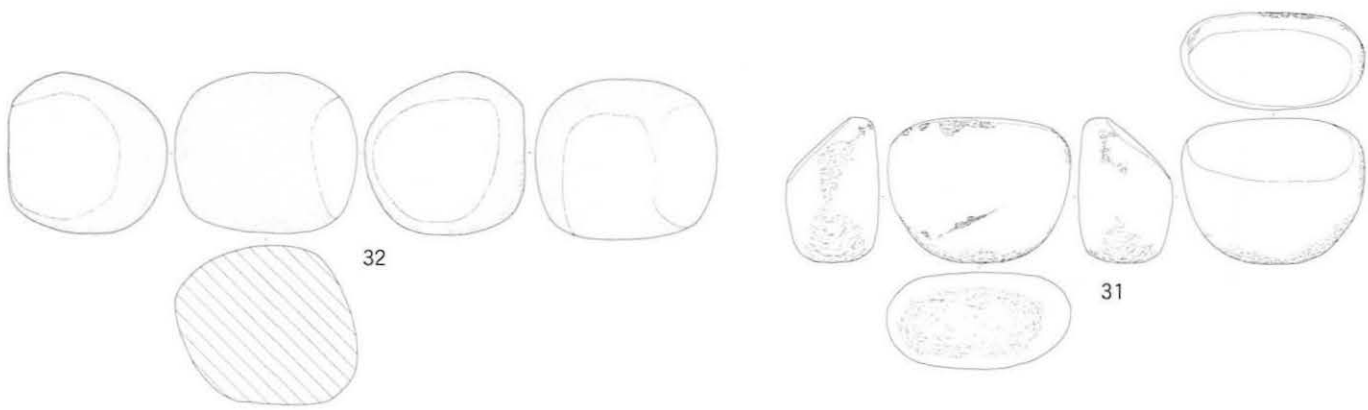
32は大型で、全体的に丸みを帯びた方形を呈するが、両側縁は傾斜している。全面が滑らかなほど磨られており、使用頻度の高さが窺える。完形。砂岩製。

石皿（第6図33）

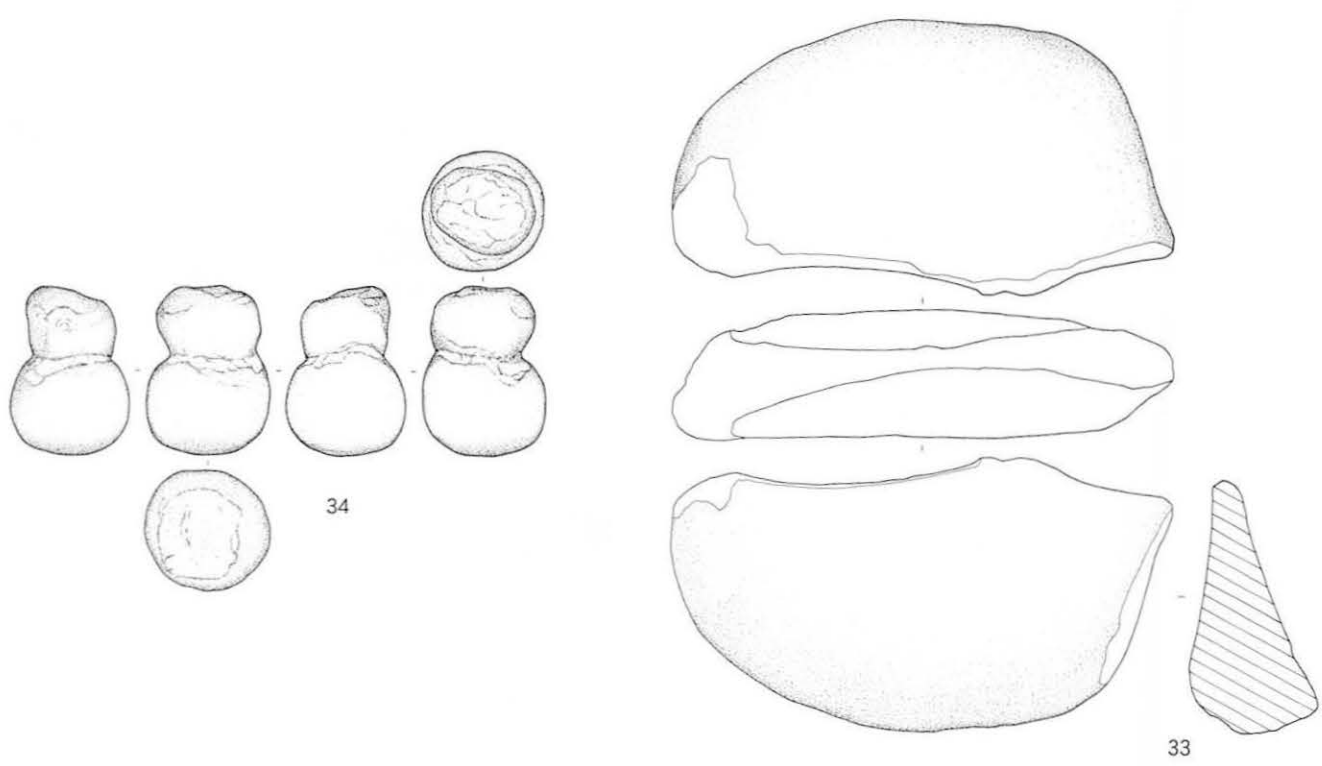
33は平面形が半月状、断面形は撥形（ばちがた）を呈する。両面とも湾曲する程、使用され、周縁部の一部に研磨面がみられる。小型の石皿を使用したのか、割れた後に周縁部を調整し、再利用したかは不明である。砂岩製。

異形石器（第6図34）

34は平面形が「雪だるま」の形状を呈する。中央からやや上を削りくびれを有することで、上下部を分ける。上部は楕円形、下部は丸形を呈する。上下端には敲打調整らしき痕がみられるが、使用によるものか、自然面か判然としない。用途は不明である。流紋岩製。



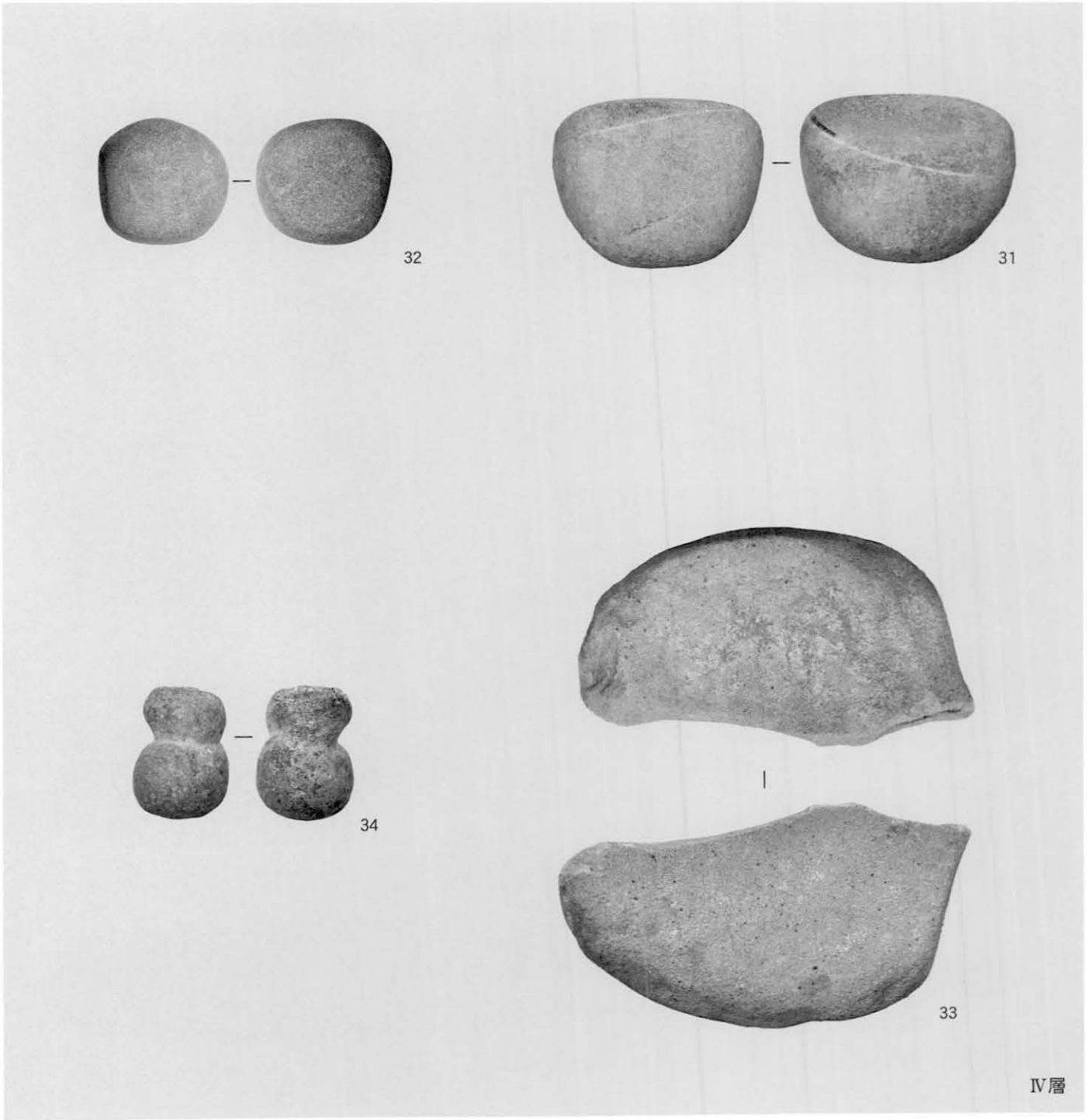
S＝1/6



S＝1/3

第6図　Ⅳ層出土の石器（3）

＊石皿／やや扁平な石で、中央がくぼむものが多い。穀類、堅果類などの粉砕・製粉などに利用され、磨石や敲石と併用される。



(5) Ⅲ層

石斧（第7図35・36）

35は磨製石斧である。完形。平面形は短冊形を呈する。基端部から刃部にかけて研磨が施される。側縁部は調整剥離後、一部に弱い研磨面がみられるが、入念な研磨は及んでいない。刃部表面両端は使用時の剥離がみられ、刃縁には細かい刃こぼれが認められる。輝緑岩製。

36は半磨製石斧である。完形。平面形は短冊形を呈する。刃部及び基部左側面には比較的丁寧な研磨が、裏面の基部上方には弱い研磨が施される。刃部表面には刃こぼれが認められる。刃部裏面には階段状の剥離痕がみられるが、使用時の剥離か、成形時の剥離か、判然としない。緑色岩製。

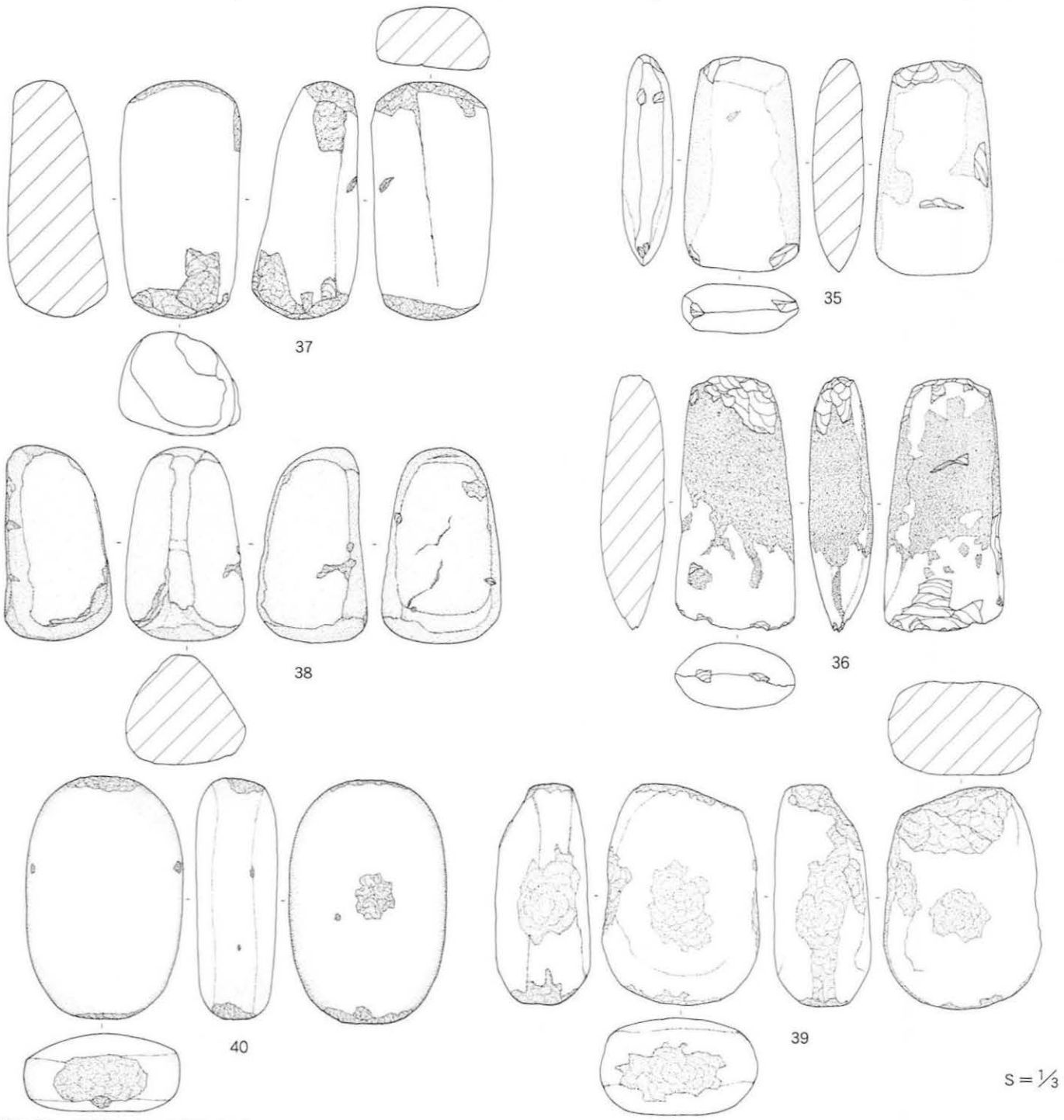
敲石（第7図37・38）

37は平面形が隅丸方形を呈するが、各面が変形し、上下観は形状が異なる。周縁部は研磨がなされるが弱く、磨石としての機能はない。上下端には敲打痕がみられ、特に下端部は顕著である。完形。砂岩製。

38は、平面形が隅丸方形、断面形は三角形を呈する。上下に敲打痕がみられ、下にそれが顕著である。三ヶ所の稜にも敲打痕がみられるが、若干の磨面がみられる。両側面と裏面には弱い磨面がみられる。磨石としての使用頻度は低いため、敲石として扱った。敲石のなかでも三稜石器に分類される。本資料は第5図28と形状が同一であるが、サイズは後者より小さめである。完形。砂岩製。

磨石兼敲石（第7図39・40）

39は表裏面及び両側面の一部に弱い磨面がみられる。表裏面中央の敲打痕は弱



第7図　Ⅲ層出土の石器（1）

く浅いが、上下端及び両側面には明確な敲打痕がみられる。とりわけ、左側面は敲打痕が顕著である。完形。砂岩製。

40は平面形が楕円形を呈する。ほぼ全面にわたり磨面がみられるが、とりわけ表裏面は光沢を発するほどである。裏面には浅い敲打痕が、上下端には弱い敲打痕がみられる。完形。砂岩製。

磨石（第8図41・42）

41は平面形が卵形、断面形は石鹸状を呈する、やや大型の資料である。表裏面には磨面がみられる。側縁部には帯状に敲打痕？がみられるが、側縁部全面にあることから、使用時よりも整形時の調整痕である可能性が高い。完形。砂岩製。

42は平面形が隅丸方形、断面形は略三角形状を呈する、やや大型の資料である。全体的に滑らかであるが、とりわけ裏面に磨面が顕著である。完形。砂岩製。

石鏃（第8図43）

43は磨製石鏃の破損品である。基部を欠くため全形状は不明である。表裏面には鎬（しのぎ）がみられ、とりわけ表面の鎬は明確に認められる。表面の鎬の左側及び裏面及び左側縁には入念な研磨がみられる。珪質頁岩製。

砥石（第8図44）

44は、砥石の破損品である。表面及び左側縁部に研磨面が認められる。表面右端部に浅い溝？がみられる。裏面は自然面と思われる。石鏃等の製品を取得した残部の可能性もある。シルト質頁岩製。

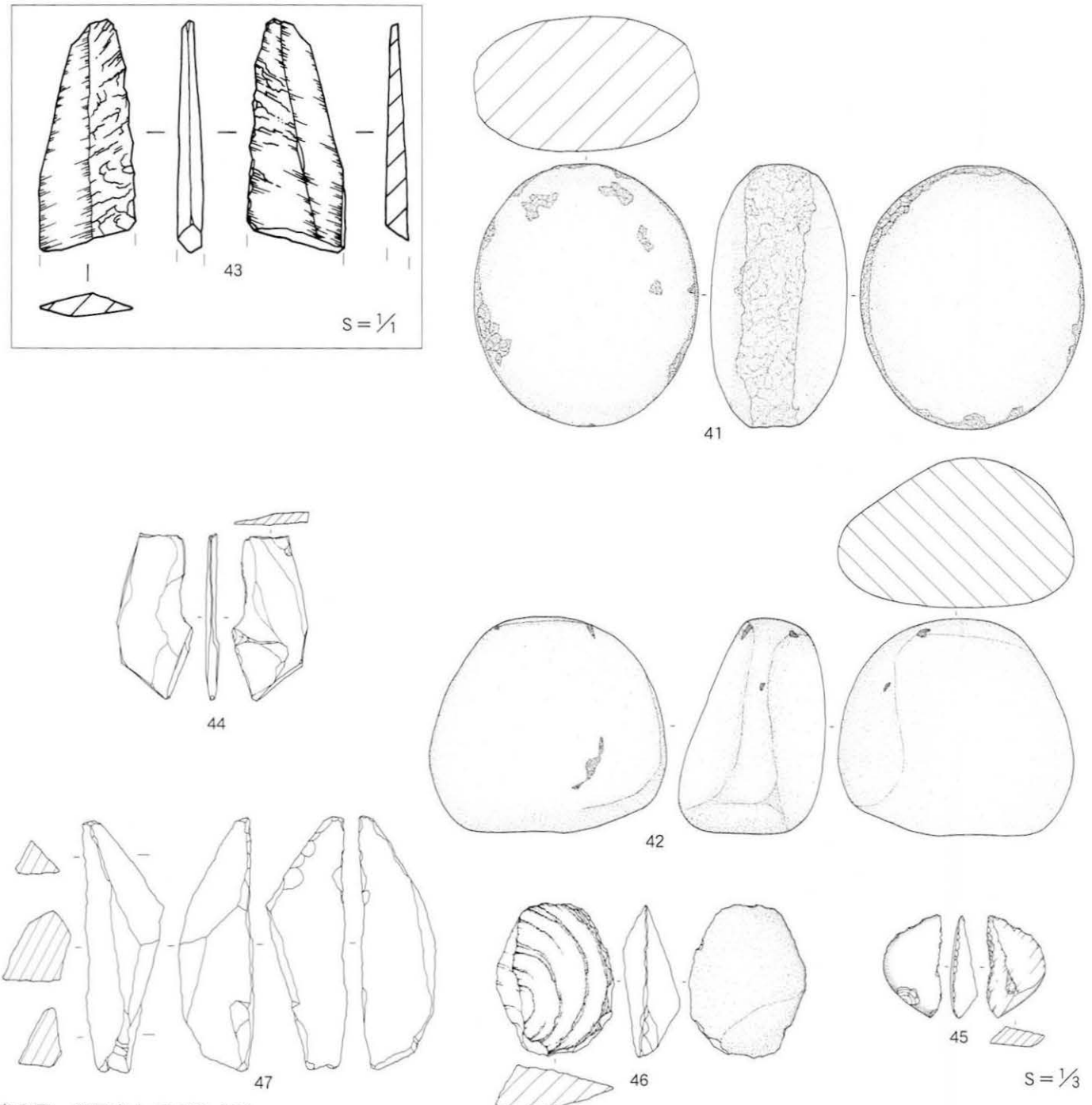
スクレイパー（第8図45・46）

45は横刃形スクレイパーである。完形。小型の礫剥片の縁辺部に刃部がみられる。輝緑岩製。

46は横刃形スクレイパーである。完形。45より大きめの礫剥片の縁辺部に刃部がみられる。本資料は、「ザラザラ」した手触りがある。砂岩製。

錐状石器（第8図47）

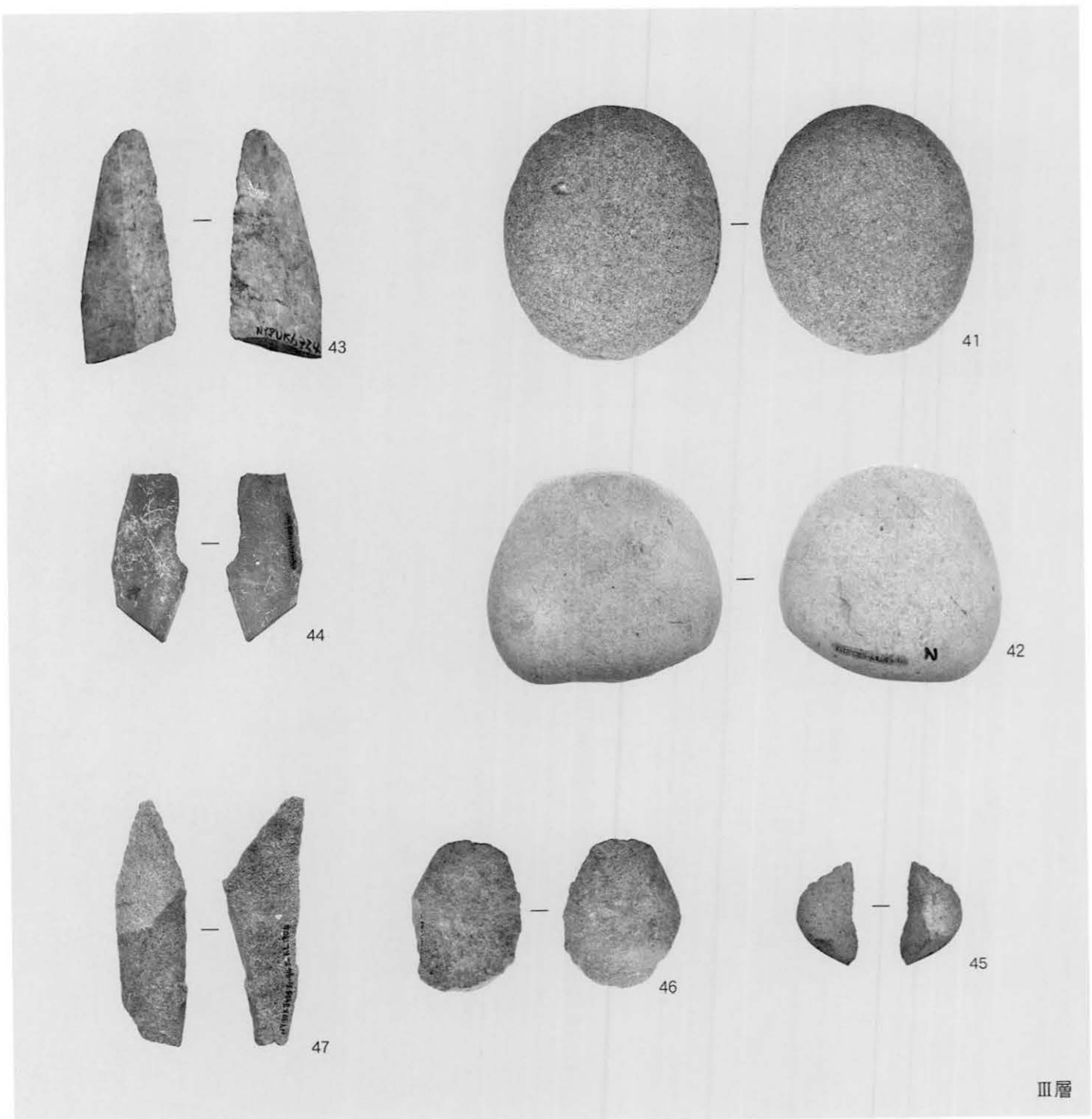
47は先端部が僅かに破損したものである。残部先端の側縁に刃部が認められ、



第8図　Ⅲ層出土の石器（2）

先端部は使用により破損したものと思われる。砂岩製。

＊石鏃／矢柄の先端につける石器で、この石器の存在から弓矢の使用が裏付けられる。型式は、大きく無茎鏃、有茎鏃に大別され、そのどちらにも入らない柳葉形、不正形などがある。



鑿（のみ）状石器（第9図48）

48は鑿状石器の完形品である。比較的、重みのある石材の一端を片刃状に成形している。刃縁には調整剥離が認められる。右側縁部にも剥離痕がみられるが、母岩から剥離した際の自然面か、人工的な調整剥離面かは不明。緑色千枚岩製。

礫器（第9図49・50）

49は片刃を呈する礫器で、チョッパーと称されるものである。礫の縁辺部に片側から粗い調整剥離を加えて刃部を形成し、その剥離面は明瞭である。製品の形状を成形した為か、石器全体にも剥離面が残る。完形。砂岩製。

50は両刃を呈する礫器で、チョッピング・トゥールと称されるものである。自然礫の縁辺部に両側からの調整剥離を施し、刃部を形成する。完形。砂岩製。

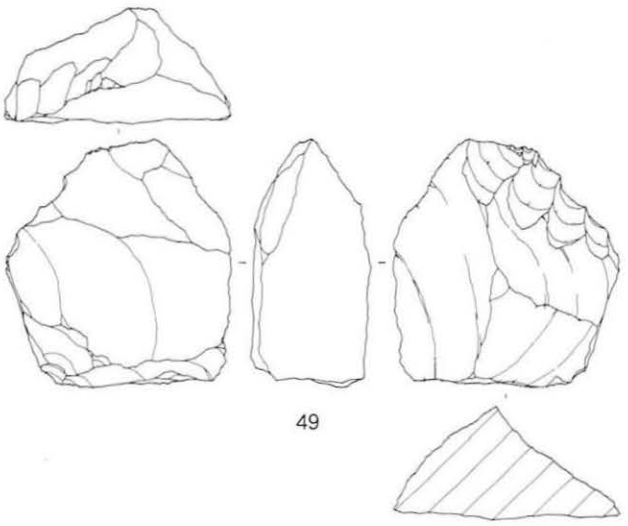
（6）石製品

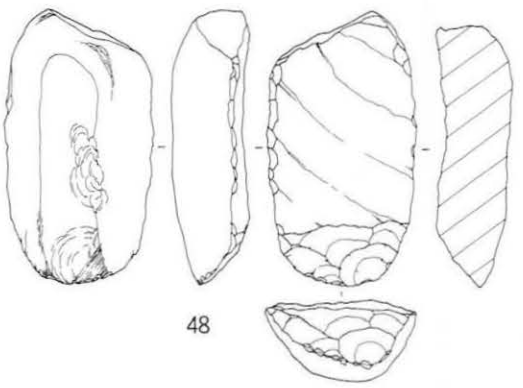
石製品は二点のみの出土で、いずれも石製の管玉である。

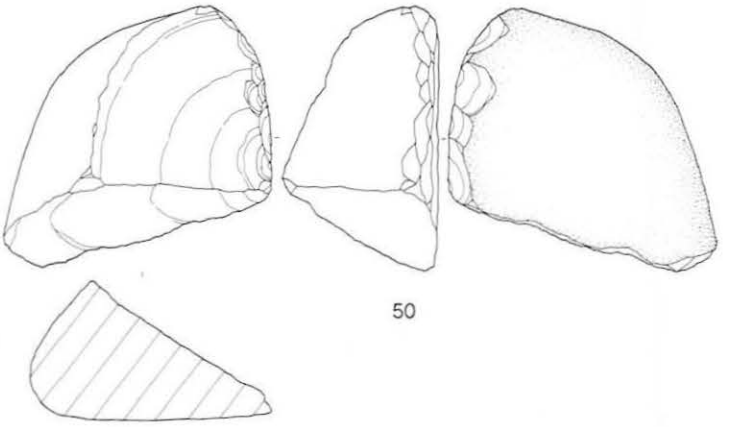
管玉（第9図51・52）

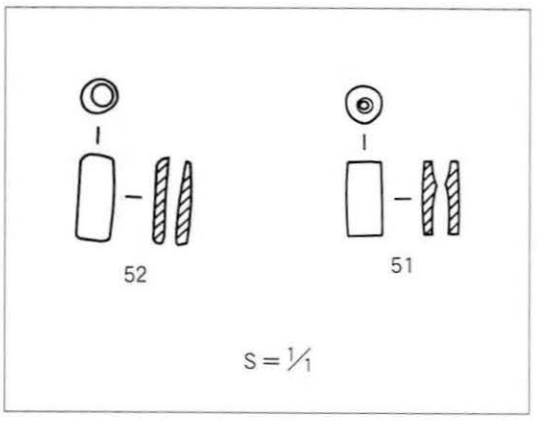
51は碧玉製で、平面形が円筒形を呈し、中央に孔を有する。孔は両側から穿孔され、くり抜かれた際の渦状の稜が残る。色調は薄い緑色を呈し、光沢がみられる。部分的に石質本来の文様のためか、明緑灰色が混じる。法量は長径一cm、幅〇・五cm、孔径上部〇・二三cm・下部〇・二五cm、重さ〇・三八gを測る。

52は流紋岩製で、円筒形を呈し、中央に孔を有する。孔は片側から穿孔され、色調は明緑灰色を呈し、器面はザラザラしている。色調は明緑灰色を呈する。法量は長径一・一cm、幅〇・五cm、孔径上部〇・三cm、下部〇・一五cm、重さ〇・









S＝1/3

第9図　Ⅲ層出土の石器（3）、石製品

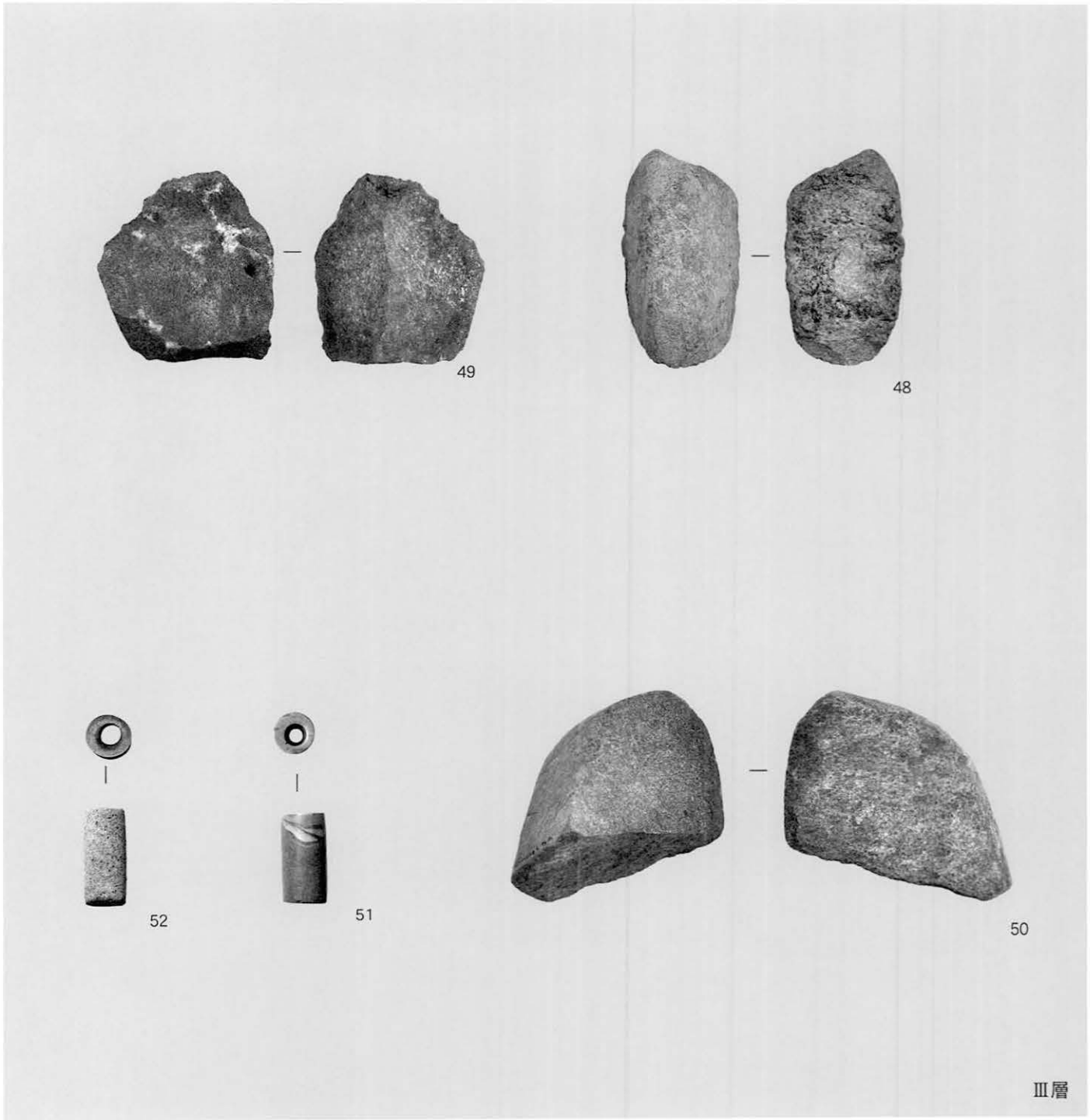
三一 gを測る。

(7) 黒曜石

黒曜石が四点出土した。その内訳は石核一点、抉入石器一点、楔形石器二点の計四点である。黒曜石は、沖縄ではかなり貴重なものであったと考えられ、細片でも利用価値は高かったと思われる。それぞれの出土状況は左の通り。

黒曜石出土状況

図版	地区	層	器種
1	そ - 96	Ⅲ	石核
2	そ - 94	Ⅲ	抉入石器
3	そ - 97	Ⅲ	楔形石器
4	た - 94	Ⅲ	楔形石器



(8) かく乱層

石斧（第10図53～57）

53は半磨製石斧である。完形。平面形は撥形（ばちがた）を呈する。刃部は研磨されるが、基部は中途半端な研磨が施され、自然面と研磨面がまだらな状態である。刃縁には細かい刃こぼれが認められる。千枚質砂岩製。

54は細身の半磨製石斧である。完形。刃部に簡素な研磨を施し、右側面の一部にも研磨がなされる。刃縁には刃こぼれが認められる。砂岩ホルンフェルス製。

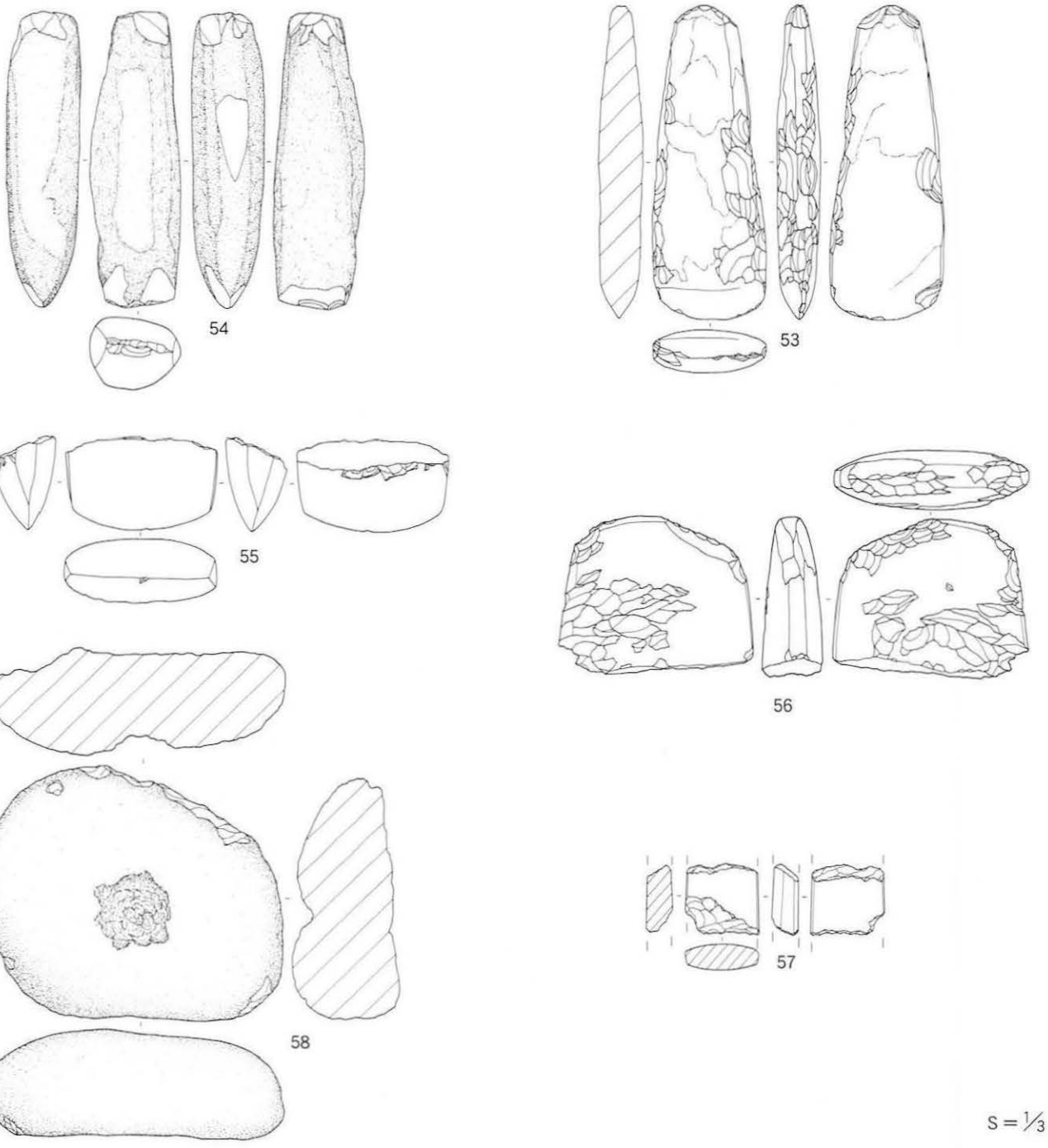
55は磨製石斧である。基部を大きく欠損するが、刃部は表裏対象で、形が整い、丁寧な作りである。刃縁には僅かな刃こぼれがみられる。残部全面には擦痕がみられる。輝緑岩（ランプロファイヤー）製。

56は磨製石斧の基部である。刃部は欠損しているが、形状は長方形を呈し、重みのある大型の石斧と思われる。残部には基本的に丁寧な研磨がなされるが、基端部の左右及び左側縁部には敲打調整がみられる。表裏面には破損部がみられるが、自然による破損か、人工的な破損か、判然としない。輝緑岩製。

57は定角式磨製石斧の基部と思われる。小型で、形状は短冊形を呈すると思われる。表裏面及び両側面には丁寧な研磨が施される。上下・左右不明。斑レイ岩製。

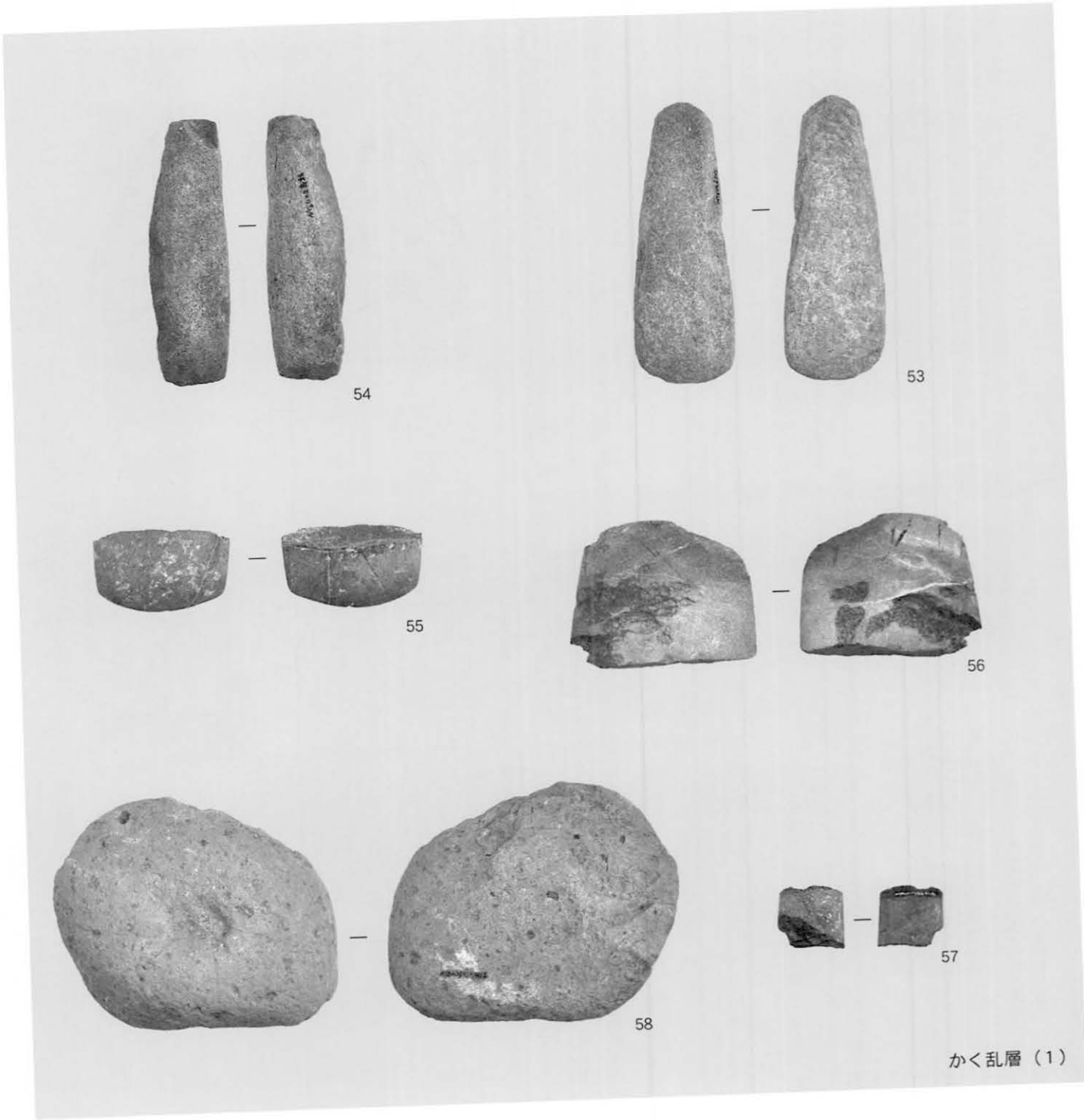
くぼみ石（第10図58）

58は平面形が不定四角形を呈し、安定の良い石の中央に約八㎝の窪みをもつ。右側縁部の下端は敲打調整され、直線的である。裏面に窪みはみられないが、人工的に平坦面を形成している。流紋岩製。



第10図　かく乱層出土の石器（1）

＊くぼみ石／磨石や敲石の中央部にくぼみを有するものや、くぼみが、特に強調される石器。

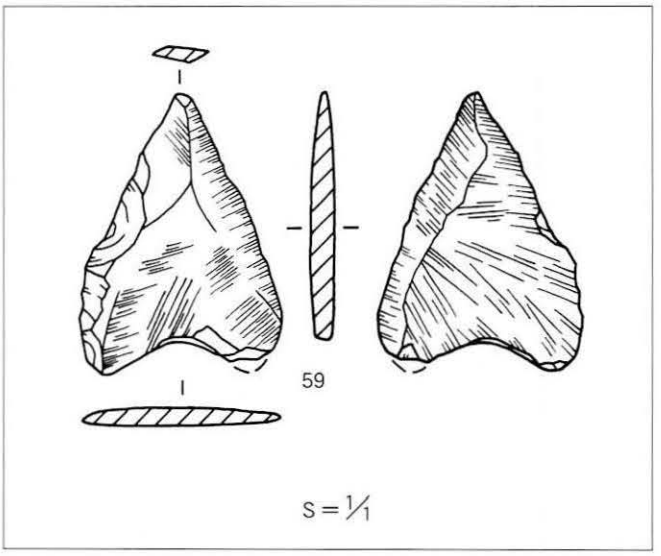


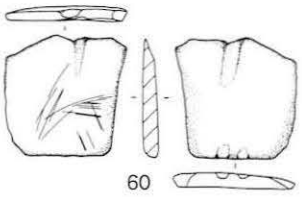
石鏃（第11図59）
59は無茎で基部に抉りのある、凹基無茎鏃である。基部右側は僅かに破損する。平面形は二等辺三角形状を呈する。全体的に研磨がなされ擦痕がみられるが、さほど丁寧ではない。左側縁部は調整剥離面が残る。細粒砂岩製。

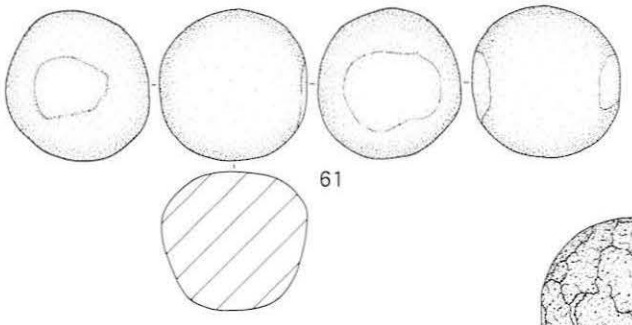
砥石（第11図60）
60は小型の砥石破損品である。扁平な石材を利用している。表面は全面を使用し、細かい溝や使用痕が数条みられ、滑らかである。裏面はさほど使用されていないが、残部上方に一条、下方に二条の短い溝がみられる。火山性砂岩製。

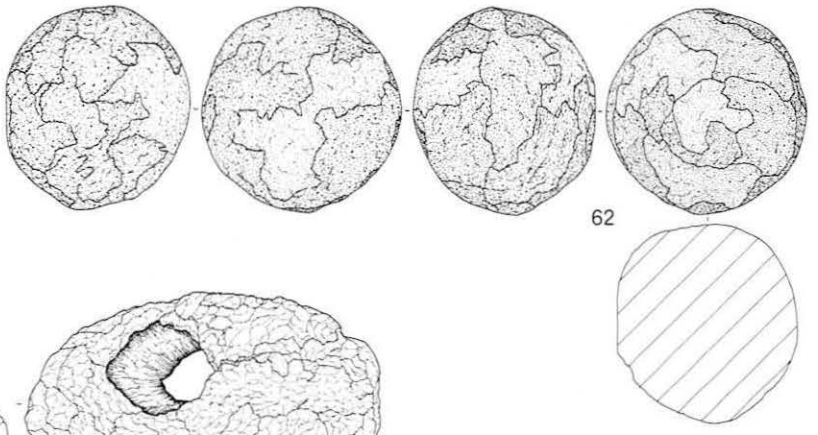
石球（第11図61）
61は球状を呈する。両側面には磨面が認められるが、使用頻度は低いと思われる。完形。砂岩製。
62は、球状を呈し、ほぼ全面に敲打調整がなされ、部分的に研磨面がみられる。用途については判然としない。チャート製。

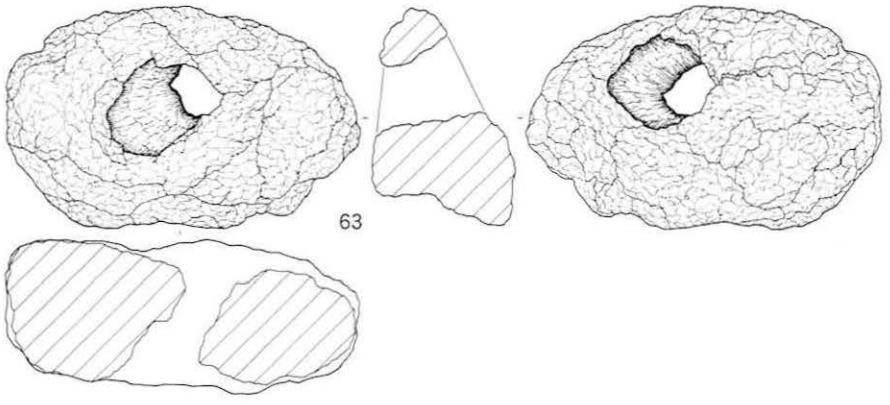
おもり石（第11図63）
63は平面形が楕円形、断面形は台形状を呈する。中央よりやや上部に約三～四cmの孔を穿つ。孔の周囲に紐ずれ痕が認められることから、紐を通して使用する何らかのおもりであると考えられる。全体的に削られて成形されているが、研磨面はみられない。完形。軽石質流紋岩製。



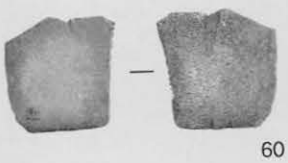




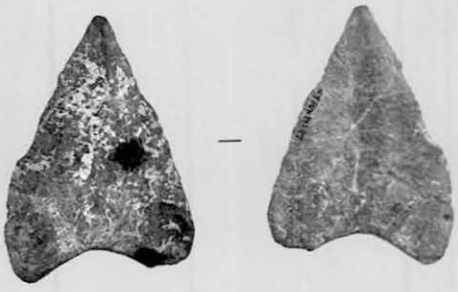




第11図　かく乱層出土の石器（2）



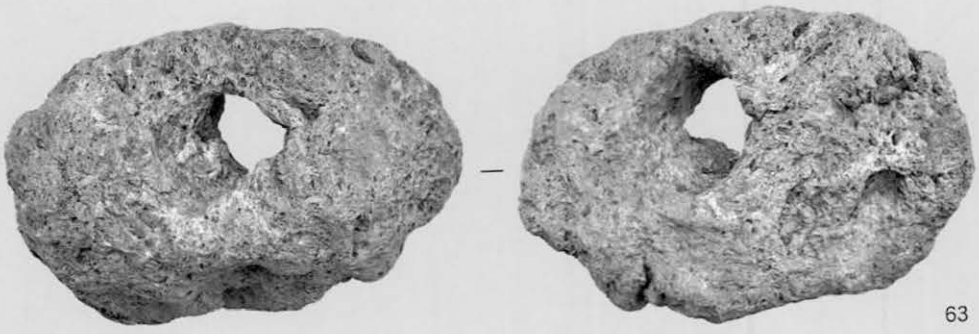
60



59

61

62



63

かく乱層（2）

(9) 旧石器時代の石器か？

旧石器時代に属する石器の可能性があると示された（注2）資料が四七点ある。全てチャート製である。これらに共通する特徴は、全体的に磨耗し、トロトロしている。これらの資料が出土する同層から摩耗していないチャートも出土しており、他の時代に属する石器とは様相が異なる。その内訳は表1に示した通りである。種類は尖頭器一点、台形状石器二点、削器（スクレイパー）九点、錐状石器一点、抉り入り石器（ノッチ）一点、石核一点、剥片二九点、自然石（原材か）三点である。出土層はⅣ層が最も多く、Ⅲ層、Ⅶ層の順である。特にⅢ層では一三点、Ⅳ層では三〇点と出土数は少なくない。大堂原貝塚では旧石器時代に属する包含層は確認されておらず、本来の包含層からの出土ではないが、石器の形状が旧石器の特徴を有するという点から、報告したい。

図化することはできなかったが、特に旧石器の可能性が濃厚な資料として尖頭器一点、台形状石器二点の概要を述べ、写真のみで紹介する。

今回は、あくまでも可能性を示すための報告であり、まだ旧石器時代を確認したわけではない。今後、「旧石器時代」ということも含め旧石器が発見されることを望むものである。

尖頭器（写真64）

幅広の剥片を利用し、側縁部に尖頭器としての機能を示す調整加工がみられる。東京大学講師の小田静夫氏により「型式からみると旧石器時代の『剥片尖頭器』に類似する。全体がトロトロと磨耗しており、他の縄文及び弥生時代の石器と異なっている。」との御教示を受けた。法量は長さ三・五cm、幅二cm、厚さ〇・五cm、重さ三・六一gを測る。チャート製。

台形状石器

写真65法量は長さ一・七cm、幅一・三cm、厚さ〇・六cm、重さ一・九七gを測る。チャート製。

写真66法量は長さ一・七cm、幅一・五cm、厚さ〇・七cm、重さ一・八〇gを測る。チャート製。

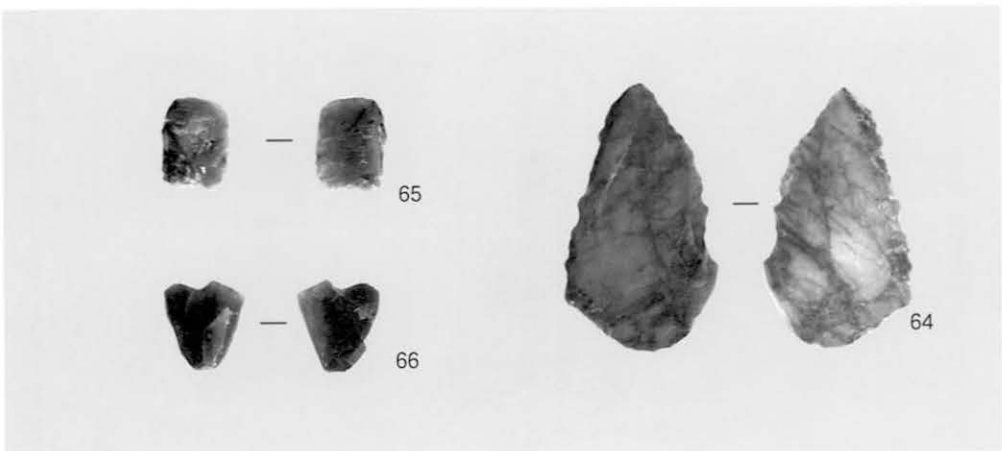


表2．旧石器の可能性がある資料観察表

写真	地区	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
64	ち−96	Ⅳ	尖頭器	3.5	2	0.5	3.61
65	と−94	Ⅲ	台形状石器	1.7	1.3	0.6	1.97
66	と−94・95	Ⅲ	台形状石器	1.7	1.5	0.7	1.8

表1．摩耗したチャート出土一覧

器種／層	尖頭器	台形状石器	スクレイパー	錐状石器	ノッチ	石核	剥片	自然(原材)	合計
Ⅲ		2	4	1	1		4	1	13
Ⅳ	1		4				23	2	30
4							1		1
Ⅶ			1			1	1		3
計	1	2	9	1	1	1	29	3	47

表3．チャート出土一覧

器種／層	尖頭器	台形状石器	円盤形石器	スクレイパー	石核スクレイパー	クサビ形石器	クサビ状石器	錐状石器	ノッチ	石核	両極打面石核	剥片	使用痕付剥片	チャンク	自然(原材)	合計
かく乱															1	1
Ⅰ												6				6
Ⅱ			1	1						1						3
Ⅲ		2	1	10		2		3	1	9		25	1	9	4	67
Ⅳ	1		2	18			1	1	1	4	1	82	3	24	7	145
4				4		1		1		3		57	1	21	6	94
Ⅴ					1	1				1	1	9	2	3		18
Ⅵ				4		1				3		18		13	2	41
Ⅶ				3	1					5		4			1	14
計	1	2	4	40	2	5	1	5	2	26	2	201	7	70	21	389

(10) 石器小結

以上、図化した資料の概要を述べた。出土した石器は前述したように一一八九点であるが、層別に出土状況をみると、Ⅳ層二九五点、Ⅲ層二八四点とⅢ層、Ⅳ層からの出土が圧倒的に多い。次にⅥ層九八点、Ⅴ層四〇点、Ⅶ層四六点、Ⅷ層一六点の順である。

各層ごとの石器組成をみてみると、Ⅷ層では石器の出土数は一六点と少ないが、その内、石斧は七点で、全体の割合では四三・七%が石斧と割合は高い。全磨製石斧は皆無で、半磨製石斧、打製石斧のみである。また本貝塚で一点出土の石槍状石器も本層から出土した。石槍は渡具知東原遺跡（注3）で報告例があり、それはチャート製で、曽畑式土器に伴うものであるが、本貝塚の石槍状石器は砂粒千枚岩製で、前者よりやや大型で、1類（薄手土器）及び2類（細沈線文）土器に伴なうものである。

Ⅶ層ではⅧ層で出土数が二点であった磨石が八点と増加し、敲石も石器組成に加わる。スクレイパーの出現も本層からである。

Ⅵ層は磨石の出土数が三二点と大幅に増加し、石皿も七点と増加することから、堅果類などの粉砕や製粉利用などの増加が窺える。

Ⅴ層もⅥ層と同様に磨石や石皿の比率が高い。Ⅶ層からⅤ層にかけて出土する石器は4類（曽畑式）から10類（面縄前庭Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式）土器に伴なう。

Ⅳ層は磨石の出土が八二点、敲石が二〇点、磨石兼敲石が三六点、石皿が六点とⅥ層以上に堅果類などの粉砕利用に関する石器が増加し、スクレイパー（二一点）も本層より増加する傾向にある。本層から出土する石器は、10類（面縄前庭Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式）から17類（縄文時代後期相当の土器）土器に伴なうが、地区によっては弥生～古墳時代並行期に属する18類（阿波連浦下層式）から24類（弥生から古墳時代並行期の不明土器）土器を伴なう箇所もある。

Ⅲ層はⅣ層と同様の石器組成を示すが、石斧（一〇点）、磨石（一〇五点）、敲石（三三点）、スクレイパー（二七点）は全層中最も多く出土した。磨石や敲石の中には、三ヶ所に稜を有する三稜石器が他の層より多く含まれている。本層から出土する石器に伴なう土器は18類（阿波連浦下層式）から24類（弥生から古墳時代並行期の不明土器）土器である。

器種別にみると磨石が四一五点と最も多く、磨石と敲石を兼用したものが一二六点、敲石が八八点出土している。磨石や敲石のなかには、重量のある大型資料も数点含まれており、何をどうするために使われたのか、興味深い。

石斧類は四七点出土したが、打製石斧が一九点、局部磨製が十五点、全磨製が十三点と、打製石斧が多い。

異形石器として「雪だるま」状を呈する、くびれを有するものが八点得られた。用途については敲石や石錘などの実用品の可能性も考えられるが、判然としない。

チャートを使用した製品については、時間の都合上、図化することができなかった。チャートについては、石屑（チャンク）や自然石（原材か）を含むと三八九点得られた（表3）。出土層はⅣ層が圧倒的に多い。器種は剥片が最も多く二〇八点であるが、剥片のなかには使用痕の見られるものが七点、存在する。製品として多く得られたのは削器（スクレイパー）である。四二点得られ、小型剥片の一部に刃部を形成するものがほとんどである。削器の全出土量の内、チャート製のものがほとんどである。

黒曜石は四点得られ、出土層は全てⅢ層である。一点のみ石核で、他三点は製品としての使用痕がみられた。黒曜石に伴う土器をみると、在地土器では19類（浜屋原式）土器が圧倒的に多く、21類（九州弥生土器）・22類（奄美諸島系土器）土器では弥生時代中期初頭の入来Ⅰ式土器がある。

沖縄貝塚時代の石器組成として、多数の磨製石斧や磨石・敲石などの研磨系の「重量石器」などが多く検出され、剥片系の「打製石器」や小型剥片を利用した「軽量石器」の発見が少ないことも特徴とされている（注4）。これらの「打製石器」や「軽量石器」類が多数検出された伊是名貝塚（注5）での石器分類を援用し、大堂原貝塚の石器分類を表5に、石器組成比を表6に示した。結果、礫塊石器が五五〇点、剥片石器が一〇二点、石核石器が四二点である。磨石、敲石、磨石兼敲石などの礫塊石器が最も多く前述の沖縄貝塚時代全体の石器組成の例に洩れない。しかし、削器を主体に錐状石器などの剥片石器や磨製及び半磨製石斧以外の楔形石器などの石核石器も一定量得られたことは、今後の沖縄の石器組成を考える上で注目する必要がある。

＊礫塊石器／原石をほとんど加工することなく、石器として利用したもの。
＊剥片石器／石器原石から剥片剥離工程を経て誕生する剥片に、二次調整を加えたもの。
＊石核石器／原石を核（原材）として打ち割っただけのもの。または打製加工した後、研磨した磨製石器。

注1　小田静夫氏の御教示による。
注2　注1に同じ。
注3　高宮廣衛・知念勇ほか　一九七七『渡具知東原－第1～2次発掘調査報告』　読谷村教育委員会
注4　小田静夫　二〇〇一「伊是名貝塚の石器」『伊是名貝塚－沖縄県伊是名貝塚の調査と研究－』　伊是名貝塚学術調査団
注5　注4に同じ。

表4．石器出土状況

器種＼層		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅴ・Ⅵ	Ⅵ	4	Ⅶ	Ⅷ	表採	かく乱	合計
石斧	磨製石斧			1	1		1					2	8	13
	半磨製石斧		2	2				2		3	3	2	1	15
	打製石斧			7	2			1	2	1	4		2	19
石鏃	磨製石鏃			1									1	2
	石鏃コア				1									1
磨石	磨石	13	35	100	81	10	4	32	25	8	2	4	92	406
	三稜石器			5	1								3	9
敲石	敲石	2	1	29	19	2	1	6	3	3		2	14	82
	三稜石器			4	1								1	6
くぼみ石			2	1	1	1		1	1	1			2	10
兼用品	磨石・敲石	7	10	25	36	3		3	4	1	1	2	34	126
	磨石・くぼみ石		1		2	1	1		1	1		1	2	10
	敲石・くぼみ石				2			1	1				2	6
石皿			1	7	6	4	1	7			1	1	5	33
台石				3	4	2				3			2	14
異形石器				1	1			4		1	1			8
石球			3	5	5		1	3	2	4	1		10	34
有孔石器				1	1			3		2	1		1	9
砥石				5	5						1		2	13
鑿状石器				1										1
錐状石器				4	1				1					6
スクレイパー（削器）	スクレイパー		1	22	19			5	4	3			1	55
	横刃型スクレイパー			4	1	1			1	2			4	13
	縦刃型スクレイパー							1						1
	デスク型スクレイパー			1	1									2
	石核スクレイパー					1				1				2
円盤形石器（デスク）			1	3	3					1				8
スタンプ型石器			1	1			1						1	4
石匙状石器					1									1
石槍状石器											1			1
打製石刃				2										2
礫器	礫器			3	3			1	1					8
	板状礫器				1								1	2
石板（板状石器）					2			1		1			2	6
抉入石器（ノッチ）				2	1									3
剥片（フレイク）		6		26	85	11		18	58	4				208
石核（コア）			1	10	5	2		3	3	5				29
台形状石器				2										2
尖頭器					1									1
楔形石器				4		1		1	1					7
楔状石器					1									1
棒状石器				1	1	1		5		1				9
三角形石製品				1										1
合　計		28	59	284	295	40	10	98	108	46	16	14	191	1189

表５．石器分類

分　類	器　種	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅴ・Ⅵ	Ⅵ	4	Ⅶ	Ⅷ	合　計
礫塊石器	磨石	13	35	105	82	10	4	32	25	8	2	316
	敲石	2	1	33	20	2	1	6	3	3		71
	くぼみ石		2	1	1	1		1	1	1		8
	磨石兼敲石	7	10	25	36	3		3	4	1	1	90
	磨石兼くぼみ石		1		2	1	1		1	1		7
	敲石兼くぼみ石				2			1	1			4
	石皿		1	7	6	4	1	7			1	27
	台石			3	4	2				3		12
	石版（板状石器）				2			1		1		4
	砥石			5	5						1	11
	小　計	22	50	179	160	23	7	51	35	18	5	550
剥片石器	石鏃			1	1							2
	石槍状石器										1	1
	尖頭器				1							1
	台形状石器			2								2
	錐状石器			4	1				1			6
	鑿状石器			1								1
	石匙状製品				1							1
	削器(スクレイパー)		1	27	21	2		6	5	6		68
	抉入石器（ノッチ）			2	1							3
	打製石斧			7	3			1	1	1	4	17
	小　計	0	1	44	29	2	0	7	7	7	5	102
石核石器	磨製石斧			1	1		1					3
	半磨製石斧		2	2				2		3	3	12
	礫器			3	4			1	1			9
	円盤形石器		1	3	3							7
	スタンプ状石器		1	1			1					3
	楔形石器			4		1		1	1			7
	楔状石器				1							1
	小　計	0	4	14	9	1	2	4	2	3	3	42
その他	石球		3	5	5		1	3	2	4	1	24
	棒状石器			1	1	1		5		1		9
	有孔石器			1	1			3		2	1	8
	異形石器			1	1			4		1	1	8
	三角形状石製品			1								1
	小　計	0	3	9	8	1	1	15	2	8	3	50
	合　計	22	58	246	206	27	10	77	46	36	16	744

＊１剥片及び石核は含まない。　＊２表採、かく乱層出土遺物は含まない。

表６．石器組成比

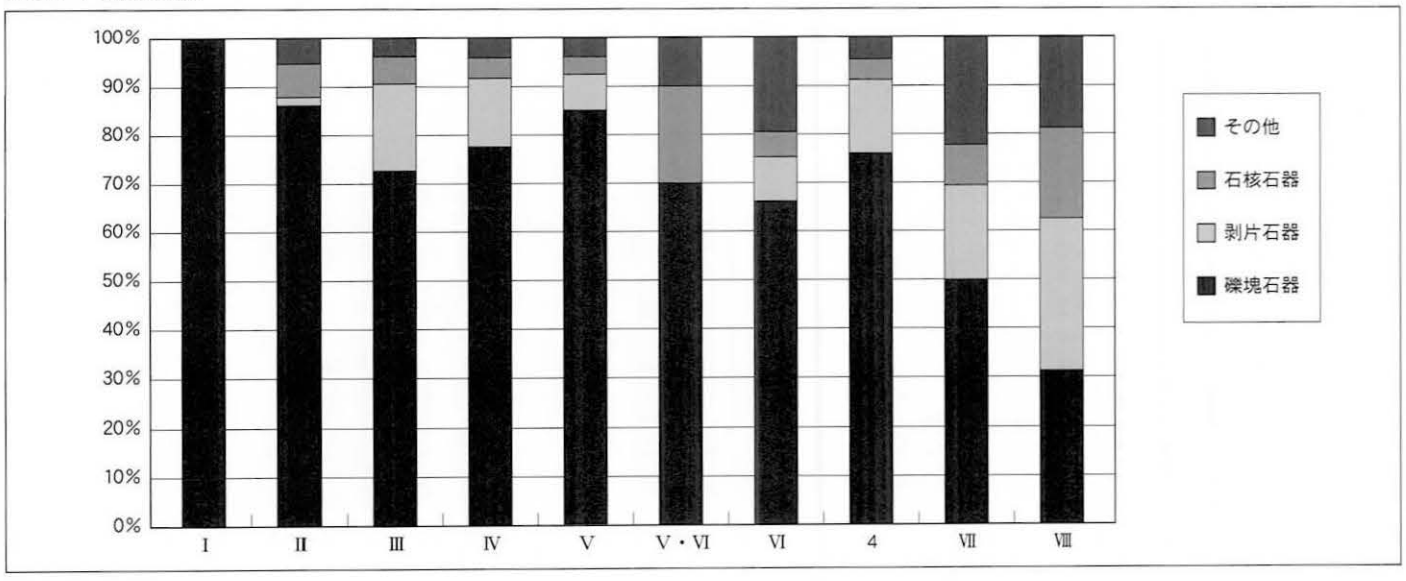


表７．石器観察表（１）

挿図番号	グリット	層	器種	完品	石質	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ（cm）	重量(g)
1	せ−95	Ⅷ	半磨製石斧		緑色片岩	5.3	3.5	1	28.03
2	す−95	Ⅷ	半磨製石斧		砂岩	5.9	3.6	1.65	51.52
3	す−95	Ⅷ	半磨製石斧	○	緑色千枚岩	12.6	5.3	2.2	197.64
4	けこ−101	Ⅷ	打製石斧	○	砂質千枚岩	9.1	3.8	1.4	69.76
5	けこ−99	Ⅷ	打製石斧		砂質千枚岩	8.4	6.9	2.2	183.29
6	そ−95	Ⅷ	石槍状石器	○	砂粒千枚岩	9	3.7	0.7	33.53
7	す−95	Ⅷ	磨石		砂岩	19.6	12.2	7.5	3030
8	こ−100	Ⅶ	半磨製石斧		緑色岩	4.3	6.5	1.15	46.69
9	さ−100	Ⅶ	半磨製石斧	○	砂質千枚岩	9.6	5.15	1.2	94.55
10	た−95	Ⅶ	半磨製石斧		輝緑岩（ランプロファイヤー）	10.1	6.75	3.7	404.89
11	こ−100・101	Ⅶ	くぼみ石	○	砂岩	6.9	5.15	3.6 ～ 4.3	183.35
12	さ−95	Ⅶ	敲石	○	砂岩	21.7	6.5	6.65	1560
13	し−96	Ⅶ	磨石	○	砂岩	14.8	11.8	6.65	1740
14	ち−95	Ⅶ	スクレイパー(削器)	○	砂岩	9.4	14.6	2.2	367.97
15	す−95	Ⅵ	打製石斧	○	緑色千枚岩	14.3	5.9	2.8	318.17
16	そ−95	Ⅵ	半磨製石斧	○	珪長岩	11.7	7	2.5	308.68
17	そ−95	Ⅵ	スクレイパー(削器)		砂岩	12.7	6.95	1.8	220.54
18	たち−91・92	Ⅵ	磨石兼敲石	○	砂岩	11.5	10.6	4.1	740
19	し−100	Ⅵ	石皿	○	砂岩	22.9	16.2	0.9 ～ 3.4	1550
20	そ−91	Ⅵ	異形石器	○	凝灰質砂岩	5.7	5.3～4.2	3.7 ～ 3.3	126.7
21	す−101	Ⅳ	磨製石斧	○	砂岩	12.3	6.3	2.85	273.69
22	な−95	Ⅳ	打製石斧	○	黒色千枚岩	15.7	7.7	2.05	300.1
23	こさ−101	Ⅳ	敲石	○？	砂岩	15.1	5 ～ 3.6	3.4 ～ 2.4	340.42
24	けこ−100・101	Ⅳ	敲石	○	砂岩	20.9	11.15	9.8	2990
25	さ−93	Ⅳ	敲石	○	砂岩	7.5	8	6.5	591.28
26	す−91	Ⅳ	敲石	○	砂岩	8.5	6.6	3.5	288.03
27	け−101	Ⅳ	敲石	○	石英斑岩	10.4	7.2～6.8	4	440
28	て−95	Ⅳ	敲石	○	砂岩	11.5	6.4	7.8	830
29	す−91	Ⅳ	磨石兼敲石	○	砂岩	11.15	7.8～7.5	6.1	940
30	こさ−99	Ⅳ	磨石兼敲石	○	砂岩	10.9	7.8	5	780
31	こ−99	Ⅳ	磨石兼敲石	○	砂岩	15.2	12	7.7	2100
32	せ−92	Ⅳ	磨石	○	砂岩	15	13.4	13.2	4060

表７．石器観察表（２）

挿図番号	グリット	層	器種	完品	石質	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ（cm）	重量(g)
33	こ−100	Ⅳ	石皿	○？	砂岩	20	10.2	1.3 ～ 4.8	1190
34	す−100	Ⅳ	異形石器	○	流紋岩	6.8	上部 3.4 下部 4.8	上部 4.2 下部 4.8	198.36
35	つ−92	Ⅲ	磨製石斧	○	輝緑岩	11.1	6	2.6	308.8
36	た−92	Ⅲ	半磨製石斧	○	緑色岩	13.1	6.2	3.3	431.16
37	さ−99	Ⅲ	敲石	○	砂岩	12.25	6.15	5.3	610
38	せ−91	Ⅲ	敲石	○	砂岩	10.1	6.1	5.6	441.71
39	さ−92	Ⅲ	敲石兼磨石	○	砂岩	11.45	7.7～8.15	4.5 ～ 5	750
40	た−97	Ⅲ	磨石兼敲石	○	砂岩	12.6	8.1	4.2	750
41	ち−92	Ⅲ	磨石	○	砂岩	13.3	11.35	7	1520
42	そ−91	Ⅲ	磨石	○	砂岩	11	12	4.4 ～ 7	1320
43	た−95	Ⅲ	石鏃		珪質頁岩	3.9	1.6	0.4	2.51
44	さ−95	Ⅲ	砥石		シルト質頁岩	8.45	3.4	0.7	23.36
45	ち−95	Ⅲ	スクレイパー(削器)	○	輝緑岩	3	5.7	1.35	18.47
46	た−96	Ⅲ	スクレイパー(削器)	○	砂岩	6	7.8	2.9	111.97
47	た−94	Ⅲ	錐状石器		砂岩	12.85	4	最小 1.7 最大 3.6	159.38
48	た−95	Ⅲ	鑿状石器	○	緑色千枚岩	11	6	3.25	297.51
49	ち−94	Ⅲ	礫器	○	砂岩	9.95	9.05	4.7	442.13
50	ち−95	Ⅲ	礫器	○	砂岩	10.6	10.8	5.6	670
51	ち−98	Ⅳ	管玉	○	碧玉	1	0.5	孔径上部0.23 下部0.25	0.38
52	つ−93	4	管玉	○	流紋岩	1.1	0.5	孔径上部 0.3 下部 0.15	0.31
53	こ−94	表採	半磨製石斧	○	千枚岩質砂岩	15.2	5.4	2.2	254.42
54	不明	表採	半磨製石斧	○	砂岩ホルンフェルス	14.3	4.4	3.5	331.53
55	す−93	かく乱	磨製石斧		輝緑岩 (ランプロファイヤー)	4.6	7.35	3	119.87
56	不明		磨製石斧		輝緑岩	7.6	9.4	3	326.64
57	す−95	かく乱	磨製石斧		斑レイ岩	3.5	3.6	1.25	29.13
58	け−100	Ⅱ	くぼみ石	○	流紋岩	12.3	14.1	5	1160
59	し−97	かく乱	石鏃（凹基無茎鏃）	○	細粒砂岩	3.7	2.65	0.3	2.8
60	こ−96	かく乱	砥石		火山性砂岩	4.85	4.8	0.6	16.13
61	さ−98	かく乱	石球	○	砂岩	6.1	5.9	5.7	307.74
62	こ・さ−100	Ⅱ	石球	○	チャート	8.2	8	7.3	650
63	し・す−93	かく乱	おもり石	○	軽石質流紋岩	9	14.2	3 ～ 5.7	670

(11) 石器の石材鑑定

はじめに

大堂原貝塚の発掘調査では、各層位および表採により多数の石器が出土している。器種等の記載については石器の項に譲るが、様々な器種とともに、使用されている石材にも様々な種類の岩石が混在している状況が窺えた。本項では、石器に使用されている岩石の種類を明らかにすることを目的とし、まず、肉眼観察(ルーペも使用)により、識別し得る範囲の岩石種名を出土した石器全点に付した。次に、その中から、肉眼観察では岩石名の特定が難しかったものあるいは沖縄本島の地質を考慮すると特に確認が必要と考えられる岩石を選択し、薄片の作製とその偏光顕微鏡による記載と岩石の種類の確認を行った。

肉眼観察および薄片観察により同定された岩石については、その由来する地質を、既存の文献等により推定した。その際に、沖縄本島に分布する地質と同質の岩石は、基本的には沖縄本島内に由来すると考え、沖縄本島内には分布しないあるいは極めて限られた場所にしか分布しないような岩石は沖縄本島外に分布する地質に由来する可能性があると考えた。

① 肉眼鑑定

〈試料〉

試料は、大堂原貝塚より出土した石質遺物のうち、発掘調査者により選択された石器二五九点である。試料の内訳については、肉眼鑑定結果を呈示した表8に併記する。

〈観察方法〉

野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。肉眼鑑定は、当社顧問(当時)五十嵐俊雄により実施した。

〈結果〉

肉眼観察結果を表8に示す。肉眼観察では、後掲の表11に示すように二七種類の岩石名と一種類の鉱物名を付した。その内訳は、火成岩十二種類、堆積岩六種類、変成岩九種類の各種岩石と鉱物の石英が認められている。

② 薄片作製観察

〈試料〉

薄片作製観察を行った試料は、肉眼観察を行った試料から、磨製石斧一点、半磨製石斧一点、打製石斧二点、敲石二二点、剥片一点、磨石兼敲石一点、磨石一点および石材一点の計一〇点を選択した。試料には便宜的に試料番号1～10を付した。器種との対応は、表9に示す。また、これらの肉眼観察による岩石名は、輝緑岩(ランプロファイアー)、斑レイ岩、緑色片岩、菫青石ホルンフェルス、珪質頁岩、輝緑岩、砂質千枚岩、砂岩ホルンフェルス、緑色岩である。各試料の肉眼鑑定による岩石名も表9に併記する。

〈分析方法〉

薄片観察は、岩石を〇・〇三㎜の厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、岩石を構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

プレパラート上で薄くなった岩石薄片の上にカバーガラスを貼り付け、偏光顕微鏡下において観察する。

〈結果〉

偏光顕微鏡下の観察では岩石の構成鉱物および組織の記載岩石学的な特徴を明らかにした。各試料における構成物の量比表は、表10に示した。顕微鏡観察に際しては下方ポーラーおよび直交ポーラー下で撮影した写真を添付した。以下に各試料の鏡下観察結果の概要を述べる。

【NO.1 実測番号9し－92かく乱層】
岩石名：ゾイサイト－アクチノ閃石緑色岩(変輝緑岩)
岩石の組織：交代状組織(replacement texture)
岩石の特徴
塩基性岩が変質した緑色岩である。肉眼的に輝石斑晶の残晶を残す仮像が認められ、原岩は輝緑岩と考えられる。

【NO.2 実測番号18さ－100 Ⅱ層】
岩石名：緑簾石－アクチノ閃石緑色岩(変はんれい岩)
岩石の組織：交代状組織(replacement texture)
岩石の特徴
塩基性完晶岩を原岩とする緑色岩である。肉眼的に大型の輝石斑晶の仮像が多数認められ、はんれい岩を原岩とすると判定される。

【NO.3 実測番号二十一そ－96 Ⅲ層】
岩石名：緑泥石－アクチノ閃石緑色片岩
岩石の組織：片状組織(schistose texture)
岩石の特徴
広域変成岩の緑色片岩相を示す典型的な緑色片岩である。

【NO.4 実測番号二十七と－94・95 Ⅲ層】
岩石名：白雲母緑色岩
岩石の組織：交代状組織(replacement texture)
岩石の特徴
白雲母、緑泥石、不透明黒色鉱物からなる変質岩で、一般的な緑色岩とは岩相を異にする。原岩は不明である。

【NO.5 実測番号六十一ち－94 Ⅲ層】
岩石名：緑簾石－アクチノ閃石緑色岩(変輝緑岩)
岩石の組織：交代状組織(replacement texture)
岩石の特徴
肉眼的に比較的細晶質の輝石斑晶の仮像が多く残存することから輝緑岩を原岩とする緑色岩であると考えられる。

【NO.6 実測番号六十四ち－95 Ⅲ層】
岩石名：緑簾石－アクチノ閃石緑色岩(変はんれい岩)
岩石の組織：交代状組織(replacement texture)
苦鉄質鉱物を交代したアクチノ閃石は粗粒なものが多く認められることや、曹長石の一部に初生鉱物とみられる粗粒なものが認められることから、原岩は比較的粗粒な輝緑岩と推定される。
岩石の特徴
肉眼的に苦鉄質斑晶の仮像を有し、輝緑岩を原岩とする緑色岩である。

【NO.7 実測番号八十八さ－95かく乱層】
岩石名：菫青石ホルンフェルス
岩石の組織：点紋状組織(spotted texture)
岩石の特徴
泥質岩が花崗岩体などの貫入により接触変成作用を受けて生成した変質岩で、接触変成鉱物として菫青石が特徴的に認められる。

【NO.8 実測番号 た－95 Ⅲ層】
岩石名：結晶質石灰岩
岩石の組織：モザイク状組織(mosaic texture)
炭酸塩鉱物によるモザイク状組織が発達するが、弱い片状組織が認められる。

表８．石器と石質一覧表（１）

番号	登録番号	グリッド	層	器種	石質（肉眼鑑定）	石質（薄片鑑定）	
1	1	さ－100	Ⅶ	半磨製石斧　両刃	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	
2	2	こ－100	Ⅶ	半磨製石斧　両刃	緑色岩	緑色岩（原岩は玄武岩）	
3	3	け・こ－99	Ⅷ	打製石斧　　両刃	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	ほとんど石英白い鉱物
4	4	け・こ－101	Ⅷ	打製石斧　両刃	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	石英が多い
5	5	す－93	かく乱	磨製石斧　両刃	輝緑岩（ランプロファイヤー）	緑色岩（変輝緑岩）	オフィティック組織
6	6	さ－96	かく乱	磨製石斧　両刃	砂岩	－	
7	7	さ－97	かく乱	磨製石斧　両刃	輝緑岩（ランプロファイヤー）	緑色岩（変輝緑岩）	オフィティック組織
8	8	窪地南壁	表採	磨製石斧　刃部欠損	輝緑岩（ランプロファイヤー）	緑色岩（変輝緑岩）	オフィティック組織
9	9	し－92	かく乱	磨製石斧　刃部欠損	輝緑岩（ランプロファイヤー）	緑色岩（変輝緑岩）	オフィティック組織
10	10	ち・つ－88・89	かく乱	磨製石斧	砂岩	－	蛤刃
11	11	古墓付近	表採	磨製石斧　両刃	緑色岩	緑色岩（原岩は玄武岩）	
12	12	し－96	かく乱	磨製石斧　両刃	輝緑岩（ランプロファイヤー）	緑色岩（変輝緑岩）	二次利用,オフィティック組織
13	13	す－101	Ⅵ	磨製石斧　両刃	砂岩	－	
14	14	た－92	Ⅲ	半磨製石斧　両刃	緑色岩	緑色岩（原岩は玄武岩）	
15	15	不明	表採	磨製石斧　両刃	輝緑岩（ランプロファイヤー）	緑色岩（変輝緑岩）	1997年試掘　東側畑、オフィティック組織
16	16	す－95	Ⅷ	半磨製石斧　両刃	緑色千枚岩	－	
17	17	す－95	Ⅷ	半磨製石斧　刃部欠損	砂岩	－	
18	18	さ－100	Ⅱ	半磨製石斧　両刃？	はんれい岩	緑色岩（変斑レイ岩）	優黒色完晶質岩
19	19	不明	表採	半磨製石斧　両刃	砂岩ホルンフェルス	中粒砂岩	白雲母が認められる。
20	20	つ－92	Ⅲ	磨製石斧　両刃	輝緑岩（ランプロファイヤー）	緑色岩（変輝緑岩）	オフィティック組織
21	21	す－96	Ⅴ・Ⅵ	磨製石斧　両刃	砂岩	－	
22	22	こ－94	表採	半磨製石斧　両刃	砂岩	－	
23	23	し－97	かく乱	磨製石鏃　凹基無茎鏃	砂岩	－	
24	24	さ－101	Ⅵ	半磨製石斧　片刃？	輝緑岩（ランプロファイヤー）	緑色岩（変輝緑岩）	石斧の後,敲石として再利用か？オフィティック組織
25	25	こ－95	かく乱	磨製石斧　片刃？	ひん岩	－	
26	26	す－95	Ⅵ	打製石斧　両刃	緑色千枚岩	－	
27	35	せ－95	Ⅷ	半磨製石斧　両刃	緑色片岩	緑色片岩	
28	65	そ－95	Ⅲ	半磨製石斧　両刃	輝緑岩（ランプロファイヤー）	緑色岩（変輝緑岩）	オフィティック組織、やや粗晶質
29	38	そ－95	Ⅵ	半磨製石斧　両刃	珪長岩	－	
30	77	す－95	かく乱	半磨製石斧　刃部欠損	はんれい岩	緑色岩（変斑レイ岩）	
31	78	た－95	Ⅶ	半磨製石斧　両刃	輝緑岩（ランプロファイヤー）	緑色岩（変輝緑岩）	オフィティック組織
32	27	つ－93	4	くぼみ石	砂岩	－	
33	28	こ－94	Ⅱ	磨石	砂岩	－	
34	29	さ－99	Ⅲ	敲石	砂岩	－	
35	30	こ・さ－99	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
36	31	た・ち－91・92	Ⅵ	磨石	砂岩	－	黒色マンガン付着
37	32	こ－94	Ⅱ	磨石	砂岩	－	
38	33	そ－92	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
39	34	た・ち－92	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
40	36	さ・し－92・93	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
41	37	せ－90・91	かく乱	磨石	珪長岩	－	
42	39	す－100	Ⅳ	異形石器	流紋岩	結晶質石灰岩	
43	40	そ－91	Ⅵ	異形石器	凝灰質砂岩	－	
44	41	す－91	Ⅳ	敲石	砂岩	－	
45	42	つ′て－100	表採	磨石	砂岩	－	
46	43	た－92	Ⅲ	敲石	砂岩	－	
47	44	さ－99	Ⅳ	敲石	石英斑岩	－	
48	45	け－101	Ⅳ	敲石	石英斑岩	－	
49	46	さ－92	Ⅲ	敲石	砂岩	－	
50	47	す－91	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
51	48	さ－98	かく乱	石球	砂岩	－	
52	49	こ・さ－100	Ⅱ	石球	チャート	－	
53	50	さ－93	Ⅳ	石球	砂岩	－	
54	51	ち－92	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
55	52	け－100	Ⅱ	くぼみ石	流紋岩	結晶質石灰岩	酸化鉄で桃色を呈する。
56	53	こ－100・101	Ⅶ	くぼみ石	砂岩	－	
57	54	せ－91	Ⅲ	敲石	砂岩	－	三稜石器
58	55	こ・さ－101	Ⅳ	敲石	砂岩	－	
59	56	さ－101	Ⅱ	敲石	砂岩	－	
60	57	け・こ－100・10	Ⅳ	敲石	砂岩	－	
61	58	し・す－93	かく乱	おもり	軽石質流紋岩	－	
62	59	そ－91	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
63	60	さ－99	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
64	61	せ－92	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
65	62	し－100	Ⅵ	石皿	砂岩	－	
66	63	こ－100	Ⅳ	石皿	砂岩	－	
67	64	た－97	Ⅲ	磨石	砂岩	－	

表8．石器と石質一覧表（2）

番号	登録番号	グリッド	層	器種	石質（肉眼鑑定）	石質（薄片鑑定）	
68	66	さ－95	Ⅲ	砥石	頁岩	－	石鏃などを取った残りか？
69	67	す－96	Ⅷ	有孔石器？	砂岩	－	指輪状？
70	68	さ－95	Ⅶ	敲石	砂岩	－	
71	69	す－96	Ⅴ・Ⅵ	くぼみ石	砂岩	－	
72	70	す－96	Ⅴ	敲石	砂岩	－	
73	71	て－95	Ⅳ	敲石	砂岩	－	
74	72	し－96	Ⅶ	磨石	砂岩	－	
75	73	し－96	Ⅶ	磨石	砂岩	－	
76	74	す－95	Ⅷ	磨石	砂岩	－	
77	75	せ－95	Ⅴ	石皿	砂岩	－	
78	76	そ－96	Ⅲ	磨石	角閃石花崗岩	－	
79	79	た－95	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
80	80	た－95	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
81	81	た－95	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
82	82	た－95	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
83	83	た－96	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
84	84	た－95	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
85	85	た－95	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
86	86	た－97	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
87	87	ち－95	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
88	88	ち－95	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
89	89	ち－95	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
90	90	て－95	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
91	91	つ－94	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
92	92	た－95	Ⅲ	磨石	輝石安山岩	－	斑晶の一部は角閃石。ほとんど輝石
93	93	す－93	かく乱	石皿	砂岩	－	
94	94	せ－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
95	95	せ－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
96	96	す－94	かく乱	磨石	砂岩	－	
97	97	す－94	かく乱	磨石	砂岩	－	
98	98	す－94	かく乱	磨石	石英斑岩	－	
99	99	し－94	かく乱	磨石	砂岩	－	
100	100	し－94	かく乱	磨石	砂岩	－	タービダイト質。黒は頁岩のかけら。両面中央は浅くくぼむ。
101	101	さ－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
102	102	そ－95	Ⅰ	磨石	砂岩	－	両面中央に浅いくぼみ
103	103	こ－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
104	104	せ－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
105	105	し－95	かく乱	磨石	石英斑岩	－	
106	106	す－94	かく乱	磨石兼敲石	砂岩	－	全面磨面有り。先端は敲きに使用。上部破損。
107	107	す－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
108	108	せ－94	かく乱	磨石	砂岩	－	
109	109	せ－94	かく乱	磨石	砂岩	－	
110	110	し－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
111	111	し－95	かく乱	磨石	珪長岩	－	
112	112	す・せ－93	かく乱	磨石	砂岩	－	タービダイト質で頁岩を含む。
113	113	し－95	かく乱	石球	砂岩	－	
114	114	す－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
115	115	し－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
116	116	け－94	かく乱	三稜磨石	輝緑岩	緑色岩（変輝緑岩）	
117	117	し－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
118	118	す－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
119	119	す－96	かく乱	磨石	砂岩	－	
120	120	け－94	かく乱	磨石	砂岩	－	
121	122	つ－95	Ⅳ	砥石	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	
122	123	ち－95	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
123	124	つ－95	Ⅳ	磨石	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	
124	125	て－95	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
125	126	つ－95	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
126	127	つ－95	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
127	128	ち－95	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
128	129	て－95	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
129	130	ち－95	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
130	131	つ－94	かく乱	磨石	砂岩	－	石英粒顕著
131	132	た－95	Ⅳ	敲石	砂岩	－	両面中央に浅いくぼみ
132	133	て－95	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
133	134	た－95	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
134	135	て－95	Ⅶ	敲石	デイサイト	－	

表８．石器と石質一覧表（３）

番号	登録番号	グリッド	層	器種	石質（肉眼鑑定）	石質（薄片鑑定）	
135	136	た－95	かく乱	敲石	砂岩	－	石英が多い。
136	137	す－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
137	138	せ－95	かく乱	石皿	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	
138	139	し－95	かく乱	敲石	砂岩	－	
139	140	し－95	かく乱	砥石	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	
140	141	し－95	かく乱	敲石	砂岩	－	
141	142	し－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
142	143	し－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
143	144	せ－94	かく乱	敲石	砂岩	－	
144	145	し－95	かく乱	磨石	砂岩	－	
145	146	こ－94	Ⅳ	礫器（片刃）	デイサイト	－	
146	147	こ－94	Ⅳ	磨石	砂岩	－	火を受けた可能性あり
147	148	け－94	Ⅳ	磨石	輝緑岩	緑色岩（変輝緑岩）	
148	149	こ－95	Ⅳ	磨石	砂岩	－	
149	150	こ－94	Ⅳ	敲石	砂岩	－	
150	151	け－94	Ⅳ	砥石	砂岩	－	数箇所に1cm前後の線が数条刻まれる。
151	152	こ－95	Ⅳ	磨石	砂岩	－	三稜石器
152	153	こ－95	Ⅳ	敲石	砂岩	－	
153	154	こ－95	Ⅳ	石皿	砂岩	－	
154	155	さ－97	かく乱	石皿	流紋岩	結晶質石灰岩	大型
155	156	不明	表採	石皿	砂岩	－	盛土より表採
156	157	こ－100	Ⅶ	石皿	砂岩	－	
157	158	つ－92	Ⅲ	石皿	流紋岩	結晶質石灰岩	大型
158	159	こ－95	Ⅳ	石皿	流紋岩	結晶質石灰岩	大型
159	160	す－96	Ⅴ	石皿	流紋岩	結晶質石灰岩	大型
160	161	す－92	Ⅲ	石皿	流紋岩	結晶質石灰岩	大型
161	162	た－95	Ⅳ	台石	砂岩	－	大型
162	163	さ－96	かく乱	石皿	流紋岩	結晶質石灰岩	大型
163	165	す－96	Ⅶ	おもり	琉球石灰岩	－	有孔
164	169	せ－92	Ⅵ	敲石	砂岩	－	
165	170	こ－96	かく乱	砥石	砂岩	－	黒色鉱物のほとんどが輝石
166	一	そ－95	Ⅲ	磨石	黒雲母花崗閃緑岩	－	風化
167	三	そ－95	Ⅲ	三稜磨石	砂岩	－	三稜石器
168	四	そ－95	Ⅲ	敲石	砂岩	－	脆い
169	五	そ－95	Ⅲ	スクレイパー	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	完形
170	六	そ－95	Ⅲ	磨石	砂岩	－	三稜石器
171	七	そ－93	Ⅲ	敲石	輝緑岩	緑色岩（変輝緑岩）	破損品
172	八	て－94	Ⅲ	打製石斧	砂岩	－	片
173	十	た－94	Ⅲ	敲石	石英斑岩	－	
174	十一	た－94	Ⅲ	打製石刃	黒色千枚岩	－	
175	十二	た－96	Ⅲ	石皿	砂岩	－	
176	十三	ち－95	Ⅲ	打製石斧	砂岩	－	未製品
177	十四	た－95	Ⅲ	鑿状石器	緑色千枚岩	－	
178	十五	ち－95	Ⅲ	敲石	砂岩	－	柔らかいものを潰した
179	十六	さ－95	Ⅲ	スクレイパー	チャート	－	
180	十七	た－95	Ⅲ	打製石斧	黒色千枚岩	－	未製品
181	十八	ち－94	Ⅲ	敲石	砂岩	－	破損品
182	十九	た－95	Ⅲ	スクレイパー	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	
183	二十	た－94	Ⅲ	砥石	砂岩	－	
184	二十一	そ－96	Ⅲ	打製石斧	緑色片岩	緑色片岩	割れ
185	二十二	さ－95	Ⅲ	打製石刃	砂岩	－	破損品
186	二十三	ち－94	Ⅲ	礫器	砂岩	－	破片
187	二十四	た－95	Ⅲ	スクレイパー	チャート	－	
188	二十五	し－94	Ⅲ	スクレイパー	砂岩	－	横刃
189	二十六	ち－94	Ⅲ	敲石	砂岩	－	
190	二十七	と－94・95	Ⅲ	敲石	珪質頁岩	－	
191	二十八	ち－95	Ⅲ	磨石	砂岩	－	
192	二十九	そ－94	Ⅲ	スクレイパー	石英	－	
193	三十	そ－96	Ⅲ	おもり	凝灰質砂岩	－	未製品
194	三十一	た－95	Ⅲ	打製石斧	黒色千枚岩	－	
195	三十二	ち－94	Ⅲ	スクレイパー	砂岩	－	
196	三十三	ち－95	Ⅲ	円盤形石器	砂岩	－	破損品
197	三十四	ち－95	Ⅲ	礫器	砂岩	－	
198	三十五	そ－96	Ⅲ	スクレイパー	珪質千枚岩	－	横刃
199	三十六	ち－94	Ⅲ	スクレイパー	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	
200	三十七	ち－94	Ⅲ	スクレイパー	砂岩	－	
201	三十八	て－94		スクレイパー	黒色千枚岩	－	
202	三十九	し－94	Ⅲ	打製石斧	砂岩	－	
203	四十	ち－95	Ⅲ	スクレイパー	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	

表8．石器と石質一覧表（4）

番号	登録番号	グリッド	層	器種	石質（肉眼鑑定）	石質（薄片鑑定）	
204	四十一	ち－95	Ⅲ	スクレイパー	砂岩	－	
205	四十二	さ－95	Ⅴ，Ⅵ	スタンプ形石器	砂岩	－	破損品
206	四十三	た－96	Ⅲ	スクレイパー	砂岩	－	横刃
207	四十四	と－94・95	Ⅲ	敲石	砂岩	－	
208	四十五	ち－95	Ⅲ	敲石	砂岩	－	破損品
209	四十六	せ－96	Ⅲ	剥片	砂岩	－	
210	四十七	ち－94	Ⅲ	スクレイパー	砂岩	－	横刃
211	四十八	ち－95	Ⅲ	ノツチ	黒色千枚岩	－	
212	四十九	ち－95	Ⅲ	スクレイパー	輝緑岩	緑色岩（変輝緑岩）	
213	五十	し－94	Ⅲ	敲石	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	
214	五十一	た－94	Ⅲ	スクレイパー	砂岩	－	接合可
215	五十二	ち－95	Ⅲ	敲石	砂岩	－	
216	五十三	ち－94	Ⅲ	礫器	砂岩	－	片刃
217	五十四	つ－95	Ⅲ	円盤形石器	黒色千枚岩	－	
218	五十五	と－95	Ⅲ	敲石	砂岩	－	
219	五十六	ち－94	Ⅲ	石核	石英	－	
220	五十七	つ－94	Ⅲ	スタンプ形石器	砂岩	－	
221	五十八	つ－94	Ⅲ	磨石兼敲石	砂岩	－	
222	五十九	た－94	Ⅲ	錐状石器	砂岩	－	
223	六十	ち－95	Ⅲ	三稜磨石	砂岩	－	三稜石器
224	六十一	ち－94	Ⅲ	剥片・細片	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	
225	六十二	ち－95	Ⅲ	敲石	黒色千枚岩	－	破片
226	六十三	た－95	Ⅲ	磨製石鏃	珪質頁岩	－	破損品
227	六十四	ち－95	Ⅲ	敲石	輝緑岩	緑色岩（変輝緑岩）	破片
228	六十五	ち－95	Ⅲ	敲石	砂岩	－	破片
229	六十六	ち－95	Ⅲ	敲石	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	破片
230	六十七	ち－95	Ⅲ	敲石	砂岩	－	破片
231	六十九	た－95	Ⅳ	スクレイパー	黒色千枚岩	－	横刃
232	七十	た－95	Ⅶ	スクレイパー	砂岩	－	横刃
233	七十一	せ－94	かく乱	スクレイパー	砂岩	－	横刃
234	七十二	た－95	Ⅳ	デスク形スクレイパー	砂岩	－	
235	七十三	ち－95	4	打製石斧	砂岩	－	
236	七十四	す－94	かく乱	スクレイパー	砂岩	－	横刃
237	七十五	ち－95	Ⅶ	スクレイパー	砂岩	－	横刃
238	七十六	そ－95	Ⅵ	スクレイパー	砂岩	－	縦刃
239	七十七	こ－95	かく乱	スクレイパー	砂岩	－	横刃
240	七十八	た－95	Ⅲ	デスク形スクレイパー	流紋岩	結晶質石灰岩	
241	七十九	し－95	Ⅴ	スクレイパー	頁岩	－	横刃
242	八十	不明	不明	スクレイパー	黒色千枚岩	－	横刃
243	八十一	て－93	Ⅵ，Ⅶ	スクレイパー	ひん岩	－	横刃
244	八十二	そ－95	Ⅵ	スクレイパー	砂岩	－	
245	八十三	た－95	Ⅶ	円盤形石器	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	
246	八十四	ち－95	Ⅳ	円盤形石器	砂岩	－	
247	八十五	つ－95	Ⅳ	スクレイパー	砂岩	－	
248	八十六	ち－95	Ⅳ	石匙状石器	粘板岩	－	
249	八十七	つ－95	Ⅳ	礫器	砂岩	－	
250	八十八	さ－95	かく乱	打製石斧	董青石ホルンフェルス	董青石ホルンフェルス	破損品。乳房状石斧。
251	八十九	し－94	かく乱	板状礫器	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	
252	九十	な－95	4	打製石斧	黒色千枚岩	－	
253	九十一	さ－95	Ⅴ	台石	流紋岩	結晶質石灰岩	
254	九十二	さ－95	Ⅴ	くぼみ石	流紋岩	結晶質石灰岩	整形している
255	九十三	す－96	Ⅴ	敲石	砂岩	－	
256	九十四	せ－95	Ⅷ	打製石斧	砂岩	－	片
257	九十五	そ－95	Ⅷ	石槍状製品	砂質千枚岩	緑色岩（変輝緑岩）	
258	九十六	せ－95	Ⅷ	打製石斧	砂岩	－	破損品
259	九十七	す－95	Ⅷ	砥石	砂岩	－	

表9．岩石薄片観察試料一覧

試料番号	実測番号	グリッド	層	器種	破損品	肉眼観察による岩石名	備　考
1	9	し－92	かく乱	磨製石斧	○	輝緑岩（ランプロファイアー）	刃部欠損。nyguk3037
2	18	さ－100	Ⅱ	半磨製石斧	○	斑レイ岩	基端部欠損。刃部破損。両刃？nyguk1380
3	二十一	そ－96	Ⅲ	打製石斧	○	緑色片岩	
4	二十七	と－94・95	Ⅲ	敲石	○	珪質頁岩	
5	六十一	ち－94	Ⅲ	剥片	○	砂質千枚岩	
6	六十四	ち－95	Ⅲ	敲石	○	輝緑岩	
7	八十八	さ－95	かく乱	打製石斧	○	董青石ホルンフェルス	乳房状石斧。刃部欠損。nyguk6133
8	－	た－95	Ⅲ	石材	○	流紋岩	砥石の石材か。
9	－	て－93	4	磨石兼敲石	○	砂岩ホルンフェルス	219 nyguk5235
10	－	て－93	4	磨石	○	緑色岩	220 nyguk5274

※漢数字は石材から石器へ変更したもの

岩石の特徴

肉眼的には砂質であるが鏡下では結晶質で再結晶化した石灰岩と認められる。

【NO. 9　実測番号 て−93 4層】

岩石名：中粒砂岩

岩石の組織：砕屑状組織（clastic texture）

細粒〜中粒の砕屑物を主体とし、淘汰は良好である。基質量は少なく、アレナイト質である。

岩石の特徴

中−古生層に見られる硬質の典型的な中粒砂岩で、いわゆるグレーワッケである。

【NO. 10　実測番号 て−93 4層】

岩石名：緑廉石−アクチノ閃石緑色岩

岩石の組織：交代状組織（replacement texture）

岩石の特徴

塩基性岩を交代して生成した変質岩である。肉眼的な苦鉄質斑晶の仮像は微細であるため、原岩は玄武岩質である可能性が高い。

③考察

〈薄片観察による岩石名の変更について〉

表11に肉眼鑑定による岩石名と薄片観察による岩石名との対応を示す。以下に、岩石名が変わったものについて説明する。なお、本項以降の考察では、岩石名が変更したものについては薄片観察により決定した岩石名を採用する。

〈輝緑岩（ランプロファイアー）・輝緑岩・斑レイ岩→緑色岩〉

輝緑岩および斑レイ岩は、ともに塩基性（SiO_2の含有量が50％前後）の火成岩の一種であり、粗粒の組織を持つ塩基性岩を斑レイ岩、細粒の組織をもつ塩基性岩を玄武岩とよび、粗粒と細粒の中間的な組織をもつものを輝緑岩と呼んでいる。ランプロファイアーも中間的な組織を呈する塩基性火成岩の一種であり、輝緑岩としてもよいが、特別な鉱物組成を有するためにランプロファイアーという岩石名が付けられている。

一方、緑色岩は、これら塩基性火成岩が、地殻変動により、高温と高圧を受けた（変成作用）ために、構成鉱物が別の鉱物に変化して異なる鉱物組成および組織からなる岩石（変成岩）に変化した岩石である。すなわち、岩石学的には、ランプロファイアー、輝緑岩、斑レイ岩および玄武岩の各塩基性火成岩と緑色岩とは変成前（原岩とよぶ）と変成後という関係にある。この関係は、連続的であるために、軽度の変成により生成した緑色岩は、元の塩基性火成岩とよく似た外見を呈する。今回の場合は、薄片観察によって、構成鉱物のほとんどが変成作用により生じた鉱物であることがわかったために、変成岩である緑色岩に変更した。

なお、塩基性火成岩が、より高い温度と圧力による変成作用を受けると片状組織（板状・柱状の鉱物がお互いに平行に並ぶ）を呈する緑色片岩となる。この場合も緑色岩と緑色片岩の境界は連続的であり、どの程度の片状組織が認められれば片岩とするという明瞭な定義はない。

〈砂質千枚岩→緑色岩〉

千枚岩も変成岩の一種であり、片岩と同様に片状組織を呈する岩石である。上述のように、緑色岩や緑色片岩は塩基性火成岩の変成した岩石であるが、千枚岩は、一般的には泥岩や頁岩などの泥質堆積岩が変成作用を受けて生じた岩石とされる。今回の場合、肉眼では粗粒の砕屑物と片状組織を示唆するような様相が表面に認められたため粗粒の堆積岩を原岩とする千枚岩としたが、薄片観察では、構成鉱物が

表10. 薄片観察による構成物量比表

番号	実測番号	グリット	層	器種	岩石名	構成鉱物・鉱物片																										岩片				その他	
						Qz	Kf	Ab	Crd	Mv	Bi	Ho	Act	And	Ep	Zo	Se	Ch	Ti	Ap	Trm	Zr	Hm	Op	FeO	C	Cly	Cc	Gr	Sh	Che	Cs	Vein	Cra
1	9	し−92	かく乱	磨製石斧	ゾイサイト−アクチノ閃石緑色岩	±		△		+	±		◎〜○			○		+	+				±	+									
2	18	さ−100	Ⅱ	半磨製石斧	緑廉石−アクチノ閃石緑色岩	+		○		+			○		△			△	+				±	+									
3	二十一	そ−96	Ⅲ	打製石斧	緑泥石−アクチノ閃石緑色片岩	△		±			±		○		±			△	+	±		±		+				±						
4	二十七	と−94・95	Ⅲ	敲石	白雲母緑色岩					◎						+		○					+	△										
5	六十一	ち−94	Ⅲ	剥片	緑廉石−アクチノ閃石緑色岩	△		±					○		○			△	+				±	±									+	
6	六十四	ち−95	Ⅲ	敲石	緑廉石−アクチノ閃石緑色岩	△		+		±			○		○	+	+	+	+	±				±	+								+	
7	八十八	さ−95	かく乱	打製石斧	董青石ホルンフェルス	◎		+	○	+	○〜△			±			±	±		±	±	±	±	+	+	△									±
8	−	た−95	Ⅲ	石材	結晶質石灰岩	±		±																±	+			◎						
9	−	て−93	4	磨石兼敲石	中粒砂岩	○	△	△		+	±	±					△	+	±			±		±	+		+		+	△	+	±		
10	−	て−93	4	磨石	緑廉石−アクチノ閃石緑色岩	△		△		+					○			△	+				±	+	+								△	+

略号

鉱物名

Qz：石英　Kf：カリ長石　Ab：曹長石（斜長石）　Mv：白雲母　Bi：黒雲母　Ho：角閃石　Act：アクチノ閃石　And：紅柱石　Ep：緑廉石　Zo：ゾイサイト　Se：セリサイト　Ch：緑泥石　Ti：チタン石　Ap：燐灰石　Trm：電気石　Zr：ジルコン　Hm：赤鉄鉱　Op：不透明鉱物　FeO：水酸化鉄　C：炭質物　Cly：粘土　Cc：炭酸塩鉱物

岩片・その他

Gr：花崗岩　Sh：頁岩　Che：チャート　Cs：結晶片岩　Vein：細脈　Cra：クラック

量比

◎：多量　○：中量　△：少量　＋：微量　±：きわめて微量

緑色岩を構成するものであったことから緑色岩とした。なお、顕微鏡下では、片状組織としてもよい状況も認められる。

〈珪質頁岩→緑色岩(白雲母緑色岩)、流紋岩→結晶質石灰岩〉

いずれの場合も、肉眼鑑定による岩石と薄片観察による岩石との間には、前述のような近縁関係はない。これらについては、表面の風化により肉眼鑑定では本来の特徴を識別することができなかったことによる。

〈砂岩ホルンフェルス?→中粒砂岩〉

ホルンフェルスとは、変成岩の一種であるが、前述した緑色岩や緑色片岩、千枚岩などとは異なり、地殻変動による変成作用ではなく、地層中にマグマが貫入した際に、貫入を受けた側の地層を構成している岩石が、その熱により組織や鉱物が変化して異なる岩石となったものである。なお、貫入したマグマの方は、火成岩となる。一般には貫入して形成された花崗岩体の周辺に形成されることが多く、原岩の種類によって様々なホルンフェルスが生成される。今回の場合、上記同様に表面の風化のために肉眼では、砂岩というよりも、熱変成により再結晶の進んだホルンフェルスの可能性があるとしたが、顕微鏡下では、比較的粗粒(中粒)の砕屑物からなる砂岩であることが確認された。また、再結晶化も特に認められなかった。

④石材産地について

薄片作製観察の結果、肉眼鑑定により鑑定された28種類の岩石・鉱物は、22種類となった。その内訳は、火成岩8種類、堆積岩6種類、変成岩7種類、鉱物1種類である。以下では、石材毎にその産地について検討する。なお、南西諸島および沖縄本島の地質記載については木崎編(1985)、沖縄地学会(1982)、名護市の地質については宮城(2003)、屋我地島の地質については神谷(2001)をそれぞれ参照した。

【火成岩】

〈安山岩・デイサイト・流紋岩〉

安山岩は沖縄本島では産出が稀な岩石で、恩納村安富祖の名護層黒色千枚岩中に安山岩岩脈が知られている程度である。沖縄県下では現世火山の硫黄鳥島のほかに、新第三系安山岩活動が顕著であった久米島などに安山岩の分布が認められるが、これらの島から搬入されたものかどうかは、現時点では不明である。

流紋岩およびデイサイトは沖縄本島での単独の産出は知られていない。後述するように各所の名護層中に石英斑岩の岩脈の分布が知られている。石英斑岩岩脈の急冷部や、小岩脈では細晶質～ガラス質で流紋岩の岩相を示すものがある。本遺跡で流紋岩およびデイサイトとしたものは、この部分の岩石であるかも知れない。

因みに沖縄本島周辺の島では、久米島および粟国島にデイサイトや流紋岩の分布が記載されているが、その産状は岩脈など非常に局地的である。南西諸島で流紋岩類が多くみられる島は、八重山諸島の石垣島および西表島になる。

〈ひん岩・石英斑岩・珪長岩〉

ひん岩は中－古生層あるいは新第三系中に岩脈として産出する半深成岩である。産出は小規模であるため地質図等では省略されていることが多い。ただし、名護市内では、本部半島南部の安和の山地内にひん岩の岩脈があると記載されており、屋我地島内にも西部の前垣海岸にひん岩の露頭が認められている。今回認められたひん岩は、これら周辺域の岩体に由来するものと考えられる。

石英斑岩とした岩石は、石英の斑晶が目立つ酸性岩で源河・津波・名嘉真・数久田・世冨慶などに分布が知られ、名護層中に貫入した岩脈の産状を示す。珪長岩は完晶質の半深成岩で、石英斑岩との肉眼的な識別は石英斑晶の有無でなされる。源河地区の石英斑岩は石英が小さく量も少ないとされているので、珪長岩とした岩石はこの種の石英斑岩岩脈としたものの一つの岩相として産した可能性が高い。辺戸名山遺跡から出土した丸ノミ型石斧にも同種の珪長岩が用いられている。在地性の岩石であろう。

〈花崗閃緑岩・花崗岩〉

沖縄本島は花崗岩類の分布はきわめて少なく、長浜川の中流に小規模な石英閃緑岩体の存在が知られているに過ぎず、全体に変質が著しいとされている。出土試料は各1個の比較的新鮮な角閃石花崗岩と黒雲母花崗閃緑岩である。したがって出土した花崗岩と花崗閃緑岩を在地性岩石とすることはできない。しかし、従来在地性石材を用いることが多い磨石に使用していることから直ちに搬入品とすることには疑問があり、礫岩層等からの再堆積、あるいは他器種からの転用を含めて検討しなければならない。

【堆積岩】

〈頁岩・砂岩・チャート・凝灰質砂岩・サンゴ石灰岩〉

堆積岩とした岩石で頁岩・砂岩・チャートはいずれも名護断層北西側の中－古生層に属する岩石で、本部半島の本部層・今帰仁層に相当する地層に由来する在地性岩石である。特に砂岩は、本部半島に分布する中古生層や、沖縄島北部に広く分布する名護層および嘉陽層に含まれている岩石である。希少石材ではないことから、遺跡周辺の河川の河床礫などが使用されているものと考えられる。なお、砂岩の一部は黒色頁岩の細角礫を含みタービダイト性堆積物の特徴を備え、粗粒質から細粒質までの岩相を示すが、中粒質の砂岩が多く使用されている。

凝灰質砂岩は沖縄では新第三系島尻層の構成物とみられる火山砕屑岩で在地性岩石と判定される。また、サンゴ石灰岩は琉球石灰岩の破片と認定される。

〈結晶質石灰岩〉

観察した結晶質石灰岩は、再結晶化の進んだ片状組織の発達する岩相を示しており、中古生層に含まれる石灰岩と判断される。この岩相は、更新統の琉球層群にみられる石灰岩の岩相とは明らかに異なっている。沖縄島においてこのような結晶質石灰岩が含まれる地層としては、本部半島に分布する中古生界の本部層、今帰仁層および与那嶺層がある。しかし、本試料にみられるような層状で再結晶質石灰岩は確認されていない。産地については現段階では不明である。

【変成岩】

〈粘板岩・黒色千枚岩・珪質千枚岩・緑色千枚岩〉

変成度の低い粘板岩は本部層、名護層、嘉陽層のいずれにも存在する。千枚岩類は砕屑性堆積岩や火山砕屑性堆積岩が広域変成作用を受けて生成した準片岩で、一般には変成帯中に産出する。当地方では後述するように名護層を構成する主要な岩石であり、また、嘉陽層中にも狭在している。したがって、在地性の可能性が高い。

〈緑色岩および緑色片岩〉

緑色岩および緑色片岩は、名護層の緑色岩部層に由来する石材と考えられる。名護層は白亜紀～始新世の地層で、主部は沖縄等北部の脊梁山地に分布し、主に黒色の千枚岩からなる。名護層の緑色岩部層は、国頭村与那から名護市付近まで北西側の海岸沿いに分布し、緑色岩相～緑廉石角閃岩相の緑色岩から主に構成され、泥質の千枚岩を挟む(日本の地質「九州地方」編集

委員会、１９９２）。日本の地質「九州地方」編集委員会（１９９２）によると、緑色岩類の変成鉱物は、主に緑簾石、アクチノ閃石、緑泥石からなり、曹長石、石英、白雲母、チタン石、方解石を伴うとされており、今回の観察結果と整合している。

琉球列島における緑色岩の分布域としては、この他に慶良間列島および八重山諸島がある。慶良間列島には、白亜紀後期～古第三紀の慶良間堆積岩コンプレックスが広く分布し、その一部に緑色岩、緑色千枚岩、緑色片岩などからなる緑色岩部層が分布する（佐藤・駒澤、１９９３）。慶良間堆積岩コンプレックスは、名護層と同様に四万十帯の白亜紀付加コンプレックスであり、同様な緑色岩類が分布している。一方の八重山諸島には、前・中期ジュラ紀の変成年代をしめすトムル層が各地に分布している。トムル層は、藍閃石片岩相の高圧型変成岩類で、緑色片岩・藍閃石片岩などの塩基性片岩からなり、泥質片岩および珪質片岩を挟む。トムル層の塩基性片岩は、高圧型の変成岩類であるため、変成鉱物組合せから、観察した緑色岩・緑色片岩とは異なっている。

大堂原貝塚において石器石材として使用されている緑色岩および緑色片岩は、貝塚の地理的位置を考慮すれば、名護層に由来するものが大部分を占めていると推定される。ただし、Ｎｏ.４　実測番号二十七の白雲母緑色岩については、典型的な緑色岩類とは、岩相が異なっており、名護層緑色岩部層の原産地試料との比較が必要であると考えられる。

〈菫青石ホルンフェルス〉

菫青石ホルンフェルスは、一般に泥質堆積岩類が花崗岩などの深成岩類の貫入による熱変成作用を被ることによって生成される岩石である。沖縄島においては、読谷村の長浜川上流域において名護層に貫

表11. 鑑定された岩石名一覧と推定される地質

	肉眼観察による岩石名		薄片番号	薄片観察による岩石名		由来する地質	
						地層名等	主な分布域
1	輝石安山岩	火成岩	－	－	火成岩	不明	久米島？・トカラ列島？・九州？
2	デイサイト		－	－		不明	久米島？・粟国島？・九州？
3	軽石質流紋岩		－	－		不明	久米島？・粟国島？・九州？
4	ひん岩		－	－		新生代中新世貫入岩類	本部半島、屋我地島
5	石英斑岩		－	－		新生代中新世貫入岩類	名嘉真～源河
6	珪長岩		－	－		新生代中新世貫入岩類	名嘉真～源河
7	黒雲母花崗閃緑岩		－	－		不明	不明
8	角閃石花崗岩		－	－		不明	不明
9	頁岩	堆積岩	－	－	堆積岩	本部層、今帰仁層、与那嶺層、名護層、嘉陽層	本部半島、沖縄本島北部～中部
10	砂岩		－	－		本部層、今帰仁層、与那嶺層、名護層、嘉陽層	本部半島、沖縄本島北部～中部
11	砂岩ホルンフェルス	変成岩	9	中粒砂岩		本部層、今帰仁層、与那嶺層、名護層、嘉陽層	本部半島、沖縄本島北部～中部
12	チャート	堆積岩	－	－		本部層、今帰仁層、与那嶺層	本部半島
13	凝灰質砂岩		－	－		本部層、今帰仁層、与那嶺層、名護層、嘉陽層	本部半島、沖縄本島北部～中部
14	サンゴ石灰岩		－	－		琉球石灰岩	沖縄本島各地
15	流紋岩	火成岩	8	結晶質石灰岩		本部層、今帰仁層、与那嶺層	本部半島
16	粘板岩	変成岩	－	－	変成岩	名護層、嘉陽層	沖縄本島北部～中部の西岸
17	黒色千枚岩		－	－		名護層、嘉陽層	沖縄本島北部～中部の西岸
18	珪質千枚岩		－	－		名護層、嘉陽層	沖縄本島北部～中部の西岸
19	緑色千枚岩		－	－		名護層、嘉陽層	沖縄本島北部～中部の西岸
20	砂質千枚岩		5	緑色岩（変輝緑岩）		名護層	沖縄本島北部～中部の西岸
21	輝緑岩（ランプロファイアー）	火成岩	1	緑色岩（変輝緑岩）		名護層	沖縄本島北部～中部の西岸
22	輝緑岩		6	緑色岩（変輝緑岩）		名護層	沖縄本島北部～中部の西岸
23	斑レイ岩		2	緑色岩（変斑レイ岩）		名護層	沖縄本島北部～中部の西岸
24	緑色岩	変成岩	10	緑色岩（原岩は玄武岩）		名護層	沖縄本島北部～中部の西岸
25	珪質頁岩	堆積岩	4	緑色岩（白雲母緑色岩）		名護層？	沖縄本島北部～中部の西岸？
26	緑色片岩	変成岩	3	緑色片岩		名護層	沖縄本島北部～中部の西岸
27	菫青石ホルンフェルス		7	菫青石ホルンフェルス		貫入花崗岩類周縁部	長浜川？、沖永良部島、徳之島、奄美大島、屋久島
28	石英	鉱物	－	－	鉱物	石英脈	周辺

入した閃緑岩とその周縁に形成されたと考えられているホルンフェルスが確認されているほかは、ほとんど記載例がない。今回認められたホルンフェルスが、上記の岩体に由来するか否かは、現地調査による確認と試料の顕微鏡観察等による比較が必要である。

なお、琉球列島における比較的大規模な花崗岩類の分布域としては、石垣島、奄美大島、徳之島、沖永良部島などがある。石垣島においては、中生代のチャート、頁岩、砂岩などの堆積岩類を主体とする富崎層に貫入する中新世の花崗岩類がある。奄美大島、徳之島および沖永良部島には、白亜系の四万十帯の堆積岩類に、始新統の花崗岩類が貫入している。これらの花崗岩類の周辺にはホルンフェルスが生じていると考えられるが、その分布範囲はいずれも小規模で石器に利用された例は知られていない。本試料は岩相から判断すると鹿児島県尾久島産の菫青石ホルンフェルスと近似するので県外から移入された可能性も十分考慮されなければならない。

【鉱物】

石核として石英が1試料検出される。石英は古期岩層中に脈状に産することが多く、中—古生層の名護層や四万十帯に属する嘉陽層が分布する地域に産し、美麗ではあるが、特に産出が珍しい鉱物ではなく、多くの場合在地性の鉱物とされる。

⑤特定器種と岩種との関係

肉眼鑑定を行った試料について、器種と石材との対応を表12に示す。以下に、器種と石材との関係が特徴的であると思われる磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・スクレーパーを中心に述べる。

【磨製石斧】

磨製石斧は27試料検出されている。こ

表12. 大堂原貝塚出土石器の器種別石質一覧表

岩種	岩石名	石鏃	石槍	磨製石斧	打製石斧	礫器	磨石	敲石	石球	くぼみ石	石皿	砥石	円盤型石器	スクレイパー	石匙状石器	おもり	錐状石器	石刃	剥片	石核	有孔石器	異形石器	台石	スタンプ形石器	その他	計
火成岩	安山岩						1																			1
	デイサイト					1		1																		2
	軽石質流紋岩															1										1
	ひん岩			1										1												2
	石英斑岩						2	3																		5
	珪長岩			1			2																			3
	花崗閃緑岩						1																			1
	花崗岩						1																			1
堆積岩	頁岩											1		1												2
	砂岩	1		7	6	4	76	29	3	3	7	4	2	16			1	1	1		1		1	2		165
	チャート								1					2												3
	凝灰質砂岩															1						1				2
	サンゴ石灰岩															1										1
	結晶質石灰岩									2	6			1								1	1			11
変成岩	粘板岩														1											1
	黒色千枚岩				3			1					1	3				1							1	10
	珪質千枚岩													1												1
	緑色千枚岩			1	1																				1	3
	緑色片岩			1	1																					2
	緑色岩	1	1	16	2	1	3	5			1	2	1	5					1							39
	ホルンフェルス				1																					1
鉱物	石英													1						1						2
計		2	1	27	14	6	86	39	4	5	14	7	4	31	1	3	1	2	2	1	1	2	2	2	2	259

のうち最も多い石材は緑色岩（16試料）であり、次いで砂岩（7試料）が多い。他の4試料の石材は珪長岩（1試料）・千枚岩類（2試料）・緑色片岩（1試料）である。前項で述べたように、いずれの石材も、いわゆる在地性の岩石であり、同種の石材は他の石器にも多く使用されている。

なお、最も多い石材である緑色岩は、肉眼鑑定では輝緑岩としたものが多い。輝緑岩と緑色岩の関係については既に述べた通りであるが、外見的にもまた物理的にも両者は近似している。輝緑岩は全国各地の遺跡から出土する磨製石斧の代表的な石材の一つとなるもので、岩相的に近似したものが多く、製品として搬入されたものと推測されるものが多い。本遺跡から出土した緑色岩製の磨斧については、輝緑岩製の磨斧が意識されて製作された可能性もある。

【打製石斧】

打製石斧は14試料の出土品がある。このうちの6試料の石材は砂岩、7試料は千枚岩、片岩、緑色岩であり、いずれも在地性岩石で占められている。磨製石斧と同様に在地性岩石の使用が卓越している。残る1試料の石材はホルンフェルスであり、これについては少なくとも名護市周辺ではなく、沖縄本島外の可能性もあると考えられる。

【磨石・敲石】

磨石・敲石合わせて125試料出土している。砂岩・石英斑岩・緑色岩等の多様な石材が用いられるが、砂岩が105試料を占め卓越して多く使用されており、石英斑岩や緑色岩は3～5試料程度である。いずれも在地性の岩石といえる。ただし、磨石の中には、前述したように異地性の高い花崗閃緑岩および花崗岩製のものが、それぞれ1点ずつではあるが認められており、注目すべき点として指摘できる。

【スクレーパー】

全31試料のうち、砂岩が半数強の16点を占め、次いで緑色岩の5試料、千枚岩類の4試料が主要な石材と言える。また、残り6点の石材はひん岩、頁岩、チャート、結晶質石灰岩、石英と多種に及ぶことも特徴といえる。

【その他の石器】

上の述べた器種のほかに石皿・くぼみ石・砥石等20器種の石器が出土している。しかし、その多くは1または2試料で器種ごとの石質の特徴を検討するにはいたらない。20器種全体の傾向としては、砂岩製のものが多く、次いで緑色岩製のものが多い。この傾向は、今回の259試料全体の傾向とも一致する。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

参考・引用文献

神谷厚昭，２００１，屋我地島の地形と地質．沖縄県立博物館紀要，27，15－28．

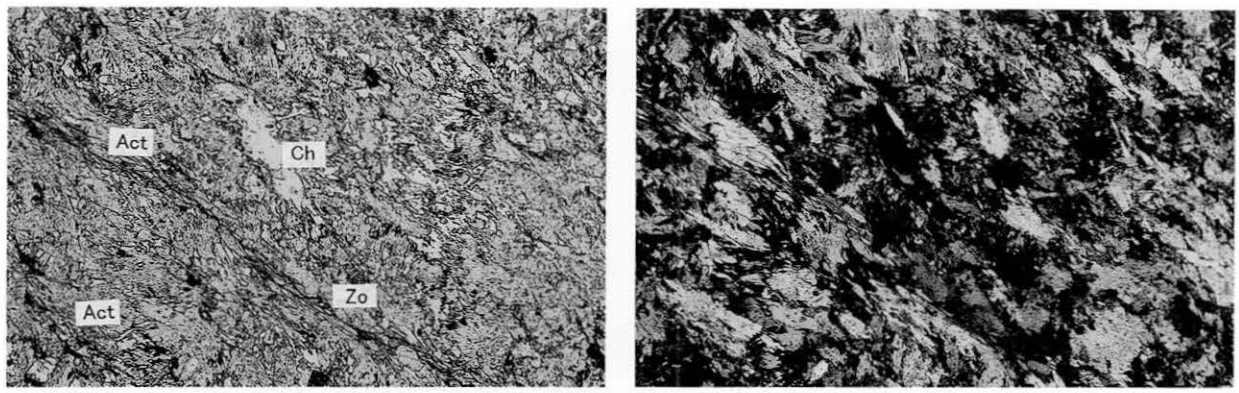
木崎甲子郎編著，１９８５，琉球弧の地質誌．沖縄タイムス社，278 p．

宮城　勉，２００３，名護市の地質．名護市天然記念物調査シリーズ第5集　名護市の自然．名護市教育委員会，9－27．

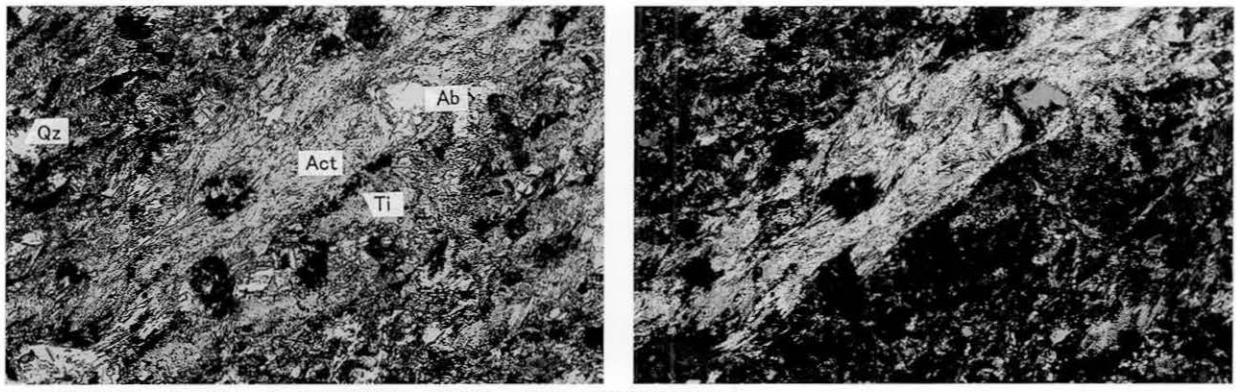
日本の地質「九州地方」編集委員会，１９９２，日本の地質9「九州地方」，第2章中・古生界　2．10　琉球列島．共立出版，98－101．

沖縄地学会編著．１９８２，日曜の地学14　沖縄の島々をめぐって．築地書館，228 p．

佐藤喜男・駒澤正夫１９９３，20万分の1地質図幅「久米島」．地質調査所．



1. 試料番号1　し－92　かく乱　磨製石斧　ゾイサイト－アクチノ閃石緑色片岩

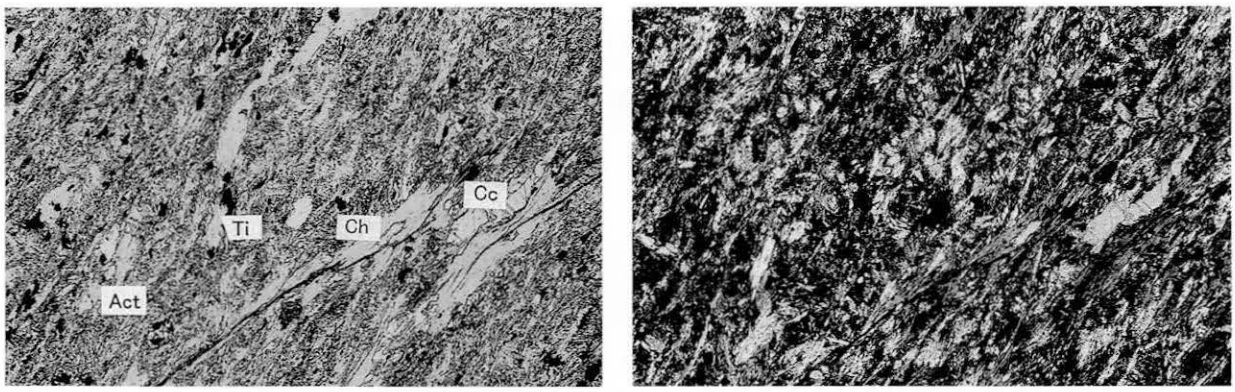


2. 試料番号2　さ－100　Ⅱ　半磨製石斧　緑簾石－アクチノ閃石緑色片岩

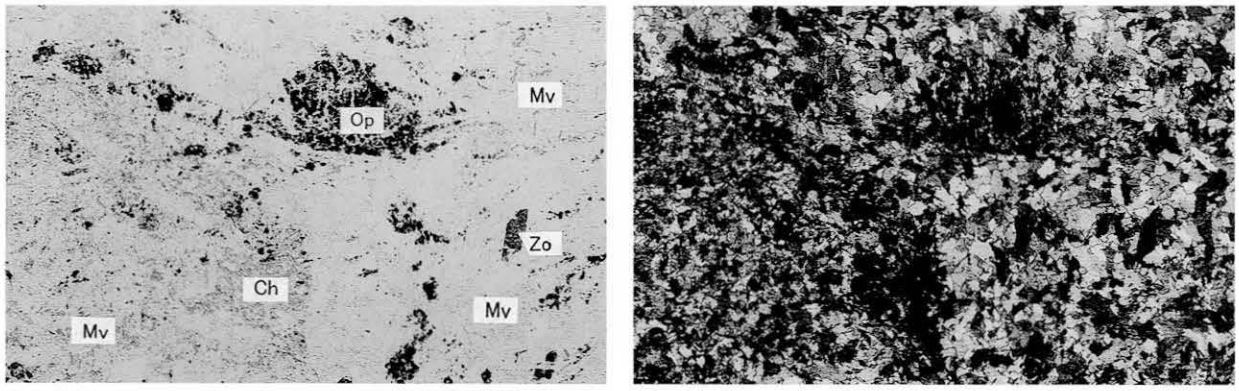
Qz：石英　Ab：曹長石　Mv：白雲母　Ch：緑泥石　Act：アクチノ閃石　Zo：ゾイサイト
Ti：チタン石　Op：不透明鉱物　Cc：炭酸塩鉱物
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

石器薄片



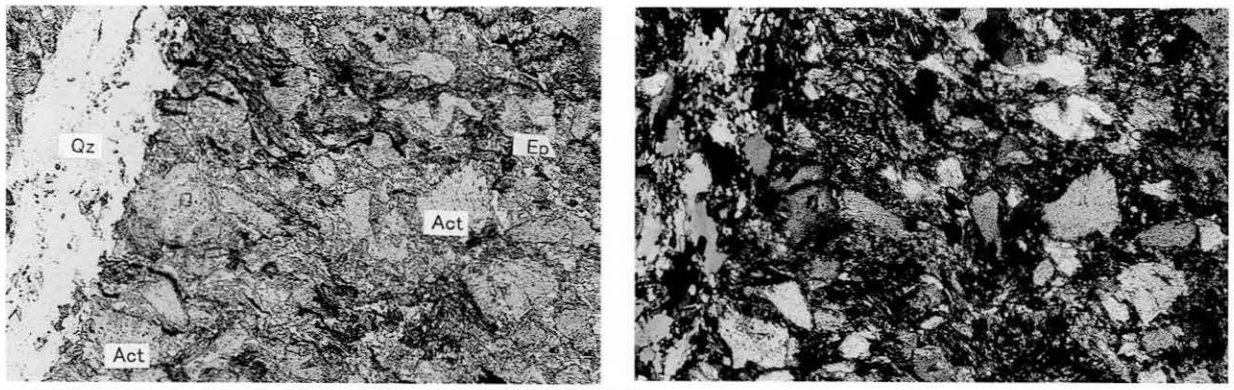
3. 試料番号3　そ－96　Ⅲ　打製石斧　緑泥岩－アクチノ閃石緑色片岩



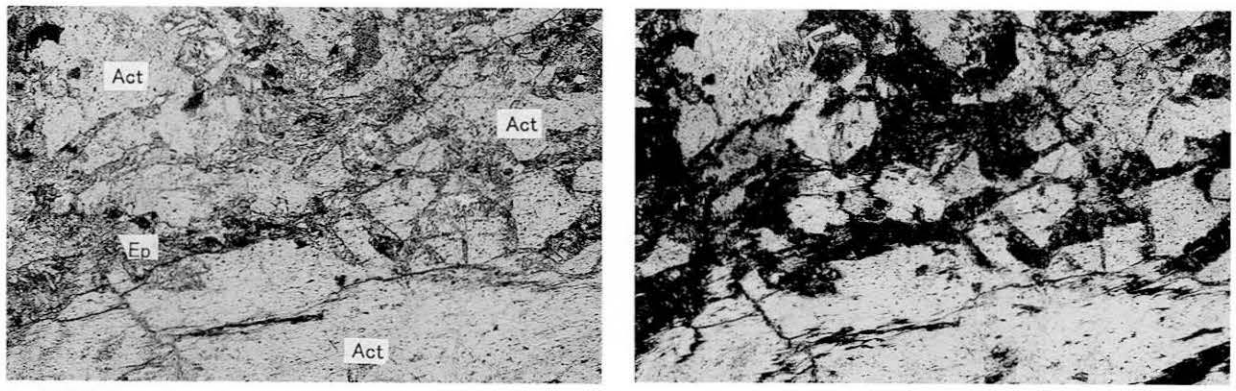
4. 試料番号4　と－94・95　Ⅲ　敲石　白雲母緑色岩

Qz：石英　Ab：曹長石　Mv：白雲母　Ch：緑泥石　Act：アクチノ閃石　Zo：ゾイサイト
Ti：チタン石　Op：不透明鉱物　Cc：炭酸塩鉱物
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm



5. 試料番号5　ち－94　Ⅲ　剥片　緑廉石－アクチノ閃石緑色片岩

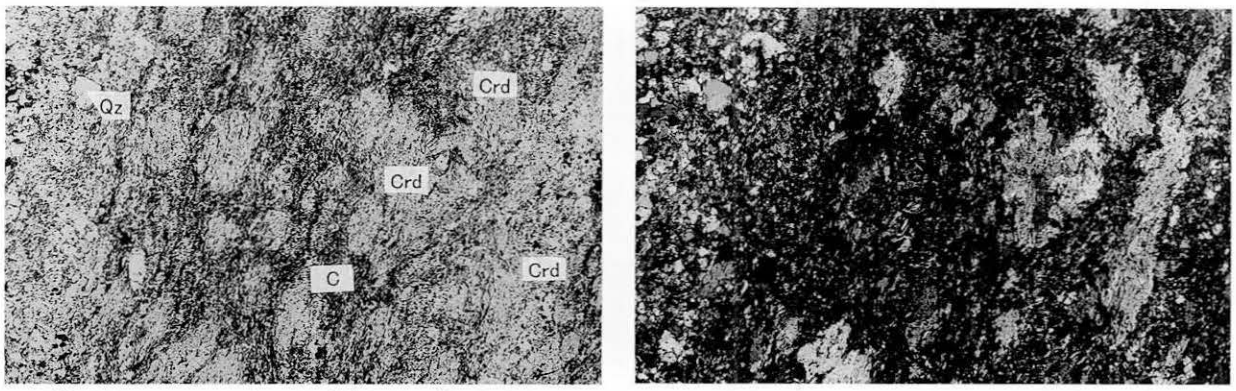


6. 試料番号6　ち－95　Ⅲ　敲石　緑廉石－アクチノ閃石緑色岩

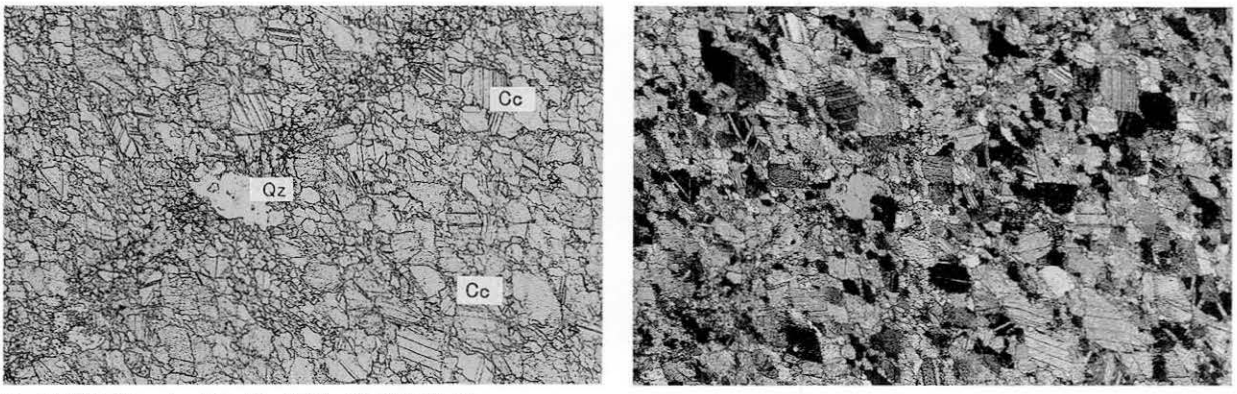
Qz：石英　Act：アクチノ閃石　Ep：緑レン石　Crd：董青石　Cc：炭酸塩鉱物
C：炭質物
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

石器薄片



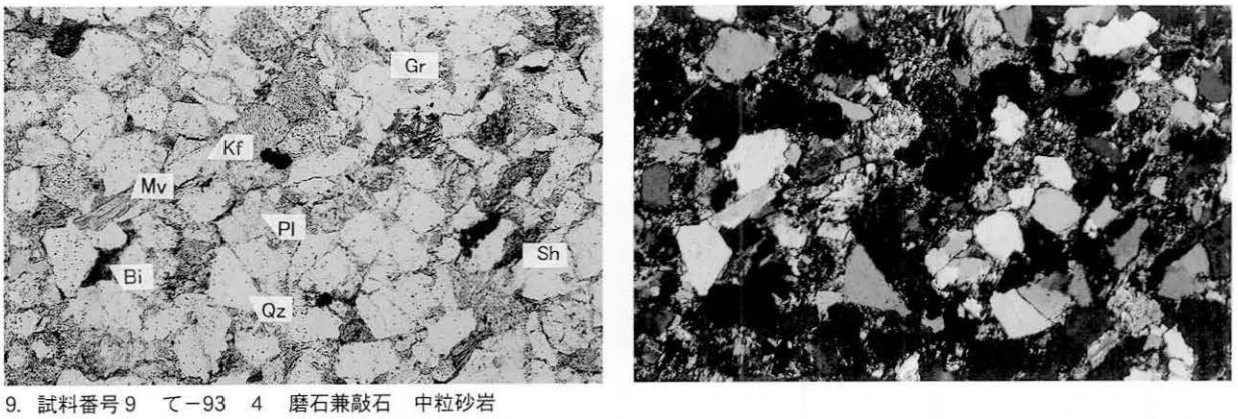
7. 試料番号７　さ－95　かく乱　打製石斧　菫青色ホルンフェルス



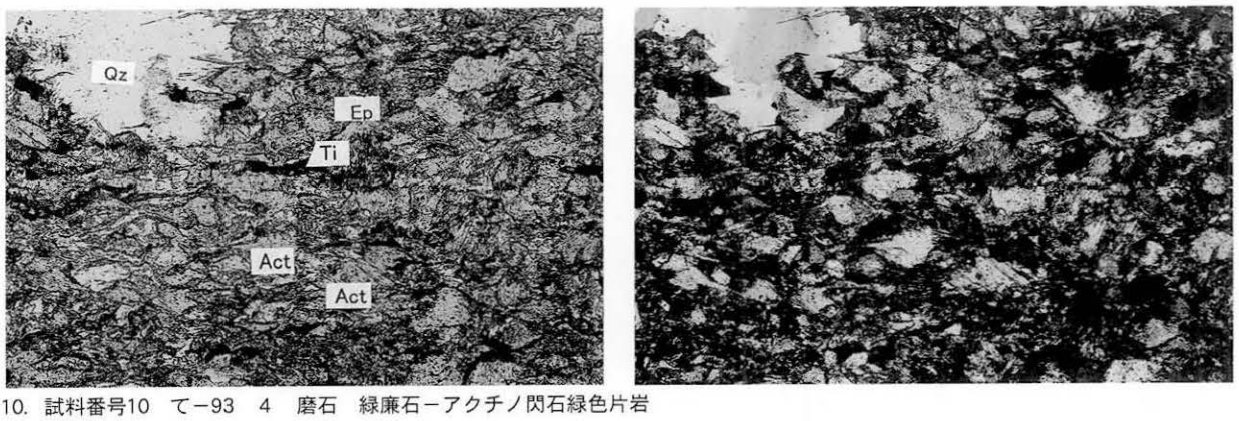
8. 試料番号８　た－95　Ⅲ　石材　結晶質石灰岩

Qz：石英　Act：アクチノ閃石　　Ep：緑レン石　Crd：菫青石　Cc：炭酸塩鉱物
C：炭質物
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm



9. 試料番号９　て－93　4　磨石兼敲石　中粒砂岩



10. 試料番号10　て－93　4　磨石　緑廉石－アクチノ閃石緑色片岩

Qz：石英　Pl：斜長石　Kf：カリ長石　Mv：白雲母　Bi：黒雲母　Act：アクチノ閃石
Ep：緑レン石　Ti：チタン石　Gr：花崗岩　Sh：頁岩
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

石器薄片

五、骨製品

骨製品は四器種、一二点検出された。その内訳はイノシシ牙加工品一点、ヤス状刺突具九点、用途不明品一点、骨錐一点である。出土層はⅧ層、Ⅶ層、Ⅵ層である。以下、Ⅷ層から順に、資料の概要を述べる。

(1) Ⅷ層

イノシシ牙加工品（第1図1）

1は雄イノシシの右下顎犬歯を加工したもので、上下の縁の稜部分を削り取っている。研磨面はみられず、加工の途中と思われる。牙の内側で先端寄りにエナメル質を取り除いた抉りをもつ。法量は、長さ一三・六cm、幅〇・八cm、重さ四・三四gを測る。す－95Ⅷ層出土。

ヤス状刺突具（注1）（第1図2～10）

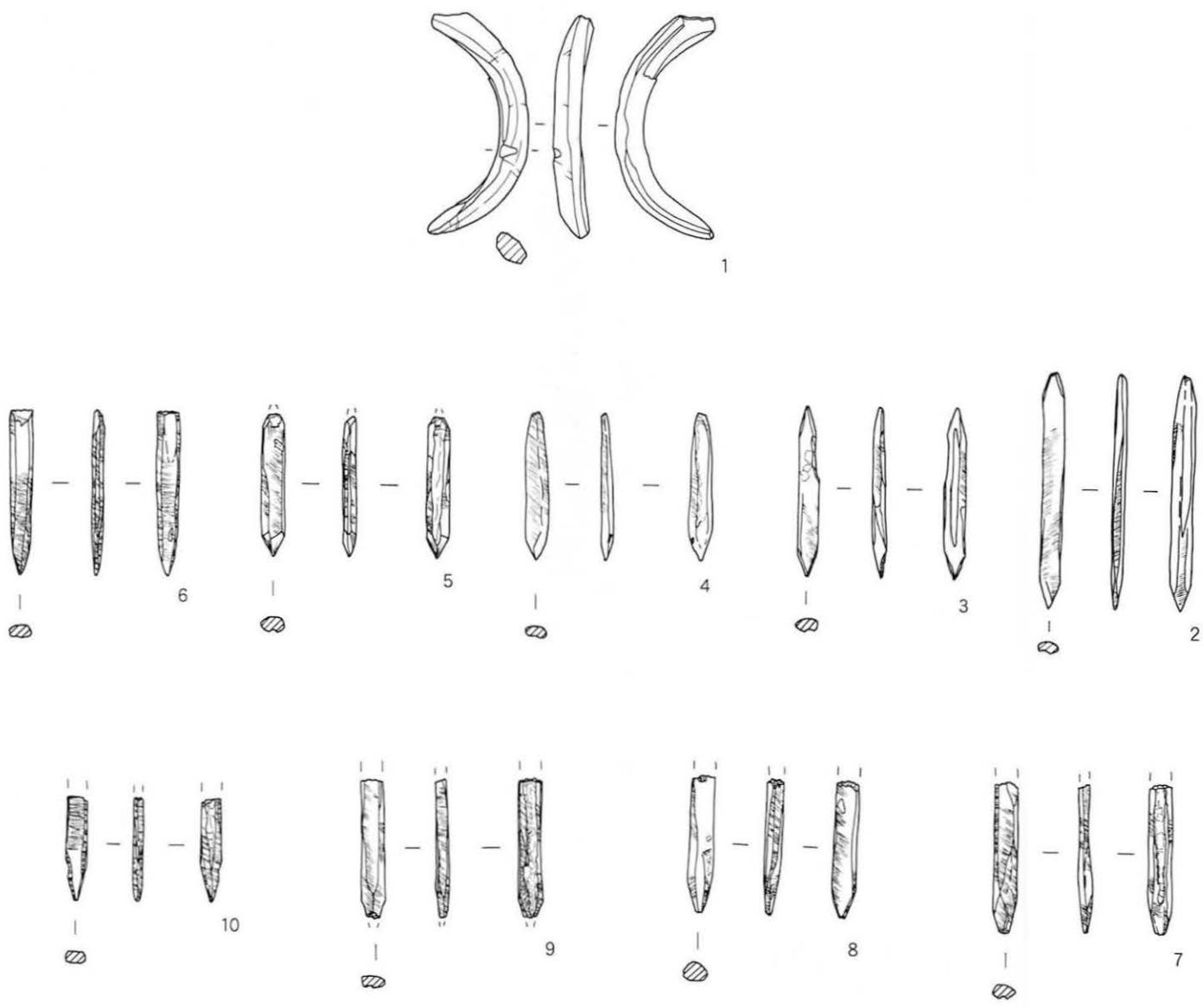
第1図2～10に示したもので、九点検出された。基本形状は両先端が尖り、棒状を呈する。全てイノシシの腓骨製である。完品は第1図2～6で、同図7～10は破損品であるが、同様に両先端が尖るものと思われる。

骨の表面及び側面を丁寧に磨くが、裏面は骨の自然面がそのまま残る製品もある。全ての製品に、えぐりがみられるわけではない。

本製品は九州から北海道まで広く分布し、類似品は多く存在するが、沖縄での出土は極めて少ない（注2）。

2は本製品のなかで最も大型で、下端は鋭く尖るが、上端は僅かに潰れる。法量は長さ七・二×〇・六cm、幅三・六mm、重さ一・四五gを測る。け・こ－101Ⅷ層出土。

3はやや小型で、上下端が鋭く尖り、右側面の一部を僅かに欠く。法量は長さ



S＝½

第1図　Ⅷ層出土の骨製品

五・二×〇・六cm、幅四mm、重さ〇・六九gを測る。け・こ－101Ⅷ層出土。

4は小型で、下端は鋭く尖るが、上端は僅かに欠ける。法量は長さ四・五×〇・七cm、幅三mm、重さ〇・七七gを測る。け－100Ⅷ層出土。

5は小型で、下端は鋭く尖るが、上端は僅かに欠け、上端の表面は削られた途中の感がある。法量は長さ四・三×〇・七cm、幅四mm、重さ一・二一gを測る。け・こ－101Ⅷ層出土。

6は下端が鋭く尖るが、上端は表面から削りを施し、断面形からみると傾斜面をもつ。法量は長さ五×〇・七cm、幅三・六mm重さ一・二二gを測る。け－100Ⅷ層出土。

7は下端部が尖るが、先端が僅かに潰れる。上端は破損。法量は長さ四・五×〇・七cm、幅四mm、重さ一・〇四gを測る。け・こ－101Ⅷ層出土。

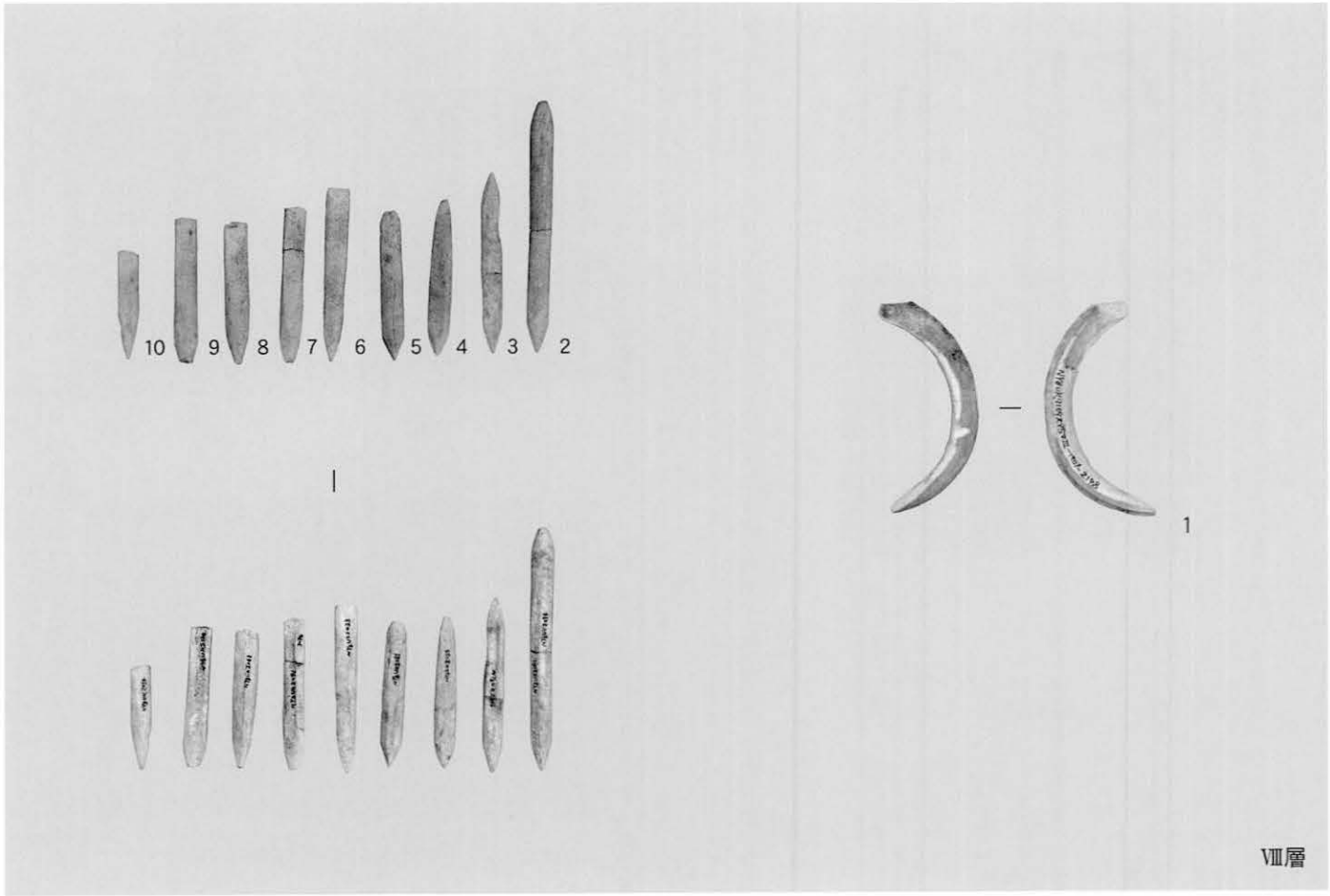
8は下端が尖るが、先端は僅かに潰れる。上端は破損。法量は長さ四・一×〇・七六cm、幅五mm、重さ一・二一gを測る。け・こ－101Ⅷ層出土。

9は下端が僅かに欠け、上端は破損する。法量は長さ四・二×〇・七cm、幅四mm、重さ一・〇七gを測る。け・こ－101Ⅷ層出土。

10は下端が尖るが、先端は僅かに潰れる。左側面の下端近くにえぐりと思われる箇所がみられる。上端は破損。法量は長さ三・一×〇・六cm、幅三mm、重さ〇・五五gを測る。け－100Ⅷ層出土。

表1．ヤス状刺突具一覧

挿図番号	長さ（cm）	幅（mm）	重さ（g）
2	7.2 × 0.6	3.6	1.45
3	5.2 × 0.6	4	0.69
4	4.5 × 0.7	3	0.77
5	4.3 × 0.7	4	1.21
6	5 × 0.7	3.6	1.22
7	4.5 × 0.7	4	1.04
8	4.1 × 0.76	5	1.21
9	4.2 × 0.7	4	1.07
10	3.1 × 0.6	3	0.55



(2) Ⅶ層

用途不明品（第2図11）

11はクジラの肋骨を使用したもので、用途は不明である。平面形はナタ状を呈する。肋骨を半裁し、上端に抉りを入れ二叉状を呈し、下端を尖らせる。表面および下端部に研磨面がみられる（注3）。法量は長さ三五・九cm、幅六cm、重さ二六八・九二gを測る。さ－96Ⅶ層出土。

(3) Ⅵ層

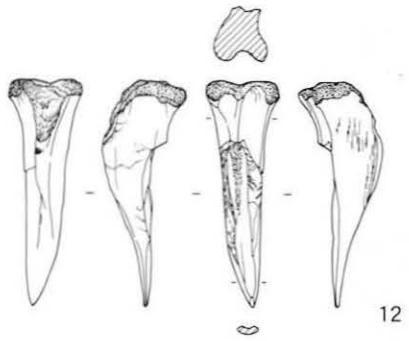
骨錐（第2図12）

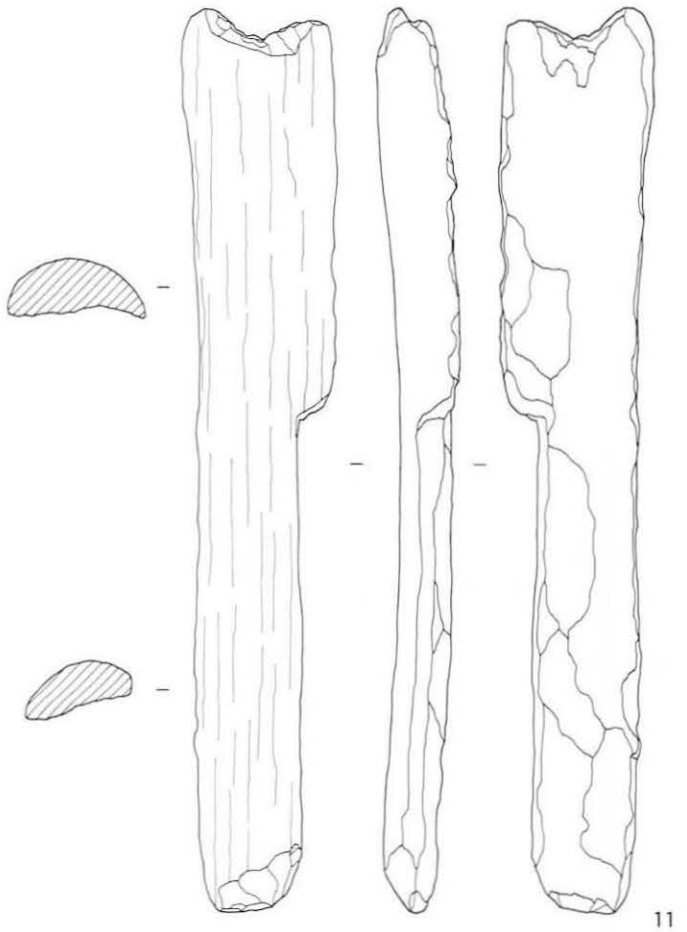
12はイノシシの左脛骨を縦に切断し、その先端部を研磨する。使用痕はみられない。法量は、長さ一七・八cm、幅一・四cm、重さ一三・〇六gを測る。し－96Ⅵ層出土。

(4) 骨製品小結

本貝塚より得られた骨製品は少なく、全て縄文時代に属する。Ⅷ層出土のイノシシ牙加工品は1類（薄手土器）・2類土器（細沈線文土器）段階の資料である。同層出土のヤス状刺突具は大量の1類土器（薄手土器）の破片と、僅かな3類土器（爪形文土器）、そして大量の獣骨（ほとんどがイノシシの骨）を含む層から出土した。その出土地区は「け・こ－100・101」地区で、海抜マイナス一・三cm付近からの出土である。「け・こ－100・101」地区の発掘面積はわずか約四㎡であるが、そこから「セキスイコンテナ」四箱分に及ぶ獣骨が出土し、その中にヤス状刺突具が含まれていただけに興味深い。

Ⅶ層の鯨骨製の製品は、4類土器（曽畑式土器）段階の資料である。出土した骨製品のなかでは大形であるが用途については不明である。





S＝1/3

第2図　Ⅶ層、Ⅵ層出土の骨製品

注1　金子浩昌・忍沢成視　一九八六『骨角器の研究　縄文篇Ⅰ』慶友社

注2　うるま市の古我知原貝塚で、ヤス状刺突具の報告がある。但し、当製品の所属時期は大堂原貝塚とは異なる。
島袋春美　一九八七「第六章第四節　骨製品」『石川市古我知原貝塚－沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)－本文編』沖縄県教育委員会

注3　東京国立博物館客員研究員の金子浩昌氏から「下端部に製品としての痕跡がみられ、敲打器としての可能性がある」との御指摘があった。

六、貝製品

貝製品は遺跡全体から五六七点得られた。内訳は、表5（P272）に示した通りで、実用品が四三一点、装飾品が一三一点、用途不明が五点である。実用品ではヤコウガイの蓋を使用した敲打器が最も多く二四〇点、次に二枚貝を使用した魚網用貝錘が多く一五三点、得られた。後者で使用される貝種はヒメジャコが主体である。

装飾品では貝輪が多く一〇三点である。貝輪に使用される主な貝種はゴホウラが最も多く、次にオオツタノハ、ウミギクガイ科の順である。全貝製品出土層はⅥ層が最も多く一二五点、次にⅣ層一一六点となり、縄文時代並行期のⅧ～Ⅳ層の資料が計三六三点、弥生時代並行期のⅢ層が九五点となる。

製品と貝種の相関は表6（P273）に示した通りである。

一三〇点を図化した。以下に資料の詳細を下層から順に概要を述べる。

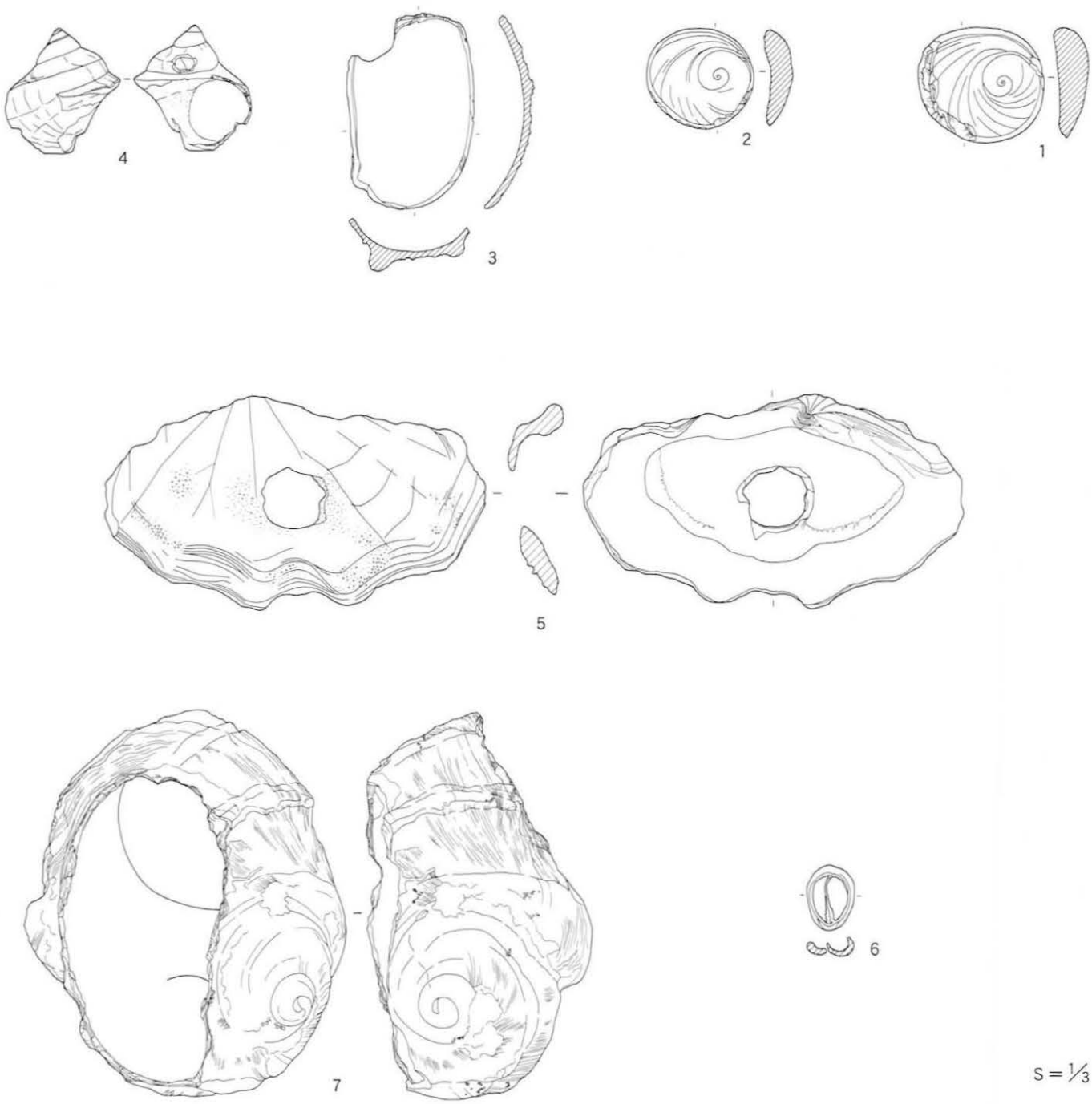
（1）Ⅷ層

Ⅷ層出土の貝製品は二五点である。その内訳は実用品が二四点、用途不明が一点である。装飾品は得られていない。実用品のなかでもヤコウガイの蓋を利用した敲打器（以下、螺蓋製敲打器と呼ぶ）が二二点と多く、他に貝匙一点、貝錘一点である。Ⅷ層出土の貝製品の内、五点を図化し、第1図の1～5に示した。

螺蓋製敲打器（第1図1・2）

1は周縁部に左右対になって剥離がみられる。縦五・七八㎝、横六・四三㎝。

2は周縁部に細かく剥離がみられる。若干磨耗している。周縁部に磨面？もみ



第1図　Ⅷ層、Ⅶ層出土の貝製品

られる。縦四・九三cm、横五・三七cm。ヤコウガイ製貝匙（第1図3）
　3はやや小さめの貝を使用。研磨はなし。

不明製品（第1図4）
　4は小型のヤコウガイに楕円形の粗孔を穿つ資料で、研磨はない。

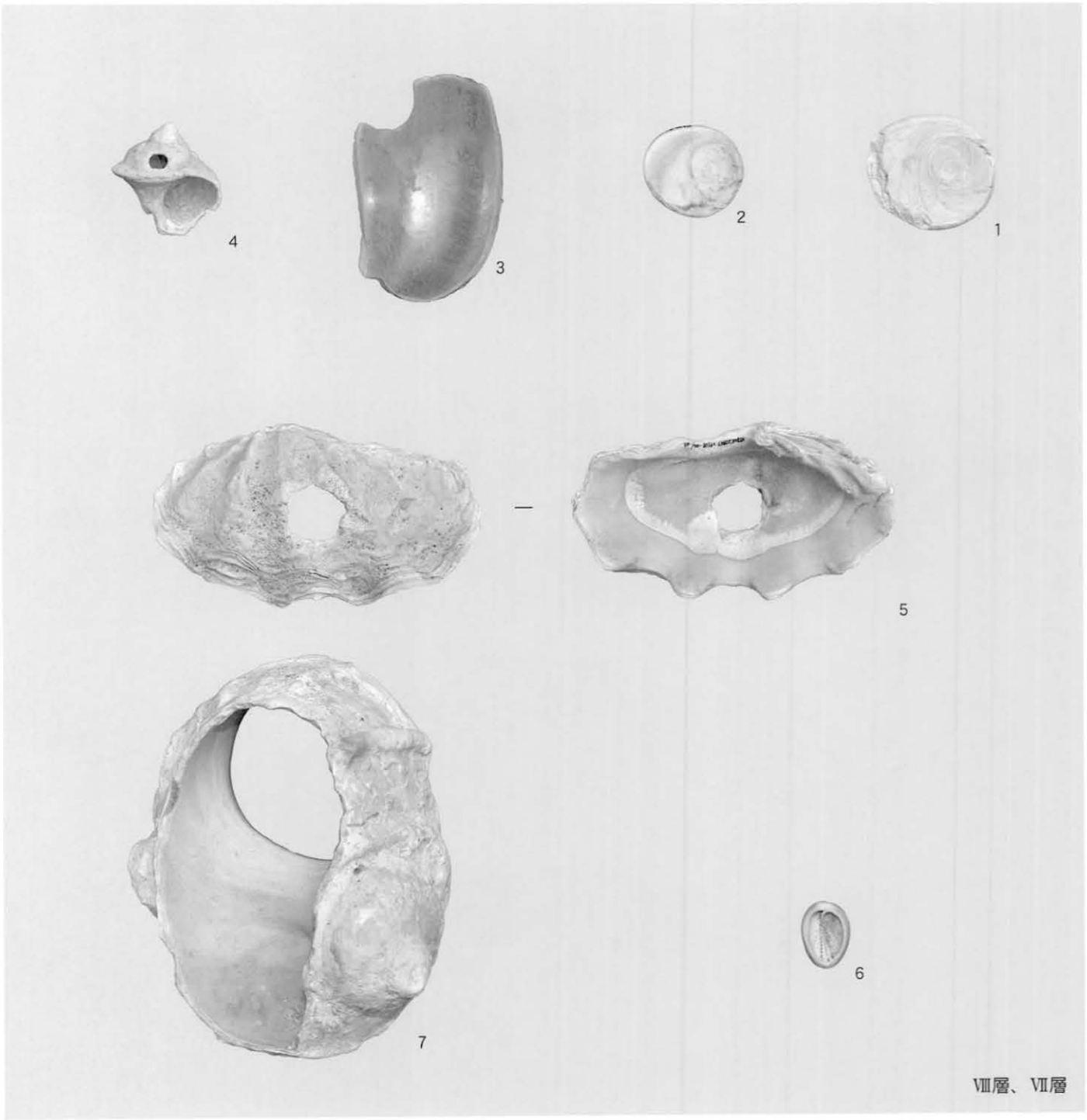
貝錘（第1図5）
　5はシラナミ(右)の貝中央に粗孔を穿つ資料で、研磨は認められない。若干磨耗あり。

(2) Ⅶ層

　Ⅶ層出土の貝製品は五九点出土。内訳は実用品四六点、装飾品が十二点、用途不明一点である。Ⅷ層と同様に螺蓋製敲打器が四五点と主体を占める。本層から、貝輪とイモガイ科の螺塔部を利用した円盤状製品が検出され始める。貝輪に使用される貝種はゴホウラ六点、オオツタノハ三点、シレナシジミ一点であり、ゴホウラ製が多い。本層出土の貝製品の内、十三点を図化し、第1図6・7、第2図8～17に示した。

穿孔貝（第1図6）
　6はハナマルユキダカラの背面中央部を除去し研磨される。

用途不明（第1図7）
　7はヤコウガイの体層部より貝匙を作成するために割り取った残りと思われる。



Ⅷ層、Ⅶ層

貝輪（第2図8～17）

8はゴホウラの腹面を使用する貝輪で、大まかな研磨が施されるが、内縁は荒割のみで研磨調整はないことから貝輪製作段階の破損品と思われる。

9はゴホウラの背面を使用する貝輪で、丁寧な作りであるが孔縁の研磨は荒い事から貝輪製作段階の破損品と思われる。

10はゴホウラの腹面を使用する貝輪である。小型で径が小さい。水磨を受けているが、作りは丁寧なことから完製品が破損したものと思われる。

11はオオツタノハ製の貝輪で若干風化する。素材の放射肋が薄く残る。

12はオオツタノハ製の貝輪で若干磨耗する。研磨面なし。

13はオオツタノハ製の貝輪で若干磨耗する。研磨面なし。

14はシレナシジミ製の貝輪で、小孔が一つみられる。孔は段差があり、外側七×八・五㎜、内側五×四㎜を測る。全面研磨され、作りは丁寧。横方向の擦痕が見られる。

15はゴホウラの体層腹部分である。外面に何面もの研磨面がある。このことから貝輪を作成する段階の資料とも考えられる。

16はゴホウラの背面を使用する貝輪で、螺塔部裏面が大きく残り、顕著な研磨はみられないことから、貝輪製作段階の破損品と思われる。

17はゴホウラの背面を使用し、外縁及び殻軸部分は丁寧に割られ、大まかな研磨が施される。内縁は粗孔を穿つのみで研磨がみられないことから貝輪製作段階の破損品と思われる。

円盤状製品（第2図18）

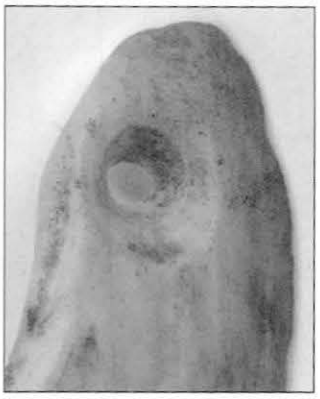
18はアンボンクロザメの螺塔部を横切

S＝1/3

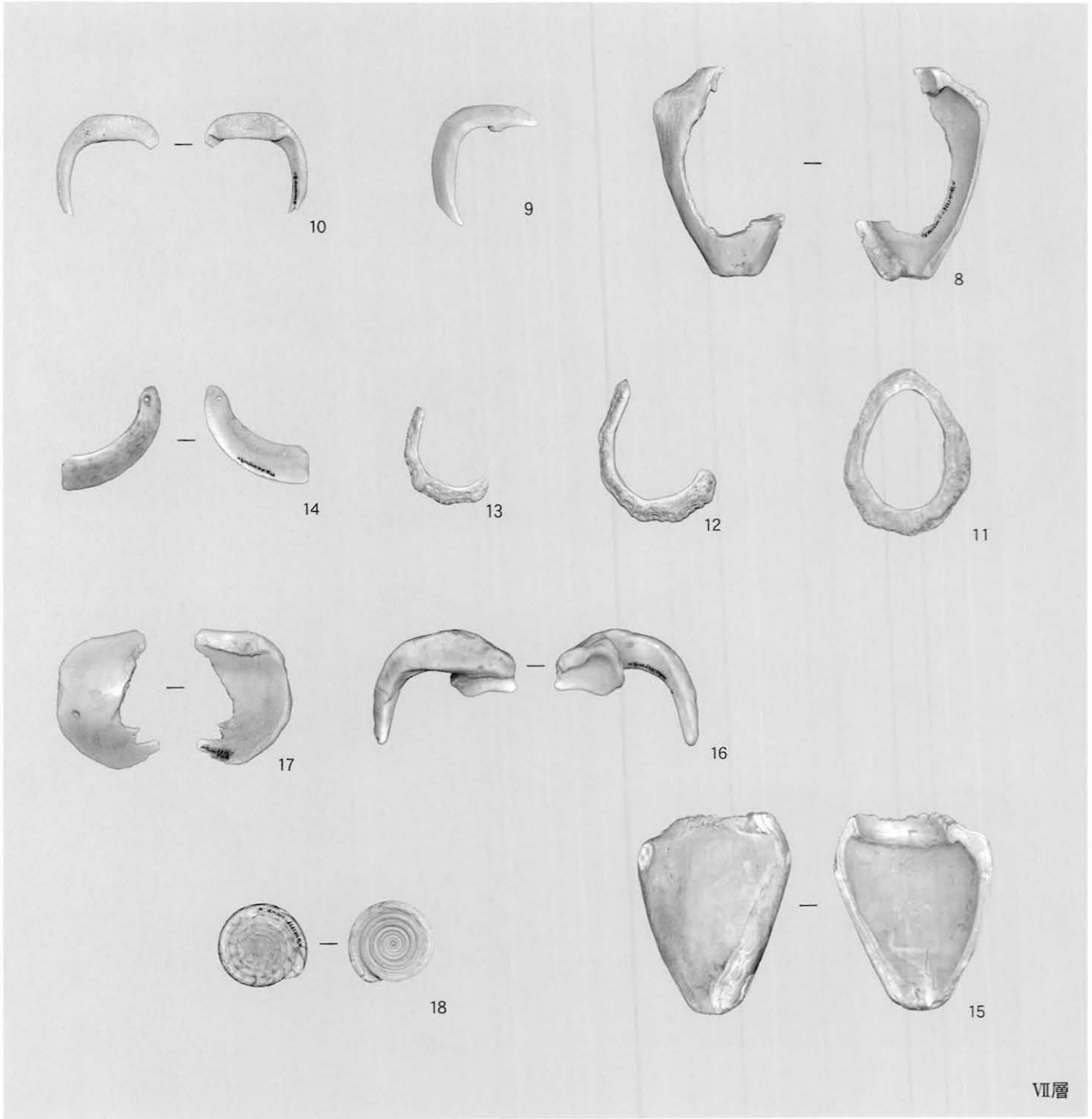
第2図　Ⅶ層出土の貝製品

りにする。殻頂部は自然のままで、内面は研磨される。

貝製品15　研磨面



貝製品14　有孔部分



(3) Ⅵ層

Ⅵ層出土の貝製品は一二五点で貝製品が最も多く出土している。その内訳は実用品が九九点、装飾品が二六点である。Ⅷ層Ⅶ層と同様に実用品のなかでも螺蓋製敲打器が八七点と主体を占め、全層の中でも螺蓋製敲打器が最も多く出土している。利器ではラクダガイ製のものが一点のみ出土した。装飾品では貝輪が多く、使用される貝種はゴホウラ九点、テングガイ二点、ウミギクガイ科二点、オオツタノハ一点、シレナシジミ一点、オオベッコウガサ一点、スイショウガイ科一点の順である。テングガイの貝輪は本層とⅢ層で出土している。

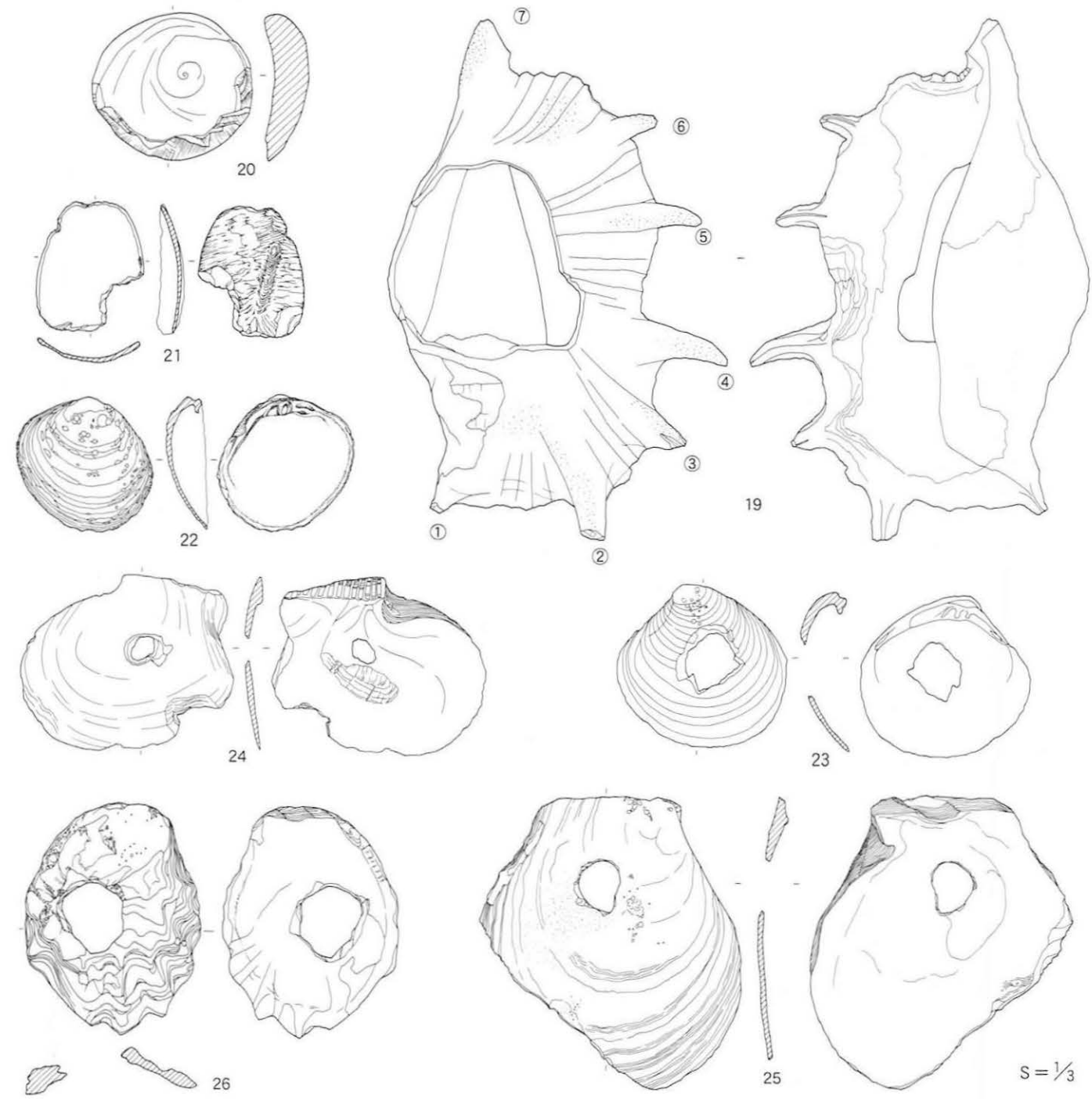
装飾品の出土数はⅣ層に次いで本層が多い。また本層から、利器や札状製品が検出され始める。本層出土の貝製品の内、二六点を図化し、第3図19・20・23～26、第4図30～37、第5図38～49に示した。

(4) Ⅴ・Ⅵ層

Ⅴ・Ⅵ層の貝製品は十六点である。その内訳は実用品十二点、装飾品四点である。実用品では螺蓋製敲打器十点、ヤコウガイ製貝匙一点、ツキガイ製貝錘一点である。装飾品では貝輪がゴホウラ一点、アツソデガイ一点、ウミギクガイ科一点で、貝玉がマガキガイ製のものが一点である。図化した資料は三点で、第図3の21、第4図の27・29に示した。

(5) Ⅴ層

Ⅴ層の貝製品は二二点である。その内訳は実用品二十点、装飾品が二点である。実用品では螺蓋製敲打器十四点、シレナシジミ製貝刃二点、ヤコウガイ製貝匙一点、シレナシジミ製貝錘一点、シュモクアオリ製貝錘二点である。装飾品はゴホ



第3図　Ⅵ層、Ⅴ・Ⅵ層、Ⅴ層出土の貝製品（1）

ウラ製貝輪が一点、ヤコウガイ製札状製品が一点得られた。図化した資料は二点で、第3図22、第4図28に示した。

利器（第3図19）

19はラクダガイ製の利器である。後述するスイジガイの突起とは区別して突起番号を記した。突起に刃部はみられないが、①～③の突起は敲打のため潰れたと思われる。体層部に粗孔あり。

螺蓋製敲打器（第3図20）

20はヤコウガイの蓋の径の下半分に剥離がみられる。縦七・四五cm、横八・一六cm。風化がいちじるしい。

貝匙（第3図21）

21はヤコウガイ製の貝匙で、匙部の一部を欠く。周縁部は研磨され、柄部には抉りが二ヶ所みられる。地層に含まれるマンガンの色素が付着して匙部内面の一部が黒色を呈する。

貝刃（第3図22）

22はシレナシジミ（左）製の貝刃で、腹縁に連続的な剥離がみられる。殻頂に虫食いの痕が著しい。

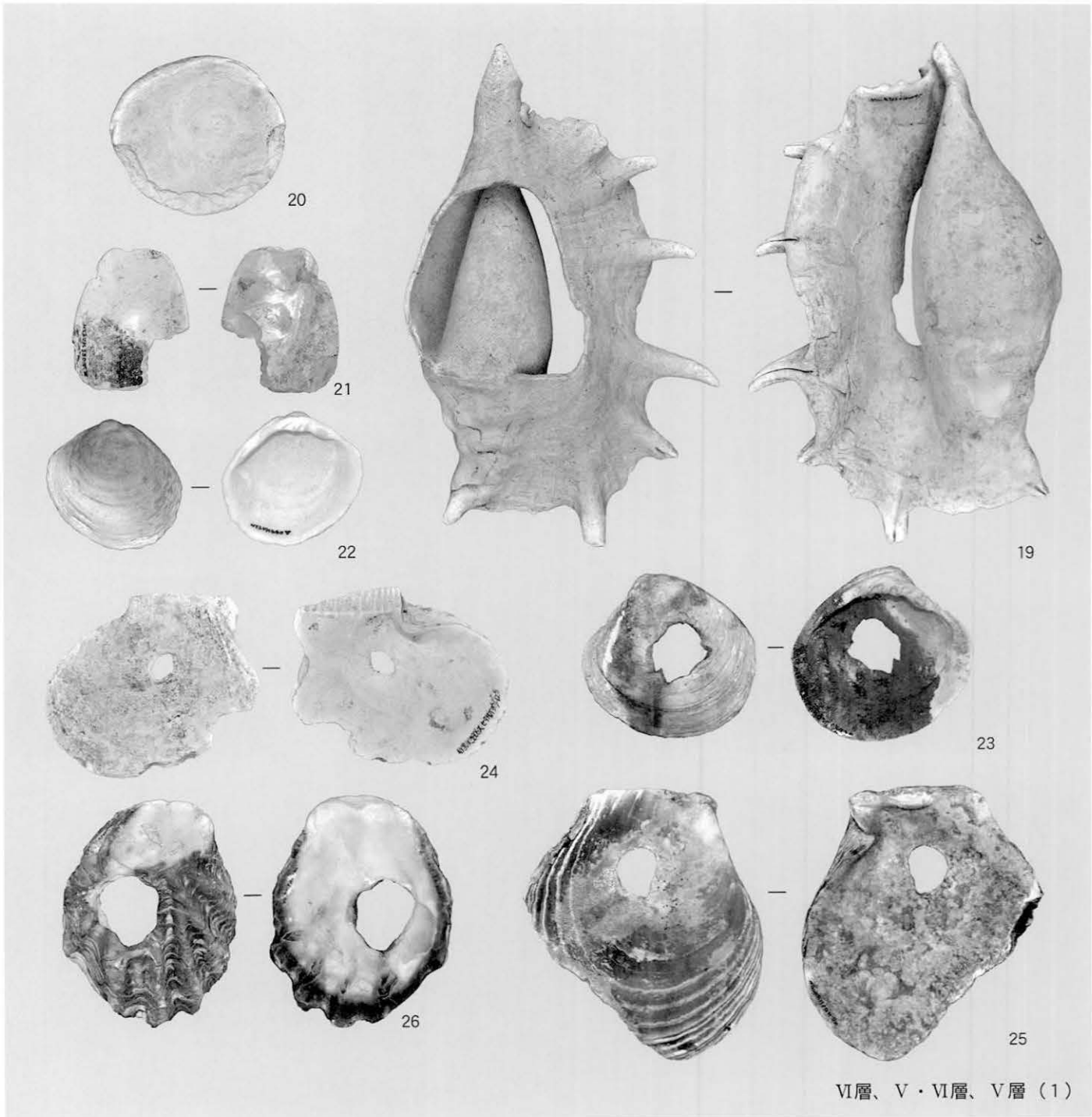
貝錘（第3図23～26）

23はシレナシジミ（左）の貝錘で貝中央に数回にわたり粗孔を穿つ。

24はマクガイ（左）の貝錘で、中央にやや楕円形の孔が穿孔される。

25はクロチョウガイ（右）の貝錘で、楕円形の孔が穿孔される。

26はシャコガキ（右）の貝錘で、中央に粗孔を数回にわたり穿孔する。



Ⅵ層、Ⅴ・Ⅵ層、Ⅴ層（1）

貝輪（第4図27～37、第5図38～43）

27はゴホウラの背面を使用する貝輪で両面に研磨あり。外面は数回研磨した面がみられる。完製品が破損したものと思われる。

28はゴホウラの背面を使用する貝輪で両面とも丁寧な研磨仕上げを行う。完製品が破損したものと思われる。

29はアツソデガイの腹面を使用する貝輪で両面とも丁寧な研磨仕上げを行う。完製品が破損したものと思われる。

30はゴホウラ製の貝輪で、背面を使用する。全体的に磨耗し、若干虫くいがみられるが、孔縁には打欠痕が残っており、貝輪製作段階の破損品と思われる。

31はゴホウラの背面を使用する貝輪で若干水磨を受ける。貝輪製作段階の破損品と思われる。

32はゴホウラの背面を使用する貝輪で貝輪製作段階の破損品と思われる。若干虫くいがみられ、水磨を受けている。

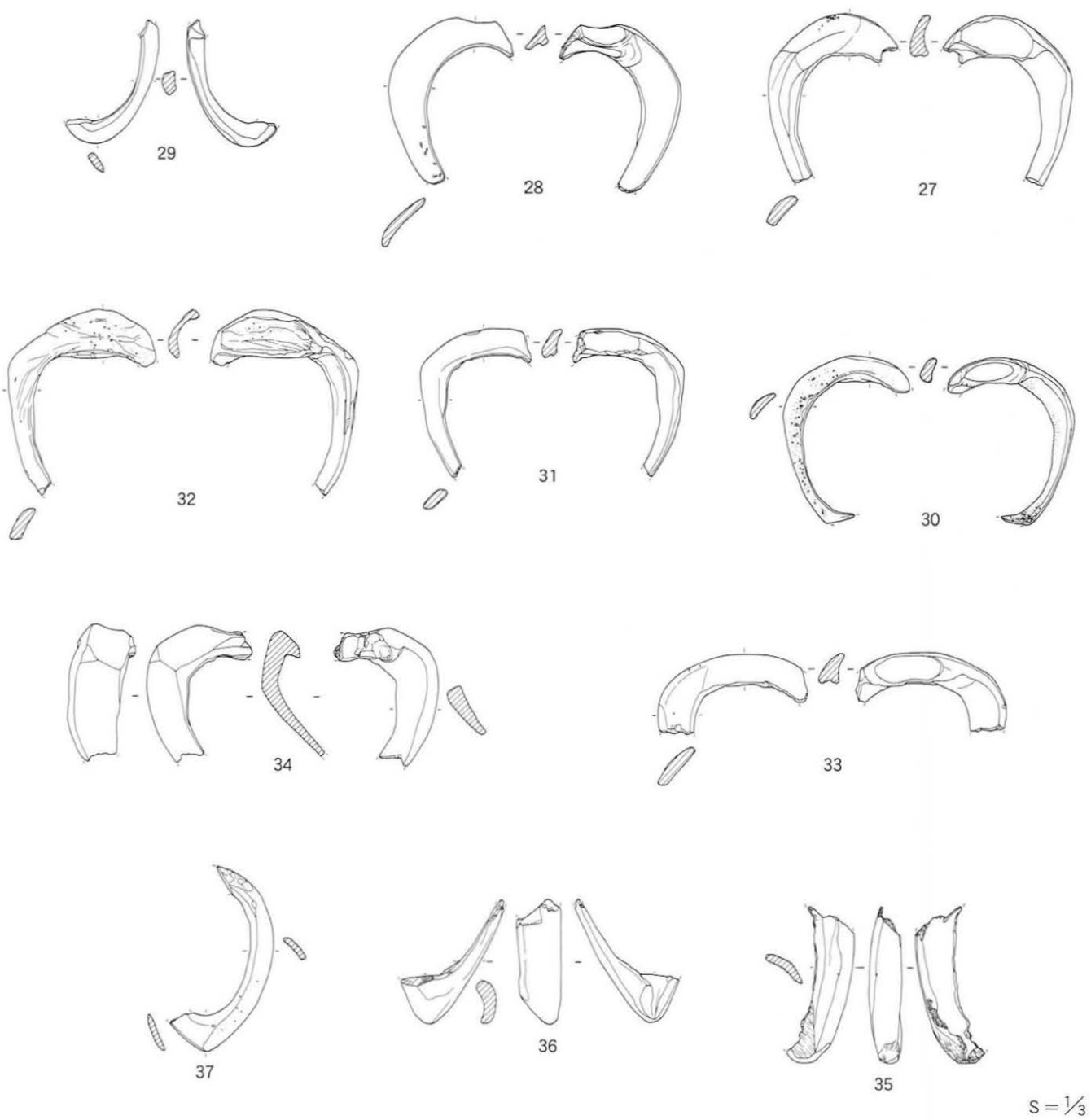
33はゴホウラの背面を使用する貝輪で全体的に研磨されるが、孔縁には打欠痕が残っており、貝輪製作段階の破損品と思われる。

34はゴホウラの背面を使用する貝輪で殻軸の部分は雑な仕上がりで、貝輪製作段階の破損品と思われる。

35はゴホウラの腹面を使用し、内面は荒割りのみ。外面は丁寧な研磨を施す。貝輪製作段階の破損品と思われる。

36はゴホウラの腹面を使用する貝輪で丁寧な作りである。完製品が破損したものと思われる。

37は貝種不明であるが巻貝？を使用したと思われる貝輪である。丁寧な研磨で、薄く仕上げられる。完製品が破損したものと思われる。



S＝1/3

第4図　Ⅵ層、Ⅴ・Ⅵ層、Ⅴ層出土の貝製品（2）

貝製品37　貝輪先端部

貝製品36　貝輪先端部

Ⅵ層、Ⅴ・Ⅵ層、Ⅴ層（2）

38はゴホウラの背面を使用した貝輪で、若干風化し、虫くいがみられる。研磨面なし。貝輪製作段階の破損品と思われる。

39はゴホウラの背面を使用した貝輪で、内縁の周辺は丁寧な研磨が施され数個の面がみられる。貝輪製作段階の破損品と思われる。

40はテングガイを使用した貝輪で風化がいちじるしい。やや上部に外側から穿孔する。研磨なし。貝輪製作段階の破損品と思われる。

41はウミギクガイ科（左）の貝輪で貝中央をあら割りし、腹縁を磨く。若干成長輪や放射肋の痕が残る。虫くいの痕が多い。

42はシレナシジミ（左）の貝輪で外面全面を研磨。内面は若干雑。貝輪製作段階の破損品か？

43はスイショウガイ科の背面を使用した貝輪製作段階の破損品と思われる。粗加工のみで研磨面なし。風化がいちじるしい。ゴホウラ製貝輪と比べて薄いことから貝種はラクダガイの可能性も考えられる。

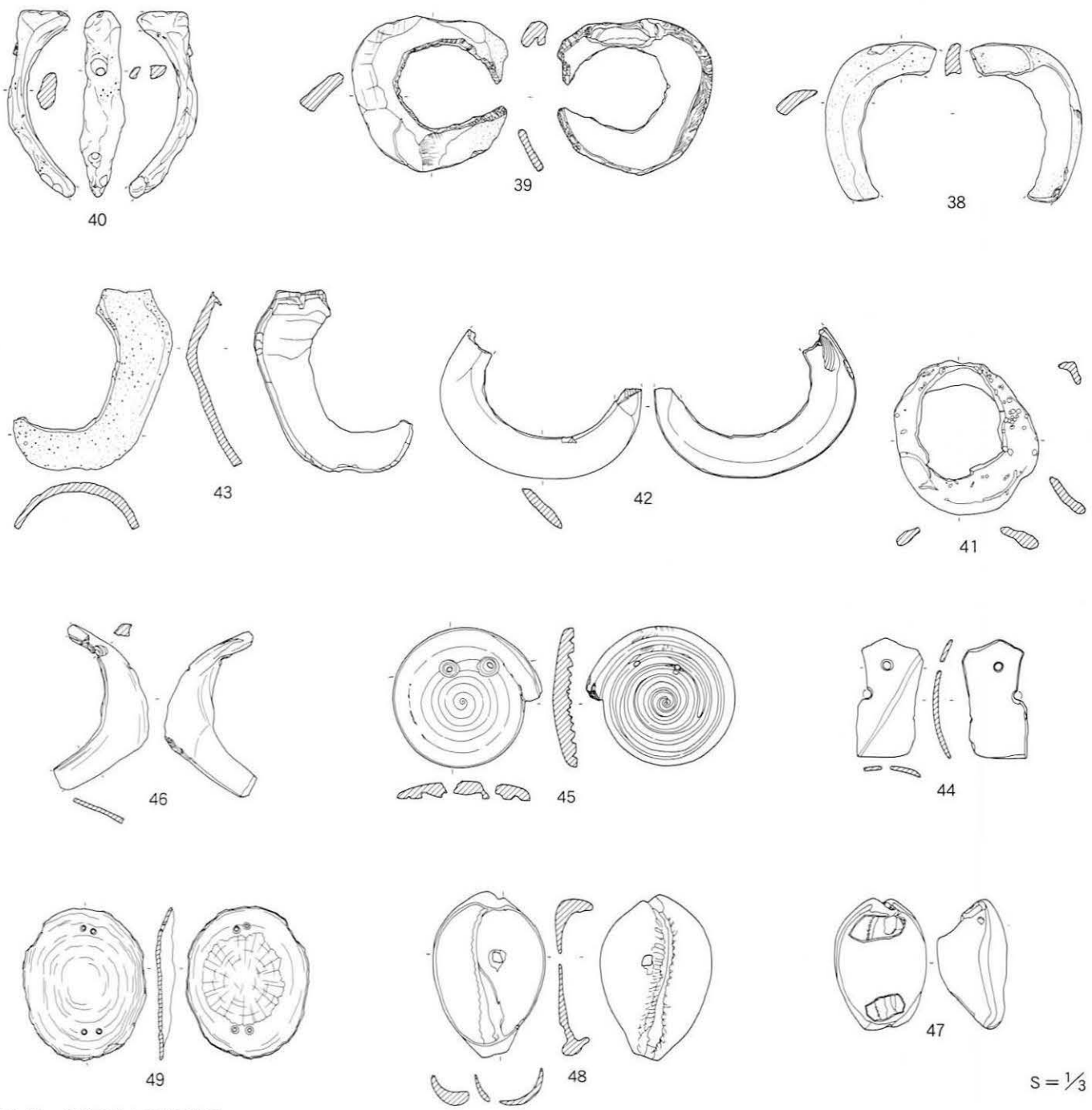
札状製品（第5図44）

44はヤコウガイを札状に加工した製品で両面とも外皮がはがされ、光沢がある。体層部の結節の曲線が残る。小孔を2個穿つ。

円盤状製品（第5図45）

45はクロフモドキの螺塔部を切り取り周縁及び内外面を丁寧に研磨する。周縁近くの2個の孔には紐ずれの痕がみられる。外面の紐ずれは横に向き、内面は上斜め方向に向かっている。

穿孔貝（第5図46～49）



第5図　Ⅵ層出土の貝製品

表2．ヒトエガイ加工品（第5図49）計測一覧

cm

孔	外の孔径	内の孔径
上左	0.32×0.3	0.2×0.2
上右	0.3×0.25	0.2×0.2
下左	0.32×0.35	0.2×0.2
下右	0.3×0.28	0.2×0.15

表1．円盤状製品（第5図45）計測一覧

cm

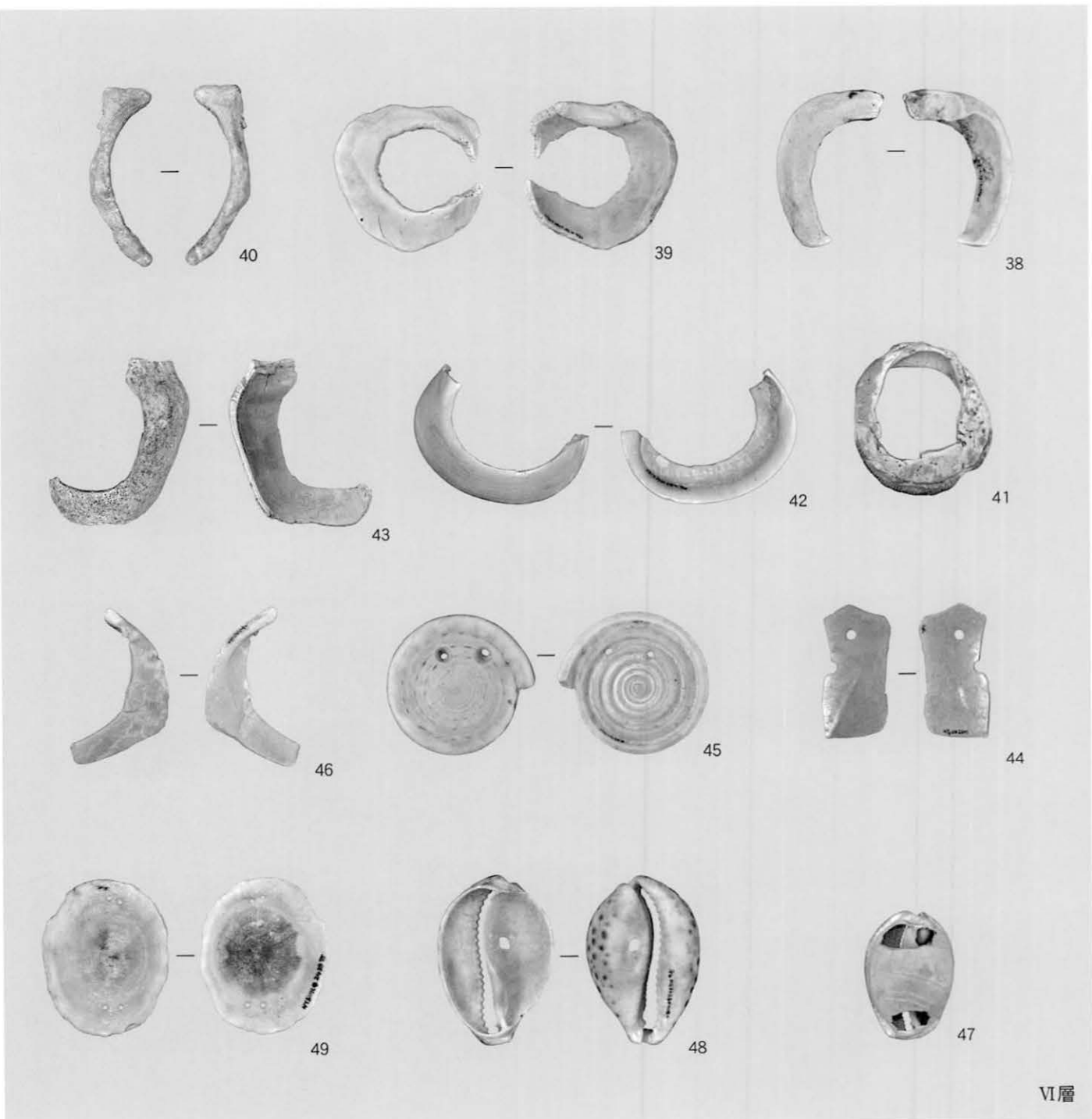
孔	外の孔径	内の孔径
左	0.9×1.0	0.3×0.5
右	1.05×1.0	?

46はシレナシジミ（左）を利用した加工品である。後背縁付近に小孔を穿つ。磨面はみられない。

47はヤクシマダカラ?の背面部に粗孔を穿つ加工品で、上下対になって穿孔される。用途は不明。

48はホシダカラの加工品で背面部を打割により除去し、腹部に五・五×四・五㎜の小孔を穿つ。研磨痕なし。

49はヒトエガイの加工品で、上下に二個セットの小孔を穿つ。孔は両側から丁寧に開けられている。用途は不明。



(6) Ⅳ層

Ⅳ層出土の貝製品は一一六点で、その内訳は実用品八五点、装飾品三十点、用途不明一点である。実用品では貝錘が最も多く五五点出土している。貝錘に使用される貝種はシャコガイ科二六点、シレナシジミ十一点、リュウキュウマスオガイ四点、エガイ三点、ソメワケグリ三点、カワラガイ三点、シュモクアオリ二点、クロチョウガイ二点、シャコガキ一点の順である。利器は本層での出土が多く十二点であり、全てスイジガイ製である。

装飾品は本層での出土が最も多く三十点で、なかでも貝輪が多く二五点である。貝輪に使用される貝種は、ウミギクガイ科七点、オオツタノハ五点、ゴホウラ五点、サラサバテイ三点、アツソデガイ二点、ラクダガイ二点クロフモドキ一点の順である。ウミギクガイ科製貝輪が多く、サラサバテイ製貝輪は本層のみで出土している。本層出土の貝製品の内、三七点を図化し第6図～第10図に示した。

利器（第6図50～56・第7図57～60）

スイジガイの管状突起に研磨を施し、刃部を形成する利器である。スイジガイの突起番号は左図を参考されたし。

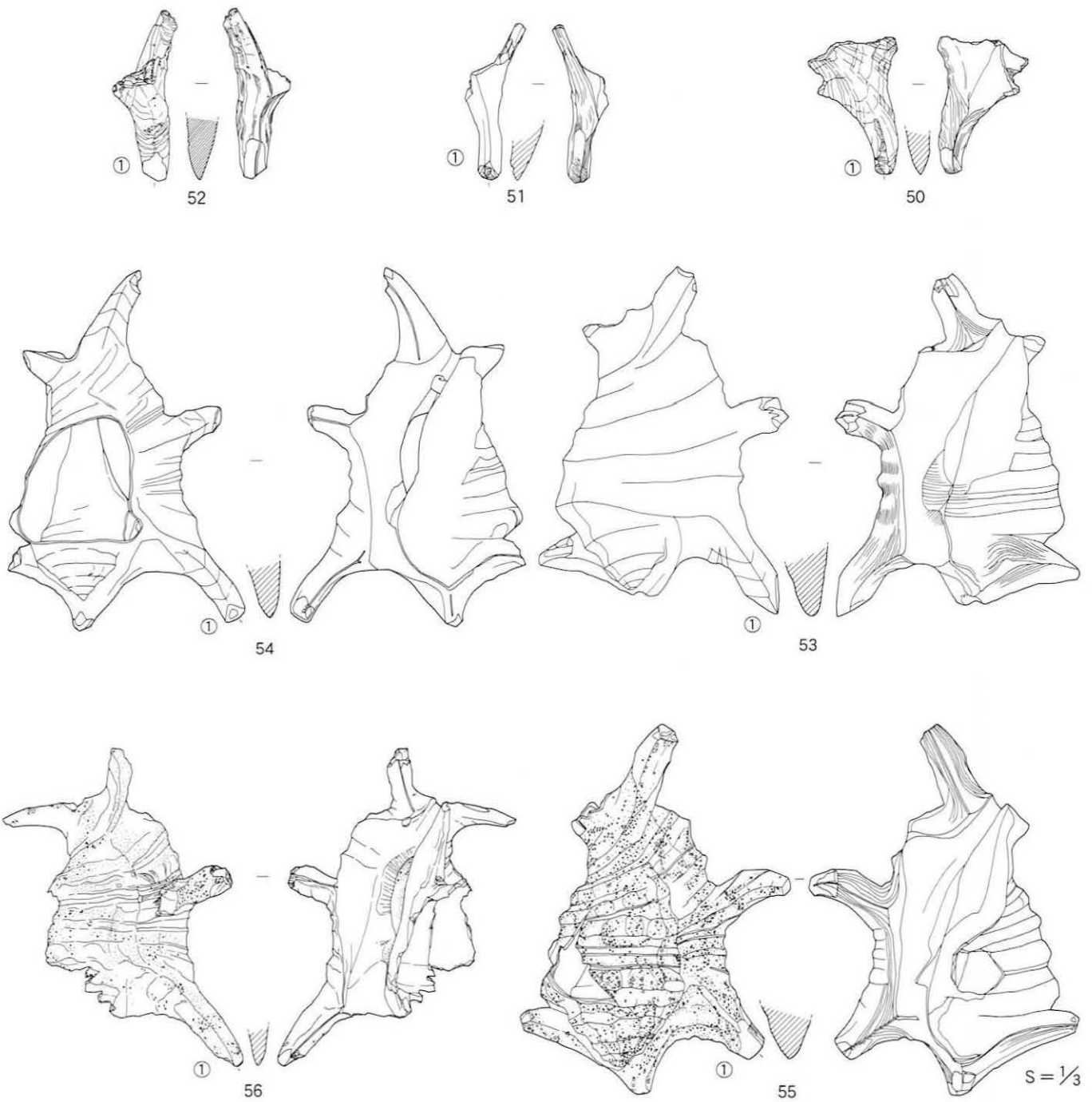
50はスイジガイ製の利器で管状突起①に横刃を附刃する。

51はスイジガイ製の利器で、管状突起①に横刃を附刃する。

52はスイジガイ製の利器で、管状突起①に横刃を附刃する。

53はスイジガイ製の利器で、管状突起①のみ附刃する。縦刃。他は敲打によりつぶれる。

54はスイジガイ製の利器で、管状突起①のみに横刃を附するが研磨が弱い。管状突起②～⑥は敲打によりつぶれる。体

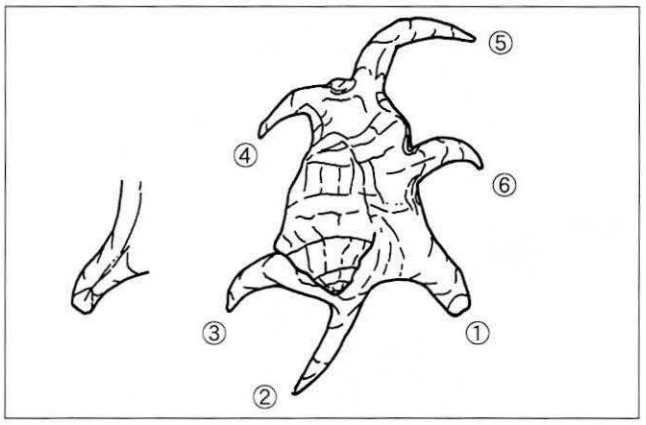


第6図　Ⅳ層出土の貝製品（1）

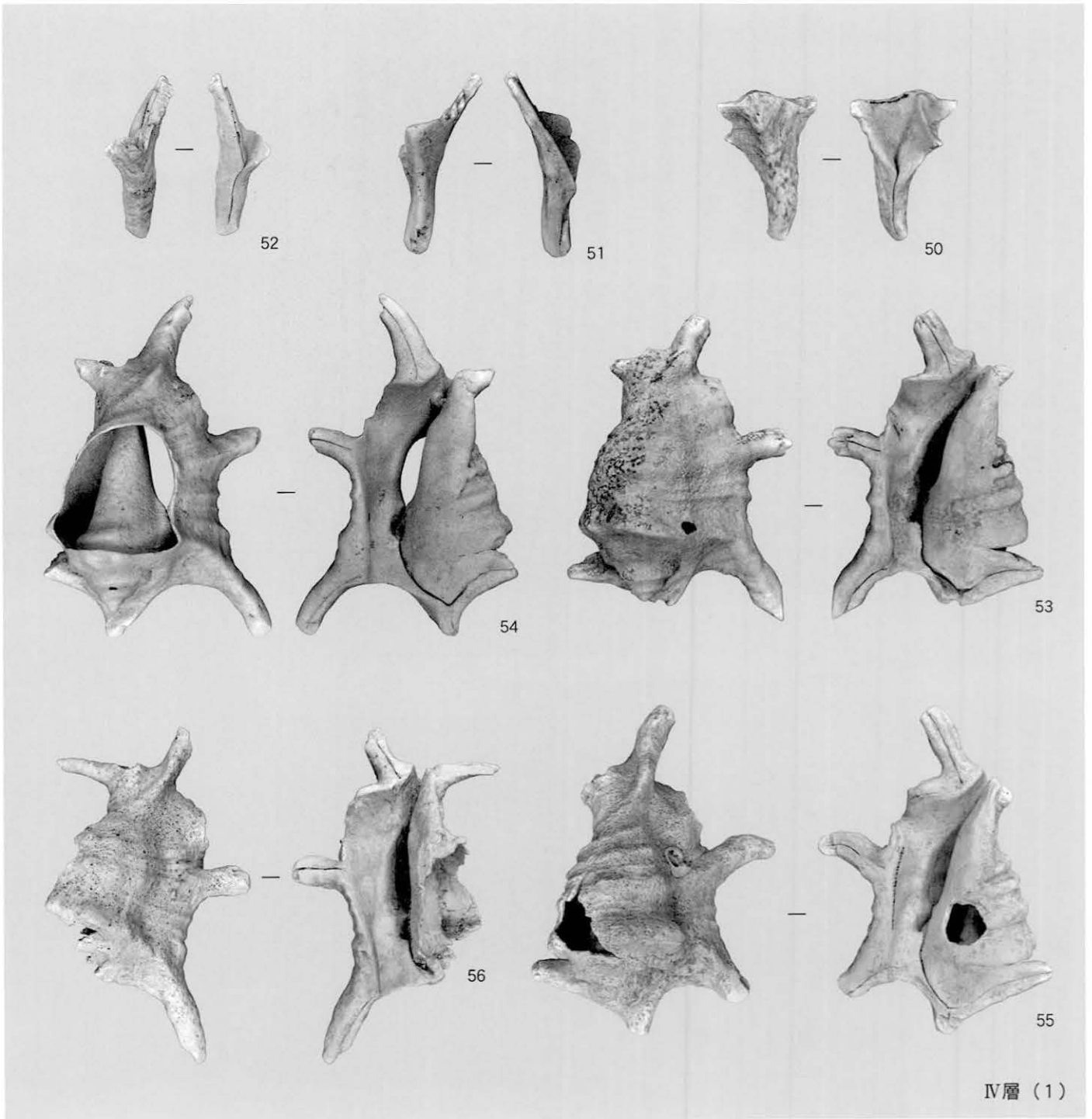
層部背面に粗孔あり。

55はスイジガイ製の利器で、管状突起①のみに附刃し、他は敲打によりつぶれる。刃は横刃。腹部に粗孔あり。貝は風化がいちじるしく、虫くいが著しい。

56はスイジガイ製の利器で、管状突起①のみ附刃。横刃。残りは敲打によりつぶれる。腹部半分が破損。虫くいが著しい。



スイジガイ製利器の突起番号（注１に加筆）



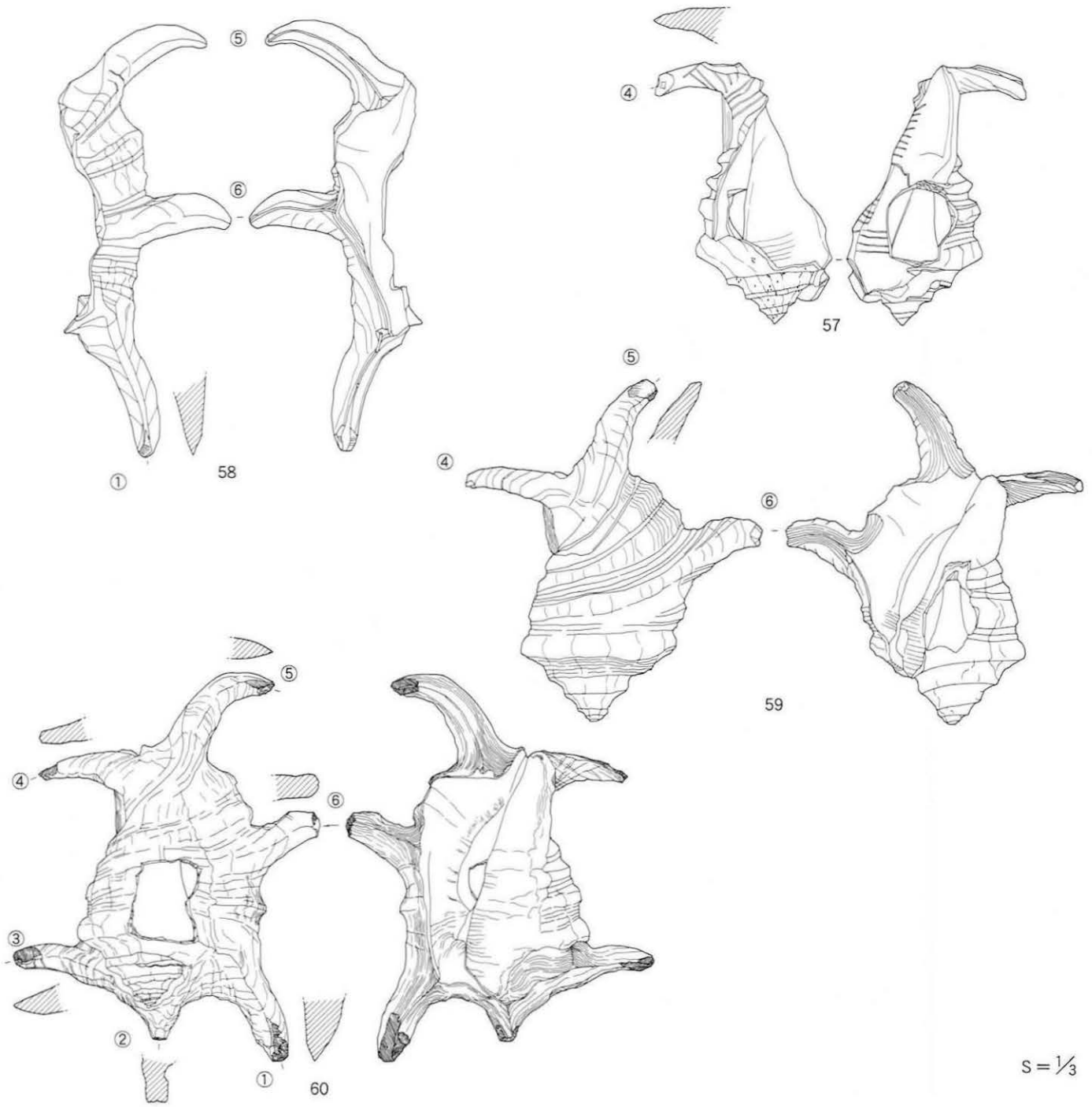
Ⅳ層（１）

57はスイジガイ製の利器で、体層部及び管状突起④のみが残る。刃は横刃。腹部に粗孔あり。

58はスイジガイ製の利器で、①・⑤・⑥の管状突起が残る。刃は①のみに横刃を附刃する。

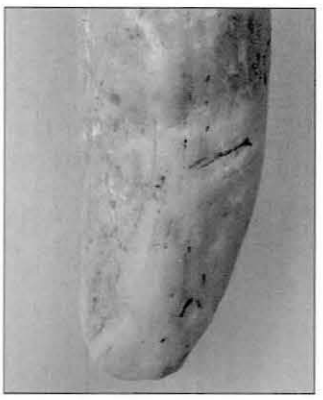
59はスイジガイ製の利器で、管状突起⑤は横刃で弱い擦痕が残る。④・⑥は敲打によりつぶれる。腹部に粗孔あり。

60はスイジガイ製の利器で、体層部背面に粗孔あり。管状突起①～⑥のすべてが使用され、すべて横刃。①・③・⑤は刃部を作り、②・④・⑥は敲打によりつぶれている。③・④間、滑層部、外唇部に磨面あり。



第7図　Ⅳ層出土の貝製品（2）

貝製品59　管状突起⑤

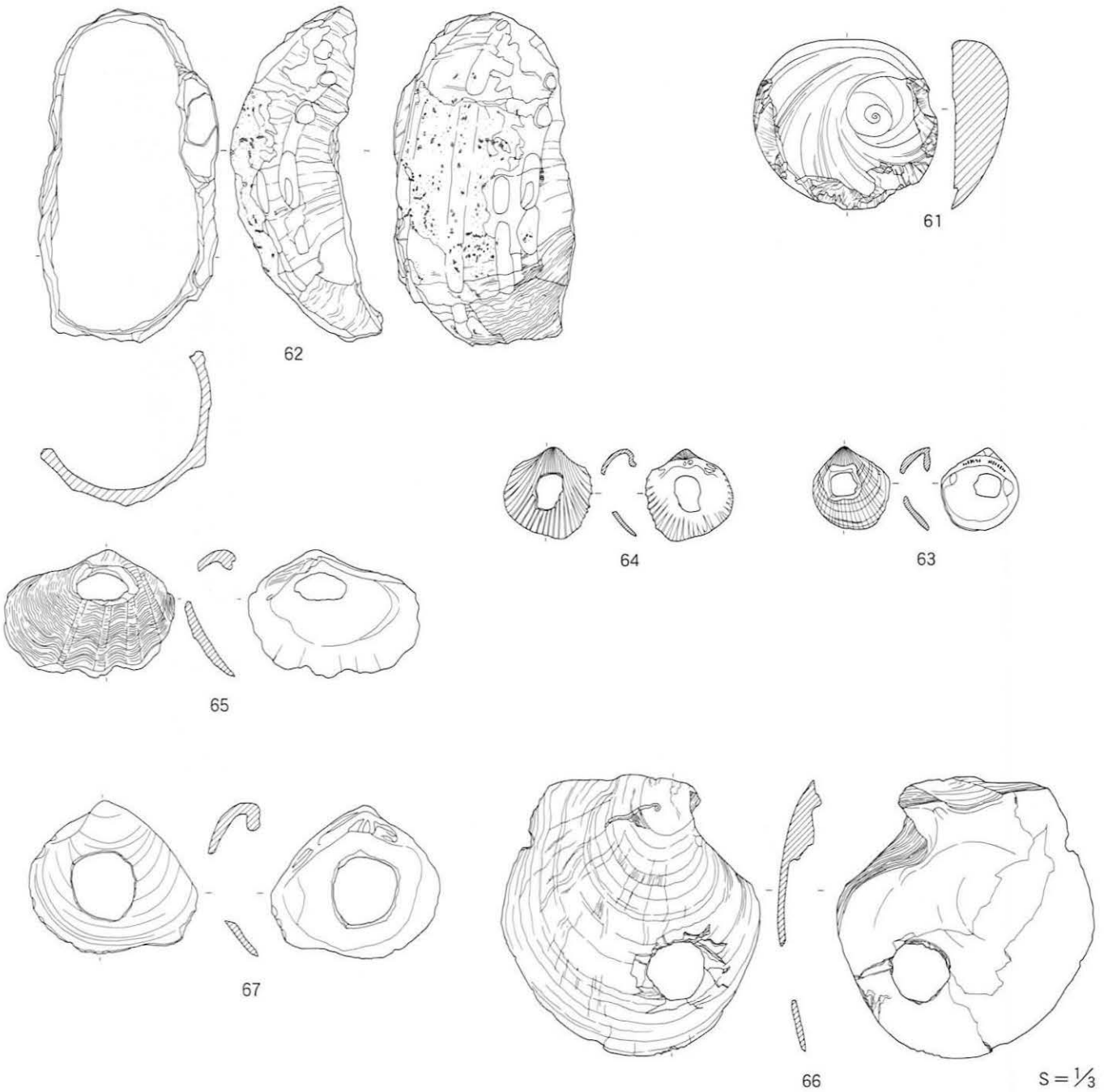


貝製品58　管状突起①

螺蓋製敲打器（第8図61）
61は周縁部の2／3に剥離あり。縦八・三六㎝、横九・二五㎝。

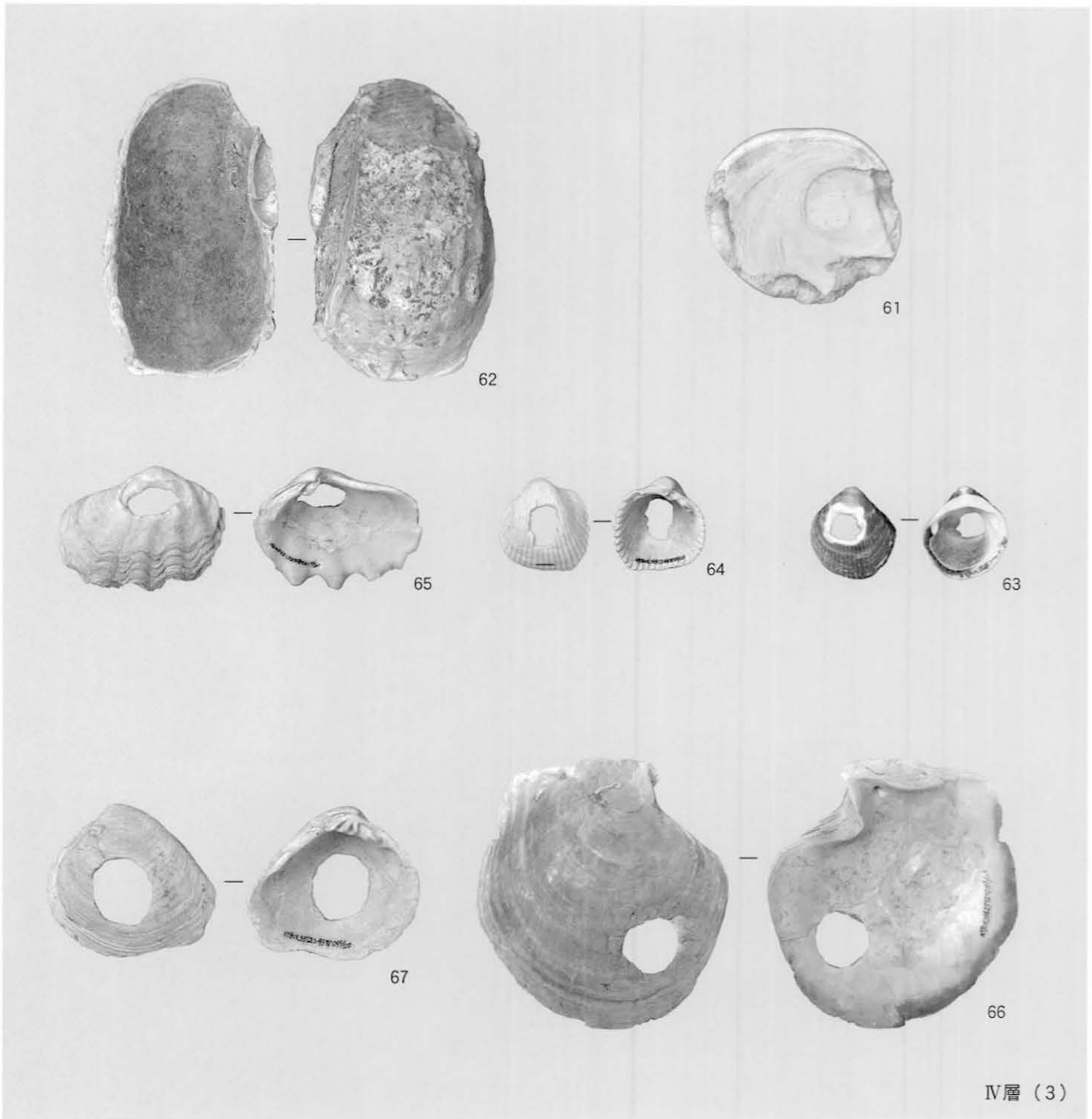
ヤコウガイ製貝匙（第8図62）
62はほとんどがあら割りのままだが、上部が若干すられる。縫合の割れ口が一部残る。結節の一部がすられている。

貝錘（第8図63～67）
63はソメワケグリ（右）の貝錘で、中央に粗孔あり。
64はカワラガイ（左？）の貝錘で、貝中央に粗孔を穿つ。
65はヒメジャコ（左）の貝錘で、殻頂付近に粗孔を穿つ。
66はクロチョウガイ（右）の貝錘で、周縁部近くに粗孔を穿つ。
67はシレナシジミ（左）の貝中央に粗孔を穿つ。



第8図　Ⅳ層出土の貝製品（3）

貝製品62　結節研磨面



貝輪（第9図68～78・第10図79・80）

68はゴホウラの腹面を使用する貝輪で、全形が残る資料である。全体的に丁寧な研磨が施されているが、内縁は調整が不完全であることから製作途中のものと思われる。

69はアツソデガイの外唇部を使用した貝輪の一部と思われる。細かい磨面が幾つもみられる。完成品が破損したものと思われる。

70はゴホウラの貝輪製作段階の破損品と思われる。結節部まで含むことから背面を使用したと思われる。研磨面は見られない。虫くいが著しい。

71はゴホウラの背面を使用する貝輪で、両面とも丁寧な仕上げ。完製品が破損したものと思われる。

72はオオツタノハ製の貝輪で、丁寧な研磨でみがかれ、形も整えられている。外面に薄く貝の模様が残る。

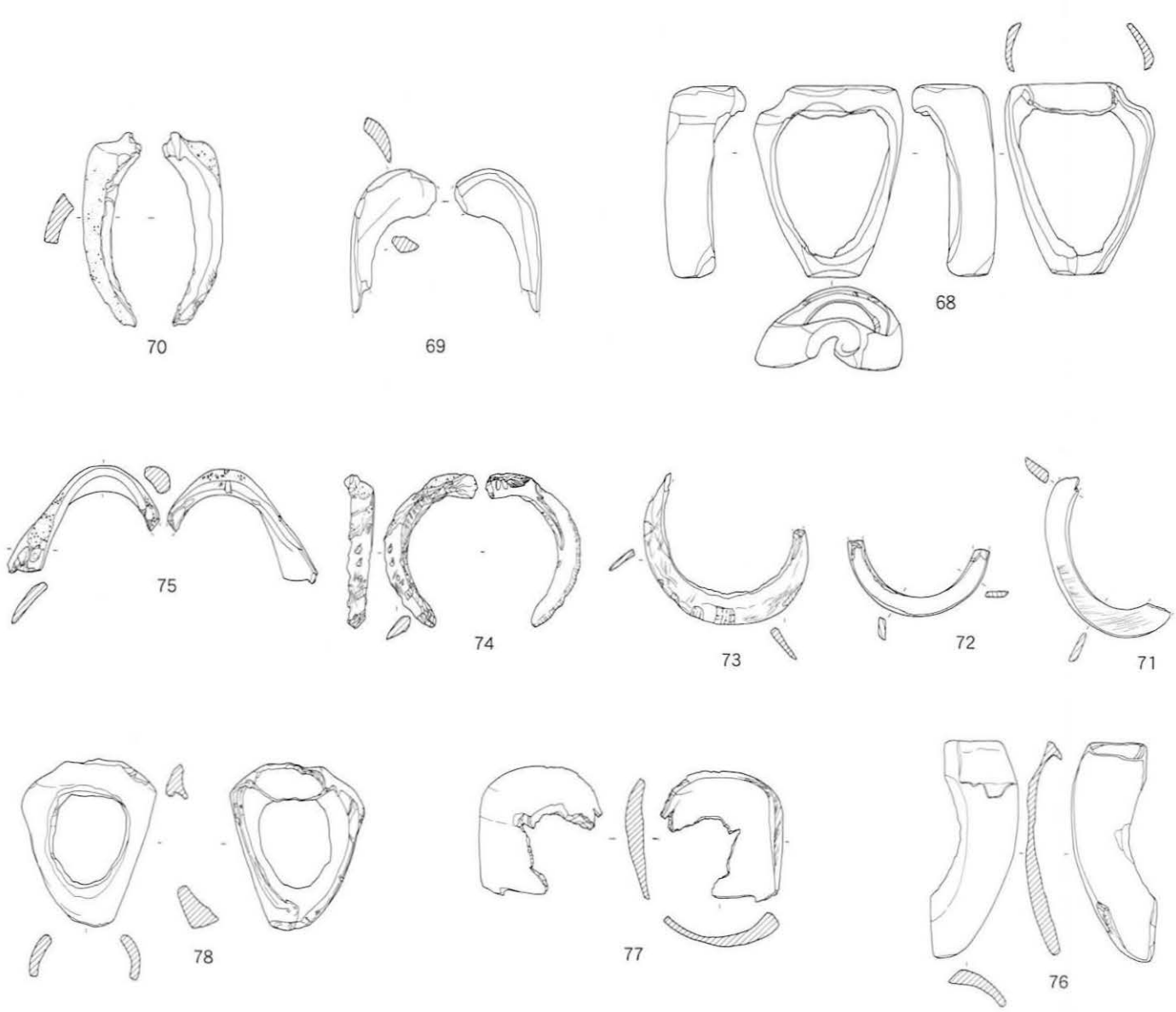
73はウミギクガイ科の貝輪で、外面全体的に磨かれる。割れ面はそのまま。部分的に成長輪や放射肋が残り、赤褐色の色も残る。

74はウミギクガイ科（左）の貝輪で、荒割りの部分と研磨面がみられる。内面の殻頂部も一部磨かれ、平坦となる。

75はウミギクガイ科（右）の貝輪で、殻頂部は丁寧に磨かれるが、横部分は凹凸がひどいせいか磨きがあまり丁寧でない。対ではないが、左右に穿孔される。孔は外側から穿孔される。

76はラクダガイ?の腹面を使用する貝輪である。内縁及び外縁を中心に磨面がみられるが、磨耗のため、顕著な磨きはみられない。貝輪製作段階の破損品と思われる。

77はゴホウラの背面を使用する貝輪で、周縁部は数回にわたり、丁寧な研磨を施



S＝1/3

第9図　Ⅳ層出土の貝製品（4）

す。中央は粗孔を穿つのみで研磨はみられない。貝輪製作段階の破損品と思われる。

78はアツソデガイの腹面を使用する貝輪である。周縁部を磨き、水管溝の先端もつぶし丸みを作る。

79はオオツタノハ製の貝輪製作途中のものと思われる。貝中央に粗孔を穿つ。

80はラクダガイの背面を使用した貝輪製作段階の破損品と思われるもので、全体的に荒く割られるが、内縁の周りに磨面がみられる。外面は虫食いの痕が目立つ。

札状製品（第10図81・82）

81はウミギクガイ科の貝の札状製品で、腹縁部を使用。外面は放射肋や成長輪などある程度研磨によって薄くなる。両端に孔を穿つ。右孔の外面に紐ずれ痕らしきものがみられる。

82は素材とする貝種は不明。中央がふくらむ方形の札状のものが、中央部で破損したと思われる。六個の小孔を穿孔し、磨きは丁寧。孔は規則的でない。各孔の径（cm）は別表の通り。

表3．札状製品（第10図82）計測値

cm

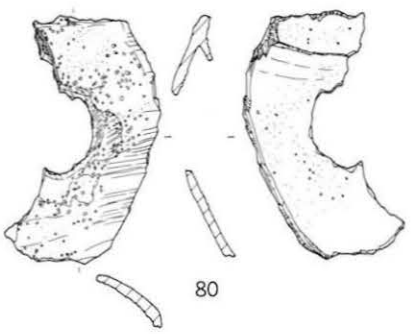
孔	外の孔径	内の孔径
①	0.6	0.5
②	0.8×0.75	0.6×0.6
③	0.5×0.5	0.45×0.4
④	0.6×0.6	0.8×0.75
⑤	0.7	0.8
⑥	0.6×0.65	0.8×0.75

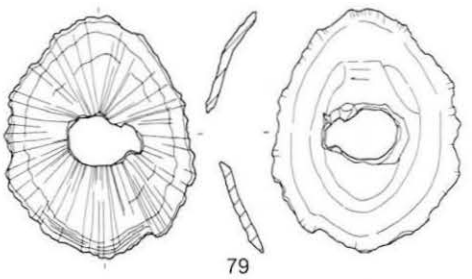
貝玉（第10図83・84）

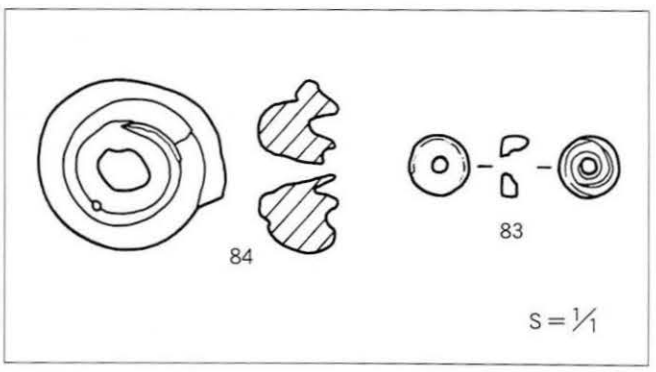
83は小型のイモガイ科の体層部を横切りにし、中央に穿孔する。

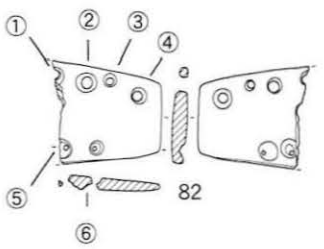
84はマガキガイ頂部がすられ、平坦となる。殻軸も除去され、小孔となる。

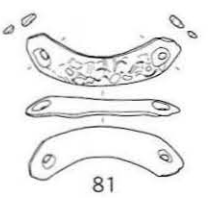
穿孔貝（第10図85）

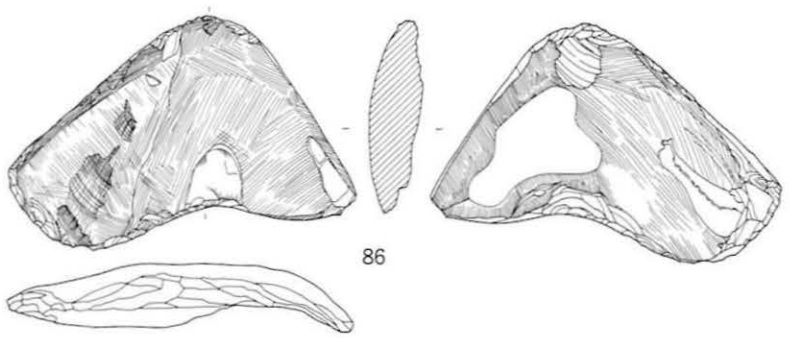


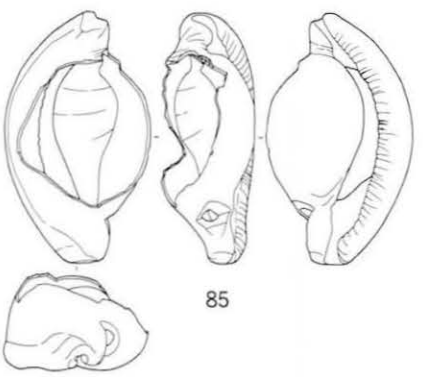












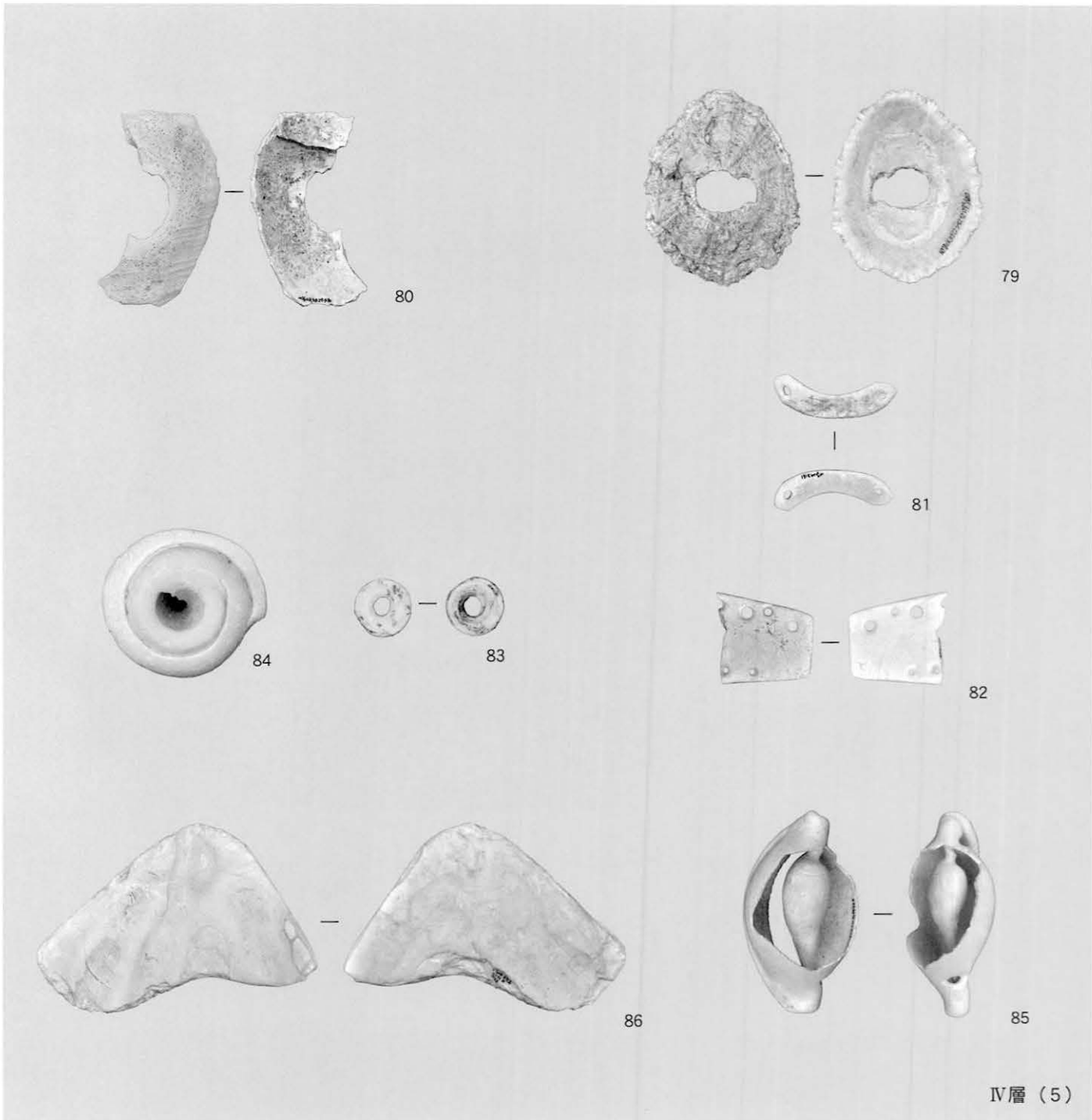
S＝1/3

第10図　Ⅳ層出土の貝製品（5）

85はウミウサギガイの製品で、上下水管溝の横部分に孔を穿つ。孔はU字状にすり切られ、孔となる。体層背面部を除去するが、その際孔部分まで破損したと思われる。

不明製品（第10図86）

86はヒレジャコの周縁をカットし全体的に研磨する。放射肋が一部残る。内面は閉殻筋痕と思われる部分が残る。



(7) Ⅲ層

Ⅲ層出土の貝製品は九五点で、その内訳は実用品七二点、装飾品二一点、用途不明二点である。実用品では貝錘の出土が多く三六点で、貝種はシャコガイ科二九点、リュウキュウマスオガイ三点、シレナシジミ二点、エガイ一点、リュウキュウザルガイ一点の順である。

装飾品では貝輪の出土が多く十四点で、貝種はゴホウラ五点、オオツタノハ三点、ウミギクガイ科二点、シロナルトボラ一点、テングガイ一点、イモガイ科一点、不明一点の順である。テングガイ製貝輪は前述したⅥ層とⅢ層のみでの出土であり、シロナルトボラ製貝輪は本層のみでの出土である。イモガイ科製の指輪は一点のみ出土している。本層出土の貝製品の内、二五点を図化し、第11図～第13図に示した。

利器（第11図87～91）

87はスイジガイ製の利器で、管状突起①のみ横刃をもつ。管状突起②～⑥は敲打でつぶれる。体層部に粗孔あり。

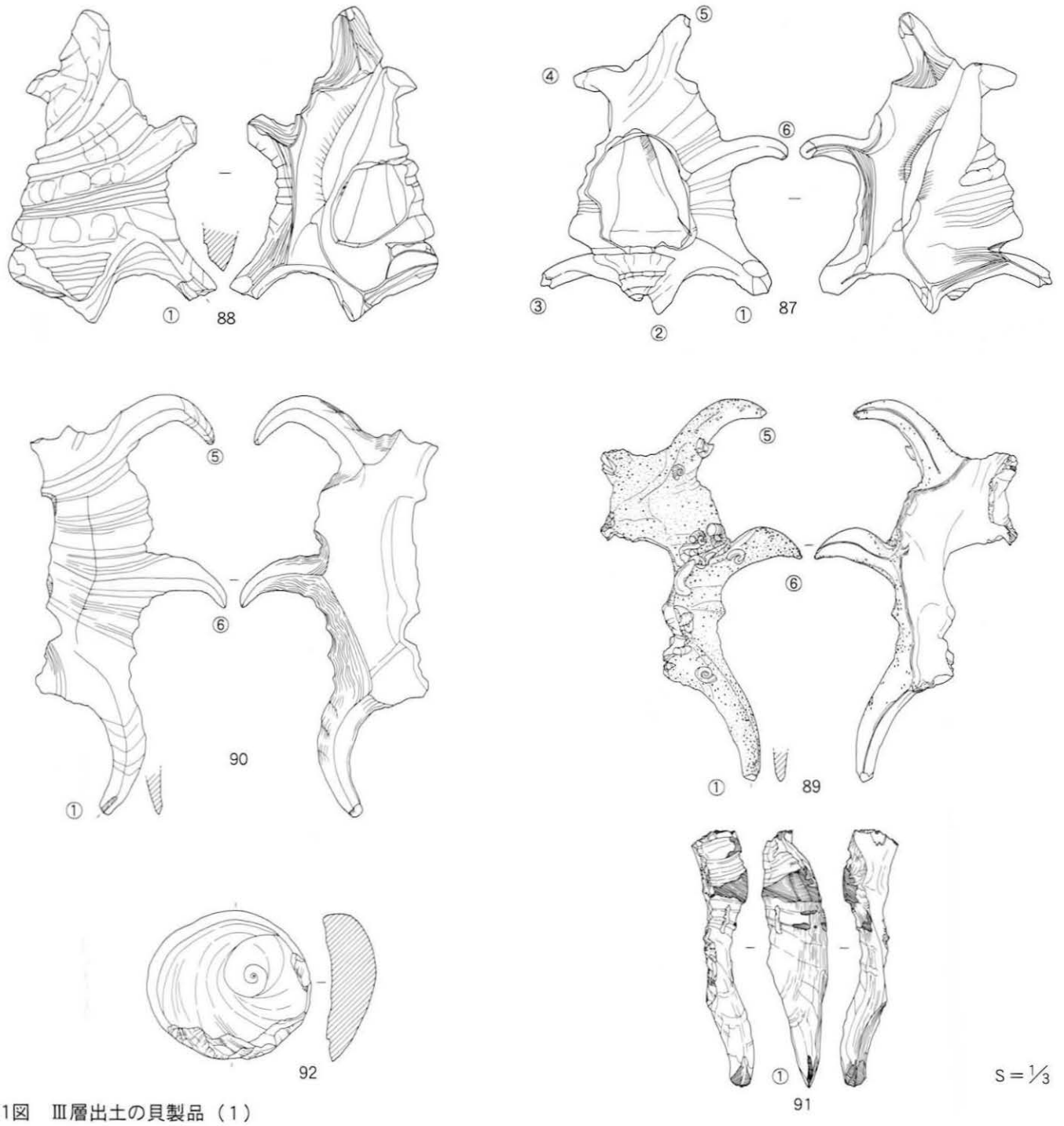
88はスイジガイ製の利器で、管状突起①のみに横刃が附刃されるが、先端が破損する。他の管状突起はつぶれる。腹部に粗孔あり。

89はスイジガイ製の利器で、管状突起①のみに横刃を附刃する。体層部なし。若干風化する。

90はスイジガイ製の利器で、管状突起①のみに横刃を附刃する。体層部なし。若干磨耗する。

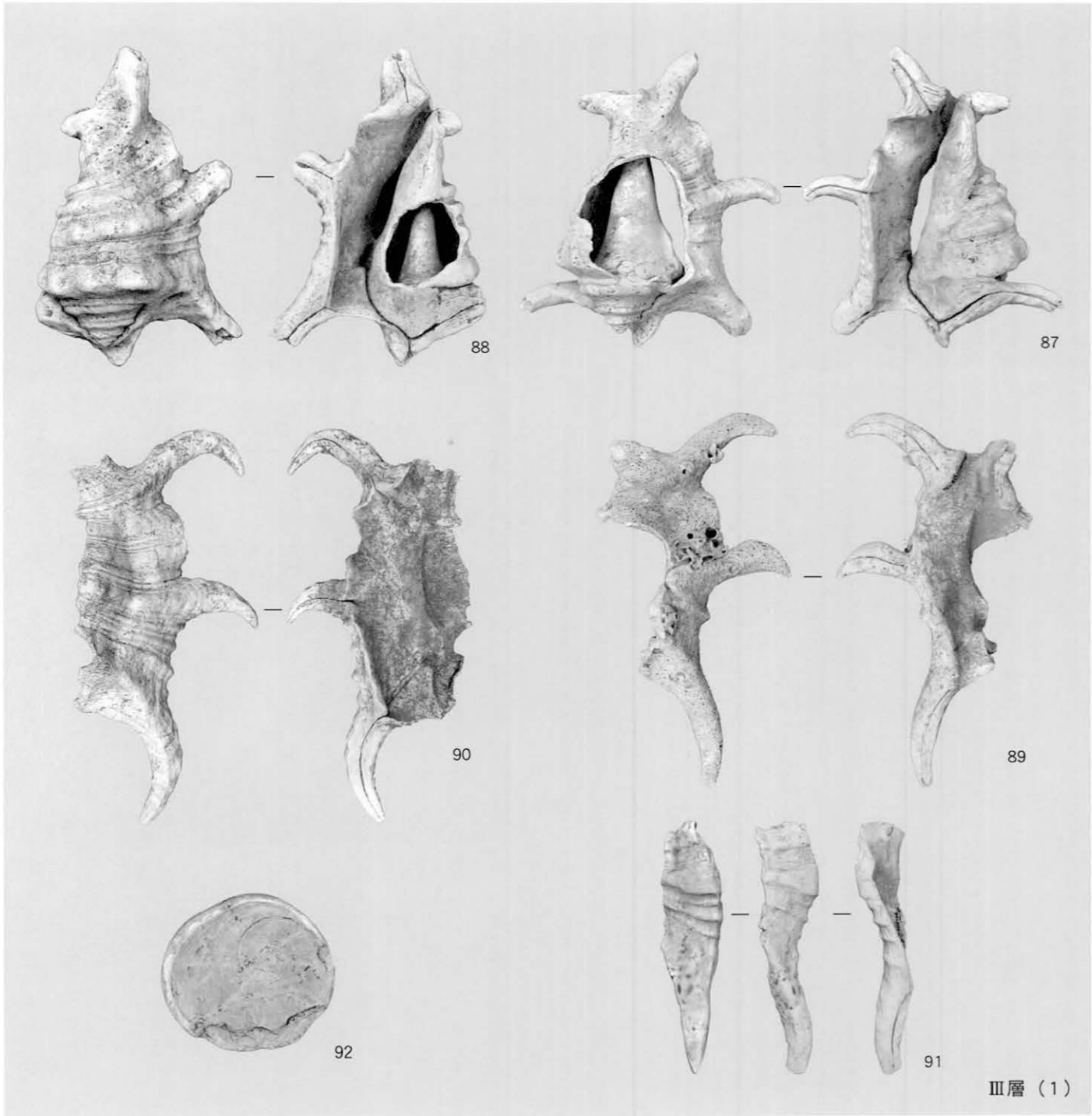
91はスイジガイ製の利器で、管状突起①のみに横刃を附刃する。体層部なし。管状突起⑥のつく部分は研磨が施される。

螺蓋製敲打器（第11図92）



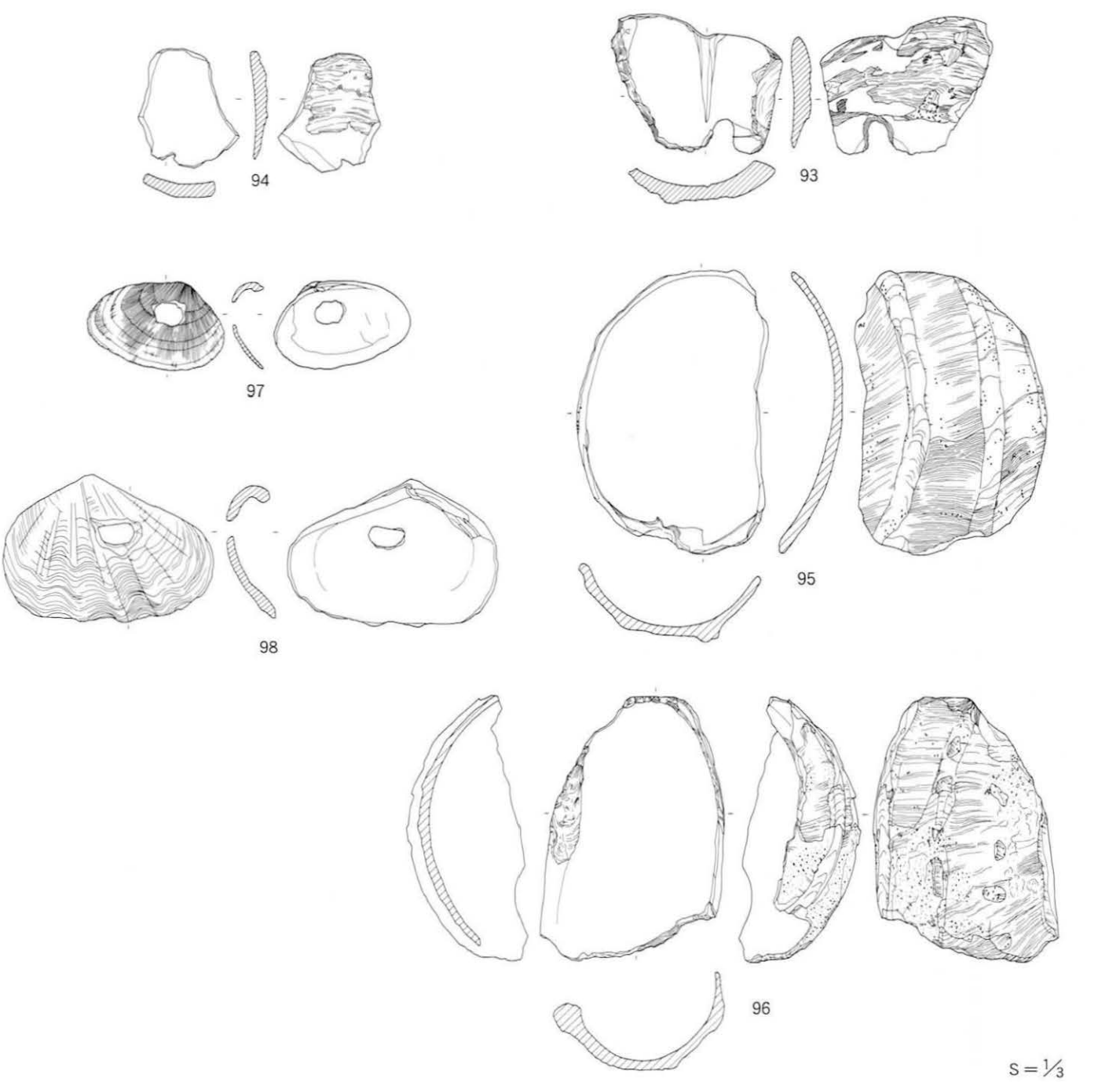
第11図　Ⅲ層出土の貝製品（1）

92は周縁部の右側から下辺にかけて2／3に剥離がある。縦七・五四㎝、横八・二六㎝。



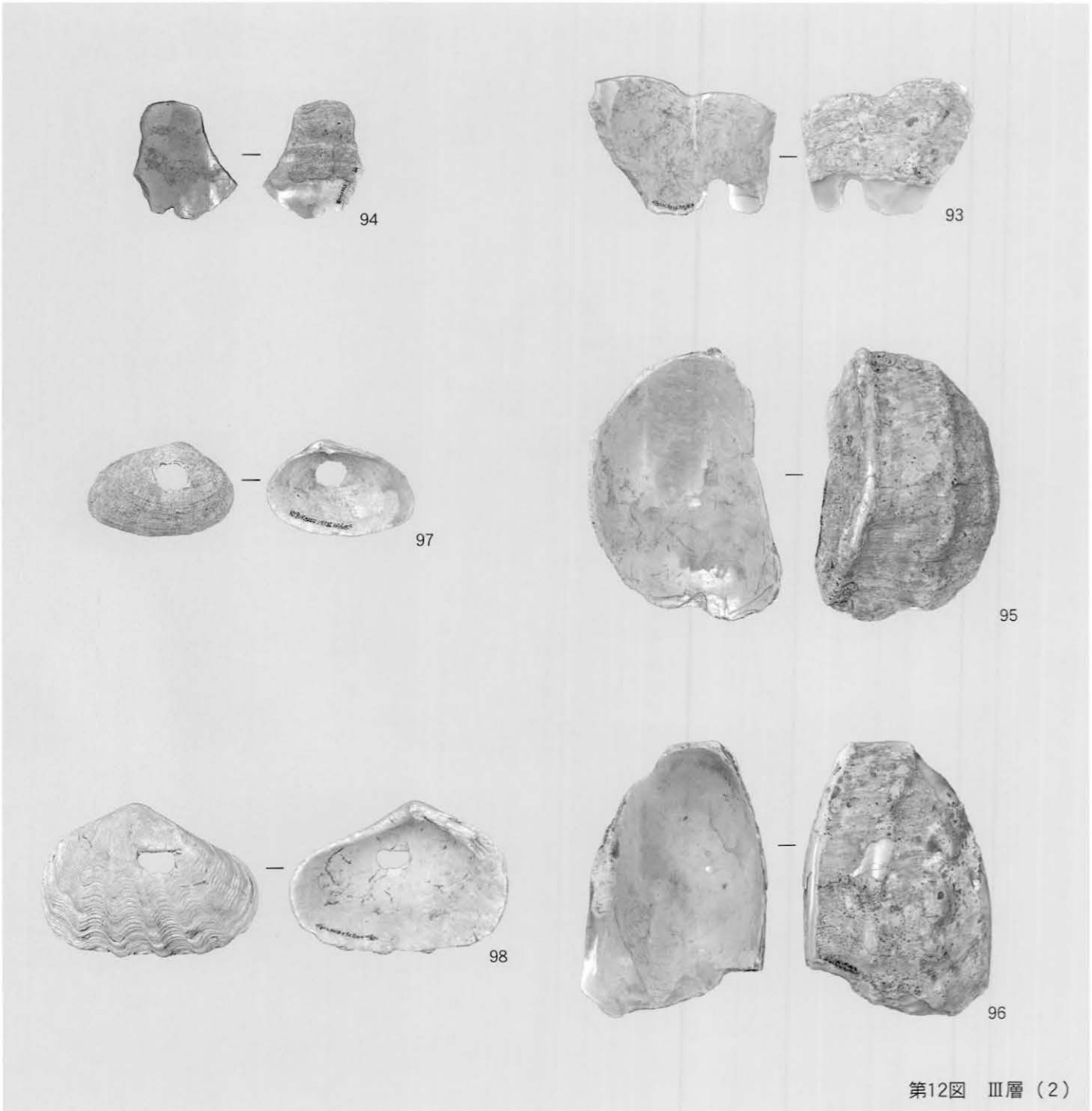
貝匙（第12図93～96）
93はヤコウガイ製の貝匙の柄の部分。中央にU字状に抉りが入り、それを中心に左右対称に扇状に広がる。上面は弱い研磨。側面は敲打によって形を整えたのみ。外面は結節の一部や外面に部分的に弱い研磨が施される。
94はヤコウガイ製の貝匙の柄の部分で同図93のような扇状にはならないタイプ。研磨面はみられない。
95はヤコウガイ製の貝匙の胴部分。全体的にあら割のみ。結節の研磨は弱い。
96はヤコウガイ製の貝匙の胴部分。縁に研磨は見られないが、螺背面の結節がすられ、平坦となる。

貝錘（第12図97・98）
97はリュウキュウマスオガイ（右）の貝錘で中央に粗孔あり。
98はヒメジャコ（右）の貝錘で、中央に粗孔あり。



第12図　Ⅲ層出土の貝製品（2）

貝製品93　貝匙柄部抉り面



第12図　Ⅲ層（2）

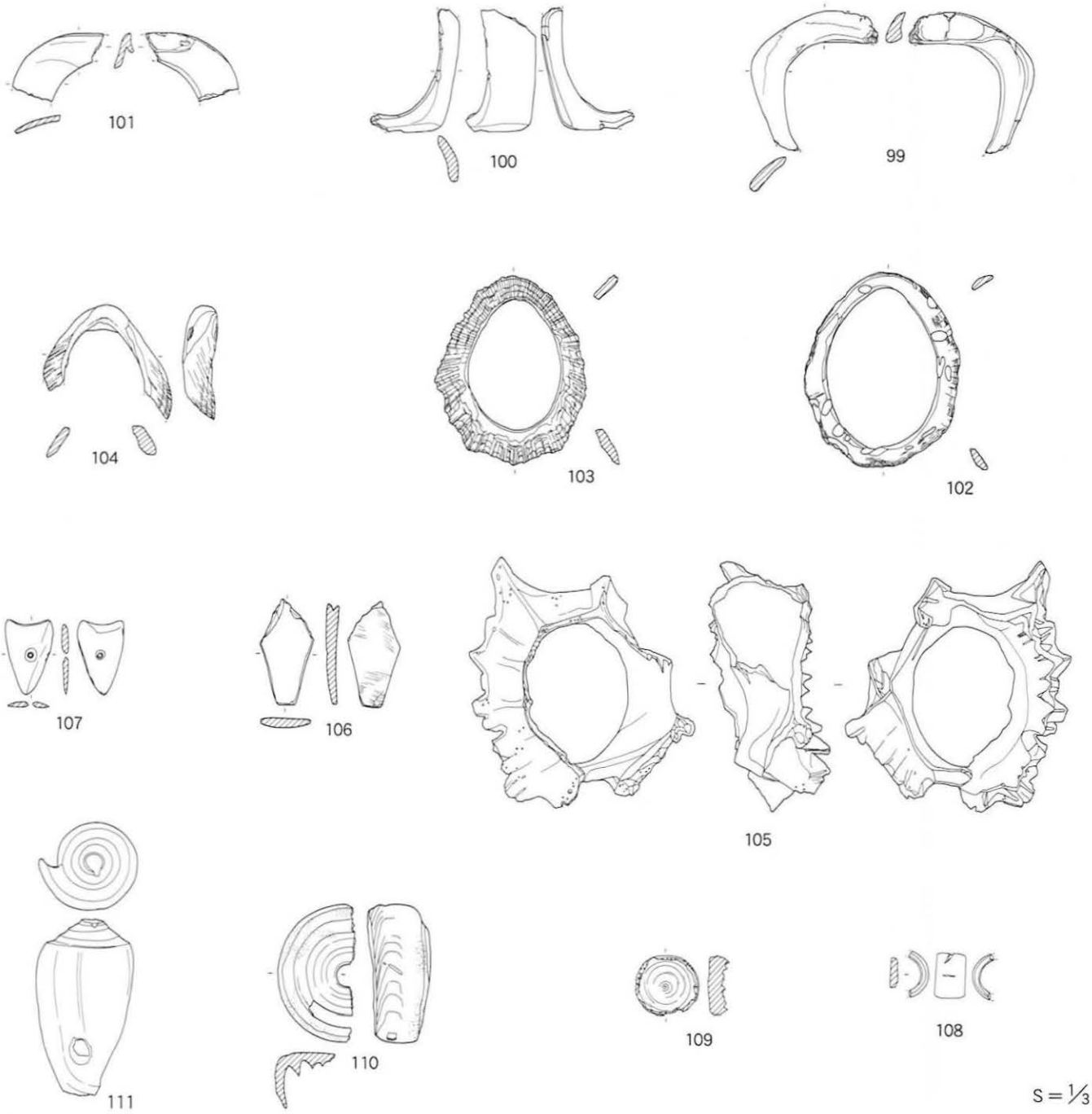
貝輪（第13図99～105）
99はゴホウラの腹面を使用する貝輪で、調整が丁寧。風化がいちじるしい。完製品が破損したものと思われる。
100はゴホウラの腹面を使用した貝輪で、全体的に丁寧な作り。完製品が破損したものと思われる。第9図68と同様の作り。
101はゴホウラ?の背面を使用する貝輪で、全体的に薄く丁寧な仕上げ。完製品が破損したものと思われる。
102はオオツタノハ製の貝輪で、全体的に研磨されるが、貝の成長輪・肋などが部分的に残る。虫くいが多い。
103はオオツタノハ製の貝輪で、研磨面はみられず、あら割りのみ。
104はウミギクガイ科（左）の貝輪で、割れ口に研磨面あり。風化がいちじるしい。
105はテングガイ製の貝輪で、滑層及び外唇のみ残る。研磨面なし。貝輪を作る途中段階のものと思われる。

札状製品（第13図106）
106の貝種は不明。周縁及び外面は丁寧な研磨。内面は部分的に貝の自然面が見られる。

鮫歯状模造品（第13図107）
107はウグイスガイ目の貝を使用。形状は二等辺三角形をなし、中央に径二㎜の小孔を穿つ。基部は若干抉りが入る。外面は膨らみ内面は平たくシャープである。

指輪（第13図108）
108は小型のイモガイ科の貝を素材として、体層部を水平に切り取り、外面・側面を研磨する。製品の厚みは四㎜を測る。

円盤状製品（第13図109）



第13図　Ⅲ層出土の貝製品（3）

109はイモガイ科の貝の円盤状製品で、殻頂部と螺塔の肩部にすり面がみられる。内面に加工痕なし。

貝輪（第13図110）

110はイモガイ科の貝の貝輪製作途中段階の破損品と思われる。殻頂から螺塔の途中あたりまで、すられて平坦になる。体層部に加工痕なし。

不明製品（第13図111）

111はタガヤサンミナシの体層部及び殻頂部に粗孔を穿つ。殻軸も一部除去される。貝の模様が薄く残る。

（8）かく乱層

Ⅱ層及びⅠ層は現代遺物が混入している箇所も多いため、表採と加えて、ここでは、かく乱層として取り扱う。各々の詳細は表7（P274）を参考されたい。かく乱層出土の貝製品は一〇九点である。特徴的なものにⅥ層で得られたラクダガイ製利器がここでも一点得られた。

貝輪も、完成度の高いものが多く、前述した層までに少なかったイモガイ科製貝輪が四点得られた。

遺跡前の海岸からの表採ではあるが、貝札が一点得られた。図化した資料は十九点で、第14・15図に示した。

利器（第14図112～114）

112はスイジガイ製の利器で、体層部なし。管状突起①・⑥のみ残る。刃は①のみに横刃がみられる。

113はスイジガイ製の利器で、体層部なし。管状突起①・⑥のみ残る。刃は①のみに横刃がみられる。

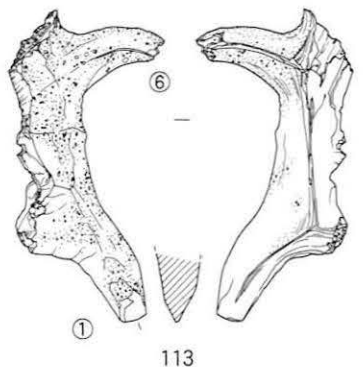
114はラクダガイ製の利器で、体層部、螺塔の一部なし。①及び③の管状突起に横刃を附刃する。②及び④は先端がつぶれる。突起番号は第3図19と同様。

貝輪（第14図115～117・第15図118～127）

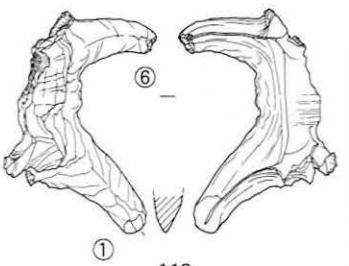
115はスイショウガイの腹面を使用する貝輪で、完製品が破損したものと思われる。他の貝輪に比べ、上下が大きく膨らみ中央が細くなる。後述の同図116に比べて小型であり、貝種はアツソデガイとも考えられる。

116はゴホウラの腹面を使用する貝輪で、第9図68の貝輪と同型で完製品が破損したものと思われるが、本資料が完成度は高い。

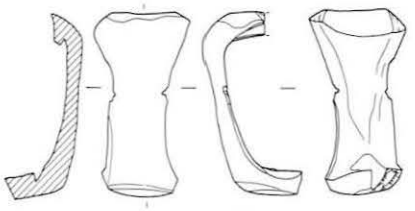
117はゴホウラの背面を使用する貝輪で、

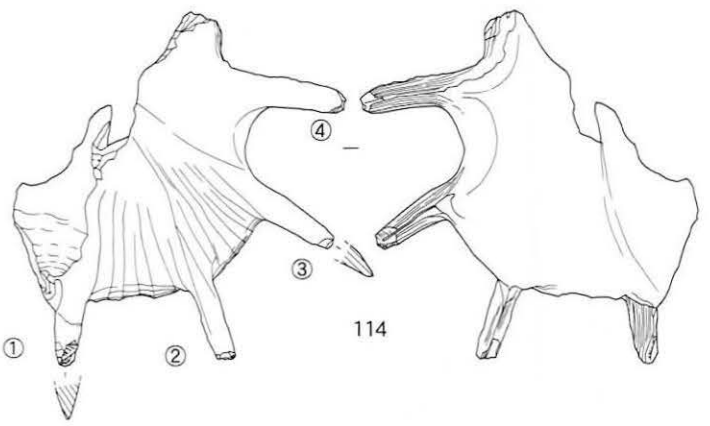


113

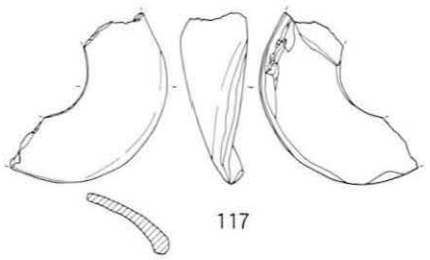


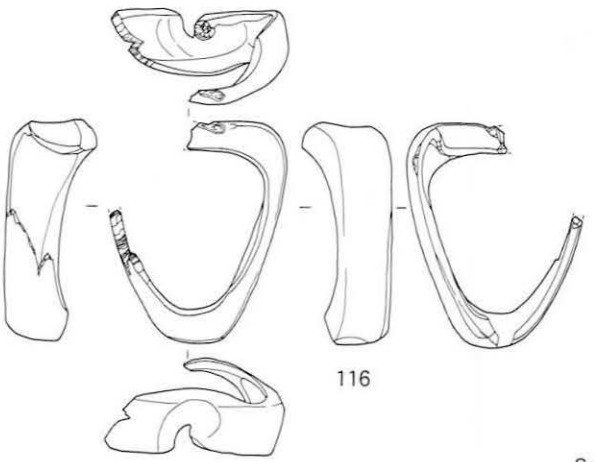
112


115



114


117

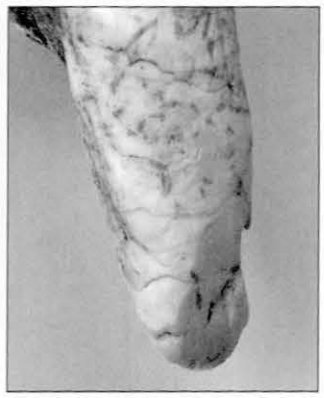

116

S＝1/3

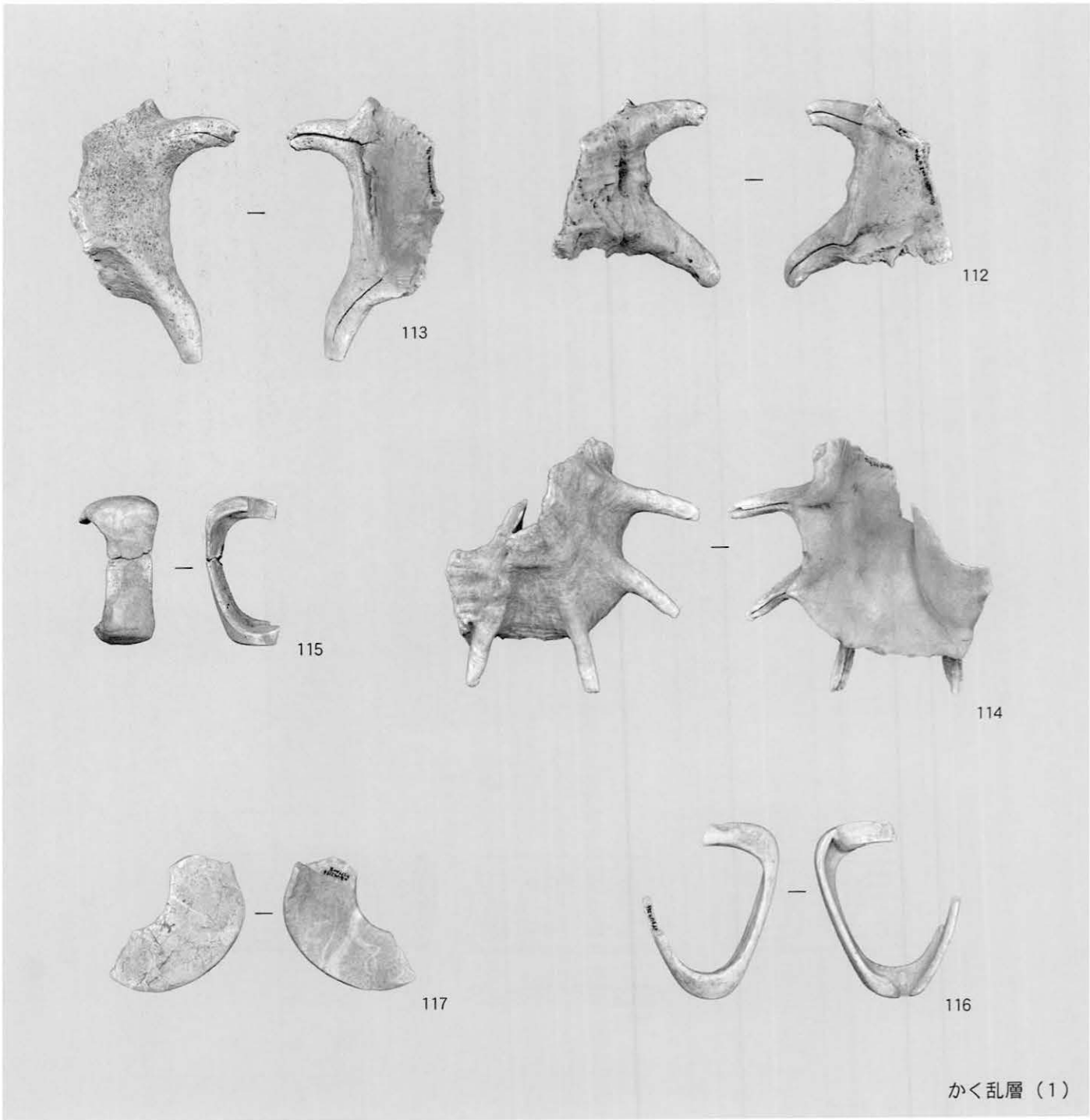
第14図　かく乱層出土の貝製品（1）

環の幅が広い。若干磨耗する。完製品が破損したものと思われる。

貝製品114　管状突起③



貝製品114　管状突起①



かく乱層（1）

118はイモガイ科の貝を素材とする貝輪で螺塔部を利用した横型貝輪である。とても薄く丁寧な作りだが、平面からみると各幅が異なる。完製品が破損したものと思われる。幅〇・五五cm。

119はイモガイ科の貝を素材とする貝輪で、横型貝輪。殻軸の一部も磨かれ、貝輪の一部となる。完製品が破損したものと思われる。

120はイモガイ科の貝を素材とする貝輪で、横型貝輪。若干厚みのある貝を使用。完製品が破損したものと思われる。

121はイモガイ科の貝を素材とする貝輪で、貝輪を作る段階の破損品と思われる。

122はオオツタノハを素材とする貝輪で、長軸部は〇・四cm、短軸は約一cmととても細い貝輪。研磨は中途半端である。

123はオオツタノハを素材とする貝輪で、内側の孔は荒割のみで研磨仕上げなし。周縁は全面丁寧な研磨が施される。

124はオオツタノハを素材とする貝輪で、内側の側面及び周縁部に丁寧な研磨がなされるが、部分的に放射肋や成長輪が残る。

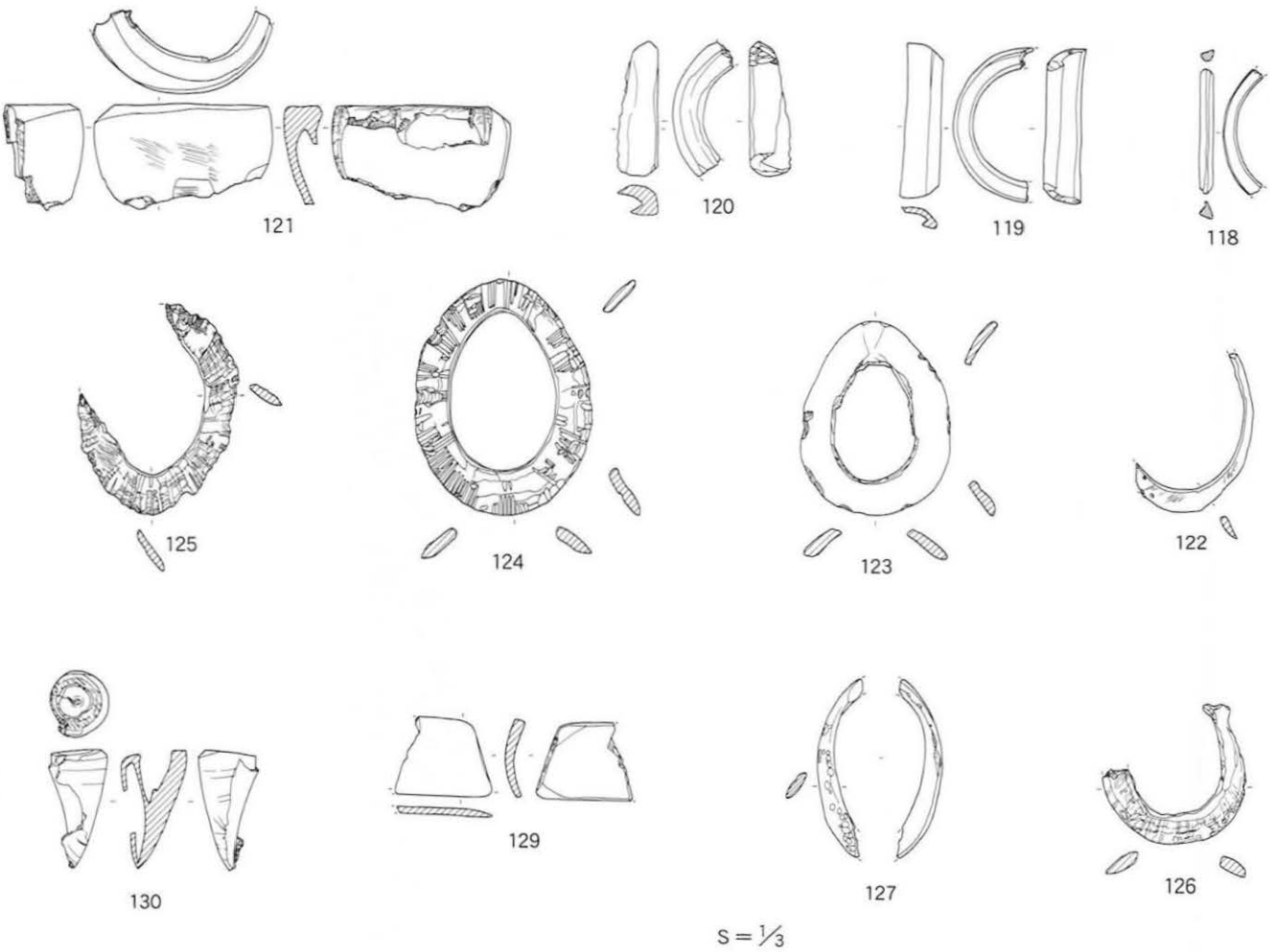
125はオオツタノハを素材とする貝輪で、内面の孔は若干磨かれているが、成長輪や放射肋などほとんどが、そのまま残る。高さのある肋のみが若干磨かれる。

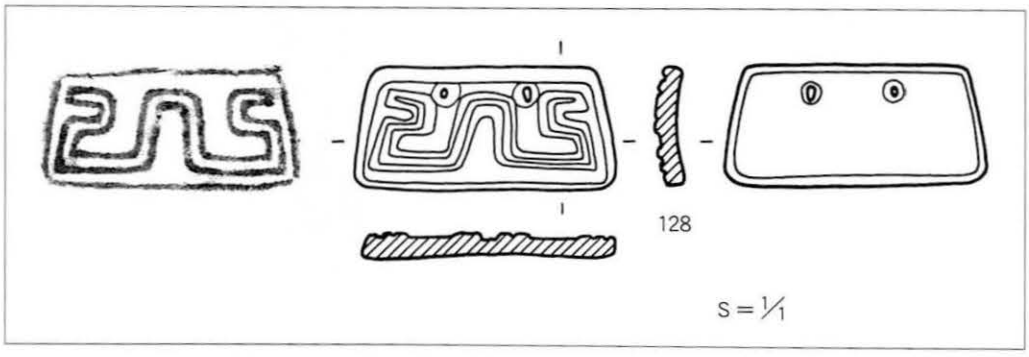
126はウミギクガイ科の貝を素材とする貝輪で、内面の孔は若干磨かれているが、成長輪や放射肋などほとんどが、そのまま残る。高さのある肋のみが若干磨かれる。

127はウミギクガイ科の貝を素材とする貝輪である。全体的に形を整え、研磨で仕上げられる。虫くいの穴が多い。

貝札（第15図128）

128はイモガイ科の貝を素材とする貝札





第15図　かく乱層出土の貝製品（2）

で、遺跡直近の海岸より表採した。形状は上下辺ともに直線的で、台形を呈する。文様は「W」字状を変形したような帯状文を施し、帯幅は狭い。上辺の中央部付近に小孔を二個穿つ。

札状製品（第15図129）

129の貝種は不明。台形状を呈する製品で、上下断面、平面は丁寧な研磨を施す。

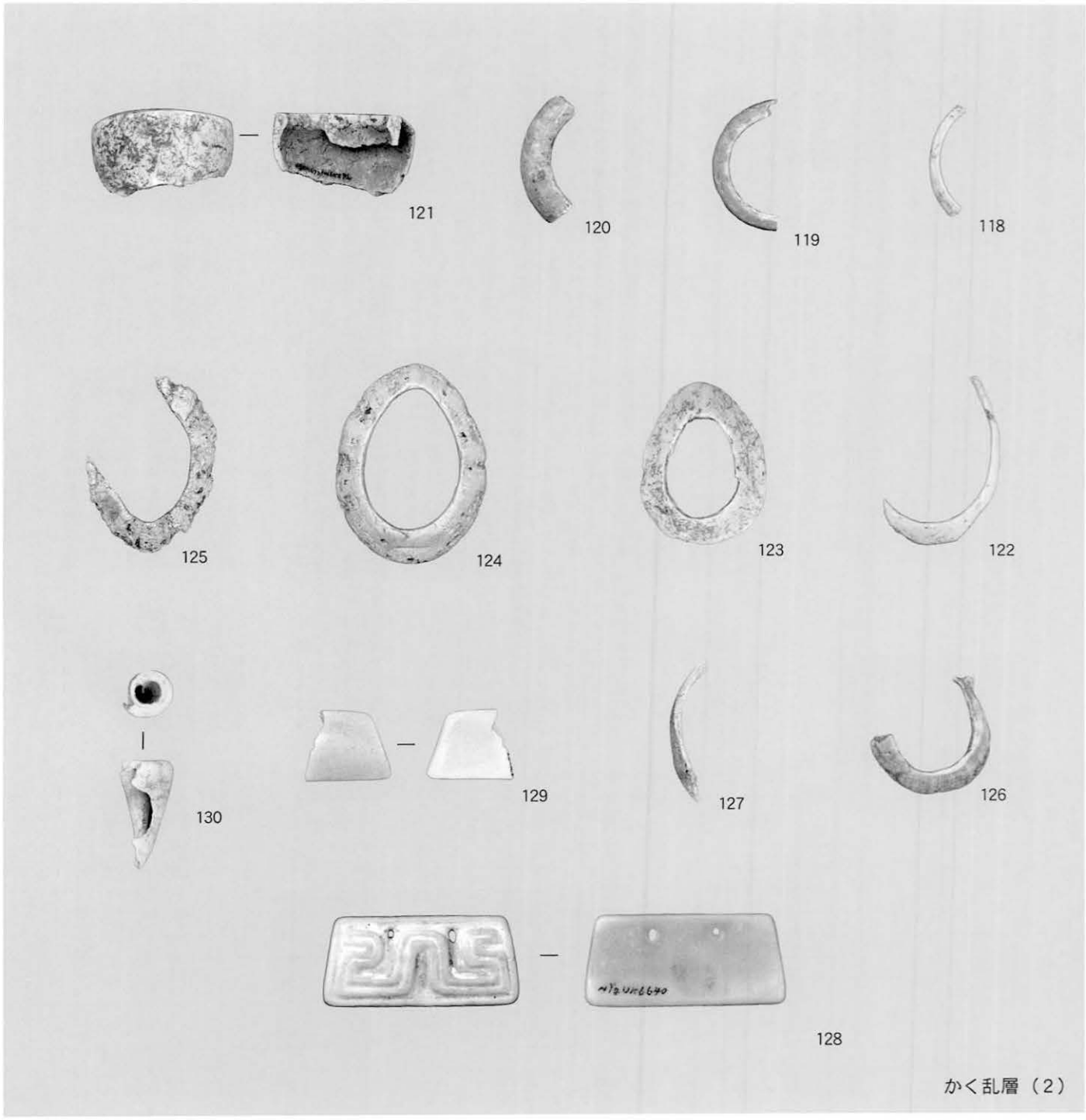
指輪（第15図130）

130はマガキガイを素材として、螺塔部を除去し、研磨する。外唇部、殻軸も除去される製品である。Ⅲ層から指輪製品（第13図108）が出土していることから指輪の製作途中の資料である可能性もあるため、指輪として取り扱った。

表４．貝札（第15図128）計測値

cm

孔	外の孔径	内の孔径
左	0.1×0.1	0.1×0.1
右	0.2×0.15	0.2×0.15



(9) 貝製品小結

貝製品は五六七点得られたことは既に述べた。製品の種類は実用品が多く、なかでも螺蓋製敲打器が圧倒的に多い。次に貝錘が多い。装飾品では貝輪が主体を占め、なかでも貝種はゴホウラが多い。ゴホウラ製貝輪はかく乱層も含めて三四点得られており、ほとんどが完製品の破損や製作途中段階の破損品と考えられるものである。ゴホウラの使用部位は、背面、腹面を利用するものと、不明の三種が認められ、背面利用が二十点、腹面利用が十一点、不明が三点であった（表8参照）。Ⅶ層からⅣ層の縄文時代の層からはゴホウラの背面利用型の貝輪が十五点、腹面利用型の貝輪が七点と背面利用型貝輪が多く得られている。弥生～古墳時代並行期のⅢ層からは、背面利用型および腹面利用型の貝輪それぞれ二点が得られている。注目すべきは、縄文時代の層から腹面利用型の貝輪が得られたことで、本貝塚の特徴であろう。

層序別での貝製品の出土は、Ⅵ層が一二五点と最も多く、次にⅣ層一一六点、Ⅲ層九五点の順に多い。大まかな時代で分けるとⅧ層からⅣ層の縄文時代並行期の資料が三六三点と、Ⅲ層の弥生～古墳時代並行期の資料九五点より多い。

貝種別では主なものをみると、ヤコウガイ（蓋が主体）が二五四点と群を抜き、次にヒメジャコ九〇点、ゴホウラ三四点、シレナシジミ二四点、オオツタノハ二二点・スイジガイ二二点・ウミギクガイ科二二点の順である。

次に特徴のある資料について幾つか触れてみたい。まず第5図45のクロフモドキ製の円盤状製品であるが、丁寧な研磨と、穿孔が施されており、完成度の高い装飾品であると思われる。二個の孔には紐ズレ痕がみられることから、紐を通して使用した可能性が極めて高いが、詳しい用途については不明。

次に同図49のヒトエガイに四個の小孔を穿つ資料であるが、装飾品や装身具の種であると考えられるが、詳細は不明である。類例資料としては伊江島のナガラ原西貝塚（注2）、同島の具志原貝塚（注3）でみられる。伊江島での出土資料は貝種がオオツタノハで、出土層は、弥生時代並行期のものである。一方、本貝塚出土の資料は貝種がヒトエガイで、縄文時代に属する層からの出土である。今後、当資料の所属時代や用途等の比較検討が必要である。

次に第10図85のウミウサギガイの穿孔資料は背面部を欠くが、溝状に擦り切られた孔がみられるものである。類例資料が宜野湾市の安座間原第一遺跡（注4a・b）で人骨の左腕手首近くで検出されている。また宜野湾市の宇地泊兼久原遺跡（注5）においても同様な製品が検出されている。このような溝状の孔をもつウミウサギガイの製品に対して木下尚子氏は、「孔に紐を通すのではなく、紐を掛けて着装する装身具であろう」との見解を示している（注6）。

次に第15図128の貝札は、遺跡直近の海岸よりの表採で、共伴する土器は不明であるが、本来はⅢ層に包含されていたと思われる。本資料は鹿児島県種子島の広田遺跡の貝札「下層タイプii（中層タイプ）」（注7）の範疇として捉えられる。

注1　上原静　一九八一「いわゆる南島出土の貝製利器について」『南島考古』七　沖縄考古学会

注2　名嘉真武夫・安里嗣淳　一九七九「伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書　概報篇」『伊江島ナガラ原西貝塚　緊急発掘調査報告書　概報篇・自然遺物篇』　伊江村教育委員会

注3　安里嗣淳ほか　一九八五『伊江島具志原貝塚の概要』　沖縄県教育委員会

注4a　呉屋義勝ほか　一九九一『じゃなⅠ　真志喜区画整理地区の宅地造成に係る発掘調査報告　本文編』　宜野湾市教育委員会

注4b　宜野湾市教育委員会　一九九〇『じゃなⅠ　真志喜区画整理地区の宅地造成に係る発掘調査報告　図版編』

注5　高宮廣衛ほか　一九八九「宜野湾市宇地泊兼久原遺跡発掘調査報告」『沖国大考古』十　沖縄国際大学文学部考古学研究室

注6　木下尚子　一九九六「第3章　貝と葬送習俗－沖縄県真志喜安座間原第一遺跡の報告から－」『南島貝文化の研究・貝の道の考古学』　財団法人　法政大学出版局

注7　木下尚子　二〇〇三「7・貝製装身具からみた広田遺跡」『種子島広田遺跡　本文編』

表5．貝製品の層・用途別集計表

層＼器種	実用品					装飾品・装身具							用途不明品	合計
	利器	敲打器	貝刃	貝匙	貝錘	貝輪	札状製品	鮫歯状模造品	貝玉	指輪	円盤状製品	穿孔貝		
Ⅷ		22		1	1								1	25
Ⅶ		45			1	10					1	1	1	59
Ⅵ	1	87			11	18	2				2	4		125
Ⅴ・Ⅵ		10		1	1	3			1					16
Ⅴ		14	2	1	3	1	1							22
Ⅳ	12	16	1	1	55	25	2		2			1	1	116
Ⅲ	5	26		5	36	14	2	1	1	1	1	1	2	95
Ⅱ	2	17			20	15								54
Ⅰ					2	1								3
表採							1							1
かく乱	4	3	1	1	23	16	1			1		1		51
合計	24	240	4	10	153	103	9	1	4	2	4	8	5	567

表６．貝製品の貝種・用途別集計表

貝種＼器種		実用品					装飾品・装身具							用途不明＊３	合計
		利器	敲打器	貝刃	貝匙	貝錘＊１	貝輪	札状製品	鮫歯状模造品	貝玉	指輪	円盤状製品	穿孔貝＊２		
巻貝	オオツタノハガイ						22								22
	オオベッコウガサガイ						1								1
	サラサバテイ						3								3
	ヤコウガイ				9			2						3	14
	ヤコウガイの蓋		240												240
	スイショウガイ科						1								1
	ゴホウラ						34								34
	アツソデガイ						4								4
	マガキガイ									3	1				4
	ラクダガイ	2					2								4
	スイジガイ	22													22
	ウミウサギガイ												2		2
	ヤクシマダカラ												1		1
	ホシダカラ												1		1
	ハナマルユキ												1		1
	シロナルトボラ						1								1
	テングガイ						3								3
	イモガイ科				1		4	3		1	1	1			11
	アンボンクロザメ											1			1
	クロフモドキ						2	1				2			5
	タガヤサンミナシ													1	1
	ヒトエガイ												1		1
二枚貝	エガイ					4									4
	ソメワケグリ					6									6
	ウグイスガイ目								1						1
	アコヤガイ					1									1
	クロチョウガイ					6									6
	マクガイ科					3									3
	シュモクアオリ					4									4
	マクガイ					1									1
	ウミギクガイ科						20	1					1		22
	シャコガキ					2									2
	ツキガイ					1									1
	カワラガイ					3									3
	リュウキュウザルガイ					1									1
	ヒメジャコ					90									90
	ヒレジャコ													1	1
	シラナミ					7									7
	リュウキュウマスオガイ					7									7
	シレナシジミ			4		17	2						1		24
	不明						4	2							6
合　計		24	240	4	10	153	103	9	1	4	2	4	8	5	567

＊１　リュウキュウサルボウ、タカラガイ、ウミギクガイ科の有孔貝も多数出土しているが、貝錘として断定しがたいので報告を割愛した。
＊２　装飾品あるいは装身具である可能性が高いが、使用方法や用途が判然としない製品を穿孔貝とした。
＊３　実用品あるいは装飾品・装身具の両方の可能性があると考えられるため、用途不明品とした。

表7．貝製品観察表（1）

挿図番号		貝種・部位	製品名	縦長(cm)	横長(cm)	重量(g)	グリット		層	レベル	層備考
1	1	ヤコウガイの蓋	敲打器	5.8	6.4	80.14	け・こ	99	Ⅷ	-111～-126	
1	2	ヤコウガイの蓋	敲打器	5	5.4	50.64	け・こ	99	Ⅷ	-82～-89.5	
1	3	ヤコウガイ	貝匙	9.9	6.4	69.01	す	95･96	Ⅷ	-117.3～-127.3	
1	4	ヤコウガイ	不明	6.3	5.8	57.31	け・こ	101	Ⅷ	-87～-96.5	
1	5	シラナミ　右	貝錘	10.8	18.9	309	け・こ	99	Ⅷ	-104～-108	
1	6	ハナマルユキダカラ	穿孔貝	3.3	2.45	5.65	け・こ	99･100	Ⅶ		
1	7	ヤコウガイ	不明	19.4	16.2	1000	け	100	Ⅶ	0～-4.5	
2	8	ゴホウラ 腹面	貝輪	9.6	6	31.35	け・こ	100･101	Ⅶ	-2～-4	
2	9	ゴホウラ　背面	貝輪	6.5	5.4	17.18	こ	101	Ⅶ	20～14	
2	10	ゴホウラ腹面	貝輪	4.8	4.9	9.21	さ	99	Ⅶ	21.5	
2	11	オオツタノハ	貝輪	8	6	19.54	し	100	Ⅶ	17～1.5	
2	12	オオツタノハ	貝輪	6.9	5.15	8.22	け・こ	99	Ⅶ	-58.5～-80	
2	13	オオツタノハ	貝輪	4.7	4.3	4.44	け	100	Ⅶ	-57～-92	
2	14	シレナシジミ	貝輪	6.85	5.35	15.86	し	95	Ⅶ	-45～61.8	
2	15	ゴホウラ腹面	貝輪	9.5	7.4	124.28	こ	99･100	Ⅶ	-3～-12	
2	16	ゴホウラ背面	貝輪	2.8	7	34.48	さ	95	Ⅶ	-45～-83	
2	17	ゴホウラ背面	貝輪	6.8	5	38.47	さ	96	Ⅶ	-55～-74.8	
2	18	アンボンクロザメ	円盤状製品	4.05	4.3	29.07	け・こ	100･101	Ⅶ	-35	
3	19	ラクダガイ	利器	26.6	21.4	800	そ	92	Ⅵ	72.47	
3	20	ヤコウガイの蓋	敲打器	7.6	8.2	148.48	そ・た	90	Ⅵ	36～-26	
3	21	ヤコウガイ	貝匙	6.6	5.5	18.07	し	95	Ⅴ・Ⅵ		
3	22	シレナシジミ　左	貝刀	6.95	7	31.74	さ	95	Ⅴ		
3	23	シレナシジミ　左	貝錘	8.3	8.7	57.53	し	100	Ⅵ	95～43.5	
3	24	マクガイ　左	貝錘	9	10.9	51.95	す・せ	91	Ⅵ	3.5～-12.5	
3	25	クロチョウガイ　右	貝錘	15	13.4	108.64	せ	95	Ⅵ	-32～-67	
3	26	シャコガキ　右	貝錘	11.95	9	100.1	す	92	Ⅵ	11.2	
4	27	ゴホウラ背面	貝輪	8.3	6.4	30.14	さ	96	Ⅴ・Ⅵ	-6.1～-55.4	ビーチロック
4	28	ゴホウラ背面	貝輪	8.2	6.1	31.47	こ	100	Ⅴ	44.5～29.5	
4	29	アツソデガイ腹面	貝輪	6.15	4.55	8.7	し	96	Ⅴ・Ⅵ	3～-6.8	
4	30	ゴホウラ背面	貝輪	8.3	6	15.26	そ	91	Ⅵ	51	
4	31	ゴホウラ背面	貝輪	7.3	5.5	17.62	す	92	Ⅵ	-19～-55.5	
4	32	ゴホウラ背面	貝輪	9.2	7.3	33.7	す	92	Ⅵ	11.2	
4	33	ゴホウラ背面	貝輪	4	7.4	21.45	そ	95	Ⅵ	53.5～40.1	
4	34	ゴホウラ背面	貝輪	6.9	5.2	33.68	せ	92	Ⅵ	-64.3	
4	35	ゴホウラ腹面	貝輪	7.8	3.2	19.77	そ	95	Ⅵ	64.5～53.5	
4	36	ゴホウラ腹面	貝輪	6.2	5.1	28.37	せ	95	Ⅵ		
4	37	不明	貝輪	9.2	5.1	10.15	さ・し	99	Ⅵ	22～16	
5	38	ゴホウラ背面	貝輪	7.9	5.5	27.54	け・こ	99	Ⅵ	45	ビーチロック
5	39	ゴホウラ背面	貝輪	7.8	7.8	61.66	そ	92	Ⅵ	13.5～-6.5	

表7．貝製品観察表（2）

挿図番号		貝種・部位	製品名	縦長(cm)	横長(cm)	重量(g)	グリット		層	レベル	層備考
5	40	テングガイ	貝輪	9.35	3.45	36.13	す	92	Ⅵ	11.2～10	
5	41	ウミギクガイ科　左	貝輪	7.7	7.2	42.45	さ・し	99･100	Ⅵ	－80～83.5	
5	42	シレナシジミ　左	貝輪	7.5	10	37.97	せ	92	Ⅵ	－15～－44	
5	43	スイショウガイ科背面	貝輪	9.1	7.9	37.94	さ	100	Ⅵ	34	
5	44	ヤコウガイ	札状製品	6	3.3	7.55	さ	100	Ⅵ	32.5～22	
5	45	クロフモドキ	円盤状製品	7	7.4	63.63	す	91	Ⅵ	－19.5	
5	46	シレナシジミ　左	穿孔貝	8.3	4.7	14.56	し	100	Ⅵ	95～43.5	
5	47	ヤクシマダカラ？	穿孔貝	6.5	4.6	44.25	さ・し	99･100	Ⅵ	－80～83.5	
5	48	ホシダカラ	穿孔貝	8.35	5.55	46.02	そ	91	Ⅵ	18.5～11	
5	49	ヒトエガイ	穿孔貝	7.6	6.2	16.97	す	92	Ⅵ		
6	50	スイジガイ	利器	6.9	4.5	42.2	け・こ	99・100	Ⅳ		
6	51	スイジガイ	利器	7.95	2.9	25.71	し	99	Ⅳ	143～75.5	
6	52	スイジガイ	利器	8.6	3.3	37.93	そ	95	Ⅳ	115.2～102.9	
6	53	スイジガイ	利器	17.45	12.45	583.62	く	101	Ⅳ		
6	54	スイジガイ	利器	18	11.9	357.1	さ	99	Ⅳ		
6	55	スイジガイ	利器	18.6	13.6	443.26	け・こ	100･101	Ⅳ		
6	56	スイジガイ	利器	16.05	12.05	202.67	け・こ	100･101	Ⅳ		
7	57	スイジガイ	利器	13.3	9	187.48	け・こ	100･101	Ⅳ		
7	58	スイジガイ	利器	22	8.6	224.13	く	101	Ⅳ		
7	59	スイジガイ	利器	17.4	15.1	338.27	た	91	Ⅳ	131.5～119.5	
7	60	スイジガイ	利器	19.9	15.6	555.28	せ	96	Ⅳ	141.65	
8	61	ヤコウガイの蓋	敲打器	8.4	9.1	241.65	こ	93	Ⅳ	137～130.7	貝だまり
8	62	ヤコウガイ	貝匙	16.5	8.5	256.3	こ	99	Ⅳ	240～230	
8	63	ソメワケグリ　右	貝錘	4.1	3.8	11.47	く	100	Ⅳ	175～60	
8	64	カワラガイ　左？	貝錘	4.6	4.3	10.55	く	101	Ⅳ	185～180	
8	65	ヒメジャコ　左	貝錘	6.35	8.5	53.93	こ	93	Ⅳ	137～130.7	貝だまり
8	66	クロチョウガイ　右	貝錘	13.9	12.8	113.27	た	92	Ⅳ	115.5～111.5	遺構
8	67	シレナシジミ　左	貝錘	7.6	8.3	50.41	し	92	Ⅳ	129.5～120	
9	68	ゴホウラ腹面	貝輪	9	7.1	50.55	こ	93	Ⅳ	118.5～101.5	
9	69	アツソデガイ外唇部	貝輪？	7.1	3.3	19.04	し	100	Ⅳ	139～126	
9	70	ゴホウラ背面	貝輪	9.2	2.8	37	け	95	Ⅳ	58.26	
9	71	ゴホウラ腹面	貝輪	7.5	5.9	12.25	こ	94･95	Ⅳ		
9	72	オオツタノハ	貝輪	3.4	6.7	5.49	さ	101	Ⅳ	145～140	
9	73	ウミギクガイ科	貝輪	7.1	7.8	12.85	こ	99	Ⅳ	199.5～131.5	
9	74	ウミギクガイ科　左	貝輪	7.2	4.55	12.57	ち	90	Ⅳ	206.1～187.1	
9	75	ウミギクガイ科右	貝輪	5.2	7.1	20.86	け・こ	100･101	Ⅳ		
9	76	ラクダガイ？腹面	貝輪	10.3	4	36.01	さ	100	Ⅳ	125～105	
9	77	ゴホウラ背面	貝輪	6.1	5.8	29.51	さ	96	Ⅳ	100～105	
9	78	アツソデガイ腹面	貝輪	7.9	6.35	62.13	そ	92	Ⅳ	178～174.5	

七、ヤコウガイ蓋

沖縄の遺跡からは、ヤコウガイ蓋の周辺部が剥離あるいは破損したものが多く出土する。それは貝刃・貝斧・敲打器などとして使用され、縄文時代後期の遺跡からも出土しているが、特に弥生～平安並行時代の遺跡では一般的に見られる貝製品である(注1)。

本貝塚では、縄文時代早期のⅧ層から弥生～平安並行時代のⅢ層まで、全層にわたって出土した。貝製品の項で図化して紹介した五点を含め、今回資料整理の都合上二六七点を対象とした。製品として使われたであろう資料のみならず、使用痕の見られない「完形」や「亀裂」、「わずかな剥離」が見える資料を含めて分類・整理することにより、ヤコウガイの蓋に対する人の関わり方の一端を読み取れないものかと思い、特に項目を設けて検討してみた。

出土量と破損状況の分類を表1に、大きさと重さを表4に示した。計測は第1図に示したように行った。

表1に示した分類は、まず、全資料を「剥離（①類～③類）」「欠損（④類）」「完形」の三つに分け、剥離しているものと欠損しているものをその状態にさらに細分類を試みた。その分類の説明を第2図に示した。

今回対象とした中で計測可能なヤコウガイの蓋は二三一点。各層の横幅平均値、最小、最大値は表2に示したとおり。各層の平均値を見るとⅧ層では六㎝、Ⅵ層では七㎝、Ⅲ層では八㎝と、上層になるにつれ大きくなっている。出土量では、Ⅷ層～Ⅵ層にかけては増加するが、Ⅴ層～Ⅲ層では減少している。

次に破損状況の分類を見てみると、一方向からの剥離面を持つ①類が一一四点、連続しない二方向からの剥離面を持つ②類が六三点、三箇所以上の剥離面を持つ③類は一六点、欠損品である④類が六九点、完形が五点。①類が最も多く出土していることが分かった。

次に細分類ごとの出土状況を見ると、①類の中で一番多く出土したのが小さな剥離面を持つ①ａii類でⅣ層以外の全ての層で出土している。そのほとんどが右上に剥離を持つものであった。

次に出土の多かった④類では部位が判別できない④ｄ類が多いが、部位が分かるものについて見てみると、右側と右側～下部にかけての欠損が多く見られた。

二方向からの剥離が見られる②類では、②ｂｉ類が二八点と最も多く、Ⅴ層以外の全ての層から出土している。剥離部位は、全ての層においてで右上～左下にかけての剥離であった。

このように剥離面を部位で見ると全ての層で右側に剥離を持つものが多いことが分かった。中でもⅣ～Ⅲ層から出土したものは、ほぼ全ての破損部位が右側や右側から下部にかけて剥離している（Ⅳ層で一点だけ上面部にまで剥離しているものが出土）。

またⅧ～Ⅵ層でも同様に右の剥離と右側～下部にかけての剥離を持つものが多く出土している。

その一方でⅧ～Ⅴ層には出土してⅢ～Ⅳ層に出土類があることがわかる。

まず①ａ類のほぼ完形に近い「小さな亀裂」や「僅かな剥離」がみられるものが出土している。またサイズをみると小型のものが出土している。

次に①ｂ類（周縁の1／4程度の剥離）でⅧ～Ⅲ層においてその全てが右側の剥離が認められたのだが、特にⅣ～Ⅲ層では「右中央部に剥離がある」ｉ類だけが出土していて破損部位が限定されていることがうかがえた。

また、「周縁全体に剥離が及ぶ」①ｅ類や、あるいは「周縁上部が剥離している」①ｄｉ類はⅣ～Ⅲ層にはみられない。さらに「二方向からの剥離のある」②類でも、Ⅷ～Ⅵ層ではその剥離が上部にまで及ぶものが出土しているのに対し、Ⅳ～Ⅲ層ではそれが下部から左側に限定されていることがわかる。

「三方向からの剥離がみられる」③類もⅣ～Ⅲ層からは出土していない。

今回の分類から分かった事を以下に述べる。

今回出土したヤコウガイの蓋は大きく分けてⅧ～Ⅵ層とⅢ層～Ⅳ層に、違いがみられた。

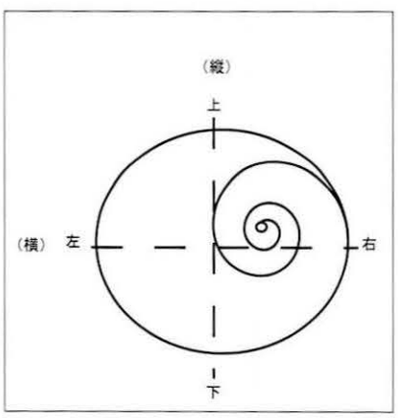
まずⅧ層～Ⅵ層では出土量が上層になるにつれ増加している。また蓋のサイズを見ると大きさにばらつきがあり最大値は九㎝台から最小値が三㎝台のまでが出土してる。また割れかについては①類から④類まで多様な剥離と破損か見られた。その中でも特に多かったのはほぼ完形に近い①ａ類がもっとも多く出土した。

しかしそれに対しⅣ～Ⅲ層は出土量こそ減少するが、②ｂｉ類や①ｄiiという右側～下部そして左下部へ剥離が限定されていることがわかった。また剥離や欠損しているものしか出土していないのにもかかわらずヤコウガイの蓋のサイズが六㎝台～九㎝台と大きくなっていることも分かった。

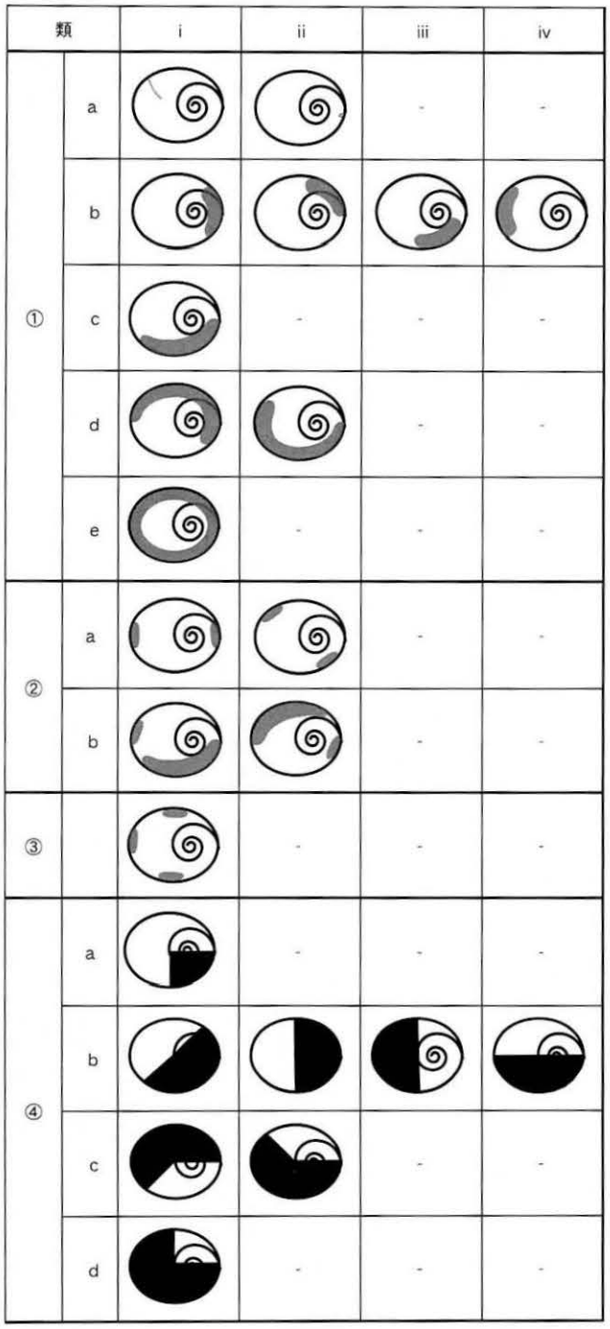
注1『沖縄県史　各論編2　考古』　二〇〇三　沖縄県教育委員会

表1．ヤコウガイ蓋層別集計表

	剥離																欠損									完形	合計
	①類										②類				③類		④類										
	a		b				c	d		e	a		b		−		a	b				c		d			
	i	ii	i	ii	iii	iv	−	i	ii	−	i	ii	i	ii	−		−	i	ii	iii	iv	i	ii				
Ⅷ	4	8		3					1	2	2		2		2		2	2	3	1			1	1	2		36
Ⅶ	1	9	3	5	2			2		1	2		5	6	4		3	1	2			2	3	3	3		57
Ⅵ	5	10	9	3	2	1	6		3	3	6	2	9	9	9		5	4	3				3	7			99
ⅤⅥ	2	1			1						1	1	2		1								2	2			13
Ⅴ		7	1	1					1		2	2						4	1					1			20
Ⅳ			1				4		4				6	1													16
Ⅲ		1	1				1		5		1		4								1			12			26
計	12	36	15	12	5	1	11	2	14	6	14	5	28	16	16		10	11	9	1	1	2	9	26	5		267



第1図　部位名称



第２図　ヤコウガイ蓋破損部位模式図

①類＝一方向からの剥離があるもの
　a ほぼ完形に近いもの
　　i 剥離はないが亀裂がみられるもの
　　ii 小さな剥離が見られるもの
　b 周縁の１／４程度の剥離が見られるもの
　　i 右端中央部に剥離があるもの
　　ii 右上に剥離がみられるもの
　　iii 右下に剥離が見られるもの
　　iv 左端に剥離が見られるもの
　c 周縁の１／２程度の剥離が見られるもの
　d 周縁の３／４程度の剥離が見られるもの
　　i 周縁の上部が剥離しているもの
　　ii 周縁の下部が剥離しているもの
　　e 周縁全体に剥離が及ぶもの
②類＝二方向からの剥離があるもの
　a 対角に同じような剥離が見られるもの
　　i 左右対称に剥離がみられもの
　　ii 下に近い場所に剥離が見られるもの
　b 非対称で一方向の剥離面が大きいもの
　　i 一方の剥離が周縁の下部に至るもの
　　ii 剥離が周縁の下部に至らないもの
③類＝三方向からの剥離が見られるもの
④類＝欠損しているもの
　a 周縁の１／４が欠けたもの
　b 周縁の１／２が欠けたもの
　　i 右上から左下が欠けたもの
　　ii 右半分が欠けたもの
　　iii 左半分が欠けたもの
　　iv 下半分が欠けたもの
　c 周縁の３／４が欠けたもの
　　i 周縁の上部が欠けているもの
　　ii 周縁の下部が欠けているもの
　d 破片。残存部が周縁の１／４しかないもの

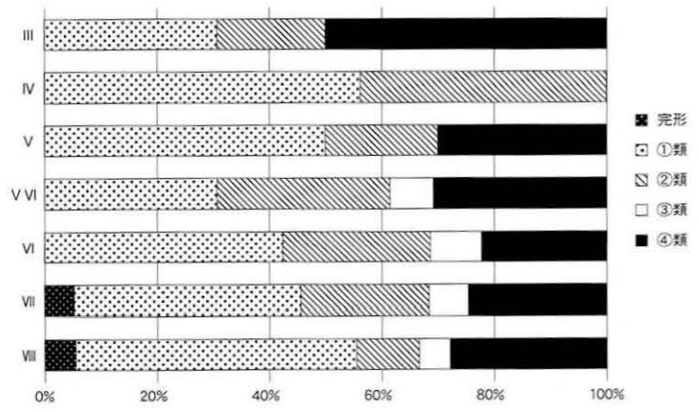
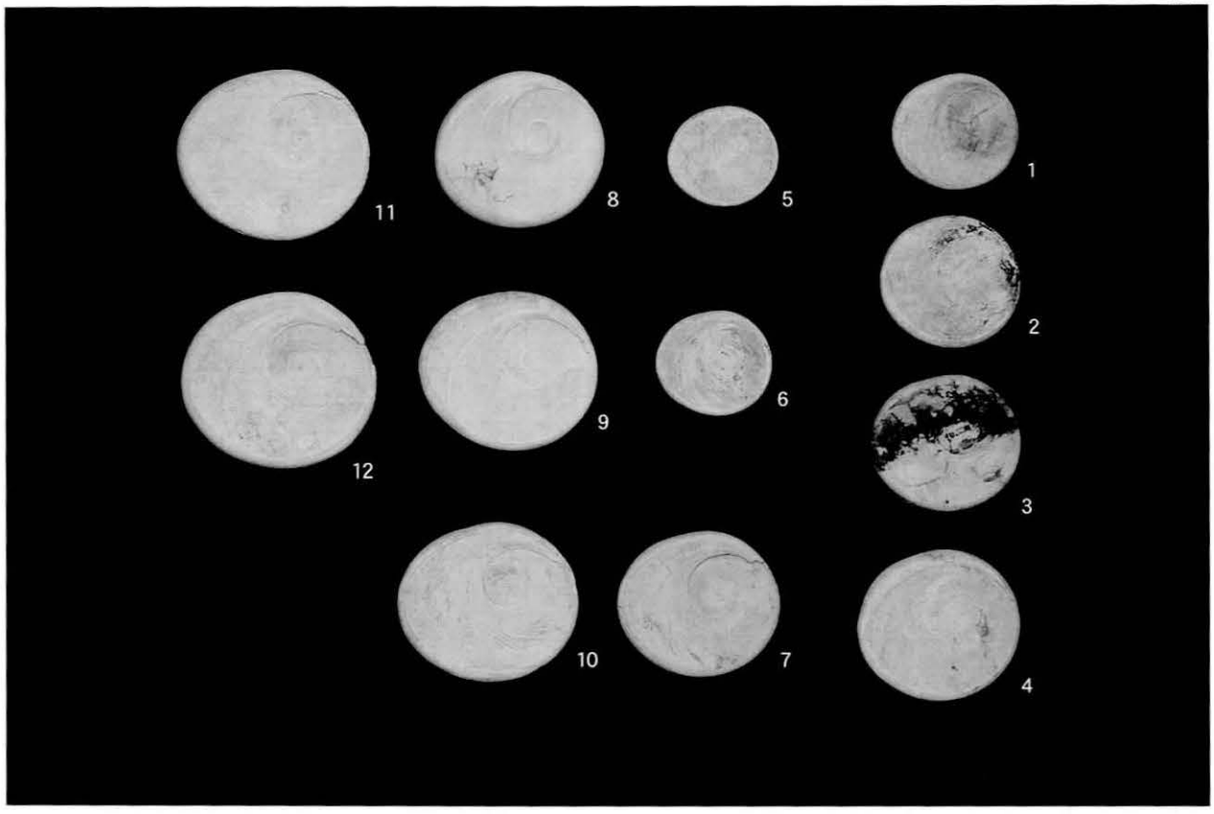


表３．層別類出土状況グラフ

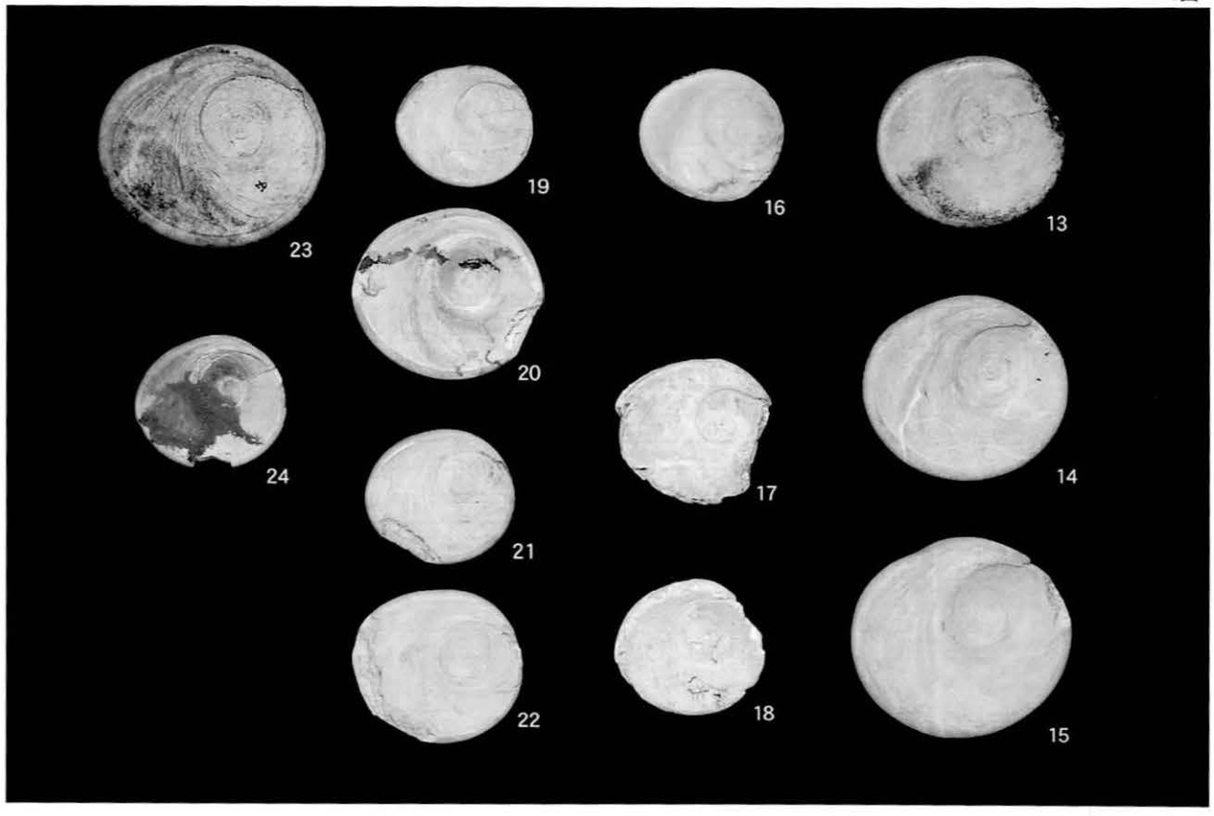
表２．ヤコウガイ蓋層別殻幅計測値

	最小値	最大値	平均
Ⅷ	3.9	7.9	5.7
Ⅶ	3.4	9.0	6.8
Ⅵ	3.6	8.7	7
Ⅴ・Ⅵ	3.5	8.4	6.3
Ⅴ	4.3	8.9	7.3
Ⅳ	7.7	9.3	8.4
Ⅲ	6.5	8.8	8.1

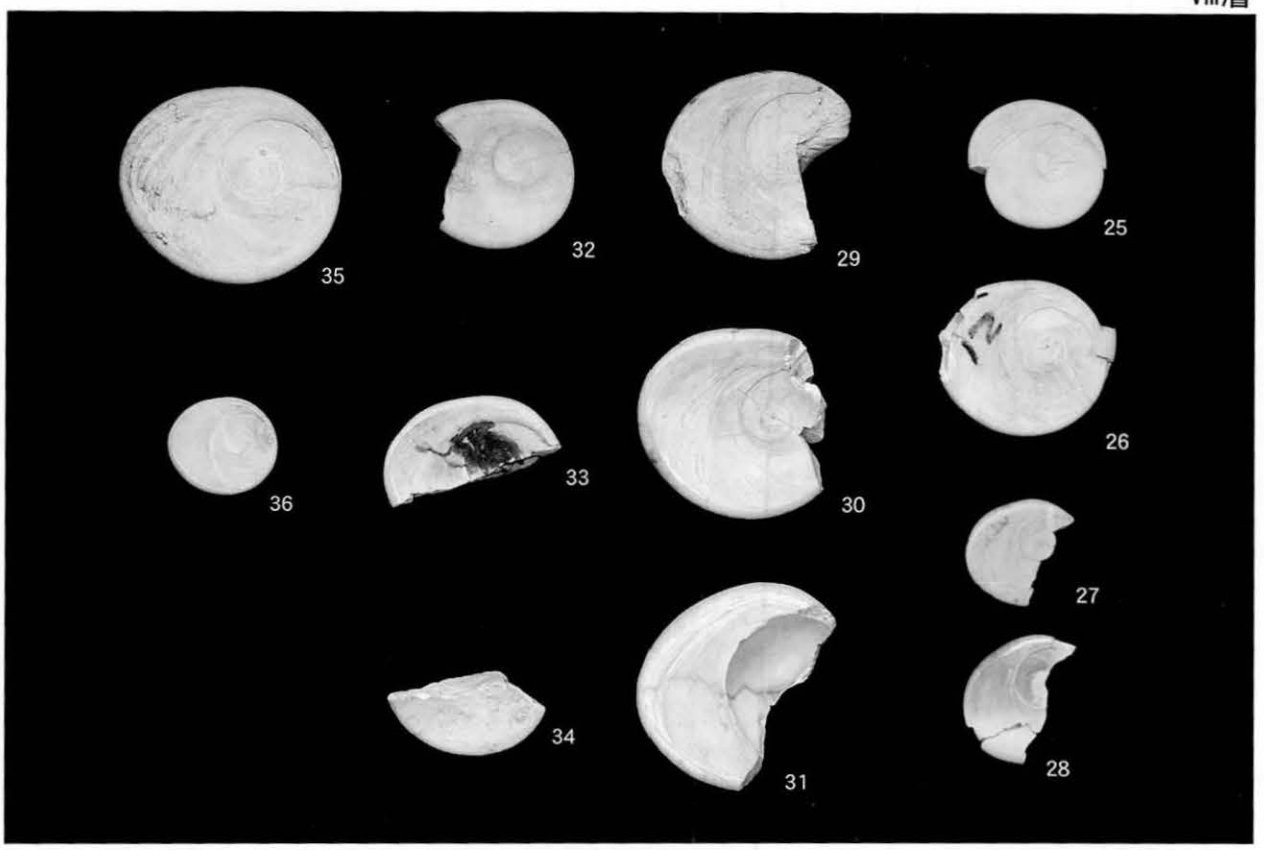
VIII層



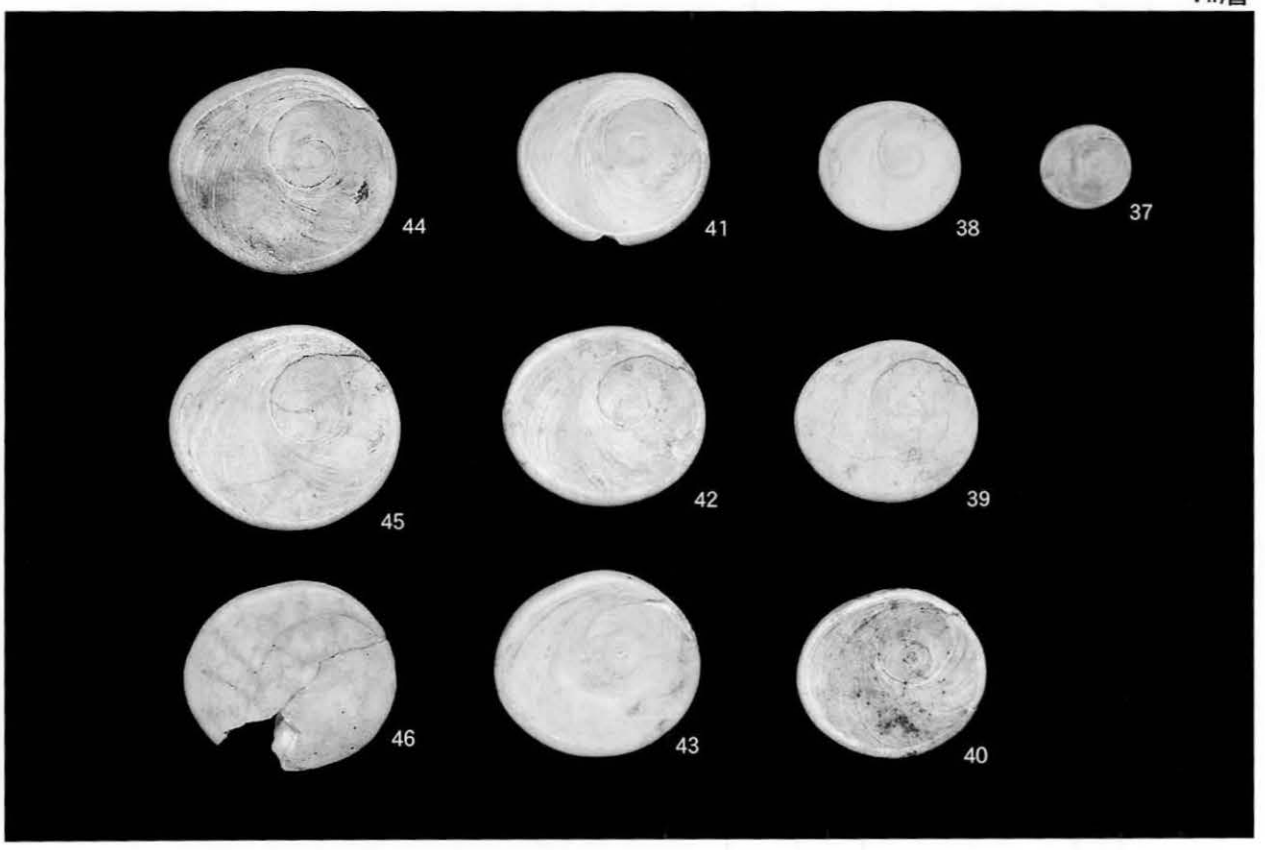
VIII層



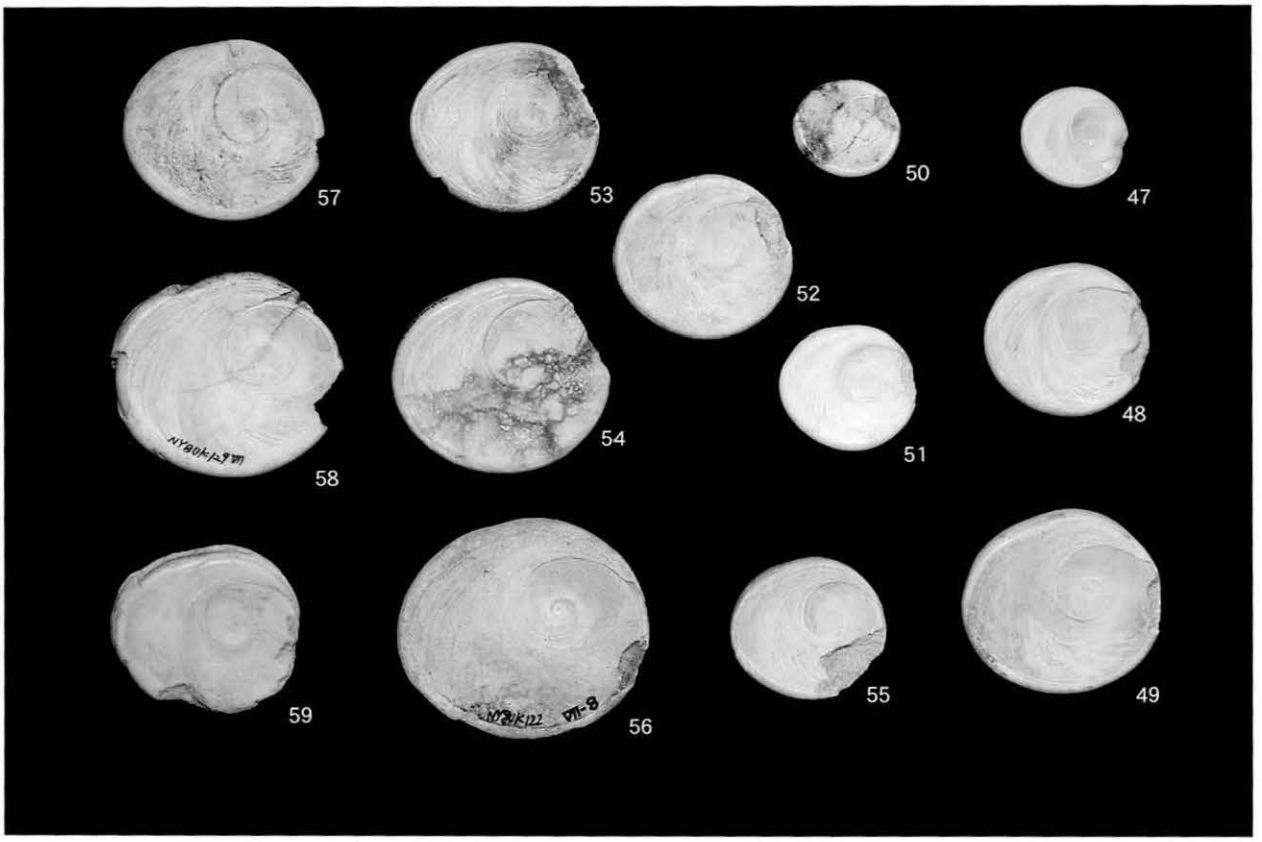
VIII層



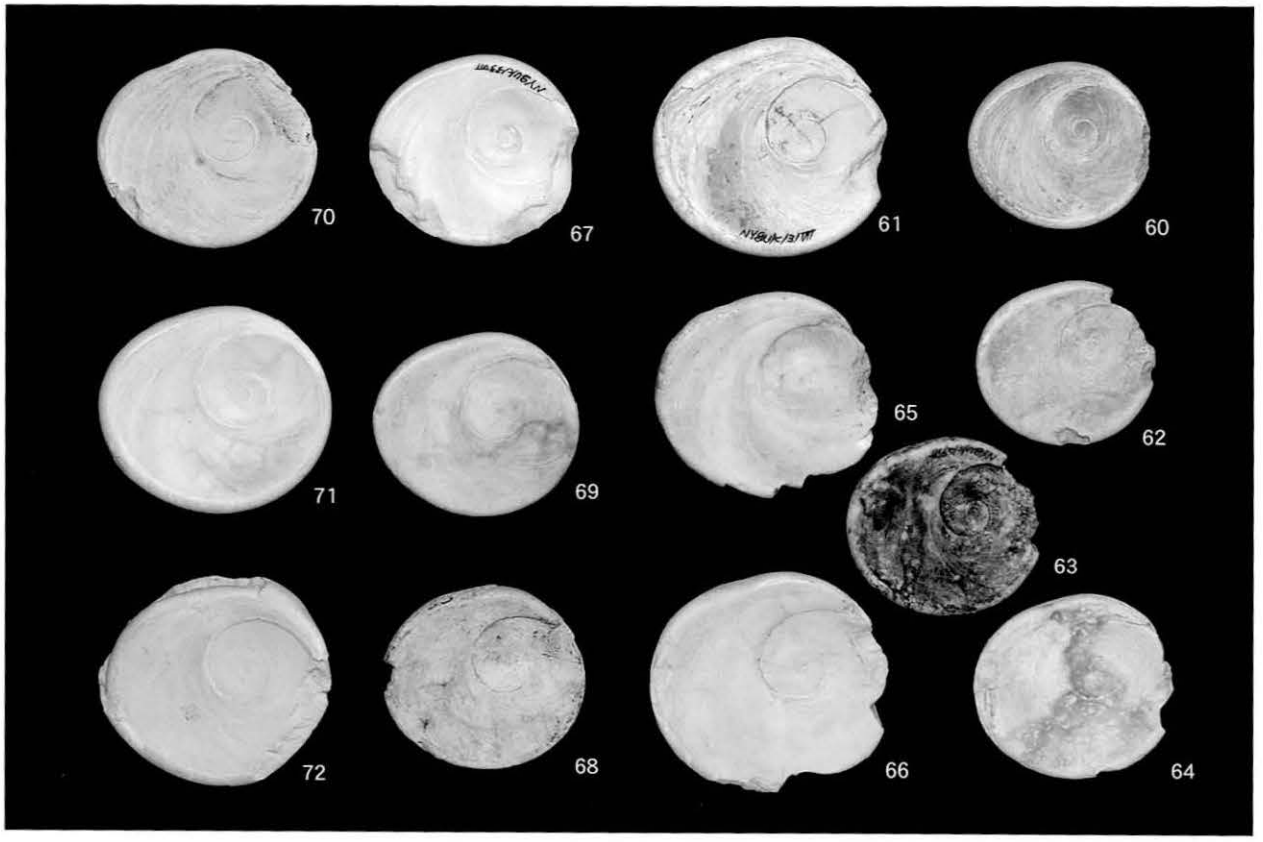
VII層



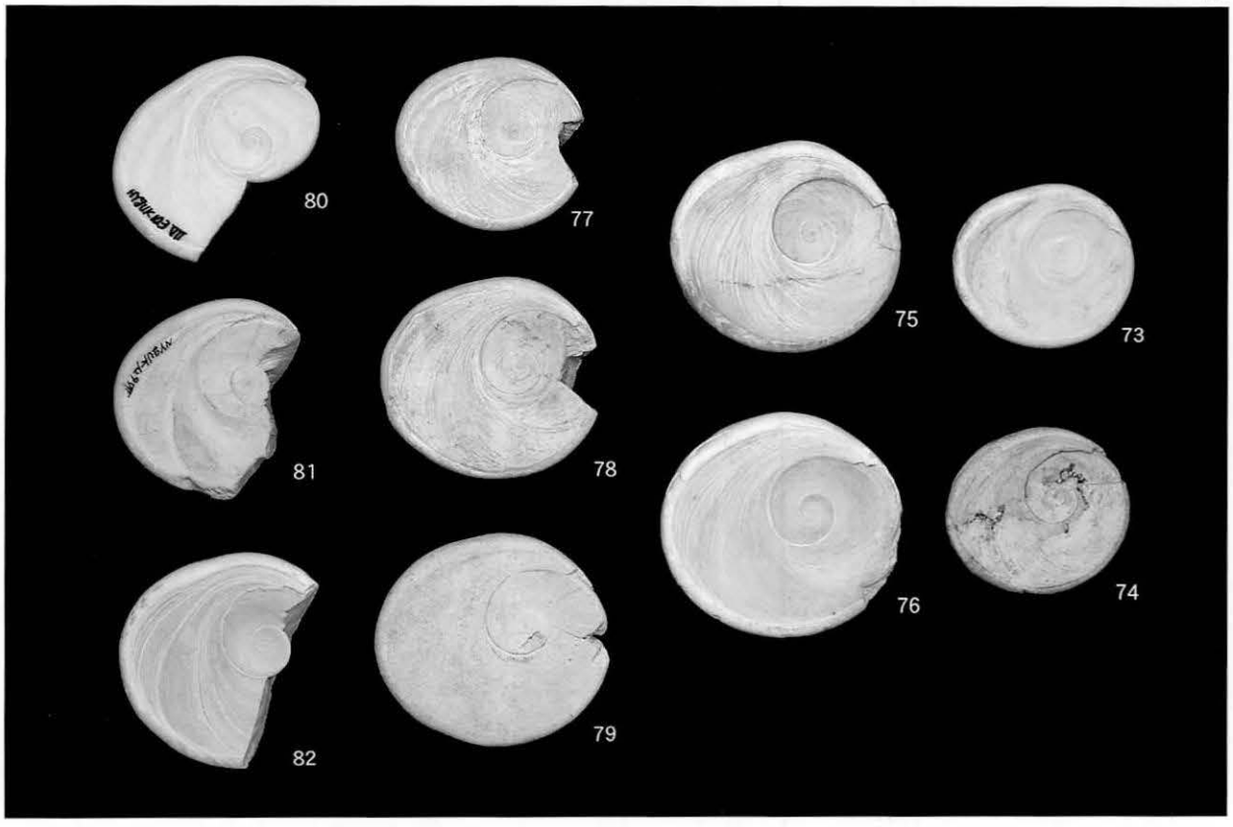
VII層


57
53
50
47
52
58
54
51
48
59
56
55
49

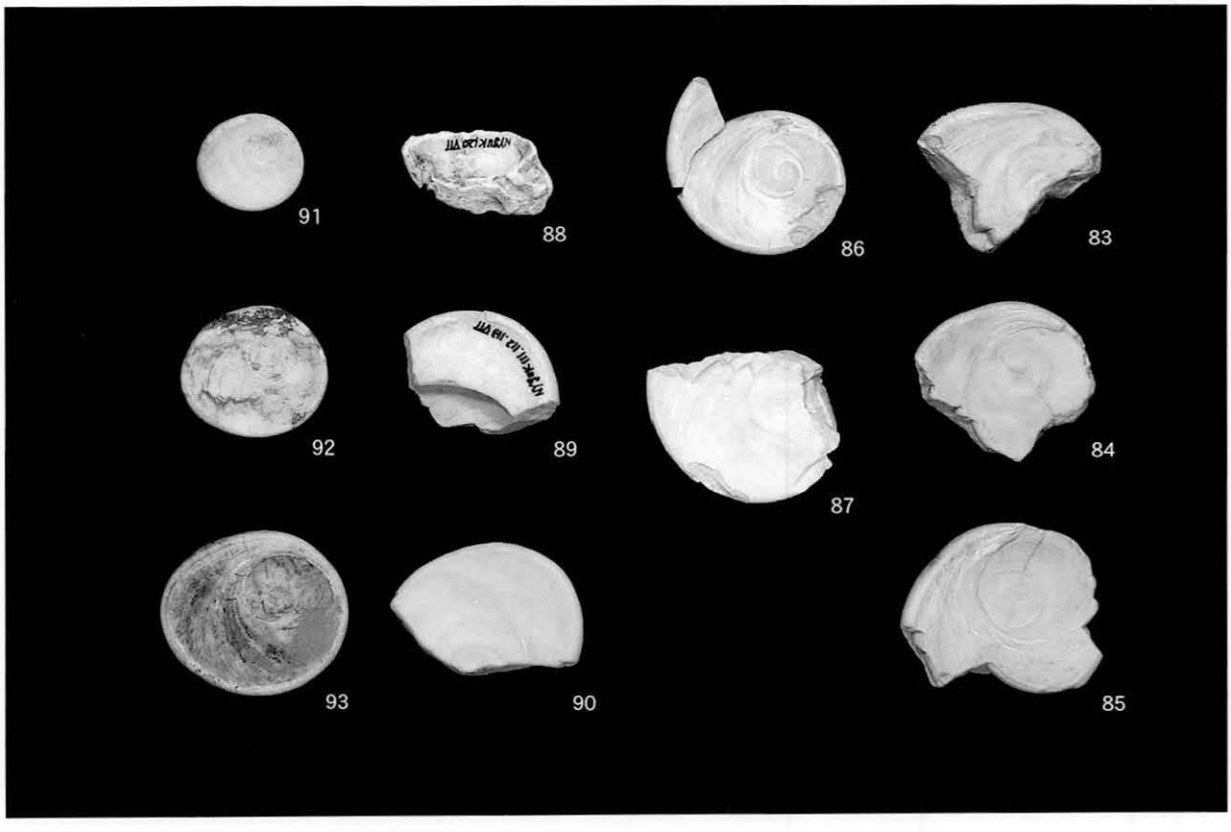
VII層


70
67
61
60
71
69
65
62
63
72
68
66
64

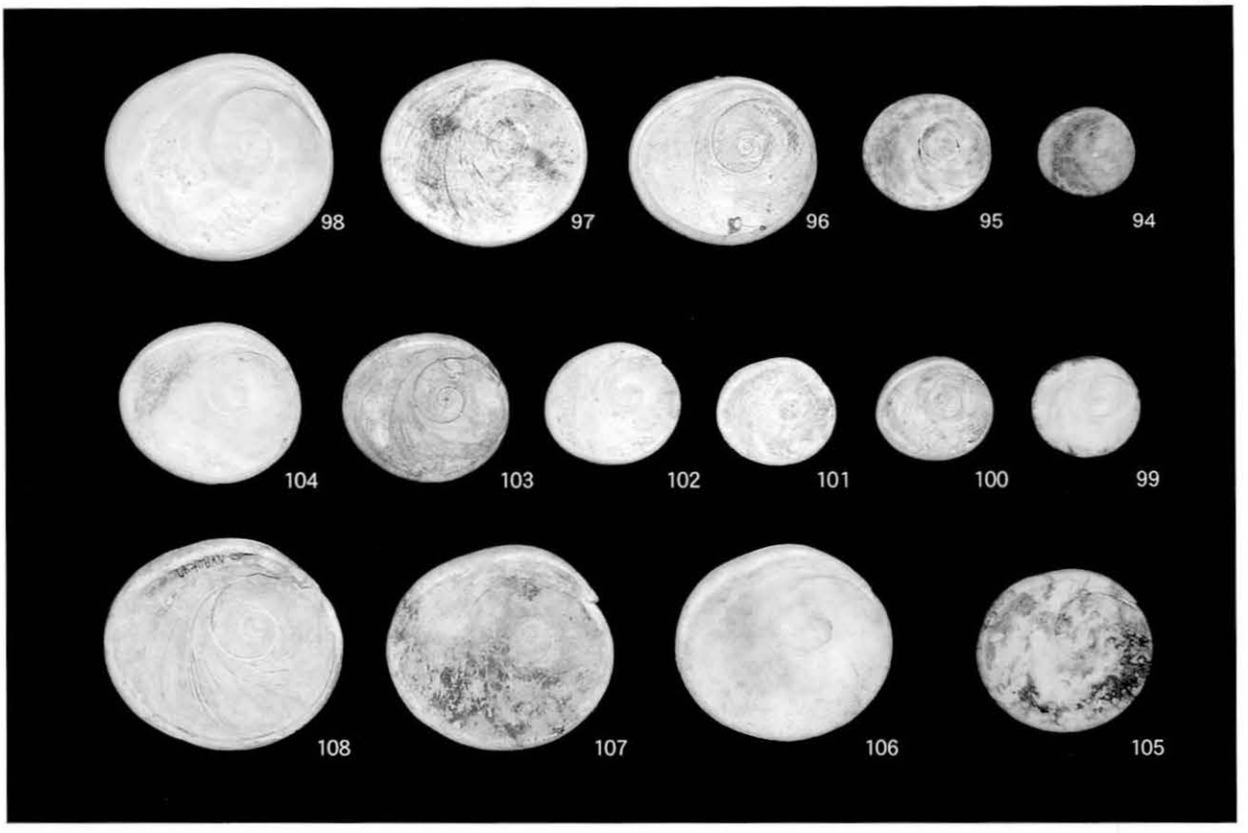
VII層



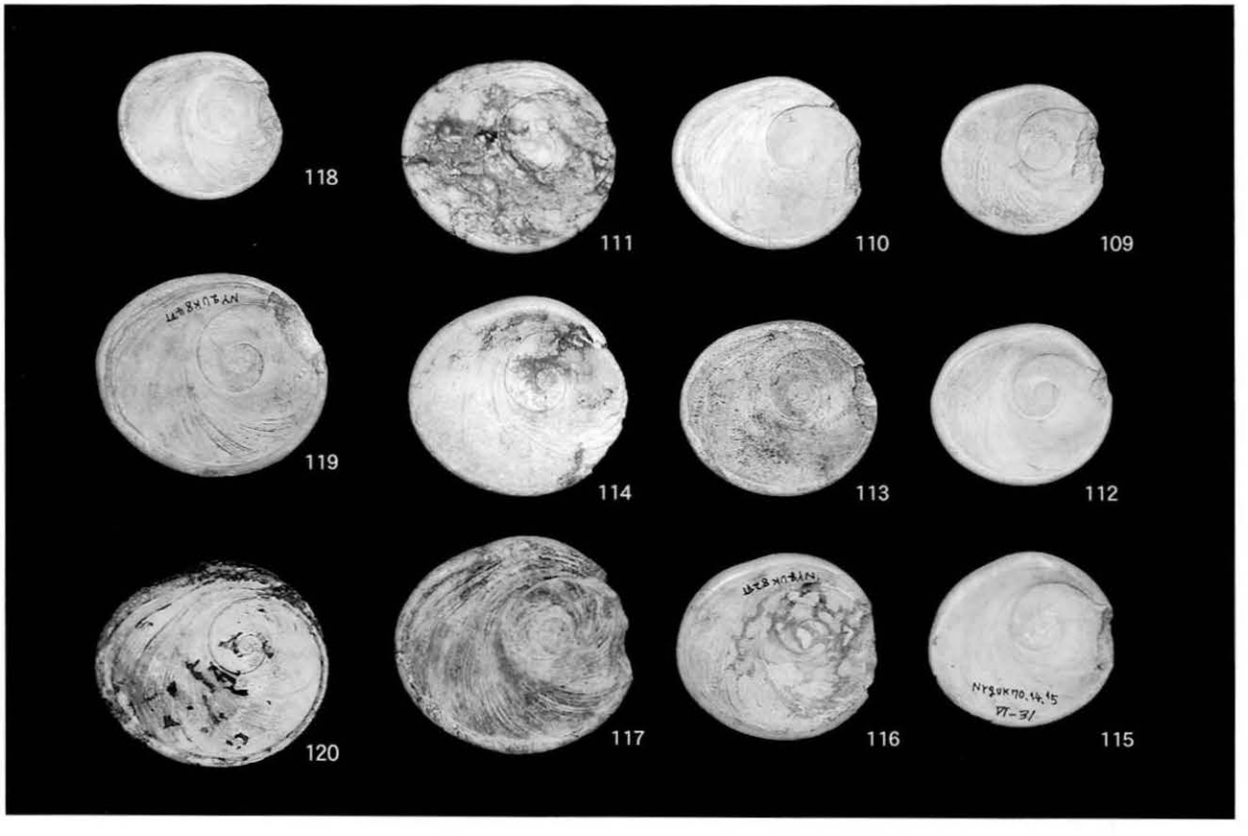
VII層



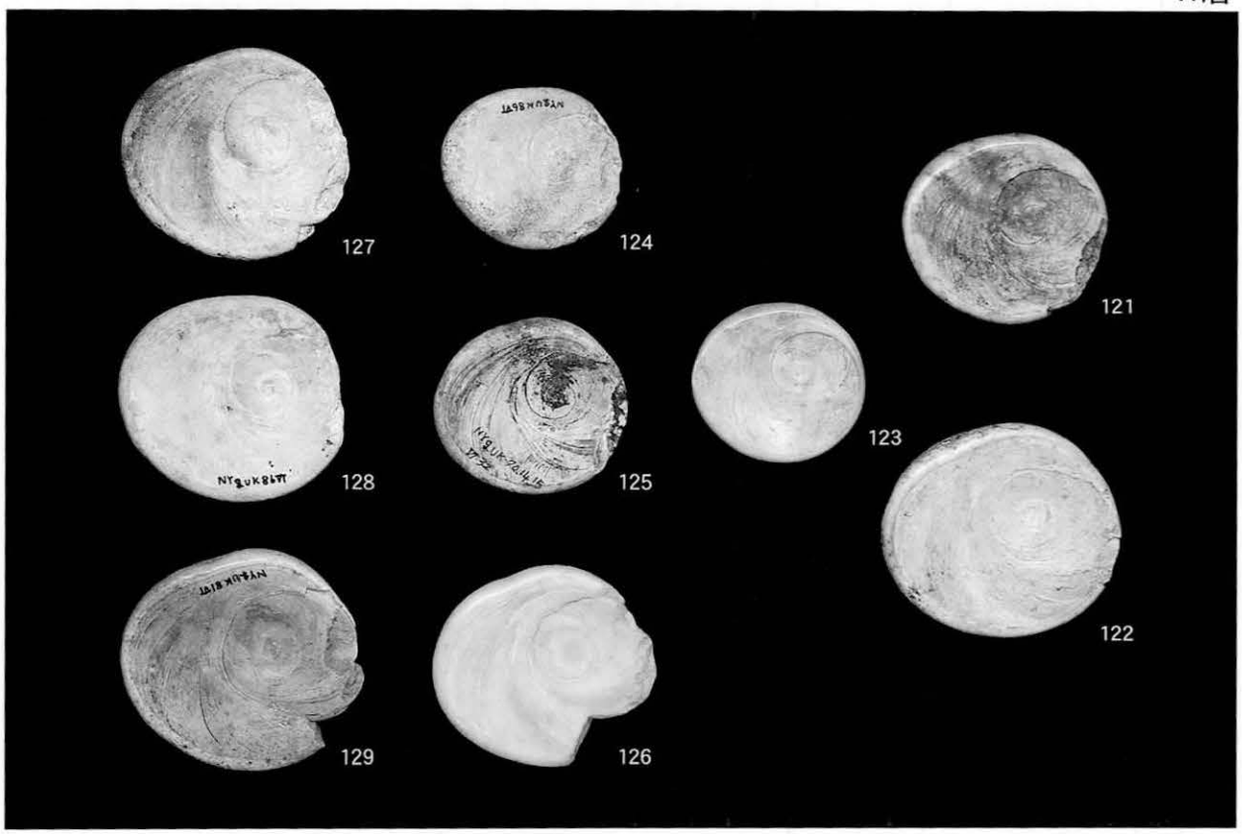
VI層


98
97
96
95
94
104
103
102
101
100
99
108
107
106
105

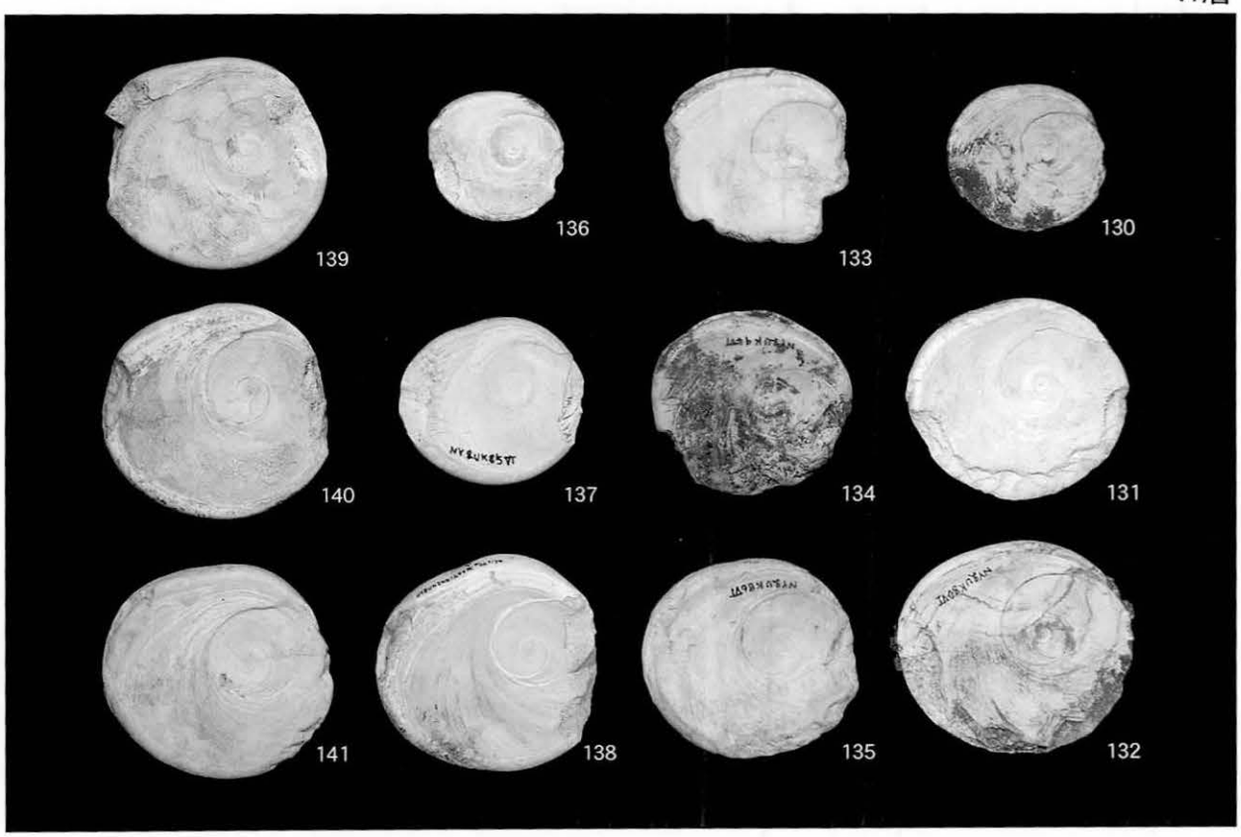
VI層


118
111
110
109
119
114
113
112
120
117
116
115

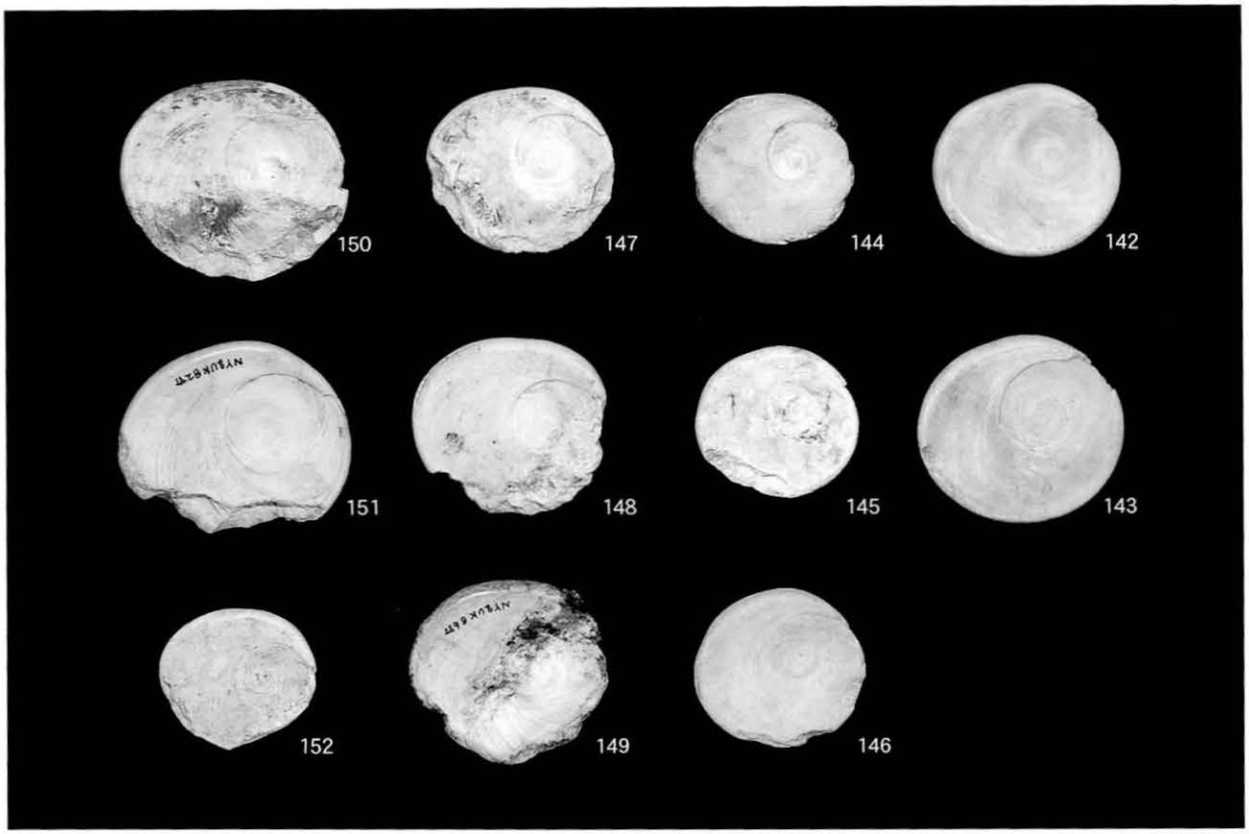
VI層


127
124
121
128
125
123
122
129
126

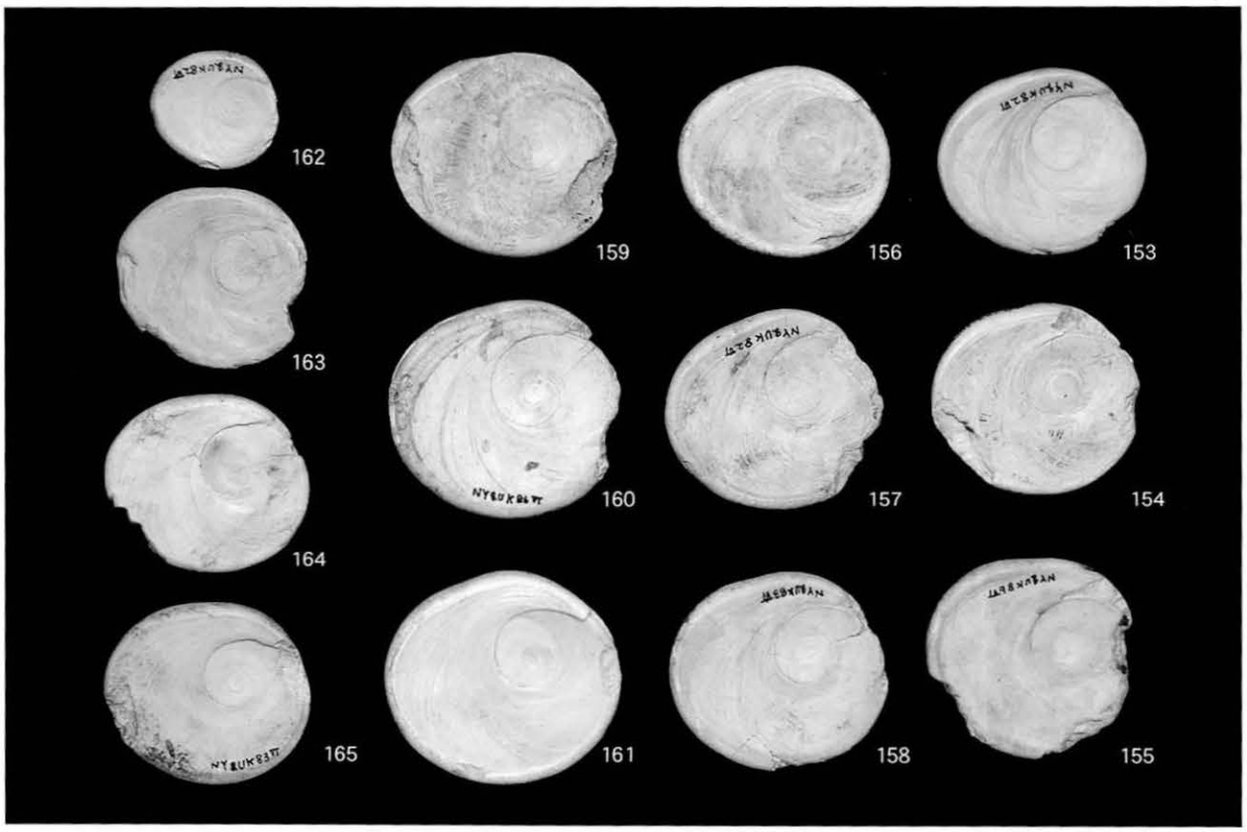
VI層


139
136
133
130
140
137
134
131
141
138
135
132

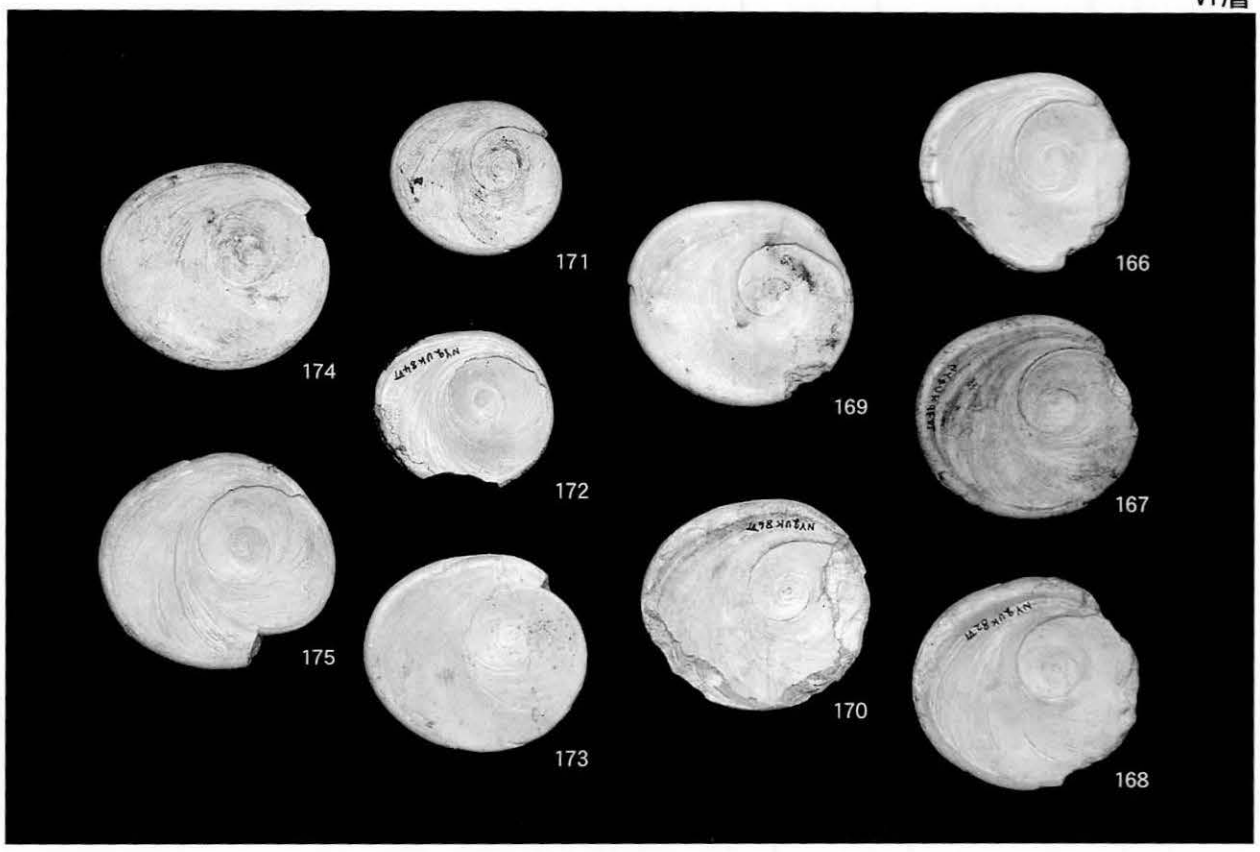
VI層


150
147
144
142
151
148
145
143
152
149
146

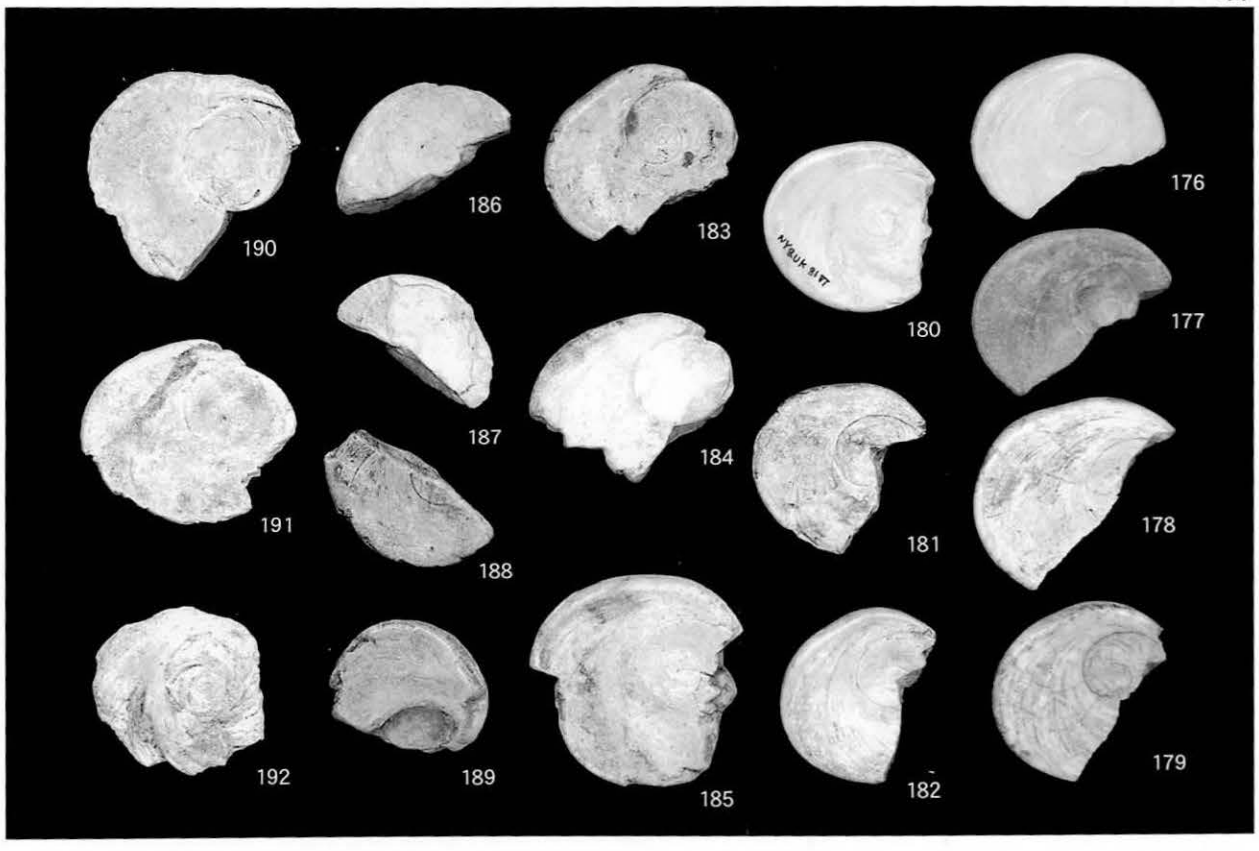
VI層


162
159
156
153
163
160
157
154
164
165
161
158
155

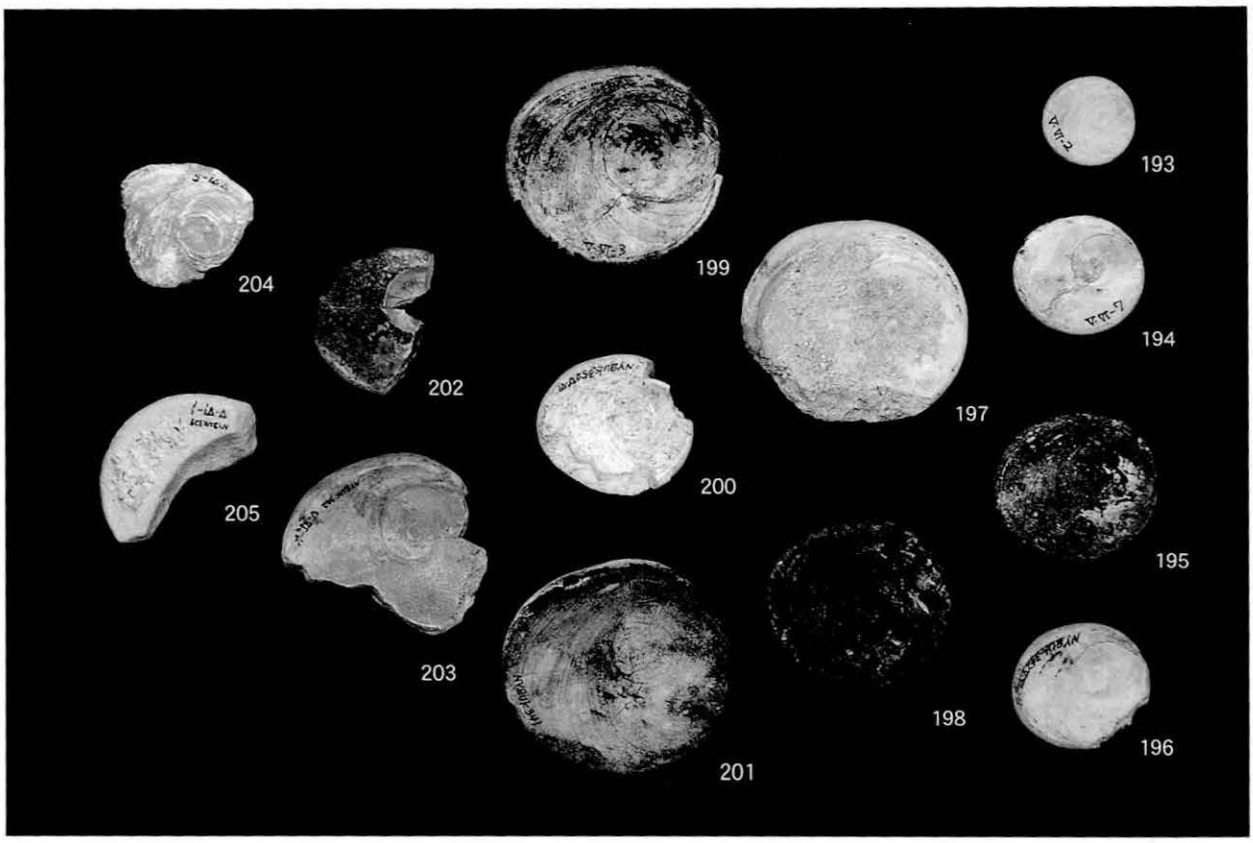
VI層


171
166
174
169
172
167
175
170
173
168

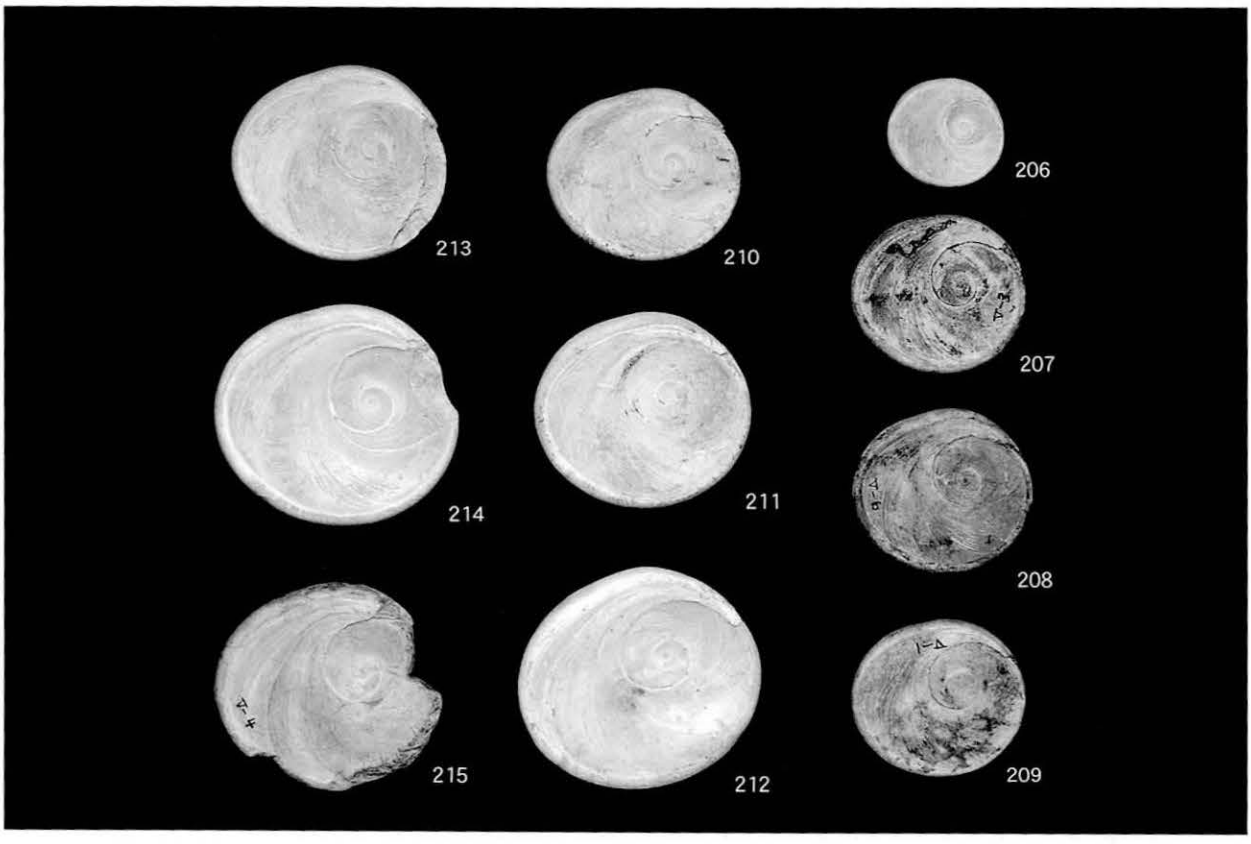
VI層


190
186
183
176
180
177
187
184
191
181
178
188
192
189
185
182
179

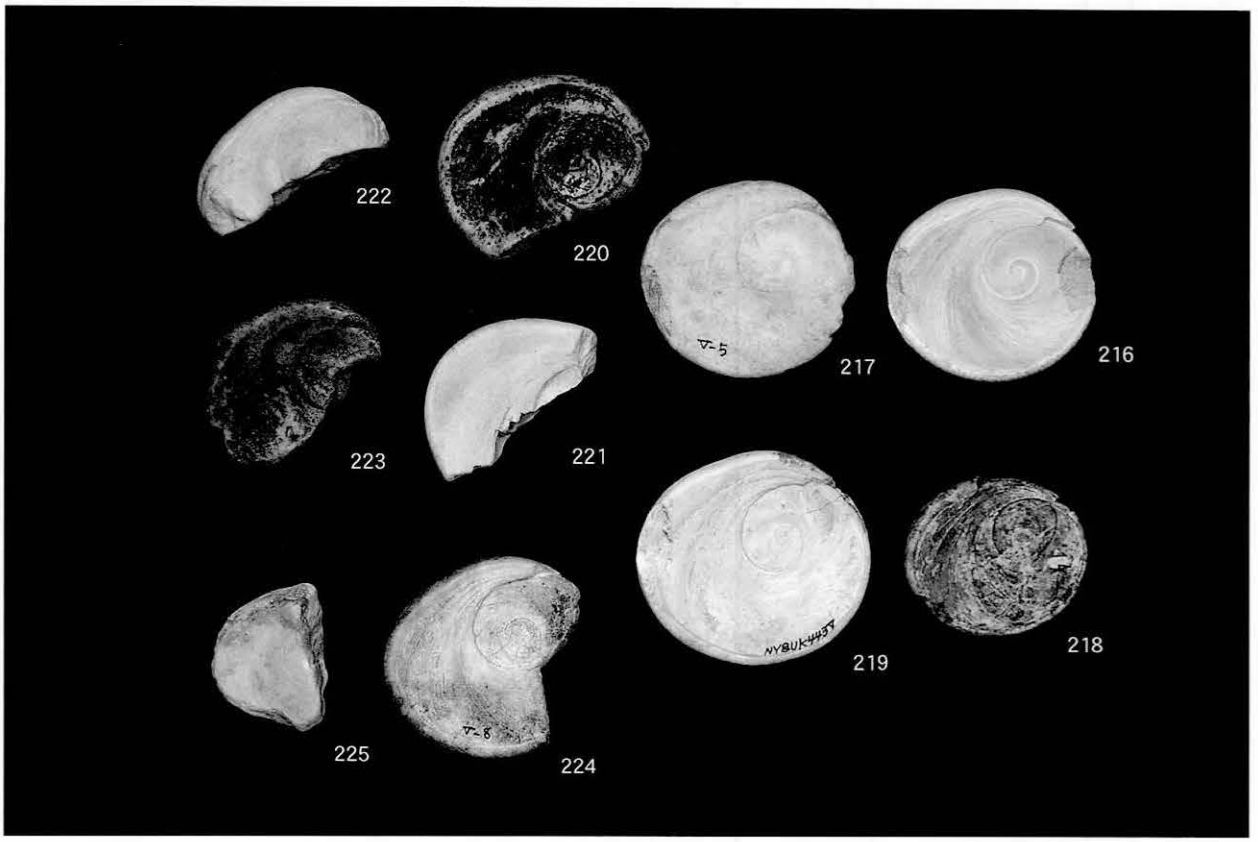
V・VI層


193
199
204
194
202
197
200
205
195
203
198
196
201

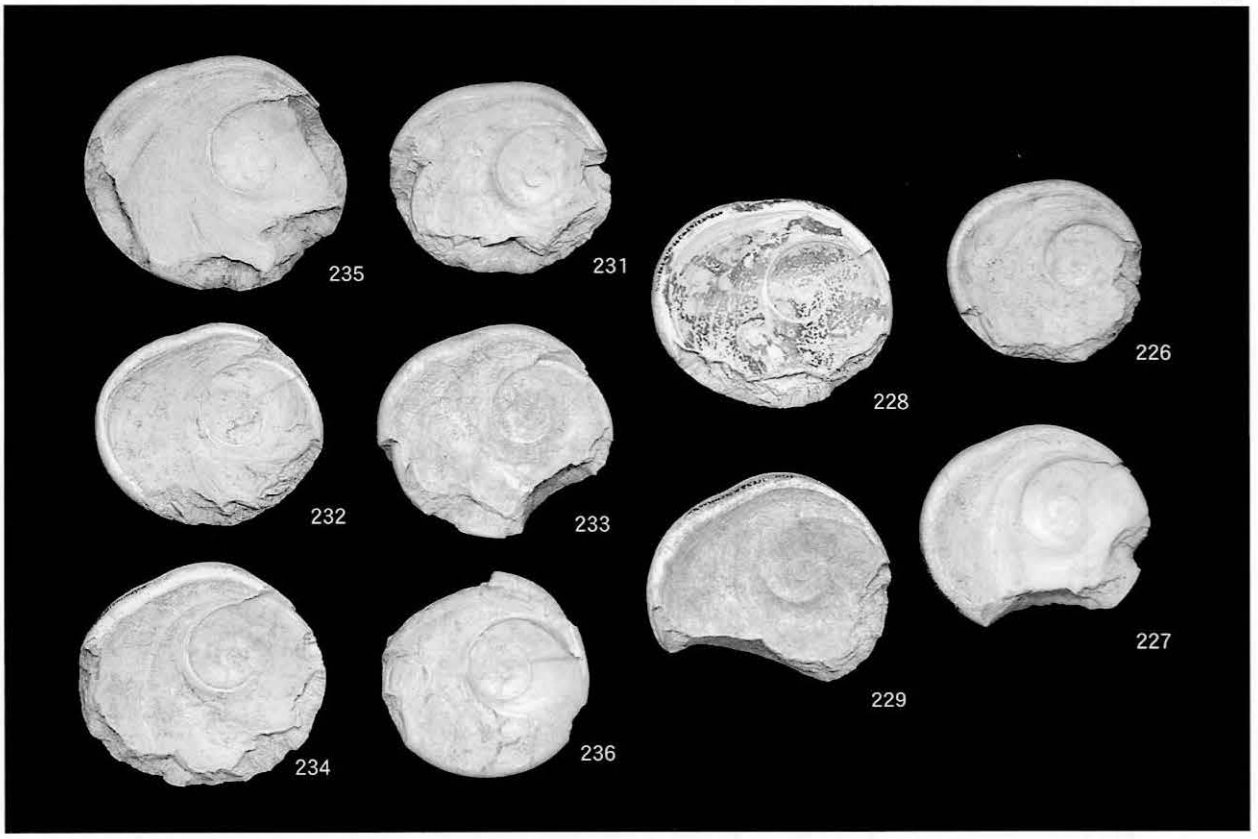
V層


206
213
210
207
214
211
208
215
212
209

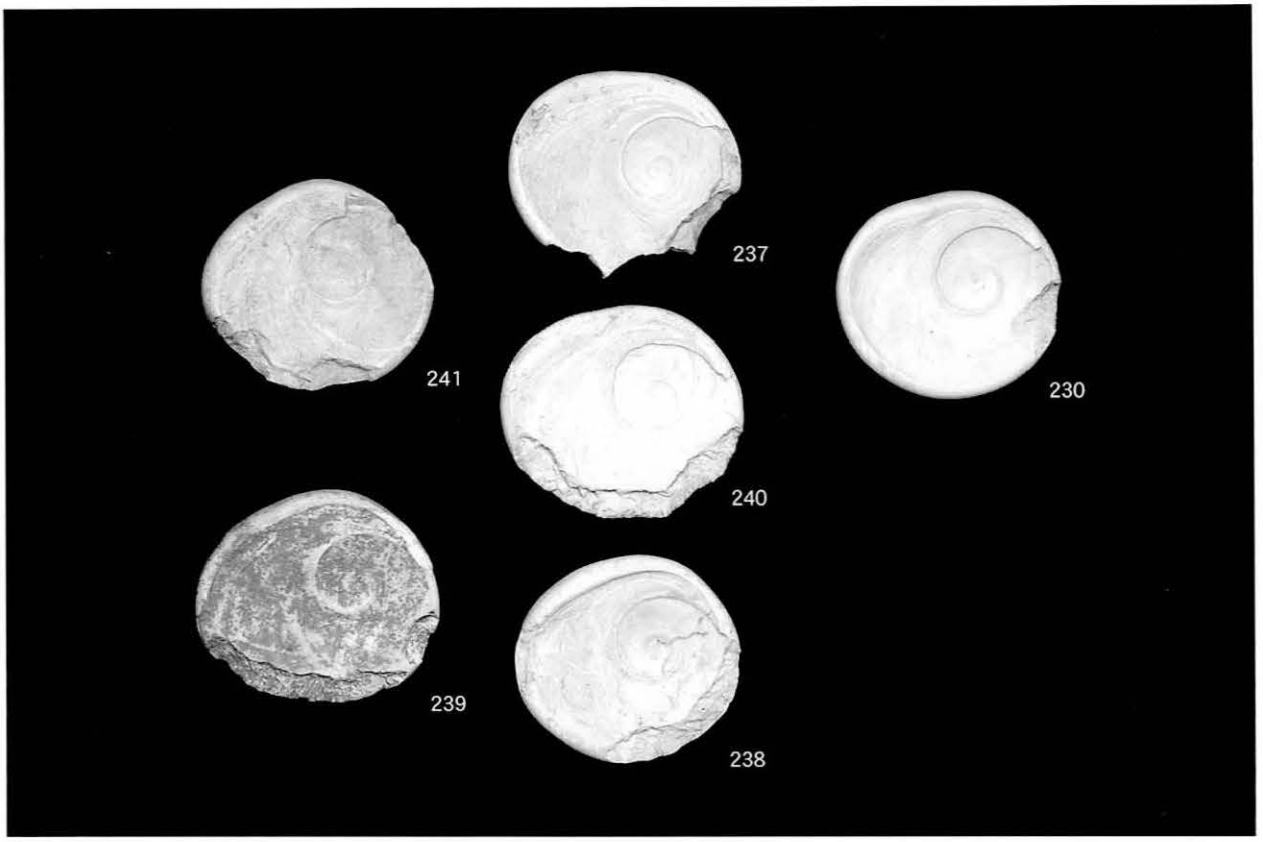
V層


222
220
V-5
217
216
223
221
219
218
225
V-8
224

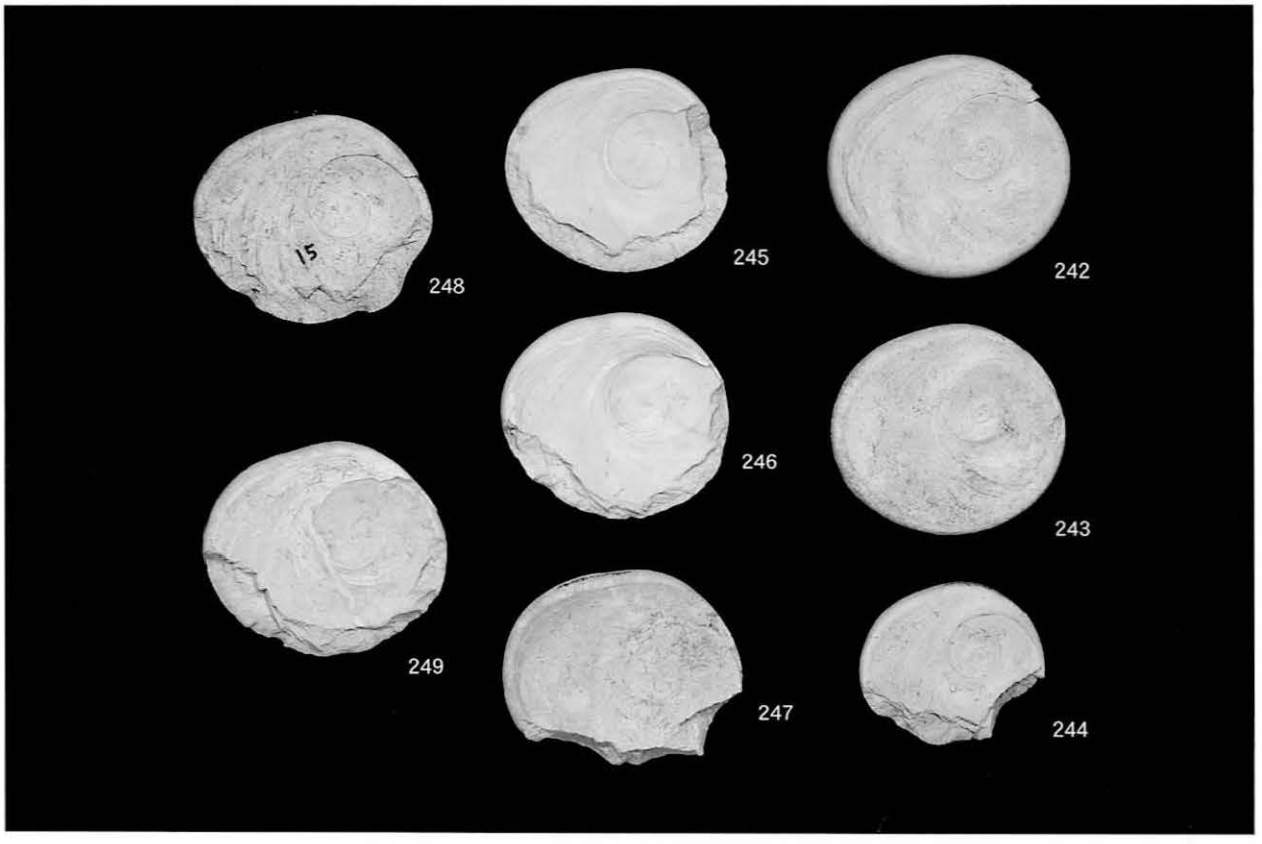
IV層

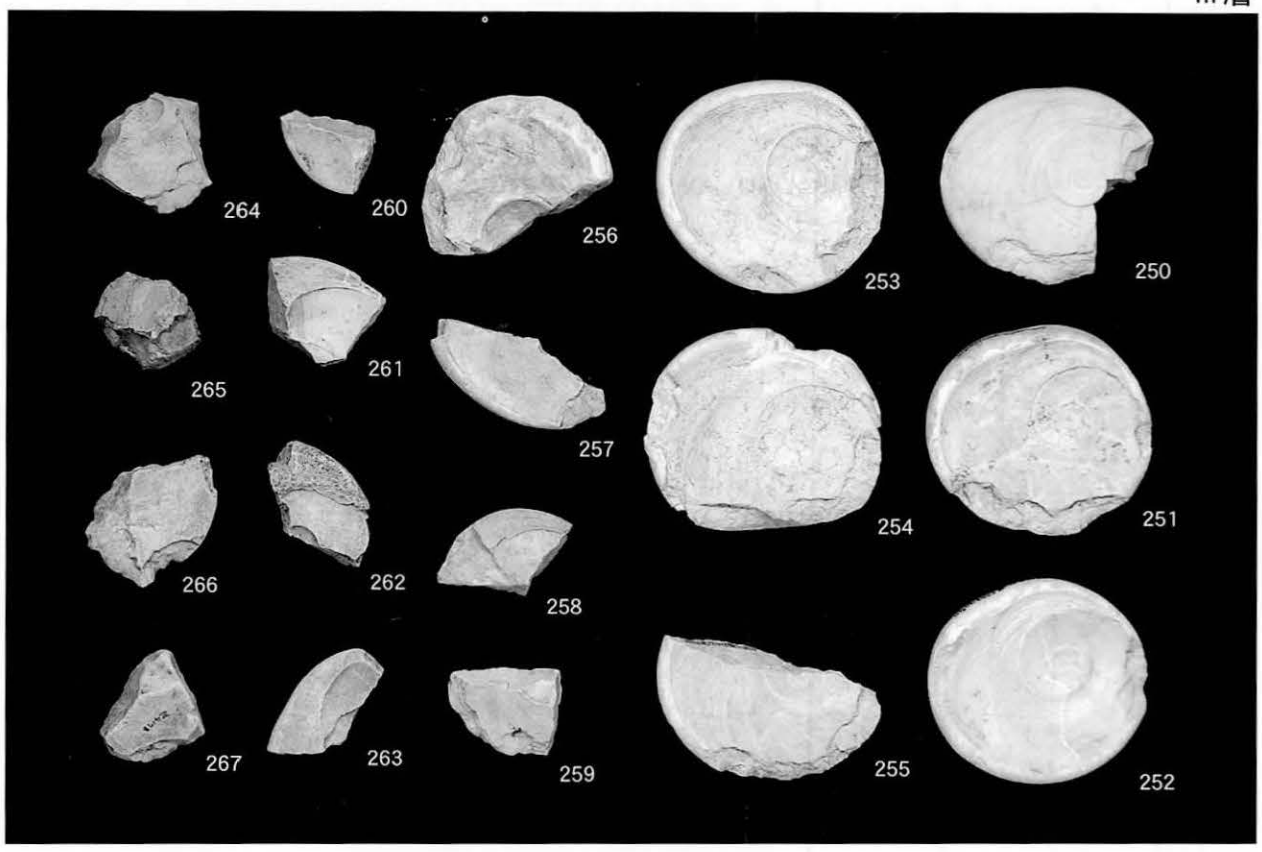

235
231
228
226
232
233
229
227
234
236

IV層



III層




264
260
256
253
250
265
261
257
254
251
266
262
258
267
263
259
255
252

八、ゴホウラ

製品として出土したもののみならず製品を作る段階で残ったと思われる残存部位や加工のあとがみられない完形も含め、ゴホウラの破損形態を整理し観察することによって各時代（層）にその利用の仕方などに違いが見えないか考えてみた。

今回出土したゴホウラの層別出土状況を表1に示す。ゴホウラの破損形態分類方法は第1図に示す。腕輪などの「製品系(A)」（以下（A）とする）と、製品ではないが何らかの加工を施される「破片系（B）」（以下（B）とする）と、完形もしくはゴホウラ自体の形をとどめた破損品を「破損系(C)」（以下（C）とする）とした。

今回遺物として取り上げたゴホウラ九一点の内訳は、（A）が三四点、（B）が三十点、（C）が二七点である。次に系ごとに見ていく。

今回の資料の中で最も出土量の多かったものは（A）三四点で、出土の内訳は完成品の破損（a）が十四点、製作段階の破損（b）十五点、製作段階が（c）三点、不明が二点出土している。表2で示すように、層別にみるとⅦ層からⅥ層では製作段階の破損（b）と思われるものが多いのに対し、Ⅳ層から上層では、完成品の破損（a）と思われるものが増える。

（A）の出土部位は背面が二一点、腹面が十一点、不明（d）が二点。層別に見ても、大きな違いを見ることはできなかった。

（B）は三十点出土している。内訳は、背面十二点、腹面二点、外唇部十三点、不明三点である。層別にみると、Ⅶ層では外唇部が一点のみの出土。Ⅵ層では背面五点、腹面五点出土している。Ⅴ・Ⅵ

表2．ゴホウラ製品の状態層別出土状況

	a	b	c	d	合計
Ⅶ	1	4	1	0	6
Ⅵ	1	8	0	0	9
Ⅴ・Ⅵ	1	0	0	0	1
Ⅴ	1	0	0	0	1
Ⅳ	2	2	1	0	5
Ⅲ	3	1	1	0	5
かく乱	5	0	0	2	7
合計	14	15	3	2	34

表1．ゴホウラの層及び系別出土状況

	A 製品系	B 破片系	C 破損系	合計
Ⅶ	6	1	0	7
Ⅵ	9	10	2	21
Ⅴ・Ⅵ	1	1	0	2
Ⅴ	1	0	0	1
Ⅳ	5	2	5	12
Ⅲ	5	14	18	37
かく乱	7	2	2	11
合計	34	30	27	91

表3．ゴホウラの部位別出土状況

		Ⅶ	Ⅵ	Ⅴ・Ⅵ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ	かく乱	合計
製品系（A）	背面	3	7	1	1	3	3	3	21
	腹面	3	2			2	2	2	11
	外唇								0
	その他							2	2
計		6	9	1	1	5	5	7	34
破片系（B）	背面		5	1			4	2	12
	腹面					1	1		2
	外唇	1	5				7		13
	その他					1	2		3
計		1	10	1		2	14	2	30

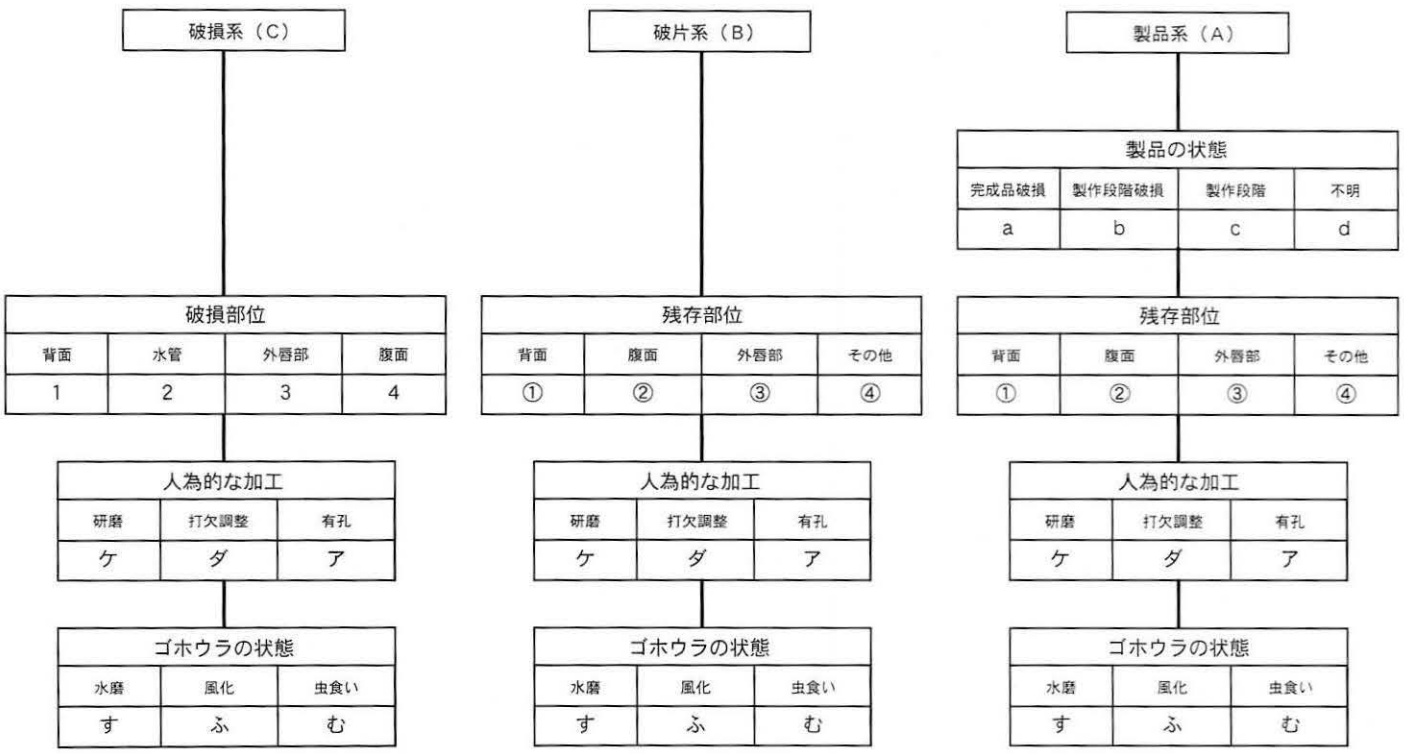
層では背面が一点のみの出土。Ⅳ層では腹面一点、部位不明が一点出土。Ⅲ層になると（B）の出土が最も多く背面四点、腹面一点、外唇部七点、部位不明二点の計十四点出土した。

Ⅶ層からⅤ・Ⅵ層では外唇部や背面部の破片が出土しているのに対し、Ⅲ層では腹面部の破片も数点出土していることがわかった。

次に（B）の加工の状態を見てみると、Ⅶ層からⅥ層には打欠のみの加工であったのに対し、Ⅳ層から上層では丁寧な打欠や研磨が顕著なものが数点出土しており、特に腹面部の破片には全てに孔が穿かれている。

（C）は完形五点を含む二七点が出土。加工の状態を見ると、背面部に孔を穿つものが十点、腹面部に加工が見られるものが四点、背面部が欠如しているものが六点。

Ⅵ層で出土した二点は破損しているものの加工のあとは確認できなかった。Ⅳ層では背面部破損が一点、背面に孔を穿つものが三点、内、水管部近くに孔を持つものが二点、背面中央部に孔を穿つものが一点出土、内二点は腹面部にも加工のあとがみられた。Ⅲ層では集積から出土したゴホウラが九点出土。内訳は完形が六点、水管部が破損したものが一点出土。残り二点は背面中央部に孔を穿つものであった。集積以外から出土したゴホウラでは背面部が欠如しているものが四点（内一点が腹面にも加工が見られる）。腹面部が欠如しているものや加工のあとが見られるものが二点。出土量も少なく人工的な加工が確認できなかったⅥ層に対してⅣ層とⅢ層から出土したゴホウラは人工的な加工がみられるものが多く出土している。



第１図．ゴホウラ破損形態分類

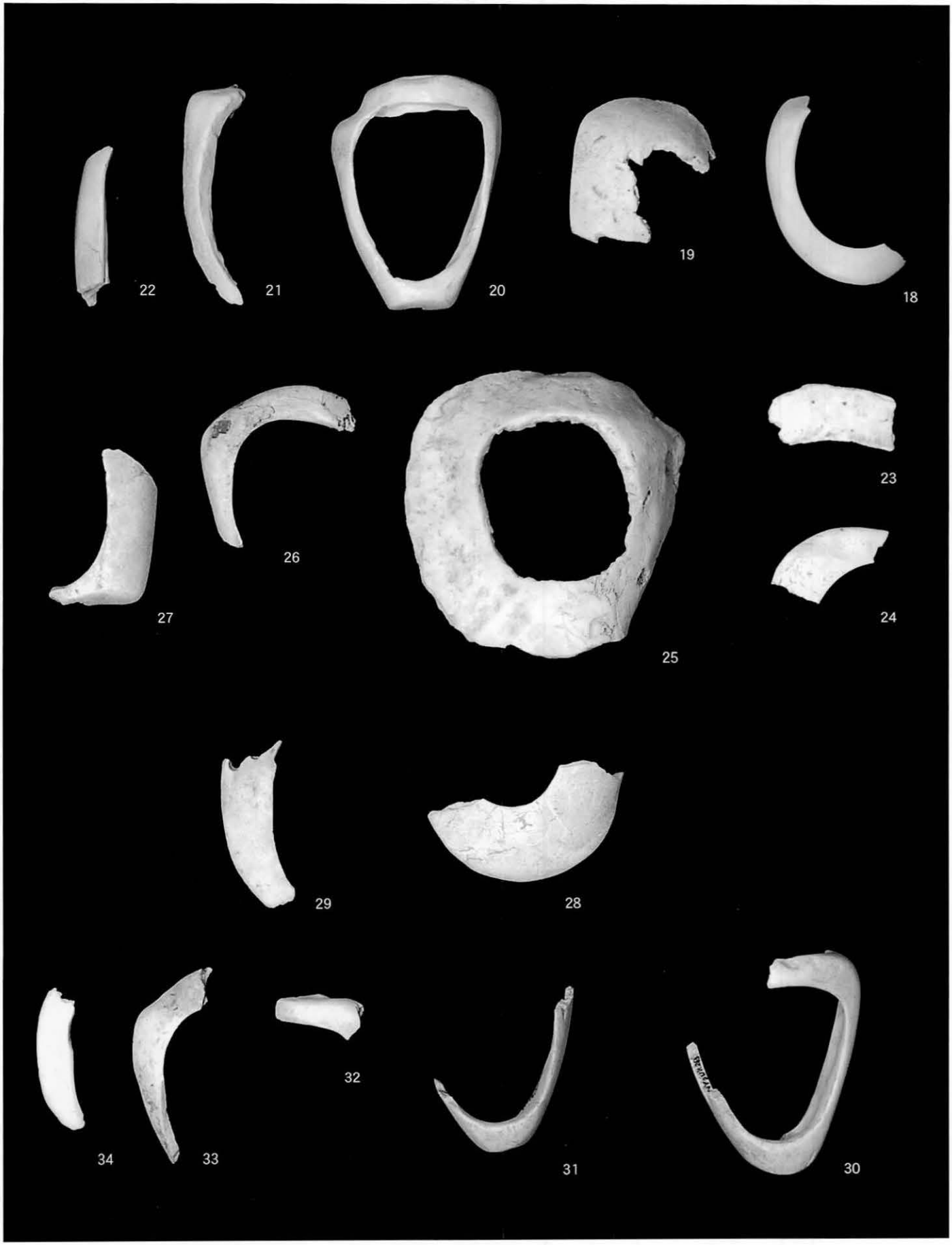
A：製品系
□製品の状態
a：完成品が破損したもの
b：製作段階で破損したと思われるもの
c：製作段階途中と思われるもの
d：不明。
□残存部位（使用面）
①：背面使用
②：腹面使用
③：外唇使用
④：不明

B：破片系（製品製作過程に出たと思われる破片）
□残存部位
①：背面
②：腹面
③：外唇
④：不明

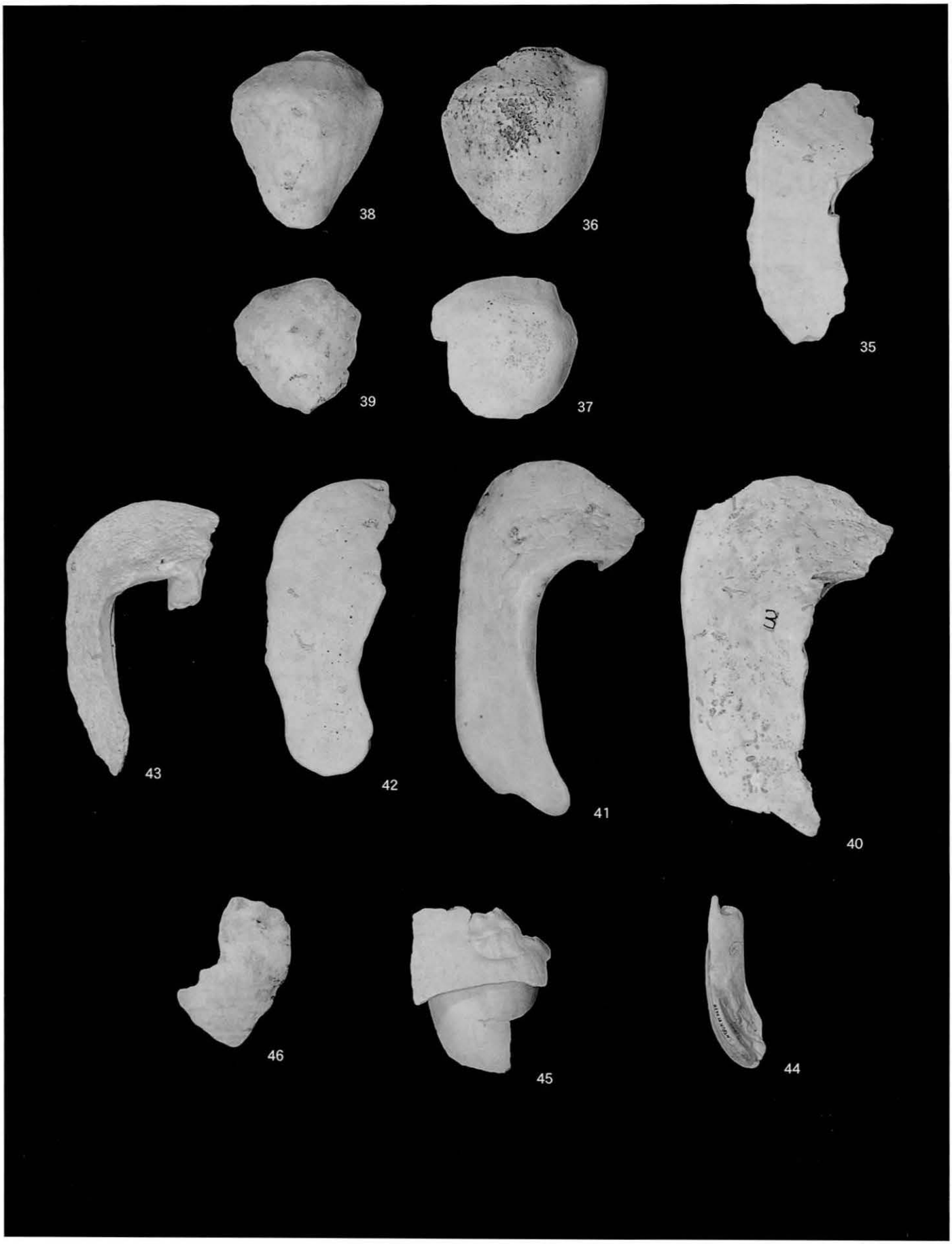
C：破損系（ゴホウラ完形及び原型をとどめているもの）
□破損部位
1：背面破損
2：水管部破損
3：外唇部破損
4：腹面部破損

A、B、Cに共通する分類
□加工の種類
ケ：研磨面がみられるもの
ダ：打欠調整がみられるもの
ア：孔を穿つもの
□貝の状態
す：水磨を受けているもの
ふ：風化しているもの
む：虫食いがあるもの
※虫食いについては、外側と内側に分け、その虫食いの状態を次のように記号化した
△：一部もしくはわずかに虫食いがあるもの
○：全体的に虫食いがあるもの
●：虫食いがかなりひどいもの

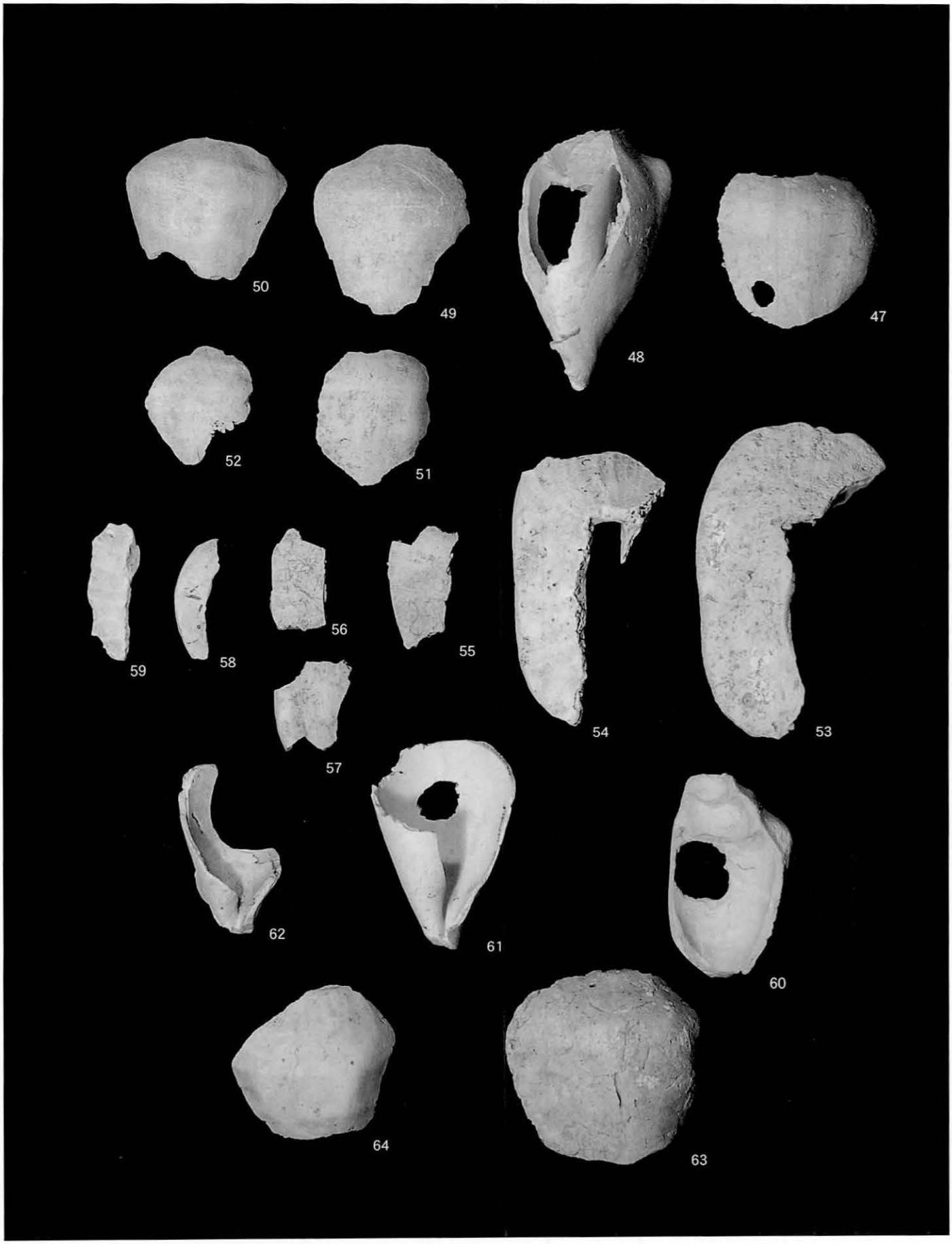
製品系(A)Ⅶ～Ⅴ層



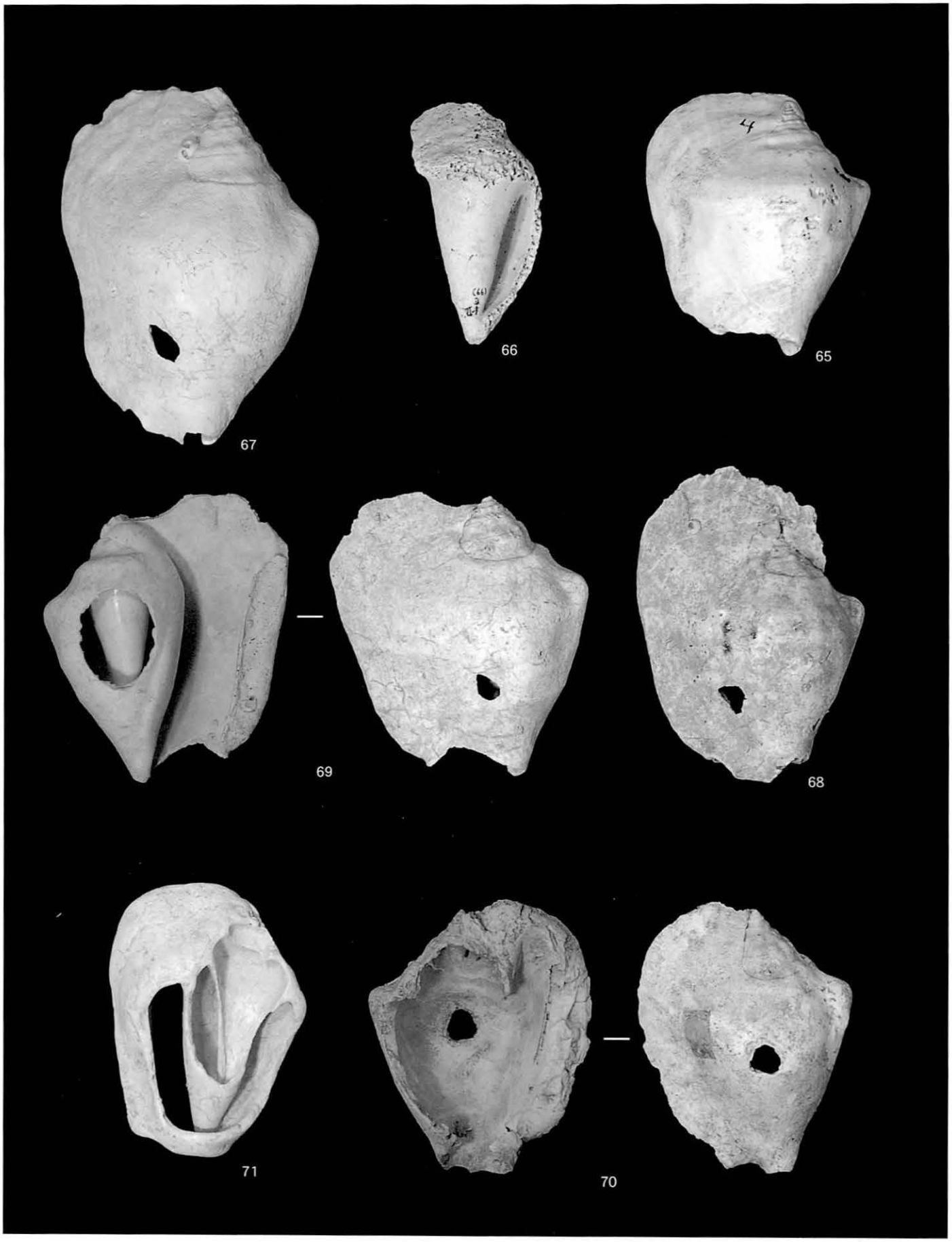
製品系(A)Ⅳ層～かく乱層



破片系(B)類Ⅶ～Ⅴ・Ⅵ層

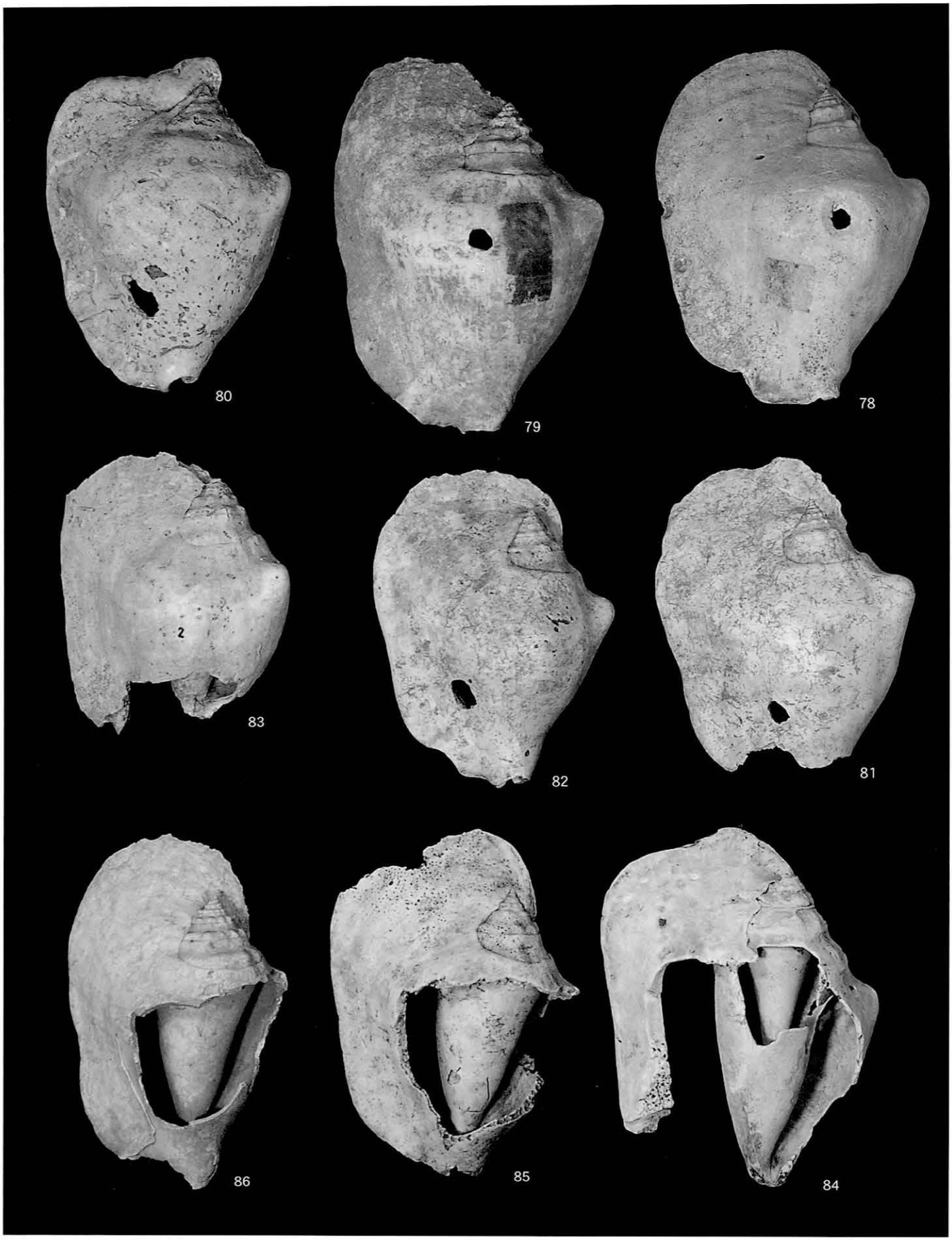


破片系(B)Ⅳ～かく乱層

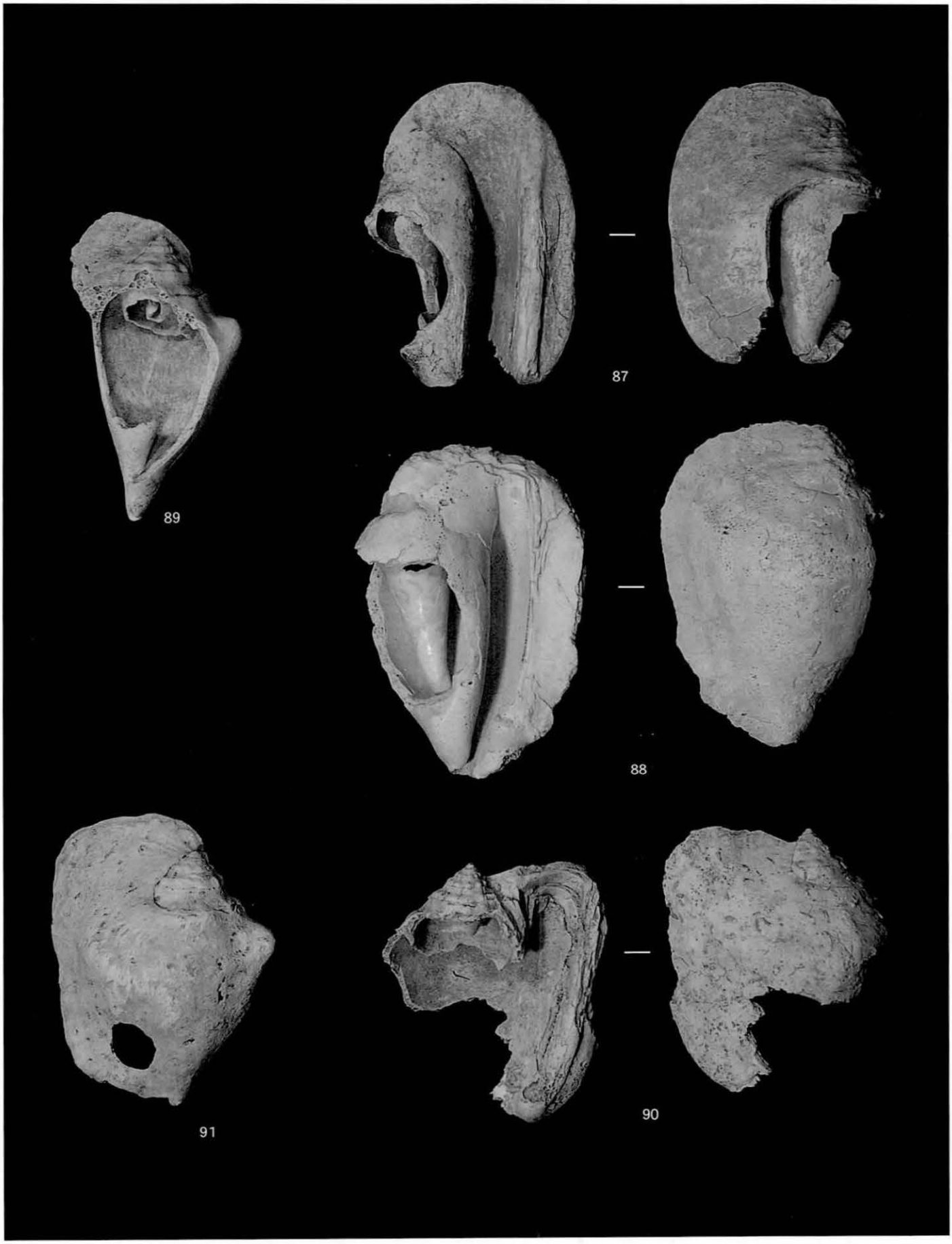


破損系(C)Ⅵ～Ⅳ層

破損系(C)Ⅲ層



破損系(C)Ⅲ層



破損系(C)Ⅲ層～かく乱層

九、貝

ここで本貝塚から出土した貝殻を分類し、貝類についての報告を行う。整理作業の都合、今回対象としたサンプルは平成14・15・16年度調査によって得られた資料のみで行った。その中には貝製品、貝集積の貝も含む。各層の対象グリットは第1図に示す。

今回算出できた貝は、巻貝が32科119種、二枚貝が25科73種の計57科192種、個体数は巻貝六五九一点、二枚貝一六〇一〇点である。各層の出土状況は表1に示す。

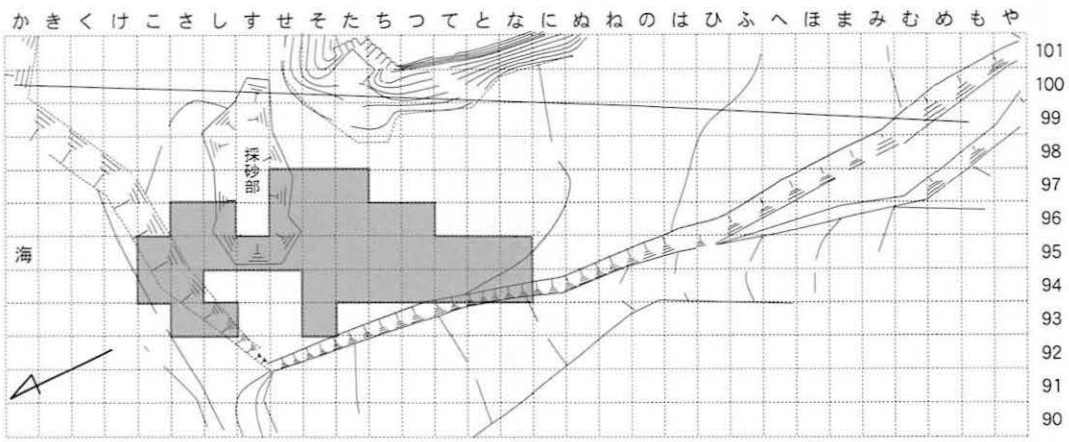
出土した貝を巻貝と二枚貝に分けて比較すると、次のことが分かる。Ⅷ層では出土した貝の70％近くが巻貝である。しかしⅦ層では巻貝の出土量は57％に減少し、さらにⅥ層から上層では二枚貝の出土量が急激に増える。特にⅤ層では90％を占める。

層別の破損率を見てみると、二枚貝が上層になるにつれて破損率が減少し、巻貝は上層になるにつれは破損率が高くなっていることが分かる。

特にマガキガイではその変化が顕著で、Ⅷ層では38％の破損率であったが、上層になるにつれて破損率は高くなり、Ⅲ層では94％にまで達した。

次に出土した貝の棲息する環境について分類を行い層（時代）ごとの比較を試みた。

まず第2図に示すように貝の棲息域を「サンゴ岩礁・転石を主体とするやや外洋的な環境＝A」、「砂地やアマモ場などの軟質の底質を主体とする半外洋的な環境＝B」、「内湾的なマングローブや泥地を主体とした環境で岩礁地も散在して伴われる＝C」に分類し、その結果を表4に示す（ただし第2図は模試図であり大堂



第1図　貝集計範囲

表2．マガキガイの破損率

	全体	完形	破損率
Ⅲ	2106	124	94%
Ⅳ	85	9	89%
Ⅴ	56	14	75%
Ⅵ	166	48	71%
Ⅵ・Ⅴ	94	20	79%
Ⅶ	83	29	65%
Ⅷ	50	31	38%

表1．層別出土状況

	巻貝			二枚貝			合計		
	科	種	個体数	科	種	個体数	科	種	個体数
Ⅲ	26	100	4509	24	55	8019	50	155	12528
Ⅳ	20	42	340	18	46	3477	38	88	3817
Ⅴ	14	32	147	19	44	1973	33	76	2120
Ⅴ・Ⅵ	15	39	246	20	44	916	35	83	1162
Ⅵ	18	58	517	21	43	1134	39	101	1651
Ⅶ	20	50	373	21	37	286	41	87	659
Ⅷ	17	37	458	16	31	205	33	68	663
全体	32	119	6591	25	73	16010	57	129	22601

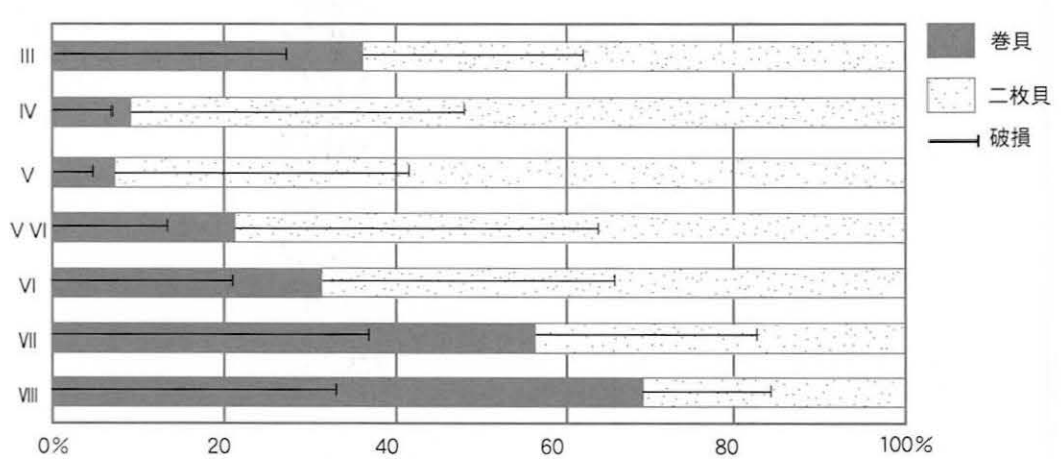


表3．巻貝・二枚貝出土破損グラフ

原貝塚で出土した貝の採取場所を示すものではない)。

Ⅷ層で最も出土量が多かったのは「Aに棲息する貝」33%だった。しかし上層になるにつれ減少していきⅣ層では4%にまで減少している。

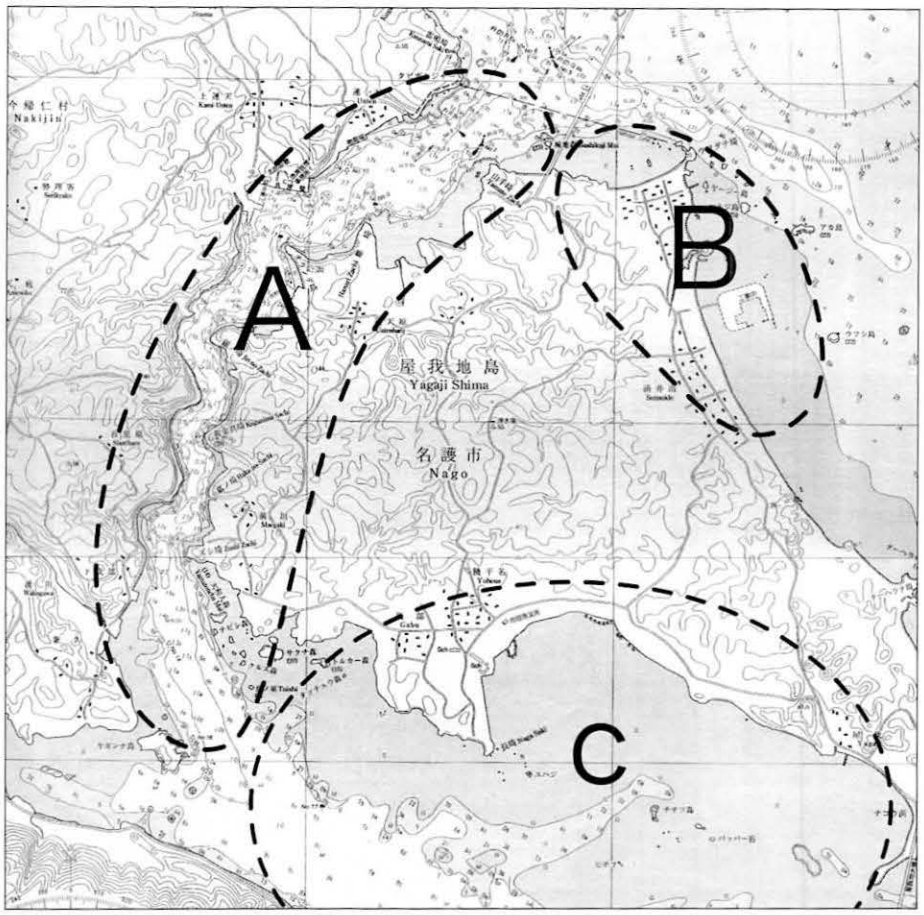
次にⅥ層からⅤ層にかけて「ACに棲息する貝」の量が急激に増え、Ⅴ層では層全体の65%を占めた。

しかしⅣ層とⅢ層になると「ACに棲息する貝」の出土量が減少し、その代りこれまで10%の出土量しかなかった「BCに棲息する貝」が急激に増え、特にⅣ層では47%とⅤ層に比べ四倍以上増えている。

次にその棲息域の出土状況の内訳を具体的に貝種でみたのが表5である。層ごとに出土した出土量上位七位までの貝を円グラフに示した。その結果を層ごとに見てみる。

まずⅧ層で一番多く出土したのはニシキウズガイ一二八点でⅧ層出土の「ABCに棲息」する貝の七割以上をこのニシキウズガイが占めている。次に出土量が多い貝は、「Bに棲息」するマガキガイが五〇個で、B棲息域の七割以上をこの一種で占めた。次に多く出土した貝はサラサバテイ五一点、ヤコウガイ四九点そしてオオベッコウガサが四四点出土した。この三種は全て「Aに棲息する貝」で、全層を通してⅧ層から最も多く出土しているその他にもⅧ層の特徴としてはオオツタノハガイ十二点出土している。

次にⅦ層で一番多く出土したのは「Bに棲息」するマガキガイでⅦ層の全体の13%。次いで「Aに棲息する」ハナマルユキと「ABCに棲息」するアコヤガイが6%。Ⅶ層は他の層に比べ上位七位までを挙げてもⅦ層出土の貝の半数にも届



A：岩礁・転石を主体とするやや外洋的な環境。

B：砂地やアマモ場などの軟質の底質を主体とする半外洋的な環境。

C：内湾的なマングローブや泥地を主体とした環境で礫地も散々して伴われる環境。

＊この図は現在の屋我地に棲む貝の棲息環境を元に作成した図であり、大堂原貝塚から出土した貝類の採取場所を示すものではありません。

第2図　棲息環境模式図

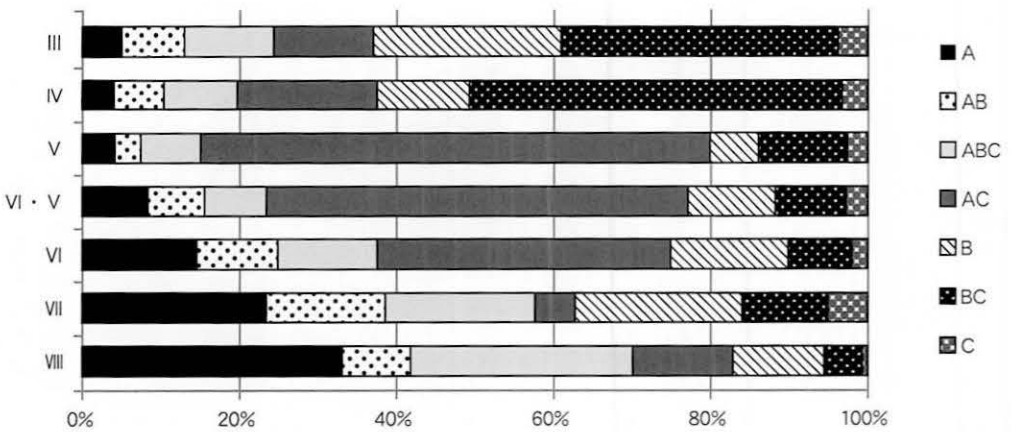


表4．層別棲息環境グラフ

かないという層としての特徴を見ることができなかった。

次にⅥ層になるとこれまで上位六位にしか出ていなかった「ＡＣに棲息」するキクザルガイ科がⅥ層全体の29％を占めた。次いでマガキガイが10％、「ＡＣに棲息する」ウミギクガイ科が７％、アコヤガイが６％と、この四種類で全体の52％を占めている。

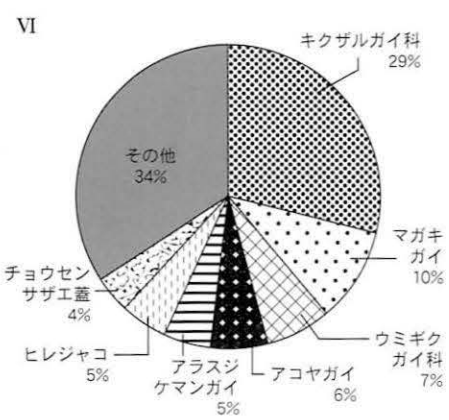
次にⅤⅥ層になるとキクザルガイ科の出土量が益々増加し、層全体の37％を占め、次いでウミギクガイ科が15％と「ＡＣに棲息」するこの２種類で全体の50％を占めた。

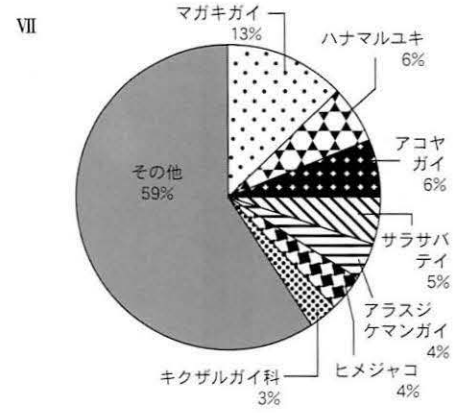
Ⅴ層になるとキクザルガイ科は52％とⅤ層の半数を占めている。またこれまで上位三位に入ってきたマガキガイが３％に減少している。

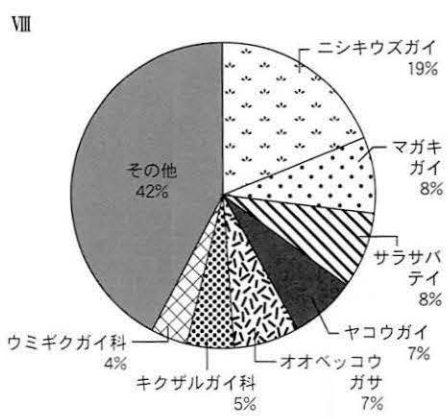
次にⅣ層になると前の層同様にキクザルガイ科の出土がトップをしめるが、出土量は39％と減少している。その一方でⅤⅥ、Ⅴ層では二番目に多く出土したウミギクガイ科に変わり「ＢＣに棲息」するアラスジケマンガイが27％と出土量が増加している。

弥生～古墳時並行期であるⅢ層になるとこれまでのウミギクガイ科を中心とする組成が、アラスジケマンガイ32％と組成の一位になっている。そしてⅤⅥ層～Ⅳ層にかけ減少していたマガキガイが17％と増加した。

今回貝殻を整理して見えたことは、最下層のⅧ層では他の層とは違い巻貝を中心とするサンゴ岩礁・転石を主体とするやや外洋的な環境を棲息域とする貝が多く出土しており、特に注目すべきは対象になったⅧ層のグリットの範囲が他の層よりも小さいにも関わらずヤコウガイの出土の割合が高いことまたオオベッコウ







Ⅷ層出土のヤコウガイ

Ⅷ層出土のオオツタノハガイ

ガサやオオツタノハガイなど波あたりの強い場所に住む貝も多く出土しているという特徴がみられた。

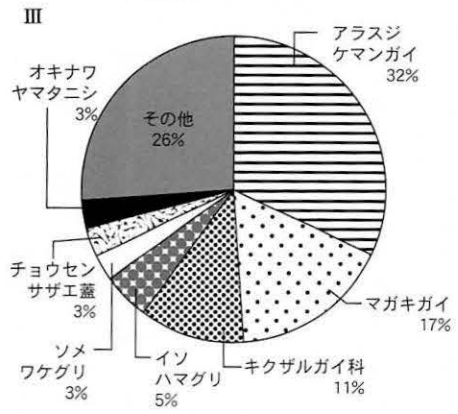
Ⅵ層～Ⅳ層にかけては、キクザルガイ科が出土量の大半を占めるという組成がみられる特徴もみられた。Ⅲ層になるとアラスジケマンやマガキガイが上位に入れ替わっている。以上のことからⅧ層とⅥ層の間、Ⅳ層とⅢ層の間に貝の組成に大きな変化が認められることである。ただ今回対象とした地区のⅦ層は他の層に比べ主体となる貝を挙げることができないという特徴があり、今後、他地区を含めた検証が必要と思われる。

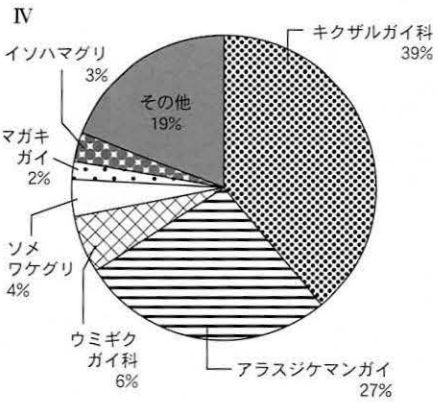
以下、出土した貝の分類整理を行った際に気づいた点について列挙する。

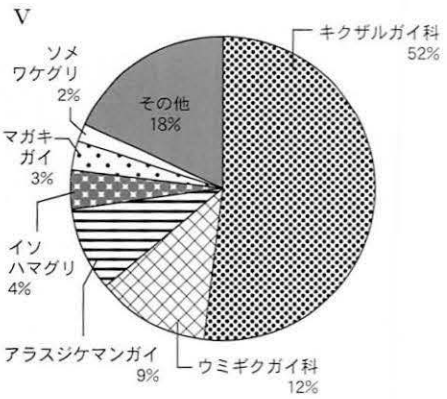
まずⅧ層でヤコウガイの出土量について述べたが、出土状況を見ると他の層では圧倒的に殻よりも蓋が多いのに対し、Ⅷ層では殻部四九個、蓋三一個、と殻の出土が多くなっている。残存部位は殻頂部よりも、殻口（繃帯部）が多く、破片も多い。

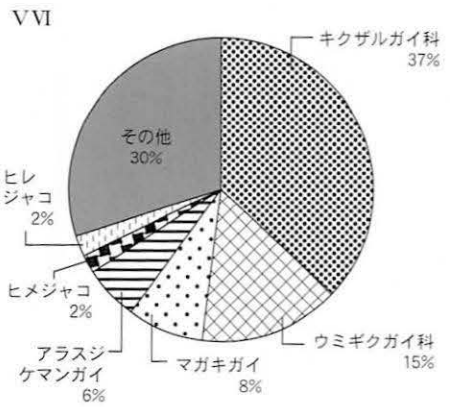
またオオツタノハガイは、他の層では

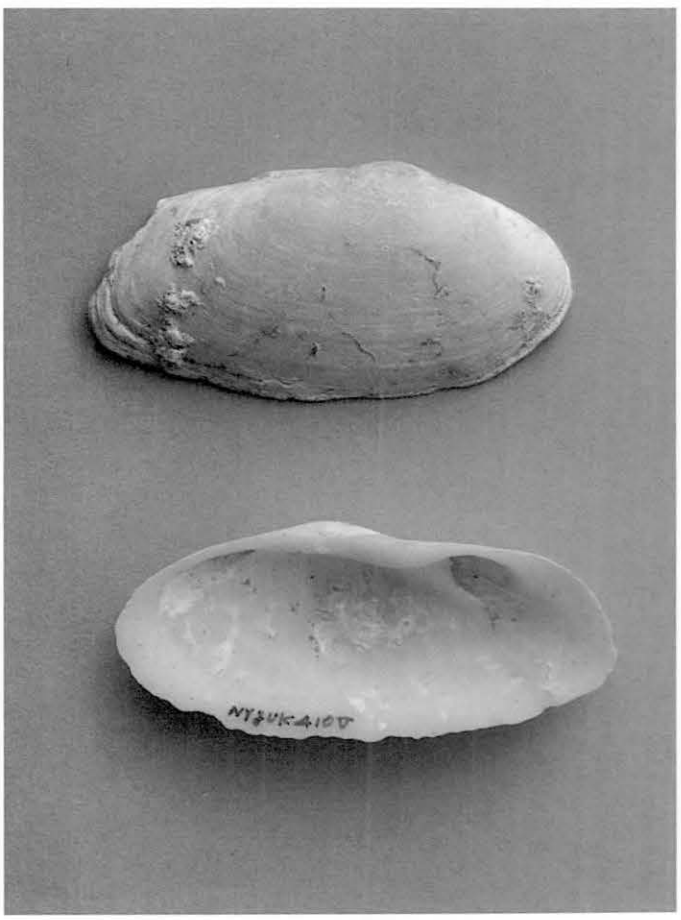
表５．層別主体貝グラフ



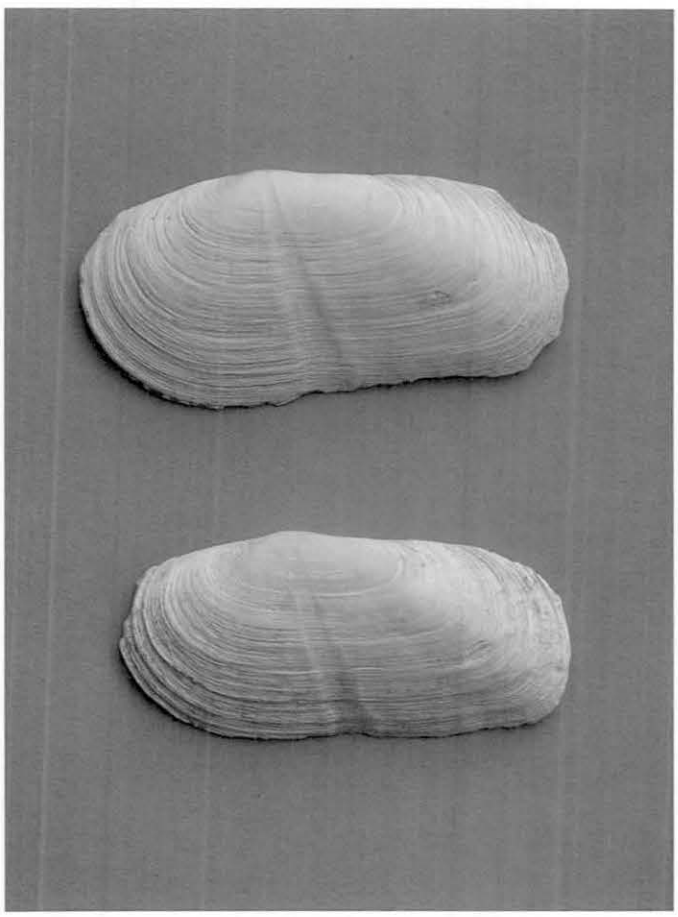








Ⅴ・Ⅵ層～Ⅲ層で出土したマスオガイの仲間



Ⅷ層～Ⅵ層で出土したオオズングリアゲマキガイ

完形がほとんど出土していないのに対し、Ⅷ層では七cm～八cm台の完形が六点出土している。

現在オオツタノハガイは、北緯三十度付近、トカラ列島と伊豆諸島南端の鳥島に限って棲息しているとされている（注1）ため当時の環境を知る手がかりとなるのではないかと思われる。

Ⅶ層からⅥ層では内湾のかなり泥深いところに棲息しているオオズングリアゲマキガイが出土している。現在この貝は羽地内海湧川下我部の海岸に棲息していることが知られている。絶滅危惧種（注2）。

Ⅴ・Ⅵ層からⅢ層で出土したマスオガイのなかで、かなり厚手ものが数点あり、今回、マスオガイの一種とした。

Ⅲ層でそれ以下の層で完形がほとんど出土しなかったイモガイ（アンボンクロザメ・クロフモドキ）の完形が出土していて、貝の交易品としての扱いをうがわせている。

以上が分類整理の段階で見えた破損状況や出土状況についての報告ではあるが、まだ検証すべき点も多く、今後の課題が残る。

注1 黒住耐二　1994「オオツタノハの供給地」『南島考古』14　沖縄考古学会

注2 久保弘文氏のご教示による。

注3 久保氏によるとマングローブ延長の泥の部分に棲息するマスオガイの仲間ではないかとのことである。

表６．貝類出土状況表（巻貝）

科	名前	個体数	Ⅷ	Ⅶ	Ⅵ	Ⅴ・Ⅵ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ	棲息環境
ヒザラガイ科	リュウキュウヒザラガイ	0	*					*	*	AC
ツタノハガイ科	ツタノハガイ科不明	0			*					−
	オオツタノハガイ	14	12	1	1		*		*	−
	オオベッコウガサガイ	79	44	12	9	6	4	1	3	A
ユキノカサガイ科	カモガイ	1	1							A
ミミガイ科	イボアナゴウ	3	2						1	A
アマオブネガイ科	アマオブネガイ科不明	11	1		*	1		3	6	−
	アマオブネ	324	7		2	4	1	30	280	AB
	アラスジアマガイ	16	10	1	4			1		A
	イシマキガイ	4							4	−
	オオアマガイ	1							1	
	オオマルアマオブネ	24							24	ABC
	カノコガイ	13							13	BC
	コシダカアマガイ	2							2	ABC
	ニシキアマオブネ	43			1			2	40	AB
	フトスジアマガイ	4		2					2	A
	マルアマオブネ	12							12	BC
ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ科不明	0			*					
	オキナワイシダタミ	34		1					33	ABC
	ギンタカハマ	1	*						1	A
	クマノコガイ	9	1						8	A
	サラサバテイ	160	51	34	13	11	5	6	40	A
	ニシキウズガイ	239	128	11	25	9	10	14	42	ABC
リュウテンサザエ科	カンギクガイ	208					3	16	189	ABC
	カンギクガイ蓋	0							−	ABC
	コシタカサザエ	1							1	ABC
	チョウセンサザエ	28	7	21	−	−	−	−	−	A
	チョウセンサザエ蓋	522	−	−	74	19	16	14	399	A
	ヤコウガイ	49	49	−	−	−	−	−	−	A
	ヤコウガイ蓋	121	−	42	53	10	10	3	3	A
オニノツノガイ科	オオシマカニモリ	1							1	A
	オニノツノガイ	9				2		*	7	B
	クワノミカニモリ	4							4	B
	コオニノツノガイ	2			1				1	AB
	コゲツノブエ	1					1			C
	ヨコワカニモリ	4	3						1	B
ウミニナ科	キバウミニナ類※１	11							11	
	キバウミニナ	13		1	1		2		9	C
	センニンガイ	18		3	6	6	*	1	2	C
	マドモチウミニナ	100		2				1	97	C
タマキビガイ科	ヒメウズラタマキビ	1							1	BC
スイショウガイ科	スイショウガイ科不明	127	*		*	*	4	26	97	
	イボソデガイ	1							1	B
	ウラスジマイノソデ	2							2	B
	オハグロガイ	1							1	BC
	クモガイ	80	12	13	30	5	*	6	14	B
	ゴホウラ	3		*	2	*		*	1	B
	スイジガイ	13		1	3	1		2	6	B
	スイショウガイ	40		1	3		1	2	33	C
	ネジマガキガイ	2				1			1	B

科	名前	個体数	Ⅷ	Ⅶ	Ⅵ	Ⅴ・Ⅵ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ	棲息環境
スイショウガイ科	マイノソデガイ	2			1				1	B
	マガキガイ	2640	50	83	166	94	56	85	2106	B
	ラクダガイ	12	*	2	3	4	1		2	B
ムカデガイ科	リュウキュウヘビガイ	0			*					A
タカラガイ科	タカラガイ科不明	6		1	*	1	2	1	1	
	エダカラ	1	1							AB
	キイロダカラ	1		1						ABC
	クチムラサキダカラ	3	3							A
	コモンダカラ	10	5	2	3					ABC
	タルダカラ	1			1					AB
	ハチジョウダカラ	9	2	4	1	1	*		1	A
	ハナビラダカラ	11	1		3	1	1	3	2	ABC
	ハナマルユキダカラ	132	10	39	37	15	12	7	12	A
	ホシキヌタガイ	16	5	4	1	2			4	ABC
	ホシダカラ	29	6	8	4	3	1	5	2	AB
	ホソヤクシマダカラ	2	1	1						AB
	ヤクシマダカラ	106	8	22	15	19	1	27	14	ABC
	ヤナギシボリダカラガイ	0			*					A
タマガイ科	タマガイ科不明	0					*			
	トミガイ	1							1	BC
	トミガイ類	2		1					1	
	ネズミガイ	1							1	B
	ホウシュノタマガイ	2							2	BC
	リスガイ	2						1	1	B
トウカムリガイ科	アメガイ	1							1	B
ヤツシロガイ科	ヤツシロガイ科不明	0							*	
	スクミウズラ	1							1	B
フジツガイ科	サツマボラ	1							1	AB
	シオボラ	3							3	ABC
	シノマキボラ	1							1	ABC
	ホラガイ	8	2	1	1	1	*	2	1	A
オキニシ科	イワカワウネボラ	1							1	AB
	オキニシ	2							2	A
	シロナルトボラ	0							*	A
アクキガイ科	アクキガイ科不明	2			1			1	*	
	アカイガレイシガイ	1							1	A
	ガンゼキボラ	15		2	*		*		13	ABC
	シラクモガイ	13	3		1				9	A
	ツノテツレイシガイ	3							3	A
	ツノレイシガイ	1							1	A
	テツボラ	2							2	A
	テングガイ	1							1	A
	ホソスジテツボラ	1				1				A
エゾバイ科	イトマキボラ	203		3	*	3	3	5	189	AB
	シマベッコウバイ	2							2	ABC
	スジグロホラダマシ	1				1				A
	チトセボラ	6							6	AB
	ナガイトマキボラ	1			1					A
	ホラダマシ？（類）	1	1							−
オニコブシガイ科	オニコブシガイ科不明	0							*	
	オニコブシガイ	3				1			2	A

科	名前	個体数	Ⅷ	Ⅶ	Ⅵ	Ⅴ・Ⅵ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ	棲息環境
オニコブシガイ科	コオニコブシガイ	26		2	1		1	*	22	A
マクラガイ科	マクラガイ科不明	2			1			1		
	サツマビナ	13		4	1				8	B
フデガイ科	コシマヤタテ	1		1						AB
イモガイ科	イモガイ科不明	75	3	5	21	8	4	11	23	
	アカシマミナシガイ	1						1	*	B
	アンボンクロザメ	97		6	7	5	1	15	63	B
	イタチイモガイ	1						1		A
	カバミナシガイ	1		*					1	A
	キヌカツギイモガイ	2			1	1				AB
	クロフモドキ	35		1	2		3	3	26	B
	クロミナシガイ	14		1	2	3		1	7	AB
	ゴマフイモガイ	10		5	1	3			1	BC
	コモンイモガイ	9			2		1		6	BC
	サラサミナシガイ	7		4		*			3	ABC
	ニシキミナシ	7	2	3	1			*	1	B
	ヒラマキイモガイ(類)	1			1					AB
	フックラキヌカツギイモ	1				1				A
	マダライモガイ	23		6	2	1	2		12	ABC
	ミカドミナシガイ	1		1						AB
	ヤナギシボリイモガイ	9		7		1	1		*	AB
	ユキゲイモ	1			1					B
タケノコガイ科	タケノコガイ	1						1		B
	ベニタケ	3		2	1					B
トウガタガイ科	タケノコクチキレ	1		1						B
ヒトエガイ科	ヒトエガイ	1			1					
カラマツガイ科	クロカラマツガイ	1							1	A
	コウダカカラマツガイ	1		1						ABC
キセルガイ科	ツヤギセルガイ	7							7	−
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	411	22	1	5	1		26	356	−
ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	38	4	2		*		4	28	−
オナジマイマイ科	陸産貝不明	7						7		−
	オキナワウスカワマイマイ	25	1					4	20	−
	パンダナマイマイ	139							139	−
32科	119種	6591	458	373	518	246	147	340	4509	−

貝類出土状況表（二枚貝）

科	名前	個体数	算出個体数							
			Ⅷ	Ⅶ	Ⅵ	Ⅴ・Ⅵ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ	
フネガイ科	フネガイ科不明	3						3		
	エガイ	98	1	3	10	5	13	17	49	ABC
	エガイ類※2	3			*	1			2	
	オオタカノハガイ	40	7	6	5	5	4	5	8	AB
	オオミノエガイ	18	1	0	*	1	1	1	14	A
	カリガネエガイ	21			2	2		9	8	BC
	ベニエガイ	72	1				2	3	66	AB
	リュウキュウサルボウガイ	284	6	20	33	18	21	60	126	BC
タマキガイ科	ソメワケグリガイ	656	1	6	13	12	47	139	438	B
イガイ科	クジャクガイ	1							1	ABC
ハボウキガイ科	クロタイラギ	1		1	*					BC
	ハボウキガイ	26	15	2	2	2	1	2	2	BC
ウグイスガイ目	不明	0			*	*	*	*		

科	名前	個体数	Ⅷ	Ⅶ	Ⅵ	Ⅴ・Ⅵ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ	棲息環境
ウグイスガイ科	ウグイスガイ科不明	5			1	2	1	1	*	
	アコヤガイ	384	1	38	92	17	15	4	217	ABC
	クロチョウガイ	83	2	14	14	11	8	9	25	AB
マクガイ科	マクガイ科不明	16				1	3	8	4	
	シュモクアオリ	43	1	1	8	9	21	2	1	ABC
	マクガイ	22	13	1	7	1				AC
シュモクガイ科	シュモクガイ	2						1	1	B
イタヤガイ科	イタヤガイ科不明	2					1	1		
	リュウキュウオウギ	5			2	1	1		1	ABC
	リュウキュウナデシコ	2		1	1					BC
ウミギクガイ科	ウミギクガイ類※3	864	28	4	111	172	256	211	82	AC
ミノガイ科	ミノガイ	4	1						3	AB
イタボガキ科	オハグロガキ	10		1			1	3	5	A
	ミナミマガキ	2		2	*					AC
カキ上科	カキ類	230	24	14	25	12	23	48	84	
ベッコウガキ科	シャコガキ	56	2	13	10	9	7	8	7	A
ツキガイ科	ツキガイ	2		1		1				B
	ヒメツキガイ	1							1	B
キクザルガイ科	キクザルガイ類※4	4966	35	23	474	436	1092	1498	1408	AC
	ヒレインコガイ	107	6	4	15	9	17	39	17	A
ザルガイ科	ザルガイ科不明	16						16		
	アサザルガイ	0	*			*				BC
	オオヒシガイ	1							1	B
	カワラガイ	135		2	2		16	22	93	B
	ギンギョ	1	1							A
	コナガザルガイ	1			1					B
	リュウキュウザルガイ	62	5	4	2	7	14	7	23	BC
シャコガイ科	シャコガイ科不明	17		1	11	*	2	3	*	
	シャゴウ	7			1	*	*	*	6	B
	シラナミ	81	2	6	11	9	12	10	31	A
	ヒメジャコ	494	8	27	48	26	31	68	286	AB
	ヒレジャコ	192	11	19	81	25	17	18	21	AB
	ヒレナシジャコ	3			3					AB
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	904	18	13	38	24	82	124	605	ABC
	ナミノコマスオガイ	3							3	B
バカガイ科	リュウキュウアリソガイ	1				1				C
	リュウキュウバカガイ	3					2		1	B
ニッコウガイ科	アマサギガイ	1	1							C
	サメザラガイ	5	1		2		1		1	B
	ニッコウガイ	2							2	B
	ヒメニッコウガイ	2				1	1			B
	モチヅキザラガイ	5		2	1	1	1			BC
	リュウキュウシラトリ	2				2				BC
フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコガイ	2							2	AB
シオサザナミガイ科	マスオガイ	15				1	2	8	4	C
	マスオガイ類	13				2	5	4	2	C
	リュウキュウマスオガイ	143		3	1	1	10	13	115	ABC
ナタマメガイ科	オオズングリアゲマキガイ	6		4	1	1				C
シジミ科	シレナシジミ	271	3	17	18	16	34	45	138	C
マルスダレガイ科	マルスダレガイ科不明	1						1		
	アラスジケマンガイ	5360	2	29	83	65	195	1043	3943	BC

科	名前	個体数	Ⅷ	Ⅶ	Ⅵ	Ⅴ・Ⅵ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ	棲息環境
	アラヌノメガイ	4	1				1	2	*	AB
	イオウハマグリ	1		1						C
	イサザメガイ	0		*						A
	イナミガイ	2						1	1	B
	オイノカガミガイ	3							3	BC
	オオヌノメガイ	1		1	*					A
	オキシジミ	109		1	4	5	7	14	78	C
	カノコアサリ	2							2	B
	シラオガイ	1				1				BC
マルスダレガイ科	スダレハマグリ	79					1	3	75	C
	ヌノメガイ	4			*	*	1	*	3	B
	ヒメアサリ	1						1		AB
	ヒメリュウキュウアサリ	2				1			1	BC
	ホソスジイナミガイ	6	1		1		1	1	2	BC
	マルスダレガイ	8	6	1					1	AB
	ユウカゲハマグリ	7					1		6	C
	ヨロイガイ	1						1		AB
	リュウキュウアサリ	1					1			BC
	ヌノメガイ類	0			*					
25科	73種	16010	205	286	1134	916	1973	3477	8019	

※　不明、科不明は集計から外した。

※1　口唇部などの破損によりキバウミナとマドモチウミナの判別がつかなかったものをキバウミナ類とした。

※2　エガイ、カリガネエガイベニエガイ、クロミノエガイ、オオミノエガイ等の中で破損が著しく判別がつかなかったものをエイガイ類とした。

※3　ウミギクガイ科は同定できなかったため総称してウミギクガイ類とした。

※4　キクザル科はヒレイイコ以外同定できなかったため総称してキクザルガイ類とした。

※5　＊は、破片のみの出土

表７．層別出土状況表

Ⅷ層集計表（巻貝）

科	名前	完	頂・口	殻頂	口・水管	破片	頂集計	口集計	個体数
ヒザラガイ科	リュウキュウヒザラガイ	0	0	0	0	3	0	0	0
ツタノハガイ科	オオツタノハガイ	6	0	4	6	4	10	12	12
	オオベッコウガサガイ	28	0	6	16	12	34	44	44
ユキノカサガイ科	カモガイ	1	0	0	0	0	1	1	1
ミミガイ科	イボアナゴウ	2	0	0	0	0	2	2	2
アマオブネガイ科	アマオブネ	5	0	0	2	1	5	7	7
	アマオブネガイ科不明	0	0	0	1	0	0	1	1
	アラスジアマオブネガイ	2	1	2	7	1	5	10	10
ニシキウズガイ科	ギンタカハマ	0	0	0	0	2	0	0	0
	クマノコガイ	1	0	0	0	0	1	1	1
	サラサバテイ	21	5	7	25	102	33	51	51
	ニシキウズガイ	67	0	9	61	93	76	128	128
リュウテンサザエ科	チョウセンサザエ	3	0	4	3	12	7	6	7
	チョウセンサザエ蓋	1	0	0	0	0	1	1	−
	ヤコウガイ	4	7	22	38	75	33	49	49
	ヤコウガイ蓋	14	17(17)	0	0	3(3)	31	31	−
オニノツノガイ科	ヨコワカニモリ	1	2	0	0	0	3	3	3
スイショウガイ科	スイショウガイ科不明	0	0	0	0	1	0	0	0
	クモガイ	6	3	0	3	5	9	12	12
	マガキガイ	31	1	6	18	4	38	50	50
	ラクダガイ	0	0	0	0	1	0	0	0
タカラガイ科	エダカラ	1	0	0	0	0	1	1	1
	クチムラサキダカラ	3	0	0	0	0	3	3	3
	コモンダカラ	3	0	0	2	2	3	5	5
	ハチジョウダカラ	0	0	0	2	2	0	2	2
	ハナビラダカラ	0	0	0	1	0	0	1	1
	ハナマルユキダカラ	7	1	0	2	1	8	10	10
	ホシキヌタガイ	3	0	0	2	1	3	5	5
	ホシダカラ	1	2	0	3	8	3	6	6
	ホソヤクシマダカラ	0	1	0	0	0	1	1	1
	ヤクシマダカラ	5	0	1	3	7	6	8	8
フジツガイ科	ホラガイ	0	0	2	1	4	2	1	2
アクキガイ科	シラクモガイ	3	0	0	0	0	3	3	3
エゾバイ科	ホラダマシ類	0	1	0	0	0	1	1	1
イモガイ科	イモガイ科不明	3	0	0	0	0	3	3	3
	ニシキミナシ	0	0	0	2	1	0	2	2
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	18	0	0	4	0	18	22	22
ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ類	3	0	0	1	3	3	4	4
オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	1	0	0	0	0	1	1	1
17科	34種	個体数							458

Ⅷ層集計表（二枚貝）

科	名前	完品		頂＋口		殻頂		殻頂なし 2/3		破片	頂集計		口集計		個体数
		右	左	右	左	右	左	右	左		右	左	右	左	
フネガイ科	エガイ	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1
	オオタカノハガイ	1	5	1	0	0	2	0	0	1	2	7	2	5	7
	オオミノエガイ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
	ベニエガイ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
	リュウキュウサルボウガイ	6	3	0	0	0	0	0	0	0	6	3	6	3	6
タマキガイ科	ソメワケグリガイ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
ハボウキガイ科	ハボウキガイ	0	0	0	0	15	15	0	0	16	15	15	0	0	15
ウグイスガイ科	アコヤガイ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1
	クロチョウガイ	1	0	0	0	0	2	0	0	4	1	2	1	0	2
マクガイ科	シュモクアオリ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1
	マクガイ	0	0	0	0	13	6	0	0	4	13	6	0	0	13
ウミギクガイ科	ウミギクガイ類	15	20	4	2	3	6	0	3	4	22	28	19	25	28
ミノガイ科	ミノガイ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
カキ上科	カキ類	16	15	3	0	0	1	5	2	12	19	16	24	17	24
ベッコウガキ科	シャコガキ	1	2	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	2	2
キクザルガイ科	キクザルガイ類	28	5	6	0	0	1	1	0	6	34	6	35	5	35
	ヒレインコガイ	1	1	0	5	0	0	0	0	0	1	6	1	6	6
ザルガイ科	アサザルガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	ギンギョ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	リュウキュウザルガイ	3	5	0	0	0	0	0	0	2	3	5	3	5	5
シャコガイ科	シラナミ	1	1	0	0	1	0	0	0	2	2	1	1	1	2
	ヒメジャコ	5	3	2	2	1	0	0	0	1	8	5	7	5	8
	ヒレジャコ	1	3	9	3	1	3	0	0	23	11	9	10	6	11
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	14	13	2	1	2	0	0	0	0	18	14	16	14	18
ニッコウガイ科	アマサギガイ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
	サメザラガイ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
シジミ科	シレナシジミ	0	3	0	0	2	0	0	0	4	2	3	0	3	3
マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ	2	1	0	0	0	0	0	0	0	2	1	2	1	2
	アラヌノメガイ	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1
	ホソスジイナミガイ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
	マルスダレガイ	6	5	0	0	0	0	0	0	0	6	5	6	5	6
16 科	31 種	個体数													205

Ⅶ層集計表（巻貝）

科	名前	完	頂・口	殻頂	口・水管	破片	頂集計	口集計	個体数
ツタノハガイ科	オオツタノハガイ	0	0	1	1	0	1	1	1
	オオベッコウガサガイ	8	0	0	4	5	8	12	12
アマオブネガイ科	アラスジアマオブネガイ	0	0	0	1	0	0	1	1
	フトスジアマガイ	0	0	0	2	0	0	2	2
ニシキウズガイ科	オキナワイシダタミ	1	0	0	0	0	1	1	1
	サラサバテイ	0	28	6	1	39	34	29	34
	ニシキウズガイ	5	1	1	5	1	7	11	11
リュウテンサザエ科	チョウセンサザエ	1	18	2	2	12	21	21	21
	チョウセンサザエ蓋	8	1	0	2	0	9	11	−
	ヤコウガイ	0	0	1	15	36	1	15	−
	ヤコウガイ蓋	10	32(32)				42	42	42
ウミニナ科	キバウミニナ	0	1	0	0	0	1	1	1
	センニンガイ	0	3	0	0	0	3	3	3
	マドモチウミニナ	0	1	1	0	0	2	1	2
スイショウガイ科	クモガイ	0	7	3	6	10	10	13	13
	ゴホウラ	0	0	0	0	3 (3)	0	0	0
	スイジガイ	0	1	0	0	6	1	1	1
	スイショウガイ	1	0	0	0	0	1	1	1
	マガキガイ	29	29	25	0	0	83	58	83
	ラクダガイ	0	0	2	0	3	2	0	2
タカラガイ科	タカラガイ科不明	0	0	1	0	7	1	0	1
	キイロダカラ	1	0	0	0	0	1	1	1
	コモンダカラ	0	0	0	2	1	0	2	2
	ハチジョウダカラ	0	0	0	4	3	0	4	4
	ハナマルユキダカラ	20	4	0	15	4	24	39	39
	ホシキヌタガイ	3	0	0	1	0	3	4	4
	ホシダカラ	0	0	1	8	13	1	8	8
	ホソヤクシマダカラ	0	1	0	0	0	1	1	1
	ヤクシマダカラ	10	3	1	9	19	14	22	22
タマガイ科	トミガイ類	1	0	0	0	0	1	1	1
フジツガイ科	ホラガイ	0	0	0	1	13	0	1	1
アクキガイ科	ガンゼキボラ	0	0	0	2	0	0	2	2
エゾバイ科	イトマキボラ	1	1	0	1	0	2	3	3
オニコブシガイ科	コオニコブシガイ	2	0	0	0	0	2	2	2
マクラガイ科	サツマビナ	1	0	0	3	0	1	4	4
フデガイ科	コシマヤタテ	1	0	0	0	0	1	1	1
イモガイ科	イモガイ科不明	1	1	3	2	3	5	4	5
	アンボンクロザメ	1	3	2	1	0	6	5	6
	カバミナシガイ	0	0	0	0	1	0	0	0
	クロフモドキ	0	0	0	1	2	0	1	1
	クロミナシガイ	0	0	1	0	0	1	0	1
	ゴマフイモガイ	5	0	0	0	0	5	5	5
	サラサミナシガイ	3	0	1	0	0	4	3	4
	ニシキミナシ	2	0	0	1	0	2	3	3
	マダライモガイ	6	0	0	0	0	6	6	6
	ミカドミナシガイ	1	0	0	0	0	1	1	1
	ヤナギシボリイモガイ	6	0	1	0	0	7	6	7
タケノコガイ科	ベニタケ	1	1	0	0	0	2	2	2

科	名前	完	頂・口	殻頂	口・水管	破片	頂集計	口集計	個体数
トウガタガイ科	タケノコクチキレ	0	1	0	0	0	1	1	1
カラマツガイ科	コウダカカラマツガイ	0	0	1	0	0	1	0	1
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	1	0	0	0	0	1	1	1
ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	1	0	0	1	0	1	2	2
20科	48種	個体数							373

Ⅷ層集計表（二枚貝）

科	名前	完品		頂＋口		殻頂		殻頂なし 2/3		破片	頂集計		口集計		個体数
		右	左	右	左	右	左	右	左		右	左	右	左	
フネガイ科	エガイ	1	3	0	0	0	0	0	0	0	1	3	1	3	3
	オオタカノハガイ	0	0	0	1	6	0	1	0	0	6	1	1	1	6
	オオミノエガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	リュウキュウサルボウガイ	15	11	2	2	0	0	3	2	6	17	13	20	15	20
タマキガイ科	ソメワケグリガイ	2	6	0	0	0	0	0	0	0	2	6	2	6	6
ハボウキガイ科	クロタイラギ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	ハボウキガイ	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	2
ウグイスガイ科	アコヤガイ	0	0	6	7	32	18	0	0	16	38	25	6	7	38
	クロチョウガイ	0	1	0	2	5	11	0	0	7	5	14	0	3	14
マクガイ科	シュモクアオリ	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	1
	マクガイ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1
イタヤガイ科	リュウキュウナデシコ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
ウミギクガイ科	ウミギクガイ類	0	2	0	1	1	1	0	1	4	1	4	0	4	4
カキ上科	カキ類	10	0	0	0	4	9	1	1	13	14	9	11	1	14
イタボガキ科	オハグロガキ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
イタボガキ科	ミナミマガキガイ	0	0	0	0	2	0	0	1	0	2	0	0	1	2
ベッコウガキ科	シャコガキ	7	4	2	6	0	1	4	2	10	9	11	13	12	13
ツキガイ科	ツキガイ	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1
キクザルガイ科	キクザルガイ類	19	0	2	2	1	1	2	0	3	22	3	23	2	23
	ヒレインコガイ	2	1	0	0	2	1	0	0	0	4	2	2	1	4
ザルガイ科	カワラガイ	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2	0	1	0	2
	リュウキュウザルガイ	3	2	0	0	0	0	1	0	0	3	2	4	2	4
シャコガイ科	シャコガイ科不明	0	0	0	0	0	1	0	0	50	0	1	0	0	1
	シラナミ	4	3	0	2	2	0	0	0	12	6	5	4	5	6
	ヒメジャコ	10	11	13	4	4	7	1	0	41	27	22	24	15	27
	ヒレジャコ	5	4	2	8	9	7	0	0	150	16	19	7	12	19
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	8	5	4	2	1	0	0	0	0	13	7	12	7	13
ニッコウガイ科	モチヅキザラ	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	1	2
シオサザナミガイ科	リュウキュウマスオガイ	1	0	1	3	0	0	0	0	0	2	3	2	3	3
ナタマメガイ科	オオズングリアゲマキガイ	1	3	1	1	0	0	0	0	0	2	4	2	4	4
シジミ科	シレナシジミ	2	7	7	3	3	7	0	0	16	12	17	9	10	17
マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ	21	13	8	7	0	0	0	3	2	29	20	29	23	29
	イオウハマグリ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
	イサザメガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	オオヌノメガイ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	オキシジミ	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	1
	マルスダレガイ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
21科	36種	個体数													286

Ⅵ層集計表（巻貝）

科	名前	完	頂・口	殻頂	口・水管	破片	頂集計	口集計	個体数
ツタノハガイ科	ツタノハガイ科不明	0	0	0	0	1	0	0	0
	オオツタノハガイ	1	0	0	0	0	1	1	1
	オオベッコウガサガイ	8	0	0	1	19	8	9	9
アマオブネガイ科	アマオブネガイ科不明	0	0	0	0	1	0	0	0
	アマオブネ	0	2	0	0	0	2	2	2
	アラスジアマオブネガイ	1	0	0	3	0	1	4	4
	ニシキアマオブネ	0	1	0	0	0	1	1	1
ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ科不明	0	0	0	0	1	0	0	0
	サラサバテイ	2	0	11	8	69	13	10	13
	ニシキウズガイ	9	3	0	13	11	12	25	25
リュウテンサザエ科	チョウセンサザエ	4	1	15	0	36	20	5	−
	チョウセンサザエ蓋	67	7	0	0	0	74	74	74
	ヤコウガイ	0	2	4	8	41	6	10	−
	ヤコウガイの蓋	8	45(45)	0	0	2 (2)	53	53	53
オニノツノガイ科	コオニノツノガイ	0	1	0	0	0	1	1	1
ウミニナ科	キバウミニナ	0	1	0	0	0	1	1	1
	センニンガイ	0	1	5	2	0	6	3	6
スイショウガイ科	スイショウガイ科不明	0	0	0	0	1	0	0	0
	クモガイ	0	7	3	23	51	10	30	30
	ゴホウラ	1	0	1	0	5 (3)	2	1	2
	スイジガイ	0		0	3		0	3	3
	スイショウガイ	0	0	0	3	1	0	3	3
	マイノソデガイ	1	0	0	0	0	1	1	1
	マガキガイ	48	50	68	1	2	166	99	166
	ラクダガイ	0	2	0	1	0	2	3	3
ムカデガイ科	リュウキュウヘビガイ	0	0	0	0	1	0	0	0
タカラガイ科	タカラガイ科不明	0	0	0	0	44	0	0	0
	コモンダカラ	3	0	0	0	1	3	3	3
	タルダカラ	1	0	0	0	0	1	1	1
	ハチジョウダカラ	0	0	0	1	3	0	1	1
	ハナビラダカラ	2	0	0	1	1	2	3	3
	ハナマルユキダカラ	17	1	0	19	0	18	37	37
	ホシキヌタガイ	0	0	0	1	0	0	1	1
	ホシダカラ	0	0	0	4	2	0	4	4
	ヤクシマダカラ	3	1	2	11	16	6	15	15
	ヤナギシボリダカラガイ	0	0	0	0	1	0	0	0
フジツガイ科	ホラガイ	0	0	0	1	10	0	1	1
アクキガイ科	アクキガイ科不明	0	0	0	1	0	0	1	1
	ガンゼキボラ	0	0	0	0	1	0	0	0
	シラクモガイ	0	1	0	0	0	1	1	1
エゾバイ科	イトマキボラ	0	0	0	0	1	0	0	0
	ナガイトマキボラ	0	0	1	0	0	1	0	1
オニコブシガイ科	コオニコブシ	1	0	0	0	0	1	1	1
マクラガイ科	マクラガイ科不明	0	0	0	1	0	0	1	1
	サツマビナ	1	0	0	0	0	1	1	1
イモガイ科	イモガイ科不明	5	3	13	4	14	21	12	21
	アンボンクロザメ	0	3	2	4	4	5	7	7
	キヌカツギイモガイ	0	1	0	0	0	1	1	1
	クロフモドキ	0	0	2	2	5	2	2	2
	クロミナシガイ	0	0	0	2	0	0	2	2
	ゴマフイモガイ	1	0	0	0	0	1	1	1
	コモンイモガイ	2	0	0	0	0	2	2	2
	ニシキミナシ	0	0	1	1	1	1	1	1
	ヒラマキイモガイ類	1	0	0	0	0	1	1	1

科	名前	完	頂・口	殻頂	口・水管	破片	頂集計	口集計	個体数
イモガイ科	マダライモガイ	2	0	0	0	0	2	2	2
	ユキゲイモ	0	0	0	1	0	0	1	1
タケノコガイ科	ベニタケ	1	0	0	0	0	1	1	1
ヒトエガイ科	ヒトエガイ	0	1(1)	0	0	0	1	1	1
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	5	0	0	0	0	5	5	5
18科	49種	個体数							518

Ⅵ層集計表（二枚貝）

科	名前	完品		頂＋口		殻頂		殻頂なし2/3		破片	頂集計		口集計		個体数
		右	左	右	左	右	左	右	左		右	左	右	左	
フネガイ科	エガイ	6	2	1	1	3	0	0	0	0	10	3	7	3	10
	エガイ類	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	オオタカノハガイ	3	1	2	1	0	3	0	0	1	5	5	5	2	5
	オオミノエガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	カリガネエガイ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	2
	リュウキュウサルボウガイ	16	19	4	1	4	4	9	13	8	24	24	29	33	33
タマキガイ科	ソメワケグリガイ	10	1	0	0	3	2	0	0	0	13	3	10	1	13
ハボウキガイ科	ハボウキガイ	0	0	0	0	2	0	0	0	5	2	0	0	0	2
	クロタイラギ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
ウグイスガイ目	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0
ウグイスガイ科	ウグイスガイ科不明	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	アコヤガイ	0	0	6	3	86	40	0	0	50	92	43	6	3	92
	クロチョウガイ	0	0	1	0	13(1)	13	0	0	30	14	13	1	0	14
マクガイ科	シュモクアオリ	0	0	0	0	8	0	0	0	4	8	0	0	0	8
	マクガイ	0	0	0	0	7(1)	7	0	0	9	7	7	0	0	7
イタヤガイ科	リュウキュウナデシコ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
イタボガキ科	ミナミマガキ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
	リュウキュウオウギ	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	2	2
ウミギクガイ科	ウミギクガイ類	20	56	13	32(1)	23	23	3	21	37	56	111	36	109	111
カキ上科	カキ類	8	0	1	2	16	4	0	0	26	25	6	9	2	25
ベッコウガキ科	シャコガキ	4	4	2	0	4	2	2	0	15	10	6	8	4	10
キクザルガイ科	キクザルガイ類	331	40	95	36	48	25	28	3	82	474	101	454	79	474
	ヒレインコガイ	5	2	7	5	1	1	3	0	6	13	8	15	7	15
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	27	21	8	5	3	2	0	0	1	38	28	35	26	38
ザルガイ科	カワラガイ	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	1	2
	コナガザルガイ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1
	リュウキュウザルガイ	1	2	0	0	0	0	0	0	1	1	2	1	2	2
シャコガイ科	シャコガイ科不明	0	0	5	2	6	0	1	5	187	11	2	6	7	11
	シャゴウ	0	0	0	0	1	0	0	0	2	1	0	0	0	1
	シラナミ	6	3	4	3	1	2	0	0	20	11	8	10	6	11
	ヒメジャコ	11	18	7	9	30	9	0	0	0	48	36	18	27	48
	ヒレジャコ	18	2	29	12	34	26	0	0	261	81	40	47	14	81
	ヒレナシジャコ	3									3		3		3
ニッコウガイ科	サメザラガイ	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	2	2
	モチヅキザラガイ	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1
シオサザナミガイ科	リュウキュウマスオガイ	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1
ナタマメガイ科	オオズングリアゲマキガイ	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1
シジミ科	シレナシジミ	3	3	1	3	8	12	0	0	24	12	18	4	6	18
マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ	46	50	17	23	4	10	1	0	6	67	83	64	73	83
	オオヌノメガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	オキシジミ	0	2	2	1	2	0	0	0	2	4	3	2	3	4
	ヌノメガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	ヌノメガイ類	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	ホソスジイナミガイ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
19科	41種	個体数													1134

V・VI層集計表（巻貝）

科	名前	完	頂・口	殻頂	口・水管	破片	頂集計	口集計	個体数
ツタノハガイ科	オオベッコウガサガイ	1	1	4	1	9	6	3	6
アマオブネガイ科	アマオブネガイ科不明	0	0	0	1	0	0	1	1
	アマオブネ	2	0	0	2	0	2	4	4
ニシキウズガイ科	サラサバテイ	1	1	9	6	21	11	8	11
	ニシキウズガイ	0	2	2	7	7	4	9	9
リュウテンサザエ科	チョウセンサザエ	4	0	7	1	21	11	5	−
	チョウセンサザエ蓋	18	0	0	1	0	18	19	19
	ヤコウガイ	0	0	1	0	16(1)	1	0	−
	ヤコウガイ蓋	3			7 (7)	3 (3)	3	10	10
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	0	2	0	0	0	2	2	2
ウミニナ科	センニンガイ	0	5	1	1	0	6	6	6
スイショウガイ科	スイショウガイ科不明	0	0	0	0	1	0	0	0
	クモガイ	0	0	1	5	38	1	5	5
	ゴホウラ	0	0	0	0	2 (2)	0	0	0
	スイジガイ	0	0	1	0	1	1	0	1
	ネジマガキガイ	1	0	0	0	0	1	1	1
	マガキガイ	20	49	25(1)	0	0	94	69	94
	ラクダガイ	0	1	0	3	5	1	4	4
タカラガイ科	タカラガイ科不明	0	0	1	1	13	1	1	1
	ハチジョウダカラ	0	0	0	1	0	0	1	1
	ハナビラダカラ	0	0	0	1	0	0	1	1
	ハナマルユキダカラ	13	1	0	1	0	14	15	15
	ホシキヌタガイ	1	1	0	0	0	2	2	2
	ホシダカラ	0	0	0	3	6	0	3	3
	ヤクシマダカラ	11	1	0	7	1	12	19	19
フジツガイ科	ホラガイ	0	0	0	1	4	0	1	1
アクキガイ科	ホソスジテツボラ	0	1	0	0	0	1	1	1
エゾバイ科	イトマキボラ	0	2	0	1	4	2	3	3
	スジグロホラダマシ	1	0	0	0	0	1	1	1
オニコブシガイ科	オニコブシガイ	1	0	0	0	0	1	1	1
イモガイ科	イモガイ科不明	0	2	6	6	6	8	8	8
	アンボシクロザメ	0	3	1	2	6	4	5	5
	キヌカツギイモガイ	0	1	0	0	0	1	1	1
	クロフモドキ	0	2	0	1	1	2	3	3
	ゴマフイモガイ	2	0	1	0	0	3	2	3
	サラサミナシガイ	0	0	0	0	1	0	0	0
	フックラキヌカツギイモ	0	1	0	0	0	1	1	1
	マダライモガイ	1	0	0	0	0	1	1	1
	ヤナギシボリイモガイ	1	0	0	0	1	1	1	1
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	1	0	0	0	0	1	1	1
ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	0	0	0	0	1	0	0	0
15科	36種	個体数							246

V・Ⅵ層集計表（二枚貝）

科	名前	完品		頂＋口		殻頂		殻頂なし2/3		破片	頂集計		口集計		個体数
		右	左	右	左	右	左	右	左		右	左	右	左	
フネガイ科	エガイ	4	4	0	0	0	1	0	0	0	4	5	4	4	5
	エガイ類	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	オオタカノハガイ	2	3	2	1	0	1	0	0	2	4	5	4	4	5
	オオミノエガイ	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	1	1
	カリガネエガイ	1	1	0	0	1	0	0	0	0	2	1	1	1	2
	リュウキュウサルボウガイ	4	14	0	0	0	3	1	4	3	4	17	5	18	18
タマキガイ科	ソメワケグリガイ	10	12	0	0	1	0	0	0	2	11	12	10	12	12
ハボウキガイ科	ハボウキガイ	0	0	0	0	2	1	2	1	3	2	1	2	1	2
ウグイスガイ目	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0
ウグイスガイ科	ウグイスガイ科不明	0	0	0	0	1	2	1	2	11	1	2	1	2	2
	アコヤガイ	0	0	0	1	17	10	17	10	8	17	11	17	11	17
	クロチョウガイ	0	0	0	0	2	11	2	11	12	2	11	2	11	11
マクガイ科	マクガイ科不明	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	1
	シュモクアオリ	0	0	0	0	0	1	9	4	0	0	1	9	4	9
	マクガイ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1
イタヤガイ科	リュウキュウオウギ	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1
ウミギクガイ科	ウミギクガイ類	24	73	29	58	44(1)	41	18	39	109	97	172	71	170	172
カキ上科	カキ類	7	5	4	0	1	0	0	0	23	12	5	11	5	12
ベッコウガキ科	シャコガキ	6	5	1	1	2	0	2	0	16	9	6	9	6	9
ツキガイ科	ツキガイ	0	0	0	1(1)	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
キクザルガイ科	キクザルガイ類	301	21	116	58	13	22	19	0	44	430	101	436	79	436
	ヒレインコガイ	8	1	1	4	0	0	0	0	1	9	5	9	5	9
ザルガイ科	アサザルガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	リュウキュウザルガイ	6	5	0	0	0	0	1	0	1	6	5	7	5	7
シャコガイ科	シャコガイ科不明	0	0	0	0	0	0	0	0	157	0	0	0	0	0
	シャゴウ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
	ヒメジャコ	9	9	7	6	9	11	0	0	8	25	26	16	15	26
	ヒレジャコ	1	1	3	4	21	10	0	0	85	25	15	4	5	25
	ミラナミ	7	1	0	4	2	0	1	1	4	9	5	8	6	9
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	15	13	8	2	1	1	0	0	0	24	16	23	15	24
バカガイ科	リュウキュウアリソガイ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1
ニッコウガイ科	ヒメニッコウガイ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
	モチヅキザラガイ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
	リュウキュウシラトリ	0	0	2	1	0	0	0	0	0	2	1	2	1	2
シオサザナミガイ科	マスオガイ	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	1
	マスオガイの仲間	0	0	2	2	0	0	0	0	0	2	2	2	2	2
	リュウキュウマスオガイ	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	1
ナタマメガイ科	オオズングリアゲマキガイ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
シジミ科	ミレナシジミ	1	1	2	2	8	13	1	1	16	11	16	4	4	16
マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ	47	38	12	10	6	7	0	0	5	65	55	59	48	65
	オキシジミ	0	1	2	2	0	2	0	0	0	2	5	2	3	5
	シラオガイ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
	ヌノメガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	ヒメリュウキュウアサリ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
20科	40種	個体数													916

V層集計表（巻貝）

科	名前	完	頂・口	殻頂	口・水管	破片	頂集計	口集計	個体数
ツタノハガイ科	オオベッコウガサガイ	2	0	2	1	6	4	3	4
アマオブネガイ科	アマオブネ	1	0	0	0	0	1	1	1
ニシキウズガイ科	サラサバテイ	1	0	4	2	14	5	3	5
	ニシキウズガイ	2	1	0	7	12	3	10	10
リュウテンサザエ科	カンギクガイ	1	2	0	0	0	3	3	3
	チョウセンサザエ	1	4	6	4	12	11	9	−
	チョウセンサザエ蓋	13	0	3	0	0	16	13	16
	ヤコウガイ	0	1	2	4	6 (1)	3	5	−
	ヤコウガイ蓋	2			8 (8)	1 (1)	9	10	10
オニノツノガイ科	コゲツノブエ	1	0	0	0	0	1	1	1
ウミニナ科	キバウミニナ	0	2	0	0	0	2	2	2
	センニンガイ	0	0	0	0	1	0	0	0
スイショウガイ科	スイショウガイ科不明	0	0	0	4	44	0	4	4
	クモガイ	0	0	0	0	1	0	0	0
	スイショウガイ	1	0	0	0	0	1	1	1
	マガキガイ	14	25	17	2	0	56	41	56
	ラクダガイ	0	0	0	1	2	0	1	1
タカラガイ科	タカラガイ科不明	0	0	0	2	23	0	2	2
	ハチジョウダカラ	0	0	0	0	1	0	0	0
	ハナビラダカラ	1	0	0	0	0	1	1	1
	ハナマルユキダカラ	12	0	0	0	0	12	12	12
	ホシダカラ	0	0	0	1	1	0	1	1
	ヤクシマダカラ	0	1	0	0	4	1	1	1
タマガイ科	タマガイ科不明	0	0	0	0	1	0	0	0
フジツガイ科	ホラガイ	0	0	0	0	9	0	0	0
アクキガイイ科	ガンゼキボラ	0	0	0	0	1	0	0	0
エゾバイ科	イトマキボラ	0	1	2	1	3	3	2	3
オニコブシガイ科	コオニコブシガイ	0	0	1	0	0	1	0	1
イモガイ科	イモガイ科不明	0	0	3	4	14	3	4	4
	アンボンクロザメ	0	0	1	0	1	1	0	1
	クロフモドキ	0	0	0	3	2	0	3	3
	コモンイモガイ	1	0	0	0	0	1	1	1
	マダライモガイ	2	0	0	0	0	2	2	2
	ヤナギシボリイモガイ	0	0	0	1	0	0	1	1
14科	28種	個体数							147

V層集計表（二枚貝）

科	名前	完品		頂＋口		殻頂		殻頂なし2/3		破片	頂集計		口集計		個体数
		右	左	右	左	右	左	右	左		右	左	右	左	
フネガイ科	エガイ	4	3	8	9	1	1	0	1	0	13	13	12	13	13
	オオタカノハガイ	1	2	1	0	2	0	0	0	2	4	2	2	2	4
	オオミノエガイ	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	1	1
	ベニエガイ	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	2	1	2	2
	リュウキュウサルボウガイ	13	7	5	0	1	0	3	8	8	19	7	21	15	21
タマキガイ科	ソメワケグリガイ	39	36	6	1	2	1	1	0	1	47	38	46	37	47
ハボウキガイ科	ハボウキガイ	0	0	0	0	1	1	0	0	8	1	1	0	0	1
ウグイスガイ目	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
ウグイスガイ科	ウグイスガイ科不明	0	0	0	0	1	1	0	0	2	1	1	0	0	1
	アコヤガイ	0	0	5	2	10	9	0	0	2	15	11	5	2	15
	クロチョウガイ	0	0	0	1	8	6	0	0	25	8	7	0	1	8
マクガイ科	マクガイ科不明	0	0	0	0	1	3	0	0	3	1	3	0	0	3
	シュモクアオリ	0	0	0	0	13(2)	21	0	0	24	13	21	0	0	21
イタヤガイ科	イタヤガイ科不明	0	1	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	1	1
	リュウキュウオウギ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
ウミギクガイ科	ウミギクガイ類	54	133	25	41	40	34	27	82	112	119	208	106	256	256
イタボガキ科	オハグロガキ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
カキ上科	カキ類	11	0	12	3	0	0	0	1	39	23	3	23	4	23
ベッコウガキ科	シャコガキ	3	5	0	0	1	2	2	1	35	4	7	5	6	7
キクザルガイ科	キクザルガイ類	822	59	218	106	52	13	39	66	167	1092	178	1079	231	1092
	ヒレインコガイ	12	1	4	2	1	2	1	0	19	17	5	17	3	17
ザルガイ科	カワラガイ	9	14	2	2	1	0	0	0	0	12	16	11	16	16
	リュウキュウザルガイ	12	4	1	1	0	0	1	1	3	13	5	14	6	14
シャコガイ科	シャコガイ科不明	0	0	0	0	2	1	0	0	258	2	1	0	0	2
	シャゴウ	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0
	シラナミ	1	3	4	7	0	2	0	0	7	5	12	5	10	12
	ヒメジャコ	4	11	9	10	7	10	1	0	43	20	31	14	21	31
	ヒレジャコ	2	2	2	3	6	12	0	0	64	10	17	4	5	17
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	48	74	16	6	5	2	0	0	0	69	82	64	80	82
バカガイ科	リュウキュウバカガイ	0	1	0	0	2	1	0	0	0	2	2	0	1	2
ニッコウガイ科	サメザラガイ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
	ヒメニッコウガイ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
	モチヅキザラガイ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
シオサザナミガイ科	マスオガイ	0	1	0	0	2	0	0	0	1	2	1	0	1	2
	マスオガイ仲間	2	0	2	3	1	1	0	0	1	5	4	4	3	5
	リュウキュウマスオガイ	6	7	2	1	1	2	0	0	0	9	10	8	8	10
シジミ科	シレナシジミ	8	9	15(1)	7(1)	11	11	0	1	24	34	27	23	17	34
マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ	162	174	10	10	10	11	0	0	5	182	195	172	184	195
	アラヌノメガイ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
	オキシジミ	3	0	2	1	2	2	0	0	0	7	3	5	1	7
	スダレハマグリ	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1
	ヌノメガイ	0	0	0	0	0	1	0	0	7	0	1	0	0	1
	ホソスジイナミガイ	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	1	0	1
	ユウカゲハマグリ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
	リュウキュウアサリ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
19科	40種	個体数													1973

Ⅳ層集計表（巻貝）

科	名前	完	頂・口	殻頂	口・水管	破片	頂集計	口集計	個体数
ヒザラガイ科	リュウキュウヒザラガイ					1	0	0	0
ツタノハガイ科	オオベッコウガサガイ			1	1		1	1	1
アマオブネガイ科	アマオブネガイ科不明			2	3		2	3	3
	アマオブネ	27			3		27	30	30
	アラスジアマオブネガイ	1					1	1	1
	ニシキアマオブネ	2					2	2	2
ニシキウズガイ科	サラサバテイ				6	31	0	6	6
	ニシキウズガイ		3	1	11	10	4	14	14
リュウテンサザエ科	カンギクガイ	10	5	1		1	16	15	16
	チョウセンサザエ			12	3	44	12	3	−
	チョウセンサザエ蓋	7		7			14	7	14
	ヤコウガイ				1	1	0	1	−
	ヤコウガイ蓋		3 (1)				3	3	3
オニノツノガイ科	オニノツノガイ					1	0	0	0
ウミニナ科	センニンガイ			1			1	0	1
	マドモチウミニナ			1			1	0	1
スイショウガイ科	スイショウガイ科不明			3	26	36	3	26	26
	クモガイ		1	5		40	6	1	6
	ゴホウラ					2 (1)	0	0	0
	スイジガイ		1 (1)	1		1 (1)	2	1	2
	スイショウガイ	2					2	2	2
	マガキガイ	9	34	42 (1)		1	85	43	85
タカラガイ科	タカラガイ科不明				1	36	0	1	1
	ハナビダカラ	1			2		1	3	3
	ハナマルユキダカラ	4	1		2	1	5	7	7
	ホシダカラ	1		1	4	9	2	5	5
	ヤクシマダカラ	1	3	1	23	9	5	27	27
タマガイ科	リスガイ	1					1	1	1
フジツガイ科	ホラガイ			1	2	15	1	2	2
アクキガイ科	アクキガイ科不明			1	1		1	1	1
エゾバイ科	イトマキボラ		1		4	5	1	5	5
オニコブシガイ科	コオニコブシガイ					1	0	0	0
マクラガイ科	マクラガイ科不明	1					1	1	1
イモガイ科	イモガイ科不明		2	9	8	21	11	10	11
	アカシマミナシガイ		1				1	1	1
	アンボンクロザメ			15	3	2	15	3	15
	イタチイモガイ		1				1	1	1
	クロフモドキ			3		6	3	0	3
	クロミナシガイ	1					1	1	1
	ニシキミナシ					2	0	0	0
タケノコガイ科	タケノコガイ	1					1	1	1
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	24	1		1		25	26	26
ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	4				2	4	4	4
オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ		4			2	4	4	4
陸産貝	不明	2	1		4	1	3	7	7
20 科	36 種	個体数							340

Ⅳ層集計表（二枚貝）

科	名前	完品		殻頂・腹縁		殻頂		殻頂なし2/3		破片	頂集計		口集計		個体数
		右	左	右	左	右	左	右	左		右	左	右	左	
フネガイ科	フネガイ科不明			1	2				1	8	1	2	1	3	3
	エガイ	12	9	4	5			1			16	14	17	14	17
	オオタカノハガイ	1	3	1	1		1			8	2	5	2	4	5
	オオミノエガイ	1									1	0	1	0	1
	カリガネエガイ	8	1	1							9	1	9	1	9
	ベニエガイ	1	3								1	3	1	3	3
	リュウキュウサルボウガイ	28	33	4	5	2	1	22	22	30	34	39	54	60	60
タマキガイ科	ソメワケグリ	110	99	22	25			12	15	5	132	124	144	139	139
ハボウキガイ科	ハボウキガイ						2			1	0	2	0	0	2
ウグイスガイ目	不明									10	0	0	0	0	0
ウグイスガイ科	ウグイスガイ科不明					1				1	1	0	0	0	1
	アコヤガイ					4	2			1	4	2	0	0	4
	クロチョウガイ					8	9			14	8	9	0	0	9
マクガイ科	マクガイ科不明					8	4			3	8	4	0	0	8
	シュモクアオリ	1				1				14	2	0	1	0	2
シュモクガイ科	シュモクガイ					1					1	0	0	0	1
イタヤガイ科	イタヤガイ科不明		1							18	0	1	0	1	1
ウミギクガイ科	ウミギクガイ類	56	58	81	73	74	39	44	77	217	211	170	181	208	211
イタボガキ科	オハグロガキ		1		2					1	0	3	0	3	3
カキ上科	カキ類	39	5	7	3	2	2	1		58	48	10	47	8	48
ベッコウガキ科	シャコガキ	6	5		3	1		2		52	7	8	8	8	8
キクザルガイ科	キクザルガイ類	1058	106	331	121	109	104	46	6	276	1498	331	1435	233	1498
	ヒレインコガイ	20	2	15	2	4	7			44	39	11	35	4	39
ザルガイ科	ザルガイ科不明	13	10	1	4			2	1	1	14	14	16	15	16
	カワラガイ	17	7	5(1)	6				4	2	22	13	22	17	22
	リュウキュウザルガイ	4	4	2	2			1		1	6	6	7	6	7
シャコガイ科	シャコガイ科不明					3	1			219	3	1	0	0	3
	シャゴウ									4	0	0	0	0	0
	シラナミ	4	6	4	3	1	1			14	9	10	8	9	10
	ヒメジャコ	30	15	26(1)	21	12	24	3	2	53	68	60	59	38	68
	ヒレジャコ	2	4	6	5	10	9			313	18	18	8	9	18
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	39	70	38	54					1	77	124	77	124	124
シオサザナミ科	マスオガイ	3	1	4	3	1				2	8	4	7	4	8
	マスオガイの仲間	1	2		1		1				1	4	1	3	4
	リュウキュウマスオガイ	11	6	1	1	1	2			3	13	9	12	7	13
シジミ科	シレナシジミ	14	19	11(1)	17	4	9	2	3	32	29	45	27	39	45
マルスダレガイ科	マルスダレガイ科不明		1								0	1	0	1	1
	アラスジケマンガイ	476	572	405	442	27	29	8	8	17	908	1043	889	1022	1043
	アラヌノメガイ	2	1								2	1	2	1	2
	イナミガイ		1								0	1	0	1	1
	オキシジミ	9	4	4	8	1	1	1	1	5	14	13	14	13	14
	スダレハマグリ	2	2	1	1						3	3	3	3	3
	ヌノメガイ									7	0	0	0	0	0
	ヒメアサリ		1								0	1	0	1	1
	ホソスジイナミガイ			1							1	0	1	0	1
	ヨロイガイ		1								0	1	0	1	1
18科	38種	個体数													3477

Ⅲ層集計表（巻貝）

科	名前	完	頂・口	殻頂	口・水管	破片	頂集計	口集計	個体数
ヒザラガイ科	リュウキュウヒザラガイ					1	0	0	0
ツタノハガイ科	オオツタノハガイ					1 (1)	0	0	0
	オオベッコウガサガイ	1		2 (1)	1	10(1)	3	2	3
ミミガイ科	イボアナゴウ			2		1	2	0	1
アマオブネガイ科	アマオブネガイ科不明	1	2		3		3	6	6
	アマオブネ	200	61	11	19	16	272	280	280
	イシマキガイ	2	1		1		3	4	4
	オオアマガイ	1					1	1	1
	オオマルアマオブネ	17	6	1	1	1	24	24	24
	カノコガイ	2	7	2	2	1	11	11	13
	コシダカアマガイ	1			1		1	2	2
	ニシキアマオブネ	22	12	6	4	4	40	38	40
	フトスジアマガイ			2			2	0	2
	マルアマオブネ	12					12	12	12
ニシキウズガイ科	オキナワイシダタミ	27	4		2	2	31	33	33
	ギンタカハマ			1		6	1	0	1
	クマノコガイ	1	1	6	1		8	3	8
	サラサバテイ		11	8	29	155	19	40	40
	ニシキウズガイ	4	7	7	31	54	18	42	42
リュウテンサザエ科	カンギクガイ	117	59	11	13	11	187	189	189
	カンギク蓋	1					1	1	−
	コシダカサザエ	1					1	1	1
	チョウセンサザエ	4	30	24	14	45	58	48	−
	チョウセンサザエ蓋	133	98	168		30	399	231	399
	ヤコウガイ			1		24	1	0	−
	ヤコウガイ蓋	1		2 (1)		11(11)	3	1	3
オニノツノガイ科	オオシマカニモリ	1					1	1	1
	オニノツノガイ	1		6	1	2	7	2	7
	クワノミカニモリ		4				4	4	4
	コオニノツノガイ	1					1	1	1
	ヨコワカニモリ	1					1	1	1
ウミニナ科	キバウミニナ		7	2	1		9	8	9
	キバウミニナ類			10	11	10	10	11	11
	センニンガイ			2		1	2	0	2
	マドモチウミニナ	1	33	63	11	5	97	45	97
タマキビガイ科	ヒメウズラタマキビ	1					1	1	1
スイショウガイ科	スイショウガイ科不明	15	58	9	24	71	82	97	97
	イボソデガイ		1				1	1	1
	ウラスジマイノソデ			2			2	0	2
	オハグロガイ	1					1	1	1
	クモガイ		4	10	7	35	14	11	14
	ゴホウラ	1				10(1)	1	1	1
	スイジガイ		2	4	3	12	6	5	6
	スイショウガイ	14	9	4	10	4	27	33	33
	ネジマガキガイ						0	0	1
	マイノソデガイ	1					1	1	1
	マガキガイ	124	1401	581	59	57	2106	1584	2106
	ラクダガイ			2		3	2	0	2
タカラガイ科	タカラガイ科不明			1		106	1	0	1
	ハチジョウダカラ				1	1	0	1	1
	ハナビラダカラ	2				1	2	2	2
	ハナマルユキダカラ	8	2		2	1	10	12	12

科	名前	完	頂・口	殻頂	口・水管	破片	頂集計	口集計	個体数
タカラガイ科	ホシキヌタガイ	1	1		2	5	2	4	4
	ホシダカラ	1			1	21	1	2	2
	ヤクシマダカラ	2	3		9	59	5	14	14
タマガイ科	トミガイ			1			1	0	1
	トミガイ類			1			1	0	1
	ネズミガイ	1					1	1	1
	ホウシュノタマガイ	2					2	2	2
	リスガイ			1			1	0	1
トウカムリガイ科	アメガイ			1			1	0	1
ヤツシロガイ科	ヤツシロガイ科不明					1	0	0	*
	スクミウズラガイ			1			1	0	1
フジツガイ科	サツマボラ		1				1	1	1
	シオボラ	3					3	3	3
	シノマキガイ			1	1		1	1	1
	ホラガイ		1			18	1	1	1
オキニシ科	イワカワウネボラ		1				1	1	1
	オキニシ		1	1			2	1	2
	シロナルトボラ					1 (1)	0	0	0
アクキガイ科	アクキガイ科不明					2	0	0	0
	アカイガレイシ			1			1	0	1
	ガンゼキボラ	7	2	1	4		10	13	13
	シラクモガイ	4	3	2	2	1	9	9	9
	ツノテツレイシガイ	2	1				3	3	3
	ツノレイシガイ		1				1	1	1
	テツボラ				2		0	2	2
	テングガイ				1		0	1	1
エゾバイ科	イトマキボラ	6	89	45	94	112	140	189	189
	シマベッコウバイ	2					2	2	2
	チトセボラ	3		3	1	7	6	4	6
オニコブシガイ科	オニコブシガイ科不明					1	0	0	0
	オニコブシガイ			2			2	0	2
	コオニコブシガイ	3	7	10	12	12	20	22	22
マクラガイ科	サツマビナ	4			4		4	8	8
イモガイ科	イモガイ科不明	4		15(1)	19	55(1)	19	23	23
	アカシマミナシガイ					1	0	0	0
	アンボンクロザメ	55(49)	4	4	2	13	63	61	63
	カバミナシガイ			1			1	0	1
	クロフモドキ	19(19)	2	3	5	8	24	26	26
	クロミナシガイ	3	2	2	2	2	7	7	7
	ゴマフイモガイ				1		0	1	1
	コモンイモガイ	4		1	2	2	5	6	6
	サラサミナシガイ	2	1				3	3	3
	ニシキミナシ				1	1	0	1	1
	マダライモガイ	5	5	2	1	1	12	11	12
	ヤナギシボリイモガイ					1	0	0	0
カラマツガイ科	クロカラマツガイ	1					1	1	1
キセルガイ科	ツヤギセルガイ	7					7	7	7
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	233	101	22	5	1	356	339	356
ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	5	13	2	10	46	20	28	28
オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	6	8	6		2	20	14	20
	バンダナマイマイ	58	47	27	34	3	132	139	139
26 科	93 種	個体数							4509

Ⅳ層集計表（二枚貝）

科	名前	完品		殻頂・腹縁		殻頂		殻頂なし2/3		破片	頂集計		口集計		個体数
		右	左	右	左	右	左	右	左		右	左	右	左	
フネガイ科	エガイ	33	39	14	9	2	1	5	3	4	49	49	38	42	49
	エガイ類			2	2				1	17	2	2	0	1	2
	オオタカノハガイ		5	1	2	1	1	2		1	2	8	2	5	8
	オオミノエガイ	4	11	2	2	1	1		2	4	7	14	4	13	14
	カリガネエガイ	6	5		1		2				6	8	6	5	8
	ベニエガイ	39	47	12	14	6	5	1	1	9	57	66	40	48	66
	リュウキュウサルボウ	79	95	9	11	10	10	30	31	227	98	116	109	126	126
タマキガイ科	ソメワケグリ	304	292	72	84	38	62	58	67	71	414	438	362	359	438
イガイ科	クジャクガイ	1	1								1	1	1	1	1
ハボウキガイ科	ハボウキガイ				2						0	2	0	0	2
ウグイスガイ科	ウグイスガイ科不明									8	0	0	0	0	0
	アコヤガイ			217	179			2		298	217	179	2	0	217
	クロチョウガイ			10	25					52	10	25	0	0	25
マクガイ科	マクガイ科不明			3	4					9	3	4	0	0	4
	シュモクアオリ				1					7	0	1	0	0	1
シュモクガイ科	シュモクガイ					1					1	0	0	0	1
イタヤガイ科	リュウキュウオウギ						1				0	1	0	0	1
ウミギクガイ科	ウミギクガイ類	40	41	34	25(1)	8	8	20	27	233	82	74	60	68	82
ミノガイ科	ミノガイ	1	1	1	2					1	2	3	1	1	3
イタボガキ科	オハグロガキ		3		1		1		1		0	5	0	4	5
カキ上科	カキ類	40	65	10	0	22	22	20	9	58	72	84	60	74	84
ベッコウガキ科	シャコガキ	3	3		3	1	1	1		38	4	7	4	3	7
ツキガイ科	ヒメツキガイ		1								0	1	0	1	1
キクザルガイ科	キクザルガイ類	767	159	381	151	260	51	149	85	660	1408	361	916	244	1408
	ヒレインコガイ	7	4	6	1	4	2	2	1	15	17	7	9	5	17
ザルガイ科	オオヒシガイ		1								0	1	0	1	1
	カワラガイ	38	38	34	44	7	11		1	45	79	93	38	39	93
	リュウキュウザルガイ	16	19	2	3	4	1 (1)	1	2	10	22	23	17	21	23
シャコガイ科	シャゴウ	1	3	2	3				1	47	3	6	1	4	6
	シャコガイ科類									1561	0	0	0	0	0
	シラナミ	20	20	9	3	2	3 (2)	1	2	28	31	26	21	22	31
	ヒメシャコ	165	138	92	123	29(3)	19(1)	4 (1)	12(1)	385	286	280	169	150	286
	ヒレシャコ	8	6	11	8	2	2	5		224	21	16	13	6	21
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	299	291	47	56	259	217	31	27	23	605	564	330	318	605
	ナミノコマスオ	1				2	1				3	1	1	0	3
バカガイ科	リュウキュウバカガイ	1								1	1	0	1	0	1
ニッコウガイ科	サメザラガイ	1									1	0	1	0	1
	ニッコウガイ	1		1							2	0	1	0	2
フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコガイ	1	2								1	2	1	2	2
シオサザナミ科	マスオガイ	2	2		1	2	1	2		1	4	4	4	2	4
	マスオガイの仲間					2					2	0	0	0	2
	リュウキュウマスオガイ	45	43	55	65	3	7	2	1	79	103	115	47	44	115
シジミ科	シレナシジミ	63	71	57	55	15	12	3	1	493	135	138	66	72	138
マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ	2701	2563	1134	1191	108	120	10	20	884	3943	3874	2711	2583	3943
	アラヌノメガイ									3	0	0	0	0	0
	イナミガイ		1								0	1	0	1	1
	オイノカガミガイ	1	3			2					3	3	1	3	3

科	名前	完品		殻頂・腹縁		殻頂		殻頂なし2/3		破片	頂集計		口集計		個体数
		右	左	右	左	右	左	右	左		右	左	右	左	
マルスダレガイ科	オキシジミ	46	36	28	29	4	2	1	1	19	78	67	47	37	78
	カイコアサリ		2			1					1	2	0	2	2
	スダレハマグリ	35	43	38	28	2	3	1	1	62	75	74	36	44	75
	ヌノメガイ			2	3					17	2	3	0	0	3
	ヒメリュウキュウアサリ		1								0	1	0	1	1
	ホソスジイナミガイ		2								0	2	0	2	2
	マルスダレガイ					1					1	0	0	0	1
	ユウカゲハマグリ	1	2	1	3	1	1				3	6	1	2	6
24科	53種	個体数													8019

※（ ）は製品

個体数の算出方法

巻貝

「完形」・「殻頂のみ」・「殻頂から殻口まであるが破損しているもの」・「殻口もしくは水管部だけのもの」・「破片」に分け、次に「殻頂部があるも」のと「殻口もしくは水管があるも」のに分類集計し、多い方を算出個体数とした。

殻頂：螺頭の頂上が2／3以上残るもの。
殻口：科や類によって異なるが内唇部を2／3以上含むもの、水管部を含むもののいずれかでカウントを行った。

その他に殻口部のカウントに含む部位を下図に示す。

二枚貝

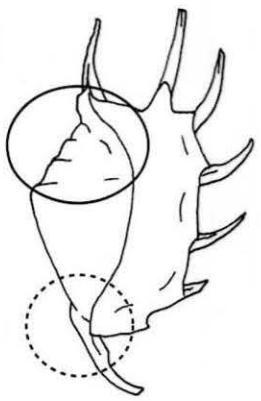
右殻と左殻に分け、さらに両者を「完形」・「殻頂のみ」・「殻頂から腹縁まであるが破損しているもの」「腹縁のみ」・「破損」に分け、次に「殻頂があるもの」と「腹縁があるも」のに分類集計し多い方を算出個体数とした。

腹縁があるものは全体の2／3以上が残り、閉殻筋痕の位置などで左右が判別できたものとする。

カウントに利用したそれぞれの部位は下図に示す。

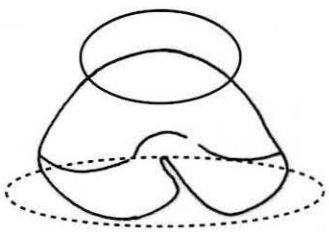
スイショウガイ科

殻頂の2／3の残存部があるものを殻頂、水管部の2／3以上あるものを水管部とした。



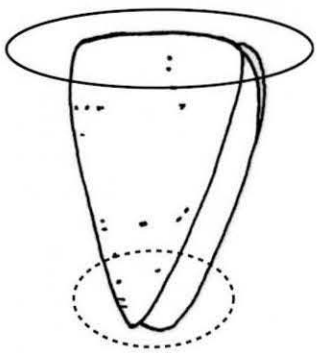
タカラガイ科

外唇と内唇の両方が残っているものを水管部、背面の2／3以上残っているものを殻口としてカウントした。



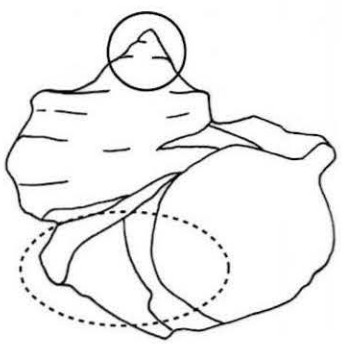
イモガイ科

合体層部の殻底が残っているものを水管部、螺頭部が2／3以上残っているものを殻頂としてカウントした。



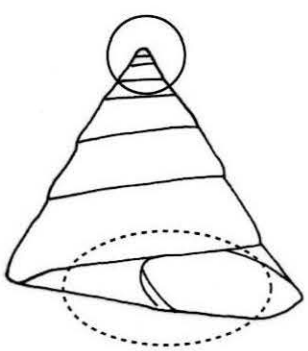
ヤコウガイなど

繍体部（ほうたいぶ）を含むものを殻口、螺塔部が残っているものを殻頂としてカウントした。



ニシキウズガイ科

内口部を含むものを殻口、螺塔部が残っているものを殻頂としてカウントした。



十、獣魚骨

(1) はじめに

大堂原貝塚からは、多くの骨が出土しており、今回層位的に取上げた骨の種類を明らかにし、当時の動物利用等に関する情報を得ることにした。

(2) 試料

試料は、Ⅲ層～Ⅷ層より層位ごとに取り上げられた骨で、Ⅲ層がＮＯ1－6、Ⅳ層がＮＯ7－10、Ⅴ層がＮＯ11、Ⅴ・Ⅵ層がＮＯ12－13、Ⅵ層がＮＯ14－16、Ⅶ層がＮＯ17－20、Ⅷ層がＮＯ21－27の番号が付され、さらに枝番号に分かれており、主だった骨だけでも一七〇〇点を数える。試料の詳細については、結果とともに表示する。

(3) 分析方法

一部の試料については、一般工作用接着剤で接合する。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から種類および部位の特定を行う。計測はデジタルノギスを用いて測定する。なお、同定および解析には、金子浩昌先生に協力をお願いし、署名原稿として結果を頂いた。

(4) 結果および考察

①種類別出土骨の記載

検出された分類群の一覧を表1に、同定結果を表2、層位別出土状況を表3に示す。以下、種類ごとに結果を示す。

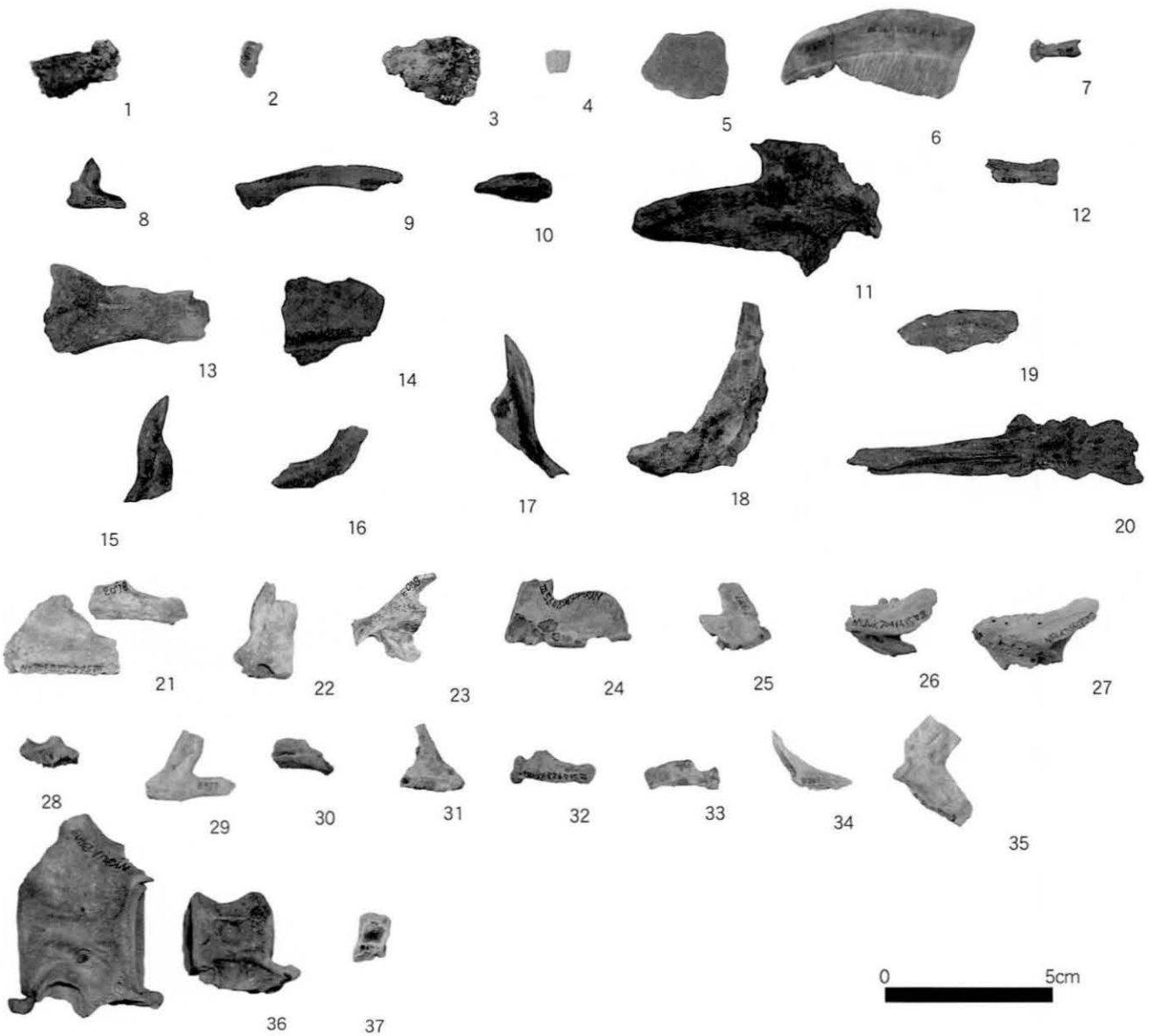
【サンゴ類】

殻がⅤ層で一点、Ⅴ・Ⅵ層で二点、合計三点確認される。いずれも破片である。

【ウニ類】

Ⅳ層でのみ殻が一点確認される。

【コウイカ類】



1.サンゴ類(Ⅴ・Ⅵ層)
2.サンゴ類(Ⅴ・Ⅵ層)
3.サンゴ類(Ⅴ層)
4.ウニ類殻(Ⅳ層)
5.コウイカ類軟甲(Ⅲ層)
6.マダラトビエイ左下顎歯板(Ⅳ層)
7.アナゴ類鋤骨(Ⅴ・Ⅵ層)
8.ハタ類左前上顎骨(Ⅶ層)
9.ハタ類右上顎骨(Ⅶ層)
10.ハタ類左角骨(Ⅶ層)
11.ハタ類右角骨(Ⅶ層)
12.ハタ類右歯骨(Ⅶ層)
13.ハタ類左角舌骨(Ⅶ層)
14.ハタ類舌骨(Ⅶ層)
15.ハタ類左擬鎖骨(Ⅶ層)
16.ハタ類左擬鎖骨(Ⅶ層)
17.ハタ類右擬鎖骨(Ⅶ層)
18.ハタ類右前鰓蓋骨(Ⅶ層)
19.ハタ類右上擬鎖骨(Ⅶ層)
20.ハタ類副蝶形骨(Ⅶ層)
21.フエダイ類左前上顎骨(Ⅶ層)
22.フエダイ類右前上顎骨(Ⅶ層)
23.クロダイ類左角骨(Ⅶ層)
24.クロダイ類左前上顎骨(Ⅲ層)
25.クロダイ類右前上顎骨(Ⅳ層)
26.クロダイ類左歯骨(Ⅶ層)
27.クロダイ類左歯骨(Ⅶ層)
28.クロダイ類右舌骨(Ⅶ層)
29.ハマフエフキ左前上顎骨(Ⅳ層)
30.ハマフエフキ右前上顎骨(Ⅷ層)
31.ハマフエフキ右前上顎骨(Ⅳ層)
32.ハマフエフキ左上顎骨(Ⅲ層)
33.ハマフエフキ右上顎骨(Ⅳ層)
34.ハマフエフキ右歯骨(Ⅶ層)
35.ハマフエフキ左角骨(Ⅶ層)
36.フエフキダイ類腹椎(Ⅶ層)
37.フエフキダイ科?椎骨(Ⅲ層)

Ⅲ層でのみ軟骨(貝殻)が一点確認される。

【マダラトビエイ】

Ⅳ層でのみ確認される。確認された部位は、V型を呈すると思われる左下顎歯板片である。推定される歯板の幅九〇・〇㎜前後である。

【アナゴ類】

V・Ⅵ層で確認される。ホラアナゴ科もしくはアナゴ科の鋤骨である。吻端幅七・一九㎜を計る。

【ハタ類】

Ⅲ層、Ⅵ層で歯骨が、Ⅶ層で左前上顎骨、右上顎骨、左右角骨、右歯骨、左角舌骨、舌骨、左前鰓蓋骨、右上擬鎖骨、左右擬鎖骨、副蝶形骨などが確認される。顎骨、鰓蓋諸骨が少なく、また破損標本が多く、同定が困難である。

【フエダイ類】

遺骸の検出は少ない。Ⅶ層で左右前上顎骨、左角骨が確認される程度である。

【クロダイ類】

やや多く検出されている。Ⅷ層にすでにみられ、Ⅳ層とⅢ層に認められる。Ⅳ層でみられた右側歯骨全長四五・九七㎜が最大標本である。

【ハマフエフキ】

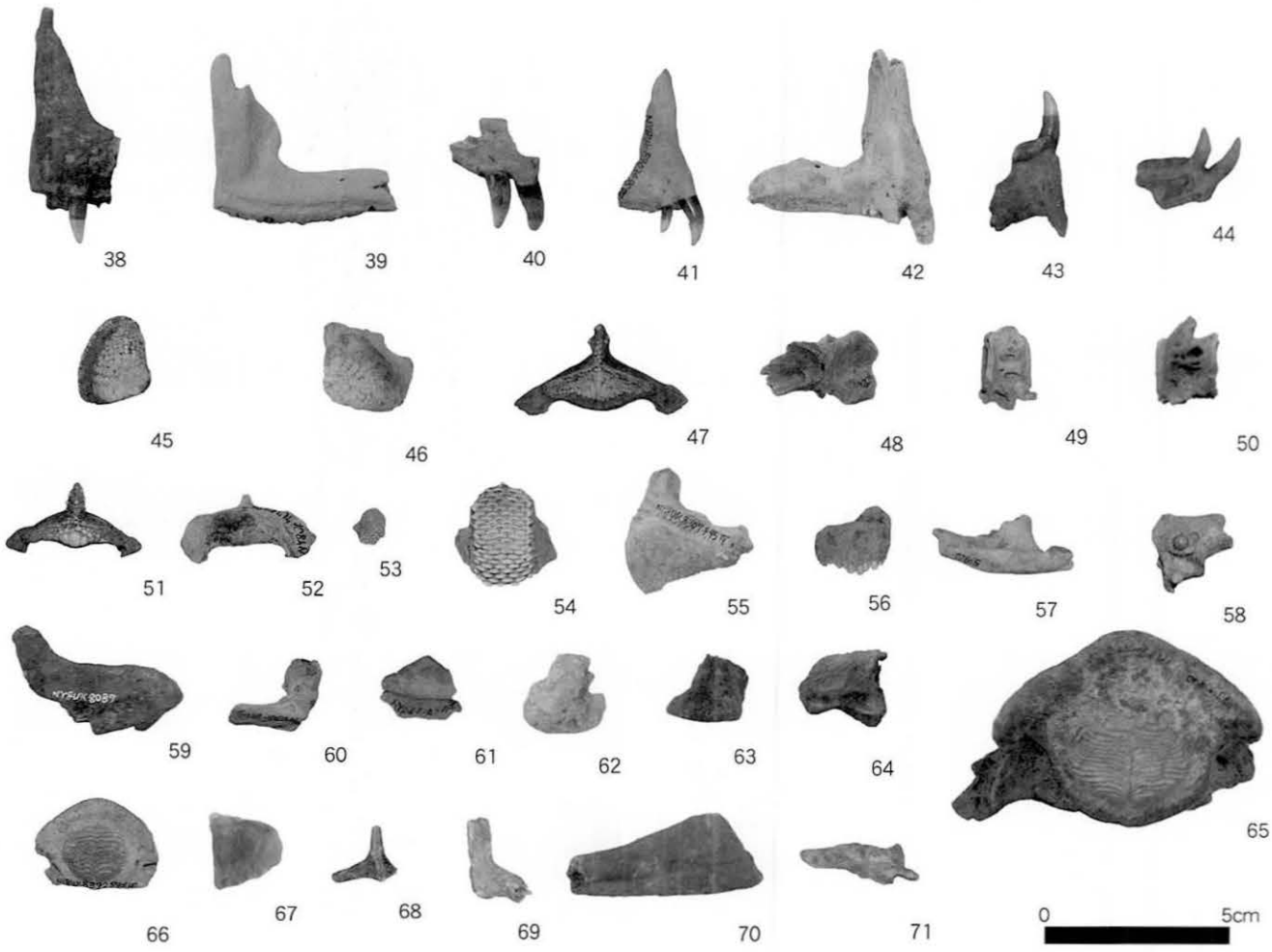
検出量は少ない。

【フエフキダイ類】

遺骸の検出は少なかった。Ⅶ層で腹椎が確認される程度である。

【コブダイ】

Ⅲ層で多数の下咽頭骨が出土している。その他の部位については、上咽頭歯が数個みられ、前上顎骨や歯骨などの断片が確認される。それ以外の層準では、Ⅳ層で下咽頭歯が十五点と少なくなり、V層・Ⅵ層で出土せず、Ⅶ層で下咽頭骨・前上顎骨・歯骨が数点、Ⅷ層で少数の前上顎骨が出土する。



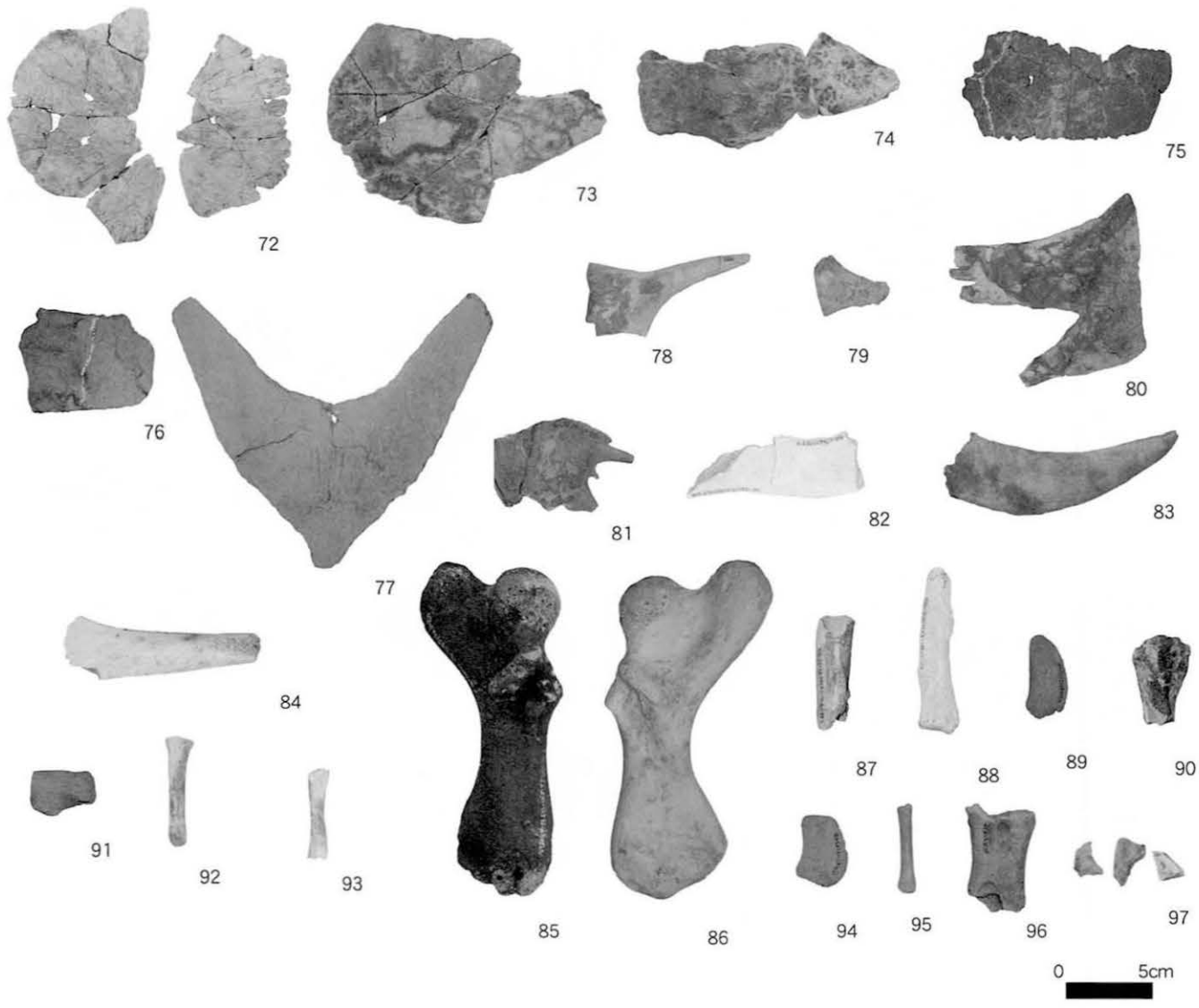
38.コブダイ左前上顎骨(Ⅷ層)
42.コブダイ右前上顎骨(Ⅲ層)
46.コブダイ右上咽頭骨(Ⅲ層)
50.コブダイ尾椎(Ⅷ層)
54.ナガブダイ左右下咽頭骨(Ⅲ層)
58.ブダイ類左歯骨(Ⅶ層)
62.カワハギ類左前上顎骨(Ⅲ層)
66.ハリセンボン左右歯骨(Ⅶ層)
70.魚類左上顎骨(Ⅲ層)

39.コブダイ左前上顎骨(Ⅷ層)
43.コブダイ左歯骨(Ⅶ層)
47.コブダイ下咽頭骨(Ⅶ層)
51.タキベラ左右咽頭骨(Ⅶ層)
55.ブダイ類左前上顎(Ⅳ層)
59.ブダイ類右歯骨(Ⅳ層)
63.フグ類右前上顎骨(Ⅲ層)
67.ハリセンボン歯(Ⅳ層)
71.魚類鰓把(Ⅳ層)

40.コブダイ右前上顎骨(Ⅷ層)
44.コブダイ右歯骨(Ⅲ層)
48.コブダイ基後頭骨(Ⅲ層)
52.カンムリベラ下咽頭骨(Ⅲ層)
56.ブダイ類右前上顎骨(Ⅲ層)
60.ブダイ類右方骨(Ⅶ層)
64.ハリセンボン左主上顎骨(Ⅳ層)
68.ハリセンボン類鰓蓋(Ⅲ層)

41.コブダイ右前上顎骨(Ⅶ層)
45.コブダイ左上咽頭骨(Ⅲ層)
49.コブダイ腹椎(Ⅶ層)
53.ナンヨウブダイ下咽頭骨(Ⅶ層)
57.ブダイ類左上顎骨(Ⅳ層)
61.ブダイ類上咽頭骨(Ⅲ層)
65.ハリセンボン左右上顎骨(Ⅳ層)
69.魚類左前上顎骨(Ⅲ層)

【タキベラ】
Ⅶ層とⅢ層で下咽頭骨が確認される。
【カンムリベラ】
Ⅲ層で下咽頭骨が一点確認される。
【ナンヨウブダイ】
Ⅶ層で下咽頭骨が一点確認される。
【ナガブダイ】
Ⅲ層で上咽頭骨が一点確認される。幅九・一四㎜を計る。
【ブダイ類】
Ⅲ層で認められた中には、左前上顎骨長三五・〇㎜を計り、歯骨もほぼ同大の標本が認められる。
【カワハギ類】
Ⅲ層で前上顎骨がみられる。現長二三・〇㎜を計る。
【フグ類】
Ⅲ層で右前上顎骨が1点確認される。
【ハリセンボン類】
Ⅳ層でみられた上顎骨は幅六七・〇㎜を計測したが、他にもこのサイズの顎骨をみることができる。
【不明魚種】
左前上顎骨、左上顎骨、左方骨、左前鰓蓋骨、右主鰓蓋骨、尾椎、椎骨、左上擬鎖骨、鰓把、鰭棘等が確認される。
【アオウミガメ】
Ⅲ層では、左右上腕骨、右尺骨が確認される。右上腕骨は、大型で骨体部のみを残す。骨体側面に削ったような痕跡をみる。最小径四三・〇㎜前後を計り、甲長八一・五㎝前後と推定される。Ⅳ層では、第一背甲板、第三背甲板、剣状腹板が確認される。Ⅴ・Ⅵ層では、背甲板、中腹板、腹甲板、右上腕骨が確認される。中腹板は、近位突起で、突起全長五八・〇㎜を計り、やや小さい個体である。右上腕骨は、ほぼ完存し、全長一九三・六九㎜、骨体最小径三六・一一㎜、全体的ににであるが特に前面に黒く煤



72.アオウミガメ左第1背甲板(Ⅳ層)
73.アオウミガメ右第1背甲板(Ⅳ層)
74.アオウミガメ第3背甲板(Ⅳ層)
75.アオウミガメ右第5背甲板(Ⅷ層)
76.アオウミガメ右第7背甲板(Ⅷ層)
77.アオウミガメ左右背甲板臀部側(Ⅷ層)
78.アオウミガメ右中腹板(Ⅴ・Ⅵ層)
79.アオウミガメ腹甲板(Ⅴ・Ⅵ層)
80.アオウミガメ左下腹板(Ⅷ層)
81.アオウミガメ右下腹板(Ⅷ層)
82.アオウミガメ左剣状腹板(Ⅷ層)
83.アオウミガメ右剣状腹板(Ⅳ層)
84.アオウミガメ左肩甲骨(Ⅶ層)
85.アオウミガメ右上腕骨(Ⅴ・Ⅵ層)
86.アオウミガメ左上腕骨(Ⅷ層)
87.アオウミガメ左橈骨(Ⅶ層)
88.アオウミガメ右橈骨(Ⅶ層)
89.アオウミガメ右尺骨(Ⅷ層)
90.アオウミガメ右尺骨(Ⅲ層)
91.アオウミガメ右中間手根骨(Ⅷ層)
92.アオウミガメ左腓骨(Ⅷ層)
93.アオウミガメ左腓骨(Ⅷ層)
94.アオウミガメ左第1趾基節骨(Ⅷ層)
95.アオウミガメ指骨(Ⅷ層)
96.アカウミガメ左上腕骨(Ⅲ層)
97.イシガメ類甲骨板(Ⅲ層)

のようなものが付着する。甲長八〇cmに近い大きさの個体と推定される。Ⅶ層は、左肩甲骨と左右橈骨が確認される。右橈骨の全長は九五・七七mmを計る。

Ⅷ層は、最も多くの遺骸が出土している。背甲板の多くは破損したが、腹甲骨板は原形を止める試料が認められた。なお、これらの中には表面が被熱して破損している標本があった。また、前烏口骨をみると、左側二個、さらに別個体の左側前烏口骨片二点があり、少なくとも四個体になる。また、頭骨は、左右後側頭骨、後頭骨、口蓋部の翼口蓋骨などがみられた。同一個体である。やや若い個体と思われる。前頭骨、上顎骨は含まれていない。全長一三〇・〇mm前後の頭骨であったと推定される。

なお、四肢骨計測値は、左烏口骨の全長二二四・〇mm前後、左上腕骨の全長一九一・八三mm、骨体最小幅三八・三九mm、右橈骨の全長一二三・三六mm、右大腿骨の骨体最小幅一九・九〇mm、左大腿骨の骨体最小幅二二・〇六mm、右脛骨の全長八二・六六mm、近位骨端幅二六・九六mm、骨体最小幅一四・七二mmを計る。

【アカウミガメ】
Ⅲ層で左上腕骨が確認される。

【イシガメ類】
Ⅲ層で甲骨板が僅かに確認される程度である。

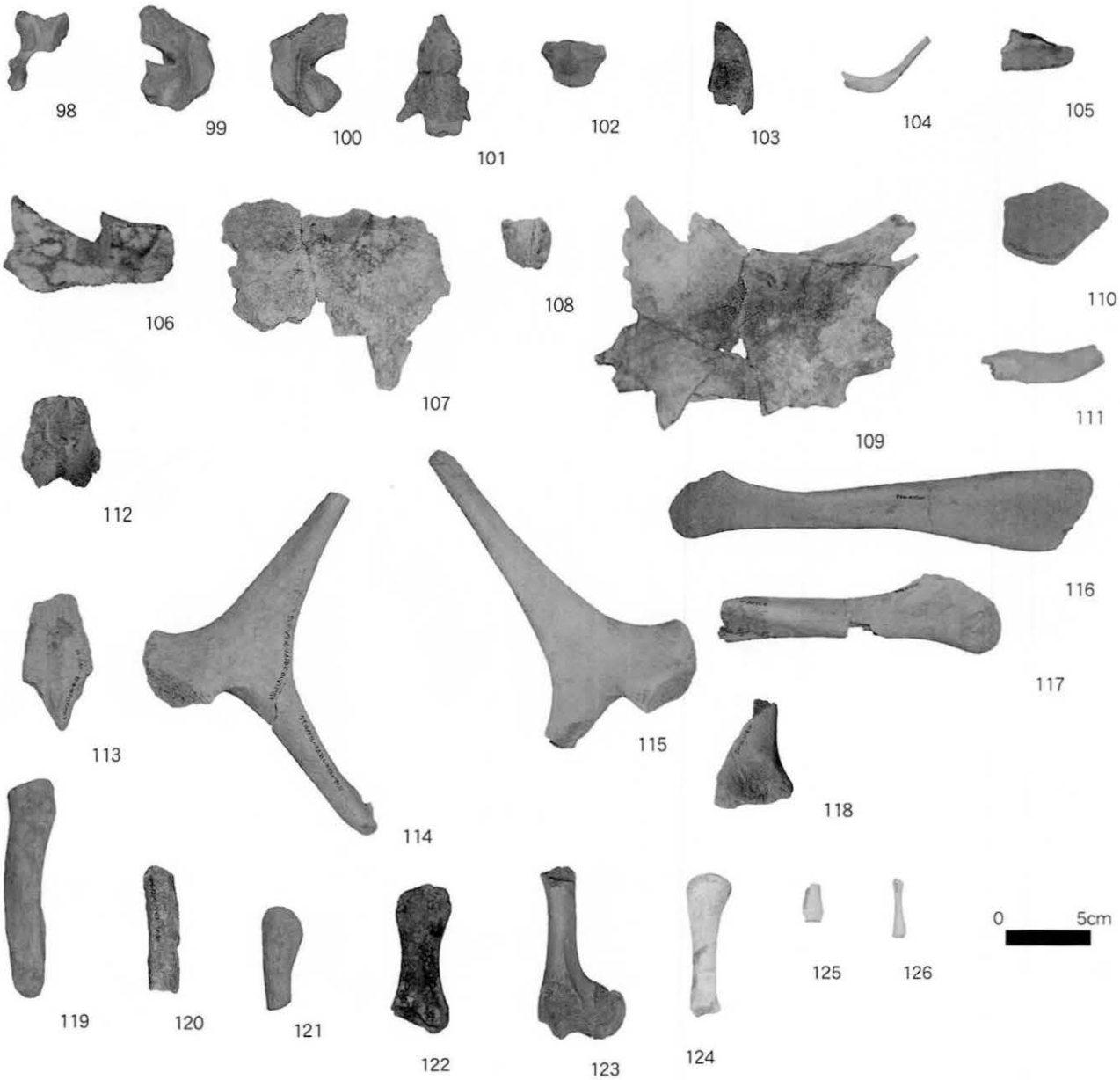
【ミズナギドリ類】
Ⅲ層で右尺骨が確認される。

【カモ類】
Ⅷ層で左脛骨が確認される。

【クジラ類】
Ⅲ層、Ⅳ層で破片が確認される。

【イルカ類】
Ⅲ層で尺骨、橈骨／尺骨の破片が確認される。

【ゴンドウクジラ類】



98.ウミガメ科頭骨（Ⅷ層）
102.ウミガメ科頭骨（Ⅷ層）
106.ウミガメ科背甲板(Ⅶ層)
110.ウミガメ科肋骨板(Ⅷ層)
114.ウミガメ科左肩甲骨＋前烏口骨(Ⅵ層)
118.ウミガメ科左上腕骨(Ⅷ層)
122.ウミガメ科左大腿骨(Ⅵ層)
126.ウミガメ科指骨(Ⅳ層)

99.ウミガメ科頭骨(Ⅷ層)
103.ウミガメ科右頭骨(Ⅵ層)
107.ウミガメ科腹甲板(Ⅶ層)
111.ウミガメ科右剣状腹骨板(Ⅵ層)
115.ウミガメ科右肩甲骨＋前烏口骨(Ⅷ層)
119.ウミガメ科右橈骨(Ⅷ層)
123.ウミガメ科左大腿骨(Ⅷ層)

100.ウミガメ科頭骨(Ⅷ層)
104.ウミガメ科舌骨(Ⅷ層)
108.ウミガメ科縁骨板(Ⅲ層)
112.ウミガメ科椎骨(Ⅷ層)
116.ウミガメ科左烏口骨(Ⅷ層)
120.ウミガメ科橈骨(Ⅵ層)
124.ウミガメ科右脛骨(Ⅷ層)

101.ウミガメ科頭骨(Ⅷ層)
105.ウミガメ科顎骨(Ⅶ層)
109.ウミガメ科右下腹板(Ⅵ層)
113.ウミガメ科椎骨(Ⅷ層)
117.ウミガメ科右烏口骨(Ⅷ層)
121.ウミガメ科左尺骨(Ⅷ層)
125.ウミガメ科指骨(Ⅳ層)

Ⅶ層で左側下顎骨遠心端部のみを残す。この部分は薄い板状の緻密な骨である。骨製品の素材に利用されることがある。この部分のみの残されていたことは意図な行為の可能性もある。

【イヌ】

Ⅶ層で右第4前臼歯が、Ⅲ層で右下顎骨の破片が確認される。

【ジュゴン】

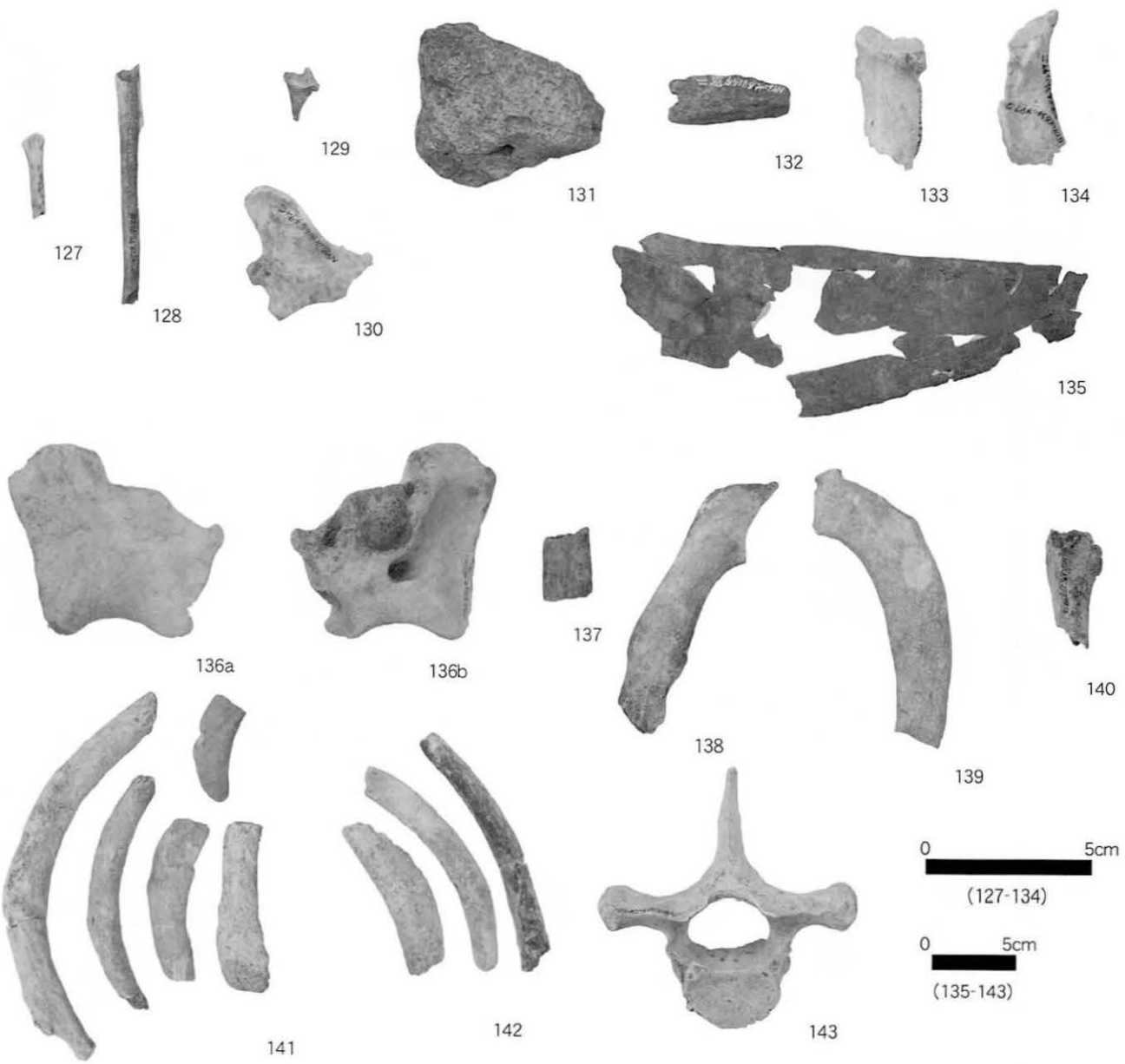
Ⅲ層でややまとまった数が検出されたが、個体数少ない。Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層でも出土しているが、椎体、肋骨片が数点確認された程度にとどまる。以下、Ⅲ層で出土した部位について述べる。

下顎骨片は、大型成体の遠位部の破片である。破損し、舌側面がの歯槽が露出しており水磨を受けた痕跡がみられるが、下顎枝や骨体を意図的に割った痕跡もみられる。胸椎は、大型成体の胸椎が出土する。完存椎体で前面での椎体左右径五六・七一㎜、横突起間幅一四四・二六㎜を計る。肋骨は、破損する標本であったが多くが検出される。現長で二〇㎝前後にもなる標本があったが、大半が一〇㎝位の長さである。ただし、破損部に明瞭な切断痕など見いだせないので、意図的な切断とは断定できない。近位骨端が破損しているの標本も解体時に壊したことが推定されるが、断定できない。尺骨は、骨体を残す破片であり、最大幅三三・四五㎜（関節部）を計る。

【リュウキュウイノシシ】

各層から確認される。Ⅲ層では、頭骨、頚椎、上腕骨、肋骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、第四中手骨、寛骨、大腿骨、脛骨、踵骨、第三中足骨、中手骨／中足骨、基節骨が確認される。

Ⅳ層では、頭骨、腰椎、肋骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、中間手根骨、大腿骨、脛骨、踵骨、中手骨／中足骨などが確認



127.ミズナギドリ類右尺骨(Ⅲ層)
128.カモ類左脛骨(Ⅷ層)
129.イヌ右第4前臼歯(Ⅶ層)
130.イヌ右下顎骨(Ⅲ層)
131.クジラ類不明破片(Ⅲ層)
132.クジラ類?不明破片(Ⅲ層)
133.イルカ類橈骨/尺骨(Ⅲ層)
134.イルカ類尺骨(Ⅲ層)
135.ゴンドウクジラ類頭骨(Ⅶ層)
136.ジュゴン右下顎骨(Ⅲ層)
137ジュゴン歯牙(Ⅲ層)
138.ジュゴン右第1肋骨(Ⅲ層)
139.ジュゴン左第1肋骨(Ⅲ層)
140.ジュゴン右尺骨(Ⅲ層)
141.ジュゴン右肋骨(Ⅲ層)
142.ジュゴン左肋骨(Ⅲ層)
143.ジュゴン胸椎(Ⅲ層)

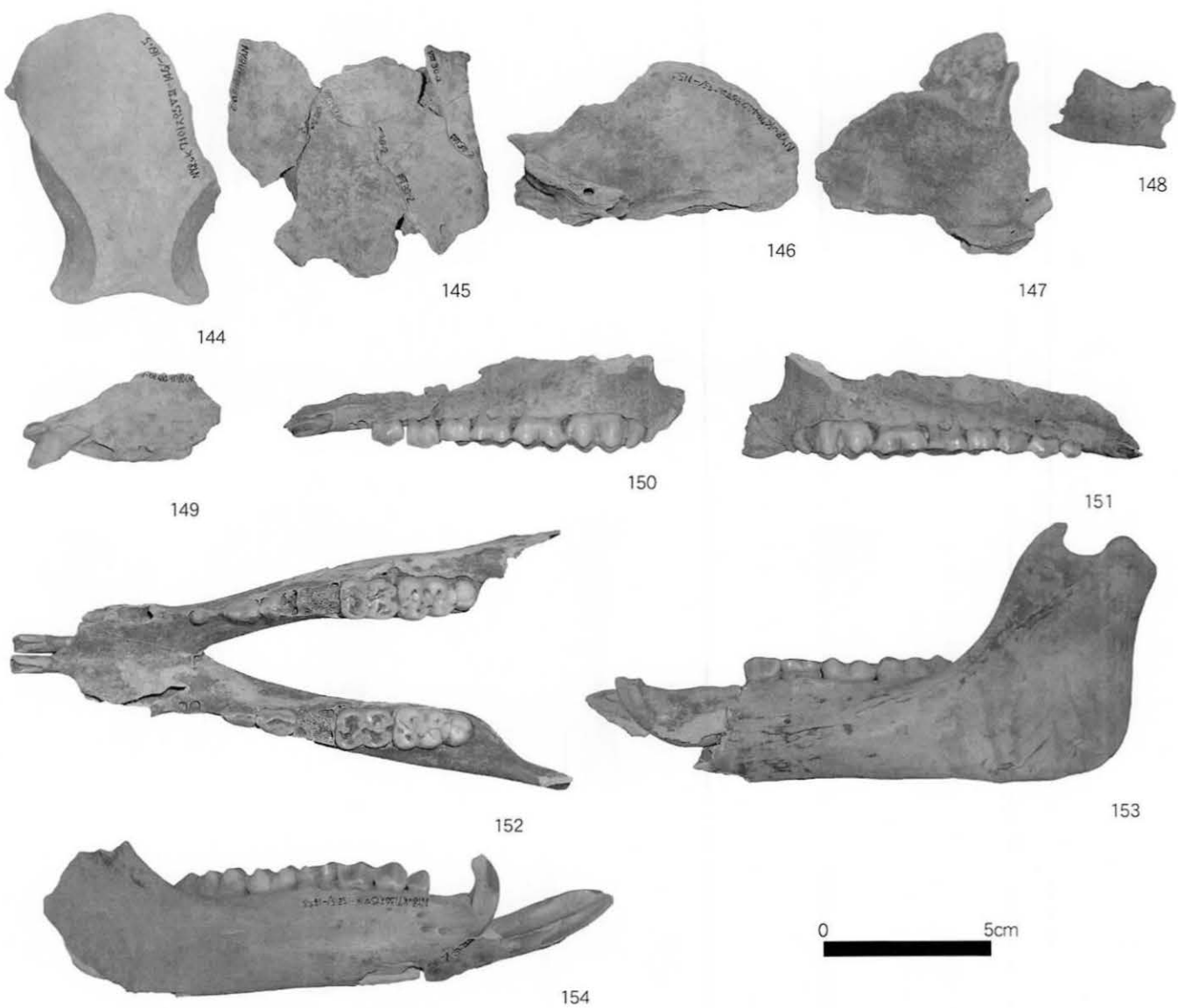
されるが、数量が少ない。

Ⅴ層では、頭骨、上腕骨、第三中手骨が確認される程度である。Ⅴ・Ⅵ層では、肋骨、尺骨、寛骨、脛骨、踵骨が確認される。

Ⅵ層では、頭骨、胸椎、腰椎、肋骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、寛骨、大腿骨が確認される。これら出土した部位では、Ⅷ層出土の犬歯に比べて、一回り大きくなった下顎犬歯が注目される。また、右橈骨遠位端、右尺骨近位端には、未骨化のものがみられる。また、左大腿骨は、骨体が割られている。四肢骨の計測値は、左肩甲骨頚部幅一五・三四㎜と一四・一四㎜、右肩甲骨頚部幅一九・二八㎜と一五・五一㎜、右上腕骨骨体最小径一一・九三㎜、左上腕骨骨体最小径一二・五八㎜、遠位骨端幅二八・九九㎜、橈骨近位骨端幅二一・六九㎜、左大腿骨骨体最小径一五・〇三㎜、近位骨端幅四七・一二㎜を計る。

Ⅶ層は、全体的に少ない。下顎骨は左右の揃う成体一、若体一、幼体一があった。頭骨以外の部位では、第一頚椎、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、寛骨、大腿骨、脛骨、第五分の二基節骨、基節骨、末節骨などが確認される。この内、左側橈骨一点は若い個体である。また、左大腿骨は両端欠損するが成体である。計測値は、左肩甲骨頚部幅二〇・四四㎜、一六・九六㎜、一五・七一㎜、右肩甲骨頚部幅一九・八七㎜、右上腕骨遠位骨端幅三〇・九三㎜、三四・七四㎜、左大腿骨骨体最小径一四・〇㎜を計測する。

Ⅷ層は、最も多くの遺骸が出土した。保存は一部劣化の状況のみられる標本もあったが、多くが良好であった。頭骨は発掘時に注意して取り上げられ、幼体から成体までの前頭骨、頭頂骨～後頭骨、側頭骨標本が確認されている。しかし、切歯骨、左右上顎骨が少ない。そのため頭骨全体



144.リュウキュウイノシシ頭頂骨(Ⅷ層)
145.リュウキュウイノシシ左右前頭骨(Ⅷ層)
146.リュウキュウイノシシ左側頭骨(Ⅷ層)
147.リュウキュウイノシシ右側頭骨(Ⅷ層)
148.リュウキュウイノシシ右頬骨突起(Ⅷ層)
149.リュウキュウイノシシ左切歯骨(Ⅷ層)
150.リュウキュウイノシシ左上顎骨(Ⅷ層)
151.リュウキュウイノシシ右上顎骨(Ⅷ層)
152.リュウキュウイノシシ下顎骨(Ⅷ層)
153.リュウキュウイノシシ左下顎骨(Ⅷ層)
154.リュウキュウイノシシ右下顎骨(Ⅷ層)

がさらに修復できる状態の標本がない。完存もしくはそれに近い状態の頭骨はなかった可能性がある。比較的保存されやすい頬骨や側頭骨が少なかったことは、全体の破損度の高かったことを推測させる。こうした状態は幼体から成体の標本について同様にみられた。下顎骨はもっとも多く検出されている。幼体から成体までを含んでいた。左右の顎骨が揃う標本があり、完存に近い状態で埋存していたように思われるが、実際に修復できた標本はなく、やはり破損が著しかった。脊柱は少なく、環椎片、胸椎、腰椎、仙骨片がみられ、合計一三点が確認された程度である。肋骨も左右の確認された標本十一点がみられる。それらの標本は大きさからみてすべて別個体であるらしい。各個体わずかずつが残されたようである。

肩甲骨は、やや多く検出される。幼体から成体を含むが、幼体が少ない。関節窩部分あるいは頚部が残される標本が多い。頚部最小径は、右側が一八・三〇㎜、一八・一一㎜、十六・五八㎜、一六・三五㎜、一五・五五㎜、一四・〇九㎜、一三・四九㎜であり、左側が一九・〇〇㎜、一七・〇〇㎜前後、一六・〇一㎜、一五・九二㎜、一五・〇〇㎜前後である。

上腕骨は、やや多く検出される。右側では近位未骨化標本（遠位骨端幅三〇・二二㎜、骨体最小径一一・〇六㎜）、左側では近位未骨化？（遠位骨端幅二九・一二㎜、骨体最小径一一・六一㎜）、遠位骨端未骨化幼体（現長三八・九〇㎜）などがみられ、これ以外の骨は全て若体の破損したものである。

橈骨は、完存に近い標本が三点みられる。二点は遠位骨端の未骨化であり、三・五歳未満と一歳未満程度である。一点は両端未骨化である。遠位骨端の未骨化のものは、近位骨端幅が一九・七八㎜

155.リュウキュウイノシシ第１頭椎(Ⅷ層)
156.リュウキュウイノシシ頭椎(Ⅲ層)
157.リュウキュウイノシシ胸椎(Ⅶ層)
158.リュウキュウイノシシ腰椎(Ⅳ層)
159.リュウキュウイノシシ仙骨
160.リュウキュウイノシシ右肩甲骨(Ⅶ層)
161.リュウキュウイノシシ左肩甲骨(Ⅶ層)
162.リュウキュウイノシシ左上腕骨(Ⅶ層)
163.リュウキュウイノシシ右上腕骨(Ⅶ層)
164.リュウキュウイノシシ左上腕骨(Ⅶ層)
165.リュウキュウイノシシ右橈骨(Ⅵ層)
166.リュウキュウイノシシ右橈骨(Ⅶ層)
167.リュウキュウイノシシ左橈骨(Ⅶ層)
168.リュウキュウイノシシ右尺骨(Ⅶ層)
169.リュウキュウイノシシ左尺骨(Ⅷ層)
170.リュウキュウイノシシ左第４中手骨(Ⅷ層)
171.リュウキュウイノシシ左第３中手骨(Ⅴ層)
172.リュウキュウイノシシ右第３中手骨(Ⅷ層)
173.リュウキュウイノシシ右第４中手骨(Ⅲ層)
174.リュウキュウイノシシ右第５中手骨(Ⅷ層)

と一八・六五㎜を計る。

尺骨は、左側四点、右側二点がみられる。左側には、成体一、幼体一が含まれる。

中手骨は二点みられ、幼体と成体の各一ずつである。骨体は割れていない。

寛骨は、寛骨臼部～頸部を残す破片であり、成体の標本である。右頸幅一六・七五㎜、一五・七五㎜、一五・六三㎜、遠位骨端幅三四・二四㎜、左頸幅一四・七〇㎜、一四・六五㎜である。

大腿骨は、幼体、成体をふくめて九点があり、骨体を割っている標本があった。左側の骨体最小径一二・六二㎜、一二・五二㎜、一〇・九〇㎜、八・八九㎜、最小幅一五・五五㎜前後、遠位骨端幅三六・一四㎜、右側の骨体最小径一〇・九二㎜、一二・〇㎜を計る。

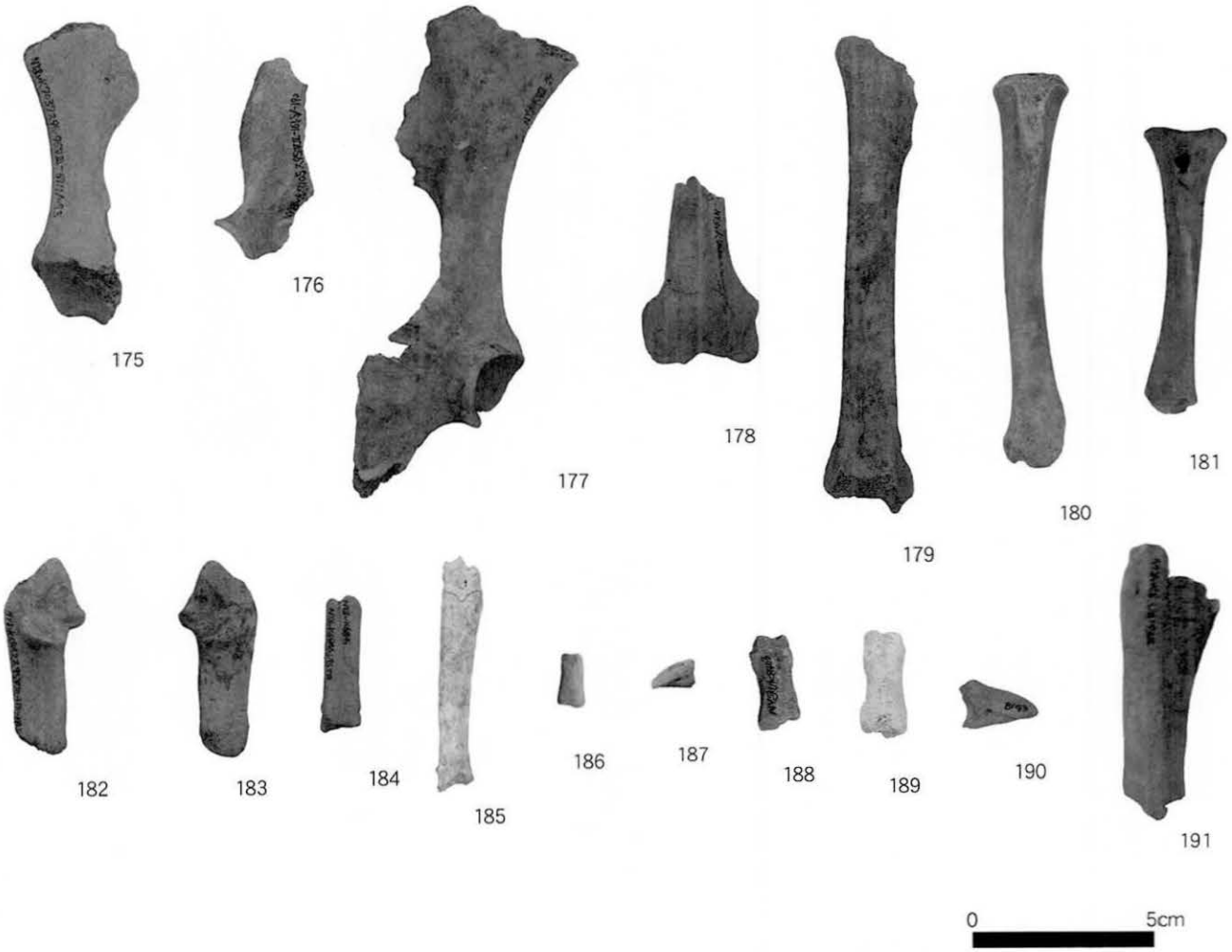
脛骨は、左右併せて十二点と多かった。遠位骨端の残る標本が二例で、他は不明もしくは未骨化であった。骨体最小径は、右側が一一・七七㎜、一一・六六㎜、一一・六一㎜、一〇・八八㎜、九・一一㎜、左側が一二・一八㎜、一一・一九㎜、一〇・七一㎜である。また、左側で遠位骨端が残るものは、幅一七・八三㎜、二二・二七㎜を計る。

距骨は、一点あったのみである。踵骨は、左側が三点あり、遠位骨端骨化標本一、不明一、幼体一である。右側は、遠位骨端未骨化である。左側で完存する試料は、全長五六・一一㎜を計る。

中足骨は、成体二点みられる。骨体は未加工である。指骨では、第五分の二基節骨、第五分の二末節骨である。

【ブタ】

Ⅲ層で右脛骨骨体がみられる。Ⅲ層は弥生時代とされることから、この頃のブタの存在が認められていないことを考慮すると、詳細な層序の検討が必要と考えられる。



175.リュウキュウイノシシ左寛骨(Ⅷ層)
176.リュウキュウイノシシ右寛骨(Ⅷ層)
177.リュウキュウイノシシ右寛骨(Ⅷ層)
178.リュウキュウイノシシ右大腿骨(Ⅷ層)
179.リュウキュウイノシシ左大腿骨(Ⅷ層)
180.リュウキュウイノシシ左脛骨(Ⅷ層)
181.リュウキュウイノシシ右脛骨(Ⅷ層)
182.リュウキュウイノシシ右踵骨(Ⅷ層)
183.リュウキュウイノシシ左踵骨(Ⅷ層)
184.リュウキュウイノシシ右第4中足骨(Ⅷ層)
185.リュウキュウイノシシ左第3中足骨(Ⅲ層)
186.リュウキュウイノシシ右第2/5基節骨(Ⅷ層)
187.リュウキュウイノシシ右2/5末節骨(Ⅷ層)
188.リュウキュウイノシシ左基節骨(Ⅶ層)
189.リュウキュウイノシシ右基節骨(Ⅲ層)
190.リュウキュウイノシシ末節骨(Ⅶ層)
191.ブタ右脛骨(Ⅲ層)

②大堂原貝塚の動物遺体

魚類では、マダラトビエイ、アナゴ類、ハタ類、フエダイ類、クロダイ類、ハマフエフキ、フエフキダイ類、コブダイ、タキベラ、カンムリベラ、ナンヨウブダイ、ナガブダイ、ブダイ類、カワハギ類、フグ類、ハリセンボン類、不明魚種などがみられる。マダラトビエイは、かなり大型の歯板である。マダラトビエイは体長五〇cmに達するが、おそらくそれに近い大きさの個体であったと推定される。マダラトビエイは、椎骨が稀に検出されるが、一般には少ない。アナゴ類は、大型のアナゴ類であったと思われる。なお、沖縄県内においてアナゴ類が報告された事例はないと思われる。ハタ類は、前期貝塚からの検出が多い。本遺跡でもそうした出土状況と同じと思われる。ただし、本遺跡の場合、重複する部位が認められないことから、それほど多くの個体数があったと思われない。クロダイは内湾的な環境に生息する。Ⅷ層にやや多かったことは、この時期の海岸環境を考える際に参考になると思われる。ハマフエフキは、沖縄県を代表する魚種であるが、本遺跡での検出量が極めて少ない。魚骨全般の検出の少ないことを反映するのであろう。コブダイは、Ⅲ層に主体に的に出土した魚種である。遺骸は下咽頭骨を主とし、その他の部位が極めて少ない。コブダイの骨格は咽頭骨を除くと、鰓蓋部の諸骨は骨質が脆弱である。そのために下咽頭骨の多い報告例が多いが、比較的良く保存される顎骨も出土数が少なく、珍しい例と思われる。ブダイ類も沖縄の各時期の遺跡でもっとも検出例の多い魚種であり、種類も多いが、本遺跡ではほとんど見るべき標本がなかった。ただし、顎骨などに大型標本が認められ、沖縄県内にある他の遺跡と同様な特徴をみせていた。唯一確認されたナガブダイは沖縄県内の遺跡ではやや多い出土である。また、不明とした魚の大型椎骨は野国貝塚においても検出されている。種類を明らかにできないが、大型種であり、外海棲の魚種と思われる。

鳥類のカモ類とミズナギドリの検出は、多くはない。沖縄県内において遺跡からの出土例としては特記されるかも知れない。ただし、出土数が少なく、積極的な鳥猟があったとは思えない。カモ類は前期の例としては新城下原でも一点が出土している。

爬虫類では、ウミガメ類とイシガメ類がみられる。ウミガメ類では、アオウミガメを主体とする。砂層であるⅤ層を除き、すべての層準で検出されている。Ⅲ層の頭骨、その他のわずかな四肢骨例を除いて多くの標本は、大型個体の骨格である。それらは甲長八〇cm前後に達するものと思われる。なお、Ⅷ層で出土した試料には、焼けたものがみられた。腹面を焚火にかざすようなことが行われたと思われる。イシガメ類は、Ⅲ層で少数の甲板骨があったのみである。

哺乳類では、クジラ類、イルカ類、ゴンドウクジラ類、イヌ、ジュゴン、リュウキュウイノシシ、ブタを確認できた。ジュゴンは、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ・Ⅵ層で検出される。Ⅵ層以深では確認されない。同時期の遺跡においても検出されないようである。ジュゴンの生息環境との関わりを調べていく必要があると思われる。ジュゴンは新石器時代遺跡での出土が知られているが、後期遺跡から多出することは平敷屋トウバル遺跡（金子一九九六）などで報告されている。本遺跡の後期包含層、Ⅲ層中から多く検出している。平敷屋トウバル遺跡に比較すると、本遺跡での出土数がはるかに少ないが、椎骨、下顎骨、四肢骨の一部を検出したことは特記される。これも遺跡の海岸近い立地と関係があると思われる。また、極めて少数であるが、幼体らしい個体のあったことも注目される。

ゴンドウクジラ類は、一般に検出例は少ないといえる。稀に本種に特徴的な大型の歯を検出することがあるが、類例がほとんどないと思われる。

イヌは、上顎の前臼歯断片が出土している。小型であり、新しい時期の琉球犬と異なると思われる。四肢骨などは全く検出されていない。前期の出土例もほとんどないと思われる。

リュウキュウイノシシは、多くの骨格が出土する。特にⅧ層において遺骸の集積があったと思わせる遺骸をみた。既発表の野国貝塚などで知られている試料と一致する小型の大きさである。頭骨が五～六個分があり、かなり保存は良好であったが、その割に修復できたのは後頭顆～頭頂骨に限られ、前頭骨があったものの、頭頂骨と一致しない。結論的にかなり破損し、骨格も移動していることが想像される。下顎骨は左右が揃う試料が数組認められる。顎骨には乳歯を残す幼年齢個体の標本も若干あったが、歯牙の咬耗の進む個体の標本が多かった。層準毎の下顎骨の検出が少ないために齢構成の確認が難しいが、Ⅷ層のややまとまった試料では、臼歯の咬耗状況からの年齢推定から、〇・五歳未満四個体、一・五歳まで二個体、一・五～三・五歳三個体、三・五歳以上は六個体があったと推定される。おそらく狩猟によって捕獲された個体であったろう。Ⅲ層の四例は〇・五歳以上一・四歳未満二個体、二・五歳前後二個体、Ⅵ層二・五～三・五歳一個体、四・五歳以上一個体であった。総じて、幼年齢個体の少ないことは先史時代遺跡イノシシにみる特徴である。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

金子浩昌，1996．動物遺体（軟体動物を除く）．沖縄県文化財調査報告書第125集　平敷屋トウバル遺跡　―ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書―．沖縄県教育委員会，168―183．

表１．検出分類群の一覧

腔腸動物門　Phylum　Coelenterata
　花虫綱　Class　Anthozoa
　　サンゴ類　Ord. et. fam. indet.
棘皮動物門　Phylum　Echinodermata
　ウニ綱　Class　Echinoidea
　　ウニ類　Ord. et. fam. indet.
軟体動物門　Phylum　Mollusca
　頭足綱　Class　Cephalopoda
　　鞘形亜綱　Subclass　Coleoidea
　　コウイカ目　Order　Sepioda
　　コウイカ科　Family　Sepiidae
　　コウイカ類　Gen. et. sp. indet.
脊椎動物門　Phylum　Vertebrata
　軟骨魚綱　Class　Chondrichthyes
　　板鰓亜綱　Subclass　Elasmobranchii
　　エイ目　Order Rajiformes
　　エイ亜目　Suborder　Rajoidei
　　トビエイ科　Family　Myliobatididae
　　マダラトビエイ　*Aetobatus narinari*
硬骨魚綱　Class　Osteichthyse
　条鰭亜綱　Subclass　Actinopterygii
　　ウナギ目　Order　Anguilliformes
　　ウナギ亜目　Suborder　Anguilloidei
　　アナゴ科　Family　Congridae
　　アナゴ類　Gen. et. sp. indet.
　　スズキ目　Order　Perciformes
　　スズキ亜目　Suborder　Percoidei
　　ハタ科　Family　Serranidae
　　ハタ亜科　Subfamily　Serraninae
　　ハタ類　Gen. et. sp. indet.
　　フエダイ科　Family　Lutjanidae
　　フエダイ類　Gen. et. sp. indet.
　　タイ科　Family　Sparidae
　　ヘダイ亜科　Subfamily　Sparinae
　　クロダイ類　*Acanthopagrus sp.*
　　フエフキダイ科　Family　Lethrinidae
　　ハマフエフキ　*Lethrinus nebulosus*
　　ベラ亜目　Suborder　Labroidei
　　ベラ科　Famly Labridae
　　コブダイ　*Semicossyphus reticulatus*
　　タキベラ　*Bodianus perditio*
　　カンムリベラ　*Coris aygula*
　　ブダイ科　Family　Scaridae
　　ナンヨウブダイ　*Chlorurus microrhinos*
　　ナガブダイ　*Scarus rubroviolaceus*
　　ブダイ類　Gen. et. sp. indet.
　　フグ目　Order　Tetraodontiformes
　　フグ亜目　Tetraodontoidei
　　カワハギ科　Family　Monacanthidae
　　カワハギ類　Gen. et. sp. indet.
　　フグ科　Family　Tetraodonidae
　　フグ類　Gen. et. sp. indet.
　　ハリセンボン科　Family　Diodontidae
　　ハリセンボン類　Gen. et. sp. indet.
爬虫綱　Class　Reptilia
　カメ目　Order　Testudines
　　ウミガメ科　Family　Cheloniidae
　　アオウミガメ　*Chelonia mydas*
　　アカウミガメ　*Caretta caretta*
　　パタグールガメ科　Family　Bataguridae
　　イシガメ類　*Mauremys sp.*
鳥綱　Class　Aves
　ミズナギドリ目　Order Procellariiformes
　　ミズナギドリ科　Procellariidae
　　ミズナギドリ亜科　Procellariinae
　　ミズナギドリ類　Gan. et. sp. indet.
　カモ目　Order　Anseriformes
　　カモ科　Family　Anatidae
　　カモ類　Gen. et. sp. indet.
哺乳綱　Class　Mammalia
　サル目（霊長目）　Order　Primates
　　ヒト科　Family　Hominidae
　　ヒト　*Homo sapiens*
　クジラ目　Order　Cetacea
　　ヒゲクジラ亜目　Suborder　Mysticeti
　　クジラ類　Fam. et. gen. indet.
　　ハクジラ亜目　Suborder　Odontoceti
　　イルカ類　Fam. et. gen. indet.
　　マイルカ科　Family　Delphinidae
　　ゴンドウクジラ類　Gen. et. sp. indet.
　ネコ目（食肉目）　Order　Carnivora
　　ネコ亜目　Suborder　Fissipedia
　　イヌ科　Family　Canidae
　　イヌ　*Canis familiaris*
　ジュゴン目（海牛目）　Order　Sirenia
　　ジュゴン科　Family　Dugongidae
　　ジュゴン *Dugong dugon*
　ウシ目（偶蹄目）　Order　Artiodactyla
　　イノシシ科　Family　Suidae
　　リュウキュウイノシシ　*Sus scrofa riukiuanus*
　　ブタ　*Sus scrofa var. domesticus*

表２．骨同定結果（１）

層位	番号		種類		部位	左右	部分	数量	被熱	備考
Ⅲ層	1	1	爬虫綱	ウミガメ科	背甲板		破片	41		接合試料有
							破片	4	○	接合試料有
					縁骨板		破片	1		接合
	1	2	爬虫綱	アオウミガメ	上腕骨	右	骨体	1		
	1	3	爬虫綱	アオウミガメ	尺骨	右	近位端部	1		
				ウミガメ科	腹甲板		破片	4		接合試料有
	1	4	爬虫綱	ウミガメ科	縁骨板		破片	6		
					甲骨板		破片	77		
	2	1	哺乳綱	ジュゴン	胸椎		椎体	1		
							棘突起	2		接合試料有
	2	2	哺乳綱	ジュゴン	胸椎		ほぼ完存	1		
	2	3	哺乳綱	ジュゴン	尺骨	右	近位端	1		
	2	4	哺乳綱	ジュゴン	肋骨		破片	4		
							破片	5	○	
	2	5	哺乳綱	ジュゴン	椎骨		破片	5		
					肋骨		破片	2		
							破片	2	○	
	2	6	哺乳綱	ジュゴン	下顎骨	右	破片	1		
	3	1	爬虫綱	アオウミガメ	上腕骨	左	骨体	1		
				アカウミガメ	上腕骨	左	骨体	1		
				ウミガメ科	縁骨板		破片	1		
			哺乳綱	ジュゴン	歯牙		破片	1		
					第１肋骨	左	破損	1		接合
						右	破損	1		
							骨体	1	○	接合
					肋骨	左	骨体	1		幼獣
							骨体	3		接合試料有、成獣
						右	骨体	5		接合試料有、成獣
							破片	8		接合試料有
	3	2	哺乳綱	クジラ類？	不明		破片	1		
	3	3	爬虫綱	ウミガメ科	縁骨板		破片	1		
			哺乳綱	クジラ類	不明		破片	1		
				ジュゴン	肋骨		破片	47		
					不明		破片	1		
				リュウキュウイノシシ	尺骨	左	近位端部	2		
	4	1	硬骨魚綱	コブダイ	下咽頭骨	左 右	破損	21		
						左	破片	1		
				カンムリベラ	下咽頭骨	左 右	破損	1		
	4	2	硬骨魚綱	コブダイ	上咽頭骨	左	破片	2		
	4	3	硬骨魚綱	コブダイ	上咽頭骨	左	破片	1		
	4	4	硬骨魚綱	コブダイ	下咽頭骨	左 右	破損	5		
	4	5	硬骨魚綱	コブダイ	前上顎骨	左	破片	1		
					歯骨	左	破片	2		
						右	破片	1		
	4	6	硬骨魚綱	コブダイ	歯骨	左	破片	1		
							破片	1	○	
						右	破片	1		
					歯牙		破片	1		
	4	7	硬骨魚綱	コブダイ	尾椎		椎体	1		
	4	8	硬骨魚綱	ブダイ類	上咽頭骨		破片	1		
	4	9	硬骨魚綱	ブダイ類	前上顎骨	右	破片	1		
	4	10	硬骨魚綱	ブダイ類	歯骨	右	破片	2		
	4	11	硬骨魚綱	ハマフエフキ	上顎骨	左	破損	1		
	4	12	硬骨魚綱	クロダイ類	前上顎骨	左	破片	1		

表2．骨同定結果（2）

層位	番号		種類		部位	左右	部分	数量	被熱	備考
Ⅲ層	4	12	硬骨魚綱	クロダイ類	前上顎骨	右	破片	1		
	4	13	頭足綱	コウイカ類	軟甲（貝殻）		破片	1		
	4	14	硬骨魚綱	魚類	椎骨		椎体	2		
	4	15	硬骨魚綱	ハタ類	歯骨	右	破片	1		
				ハマフエフキ	前上顎骨	左	破片	1		
				コブダイ	前上顎骨	左	破片	2		
					歯牙		破片	1		犬歯様
				ブダイ類	前上顎骨	左	破片	1		
				ハリセンボン類	上顎骨	左 右	破損	1		
				フグ類	前上顎骨	右	破片	1		
				魚類	前鰓蓋骨	左	破片	1		
					鰭棘		破片	1		
			哺乳綱	リュウキュウイノシシ	下顎骨	右	破片	1		
				獣類	不明		破片	1		
	4	16	硬骨魚綱	ハリセンボン類	歯骨	左 右	破損	2		
	4	17	硬骨魚綱	コブダイ	下咽頭骨	左 右	破損	23		
							破片	2		
				タキベラ	下咽頭骨	左 右	破損	1		
Ⅲ層	4	18	硬骨魚綱	コブダイ	前上顎骨	左	破片	4		
						右	破片	5		接合試料有
					歯骨	左	破片	4		
					歯牙		破片	5		犬歯様
	4	19	硬骨魚綱	ハマフエフキ	前上顎骨	左	破片	1		
						右	破片	1		
				コブダイ	上咽頭骨	左	破片	4		
						右	破片	4		
					下咽頭骨		破片	3		
					歯骨	左	破片	1		
					基後頭骨		破片	1		
				ブダイ類	前上顎骨	左	破片	2		
					上咽頭骨		破片	2		
					歯骨	右	破片	3		
				魚類	尾椎		椎体	1		
			哺乳綱	リュウキュウイノシシ	下顎骨	左	破片	1		
						右	破片	2		
	4	20	硬骨魚綱	タキベラ	下咽頭骨	左 右	破損	1		サンプル13
	4	21	硬骨魚綱	コブダイ	前上顎骨	右	破片	1		サンプル14
	4	22	硬骨魚綱	ブダイ類	上咽頭骨		破片	1		サンプル15
	4	23	硬骨魚綱	ナガブダイ	下咽頭骨	左 右	破損	1		サンプル16
	4	24	硬骨魚綱	フエフキダイ科？	椎骨		椎体	1		サンプル17
	4	25	硬骨魚綱	ハリセンボン類	鰭棘		破片	2		サンプル18
	5	1	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	肋骨		骨体	2		接合試料有
	5	2	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	上顎骨	左	dm4部	1		dm3植立
						右	P4-M3部	1		P4-M3植立
					上顎歯牙	左	M2	1		
					下顎骨	左	M2-M3部	1		M3植立
							M2-M3部	1		接合、M3植立
							M1-下顎枝部	1		M1-3植立
							破片	1		
					下顎歯牙	左	I1	2		
							C	3		接合試料有、雄個体
							M2	1		
							M3	1		
						右	I2	2		
							C	2		接合試料有、雄個体

表2．骨同定結果（3）

層位	番号		種類		部位	左右	部分	数量	被熱	備考
Ⅲ層	5	2	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	下顎歯牙		M3	1		
					臼歯		破片	1		
					踵骨	右	破損	1		
				獣類	不明		破片	1	○	
	5	3	哺乳綱	ジュゴン	肋骨		破片	1	○	
				リュウキュウイノシシ	肋骨		骨体	1	○	
					上腕骨	左	遠位端	1		接合
							遠位端部	1		骨端欠
							遠位端部1/2	1		骨端欠
						右	両端欠	1		接合
							遠位端	1		
					橈骨	右	近位端部	1		骨端欠
							骨体	1		
					尺骨	左	近位端部	1		骨端欠
						右	骨体	1		接合
					第４中手骨	左	近位端	1	○	
						右	近位端	1		
					基節骨	右	ほぼ完存	1	○	
					脛骨	左	骨体	1		若獣
						右	遠位端部	1		骨端欠
					中手骨/中足骨		遠位骨端	1	○	未化骨骨端
				中型獣	不明		破片	29		接合試料有
	5	4	硬骨魚綱	コブダイ	下咽頭骨		破片	1		
				魚類	上顎骨	左	破片	2		
			爬虫綱	ウミガメ科	上腕骨		破片	1		
			哺乳綱	リュウキュウイノシシ	肩甲骨	左	破片	1		接合
						右	破片	1		接合
					上腕骨	左	骨体	1		接合
							遠位端部	1		接合
						右	遠位端部	1		
					橈骨	右	骨体	1		接合
							破片	3		接合試料有
					尺骨	左	破片	1		接合
						右	破片	1		
					大腿骨	左	骨体	3		接合試料有
						右	骨体	1		
Ⅲ層	5	4	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	脛骨	右	骨体	3		接合試料有
							遠位端部	1		接合
				獣類	不明		破片	5		
	5	5		リュウキュウイノシシ	上顎骨	左	dm4-M1部	1		dm4 植立
							M2-3部	1		接合、M2-3植立
							P4-M2部	1		P4-M1植立
								1		P4-M2植立
					上顎歯牙	右	M3	1		
					下顎骨	左	dm3-4部	1		dm3-4植立
							M3-下顎枝部	1		M3植立
						右	破片	1		
							dm3-M2部	1		dm3-4,M1植立、M2未萌出
					下顎歯牙	左	I1	1		
							I2	1		
							C	2		雄個体
						右	I1	1		
							I2	1		
							I3	1		
							C	1		雄個体

表２．骨同定結果（４）

層位	番号		種類		部位	左右	部分	数量	被熱	備考
Ⅲ層	5	5		リュウキュウイノシシ	尺骨	左	破片	1	○	
	5	6	硬骨魚綱	コブダイ	前上顎骨	右	破片	1		
				カワハギ類	前上顎骨	左	破片	1		
				魚類	前上顎骨	左	破片	1		
					上顎骨	左	遠位端	1		
					不明		破片	24		
							破片	3	○	
			爬虫綱	イシガメ類	甲骨板		破片	3		
			鳥綱	ミズナギドリ類	尺骨	右	両端欠	1		
			哺乳綱	イヌ	下顎骨	右	下顎枝部	1		
				リュウキュウイノシシ	頭頂骨	左	破片	1		
					後頭骨	左	後頭顆	1	○	
					頬骨	右	破片	1		
					下顎骨	左 右	連合部	1		
						左	近心部	1		
							下顎枝付近	1		
						右	破片	2		
					頚椎		椎弓部	1	○	
					椎骨		椎体	1		
							椎弓部	1		
					上腕骨	左	遠位端	1		
					尺骨	左	近位端	1		接合
							骨体	1		接合
						右	近位端	1		
							骨体	2		
					第４中手骨	左	近位端	1	○	
					第３中足骨	左	近位端	1		
				中型獣	不明		破片	50		
							破片	10	○	
	6	1	硬骨魚綱	ブダイ類	歯骨	右	破片	1		
				魚類	鰭棘		破片	1		
			爬虫綱	ウミガメ科	烏口骨		骨体	1		
							破片	1		
			哺乳綱	リュウキュウイノシシ	下顎骨	左 右	連合部	1		
						左	破片	2		
							破片	1	○	
						右	関節突起	1		
					椎骨		椎弓部	1	○	
					肩甲骨	左	破片	1	○	
						右	破片	2	○	
							破片	2	○	
					上腕骨	右	破片	1		幼獣
						右	遠位端	1	○	
					橈骨	左	近位端	1	○	
						右	骨体	1		
					尺骨	右	近位端部	1		近位端破損
					寛骨	右	臼部周辺	1		
					大腿骨	右	骨体	1		
					脛骨	右	骨体	1		若獣
						右	骨体	1		接合、成獣
					第３中足骨	左	ほぼ完存	1		遠位骨端化骨化弱
					基節骨	右	ほぼ完存	1		
				中型獣類	不明		破片	39+		
							破片	18	○	接合試料有
	6	2	硬骨魚綱	魚類	鰭棘		破片	1		

表2．骨同定結果（5）

層位	番号		種類		部位	左右	部分	数量	被熱	備考
Ⅲ層	6	2	硬骨魚綱	魚類	鰭棘		破片	1	○	
			爬虫綱	ウミガメ科	背甲板		破片	1		
			哺乳綱	イルカ類	尺骨		破片	1		接合
					橈骨／尺骨		破片	1		
				ブタ	脛骨	右	骨体	1		現代の落ち込み
			爬虫綱／哺乳綱	不明	不明		破片	11		
							破片	20	○	
	6	3	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	頭頂骨	右	破片	1	○	接合
					上腕骨	左	骨体	1		
					橈骨	右	近位端	1	○	
					脛骨	右	骨体	1		
					基節骨	右	ほぼ完存	1	○	
				中型獣類	不明		破片	12		接合試料有
							破片	4	○	
Ⅳ層	7	1	爬虫綱	アオウミガメ	第1背甲板	左	破片	1		接合
	7	2	爬虫綱	アオウミガメ	第1背甲板	右	破片	1		接合
	7	3	爬虫綱	アオウミガメ	第3背甲板		破片	1		接合
	7	4	爬虫綱	ウミガメ科	背甲板		破片	29		接合試料有
	7	5	爬虫綱	ウミガメ科	肋骨板		破片	2		接合試料有
			哺乳綱	クジラ類	不明		破片	1		
	7	6	爬虫綱	アオウミガメ	剣状腹板	右	破片	1		接合
	8	1	哺乳綱	ジュゴン	椎骨		椎体	1		
					肋骨	左	骨体	1		接合
							骨体	5		接合試料有
	8	2	爬虫綱	ウミガメ科	背甲板		破片	3		
			哺乳綱	ジュゴン	肋骨		破片	2		
	8	3	爬虫綱	ウミガメ科	腹甲板		破片	1		接合
	8	4	爬虫綱	ウミガメ科	不明		破片	14		
	9	1	硬骨魚綱	コブダイ	下咽頭骨＋上顎骨	左 右	破損	1		接合
					下咽頭歯	左 右	破損	13		
				ブダイ類	上咽頭骨	右	破片	1		
	9	2	軟骨魚綱	マダラトビエイ	下顎歯板	左	破片	1		接合
	9	3	硬骨魚綱	ハリセンボン類	上顎骨	左 右	破損	1		
	9	4	硬骨魚綱	ハリセンボン類	歯骨	左 右	破片	3		
						左 右	破片	2	○	
	9	5	硬骨魚綱	コブダイ	腹椎		椎体	3		
					尾椎		椎体	2		
				魚類	尾椎		椎体	1		
	9	6	硬骨魚綱	クロダイ類	前上顎骨	右	破片	2		
					歯骨	左	破片	1		
					歯骨	右	破損	1		
				ハマフエフキ	前上顎骨	左	破損	1		
						右	破片	1		
				コブダイ	前上顎骨	左	破片	3		
					歯骨	左	破片	1		
					上咽頭骨	左	破片	2		
					下咽頭骨		破片	2		
				ブダイ類	前上顎骨	左	破損	1		
					歯骨	右	破片	2		
				ハリセンボン類	主上顎骨	左	破片	1		
					歯骨	左 右	破片	1	○	
	9	7	ウニ綱	ウニ類	殻		破片	1		
			硬骨魚綱	クロダイ類	歯骨	左	破損	1		
				ハリセンボン類	歯		破片	1		
				魚類	上擬鎖骨	左	破片	1		

表2．骨同定結果（6）

層位	番号		種類		部位	左右	部分	数量	被熱	備考
Ⅳ層	9	7	硬骨魚綱	魚類	椎骨		椎体	1		
					鰭棘		破片	2		
	10	1	爬虫綱	ウミガメ科	烏口骨	左	骨体	1		
			哺乳綱	リュウキュウイノシシ	上腕骨	右	遠位端	1		
							遠位端 1/2	1		
					尺骨	左	骨体	2		接合試料
					大腿骨	右	遠位端部	1		遠位端破損
					脛骨	右	近位端部	1		近位端破損
							骨体	1		
	10	2	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	上顎骨	右	M1-2 部	1		M1-2 植立
					下顎骨	左	M3 部	1		
						右	M3 部	1		
					下顎歯牙	左	I1	1		
						右	I2	1		
							C	1		
	10	3	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	肩甲骨	左	破片	1		近位端欠
						右	破片	1		近位端欠
Ⅳ層	10	4	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	腰椎		破損	1		
	10	5	爬虫綱	ウミガメ科	指骨		骨体	2		幼体、内1点接合
					不明		破片	1		
			硬骨魚綱	コブダイ	下咽頭骨		破片	1		
				ブダイ類	上顎骨	左	破片	1		
				ハマフエフキ	上顎骨	右	破片	2		
				魚類	鰓把		破片	1		
				ジュゴン	椎骨		棘突起	1		
					肋骨		破片	1		
				リュウキュウイノシシ	頭頂骨		破片	1	○	
					後頭骨	左	後頭顆	1	○	
					上顎歯牙	左	M2	1		
						右	M2	1		
					下顎骨	左	下顎枝	1		
							下顎角	1		
					下顎歯牙	左	I2	1		
							C	2		
							M2	1		
						右	M3	2		
					肋骨		骨体	2	○	
					肩甲骨	右	破片	1		
					橈骨	右	遠位端欠	1		
					尺骨	左	骨体	1		
					中間手根骨	左	破片	1		
					中手骨/中足骨		破片	1		接合
					脛骨		骨体	1		
							遠位端	1		
					踵骨	右	破損	1	○	
				中型獣類	不明		破片	38		
							破片	7	○	
				獣類	不明		破片	13		
			その他	植物遺体			破片	4	○	
				土器			破片	1		
Ⅴ層	11	1	花虫綱	サンゴ類	殻		破片	1	○	
			哺乳綱	リュウキュウイノシシ	前頭骨	左 右	破片	1	○	
					頭頂骨	左	破片	1	○	幼獣
					下顎骨	右	破片	1	○	乳歯有
					上腕骨	右	近位端	1	○	

表２．骨同定結果（７）

層位	番号		種類		部位	左右	部分	数量	被熱	備考
Ⅴ層	11	1	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	上腕骨		遠位端	1	○	幼獣
					第３中手骨	左	ほぼ完存	1		遠位骨端外れ
				中型獣類	不明		破片	1		
	11	2	硬骨魚綱	フエダイ類	角骨	左	破片	1		
Ⅴ・	12	1	爬虫綱	アオウミガメ	上腕骨	右	ほぼ完存	1	○	接合
Ⅵ層	12	2	爬虫綱	アオウミガメ	中腹板	右	破片	1		接合
	12	3	爬虫綱	アオウミガメ	背甲板		破片	1		
					腹甲板		破片	1		
				ウミガメ科	背甲板		破片	1		接合
	12	4	哺乳綱	ジュゴン	肋骨		破片	1		接合
	13	1	花虫綱	サンゴ類			破片	2		
			硬骨魚綱	アナゴ類	鋤骨		破片	1		
				魚類	方骨	左	破片	1		
			爬虫綱	ウミガメ科	甲骨板		破片	2		
			哺乳綱	リュウキュウイノシシ	肋骨		破片	5		
					尺骨	左	骨体	1		
					寛骨	左	破片	1		接合
					脛骨	左	近位端欠	1		接合
					踵骨	左	ほぼ完存	1		幼獣
				中型獣類	不明		破片	7		
							破片	1	○	
Ⅵ層	14	1	爬虫綱	ウミガメ科	背甲板		破片	3		
	14	2	爬虫綱	ウミガメ科	下腹板	右	破片	1		接合
	14	3	爬虫綱	ウミガメ科	剣状腹骨板	右	破片	1		
	14	4	爬虫綱	ウミガメ科	頭骨	右	破片	1		
	14	5	爬虫綱	ウミガメ科	橈骨		骨体	1		
					大腿骨	左	両端欠	1		
	14	6	爬虫綱	ウミガメ科	肩甲骨	左	破片	1		
					前烏口骨	左	破片	1		
					肩甲骨＋前烏口骨	左	破片	1		
					肩甲骨＋前烏口骨	左	破片	1	○	
	14	7	爬虫綱	ウミガメ科	頭骨		破片	2		
	14	8	爬虫綱	ウミガメ科	不明		破片	1		
Ⅵ層	15	1	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	上顎骨	右	P2-3部	1		P2-3植立
					下顎骨	左	関節突起	1		
						右	M3-下顎枝部	1		M3植立
								1		
							関節突起	1		
					下顎歯牙	左	C	2		雄個体
				獣類	不明		破片	2		
	15	2	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	肩甲骨	左	破片	2		
						右	破片	2	○	
					寛骨	右	破片	1		
	15	3	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	上腕骨	左	骨体	1		接合
							遠位端	1		
						右	骨体	1		
	15	4	硬骨魚綱	魚類	上顎骨	左	破片	1		
			哺乳綱	ヒト	腓骨	右	骨体	1		成人
				リュウキュウイノシシ	肋骨	右	骨体	2		
							骨体	1		
	15	5	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	胸椎		破損	1		
	15	6	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	腰椎		破損	1		接合
	15	7	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	橈骨	右	ほぼ完存	1		遠位骨端外れ
	15	8	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	尺骨	左	近位端	1		
						右	近位端	1		

表２．骨同定結果（８）

層位	番号		種類		部位	左右	部分	数量	被熱	備考
Ⅵ層	15	9	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	大腿骨	左	遠位端欠	1		
	15	10	硬骨魚綱	魚類	主鰓蓋骨	右	破片	1		
			哺乳綱	リュウキュウイノシシ	下顎骨	左	破片	1		接合、P2-M2植立
				中型獣類	不明		破片	5		
	16	1	硬骨魚綱	ハタ類	歯骨	右	破片	1		
				コブダイ	前上顎骨	右	破片	1		
Ⅶ層	17	1	爬虫綱	アオウミガメ	肩甲骨	左	破損	1		
					橈骨	右	骨体	1		
				ウミガメ科	背甲板		破片	1		
							破片	3	○	
					腹甲板		破片	1		接合
					甲板		破片	11		接合試料有
					烏口骨	左	骨体	2	○	接合試料有
	18	1	爬虫綱	ウミガメ科	顎骨		破片	1	○	
					肋骨		破片	1		接合
					不明		破片	1	○	
	18	2	硬骨魚綱	ハタ類	角骨	右	ほぼ完存	1		
					舌骨		破片	1		
			哺乳綱	ゴンドウクジラ類	頭骨		破片	10		接合試料有
				リュウキュウイノシシ	末節骨		ほぼ完存	1		
	19	1	硬骨魚綱	ハタ類	前上顎骨	左	破片	1		
					歯骨	右	破片	1		
					擬鎖骨	左	破片	1		
						右	破片	1		
				フエダイ類	前上顎骨	左	破片	2		
						右	破片	1		
					角骨	左	破片	1		
				ハマフエフキ	歯骨	右	破片	1		
					角骨	左	破片	1		
				フエフキダイ科	腹椎		椎体	2		
				コブダイ	前上顎骨	右	破片	2		
					歯骨	左	破片	1		
					下咽頭骨	左 右	破損	4		
							破片	1		
					腹椎		椎体	1		
					尾椎		椎体	1		
				タキベラ	下咽頭骨	左 右	破損	1		
				ナンヨウブダイ	下咽頭骨		破片	1		
				ブダイ類	歯骨	左	破片	1		
				ハリセンボン類	歯骨	左 右	破片	1		
				魚類	鰭棘		破片	1		
	20	1	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	下顎骨	左 右	破損	1+		左I1-2・P4-M3, 右I1-m3 植立接合
						左 右	破片	1+		左I2-C・P3-M1, 右C・P3-4・M1-2 植立、左右M3 未萌出、雄個体
						左 右	破片	1+		左I1-C・P4-M3、右 M1-3 植立 右C 遊離、雄個体
						左 右	連合部	1	○	左I1-2, 右I1 植立
						左	破片	2		dm2-4・M1 植立
						右	P2-3 部	1		P3 植立
					下顎歯牙	左	C	1		雄個体
Ⅶ層	20	1	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	下顎歯牙	右	I2	1		
						右	C	1		雄個体
						右	C	1		雌個体
	20	2	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	下顎骨	左	下顎枝	1		
					肩甲骨	左	破片	3		
						右	破片	1		
					寛骨	右	破片	1		

表2．骨同定結果（9）

層位	番号		種類		部位	左右	部分	数量	被熱	備考
Ⅶ層	20	3	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	上腕骨	右	近位端欠	1	○	
							骨体	1		
							遠位端	1		
	20	4	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	橈骨	左	近位端部	1		
	20	5	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	尺骨	左	近位端部	1	○	近位端破損、被熱一部
						右	近位端部	2		近位端破損
	20	6	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	大腿骨	左	両端欠	1		
	20	7	爬虫綱	アオウミガメ	橈骨	左	骨体	1		
			硬骨魚綱	ハタ類	前鰓蓋骨	左	破片	1		
					角舌骨	左	破片	1		
					上顎骨	右	破片	1		接合
					角骨	左	破片	1		
					上擬鎖骨	右	破片	1		
					擬鎖骨	左	破片	1		
					副蝶形骨		破片	1		
					不明		破片	10		
				ブダイ類	方骨	右	破片	1		
				魚類	不明		破片	13		
			哺乳綱	イヌ	上顎歯牙	右	P4	1		
				リュウキュウイノシシ	鼻骨		破片	1		
					上顎骨	右	破片	2		雄個体
							破片	3		
					下顎骨	左	破片	1		
						右	下顎枝	1		
					第1頚椎		破片	1		幼獣
					肩甲骨	右	破片	1		
							破片	1		
					上腕骨	左	遠位端	1		
						右	遠位端	1		
					橈骨	左	骨体	1		
					尺骨	左	骨体	1		
						右	骨体	1		
					脛骨	右	破片	1		
					第Ⅱ/Ⅴ基節骨		ほぼ完存	1	○	
					基節骨	左	ほぼ完存	1		
					四肢骨		破片	7		接合試料有
Ⅷ層	21	1	爬虫綱	ウミガメ科	大腿骨	左	遠位端欠	1		
						右	骨体	1		
	21	2	爬虫綱	ウミガメ科	脛骨	右	ほぼ完存	1		
	21	3	爬虫綱	アオウミガメ	上腕骨	左	ほぼ完存	1		
	21	4	爬虫綱	ウミガメ科	烏口骨	左	破片	1		接合
	21	5	爬虫綱	ウミガメ科	肩甲骨＋前烏口骨	右	破片	1		
					烏口骨	右	破片	2		接合試料有
	21	6	爬虫綱	ウミガメ科	肋骨板		破片	5		接合試料有
	21	7	爬虫綱	アオウミガメ	指骨		破損	1		
	21	8	爬虫綱	アオウミガメ	脛骨	左	遠位端欠	1		
					腓骨	左	両端欠	1		
	21	9	爬虫綱	ウミガメ科	橈骨	右	ほぼ完存	1		
							近位端	1		
	21	10	爬虫綱	ウミガメ科	尺骨	左	近位端	1		
	21	11	爬虫綱	ウミガメ科	椎骨		破片	2		
							破片	1	○	
	21	12	爬虫綱	アオウミガメ	尺骨	右	破損	1		同一個体
					中間手根骨	右	ほぼ完存	1		
					第1趾基節骨	左	ほぼ完存	1		

表２．骨同定結果（10）

層位	番号		種類		部位	左右	部分	数量	被熱	備考
Ⅷ層	22	1	爬虫綱	アオウミガメ	第５背甲板	右	破片	1		接合
					第７背甲板	右	破片	1		
					背甲板	左 右	臀部側	1		接合
						左	破片	1		接合
							破片	1		
					中腹板	右	破片	2		接合
					下腹板	左	破片	1	○	
						右	破片	1		
					腹甲板		破片	1		
					縁骨板		破片	4		
					肋骨板		破片	4		接合試料有
Ⅷ層	22	1	爬虫綱	アオウミガメ	甲骨板		破片	12		
					烏口骨	左	破片	4		接合試料有
	22	2	爬虫綱	ウミガメ科	縁骨板		破片	2		接合試料
	22	3	爬虫綱	アオウミガメ	剣状腹板	左	破片	1		接合
						右	破片	1		
	22	4	爬虫綱	ウミガメ科	腹甲板		棘	1		
	23	1	爬虫綱	ウミガメ科	上腕骨	左	破片	1		
					橈骨	右	遠位端	1		接合
					不明		破片	6		
			哺乳綱	ヒト	踵骨	右	破損	1		
					距骨	右	ほぼ完存	1		
					第２中足骨	右	ほぼ完存	1		
					第３中足骨	右	遠位端欠	1		
					第１基節骨		ほぼ完存	1		趾骨
	24	1	硬骨魚綱	クロダイ類	歯骨	左	破片	3		
	24	2	硬骨魚綱	コブダイ	前上顎骨	右	破片	1		
	24	3	硬骨魚綱	コブダイ	前上顎骨	左	破片	1		
	24	4	硬骨魚綱	コブダイ	尾椎		椎体	1		
	24	5	硬骨魚綱	クロダイ類	舌顎骨	右	破片	1		
				ハマフエフキ	前上顎骨	右	破片	1		
				コブダイ	前上顎骨	左	破片	1		
				魚類	前頭骨		破片	2		接合試料有
					不明		破片	3		
	25	1	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	上顎骨	左 右	骨体	1+		左 P4-M3, 右 P3-M3 植立、雄個体、接合
						左	M3部	1		M3萌出途中
					下顎骨	左 右	骨体	1+		左 C-4・M2-3, 右 C-M3 植立、成獣、雄個体、接合
						左 右	骨体	1+		接合、左右 M2-3植立、左 C 遊離
						左 右	骨体	1+		左 I1・P3-4・M2-3, 右 I1・P2-4・M2-3 植立、成獣、雄個体、接合
						左 右	骨体	1+		左 I1・P2-4・M2, 右 I1・P2-3 植立、成獣、雄個体
						左	骨体	1		dm3-4・M1 植立、幼獣
							骨体	1		幼獣
						右	骨体	1		dm3-4植立、幼獣
							骨体	2		接合試料、成獣、雄個体
					下顎歯牙	左	C	1		
						右	C	2		雄個体
						右	C	1		雌個体
						左	M1	1		
					不明		破片	2		
	25	2	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	上顎骨	左 右	破片	1+		左 C・P2-M3, 右 C-M3植立
					上顎歯牙	右	I2	1		
						右	P1	1		
					下顎骨	左 右	破片	1+		一部接合、左 P2-3・M2-3, 右 P3・M2-3植立、左右 C 遊離
						左 右	連合部-左下顎枝部	1		dm3-4 植立、M1 萌出途中、乳獣
						左 右	破片	1+		左 M1, 右 dm4,M1 植立、M2萌出途中、乳～幼獣

表２．骨同定結果（11）

層位	番号		種類		部位	左右	部分	数量	被熱	備考
Ⅷ層	25	2	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	下顎骨	左	P1-M3部	1		P3,M1-2 植立、M3萌出途中
						左	C-下顎枝部	1		P3-4,M2-3植立、雄個体
					下顎歯牙	左	M3	1		
	25	3	爬虫綱	ウミガメ科	頭骨		破片	18		接合試料有、同一個体
					舌骨		破片	1		
					肋骨板		破片	1		
			哺乳綱	ヒト	側頭骨	左	破片	1		
					頬骨	左	破片	1		
				リュウキュウイノシシ	前頭骨	左 右	破片	2		接合試料
						左	破片	1		若獣
							破片	1		
						右	破片	5		接合試料有
					頭頂骨		破片	4		
							破片	1		若獣
					頭頂骨-側頭骨	右	破片	1		
					側頭骨	左	破片	4		
						左	頬骨突起	1		若獣
						右	破片	2		
							頬骨突起	1		
							破片	1		若獣
					口蓋骨		破片	1		
					切歯骨	左	破片	1		
					上顎骨		破片	20		
					上顎歯牙	左	I1	1		
						右	M2	1		
					下顎骨	左 右	連合部	1		
						左	遠心部	1		M3萌出済
							遠心部	1		幼獣
							下顎角	1		
Ⅷ層	25	3	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	下顎歯牙	左	P1	1		
							P4	1		
					頭骨		破片	77+		
					第１頚椎		左側破片	1		
					寛骨	左	破片	1		
						右	破片	1		
	26	1	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	上腕骨	左	ほぼ完存	1		両端未化骨
							近位端欠	1		
							遠位端部	3		
						右	近位端欠	1		
							骨体	3		
							遠位端	1		
	26	2	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	胸椎		破損	4		
							破片	4		
	26	3	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	大腿骨	左	遠位端欠	1		近位端破損
							遠位端欠	1		近位骨端外れ
							近位端欠	1		遠位骨端外れ
							遠位端	1		
							骨体	1		
						右	遠位端	1		
							骨体	2		
	26	4	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	尺骨	左	近位端部	3		近位端破損、幼～若獣
							近位端部	1	○	近位端破損、成獣
						右	近位端部	2		近位端破損
	26	5	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	肋骨	左	破片	6		
						右	破片	5		接合試料有

表２．骨同定結果（12）

層位	番号		種類		部位	左右	部分	数量	被熱	備考
Ⅷ層	26	5	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	肋骨	右	破片	18		
					脛骨	左	ほぼ完存	2		内１点接合・両骨端外れ
							両端欠	1		
							遠位端	1		
						右	ほぼ完存	1		接合・両骨端外れ
							近位端欠	1		遠位骨端外れ
							骨体	3		接合試料有
	26	7	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	橈骨	左	ほぼ完存	1		遠位骨端外れ
							遠位端欠	1		
						右	ほぼ完存	1		両骨端外れ
	26	8	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	踵骨	左	ほぼ完存	1		
							破片	2		
						右	ほぼ完存	1		骨端外れ
	26	9	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	肩甲骨	左	破片	5		
						右	破片	7		
							破片	4		
	26	10	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	寛骨	左	破片	2		
						右	破片	3		
	26	11	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	第３中手骨	右	ほぼ完存	1		
					第４中手骨	左	ほぼ完存	1		遠位端外れ
					第３中足骨	左	破損	1		
					第４中足骨	右	遠位端欠	1		
	26	12	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	腰椎		破損	3		
							椎体	1		
							破片	2		
	26	13	哺乳綱	リュウキュウイノシシ	仙椎		破損	1		
	26	14	哺乳綱	ヒト	肋骨		骨体	1		
					橈骨	右	骨体	1		接合
					尺骨	右	両端欠	1		接合
				リュウキュウイノシシ	下顎骨	左 右	連合部	1		
					第１頚椎		破片	1		
					橈骨	右	骨体	1		
					寛骨	左	遠位端	2		
						右	近位端	1		
					第５中手骨	右	ほぼ完存	1		
					大腿骨	左	骨体	1		若獣
							骨体	1		
							破片	1		
							遠位骨端	1		
					脛骨	右	骨体	1		若獣
							遠位端部	1		
							遠位端部	1		遠位骨端外れ
					距骨	左	破片	1	○	
					第2/5基節骨	右	ほぼ完存	1		
					第2/5末節骨		ほぼ完存	1		
				獣類	不明		破片	59+		
	27	1	鳥綱	カモ類	脛骨	左	両端欠	1		

表3．種類別・部位別数量表（1）

種類		部位	左 右	部分	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅴ・Ⅵ層	Ⅵ層	Ⅶ層	Ⅷ層
花虫綱	サンゴ類	殻		破片			1	2			
ウニ綱	ウニ類	殻		破片		1					
頭足綱	コウイカ類	軟甲（貝殻）		破片	1						
軟骨魚綱	マダラトビエイ	下顎歯板	左	破片		1					
硬骨魚綱	アナゴ類	鋤骨		破片				1			
	ハタ類	前上顎骨	左	破片						1	
		上顎骨	右	破片						1	
		角骨	左	破片						1	
			右	ほぼ完存						1	
		歯骨	右	破片	1				1	1	
		角舌骨	左	破片						1	
		舌骨		破片						1	
		前鰓蓋骨	左	破片						1	
		上擬鎖骨	右	破片						1	
		擬鎖骨	左	破片						2	
			右	破片						1	
		副蝶形骨		破片						1	
		不明		破片						10	
	フエダイ類	前上顎骨	左	破片						2	
			右	破片						1	
		角骨	左	破片			1			1	
	クロダイ類	前上顎骨	左	破片	1						
			右	破片	1	2					
		歯骨	左	破片		2					3
			右	破損		1					
		舌顎骨	右	破片							1
	ハマフエフキ	前上顎骨	左	破片	2	1					
			右	破片	1	1					1
		上顎骨	左	破片	1						
			右	破片		2					
		歯骨	右	破片						1	
		角骨	左	破片						1	
	フエフキダイ類	腹椎		椎体						2	
	フエフキダイ科？	椎骨		椎体	1						
	コブダイ	前上顎骨	左	破片	7	3					2
			右	破片	7				1	2	1
		歯骨	左	破片	9	1				1	
			右	破片	2						
		上咽頭骨	左	破片	7	2					
			右	破片	4						
		下咽頭骨	左 右	破損	49	13				4	
			左	破片	1						
				破片	6	3				1	
		下咽頭骨＋上顎骨	左 右	破損		1					
		歯牙		破片	7						
		基後頭骨		破片	1						
		腹椎		椎体		3				1	
		尾椎		椎体	1	2				1	1
	タキベラ	下咽頭骨	左 右	破損	2					1	
	カンムリベラ	下咽頭骨	左 右	破損	1						
	ナンヨウブダイ	下咽頭骨		破片						1	
	ナガブダイ	下咽頭骨	左 右	破損	1						
	ブダイ類	前上顎骨	左	破片	3	1					
			右	破片	1						
		上顎骨	左	破片		1					
		歯骨	左	破片						1	
			右	破片	6	2					
		方骨	右	破片						1	
		上咽頭骨	右	破片		1					
				破片	4						
	カワハギ類	前上顎骨	左	破片	1						
	フグ類	前上顎骨	右	破片	1						
	ハリセンボン類	主上顎骨	左	破片		1					
		上顎骨	左 右	破損	1	1					
		歯骨	左 右	破損	2	6				1	
		歯		破片		1					
		鰭棘		破片	2						
	魚類	前頭骨									2
		前上顎骨	左	破片	1						
		上顎骨	左	破片	3				1		
		方骨	左	破片				1			
		前鰓蓋骨	左	破片	1						
		主鰓蓋骨	右	破片					1		
		尾椎		椎体	1	1					
		椎骨		椎体	2	1					
		上擬鎖骨	左	破片		1					
		鰓把		破片		1					
		鰭棘		破片	4	2				1	
		不明		破片	27					13	3

表３．種類別・部位別数量表（２）

種類		部位	左 右	部分	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅴ・Ⅵ層	Ⅵ層	Ⅶ層	Ⅷ層
爬虫綱	アオウミガメ	第１背甲板	左	破片		1					
			右	破片		1					
		第３背甲板		破片		1					
		第５背甲板	右	破片							1
		第７背甲板	右	破片							1
		背甲板	左 右	臀部側							1
			左	破片							1
				破片				1			1
		中腹板	右	破片				1			2
		腹甲板		破片				1			1
		下腹板	左	破片							1
			右	破片							1
		剣状腹板	左	破片							1
			右	破片		1					1
		縁骨板		破片							4
		肋骨板		破片							4
		甲骨板		破片							12
		肩甲骨	左	破損						1	
		烏口骨	左	破片							4
		上腕骨	左	ほぼ完存							1
				骨体	1						
			右	ほぼ完存				1			
				骨体	1						
		橈骨	左	骨体						1	
			右	骨体						1	
		尺骨	右	破損							1
				近位端部	1						
		中間手根骨	右	ほぼ完存							1
		脛骨	左	遠位端欠							1
		腓骨	左	両端欠							1
		第１趾基節骨	左	ほぼ完存							1
		指骨		破損							1
	アカウミガメ	上腕骨	左	骨体	1						
	ウミガメ科	頭骨	右	破片					1		
				破片					2		1
		顎骨		破片						1	
		舌骨									1
		背甲板		破片	46	32		1	3	4	
		腹甲板		棘							1
				破片	4	1				1	
		縁骨板		破片	9						2
		下腹板	右	破片					1		
		肋骨板		破片		2					6
		甲骨板		破片	77			2		11	
		肋骨		破片						1	
		剣状腹骨板	右	破片					1		
		椎骨		破片							3
		肩甲骨	左	破片					1		
		肩甲骨＋前烏口骨	左	破片					2		
			右	破片							1
		前烏口骨	左	破片					1		
		烏口骨	左	骨体		1				2	1
			右	破片							2
				骨体	2						
		上腕骨	左	破片							1
				破片	1						
		橈骨	右	ほぼ完存							1
				近位端部							1
				遠位端部							1
				骨体					1		
		尺骨	左	近位端							1
		大腿骨	左	遠位端欠							1
				両端欠					1		
			右	骨体							1
		脛骨	右	ほぼ完存							1
		指骨		骨体		2					
		不明		破片		15			1	1	6
	イシガメ類	甲骨板		破片	3						
鳥綱	ミズナギドリ類	尺骨	右	両端欠	1						
	カモ類	脛骨	左	両端欠							1
哺乳綱	クジラ類	不明		破片	1	1					
	クジラ類？	不明		破片	1						
	イルカ類	尺骨		破片	1						
		橈骨／尺骨		破片	1						
	ゴンドウクジラ類	頭骨		破片						10	
	イヌ	上顎歯牙	右	P4						1	
		下顎骨	右	破片	1						

第五節　人骨

一、はじめに

名護市教育委員会による大堂原貝塚の発掘調査において出土した人骨について報告する。人骨はⅢ層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層、Ⅷ層より検出されている。平成十五年度調査時に出土したⅧ層の人骨は県内では初めての縄文時代前期の埋葬人骨である。いずれも保存部位が限られていて、全身骨が確認できたのは平成十年度調査で出土したⅢ層1号人骨のみであるが、先史時代人の特徴や生活を知る上では貴重な資料となるものである。以下に人骨の概要を報告する。

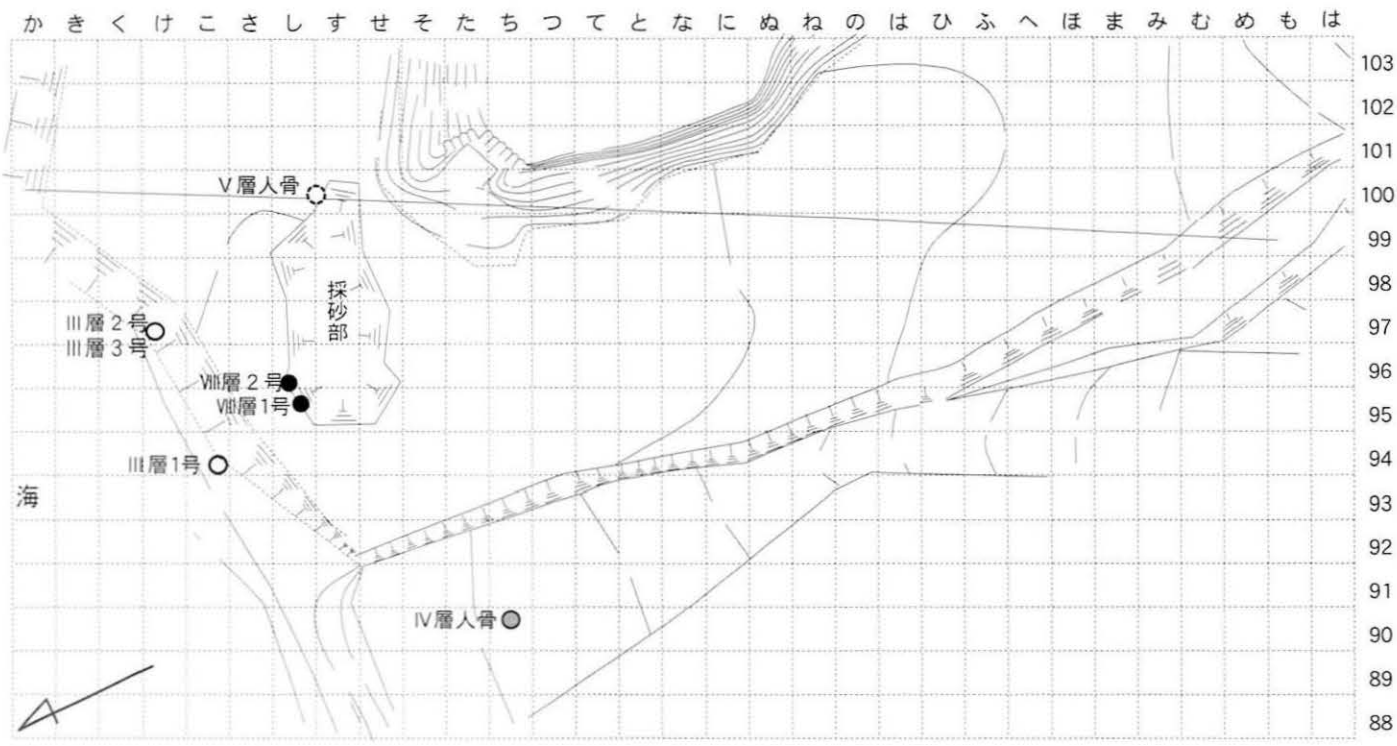
二、調査の方法

年齢区分・計測など：

人骨鑑定の際に用いた年齢区分はKnüssman(1988)注1およびBrothwell(1981)注2の基準を参考に推定した。なお、未成人の年齢推定については、歯の萌出および形成の程度をもとにしたUbelaker(1989)注3の基準に従った。人骨の計測はKnüssman(1988)注1および人類学講座編纂委員会編「人骨計測法」(1991)注4の計測法に従った。

三、出土人骨

本遺跡から出土した人骨を表1に示す。出土状態の分かっているものはⅢ層1号人骨、Ⅲ層2号人骨、Ⅷ層1号人骨、Ⅷ層2号人骨のみである。Ⅲ層の小児人骨は上顎骨片と歯のみ、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層出土の人骨もそれぞれ骨片一点のみの出土で詳細は不明である。人骨の主な出土部位を図に示している。



○ Ⅲ層出土人骨ポイント　● Ⅳ層出土人骨ポイント　◌ Ⅴ層出土人骨ポイント　● Ⅷ層出土人骨ポイント

人骨検出箇所

四、Ⅲ層出土の人骨

(1) 出土状態

Ⅲ層1号人骨は頭を東に向け、膝を開いた仰臥屈肢葬である。頭蓋骨の一部、右上肢、右下肢が失われている。肋骨、椎骨の保存状態は悪い。右側は撹乱を受けた可能性があるが、他はほぼ原位置を保っている。

Ⅲ層2号人骨は保存状態が悪く、下顎骨、右上腕骨片、左上腕骨片、左前腕骨片のみである。出土状態の詳細は不明であるが、1号と同じく頭位は東向きと推定されている。

Ⅲ層3号人骨は2号人骨付近から出土しているが、上顎骨のみで出土状態の詳細は不明である。

(2) 人骨の年代

国立環境研究所米田穣研究員の協力により、人骨の放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した結果、Ⅲ層1号人骨は910±47BP、Ⅲ層2号人骨は939±46BPという年代が得られた。Ⅲ層3号人骨は測定用サンプルの採取が困難なため年代測定は実施していない。

Ⅲ層は考古学的には弥生相当期とされているが、人骨の年代は十一世紀から十二世紀のグスク時代初頭という値を示した。人骨年代の評価は難しいところであるが、二体の結果は非常に近い値を示しており、これらが同時代の埋葬であることは確かである。可能性としては上層からⅢ層に堀込まれた埋葬人骨と考えるのが妥当であるように思われる。グスク時代初頭の人骨はほとんど発見されていないので、どちらにしても貴重な資料であることに変わりはない。

(3) 性別・年齢

①Ⅲ層1号人骨

頭蓋骨は眉弓や乳様突起等の筋付着部の

表1　大堂原貝塚出土人骨

人骨番号	性別	年齢	備考	調査年度
Ⅲ層－1号人骨	男性	成年		平成10年度調査
Ⅲ層－2号人骨	女性	成年～熟年	抜歯あり	平成10年度調査
Ⅲ層－3号人骨	不明	小児		平成10年度調査
Ⅳ層人骨	不明	未成人	左頭頂骨のみ	平成12年度調査
Ⅴ層人骨	男性	成人	左大腿骨片のみ	平成11年度調査
Ⅵ層人骨	不明	成人	右腓骨片のみ	－
Ⅷ層－1号人骨	男性	成人		平成15年度調査
Ⅷ層－2号人骨	男性	成人		平成15年度調査
Ⅷ層－追加人骨	男性	成人		平成15年度調査

表2　頭蓋主要計測値

		Ⅲ層－1号 ♂
1	頭蓋最大長	175
8	頭蓋最大幅	143
66	下顎角幅	107
69(3)	下顎体厚(r)	15
69(3)	下顎体厚(l)	15
70	下顎枝高(r)	62
71	下顎枝幅(r)	38
8/1	頭蓋長幅示数	81.7
71/70	下顎枝示数(r)	61.3

(mm)

発達が良好である。また、残存する左寛骨大坐骨切痕角が狭いことから、本人骨の性別は明らかな男性である。年齢は歯の咬耗度（Broca 1～2度）から二五歳～三五歳の成年と推定される。

②Ⅲ層2号人骨

残存する四肢骨片はやや頑丈な特徴を示すが、下顎骨のサイズ、筋付着部の特徴などから性別は女性の可能性が高い。年齢は歯の咬耗度（Broca 2度）から三五歳～四五歳の熟年と推定される。

③Ⅲ層3号人骨

未成人であるため、性別は不明である。年齢は後述の歯式に示す歯の萌出状況から六～七歳の小児と推定される。

（4）人骨の形質

①Ⅲ層1号人骨

頭蓋骨：

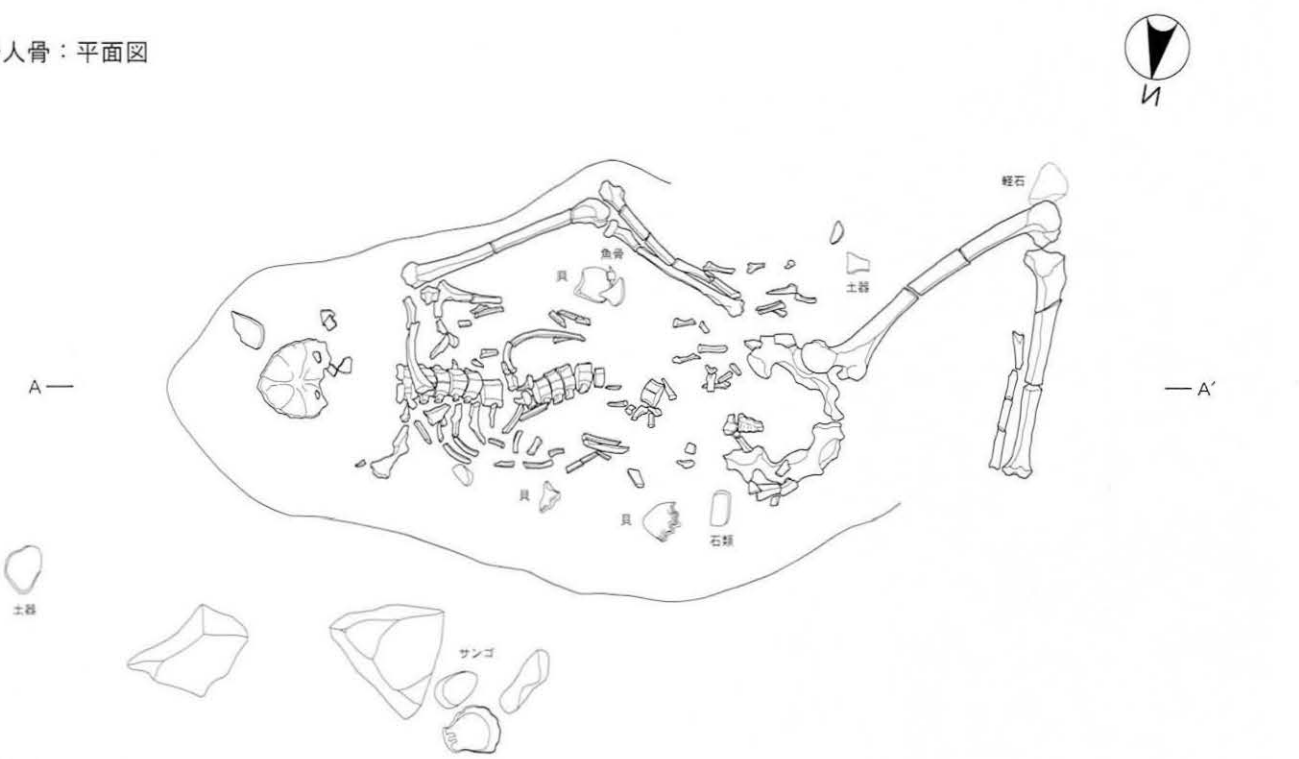
頭蓋骨の主要計測値を表2に示す。頭を上から見たかたちを示す頭蓋長幅示数（81.7）は短頭型（前後径に比べて相対的に幅径が大きく丸い）に属している。沖縄先史時代人に特徴的な過短頭（示数が85.0以上）ではないが、短頭傾向を示す点は注目される。残存する歯の歯式を以下に示す。上・下顎ともに風習的抜歯は認められない。

Ⅲ－1号人骨

/	/	M^2	P^2	P^1	C	I^2	○	○	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	/
M^3	M^0	M^1	P^2	P^1	○	I^2	○	○	○	C	P^1	P^2	M^1	M^2	

○：歯槽開放、／：破損

●Ⅲ層1号人骨：平面図



●Ⅲ層1号人骨：断面図

四肢骨：

全体的に華奢な印象を受ける。四肢骨の主要計測値を表3、表4に示す。上肢骨は上腕骨、前腕骨ともに沖縄先史時代人の平均（土肥他、2000）注5に比べると、幅径、周径が小さい。大腿骨は粗線の発達が弱く、本土縄文人のような柱状性（後面の粗線が発達して、骨体部断面形が相対的に前後方向に長い）は認められない。また、骨体上部断面形はやや扁平な傾向を示す。脛骨はヒラメ筋線が明瞭であり、下腿筋群（足部の運動に作用する筋群）が良く使われていたと思われる。脛骨の扁平性は認められず、脛骨断面示数は77.8である。腓骨は脛骨に比べると華奢である。大腿骨最大長からピアソンの式を用いて求めた推定身長は約154cmの低身長である。

②Ⅲ層2号人骨

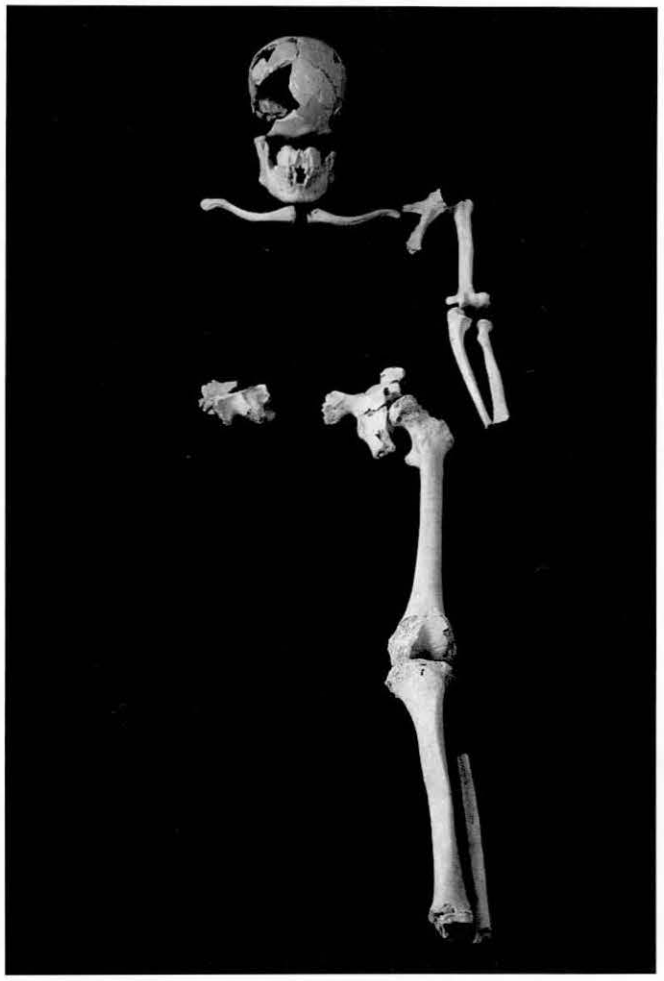
下顎骨：

サイズが小さく、全体的に華奢な印象を受ける。歯式を以下に示す。

Ⅲ－2号人骨

／	／	／	／	／	／	×	×	×	×	○	○	○	M^1	M^2	○

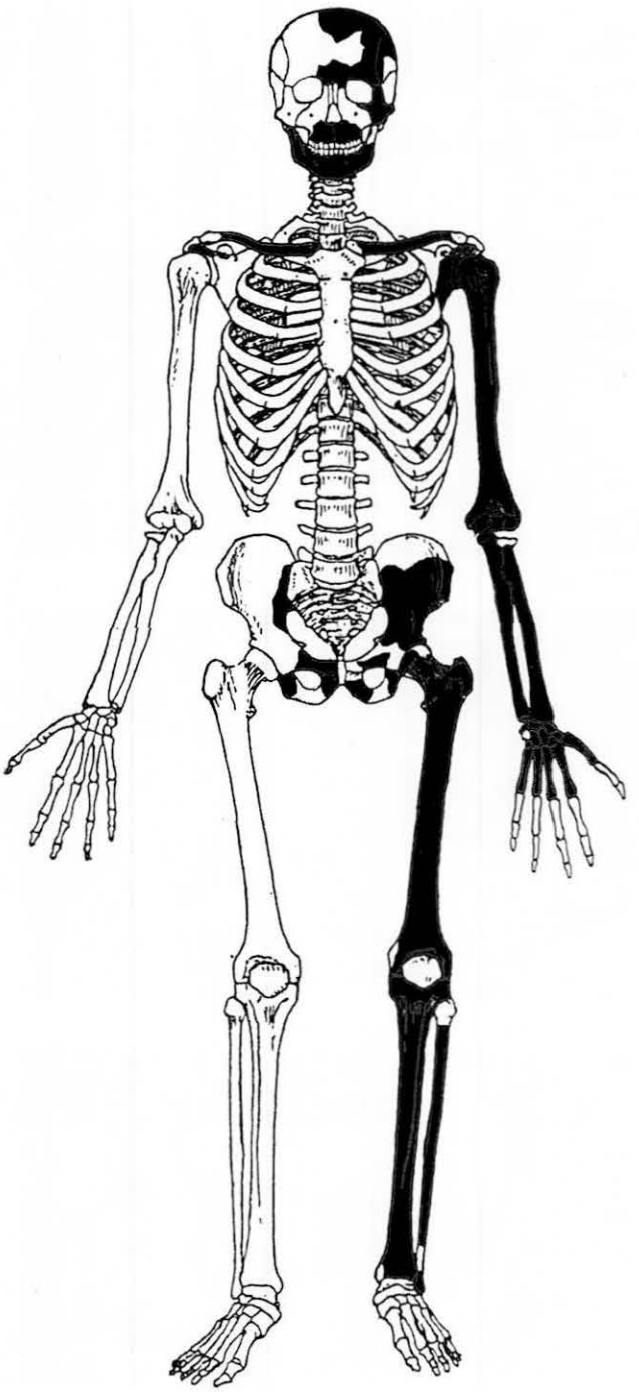
×：歯槽閉鎖、 ○：歯槽開放、 ／：破損



Ⅲ層1号人骨

Ⅲ層1号頭蓋上面観

Ⅲ層1号顔面部骨



Ⅲ層1号人骨出土部位

左右の中切歯・側切歯部の歯槽骨は完全に閉鎖しており、歯周症の痕跡も認められないことから、健康な状態で意図的に抜去した風習的抜歯と考えられる。下顎切歯四本をすべて抜去する抜歯形式は沖縄先史時代、特に貝塚時代後期に高頻度で出現している。しかしながら、沖縄先史時代人の風習的抜歯が、いつ頃どのようにして終焉を迎えたのかはほとんど分かっていない。縄文後晩期に盛行した日本本土の抜歯風習も機能を少しずつ変化させながら最終的には古墳時代まで続いている（土肥、田中、1988）注6。本人骨の年代値がグスク時代初頭であることは、先史時代からグスク時代への形質や風習の変遷を知る上で貴重な事例と言える。今後、このような事例の発見に注目する必要がある。

上肢骨：

上腕骨は最小周径が太く頑丈である。尺骨は骨間縁が発達している。

③Ⅲ層3号人骨

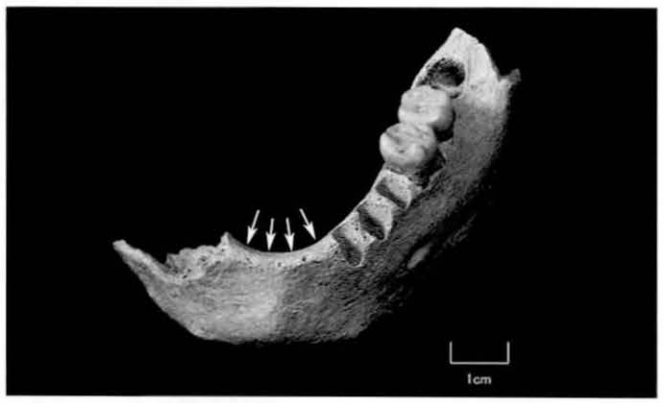
本人骨は未成人である。右上顎部のみで形質の詳細は不明である。残存歯の歯式に以下に示す。

Ⅲ－3号人骨

$(M^2)(M^1)(P^2)(P^1)(C)$	
$m^2\ m^1$	

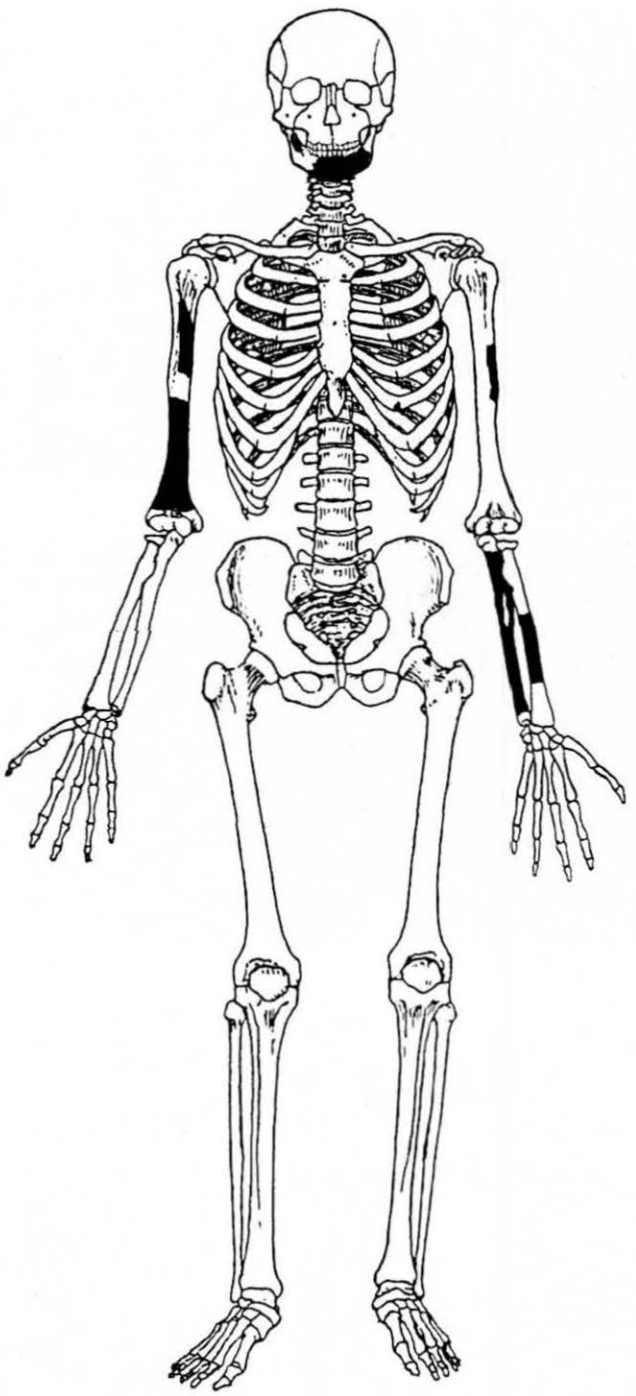
大文字：永久歯、　小文字：乳歯、　（　）：未萌出

Ⅲ層２号人骨



Ⅲ層２号下顎抜歯

Ⅲ層３号小児歯



Ⅲ層２号人骨出土部位

五、Ⅳ層出土の人骨

ほぼ完形の左頭頂骨が一点のみ検出されている。出土状態等は不明である。頭頂骨は華奢で薄く、サイズもやや小さいことから、小児～若年の未成人の可能性が高い。縫合部の鋸状の突起は明瞭で、風化や摩耗の痕跡はほとんど認められない。

六、Ⅴ層出土の人骨

左大腿骨骨体部が一点のみ出土している。出土状態等の詳細は不明である。大腿骨後面の粗線は比較的発達しており、頑丈であることから、性別は男性の可能性が高い。年齢はサイズから考えて成人（二十歳以上）に達していることは確実と思われる。

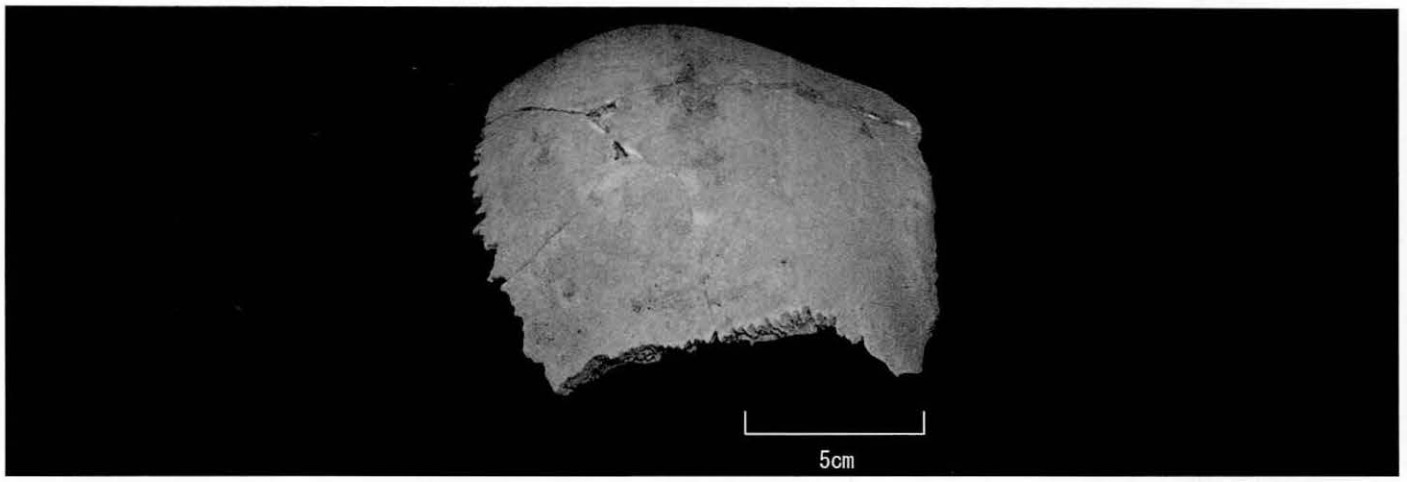
七、Ⅵ層出土の人骨

右腓骨骨体部片が一点のみ出土している。出土状態等の詳細は不明である。腓骨は頑丈で、骨体部筋付着部も明瞭であることから、性別は男性の可能性が高い。年齢はⅤ層人骨と同様に、サイズから考えて成人（二十歳以上）に達していると思われる。

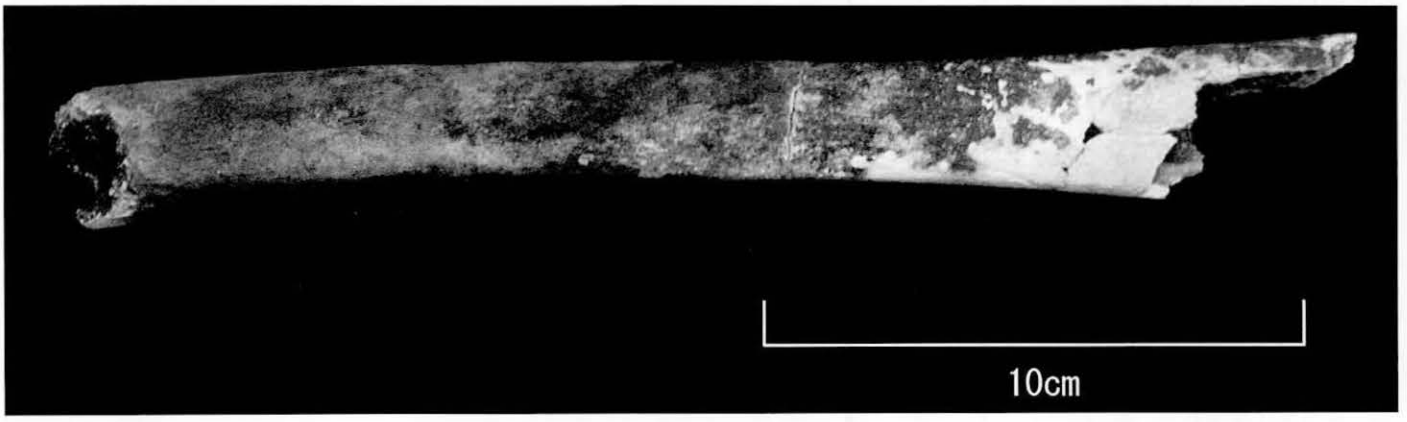
八、Ⅷ層出土の人骨

（1）出土状態

平成十五年度の調査において、縄文時代前期の地層（Ⅷ層）から出土した二体の埋葬人骨（Ⅷ層1号、Ⅷ層2号）は、互いに1mほど離れて、いずれも陸側（南西方向）へ足先を向けて出土した。二体とも左右の足が平行に並んで、関節した状態で出土していることから、仰臥位伸展葬と判断される。後述するように、いずれも成人で、性別は男性と推測される。



Ⅳ層出土人骨



Ⅴ層出土人骨

Ⅷ層1号は、左右の脛骨、腓骨と、左足部、下顎骨片が保存されている。写真と図面で確認できる限り、左の脛・腓骨と足部は関節した状態で出土している。右脛腓骨の出土位置は記録されていない。

Ⅷ層2号は、左の大腿骨、脛腓骨、右の腓骨が保存されている。出土状況は、左の大腿骨が遠位端近くで折れて移動しているが、大腿骨遠位端から脛腓骨は関節した状態で出土している。右の腓骨も並んで出土している。右の脛骨がなぜ失われたかは謎であるが、大腿骨が破損して動いていることから後世の撹乱があったのかもしれない。大腿骨骨幹の近位部には黒色の炭化物らしき物体が付着しており、このために骨表面が黒くなっているが、骨そのものに火をうけた特徴は認められず、周辺土壌に由来する付着物と考えられる。

(2) 人骨の年代

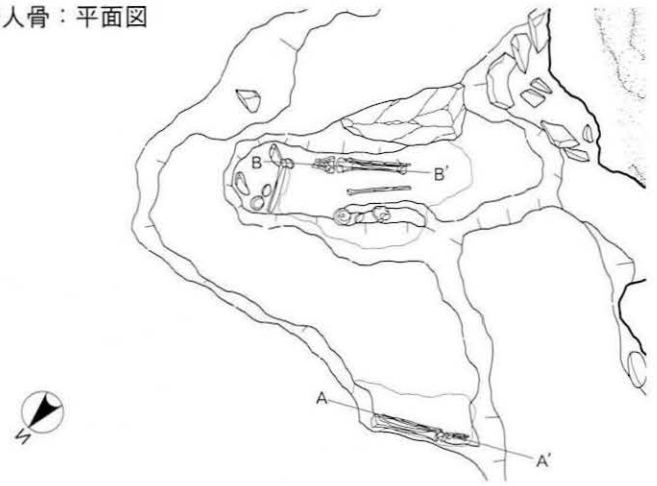
オックスフォード大の米田穣研究員の協力により、人骨の年代測定を実施した。Ⅷ層1号、Ⅷ層2号それぞれの腓骨から骨コラーゲンを抽出し、放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した。Ⅷ層1号は6,233±58BP、Ⅷ層2号は6,188±57BPとの結果が得られた。海洋リザーバ効果により最大で二～三百年のずれが生じている可能性はあるが、同じ層順から得られた木炭やサンゴの年代測定結果と整合的であり、それほど大きな誤差はないと推測される。二体の結果は非常に近時しており、同一層順から出土していることと矛盾しない。結論として、二体とも縄文時代前期の、ほぼ同時期の埋葬人骨と考えられる。

(3) 人骨の形質

①Ⅷ層1号人骨（表3、表4）

Ⅷ層1号は、骨端は完全に閉鎖しており

●Ⅷ層1号・2号人骨：平面図



●Ⅷ層1号・2号断面図

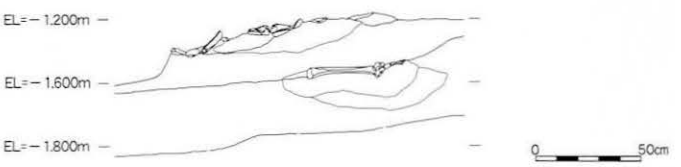


表4　下肢骨計測値

	項目	Ⅲ層－1号 ♂ l	Ⅴ層 ♂ l	Ⅷ層－1号 ♂ r	Ⅷ層－1号 ♂ l	Ⅷ層－2号 ♂ r	Ⅷ層－2号 ♂ l
大腿骨							
1	最大長	386					
2	全長	384					
6	体中央矢状径	24	27				29
7	体中央横径	24	26				27
8	体中央周径	75	82				88
9	体上横径	29					30
10	体上矢状径	22					27
8/2	長厚示数	19.5					
6/7	体中央断面示数	100.0	103.8				107.4
10/9	体上断面示数	75.9					90.0
脛骨							
1a	最大長				322		
8	中央最大径	27		27	28		30
8a	栄養孔位最大径	30		29	29		34
9	中央横径	21		21	21		21
9a	栄養孔位横径	22		22	22		23
10	骨体周	76		75	74		84
10a	栄養孔位周	84		80	81		89
10b	最小周	67		72	70		73
9/8	中央断面示数	77.8		77.8	75.0		70.0
9a/8a	栄養孔位断面示数	73.3		75.9	75.9		67.6
腓骨							
1	最大長			300			
2	中央最大径	12		16	16	16	17
3	中央最小径	8		10	10	12	12
4	中央周径	33		43	42	47	48
3/2	中央断面示数	66.7		62.5	62.5	75.0	70.6

(mm)

表3　上肢骨計測値

	項目	Ⅲ層－1号 ♂ l	Ⅲ層－2号 ♀ r	Ⅷ層－追加人骨 ♂ r
上腕骨				
4	下端幅	56		
5	中央最大幅	20		
6	中央最小幅	15		
7	最小周	55	60	
7a	中央周	58		
6/5	体断面示数	75.0		
尺骨				
11	体矢状径	11	10	13
12	体横径	14	15	15
11/12	体断面示数	78.6	66.7	86.7
橈骨				
3	最小周	41		
4	体横径	14		
5	体矢状径	11		
5/4	体断面示数	78.6		

(mm)

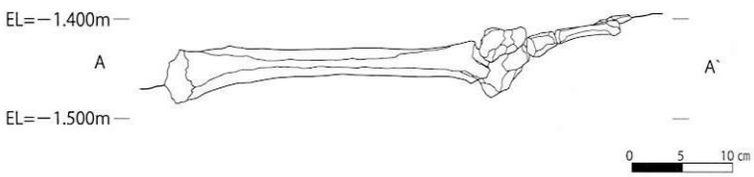
成人であることは確実である。性別判定は難しく、サイズから言えば男女のどちらでもありうるが、後述するように筋付着部が発達していることからは、男性的な印象を受ける。推定身長は、脛骨最大長から藤井の式を用いると約１５５㎝である。本土縄文人の平均に比べれば小柄だが、沖縄先史人としては平均的だろう。脛骨粗面は発達し、外側にひしゃげたような独特の形態をしている。ヒラメ筋線や骨幹近位内側面の内転筋群付着部も明瞭に認められ、下肢筋群が発達していたことをうかがわせる。しかし、本土縄文人に認められるような扁平脛骨は認められず、脛骨断面示数は右７７．８、左７５．０と、沖縄先史時代人としては平均的かやや小さいくらいである。腓骨もしっかりしており、緻密質も厚い。

②Ⅷ層２号人骨（表３、表４）

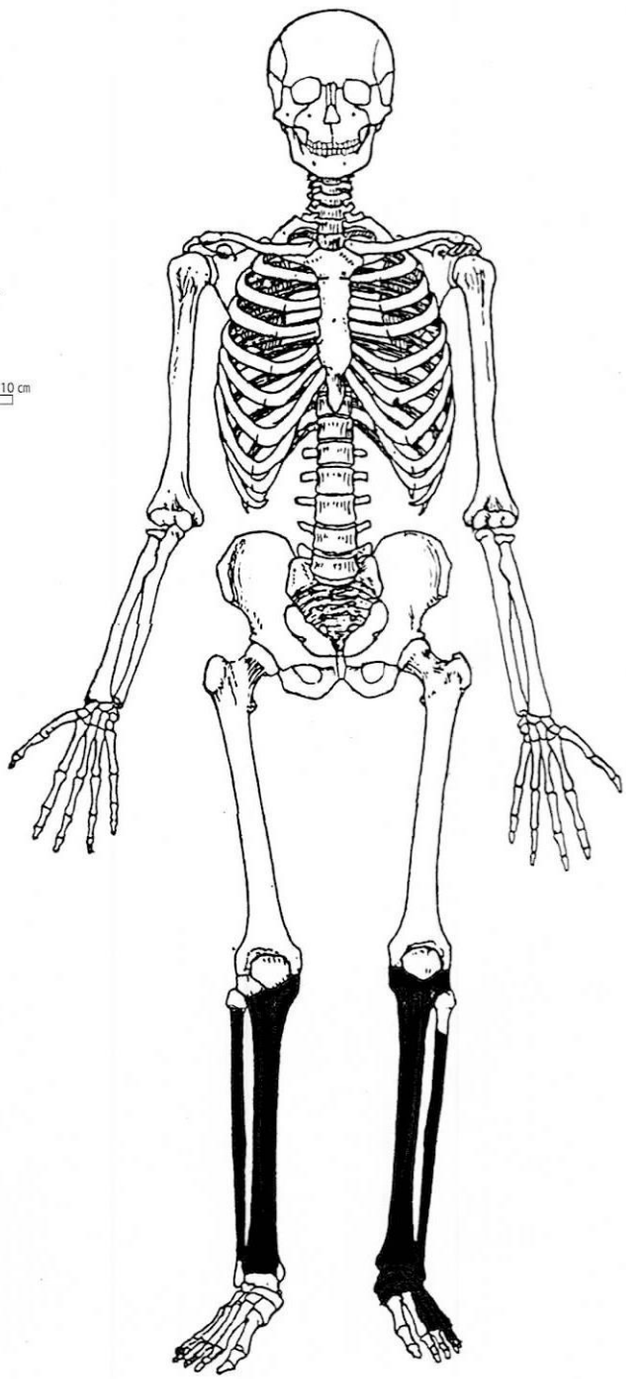
Ⅷ層２号は、やはり骨端が完全に閉鎖した成人で、関節面のサイズも大きく男性と判断できる。破損により脛骨の全長を計測することはできないが、Ⅷ層１号とほぼ同じサイズであり、したがって推定身長もⅧ層１号と同程度であったと推測される。大腿骨遠位の関節面外側に加齢や過負荷によるリッピングが認められ、やや高齢であった可能性がある。大腿骨の粗線が発達するが、骨幹はほぼまっすぐで大腿骨中央断面示数も１０７．４と大きくない。殿筋粗面も明瞭である。脛骨は、Ⅷ層１号と同じく骨幹近位内側面の内転筋付着部が発達し、脛骨粗面やヒラメ筋線も明瞭であり、全体的に下肢筋群が発達していたと考えられる。脛骨断面示数は７０．７と小さく、本土縄文のような扁平性は一切認められない。腓骨も太くしっかりしている。

●Ⅷ層１号人骨：平面図

●Ⅷ層１号人骨：断面図



Ⅷ層１号人骨



Ⅷ層１号人骨出土部位

九、Ⅷ層出土の追加人骨

Ⅷ層の縄文人骨に属すると考えられる人骨片が動物骨中に混入した状態で検出された。Ⅷ層1号かⅧ層2号のどちらかのものと思われるが、出土状態等が不明であるため、ここでは追加人骨として記載しておくことにする。

検出された人骨は、左側頭骨片、下顎骨片、右尺骨片、右橈骨片、右足根骨、右中足骨片である。尺骨（表3）、足根骨が頑丈であることから、男性と推定されたⅧ層1号、Ⅷ層2号人骨の性別とも矛盾しない。

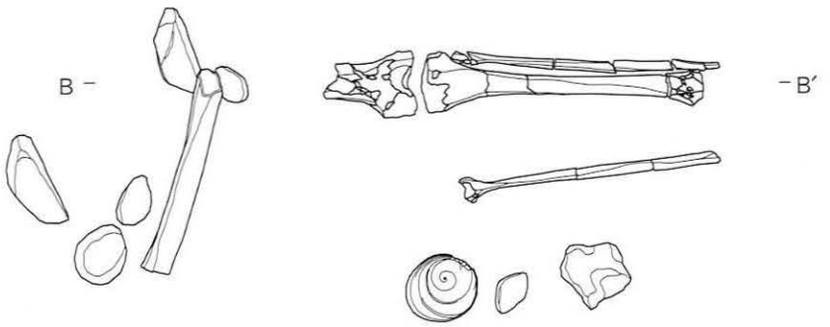
特記すべき事項として、側頭骨外耳道前壁に明瞭な瘤状の骨腫（外耳道骨腫）が認められる。外耳道骨腫は、潜水や航海など日常的な冷水刺激が成因になると考えられており、これまではサンゴ礁の資源利用に適応した貝塚時代後期の人骨に高頻度で出現することが知られていた（土肥他、2000）注5。縄文時代前期には現在のようなサンゴ礁は形成されていなかったと推定されているが、かといって、目の前に広がる海の資源を利用しなかったとは考えられない。本例に見られた外耳道骨腫は、縄文時代前期の人々の生活を知る上でも大変貴重な事例と思われる。

十、まとめ

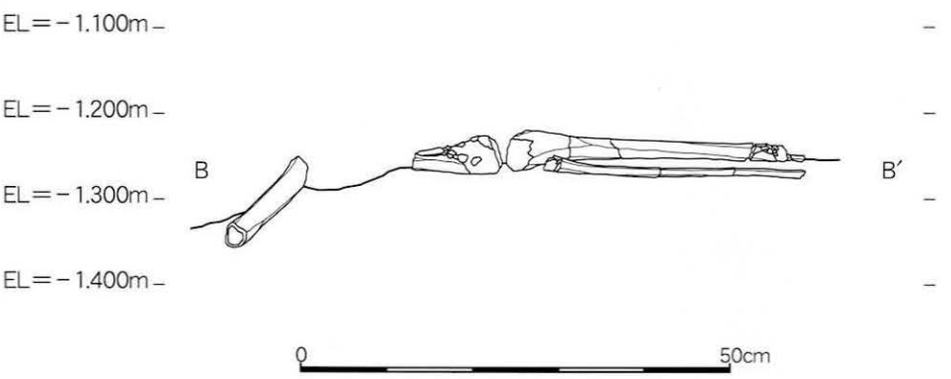
名護市教育委員会による大堂原貝塚の発掘調査において、縄文時代前期およびグスク時代初頭の埋葬人骨が出土した。縄文時代前期の埋葬人骨は沖縄では初めての事例であり、グスク時代初頭の人骨についてもほとんど事例がなく、いずれも貴重な資料である。調査結果を要約すると以下のようになる。

1、Ⅲ層（弥生相当期）から成人男女各1

●Ⅷ層2号人骨：平面図



●Ⅷ層2号人骨：断面図



体の埋葬人骨、また、Ⅲ層2号付近から小児人骨片が出土した。

2、Ⅲ層出土人骨の年代測定の結果は、Ⅲ層1号人骨は910±47BP、Ⅲ層2号人　骨は939±46BPというグスク時代初頭の年代が得られた。

3、Ⅲ層1号人骨（男性）の頭形は短頭型、身長は約154 cmと推定された。大腿骨の柱状性、脛骨の扁平傾向は認められなかった。

4、Ⅲ層2号人骨の下顎には切歯四本を抜去する風習的抜歯が認められた。

5、Ⅷ層（縄文前期）から仰臥伸展葬と考えられる成人男性二体の埋葬人骨が出土した。人骨の年代測定結果は1号が6233±58BP、2号人骨が6188±69BPである。

6、Ⅷ層1号人骨は左右の下腿骨のみである。脛骨の扁平性は認められなかった。身長は約150～155cmと推定された。

7、Ⅷ層2号人骨も下肢骨のみである。大腿骨の柱状性、脛骨の扁平性ともに認められなかった。

8、Ⅷ層からはⅧ層1号あるいはⅧ層2号に属すると考えられる人骨片が少量検出されているが、これらの追加人骨には外耳道骨腫が認められた左側頭骨が含まれていた。

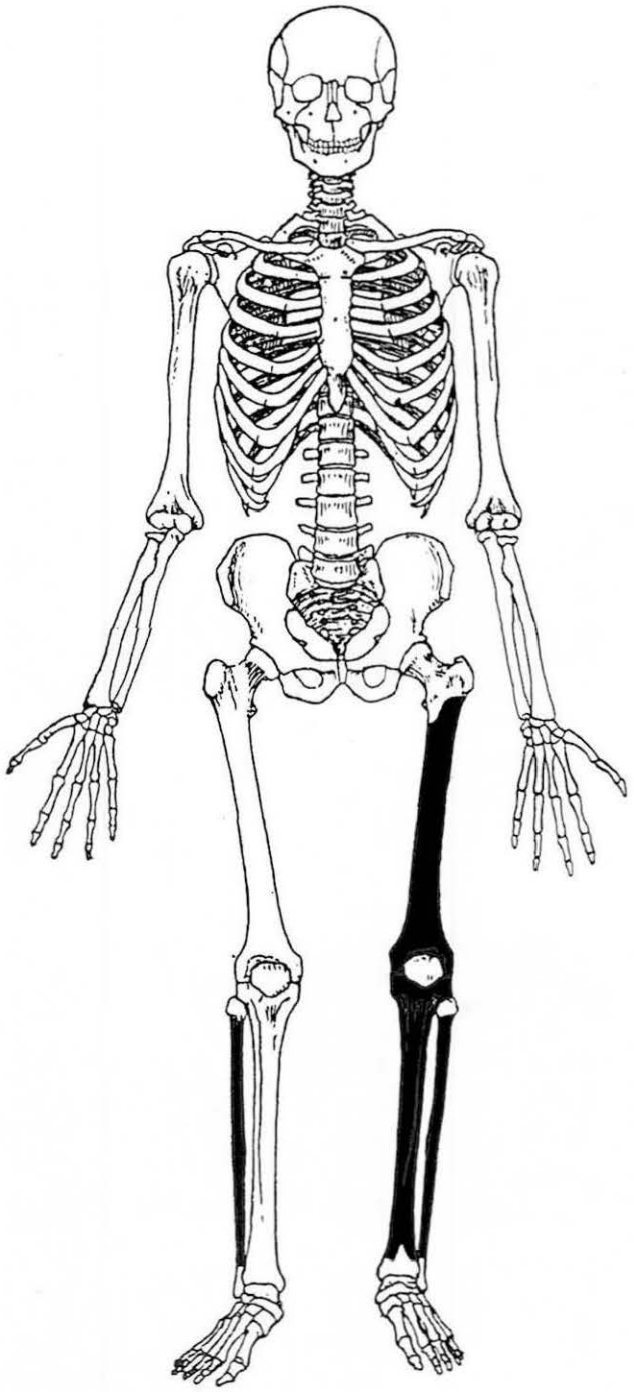
9、以上の他に、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層から各一点ずつの人骨片が検出されているが、詳細は不明である。

（琉球大学　土肥直美）

謝辞

貴重な人骨調査の機会をいただいた名護市教育委員会の皆様に心より謝意を表します。

Ⅷ層2号人骨



Ⅷ層2号人骨出土部位

参考文献
注 1 Knussman R. (1988) Martin / Knussman Anthropologie. Band 1. Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.
注 2 Brothwell DR (1981) Digging up Bones. Cornell University Press.
注 3 Ubelaker, DH. (1989) Human Skeletal Remains. 2nd ed. Taraxacum Press, Washington, D.C.
注4人類学講座編纂委員会編（1991）Ⅱ人骨計測法、人類学講座別巻1．雄山閣。
注5土肥直美、泉水奏、瑞慶覧朝盛、譜久嶺忠彦（2000）骨からみた沖縄先史時代人の生活。高宮廣衞先生古稀記念論集刊行会編、琉球・東アジアの人と文化（下巻）、高宮廣衞先生古稀記念論集刊行会、pp.431-448.
注6土肥直美、田中良之（1988）古墳時代の抜歯風習。「日本民族・文化の生成」1永井昌文教授退官記念論文集、六興出版、197-215.

追記

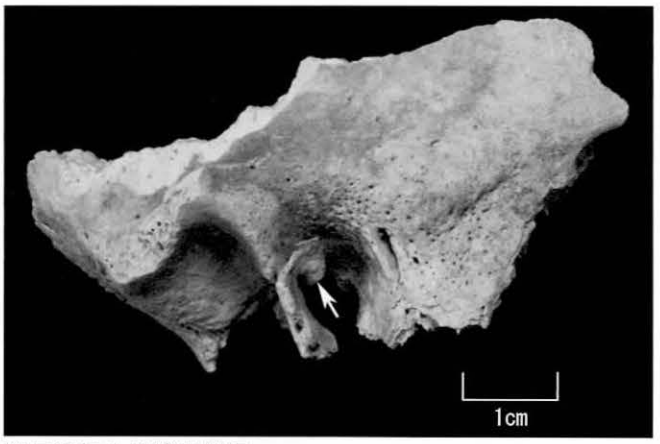
【Ⅲ層】

Ⅲ層1号人骨

こ－94地区、アダン林の下の砂層より、頭部を東に向け、腕を組んだ状態で埋葬された。検出面がⅢ層1号人骨が検出された。検出面がEL145cmで、そこから約15cm、砂層を掘り込んで埋葬されており、平面で掘り込みをみると短軸約60cm、長軸約90cmである。但し、平面の掘り込みは頭部から骨盤付近まで確認できたが、下肢骨付近は明瞭な線を確認することができなかった。したがって平面でみた掘り込みの長軸は、Ⅲ層1号人骨の埋葬状態を踏まえて約130cmと推測される。副葬品は得られていない。

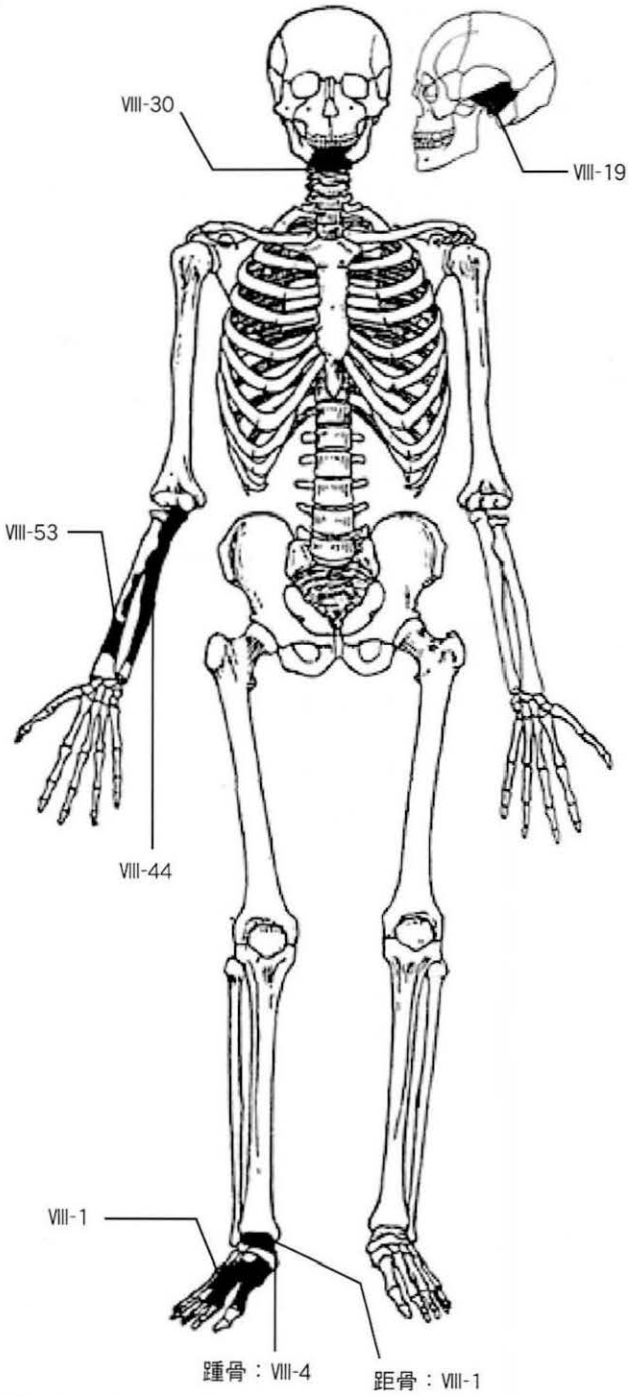
表5　Ⅷ層人骨出土一覧

地区名	層位	番号	レベル	出土部位
し－95	Ⅷ	Ⅷ-1	－1.2957	右距骨・右中足骨等
し－95	Ⅷ	Ⅷ-4	－1.5036	右踵骨
す－95	Ⅷ	Ⅷ-19	－1.3388	左側頭骨
す－95	Ⅷ	Ⅷ-30	－1.2174	下顎骨片
す－95	Ⅷ	Ⅷ-44	－1.0495	右尺骨
す－96	Ⅷ	Ⅷ-53	－1.0944	右橈骨
し－95	Ⅷ	1号人骨	－1.4214	左右下腿骨
し－96	Ⅷ	2号人骨	－1.2084	下肢骨



Ⅷ層追加人骨検出状況

Ⅷ層人骨検出状況



Ⅷ層追加人骨出土部位

Ⅲ層2号人骨
け－97地区、砂層よりⅢ層2号人骨が検出された。検出された2号人骨は、Ⅲ層1号人骨から東方向、13.5m先、現海岸線に最も近い位置で検出されている。頭部は検出されていないが、Ⅲ層1号人骨と同様に頭部を東向けに埋葬されたものと推定される。副葬品は得られていない。

Ⅲ層3号人骨
け－97地区、砂層よりⅢ層2号人骨とともに検出された。

【Ⅳ層】
Ⅳ層人骨
ち－90地区、砂層から出土。副葬品は得られていないが、人骨のすぐ脇からヒレジャコが一点出土している。

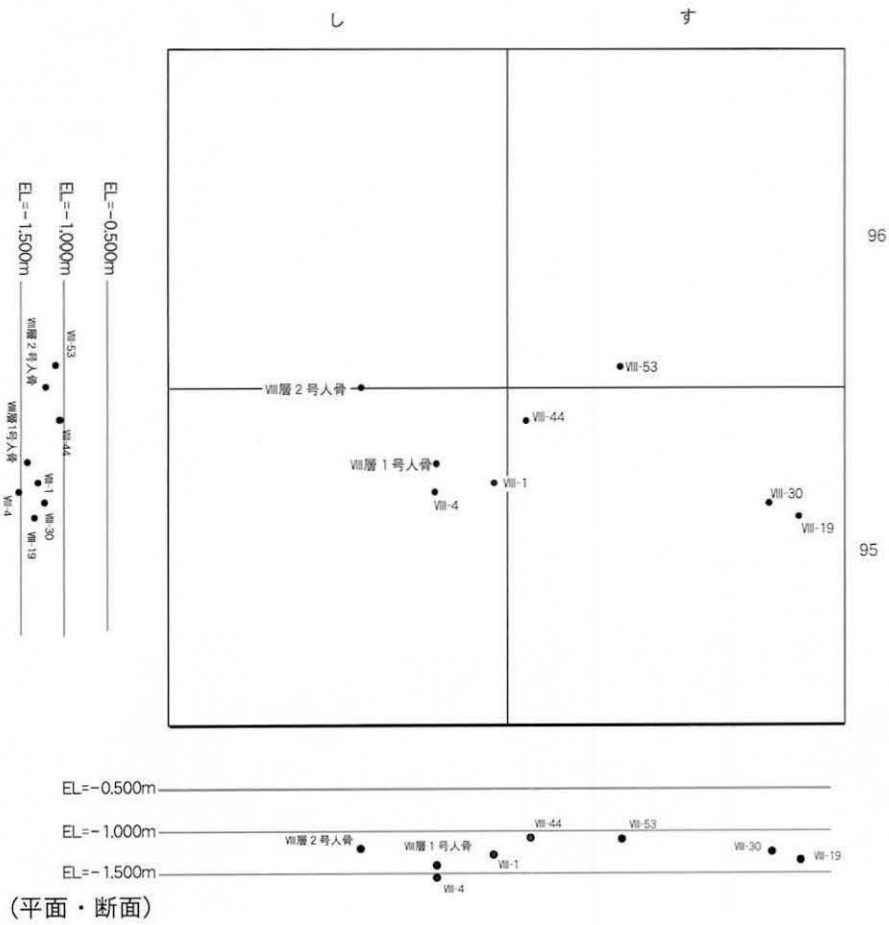
【Ⅴ層】
Ⅴ層人骨
さ－100地区と、し－100地区の境、サンゴ片を含む赤褐色粗粒砂層より検出された。副葬品は得られていない。

【Ⅵ層】
Ⅵ層から出土した獣骨片の中に混入。明確な地区名は不明。

【Ⅷ層】
Ⅷ層1号人骨
し－95地区の東壁面、シルトの薄層が狭在するサンゴ砂礫層よりⅧ層1号人骨が検出された。
副葬品は確認されていないが、このサンゴ砂礫層からは薄手土器が多く出土している。
その他にも同層からはリュウキュウイノシシの骨や、ニシキウズガイ、サラサバテイ・ヤコウガイが多く出土している。

Ⅷ層2号人骨
Ⅷ層1号人骨の広がりを確認するため調査を進めたところ、し－96地区の平面にてⅧ層2号人骨が検出された。
検出層はⅧ層1号人骨と同じく、シルトの薄層が狭在するサンゴ砂礫層である。副葬品は確認されていないが、右腓骨に沿うように礫が二片、ヤコウガイの蓋一点が確認できた。
また、左大腿骨付近でも礫が五片確認できたが、規則性がなく、埋葬に伴うものかは判然としない。

Ⅷ層追加人骨
し－95地区、す－95・96地区、Ⅷ層のシルトの薄層が狭在するサンゴ砂礫層より獣骨として取り上げた中に混入。Ⅷ層追加人骨の出土部位をみると、Ⅷ層1号人骨、Ⅷ層2号人骨の双方にも検出されていない部位が検出されている。
また、追加人骨が検出されたレベルは、Ⅷ層1号、2号人骨の検出されたレベルと概ね同一である。このことから、Ⅷ層の追加人骨はⅧ層1号、2号人骨のいずれかに属する部位である可能性が高い。
追加人骨の平面分布をみると、Ⅷ層1号、2号人骨よりも南西方向に分布している。一方、Ⅷ層1号、2号人骨ともに下肢骨は南方向を向いていることから、頭部は北方向に向けられ、あおむけで埋葬されたと考えられる。したがって、本来は北方向で頭部および上肢骨が確認されるべきであるが、南西方向で頭部および上肢骨の一部が確認されたことは、埋葬後に波浪等の影響を受けた可能性もある。



Ⅷ層人骨出土ポイント（平面・断面）

おわりに

本貝塚の発掘調査は、平成十年度に始まり平成十六年度までの七年間の長期間に及んだ。発掘調査によって得られた遺物や遺構をもとに、今回の大堂原貝塚の調査の概要を整理してみたい。

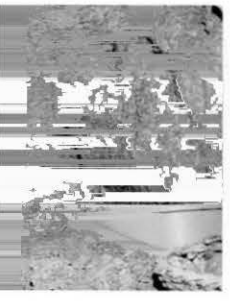
まず注目すべきは土器。縄文時代早期～後期（沖縄貝塚時代早期～前期）、弥生時代～古墳時代並行期（沖縄貝塚時代後期）の土器があり、沖縄諸島で出土するほとんどの土器型式が概ね層ごとに確認された。それは名護市内の遺跡では初めてのことで、沖縄の考古学を学ぶ上で貴重な資料を提供することとなった。その他、石斧や大形の敲石、スクレイパーなどの多様な石器、腕輪、指輪、円盤状の装飾品などの貝製品、イノシシやクジラの骨を利用した骨製品などの出土も興味深い。

また、豊富な種類の貝や魚、ウミガメ、クジラ、ジュゴン、そしてイノシシなどの骨も多量に出土しており、遺跡周辺の自然環境やそこで暮らした人々の食生活を考える資料を提供している。

遺構では、イモガイ（アンボンクロザメ、クロフモドキ）やゴホウラを集めた貝の集積が十数基見つかり、弥生時代に九州地方で流行した貝輪をめぐる交流があったことが想像できる。また、石を集めた炉跡も数基出土しており、当時の調理方法の一端がうかがうことができた。

そこで暮らしていたであろう人の骨も数体出土している。現在の海岸に近い砂地から十一世紀から十二世紀のグスク時代初頭のものと思われる埋葬人骨、さらに約六二〇〇年前の縄文時代前期（沖縄貝塚時代早期）に相当する埋葬人骨が見つかり、名護市の歴史を考える上で貴重な発見となった。

このように、今回の発掘調査は当初予想された本貝塚の年代をはるかに遡り、膨大な出土遺物と



ともに多くの貴重な情報を得る結果となった。ただ、残念なことに今回の調査が記録保存を目的とした緊急発掘調査であったことから、急ぎ足での調査になり多くの課題を残すことになった。残された課題の解決のために、本貝塚の学術調査を目的とした発掘調査の実施が望まれる。

通常、沖縄諸島の遺跡の時代区分は、本土の縄文時代～平安時代に相当する時代に「沖縄貝塚時代」を用いることが多いが、本報告書では、在地土器の他にも九州の縄文時代の土器である曽畑式土器や九州の弥生時代の土器である入来式土器、山ノ口式土器などが多く出土していることや貝の交易を示す資料等が出土していることから、「縄文時代」や「弥生時代並行期」、または「弥生時代～古墳時代並行期」という名称を用いた方が遺跡や遺物の解釈がしやすいと考え、その名称を用いた。

本報告書は研究者のみならず本貝塚の所在する地域の方々にも活用していただきたいという思いで作成した。本報告書がその地域の歴史を理解する手がかりになり、今後行われるであろう学術目的の発掘調査の際の手がかりになれば幸いである。

この報告書を作成することができたのは、まずは発掘現場でこつこつと遺跡を掘っていただいた作業員のみなさんのおかげである。そして、掘り出された遺物や遺構に対し、実に多くの方々からご助言やご指導をいただいた。特に、人骨の鑑定では土肥直美氏、地形層序の解釈ではパリノ・サーヴェイ株式会社と神谷厚昭氏、石器鑑定では小田静夫氏、石材鑑定では五十嵐俊雄氏、貝製品の分類では島袋春美氏、木下尚子氏、貝の同定分類では久保弘文氏に、土器の分類では新里貴之氏、宮城弘樹氏、安座間充氏等にはたいへんお世話になった。深く、深く感謝申し上げたい。さらに、本書を印刷製本いただいた文進印刷株式会社のみなさまには編集・校正の際に丁寧なご指導をいただき、重ねてお礼を申し上げたい。

名護市文化財調査報告書第17集

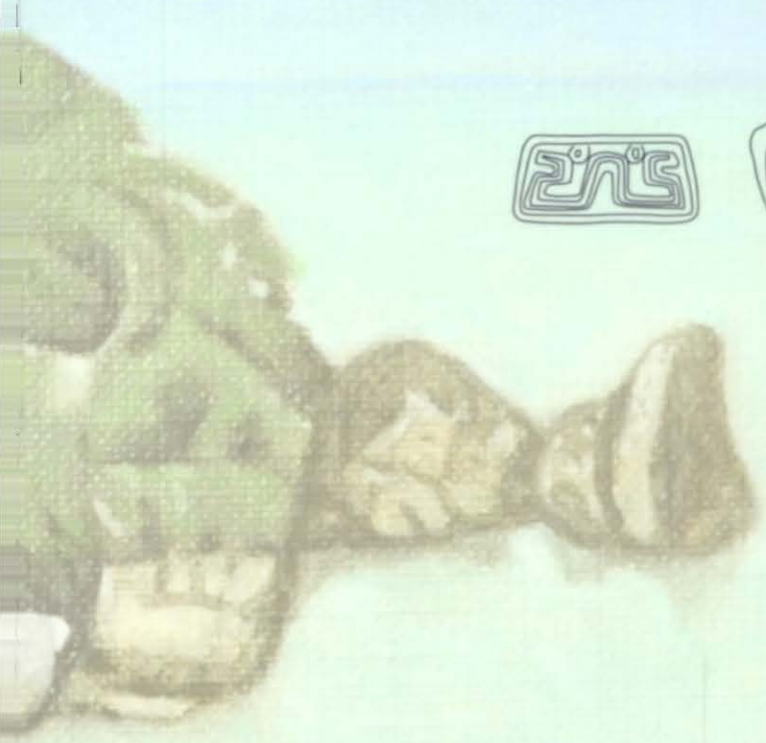
大堂原貝塚

－古宇利屋我地線建設に伴う緊急発掘調査報告書－

発　　行　平成17（2005）年7月25日

編集・発行　名護市教育委員会

印　　刷　文進印刷株式会社



表紙の絵・グシクジー／桑江良健